

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（56）

一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（V）

はぎがみね
萩ヶ峰遺跡

しろみず
白水B遺跡

（鹿屋市白水町）

やまのうえ
山ノ上A遺跡

（鹿屋市小野原町）

2024年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（56）

萩ヶ峰遺跡

白水B遺跡

山ノ上A遺跡

二〇二四年三月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター





R4年度調査 萩ヶ峰・白水B・山ノ上A遺跡全景（南から高隈山を望む）



H27年度調査 萩ヶ峰遺跡全景（東から）



R4年度調査 萩ヶ峰・白水B・山ノ上A遺跡全景（西から）



萩ヶ峰遺跡出土 縄文時代晩期土器・南西諸島系土器

序 文

この報告書は、一般国道220号古江バイパス建設に伴い平成5年度から令和5年度にかけて実施した鹿屋市白水町に所在する萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡（未報告区域）、鹿屋市小野原町に所在する山ノ上A遺跡の発掘調査の記録です。

萩ヶ峰遺跡では、縄文時代早期・晩期、古墳時代の遺構や遺物が発見されました。なかでも南西諸島で製作された仲原式土器の発見は大隅地方初の事例となりました。この土器と共に縄文時代晩期の黒川式土器の新段階とされる干河原段階の土器群がまとまって出土していることから、当時の人々の交流や南九州の土器編年を考えるうえで重要な発見となりました。そのほか、古墳時代前期の土器を伴う4基の竪穴建物跡が見つかりました。

白水B遺跡では2条の古墳時代の帯状硬化面や旧石器時代、縄文時代、古墳時代の遺物が発見され、既に報告している区域とも同じように旧石器時代のナイフ形石器が出土しました。

山ノ上A遺跡では縄文時代晩期、古墳時代の遺物が出土しました。

今回の調査は、高隈山系南西麓に暮らした南九州の先人の足跡を明らかにする貴重な手がかりを提供するものと考えます。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで御協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿屋市教育委員会、並びに発掘作業、整理作業に従事された方々に対し、厚く御礼申し上げます。また、本報告書が今後の研究に資することを期待しております。

令和6年3月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 寺原 徹

報告書抄録

ふりがな	はぎがみねいせき・しろみずびーいせき・やまのうええーいせき		
書名	萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡・山ノ上A遺跡		
副書名	一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（V）		
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書		
シリーズ番号	第56集		
編集者名	宮崎大和・西園勝彦・北園和代・兒島直美・大保秀樹		
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター		
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号		TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
発行年月	西暦2024年3月		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はぎがみねいせき 萩ヶ峰遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのや 鹿屋市 しろみず 白水町	46203	203-136	31° 23' 20"	130° 47' 53"	本調査 2015.05.07～ 2016.02.25 2016.05.09～ 2017.09.28 2022.05.16～ 2023.02.24	表面積 13,340㎡ 延面積 26,197㎡	一般国道220号古江 バイパス建設に伴う 記録保存調査
しろみずびーいせき 白水B遺跡			203-138	31° 23' 17"	130° 47' 48"	本調査 2022.05.16～ 2023.02.24	表面積 4,265㎡ 延面積 9,990㎡	
やまのうええーいせき 山ノ上A遺跡			203-139	31° 23' 18"	130° 47' 38"	本調査 2022.05.16～ 2023.02.24	表面積 800㎡ 延面積 2,600㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
萩ヶ峰遺跡	散布地 集落跡	縄文時代早期	集石3基, 土坑1基	押型文土器	
		縄文時代前期末 ～中期後半	—	深浦式土器	
		縄文時代晩期	土器集中1基	黒川式(干河原段階), 組織痕土器 仲原式土器	
		古墳時代	竪穴建物跡4基, 土坑2基, 土器集中1基, 帯状硬化面4条	東原式土器, 笹貫式土器, 須恵器	
		近世以降	—	染付(肥前系) 薩摩焼(龍門司系・苗代川系)	
白水B遺跡	散布地	旧石器時代	—	ナイフ形石器・石核	既刊報告書 2016『白水B遺跡』 埋調セ(9) 参照
		縄文時代早期	—	水晶石核	
		縄文時代晩期	—	組織痕土器	
		古墳時代	帯状硬化面4条	東原式土器, 笹貫式土器	
		古代以降	—	土師器片, 染付(肥前系) 薩摩焼(龍門司系・苗代川系)	
山ノ上A遺跡	散布地	縄文時代早期	—	打製石鏃, 使用痕剥片	
		縄文時代晩期	—	黒川式土器(干河原段階), 組織痕 土器	
		古墳時代	—	東原式土器, 笹貫式土器	

遺跡の概要

萩ヶ峰遺跡, 白水B遺跡, 山ノ上A遺跡は, 高須川右岸の笠野原台地縁辺部の傾斜地に所在し, 標高は約125～130m。3遺跡ともに特に縄文時代晩期と古墳時代の東原式土器・笹貫式土器の時期において人々の生活の痕跡が残っていた。萩ヶ峰遺跡では縄文時代晩期の黒川式土器新段階(干河原段階)の土器とともに南西諸島に分布する仲原式土器が出土した。仲原式土器の出土は大隅半島において初例となり, 人々の交流や土器編年を考えるうえで貴重な資料となった。また, 古墳時代前期の東原式土器を伴う竪穴建物跡4基は平面形状が不定形で, 当該地域の当時の集落の在り方や暮らしを知るための貴重な手がかりである。



遺跡位置図 (1 : 25,000)

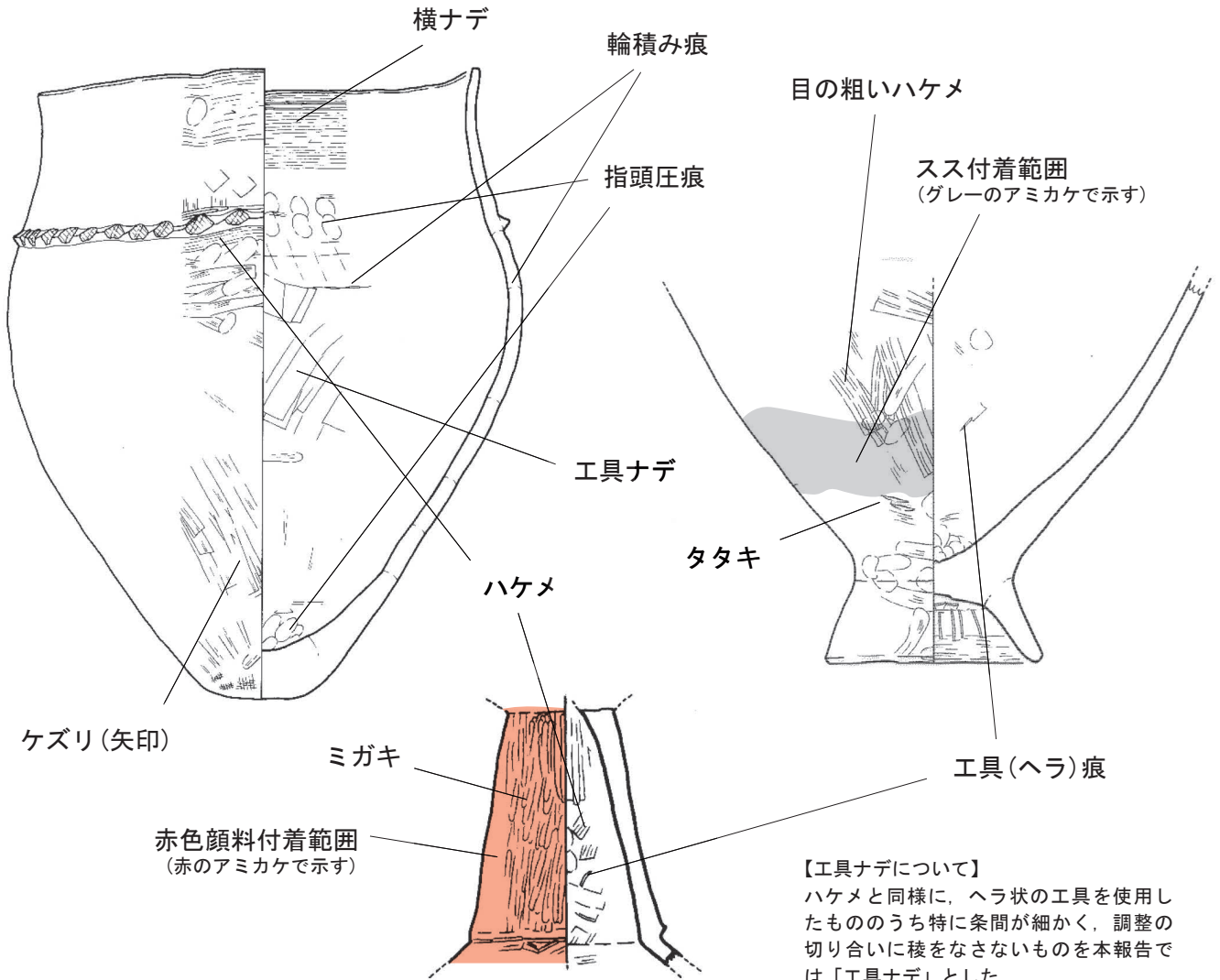
例 言

- 1 本書は、一般国道220号古江バイパス事業建設に伴う萩ヶ峰遺跡、白水B遺跡、山ノ上A遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。I～IV, VII, VIII章は、3遺跡についての概要を合わせて記載し、IV～VI章でそれぞれの遺跡についての調査の成果を個別に報告する。
- 2 萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡は鹿児島県鹿屋市白水町に、山ノ上A遺跡は同市小野原町に所在する。
- 3 萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡は平成3年度に鹿児島県教育委員会（以下、「県教委」という）が実施した埋蔵文化財分布調査で確認された遺跡で、山ノ上A遺跡は県教委が平成27年度に実施した試掘調査で確認された遺跡である。
- 4 平成5年度の萩ヶ峰遺跡、白水B遺跡の確認調査と一部発掘調査は建設省九州地方建設局大隅工事事務所（省庁再編により平成13年1月から大隅河川国道事務所）との協議のうえ、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という）が実施した。平成26・27・28年度と令和4年度の萩ヶ峰遺跡および令和4年度の白水B遺跡・山ノ上A遺跡の発掘調査は、大隅河川国道事務所から県教委が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下、「埋文調査センター」という）へ調査委託し、埋文調査センターが実施した。なお萩ヶ峰遺跡の発掘調査は4か年に渡る。
- 5 萩ヶ峰遺跡は、令和4年度までは「萩ヶ峰A遺跡」と「萩ヶ峰B遺跡」として登録し発掘調査と整理作業を実施していたが、令和5年度に鹿児島県教育庁文化財課、鹿屋市教育委員会、埋文調査センターの三者で協議を行い、これまでの発掘調査によって明らかになった層位や検出された遺構・遺物の特徴を踏まえて同一の遺跡であることを確認し、遺跡の範囲を変更・修正のうえ、名称を「萩ヶ峰遺跡」とした。
- 6 掲載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表及び図版の遺構番号は一致する。掲載遺物番号は遺跡ごとの通し番号であり、本文・挿図・表及び図版の番号は一致する。
- 7 縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は絶対海拔高である。
- 9 遺物注記等で用いた遺跡記号は、萩ヶ峰遺跡は「ハギ」、白水B遺跡は「白B」山ノ上A遺跡は「山A」である。
- 10 本書で用いたレベル数値は、海拔高度である。
- 11 本書で使用した方位は、全て真北であり、測量座標は国土座標系第II系を基準としている。
- 12 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また空中写真の撮影は、株

- 式会社スカイサーベイに委託した。
- 13 本編に係る遺構実測図・出土遺物の実測、トレース図の作成は埋文調査センター整理作業担当職員の指示・確認のもとに行い、石器実測の一部を株式会社九州文化財研究所に委託した。
 - 14 出土遺物の写真撮影は、埋文センターの写場にて宮崎、西園が行った。
 - 15 本報告に係る自然科学分析を、パリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社パレオ・ラボに依頼した。
また、赤色顔料の蛍光X線分析を埋文センター精密分析室で隈元俊一が行った。
 - 16 執筆担当は、以下のとおりである。
第I章 …… 上床 真・北園
第II章 …… 上床 真・北園
第III章 …… 宮崎・北園
第IV章 …… 宮崎・北園・西園・児島・大保
第V章 …… 宮崎・北園・西園
第VI章 …… 宮崎・北園・西園
第VII章 …… パリノ・サーヴェイ株式会社
株式会社パレオ・ラボ
北園
第VIII章 …… 宮崎・北園・西園
補遺（白水A遺跡）…… 大保
写真図版 …… 宮崎・西園
 - 17 使用した土色は、『新版 標準土色帖』（1970 農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。
 - 18 遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。
SH：竪穴建物跡 SK：土坑 SS：集石
DKS：土器集中 SP, P：ピット
 - 19 遺構の縮尺は次を基本とした。
竪穴建物跡：1/40 土坑：1/20, 1/40
土器集中, 集石：1/20
溝状遺構, 帯状硬化面 1/20, 1/40
 - 20 遺物の縮尺は、次のとおりである。ただし、遺物の特徴によっては例外もあり、各図中にも縮尺を示している。
土器 1/3, 1/4
石器, 土製品 1/1, 1/2, 1/3, 1/4
 - 21 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

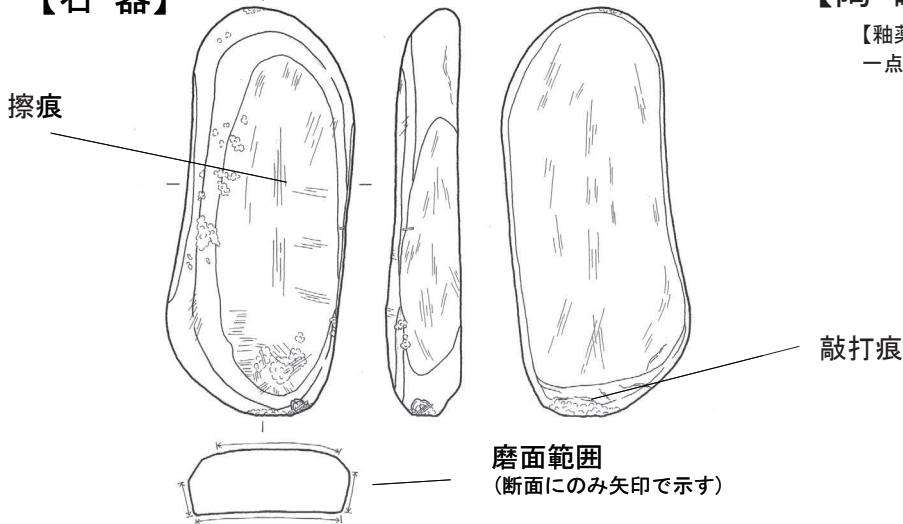
凡 例

【土 器】



【工具ナデについて】
ハケメと同様に、ヘラ状の工具を使用したものうち特に条間が細かく、調整の切り合いに稜をなさないものを本報告では「工具ナデ」とした。
【器面の剥離・摩滅について】
一点破線（- · - · - · -）で範囲を示す。

【石 器】


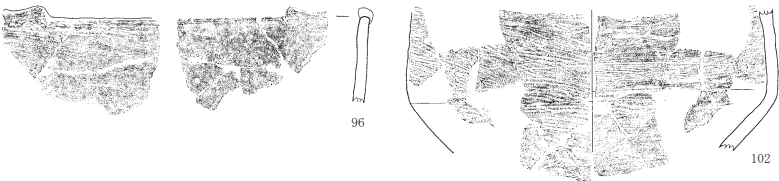

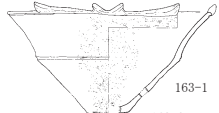
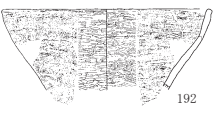



【陶 磁 器】

【釉薬が施される範囲について】
一点破線（- · - · - · -）で範囲を示す。

・縄文時代晩期の土器は、以下のように分類し報告する。

【縄文時代晩期土器分類表】

I類 深鉢	I a  15	I b  28	I c  35	I d  41	
	胴部がくの字に屈曲するもの	口縁が内傾するもの	口縁が内湾するもの	口縁が外傾または直口するもの	
	II類 深鉢 中華鍋形				
	 96 102 深鉢土器と中華鍋形土器の間のもの				
III類 中華鍋形	III a  108	III b  141			
	底部に組織痕がないもの	底部に組織痕があるもの			
IV類 浅鉢	IV a  153	IV b  163-1 163-2	IV c  184	IV d  192	IV e  200
	沈線を有する口縁が内湾するもの	沈線を有する口縁が外反するもの	茶家形を呈するもの	その他の口縁	器形がマリ状もしくは不明のもの
	V類 南西諸島系				
	 203 縄文時代晩期併行土器				

【古墳時代の土器について】

- ・古墳時代の土器については、主に下記の分類編年をもとに帰属時期を判断した。
中村直子 1987「成川式再考」『鹿大考古6号』鹿児島大学考古学研究室
松崎大嗣 2021「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学研究』第18回号
鹿児島大学大学院人文社会科学部地域政策科学専攻編

本文目次

表紙		第3節 縄文時代前～中期の調査成果	34
巻頭図版（カラー）		第4節 縄文時代晩期の調査	35
序文		第5節 古墳時代の調査	86
報告書抄録		第6節 近世以降の調査	140
遺跡位置図		第V章 白水B遺跡の調査	143
例言		第1節 調査の概要	143
凡例		第2節 旧石器時代の調査成果	145
目次		第3節 縄文時代早期の調査	145
第I章 発掘調査の経過	1	第4節 縄文時代晩期の調査	146
第1節 調査に至るまでの経過	1	第5節 古墳時代以降の調査	146
第2節 萩ヶ峰遺跡の名称および範囲の変更について	1	第VI章 山ノ上A遺跡の調査	149
第3節 事前調査	1	第1節 調査の概要	149
第4節 本調査	2	第2節 縄文時代早期の調査	149
第5節 整理・報告書作成作業	6	第3節 縄文時代晩期～古墳時代の調査	149
第II章 遺跡の位置と環境	9	第VII章 自然科学分析	157
第1節 地理的環境	9	第1節 概要	157
第2節 歴史的環境	9	第2節 分析結果の報告	157
第III章 調査の方法と層序	16	第VIII章 総括	171
第1節 調査の方法	16	第1節 萩ヶ峰遺跡	171
第2節 層序	16	第2節 白水B遺跡	178
第IV章 萩ヶ峰遺跡の調査	29	第3節 山ノ上A遺跡	178
第1節 調査の概要	29	補遺（白水A遺跡）	179
第2節 縄文時代早期の調査成果	29	写真図版	181

挿図目次

第1図 遺跡名称と範囲の状況図（変更前）	1	第7図 基本層序	17
第2図 遺跡名称と範囲の状況図（変更後）	1	第8図 萩ヶ峰遺跡 地形図	17
第3図 萩ヶ峰遺跡 トレンチ配置図	7	第9図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図（1）	18
第4図 萩ヶ峰・白水B・山ノ上A遺跡周辺地形図 および年度ごとの調査範囲図	8	第10図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図（2）	19
第5図 周辺遺跡位置図	13	第11図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図（3）	20
第6図 国道220号古江バイパス関連遺跡位置図	15	第12図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図（4）	21
		第13図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図（5）	22

第14図	萩ヶ峰遺跡 土層断面図 (6) ……………	23	第50図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIb類 ………	59
第15図	萩ヶ峰遺跡 土層断面図 (7) ……………	24	第51図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVa類 ………	60
第16図	萩ヶ峰遺跡 土層断面図 (8) ……………	25	第52図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVb類 (1) …	61
第17図	白水B遺跡 土層断面図 (1) ……………	26	第53図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVb類 (2) …	62
第18図	白水B遺跡 土層断面図 (2) ……………	27	第54図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVc・IVd類…	63
第19図	山ノ上A遺跡 土層断面図 ……………	28	第55図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVe・V類 …	64
第20図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期遺構配置図 ………	29	第56図	萩ヶ峰遺跡 II・III層石器出土分布図 ………	69
第21図	萩ヶ峰遺跡 土坑1号・集石1号 ……………	30	第57図	萩ヶ峰遺跡 石鏃・二次加工剥片・石匙・石核…	70
第22図	萩ヶ峰遺跡 集石2号・3号 ……………	31	第58図	萩ヶ峰遺跡 石錘 ……………	71
第23図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期遺物出土分布図 …	32	第59図	萩ヶ峰遺跡 打製石斧 (1) ……………	72
第24図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期出土遺物 ………	32	第60図	萩ヶ峰遺跡 打製石斧 (2) ……………	73
第25図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期出土石器 ………	33	第61図	萩ヶ峰遺跡 打製石斧 (3) ……………	74
第26図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代前期～中期出土遺物 …	34	第62図	萩ヶ峰遺跡 打製石斧 (4) ……………	75
第27図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期遺構配置図 ………	35	第63図	萩ヶ峰遺跡 磨製石斧 ……………	77
第28図	萩ヶ峰遺跡 土器集中1号および出土遺物 …	36	第64図	萩ヶ峰遺跡 磨敲石 (1) ……………	78
第29図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器出土分布図1	37	第65図	萩ヶ峰遺跡 磨敲石・ハンマー (2) ………	79
第30図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器出土分布図2	38	第66図	萩ヶ峰遺跡 台石 ……………	81
第31図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器出土分布図3	39	第67図	萩ヶ峰遺跡 石皿 ……………	82
第32図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Ia類 (1) …	41	第68図	萩ヶ峰遺跡 砥石・礫器 ……………	83
第33図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Ia類 (2) …	42	第69図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代遺構配置図 ………	87
第34図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Ib類 ………	43	第70図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号 ……………	89
第35図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Ic類 ………	44	第71図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号出土遺物 (1) …	90
第36図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Id類 (1) …	45	第72図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号出土遺物 (2) …	91
第37図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Id類 (2) …	46	第73図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号出土遺物 (3) …	92
第38図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Id類 (3) …	47	第74図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号完掘状況 ………	94
第39図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Id類 (4) …	48	第75図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号遺物出土状況 …	95
第40図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I類 (1) …	49	第76図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物 (1) …	96
第41図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I類 (2) …	50	第77図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物 (2) …	97
第42図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I類 (3) …	51	第78図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物 (3) …	98
第43図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 II類 ………	52	第79図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物 (4) …	99
第44図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類 (1) …	53	第80図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物 (5) …	100
第45図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類 (2) …	54	第81図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物 (6) …	101
第46図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類 (3) …	55	第82図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡3号 ……………	103
第47図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類 (4) …	56	第83図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡3号出土遺物 (1) …	104
第48図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類 (5) …	57	第84図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡3号出土遺物 (2) …	105
第49図	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類 (6) …	58	第85図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡3号出土遺物 (3) …	106

第86図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡4号	107	第110図	白水B遺跡 グリッド配置・周辺地形図	143
第87図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡4号出土遺物(1)	109	第111図	白水B遺跡 遺構配置図および遺物出土分布図	144
第88図	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡4号出土遺物(2)	110	第112図	白水B遺跡 旧石器時代出土石器	145
第89図	萩ヶ峰遺跡 大型土坑・土坑2号および出土遺物	111	第113図	白水B遺跡 縄文時代早期出土石器	145
第90図	萩ヶ峰遺跡 土器集中2号	112	第114図	白水B遺跡 帯状硬化面1～4	146
第91図	萩ヶ峰遺跡 土器集中2号出土遺物	113	第115図	白水B遺跡 出土遺物	147
第92図	萩ヶ峰遺跡 溝状遺構1～3号	115	第116図	白水B遺跡 時期不明石器	147
第93図	萩ヶ峰遺跡 帯状硬化面1	116	第117図	山ノ上A遺跡 グリッド配置・周辺地形図	149
第94図	萩ヶ峰遺跡 帯状硬化面2・3および出土遺物	117	第118図	山ノ上A遺跡 縄文時代早期出土石器	150
第95図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代土器分布図	119	第119図	山ノ上A遺跡 V・VI層遺物出土分布図	150
第96図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(1)	120	第120図	山ノ上A遺跡 II・III層遺物出土分布図	151
第97図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(2)	121	第121図	山ノ上A遺跡 出土遺物(1)	152
第98図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(3)	122	第122図	山ノ上A遺跡 出土遺物(2)	153
第99図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(4)	123	第123図	山ノ上A遺跡 出土遺物(3)	154
第100図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(5)	124	第124図	萩ヶ峰遺跡出土の縄文時代晩期土器群	171
第101図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(6)	125	第125図	胎土分析試料実測図	173
第102図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(7)	126	第126図	鹿児島県本土出土南西諸島系土器	173
第103図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(8)	127	第127図	南西諸島系土器出土分布図	173
第104図	萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(9)	128	第128図	萩ヶ峰遺跡3号, 領家西遺跡7号, 鷲ヶ迫遺跡3号 竪穴建物跡平面図	176
第105図	萩ヶ峰遺跡 土製品・鞆の羽口	129	第129図	萩ヶ峰遺跡周辺の弥生時代中期～ 古墳時代の集落遺跡 分布図	177
第106図	萩ヶ峰遺跡 須恵器	130	第130図	白水A遺跡 周辺地形図	179
第107図	萩ヶ峰遺跡 線刻のある土器片・時期不明の土器	131	第131図	白水A遺跡 出土遺物	180
第108図	萩ヶ峰遺跡 近世以降の遺物(1)	141			
第109図	萩ヶ峰遺跡 近世以降の遺物(2)	142			

表目次

第1表	一般国道220号バイパス建設に係る これまでの確認調査・発掘調査等の経緯	11	第7表	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器観察表(2)	66
第2表	周辺遺跡一覧表	12	第8表	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器観察表(3)	67
第3表	一般国道220号 古江バイパス(25工区)の遺跡	14	第9表	萩ヶ峰遺跡 アカホヤ上位出土の石器観察表(1)	84
第4表	萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期・前期～ 中期土器観察表	34	第10表	萩ヶ峰遺跡 アカホヤ上位出土の石器観察表(2)	85
第5表	萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期出土石器観察表	34	第11表	萩ヶ峰遺跡 遺構番号新旧対応表	85
第6表	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器観察表(1)	65	第12表	萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(1)	133
			第13表	萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(2)	134
			第14表	萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(3)	135

第15表	萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表（4）	…136	第25表	白水B遺跡 近世以降陶磁器観察表	…148
第16表	萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表（5）	…137	第26表	白水B遺跡 その他出土土器観察表	…148
第17表	萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表（6）	…138	第27表	山ノ上A遺跡 出土土器観察表（1）	…155
第18表	萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表（7）	…139	第28表	山ノ上A遺跡 出土土器観察表（2）	…156
第19表	萩ヶ峰遺跡 古墳時代遺構内出土土器観察表	…139	第29表	山ノ上A遺跡 出土土器観察表	…156
第20表	萩ヶ峰遺跡 近世以降出土遺物観察表（1）	…142	第30表	鹿児島県本土南西諸島系土器出土遺跡一覧	…173
第21表	萩ヶ峰遺跡 近世以降出土遺物観察表（2）	…142	第31表	萩ヶ峰遺跡周辺の弥生時代中期～古墳時代の集落遺跡一覧表	…177
第22表	白水B遺跡 旧石器時代出土土器観察表	…145	第32表	白水A遺跡 出土土器観察表	…180
第23表	白水B遺跡 縄文時代早期出土土器観察表	…145			
第24表	白水B遺跡 出土土器観察表	…148			

図版目次

巻頭図版1		図版16	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（9）	…196	
巻頭図版2		図版17	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（10）	…197	
巻頭図版3		図版18	萩ヶ峰遺跡 アカホヤ上位出土の石器（1）	…198	
巻頭図版4		図版19	萩ヶ峰遺跡 アカホヤ上位出土の石器（2）	…199	
図版1	萩ヶ峰遺跡 IV層上面検出状況，土層断面	…181	図版20	萩ヶ峰遺跡 アカホヤ上位出土の石器（3）	…200
図版2	萩ヶ峰遺跡 集石，土坑，土器集中	…182	図版21	萩ヶ峰遺跡 アカホヤ上位出土の石器（4）	…201
図版3	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号	…183	図版22	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号出土遺物	…202
図版4	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号，3号	…184	図版23	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物（1）	…203
図版5	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡4号ほか	…185	図版24	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物（2）	…204
図版6	萩ヶ峰遺跡 帯状硬化面，溝状遺構	…186	図版25	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物（3）	…205
図版7	萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期・前期～中期 包含層出土遺物	…187	図版26	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡3・4号出土遺物	…206
図版8	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期 遺構・包含層出土遺物（1）	…188	図版27	萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡4号出土遺物	…207
図版9	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（2）	…189	図版28	萩ヶ峰遺跡 土器集中2号出土遺物	…208
図版10	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（3）	…190	図版29	萩ヶ峰遺跡 古墳時代包含層出土遺物（1）	…209
図版11	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（4）	…191	図版30	萩ヶ峰遺跡 古墳時代包含層出土遺物（2）	…210
図版12	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（5）	…192	図版31	萩ヶ峰遺跡 古墳時代包含層出土遺物（3）ほか	…211
図版13	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（6）	…193	図版32	白水B遺跡 遺跡全景，土層断面，帯状硬化面	…212
図版14	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（7）	…194	図版33	白水B遺跡 出土遺物	…213
図版15	萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期包含層出土遺物（8）	…195	図版34	山ノ上A遺跡 遺物出土状況，検出状況	…214
			図版35	山ノ上A遺跡 出土遺物	…215
			図版36	白水A遺跡 出土遺物	…216

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経過

平成 3 年、建設省九州地方建設局大隅工事事務所（以下、「大隅工事事務所」という）は、一般国道220号古江バイパスの施工計画に基づき、事業区内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、「県文化財課」という）に照会した。

これを受けて県文化財課は、平成 3 年 6 月 18 日に鹿屋・垂水間の埋蔵文化財分布調査を実施し、事業地内に白水 A 遺跡等 11 か所の所在を確認した。

この結果を受けて、大隅工事事務所と県文化財課で遺跡の取り扱いについて協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業の推進を図るために埋文センターが白水 A 遺跡、白水 B 遺跡、萩ヶ峰遺跡の確認調査と一部本調査を実施することとなった。

平成 5 年度は、白水 A 遺跡と他 3 遺跡の確認調査及び白水 B 遺跡の一部発掘調査を 7 月から行い、平成 6 年度は、白水 B 遺跡の発掘調査を実施した。調査の未了部分は、次年度以降に実施することとなった。その後、26 工区内（根木原 A 遺跡ほか）の遺跡発掘調査を優先することとなり、25 工区（白水 A 遺跡ほか 3 遺跡）の調査を一時中断することとなった。

その後、25 工区の工事の再開に伴い、平成 25 年度に国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所（以下、「大隅河川国道事務所」という）と県文化財課との協議を経て、発掘調査が再開された。発掘調査及び報告書作成作業は、県から委託を受け、埋文調査センターが実施した。

埋文調査センターは、平成 29 年度までに白水 A 遺跡、白水 B 遺跡、萩ヶ峰 A 遺跡、萩ヶ峰 A 遺跡拡張区、山ノ上 B 遺跡の発掘調査を実施した。

この結果を受けて、大隅河川国道事務所と県文化財課で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、事業着手前に発掘調査を実施することとなった。令和 4 年度には、全ての調査を終了した。

萩ヶ峰遺跡、白水 B 遺跡、山ノ上 A 遺跡の、各年度の調査範囲・面積等については第 4 図のとおりであり、埋文調査センターが上記の発掘調査を各年度実施した。

整理・報告書作成作業は、平成 28 年度、平成 30 年度、令和 4 年度、令和 5 年度に実施した。

なお、国道 220 号バイパス建設に伴う発掘調査等の経緯については、第 II 章末尾に示した。

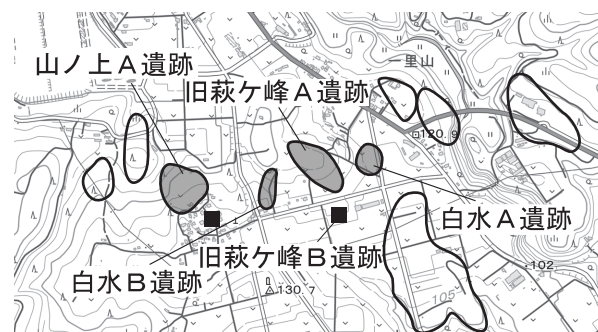
第 2 節 萩ヶ峰遺跡の名称および範囲の変更について

平成 3 年度の確認調査から令和 4 年度の発掘調査・整理作業までは、本報告の萩ヶ峰遺跡について「萩ヶ峰 A 遺跡」と「萩ヶ峰 B 遺跡」に区別して登録・実施して

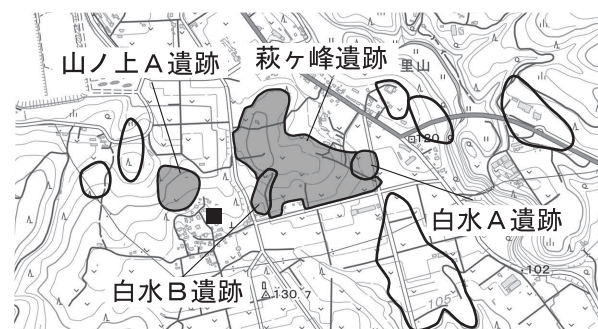
きた。しかし、これまでの調査によりこれらの遺跡の立地・時期・性格に連続性がみられたこと、また、萩ヶ峰 B 遺跡の登録地点が誤っていること、遺構・遺物の出土が北の畑地へ広がることが確認されたことから、遺跡名とその範囲に修正を加える必要が生じた。そこで令和 5 年に県文化財課・鹿屋市教育委員会・埋文調査センターにより協議を行い、遺跡名を「萩ヶ峰遺跡」に統一し、遺跡の範囲についても修正する手続きを行った。

なお萩ヶ峰遺跡は、遺構図面、遺物番号、遺物注記、写真類の番号について変更せず、発掘調査時に便宜上付した萩ヶ峰 A 地点と B 地点として扱うこととした。

今回の変更による遺跡の範囲の新旧については下図（第 1・2 図）を参照していただきたい。



第 1 図 遺跡名称と範囲の状況図（変更前）



第 2 図 遺跡名称と範囲の状況図（変更後）

第 3 節 事前調査

1 試掘調査（山ノ上 A 遺跡）

山ノ上 A 遺跡について、平成 27 年 11 月 24 日に県文化財課が試掘調査を実施した。

（1）試掘調査体制

平成 27 年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査担当 鹿児島県教育庁文化財課

文化財主事 黒川 忠広
 立 会 者 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所 調査課
 専 門 職 桑本真一郎
 協 力 者 鹿屋市教育委員会生涯学習課
 主任主事 稲村 博文
 ” 文化財調査員 福岡 貴之

(2) 試掘調査の経過(試掘調査)

調査は、トレンチを5本設定し、重機による掘り下げを進めた結果、2トレンチにおいて古墳時代の遺物が出土した。

2 確認調査の経過(萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡)

萩ヶ峰遺跡と白水B遺跡の確認調査は、白水A遺跡(R3年度に報告書刊行)の確認調査と合わせて、平成5年7月5日から平成6年3月29日にかけて、埋文センターが実施した。調査体制及び調査経過については、以下のとおりである。

(1) 確認調査体制(平成5年度)

事業主体 建設省九州建設局大隅工事事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 大久保忠昭
 調査企画 ” 次長兼調査課長 水口 俊雄
 ” 調査課長 戸崎 勝洋
 調査担当 ” 文化財主事 立神 次郎
 ” 文化財研究員 湯之前 尚
 事務担当 ” 主 査 成尾 雅明
 ” 主 事 中村 和代

(2) 確認調査の経過

確認調査は、調査対象区域内にトレンチを29本(萩ヶ峰：27本・白水B：2本)設定し、実施した。

その結果、萩ヶ峰A遺跡では、1～19トレンチから古墳時代の遺物が、20～25トレンチから縄文時代晩期の遺物が、25～27トレンチから古墳時代と縄文時代晩期の遺物が出土した。

1・2・7・8トレンチからは、縄文時代早期の押型土器が出土した。

また、7・9トレンチと6トレンチ拡張区から古墳時代の竪穴建物跡の可能性のある遺構が確認された。

なお、一部のトレンチについては、遺構・遺物の状況のみを、拡張して調査している。

白水B遺跡では、1・2トレンチから古墳時代の遺物が出土した。また、2トレンチからは、帯状硬化面が確認された。

第4節 本調査

萩ヶ峰遺跡は、平成26～28年度、令和4年度に4か年度に渡る調査を実施した。白水B遺跡は、平成6年

度、平成26年度(以上は報告書刊行済)及び令和4年度の3か年度に渡る調査を実施した。山ノ上A遺跡は、令和4年度に本調査を実施した。

以下、調査体制・調査経過は以下のとおりである(報告書刊行済分については割愛した)。

1 調査体制

平成26年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 センター長 堂込 秀人
 調査企画 ” 総務課長兼係長 山方 直幸
 ” 調査課長 八木澤一郎
 ” 調査第三係長 宗岡 克英
 調査担当 ” 文化財専門員 長崎慎太郎
 ” 文化財専門員 田畑 哲治
 ” 文化財調査員 川俣 唱子
 事務担当 ” 主 査 岡村 信吾
 ” 事業推進員 徳永 智美

発掘調査を平成26年5月8日～平成27年2月25日(実働148日)まで実施した。

平成27年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 センター長 堂込 秀人
 調査企画 ” 総務課長兼係長 有村 貢
 ” 調査課長 八木澤一郎
 ” 調査第三係長 宗岡 克英
 調査担当 ” 文化財専門員 田畑 哲治
 ” 文化財専門員 井手上誉弘
 ” 文化財専門員 辻 明啓
 ” 文化財調査員 大坪 啓子
 事務担当 ” 事業推進員 柏木 昌子

発掘調査を平成27年5月7日～平成28年2月25日(実働141日)まで実施した。

平成28年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 センター長 堂込 秀人
 調査企画 ” 総務課長兼係長 有村 貢

調査担当 // 調査課長 八木澤一郎
 // 調査第三係長 岩澤 和徳
 // 文化財専門員 浦 博司
 // 文化財専門員 辻 明啓
 // 文化財調査員 下田代清海
 事務担当 // 事業推進員 岡村 信吾
 (4月～7月)
 // 事業推進員 柏木 昌子
 (8月～9月)

発掘調査を平成28年5月9日～平成28年9月28日(実働75日)まで実施した。

令和4年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

調査企画 // センター長 中村 和美
 // 総務課長兼係長 中島 治
 // 調査課長 三垣 恵一
 // 調査第三係長 上床 真
 調査担当 // 文化財専門員 新保 朋久
 // 文化財専門員 宮崎 大和
 // 文化財調査員 野田 清志
 事務担当 // 主 事 上園 慶子

発掘調査を令和4年5月11日～令和5年2月22日(実働140日)まで実施した。

2 調査経過

調査の経過については、以下のとおり日誌抄を集約して記載した。なお、各年度ごとの調査範囲については第4図を参照いただきたい。

平成26年度

萩ヶ峰遺跡、白水B遺跡の調査を同時に実施した。白水B遺跡の当該年度の調査については、既報告(2016『白水B遺跡』埋蔵セ(9))のため萩ヶ峰遺跡に関する調査のみ記載する。

4月21日：重機による営繕用地等の整地開始。国交省による伐採(営繕用地、A～E-2～11区)。
 5月7日：重機による表土除去開始。レベル移動。
 8日：作業員作業開始。発掘機材搬入。環境整備。
 13日：堂込センター長現地視察。
 中村係長、寺原係長、宗岡係長現地調査。
 15日：県文化財課監理業務(黒川文化財主事)。
 16日：繁昌誠吾氏(鹿屋市議)来跡。
 6月12日：八木澤調査課長現地指導。
 16日：所内安全パトロール。
 18日：A～E-2～11区表土除去、Ⅲ層掘り下げ。
 7月1日：A～E-2～11区Ⅲ層調査、掘り下げ開始

(～26日)。
 8月1日：A～E-2～11区Ⅲ層調査、掘り下げ(～28日)。
 5日：堂込センター長視察。森脇広氏(鹿児島大学教授)現地指導。
 20日：所内安全パトロール。
 22日：宗岡係長現地調査。
 10月15日：県文化財課監理業務(黒川文化財主事)。
 22日：所内安全パトロール(白水B遺跡)。
 11月6日：宗岡係長現地調査。
 7日：八木澤調査課長現地指導。宗岡係長現地調査。
 12日：堂込センター長現地視察、八木澤調査課長現地指導、宗岡係長現地調査。
 12月1日：B～C-3～8区重機による表土除去。Ⅲ層掘り下げ・調査(～24日)。
 5日：宗岡係長現地調査。
 9日：八木澤調査課長現地指導。所内安全パトロール。
 10日：宗岡係長現地調査。
 19日：空中写真撮影((株)ふじた)。
 1月7日：B～E-11～16区重機による表土除去。F・G-7～12区Ⅲ層掘り下げ、調査(～28日)。
 8日：宗岡係長現地調査。
 9日：グリッド杭打設開始((有)ジパング・サーベイ)(～19日)。
 21日：宗岡係長現地調査。
 2月2日：B～C-3～8区重機による表土除去。Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ・調査。集石1基調査。土層断面実測(～25日)。
 3日：宗岡係長現地調査。
 5日：寺田仁志氏(県立博物館)現地指導。
 18日：所内安全パトロール。
 18～23日：31～34トレンチの調査。
 25日：八木澤調査課長現地指導。発掘機材搬出。当該年度分調査終了。

平成27年度

萩ヶ峰A遺跡の調査を実施した。
 4月20日：現場状況確認。重機搬入。営繕用地の整地。環境整備、表土除去開始(～24日)。
 5月7日：表土除去。現場開始準備。
 8日：作業員作業開始。発掘機材搬入。環境整備。
 B～D-5～8区Ⅲ層～Ⅴ層掘り下げ・調査(～28日)。
 14日：堂込センター長現地視察。宗岡係長現地調査。
 20日：八木澤調査課長現地指導。
 22日：稲村博文氏、内久保博記氏(鹿屋市文化財センター)来跡。
 25日：有村総務課長兼係長現地指導。宗岡係長現地

調査。

6月1日：B～D-5～8区 III層～VI層掘り下げ・調査（～28日）。

11日：宗岡係長現地調査。

12日：B～E-23～27区表土除去。

15日：堂込センター長現地視察。

7月7日：B～D-6～8区 V～IX層掘り下げ。

14日：稲村博文氏，内久保博記氏（鹿屋市文化財センター）来跡。

16日：D・E-23～26区の調査準備。宗岡係長現地調査。

17日：B～D-6～8区，旧石器時代確認調査開始。

22日：C・D-3～5区V・VI層掘り下げ。
B～E-15～22区の調査準備（～23日）。

24日：B～E-23～27区表土除去。掘り下げ開始。

27日：鹿屋市文化財ウォッチング。

28日：B～D-6～8区，旧石器時代確認調査終了。旧石器時代の遺構・遺物がないことを確認。

8月4日：C～E-23～27区II・III層掘り下げ。
文化財課黒川文化財主事監理業務。

6日：堂込センター長現地視察。宗岡係長現地調査。

7日：D・E-3～6区表土除去（～20日）。

10日：D～F-23～25区表土除去。調査開始（～28日）。

24日：台風15号接近のため大雨（～25日）。

9月2日：D・E-3～6区IV・V層掘り下げ，B～E-22～27区III～VI層掘り下げ（～25日）。

8日：八木澤調査課長現地指導。

10日：A～C-9・10区表土除去。IV・V層掘り下げ開始（～14日）。

15日：所内安全パトロール。

18日：埋文センター大久保係長監理業務。

10月5日：B～E-3～6区VI層掘り下げ，B～E-22～27区VI層掘り下げの後下層確認調査（～28日）。

26日：E-23区VI層にて集石（縄文早期）検出。

11月4日：C～E-14～24区II～VI層掘り下げ（～27日）。

19日：竪穴建物跡1号（D-21区・古墳時代）検出。調査開始。

20日：土坑1（D-20～22区・いずれも古墳時代）検出。調査開始。

12月1日：C～E-14～20区II～VI層掘り下げ（～24日）。

8日：E-16区VI層にて溝状遺構（縄文時代早期）検出，調査（～9日）。

15日：八木澤調査課長現地指導。

18日：空中写真撮影（(株)スカイサーベイ九州）

実施。

22日：所内安全パトロール。

24日：年内作業終了。養生を行う。

1月5日：作業開始。
B・C-15～22区IV～VI層掘り下げ（～2月22日）。

13日：C・D-20・21区の土坑2～4の精査実施。
その結果，土坑4は欠番とした。
E-23区集石（縄文早期）調査（～15日）。

18日：D・E-24～26区IV層調査（～28日）。

2月2日：C・D-19～25区III～VI層掘り下げ（～23日）。
土坑1・竪穴建物跡1・2号の調査（～23日）。
所内安全パトロール（～3日）。

25日：発掘作業終了。環境整備。リース品点検。
発掘機材搬出。当年度の調査終了。

平成28年度

萩ヶ峰遺跡，白水A遺跡，山ノ上B遺跡の調査を同時に実施した。白水A遺跡，山ノ上B遺跡については，既報告（2022『山ノ上B・白水A遺跡』埋調セ（41））のため，ここでは萩ヶ峰A遺跡に関する部分のみ記載する。

4月19日：現地確認。
20日：重機による表土除去（～5/13）。

5月9日：作業員作業開始。オリエンテーション。発掘機材搬入。機材準備。環境整備。

12日：岩澤係長現地調査。

16・17日：岩澤係長現地調査。

18日：C～F-4～10区 III層掘り下げ（～27日）。

19日：堂込センター長現地視察。

6月1日：D～F-4～8区 III層掘り下げ（～27日）。

7日：県文化財課黒川文化財主事監理業務。八木澤調査課長現地指導。岩澤係長現地調査。現地協議。

9日：岩澤係長現地調査。

13日：中村係長現地調査。

22日：所内安全パトロール。

7月4日：C～F-6～11区III～VI層掘り下げ（～28日）。

8日：県文化財課黒川文化財主事監理業務。岩澤係長現地調査。

11日：岩澤係長現地調査。

12日：八木澤調査課長現地指導。

21日：白水A遺跡の国交省への引き渡し協議のため，岩澤係長現地調査。

8月1日：C～F-4～10区V・VI層掘り下げ（～26日）。

22日：C～E-9・10区先行トレンチ調査開始（～26日）。

24日：八木澤調査課長現地指導。岩澤係長現地調査。
9月1日：C～E-9・10区先行トレンチ調査。文化財課引き渡し協議。

28日：平成28年度本調査終了。

※職員、作業員は、引き続き山ノ上B遺跡にて作業実施。

令和4年度

萩ヶ峰遺跡、白水B遺跡、山ノ上A遺跡の調査を同時に実施した。

4月19日：現地協議（大隅河川国道事務所 榎本係長・橋山監督官、文化財課馬籠文化財主事兼専門員、三垣調査課長、上床係長及び担当職員）。

25日：環境整備（～5月17日）。仮設等に関する現地打合せ。

26日：上床係長現地調査。

5月16日：作業員作業開始。オリエンテーション。発掘機材搬入。上床係長現地調査。

18日：白水B遺跡表土除去（～20日）。萩ヶ峰-1遺跡Ⅱ層調査（～27日）。中村センター長現地視察。

19日：別府道郎氏（大隅河川国道事務所公務第二課業務委託室技術士）来跡。

23日：萩ヶ峰遺跡下層確認調査（～27日）。

24日：C～I-23～30区環境整備、先行調査（～27日）。

6月1日：D～F-16～22区Ⅱ層調査（～28日）。萩ヶ峰遺跡Ⅱ～Ⅴ層掘り下げ（～28日）。

2日：中村センター長現地視察。

8日：Ⅲ層上面にて帯状硬化面検出。

9日：三垣調査課長現地指導。

20日：上床係長現地調査（～21日）。

21日：所内安全パトロール。

7月1日：台風4号接近のため、作業中止（～2日）。

11日：D～F-16～22区Ⅲ層調査（～28日）。

萩ヶ峰遺跡Ⅴ層掘り下げ（～28日）。

14日：現地協議（大隅河川国道事務所 榎本係長・橋山監督官、文化財課馬籠文化財主事兼専門員、三垣調査課長、上床係長及び担当職員）。山ノ上A遺跡への仮設道路設置等について協議。

21日：萩ヶ峰遺跡Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ（～27日）。

白水B遺跡Ⅳ・Ⅴ層掘り下げ（～27日）。

8月3日：現場作業再開。C～I-23～30区先行トレンチ調査（～26日）。山ノ上A遺跡先行トレンチ調査（～26日）。

大隅河川国道事務所橋山雅俊専門調査官来跡。

4日：上床係長現地調査（～5日）。

8日：夏期現場休止（～17日）。

19日：所内安全パトロール。

24日：上床係長現地調査。

9月1日：白水B遺跡Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ（～28日）。

萩ヶ峰遺跡Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ（～28日）。

5日：台風11号接近のため現場中止（～6日）。

7日：上床係長現地調査。

12日：D～F-16～22区Ⅲ層掘り下げ（～28日）。

白水B遺跡帯状硬化面調査（～28日）。

10月3日：D～F-16～22区Ⅲ層掘り下げ（～27日）。

萩ヶ峰遺跡Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ（～27日）。白水B遺跡Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ（～27日）。

4日：D～F-16～22区 竪穴建物跡1（古墳時代：平成27年度調査の続き）調査開始。

13日：上床係長現地調査（～14日）。

14日：現地協議（大隅河川国道事務所橋山雅俊専門調査官、馬籠文化財主事兼専門員、上床係長）。

※ 山ノ上A遺跡仮設道路（工事用道路）等に関する協議。

24日：上床係長現地調査。

25日：中村センター長現地視察。西園係長（埋文センター）監理業務。竪穴建物跡3号検出。

27日：下司信夫氏（国立研究開発法人産業技術総合研究所）、成尾英仁氏（鹿児島大学非常勤講師）来跡。竪穴建物跡4号検出。山ノ上A遺跡への工事用道路（仮設道路）完成。

11月1日：D～F-16～22区Ⅳ層掘り下げ（～28日）。

白水B遺跡Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ（～14日）。山ノ上A遺跡表土除去（～14日）。

8日：竪穴住居跡5号検出。

10日：三垣調査課長現地指導。

11日：上床係長現地調査。

14日：山ノ上A遺跡本調査開始。

17日：上床係長現地調査。

21日：C～I-23～30区Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。

12月6日：D～F-16～22区竪穴建物跡1・3・4号調査（～23日）。C～I-23～30区Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ（～20日）。山ノ上A遺跡Ⅲ層掘り下げ（～23日）。

13日：大隅河川国道事務所中島洋一副所長ほか2名、鹿屋体育大学副学長ほか5名遺跡見学。上床係長現地調査。

23日：年内作業最終日。

1月5日：D～F-16～22区竪穴建物跡3・4号調査（～6日）。C～I-23～30区Ⅴ・Ⅵ層掘り下げ（～24日）。B～E-10～14区Ⅲ層掘り下げ（～26日）。山ノ上A遺跡Ⅲ層掘り下げ（～27日）。

10日：中村センター長現地視察。

11日：上床係長現地調査。
 18日：中島総務課長現地指導。
 19日：空中写真撮影（(株)スカイサーベイ九州）実施。上床係長現地調査。
 2月1日：D～F-16～22区V層掘り下げ（～6日）。
 萩ヶ峰遺跡V層掘り下げ（～20日）。山ノ上A遺跡V層掘り下げ（～17日）。
 3日：上床係長現地調査。
 8日：D～F-16～22区のVI層上面にて集石遺構2号検出。
 16日：三垣調査課長現地指導。
 20日：D～F-16～22区先行トレンチ調査（～21日）。調査の結果、遺構・遺物は確認されず。中村センター長現地視察。
 引き渡し協議（大隅河川国道事務所榎本由香利係長，馬籠文化財主事兼専門員，上床係長来跡）。道路調査。
 22日：調査終了。発掘機材・遺物搬出。

埋蔵文化財調査センター
 センター長 前迫 亮一
 調査企画 // 総務課長兼係長 中村伸一郎
 // 調査課長 寺原 徹
 // 調査第三係長 三垣 恵一
 調査担当 // 文化財専門員 樋之口隆志
 // 文化財専門員 浦 博司
 (9月～3月)
 // 文化財調査員 新屋敷久美子
 事務担当 // 主 査 小牧 智子
 // 事業推進員 塩屋奈津美

令和4年度
 事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

センター長 中村 和美
 調査企画 // 総務課長兼係長 中島 治
 // 調査課長 三垣 恵一
 // 調査第三係長 上床 真
 調査担当 // 文化財専門員 大保 秀樹
 // 文化財専門員 兒島 直美
 事務担当 // 主 事 上園 慶子

令和5年度
 事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

センター長 寺原 徹
 調査企画 // 総務課長兼係長 脇田 清幸
 // 調査課長 三垣 恵一
 // 調査第一係長 西園 勝彦
 調査担当 // 文化財専門員 宮崎 大和
 // 文化財調査員 北園 和代
 事務担当 // 主 事 上園 慶子

第5節 整理・報告書作成作業

萩ヶ峰遺跡の整理・報告書作成作業を平成28年度，平成30年度，令和4年度に埋文調査センター第一整理作業所で行った。このうち平成30年度は，白水A遺跡と同時に作業を行った。令和5年度は萩ヶ峰A・B遺跡，白水B遺跡，山ノ上A遺跡の整理・報告書作成作業を同時に第二整理作業所で行った。各年度の調査体制と整理作業の経過については以下のとおりである。

1 作成体制

平成28年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター
 センター長 堂込 秀人
 調査企画 // 総務課長兼係長 有村 貢
 // 調査課長 八木澤一郎
 // 調査第三係長 岩澤 和徳
 調査担当 // 文化財専門員 辻 明啓
 事務担当 // 事業推進員 岡村 信吾
 (4月～7月)
 // 事業推進員 柏木 昌子
 (8月～9月)

平成30年度

事業主体 国土交通省九州地方整備局
 大隅河川国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査総括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団

2 整理作業の経過

整理作業の経過については，日誌抄の集約による。

平成28年度

4月 台帳等，遺物の確認・水洗い
 5月 図面，遺物の整理・水洗い
 礫の選別
 6月 礫の選別，注記
 7～8月 土器の分類，接合，注記・データ入力
 9月 土器接合・写真整理
 10月 平成28年度の発掘調査出土遺物の整理・水洗い
 および図面，遺物台帳，写真整理

- 11～1月 土器の分類, 接合, 注記, 水洗い
- 2月 土器の分類, 接合・石器分類・遺物等収納
- 3月 遺物等収納

平成30年度

- 4月 遺物台帳, 図面整理・土器接合
- 5月 遺物台帳, 図面整理・土器の接合, 選別, 注記
- 6月 遺構図トレース(～8月)・コンタ図整理(～9月)・土器の接合, 注記, 復元
- 7～9月 土器の接合, 復元, 実測
- 10月 土器の実測, 拓本(～2月)
- 12月～3月 遺構データ整理

令和4年度

- 4月 台帳および遺物の確認作業
- 5～7月 遺構トレース図面修正・遺物注記訂正(～8月)・写真整理・土器の実測, 拓本, 復元・原稿執筆
- 8月 令和4年度発掘調査出土遺物の注記・遺構図面整理
- 9月 土器接合・遺構図面整理
- 10～1月 土器の接合, 復元, 実測・遺構図面整理
遺構図トレース・土器, 石器分類・原稿執筆
- 2月 土器のトレース, 拓本・石器データ入力・遺物整理・収納
- 3月 遺物トレース図チェック・遺物整理・データ入力

令和5年度

- 4月 台帳および遺物の確認作業・土器接合
- 5月 土器接合・遺構トレース
石器実測委託(10月4日まで)
- 6～8月 土器・石器実測・遺構トレース
遺構レイアウト・原稿執筆・土器復元

- 9月 土器・石器トレース
遺物レイアウト・土器復元・土器写真撮影
- 10月 土器トレース・レイアウト・土器復元および着色
観察表等データ入力・原稿執筆
- 11月 レイアウト・編集・写真撮影・原稿執筆
遺物分布図作成

12月～2月 校正・遺物および図面の整理と収納
なお, 報告書作成指導委員会等の期日等は, 以下のとおりである。

報告書作成指導委員会 三垣調査課長ほか8名
6月13日(火), 8月2日(水), 10月4日(水)

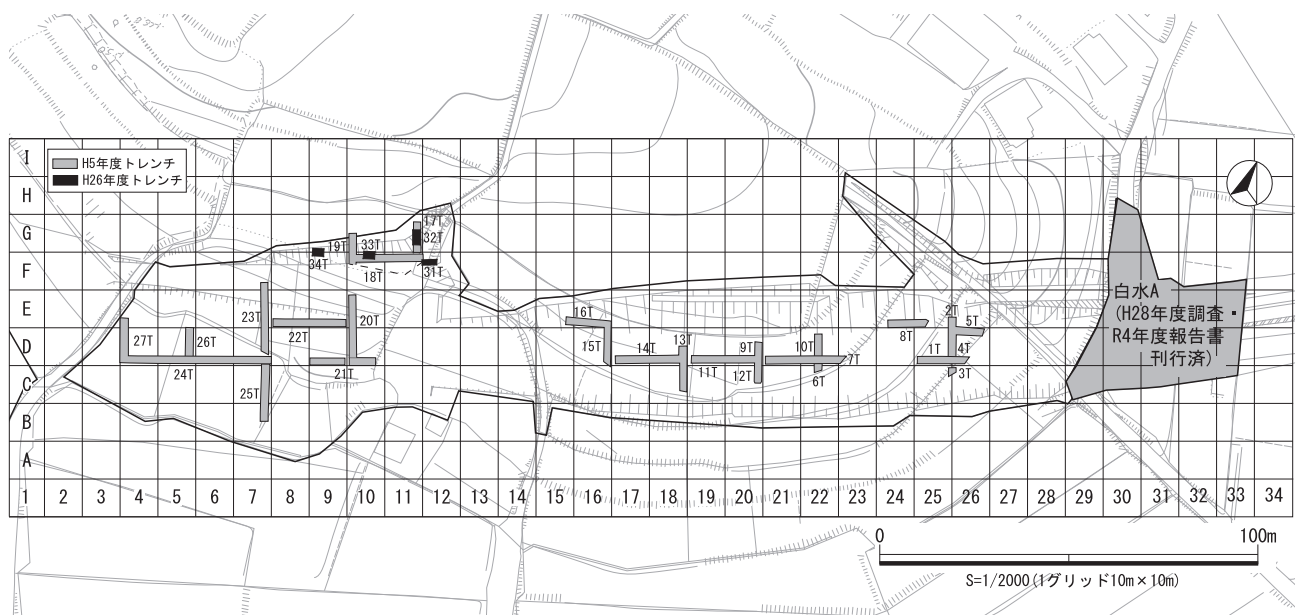
11月7日(火), 11月21日(火)

報告書作成検討委員会

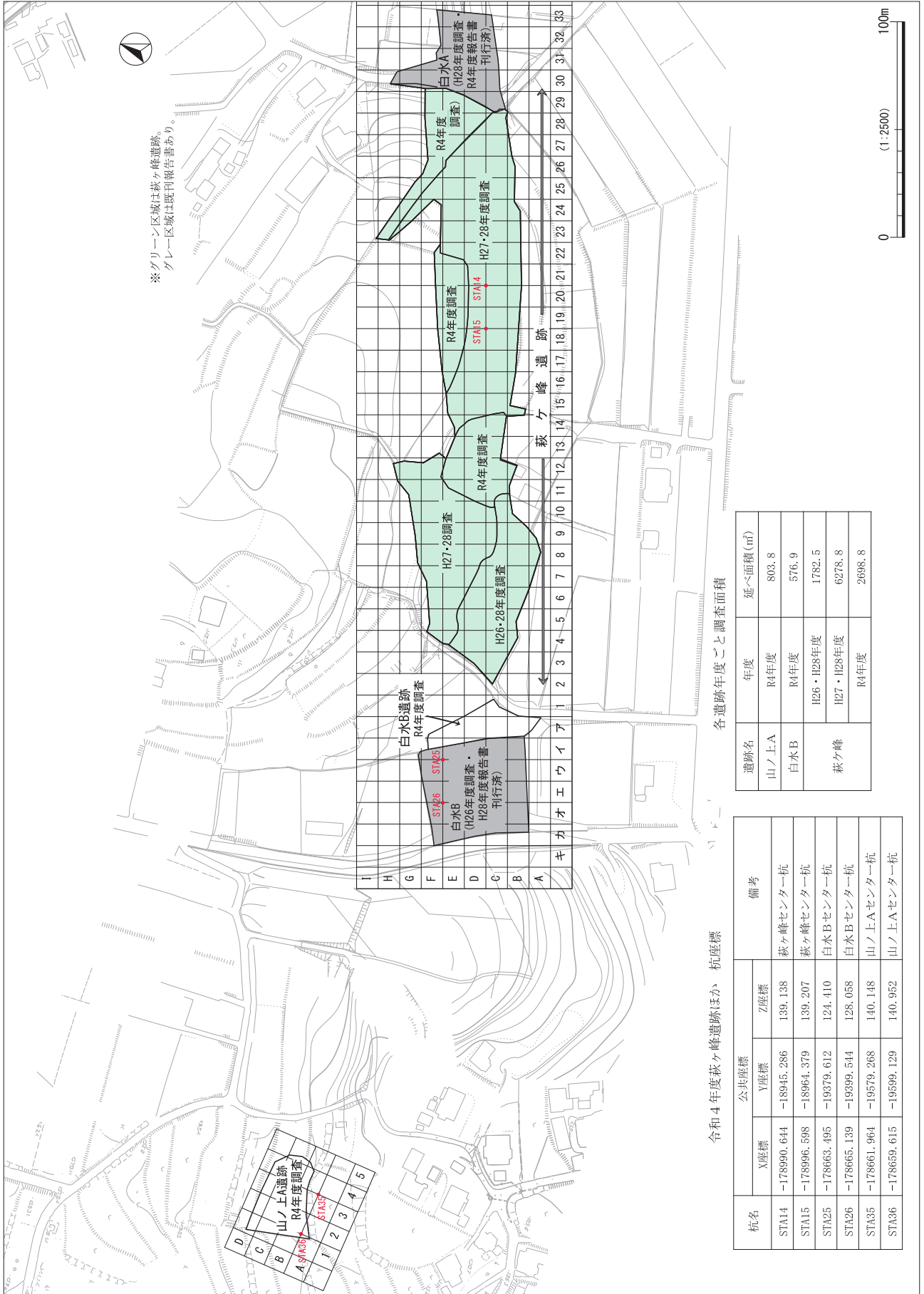
11月22日(水) 寺原センター長ほか5名



萩ヶ峰遺跡ほか上空から肝属平野を望む



第3図 萩ヶ峰遺跡 トレンチ配置図



第4図 葎ヶ峰・白水・山ノ上A遺跡周辺地形図および年度ごとの調査範囲図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡・山ノ上A遺跡（以下「萩ヶ峰遺跡ほか」という）は、鹿児島県鹿屋市に所在する。鹿屋市は大隅半島の中央部に位置し、面積は448.33km²、市域は東西20km、南北41kmに及ぶ。人口規模では鹿児島市、霧島市に次ぐ県内3番目の約10万人規模（世帯数46,247戸、人口99,505人：令和5（2023）年2月1日現在）で、大隅地方の交通・産業・経済等の中心都市となっている。東は大崎町・東串良町・肝付町、西は垂水市及び鹿児島湾、南は錦江町、北は曾於市・霧島市と境を接している。大正元年に鹿屋村が鹿屋町となり、昭和16（1941）年に鹿屋町・大始良村・花岡村の合併により市政を施行し、昭和30年代の高隈村等の編入を経て、平成18（2006）年に鹿屋市・輝北町・串良町・吾平町が合併し、新鹿屋市が発足した。

市の北西部は砂質岩・泥質岩・花崗岩からなる1,000m級の大笠柄山、横岳、御岳が並ぶ高隈山系が、南東部には安山岩・溶結凝灰岩よりなる700～800m級の肝属山系が連なる。この山系の間には笠野原台地などのシラス台地と市の中心部を流れる高隈山系を源とする肝属川の沖積地を中心とする肝属平野が広がる。市の西側は肝属川と同じく高隈山系を源とする高須川がほぼ南流しながら最後は鹿児島湾へと注いでいる。一般的にシラス台地は生産性が低いとされるが、昭和42（1967）年に高隈ダムの完成に伴って畑地灌漑パイプラインにより、シラス台地への給水が開始され畑地としての開発が進んだ。現在でも農業・畜産が盛んで、黒豚・ブロイラー・落花生・サツマイモなどが特産品である。また、鹿屋体育大学や海上自衛隊鹿屋航空基地があることでも全国的にその名が知られている。

萩ヶ峰遺跡ほかが発見される白水地区（山ノ上A遺跡は小野原地区）は鹿屋市の西部にあり、北側は高隈山系に連なり、鹿屋原台地を侵食しながら東南の方向へ流れる高須川の右岸に位置する。高須川を臨む台地の東側縁部には平成2（1990）年度に発掘調査を実施した西丸尾遺跡があり、そこから西へ約700mの距離に白水A遺跡・萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡などが連なって存在する。また、山ノ上A遺跡は同じ台地の縁辺を西側に進み、直線距離にして200mほどの距離に存在する。これらの遺跡は標高約130～170m程度の小高い丘のなだらかな南側斜面上にあり、肝付平野と国見山系を望む。台地の縁辺部に沿ってさらに北上すると、海岸への勾配は急となり鹿児島湾を臨む眺望が開ける。このエリアには縁辺部の平坦面に石鉢谷A・B遺跡、古里A・B遺跡、根木原遺跡群（中野西・鷲ヶ迫・北原中・天神平溝下・領家西・宇都上各

遺跡：旧地点名を第1表中に示している）などの遺跡が連なって存在する。

第2節 歴史的環境

萩ヶ峰遺跡ほかが発見される鹿屋市では、一般国道220号バイパス建設に伴い、これまで多くの発掘調査が実施されてきた。昭和55（1980）年度～59（1984）年度にかけて王子遺跡、昭和60（1985）年度～平成元（1989）年度にかけて中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・榎田下遺跡・川ノ上遺跡・前畑遺跡・中原山野遺跡の調査が実施されている。萩ヶ峰遺跡ほかの所在する白水地区の近隣でも、昭和63（1988）年度～平成4（1992）年度にかけて榎崎A遺跡・榎崎B遺跡・飯盛ヶ岡遺跡・西丸尾遺跡・西丸尾B遺跡、平成9（1997）年度～22（2010）年度にかけて花岡町及び古里町に所在する中野西遺跡ほか11遺跡、平成26（2014）年度から白水B遺跡（第4図中のイ～カの調査範囲。平成28年度に報告書刊行済み。）ほか7遺跡の発掘調査が実施され、多くの調査成果を残している。

旧石器時代

この時期を代表する遺跡としては西丸尾遺跡が挙げられる。発掘調査の結果、ナイフ形石器文化期の礫群5基や細石器文化期の礫群4基のほか、縄文時代草創期の礫群2基と配石遺構1基が検出されている。また、ナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、細石刃核等が出土している。榎崎B遺跡ではナイフ形石器・細石刃が出土し、細石刃文化期のビット群と礫群が検出され、相互に関連した生活遺構として捉えられている。白水B遺跡既報告範囲からはナイフ形石器・細石刃が出土している。榎崎A遺跡では細石刃が出土している。鷲ヶ迫遺跡では薩摩火灰の下層で12基の落とし穴が検出され、旧石器時代から縄文時代草創期のものと考えられている。

縄文時代

飯盛ヶ岡遺跡では、縄文時代早期の吉田式土器、石坂式土器、苦浜式土器、平楯式土器等多くの土器が出土している。前畑遺跡では多くの集石と共に平楯式土器が多く出土し、その中には壺形土器も見られる。白水B遺跡既報告範囲からは下剥峯式土器が出土した。縄文時代前期では、榎田下遺跡から轟式土器、中ノ丸遺跡から轟式・曾畑式土器が出土している。縄文時代中期の春日式土器が中野西遺跡で多く出土し、榎田下遺跡、前畑遺跡、中ノ原遺跡でもわずかに確認されている。縄文時代後期では中ノ原遺跡から指宿式土器や市来式土器とともに納曾式・西平式土器がまとまって出土している。また、中ノ丸遺跡からは縄文時代晩期の入佐式土器が出土し、白水

B遺跡既報告範囲からは縄文時代晩期の入佐式土器に伴って樞原紋様土器が出土している。榎木原遺跡では、入佐式土器期の竪穴住居跡1軒（円形で4本柱）や、黒川式土器期の土坑2基が検出されている。遺物は、入佐式・黒川式・刻目突帯文土器と連続する土器型式の土器等が出土している。榎崎B遺跡では、黒川式土器期の土坑51基が検出されている。多くの遺物が入るものもあり、当該時期の様相を考えるうえで重要である。包含層からは黒川式土器に加えて孔列土器や組織痕土器も少量確認される。石鉢谷B遺跡からは県内4例目の出土事例となる石冠が出土し注目される。三叉文を施文し赤く塗られた精製の土器は、割れ口の接着剤として膠を使用した可能性がある。黒川式のなかでも新しい時期に位置づけられる干河原段階の土器のみが出土しているため、器種構成や石器とのセット関係がわかる良好な資料である。

弥生時代

弥生時代では、王子遺跡が特筆される。弥生時代中期末から後期初頭にかけての竪穴建物跡27軒、掘立柱建物跡14棟を含む大規模な集落跡が確認された。なかでも、花卉状住居跡や棟持ち柱付きの掘立柱建物及び土坑を伴う住居跡の検出は周辺地域でも類例が少ないものであり、注目すべき調査成果である。また、在地の山ノロ式土器をはじめ北九州系及び瀬戸内系等の土器や鉄製の鉋や刀子も出土している。中ノ丸遺跡では中期末から後期初頭にかけての竪穴建物跡や円形周溝墓が検出され、中ノ原遺跡、前畑遺跡からも同時期の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代

領家西遺跡では、古墳時代に該当する竪穴建物跡63軒、土坑墓（鉄製の短剣・鎌を副葬）2基等を検出している。竪穴建物跡の平面形は花卉型・円形・方形とバリエーションに富む。不定形のものも数基検出されており、その多くは東原式を伴う。白水B遺跡既報告範囲からは、土坑10基、柱穴196基、帯状硬化面が、榎崎A遺跡では溝1条が検出されている。

なお、萩ヶ峰遺跡ほかの位置する台地の縁辺にあたるエリアでは、中津野式土器が出土する遺跡は少なく、東原式から辻堂原式にかけての土器が出土することが多く、それに次いで笹貫式土器が出土するという傾向がみられる。

古代～中・近世・近代

平安時代の遺構・遺物を検出した遺跡としては、榎崎A・B遺跡がある。榎崎A遺跡では10世紀後半～11世紀前半頃の円形周溝墓5基が、榎崎B遺跡では、9世紀中頃～後半頃の竪穴建物跡1軒と掘立柱建物跡2棟がそれぞれ検出されている。時期は若干異なるものの、古代の墓地と集落が近辺に存在していることが確認された。

平安時代の『和名類聚抄』（承平年間【931～938年】

編纂）には、始羅郡の郷として「鹿屋」が見られ、地名としての「鹿屋」はこれが初出である。中世には鹿屋院と称され、建久8（1197）年の「大隅国図田帳」には「鹿屋院八十五丁九段」と記されている。

中世では、領家西遺跡で掘立柱建物9棟（うち1棟は四面庇建物）、竪穴建物跡6軒、土坑24基（うち1基は石組あり）等が検出されている。遺物は12世紀後半～13世紀頃（青磁・白磁・東播系須恵器・滑石製品等）と15～16世紀（青磁・白磁・青花・備前焼・瓦質土器等）が出土している。特に中世前半期の遺物に、拠点的な遺跡から出土する遺物（柱状高台皿等）が含まれていることから、当該時期の拠点的な集落であったとみられる。

上記の遺跡は、多くが中世前半期であり、後半期の明確な遺跡は、これまでの発掘調査では確認されていないが、近辺には荒平城、野里城跡などが存在するので、中世後半期の城館関連遺跡が存在する可能性が高い。ただし、いずれの城跡も発掘調査が行われたことはなく、詳細は不明である。

近世に入ると薩摩藩は外城制を敷き、鹿屋市域には鹿屋・大始良・花岡・高隈・串良・始良・百引・市成の8郷が置かれた。

遺跡としては中ノ丸遺跡があり、少なくとも3基の鍛冶炉跡（被熱礫・鉄滓等出土）が確認されている。これらの遺構は遺物を伴わないため明確な時期は不明であるが、中世末～近世中頃のものの可能性が高い。そのほかには、笠野原窯跡があり、宝永2（1705）年から慶応2（1866）年まで操業していたことが判明しているが、これまで遺物採集のみであるので詳細が不明である。

太平洋戦争中には、3つの旧海軍飛行場が存在し、日本で最も多くの特攻隊員が出撃した。当時の遺構として市指定文化財に登録された笠野原基地跡の川東掩体壕や串良基地跡の地下第一電信室などの戦争遺跡が現在も残り、鹿屋市は平和学習を推進している。

【参考・引用文献】

鹿屋市史編さん委員会 編1995『鹿屋市史』[改訂版] 上巻・下巻 鹿屋市

鹿屋市教育委員会2004「川の上・中ノ丸遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』（74）

鹿児島県教育委員会1985「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（34）

鹿児島県教育委員会1990「前畑遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（133）

※第2表 周辺遺跡一覧表に記載の遺跡については参考・引用文献から割愛する。

第1表 一般国道220号バイパス建設に係るこれまでの確認調査・発掘調査等の経緯

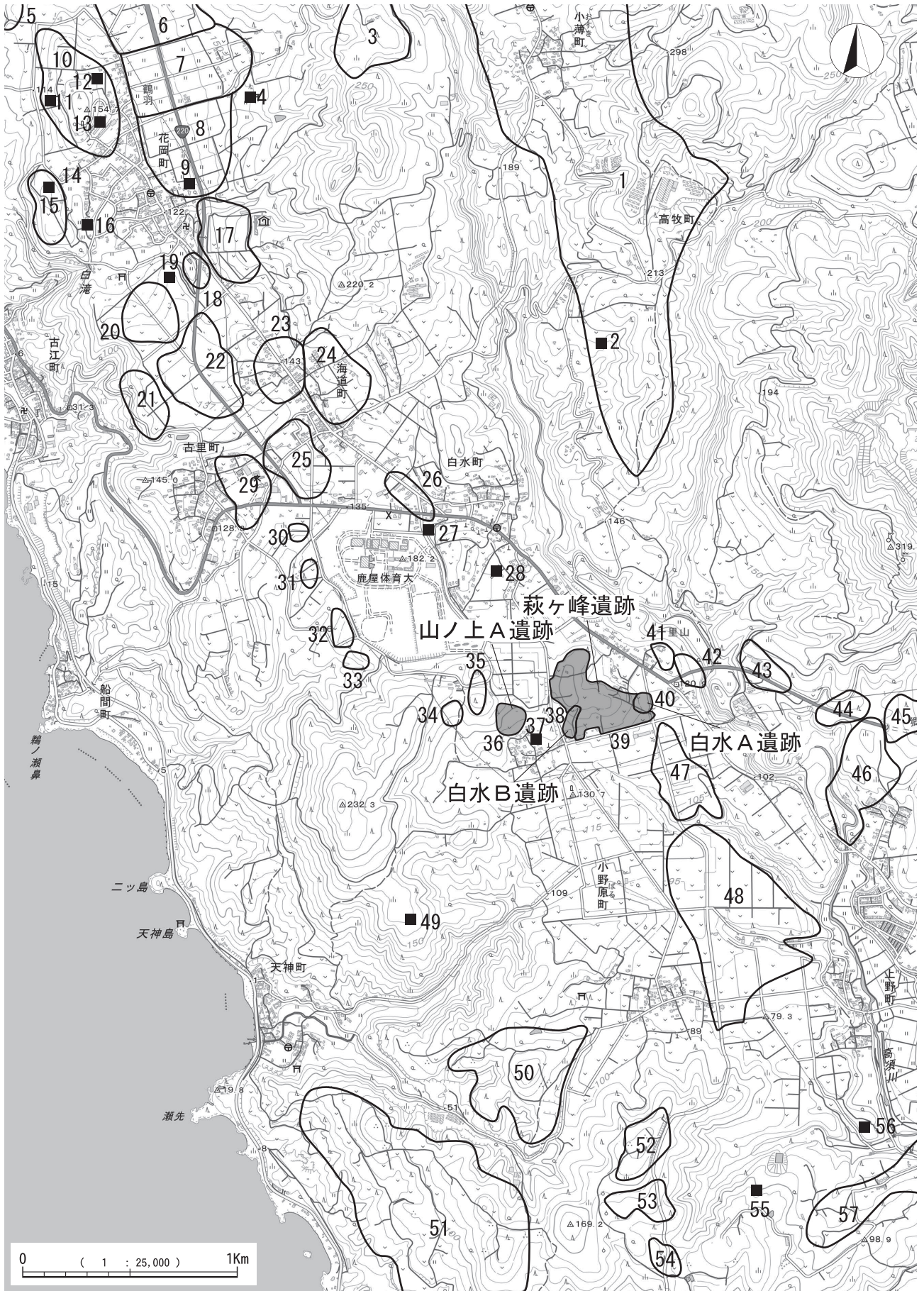
年・月	調査の内容等	備考
昭和53年	国道220号バイパス建設計画，一部着工	
昭和56年1月～56年2月	王子遺跡の確認調査	鹿屋バイパス
昭和56年10月～59年3月	王子遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
昭和60年4月～60年5月	中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡等の確認調査	鹿屋バイパス
昭和60年10月～61年3月	中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
昭和61年4月～62年3月	榎田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
昭和62年4月～63年1月	前畑遺跡・中原山野遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
昭和62年9月～62年10月	白水地区の確認調査	25工区
昭和63年4月～63年8月	前畑遺跡・中原山野遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
昭和63年5月～平成元年9月	榎崎A遺跡・飯盛ヶ岡遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
昭和63年9月～平成元年9月	榎田下遺跡・中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡・中ノ原遺跡・前畑遺跡・中原山野遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
平成元年4月～2年3月	飯盛ヶ岡遺跡・榎崎B遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
平成2年4月～3年3月	榎崎B遺跡・西丸尾遺跡発掘調査	鹿屋バイパス
平成3年4月～3年6月	榎崎B遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
平成4年6月～5年3月	西丸尾B遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
平成5年7月～5年11月	白水A遺跡・白水B遺跡・萩ヶ峰遺跡の確認調査	25工区
平成5年12月～6年3月	白水B遺跡の発掘調査	25工区
平成9年10月～10年3月	中野西遺跡（根木原遺跡A地点）の発掘調査	27工区
平成10年10月～11年3月	松山田西遺跡（根木原遺跡A地点）の発掘調査	27工区
平成11年5月～12年3月	鷲ヶ迫遺跡（根木原遺跡B地点）・北原中遺跡（根木原遺跡C地点）の発掘調査	27工区
平成12年5月～13年3月	鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・領家西遺跡（根木原遺跡D地点）の発掘調査	27工区
平成13年5月～14年3月	北原中遺跡・領家西遺跡の発掘調査	27工区
平成14年5月～14年8月	北原中遺跡・領家西遺跡の発掘調査	27工区
平成15年11月～16年1月	北原中遺跡・天神平溝下遺跡（根木原遺跡E地点）の発掘調査	27工区
平成16年5月～17年3月	領家西遺跡・天神平溝下遺跡の発掘調査	27工区
平成16年5月～16年10月	中原山野遺跡・前畑遺跡の発掘調査	27工区
平成16年7月～16年12月	中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
平成17年1月～17年3月	鷲ヶ迫遺跡の発掘調査	27工区
平成17年2月～17年3月	中ノ丸遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
平成17年5月～17年10月	領家西遺跡・宇都上遺跡（根木原遺跡F地点）の発掘調査	26・27工区
平成17年5月～17年10月	前畑遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
平成18年5月～19年3月	鷲ヶ迫遺跡の発掘調査	26工区
平成18年5月～18年10月	宇都上遺跡の発掘調査	26工区
平成18年8月～18年9月	領家西遺跡の発掘調査	27工区
平成19年9月～19年10月	前畑遺跡の発掘調査	鹿屋バイパス
平成20年10月～21年3月	宇都上遺跡・早山遺跡・稲荷山遺跡・鎮守山遺跡の発掘調査	26工区
平成21年5月～22年3月	稲荷山遺跡・鎮守山遺跡の発掘調査	26工区
平成22年5月～22年7月	宇都上遺跡・稲荷山遺跡・鎮守山遺跡の発掘調査	26工区
平成22年10月～22年11月	鎮守山遺跡の発掘調査	26工区
平成26年5月～27年2月	白水B遺跡の発掘調査	25工区
平成27年5月～28年2月	萩ヶ峰遺跡の発掘調査	25工区
平成27年11月・28年1月	山ノ上B遺跡の試掘調査	25工区
平成28年5月～28年7月	白水A遺跡の発掘調査	25工区
平成28年5月～28年9月	萩ヶ峰遺跡の発掘調査	25工区
平成28年8月～29年2月	萩ヶ峰遺跡の発掘調査	25工区
平成29年10月～30年3月	萩ヶ峰遺跡の発掘調査	25工区
平成29年1月	石鉢谷A・B遺跡の試掘調査	25工区
平成30年6月	石鉢谷A・B遺跡の確認調査	25工区
平成31年11月～31年3月	石鉢谷A遺跡の発掘調査	25工区
令和元年11月～2年1月	石鉢谷A遺跡の発掘調査	25工区
令和3年11月～4年1月	石鉢谷B遺跡の発掘調査	25工区
令和4年5月～5年2月 (予定)	萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡・山ノ上A遺跡の発掘調査	25工区

※25～27工区 としているのは古江バイパスの工区である

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺跡の種類	時代						備考
				旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	
1	小薄町遺跡群	鹿屋市小薄町・有武町・高牧町	散布地		○		○			
2	小薄神社跡	鹿屋市小薄町	社寺跡							
3	柴立	鹿屋市花岡町柴立	散布地		○		○			
4	日枝神社跡	鹿屋市花岡町	社寺跡							
5	城ヶ崎	鹿屋市花岡町城ヶ崎	散布地		○		○			
6	鷲ヶ迫	鹿屋市花岡町	集落跡	○	○		○			県埋セ報告書132
7	北原中	鹿屋市花岡町	集落跡		○		○	○	○	県埋セ報告書132
8	領家西	鹿屋市花岡町	集落跡		○	○	○	○	○	県埋セ報告書141, 近世
9	大剌院跡	鹿屋市花岡町	社寺跡							近世
10	鶴羽城跡	鹿屋市花岡町鶴羽	城館跡		○		○	○	○	近世
11	木谷城跡	鹿屋市花岡町	城館跡						○	
12	稲荷神社跡	鹿屋市上谷町	社寺跡							
13	菅原神社跡	鹿屋市花岡町	社寺跡							
14	下堂ノ尾	鹿屋市花岡町	散布地				○			
15	恵海山光明院禪定寺跡	鹿屋市古江町木谷	社寺跡							
16	稲荷神社跡	鹿屋市花岡町	社寺跡							
17	天神平溝下	鹿屋市花岡町	集落跡		○		○		○	県埋セ報告書141, 近世
18	宇都上	鹿屋市花岡町	散布地		○		○		○	県埋セ報告書132, 177
19	円覚山真如院法界寺跡	鹿屋市古江町木谷	社寺跡							近世
20	早山	鹿屋市花岡町早山・宮ノ脇	集落跡		○	○	○	○	○	県埋セ報告書177, 近世
21	枯木ヶ尾	鹿屋市古里町枯木ヶ尾	散布地			○	○			
22	稲荷山	鹿屋市花岡町	集落跡		○	○	○	○	○	県埋セ報告書177
23	本戸口	鹿屋市海道町本戸口	散布地							
24	俣刈	鹿屋市海道町俣刈迫	散布地		○		○			
25	鎮守山	鹿屋市古里町	集落跡		○		○	○		県埋セ報告書177
26	千場	鹿屋市白水町	散布地		○	○				
27	竜池山明王院山島寺跡	鹿屋市古里町	社寺跡						○	
28	鎮守神社跡	鹿屋市白水町	社寺跡							
29	古里	鹿屋市古里町	散布地		○	○	○			
30	古里B	鹿屋市古里町	散布地				○	○	○	近世
31	古里A	鹿屋市古里町	散布地				○	○	○	近世
32	石鉢谷B	鹿屋市古里町	散布地		○		○	○	○	埋調セ報告書50
33	石鉢谷A	鹿屋市古里町	散布地	○	○		○	○	○	埋調セ報告書49
34	宇戸平	鹿屋市小野原町	散布地		○					
35	山ノ上B	鹿屋市小野原町	散布地	○	○					埋調セ報告書41
36	山ノ上A	鹿屋市小野原町	散布地				○	○	○	本報告書
37	鎮守神社跡	鹿屋市白水町	社寺跡							
38	白水B	鹿屋市白水町	散布地	○	○		○		○	本報告書
39	萩ヶ峰	鹿屋市白水町	散布地				○	○	○	本報告書
40	白水A	鹿屋市白水町	散布地		○		○			埋調セ報告書41
41	西丸尾B	鹿屋市白水町西丸尾	散布地	○	○		○	○		県埋セ報告書9
42	西丸尾	鹿屋市白水町西丸尾	散布地	○	○		○	○	○	県埋文報告書64, 近世
43	榎崎B	鹿屋市郷之原町榎崎	散布地	○	○		○	○		県埋セ報告書4
44	榎崎A	鹿屋市郷之原町榎崎	散布地	○	○	○	○	○		県埋文報告書63
45	飯盛ヶ岡	鹿屋市上野町飯盛ヶ岡	散布地		○	○	○	○		県埋セ報告書3
46	高橋	鹿屋市上野町	散布地			○	○			
47	小野原B	鹿屋市小野原町	散布地				○	○	○	近世
48	小野原A	鹿屋市小野原町	集落跡		○	○	○	○	○	近世
49	荒平城跡	鹿屋市天神町	城館跡						○	
50	丸岡	鹿屋市小野原町	散布地				○	○		
51	天神	鹿屋市天神町	散布地							
52	松尾	鹿屋市小野原町	散布地		○	○	○			
53	山之頭迫	鹿屋市小野原町	散布地		○	○	○			
54	大橋田平	鹿屋市小野原町	散布地				○			
55	大畑平	鹿屋市野里町	散布地		○	○	○			
56	野里城跡	鹿屋市野里町	城館跡						○	
57	大津	鹿屋市野里町	散布地			○	○			

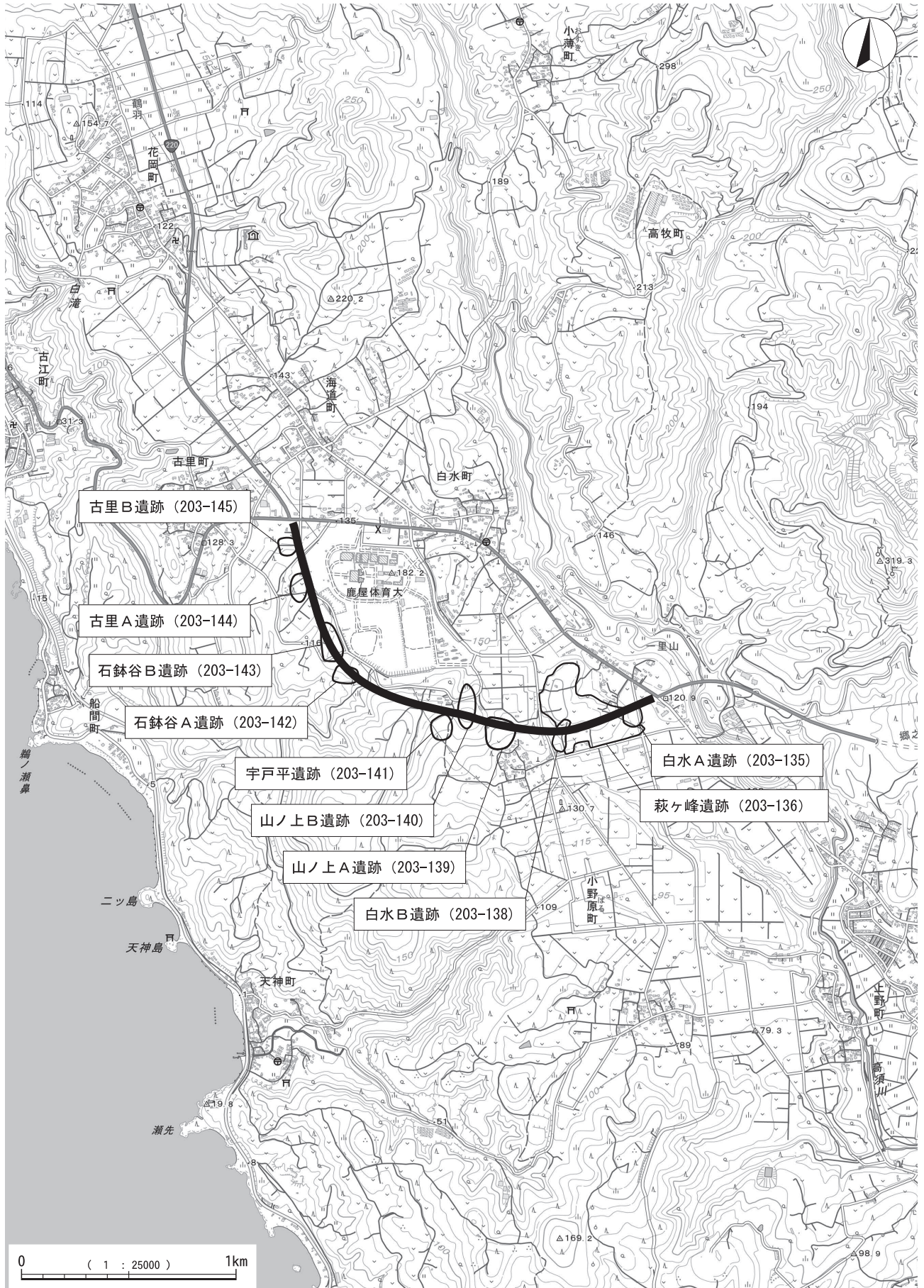
※注1 県埋文報告書（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書）
 県埋セ報告書（鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書）
 埋調セ報告書（公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター）



第5図 周辺遺跡位置図

第3表 一般国道220号 古江バイパス (25工区) の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	古里B	鹿屋市古里町 台地縁辺部 標高約130m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
2	古里A	鹿屋市古里町 台地縁辺部 標高約130m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
3	石鉢谷B	鹿屋市古里町 台地縁辺部 標高約130m	2021.10.01～ 2022.01.27	令和4年度 刊行	縄文時代晩期	—	黒川式(干河原段階)、打製石斧、磨石、石皿
					弥生時代	—	高橋Ⅱ式、磨製石鏃
					古墳時代	—	東原式、笹貫式
					古代以降	—	土師器、黒色土器壺、須恵器甕、薩摩焼、染付、焙烙
4	石鉢谷A	鹿屋市古里町 台地縁辺部 標高約130m	2018.11.01～ 2019.03.08 2019.11.01～ 2020.01.28	令和3年度 刊行	旧石器時代	—	剥片石器
					縄文時代早期	集石4	塞ノ神Aa式、打製石鏃、石匙、使用痕剥片、石核、磨製石斧、礫器、磨石、敲石、台石、石皿
					縄文時代晩期	—	黒川式(干河原段階)、打製石斧
					古墳時代	—	東原式、笹貫式
					古代以降	—	土師器、黒色土器壺、須恵器甕、薩摩焼、染付、焙烙
5	宇戸平	鹿屋市小野原町 台地縁辺部 標高約150m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
6	山ノ上B	鹿屋市小野原町 台地縁辺部 標高約165m	2015.11・2016.01	令和3年度 刊行	旧石器時代	礫群1	叩石、石英石核
					縄文時代早期	集石28、集積遺構2、硬化面1条	加栗山式、石坂式、桑ノ丸式、下剥峯式、右京西式、打製石鏃、石核、磨製石斧、打製石斧、磨石、敲石、石皿、凹石、台石
					縄文時代晩期	—	黒川式
					古墳時代	竪穴建物跡3、土坑3	東原式、笹貫式
					近代	—	機銃弾
7	山ノ上A	鹿屋市小野原町 台地縁辺部 標高約150m	2022.05.16～ 2023.02.24	令和5年度 刊行 本報告書	縄文時代早期	—	打製石鏃
					縄文時代晩期	—	黒川式(干河原段階)、組織痕土器
					古墳時代	—	東原式、笹貫式
8	白水B	鹿屋市白水町 台地縁辺部 標高約150m	1993.07.05～ 1994.03.29 1994.04.25～ 07.01	平成26年度 平成27年度 (1)刊行	旧石器時代	礫群1、土坑1	剥片尖頭器、ナイフ形石器、細石器、石核
					縄文時代早期	集石3、土坑1	下剥峯式、打製石鏃、磨製石斧、磨石、水晶石核
			2014.05.08～ 2015.02.25 2022.05.16～ 2023.02.24	令和5年度 (2)一部刊行 本報告書	縄文時代後期	—	市来式、北久根山式
					縄文時代晩期	—	櫃原紋様土器、黒川式、刻目突帯文土器、組織痕土器、打製石鏃、磨製石斧
					古墳時代以降	土坑10、柱穴跡196基、帯状硬化面2条、古道	東原式、笹貫式、土師器、黒色土器壺、須恵器、陶磁器、薩摩焼
9	萩ヶ峰	鹿屋市白水町 台地縁辺部 標高約140m	2015.05.07～ 2016.02.25 2016.05.09～ 2017.09.28 2022.05.16～ 2023.02.24	令和5年度 刊行 本報告書	縄文時代早期	集石3基、土坑1基	押型文土器
					縄文時代前期末～中期後半	—	深浦式
					縄文時代晩期	土器集中1基	黒川式(干河原段階)、組織痕土器 仲原式
					古墳時代	竪穴建物跡4基、土坑2基、土器集中1基、帯状硬化面4条	東原式、笹貫式、須恵器
					近世以降	—	染付(肥前系) 薩摩焼(龍門司系・苗代川系)
10	白水A	鹿屋市白水町 台地縁辺部 標高約125m	2016.05～07	令和3年度 刊行	縄文時代晩期	土坑1	黒川式
					古墳時代	—	東原式



第6図 国道220号古江バイパス関連遺跡位置図

第三章 調査の方法と層序

本章では発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

第1節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 萩ヶ峰遺跡

平成5年7月～平成6年3月にかけて県文化財課が実施した試掘調査の結果を受け、平成26年5月8日～平成27年2月25日、平成27年5月7日～平成28年2月25日、平成28年5月9日～平成28年9月28日、令和4年5月11日～令和5年2月22日の4次にわたって本調査を実施した。

平成5年度の試掘調査は、白水A遺跡より開始し、白水A遺跡・萩ヶ峰遺跡・白水B遺跡へと逐次実施した。工事図面の道路センターライン「STANo14 (X=-178990.544, Y=-18945.286)」および「STANo15 (X=-178995.598, Y=-18954.379)」を結んだ直線を東西軸とし、これに直交する軸を南北軸とした。この軸を基準にして20m間隔で東から西へ1, 2, 3・・・, 南から北へA, B, C・・・と調査区割り(グリッド)を設定し、地形に応じて1～25トレンチを設定し確認調査を行った。その結果、VI層以上に縄文時代早期、晩期、古墳時代の包含層が広範囲に存在することを確認した。

平成26年度の調査は、平成5年度と同じ調査区割りにより行った。

平成27・28年度および令和4年度の調査は、「STANo14」と「STANo15」を結んだ直線を東西軸としこれに直交する軸を南北軸とし、この軸を基準にして10m間隔に遺跡の西から東へ1, 2, 3・・・, 南から北へA, B, C・・・と調査区割りを設定した。令和4年度の整理作業において、グリッドの大きさや表記の違いについては平成27年以降設定した調査区割りに統一することとし、図面・遺物の注記等の修正作業を行った。

発掘調査は、基本的に重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層、火山灰の一次堆積層は、一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構は、移植ごて等の遺構掘削に適した道具を用いて慎重に調査し、実測、写真撮影等を行い、遺物はトータルステーションを使用して取り上げを行った。

なお、萩ヶ峰遺跡について、第2節以降のグリッド名は平成27年度設定の区割りに統一して報告する。

(2) 白水B遺跡

令和4年度の調査は、萩ヶ峰遺跡と同様に「STANo14」と「STANo15」を結んだ直線を東西軸とし、これらに直

交する軸を南北軸として西から東へア, イ, ウ・・・, 南から北へA, B, C・・・と設定した。萩ヶ峰遺跡から連続した区割りとなる。

(3) 山ノ上A遺跡

令和4年度の調査は、公共座標「STANo34」と「STANo35」を結んだ直線を東西軸とし、これらに直交する軸を南北軸とした。この軸を基準にして、10m間隔に遺跡の西から東へ1, 2, 3・・・, 南から北へA, B, C・・・と調査区割り(グリッド)を設定し行った。

第2節 層序

萩ヶ峰・白水B・山ノ上A遺跡の層序については、鹿屋体育大学周辺の笠野原台地縁辺部にみられる層序と基本的には同様である。第7図に基本層序と各層の特徴を示す。遺跡ごとの特徴については以下のとおりである。

(1) 萩ヶ峰遺跡

遺跡のほぼ中央に位置するA～E-15・16区あたりと、西側のD・E-6～8区に浅い谷が入り、遺跡の北西(G・F-8～12区)・南西(B～D-3～6区)・南東(15～29区)部分は急な勾配で下る起伏の激しい地形で平坦部分は少ない。

中央の小さな谷を挟み、遺跡の西側は平成26年に調査を行った3～12区において古墳時代の包含層であるⅢ層の攪乱が大きく、表土から土器片が多数確認される状況であった。B～D-3～6区の急斜面の南側は大隅降下軽石まで削平を受けていた。D・E-6～8区は浅い谷状の窪地で、縄文時代晩期の遺物が集中して出土した。また、平成28年度調査区の北側は後世の耕作等による攪乱を受けていたが、南側には縄文時代早期の包含層であるV・VI層が良好に残存した。

遺跡の東側は広い範囲で、後世の耕作や造成のため削平を受けている状況でIV層以上の残存状況は悪い。Ⅱ層黒色土は台地の縁辺部にわずかに残る。Ⅲ層はC-11～14区に残る。C～E-16～22区はやや小高い平坦地で、包含層が良好に残存し、Ⅲ層から古墳時代の堅穴建物跡などの遺構・遺物が検出された。D～F-26～30区は後世の削平のため、Ⅱ～Ⅲ層が残存していなかった。

(2) 白水B遺跡

調査区全体が耕作や造成によって削平を受けており、遺物包含層であるⅡ・Ⅲ層はB-A区にわずかに残存している状況であった。

(3) 山ノ上A遺跡

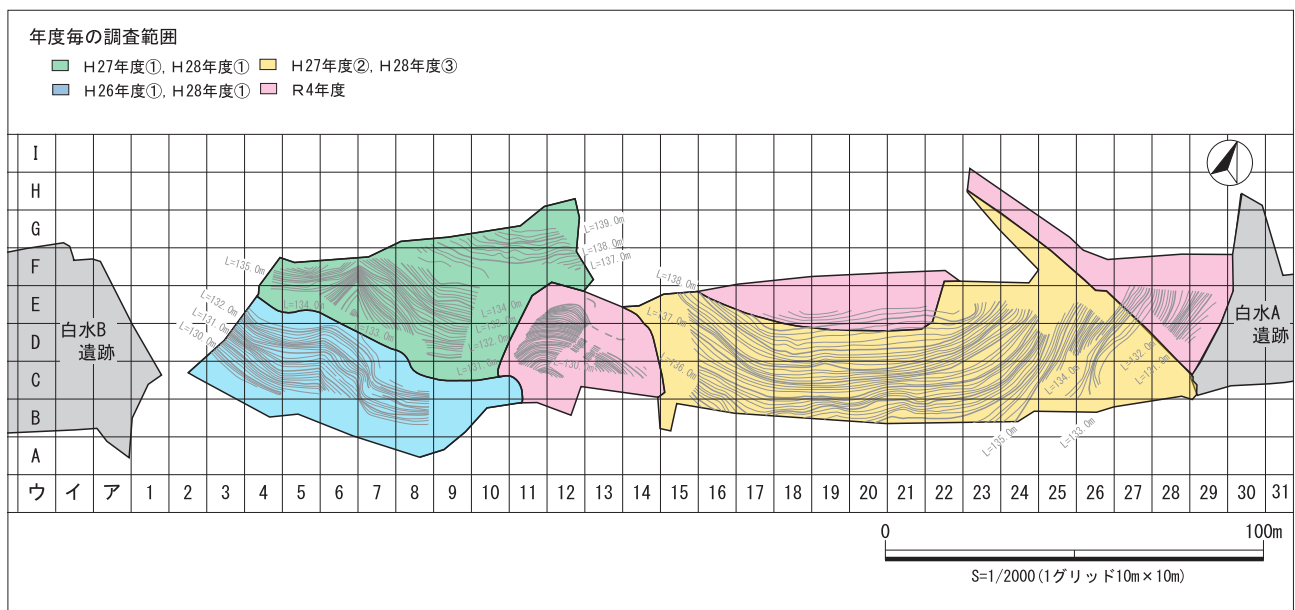
調査区全体が耕作や造成によって削平を受けており、遺物包含層であるⅡ・Ⅲ層はB・C-2・3区にわずかに残る状況であった。調査区中央トレンチのIV層最下にはアカホヤ火山灰の一次堆積層が確認された。

層位	色調等	特徴等	時代
I層	表土 (盛土・耕作土)	青白色を帯びた大正火山灰がレンズ状に入る。	
II層	黒色土	砂質で粘性が弱くしまりが弱い。	古代 古墳時代
IIIa層	暗黄褐色土 (黒色土混じり)	砂質で粘性が弱くしまりが弱い。	古墳時代
IIIb層	暗黄褐色土	しまりは弱く粘性はない。 下部に1mm～5mm大のオレンジパミス (池田降下軽石) が点在している。	古墳時代 縄文時代晩期 縄文時代前期
IV層	黄褐色土	砂質でしまりが弱く柔らかい。 アカホヤ火山灰二次堆積。 地点によっては下層にオレンジパミス (アカホヤ火山灰一次堆積) がブロック状に混じる。	約7,300年前
V層	乳白色土	軟質で粘性がある。 しまりが弱く粒子が細かい。	縄文時代早期 (薩摩火山灰: 約12,500年前)
VI層	黒褐色土	砂質土。粘性は弱いとしまりが強く硬い。 特に下層において1mm～2mm大の薩摩 火山灰パミス (P14) が点在する。	
VIIa層	暗褐色粘質土	粘性・しまりともに強く非常に硬質である。	旧石器時代 (細石刃文化期)
VIIb層	暗黄褐色土	粘性が弱い	
VIIc層	暗褐色土	粘性が弱い	
VIIIa層	黄褐色土	やや粘質でしまりが強く硬質である。 桜島火山灰P17を含む。	旧石器時代 (ナイフ形石文化期)
VIIIb層	黒褐色土	桜島火山灰P17を含む。	
VIIIc層	暗褐色土	シラス二次堆積	
IX層	黄褐色土	砂質土。しまりが弱く、崩れやすい。 シラス二次堆積	
X層	明黄褐色土	砂質でしまりが弱く崩れやすい。1mm ～5mm大のオレンジパミスが多く混じる。 暗黄褐色土で砂粒と軽石で構成され、 大隅降下軽石に比定される。	

第7図 基本層序

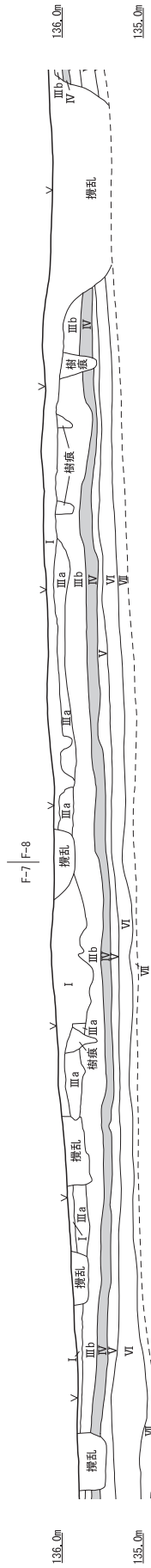
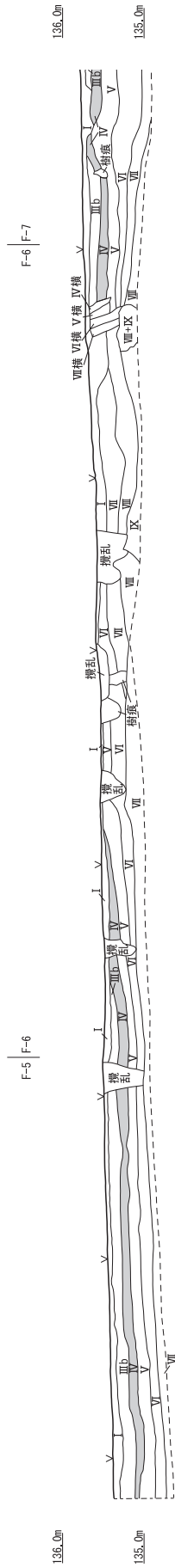


萩ヶ峰遺跡 横断土層断面II～X層(南から)

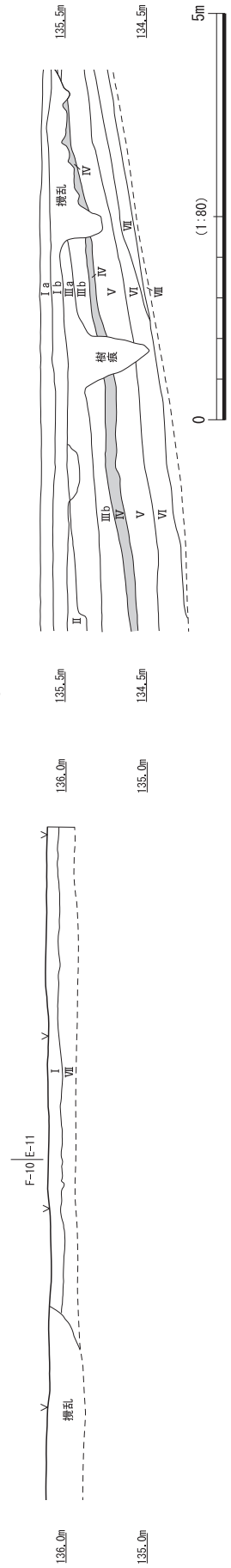


第8図 萩ヶ峰遺跡 地形図

①



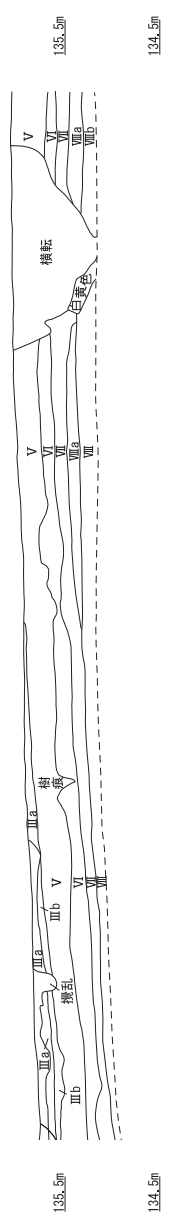
②



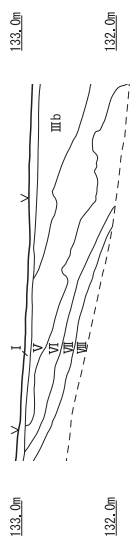
第9図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図(1)

②

E-8 | E-9



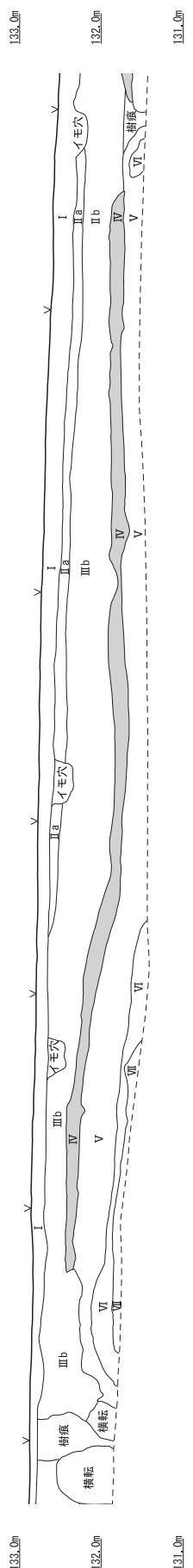
③-1



D-4 | D-5

③-2

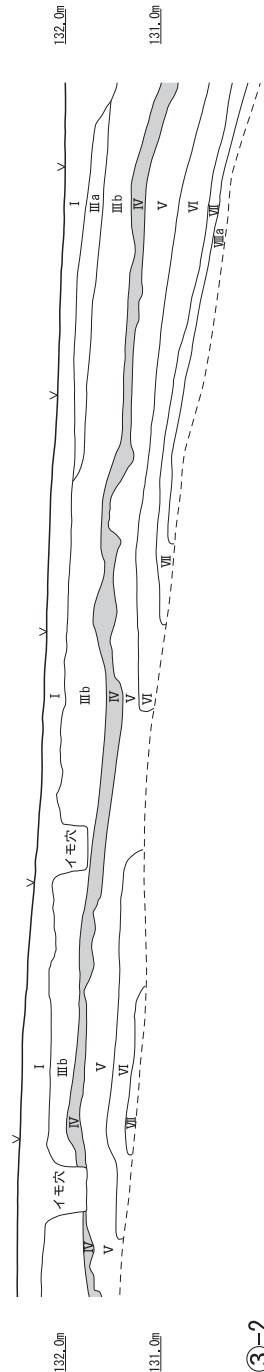
D-5 | D-6



D-6 | D-7

③-2

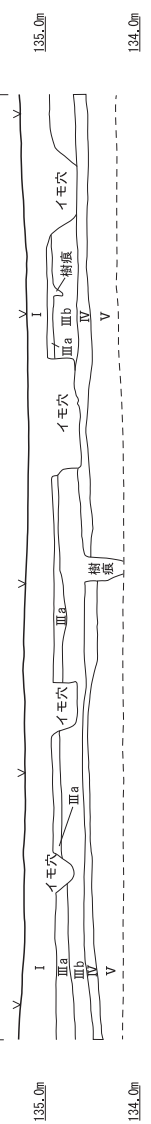
D-6 | D-7



③-2

D-8 | D-9

D-9 | D-10



第10図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図(2)

④

132.0m

C-3 | B-4

131.0m

B-4 | B-5

132.0m

131.0m

130.0m

130.0m



B-5 | B-6

B-6 | A-7

132.0m

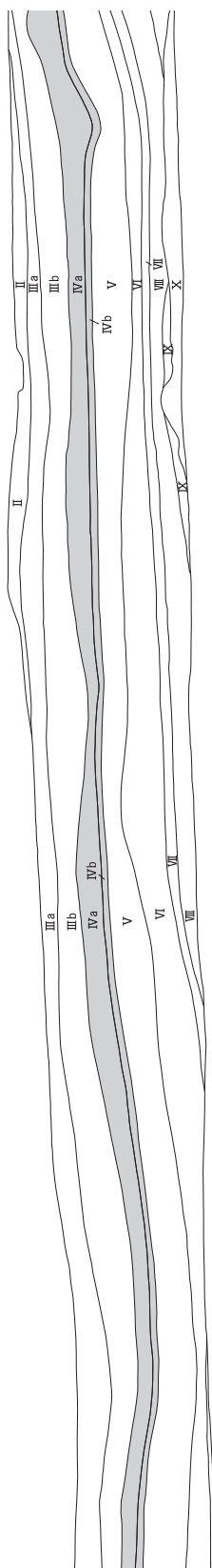
132.0m

131.0m

131.0m

130.0m

130.0m



A-7 | A-8

132.0m

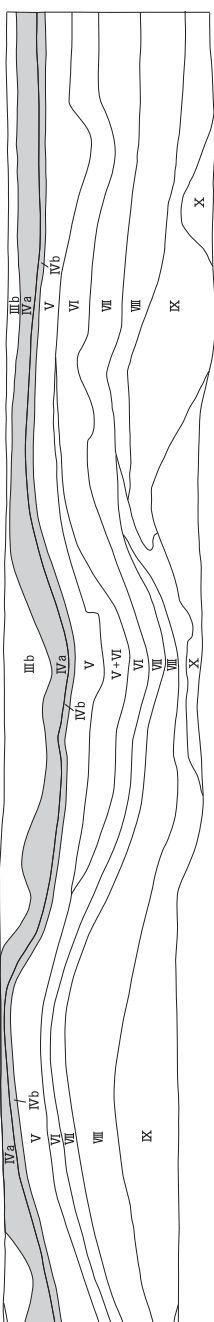
132.0m

131.0m

131.0m

130.0m

130.0m



⑤-1

E-15 | E-16

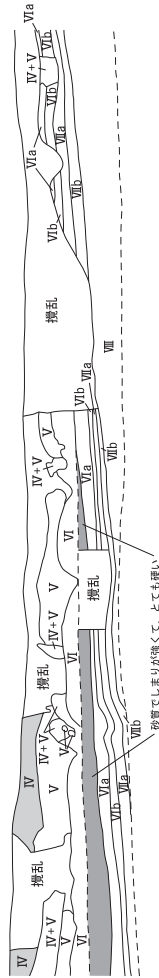
E-16 | D-16

138.0m

138.0m

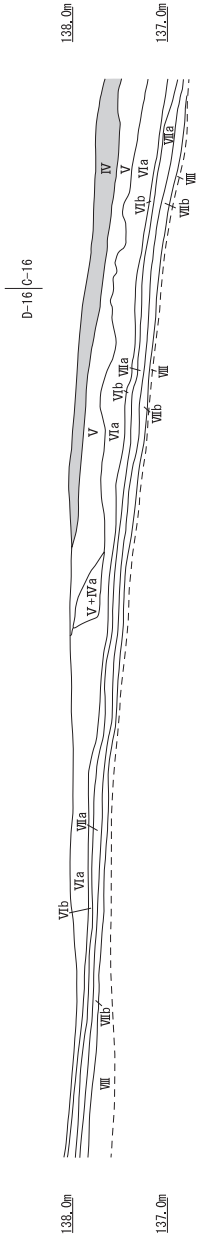
137.0m

137.0m

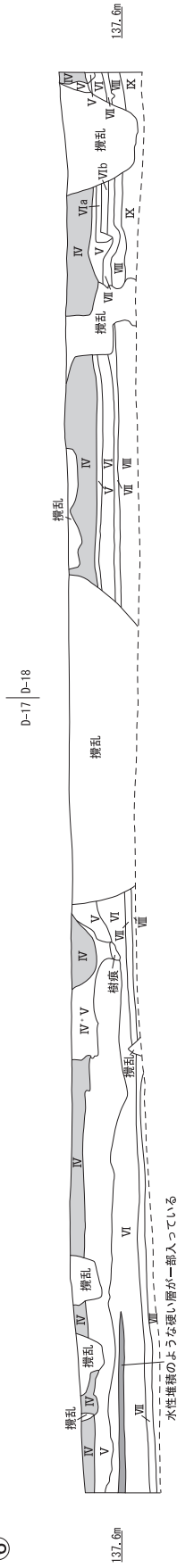


第11図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図(3)

⑤-2

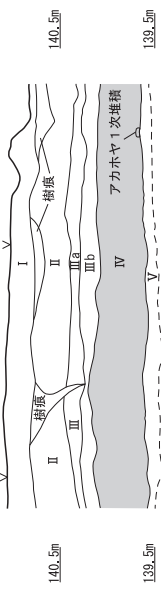


⑥

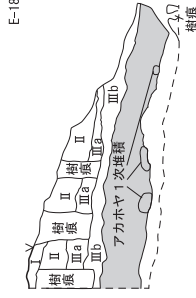


水性堆積のような硬い層が一部入っている

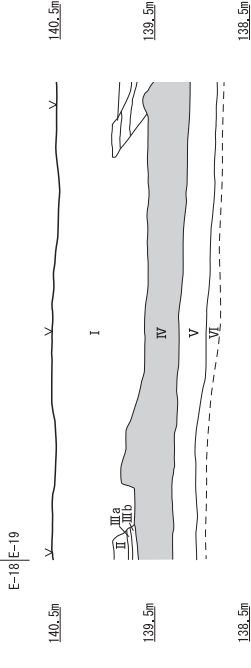
⑦-1



⑦-2



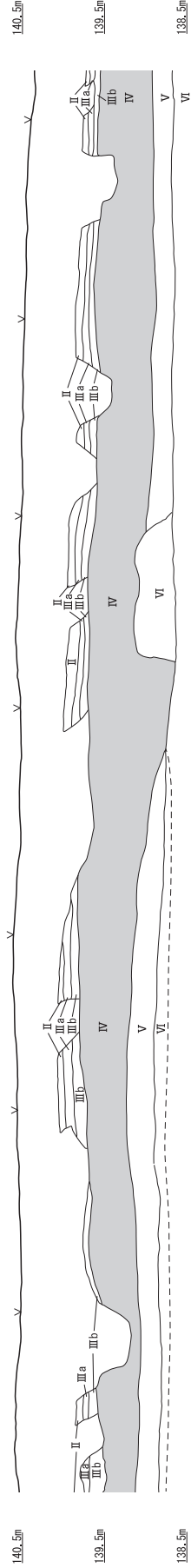
⑦-3



E-19 | E-20

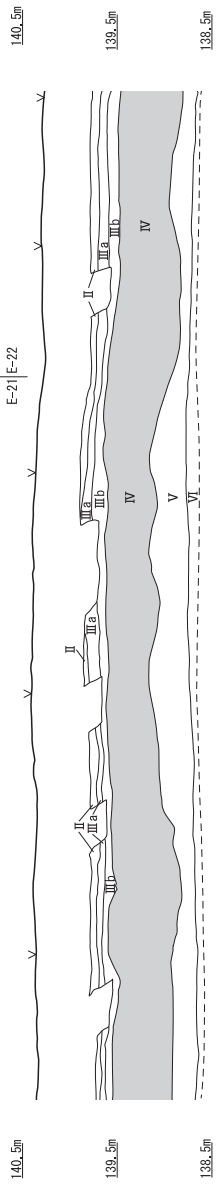


E-20 | E-21

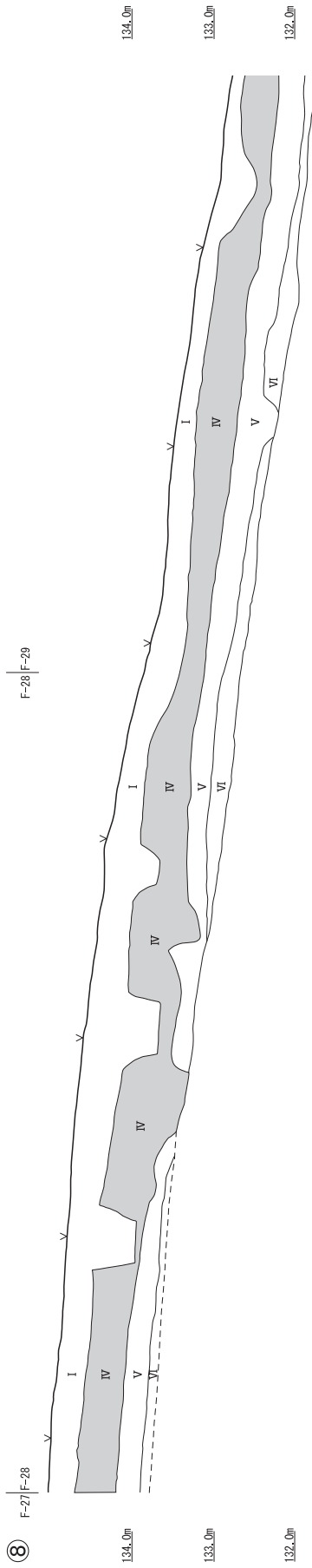


第12図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図(4)

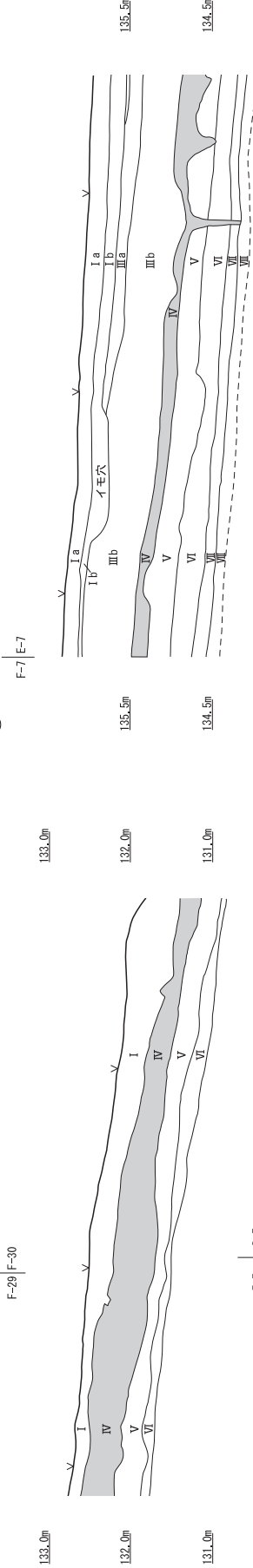
⑦-3



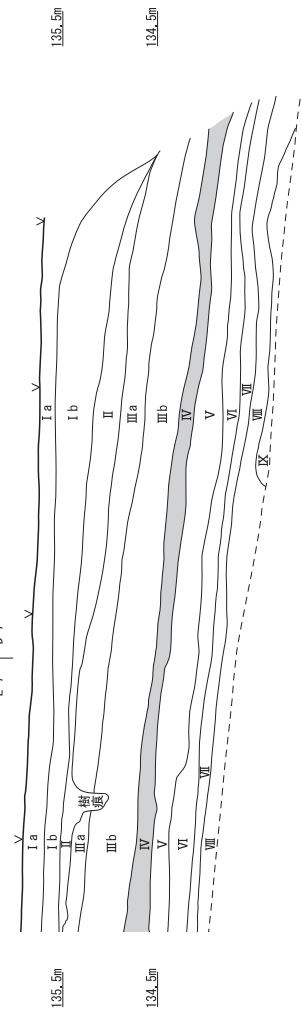
⑧



⑨



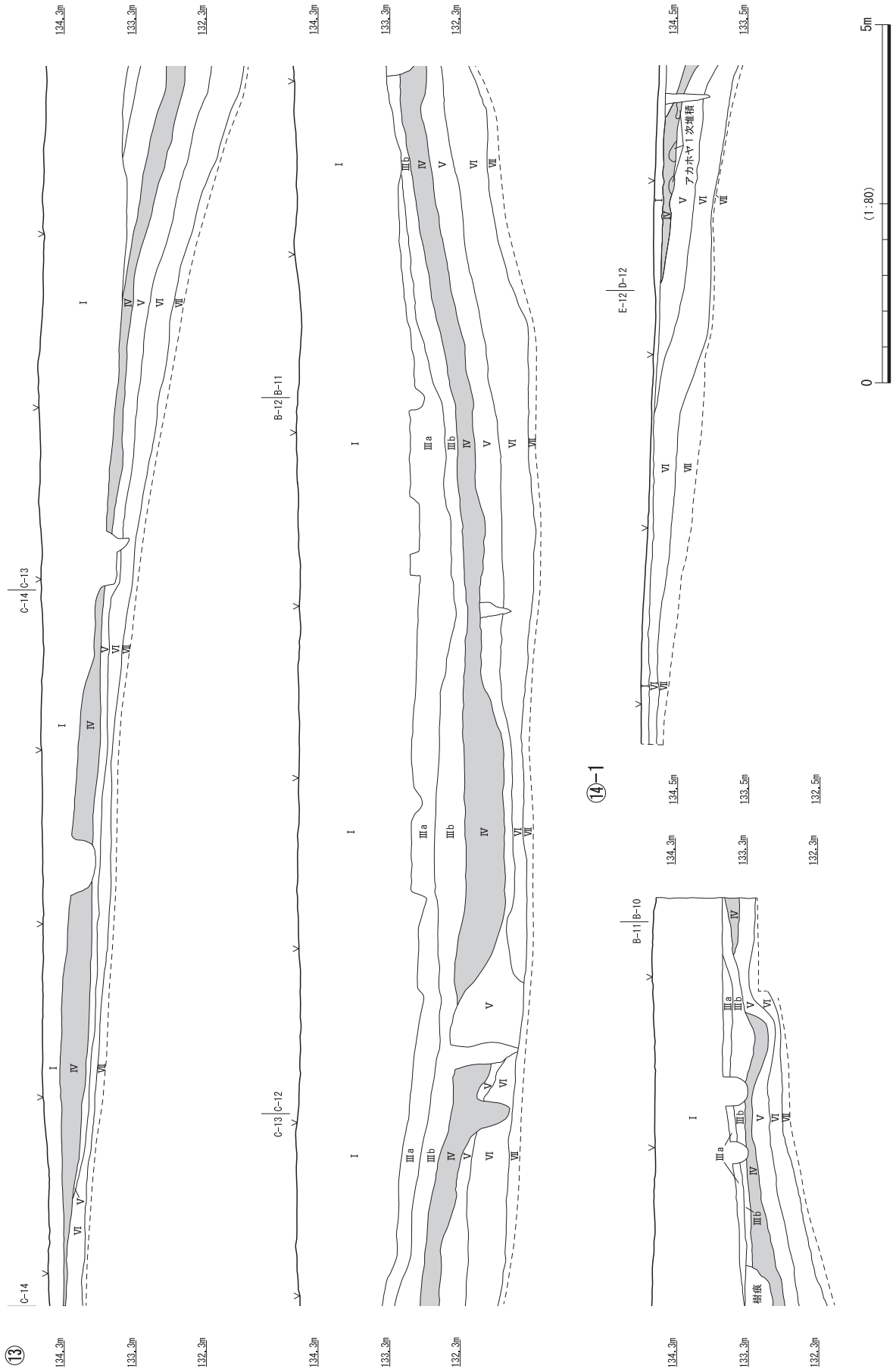
E-7 | D-7



第13図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図(5)

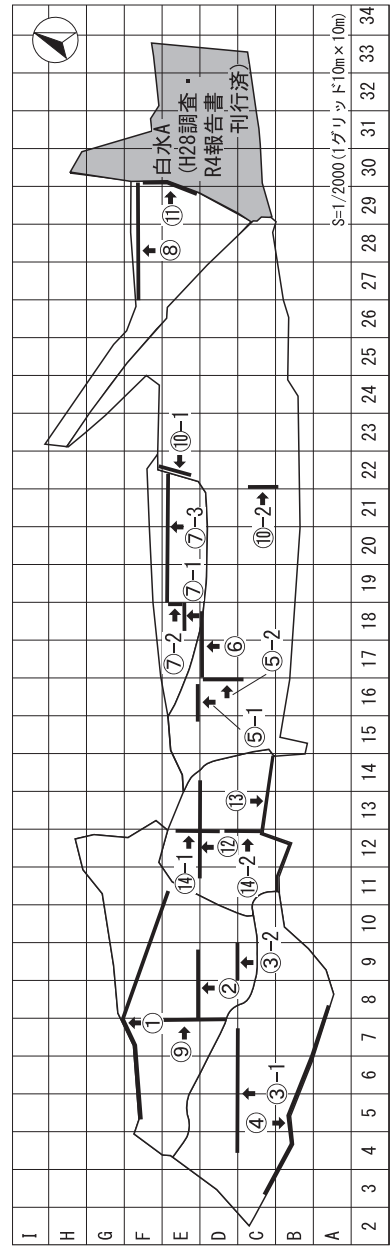
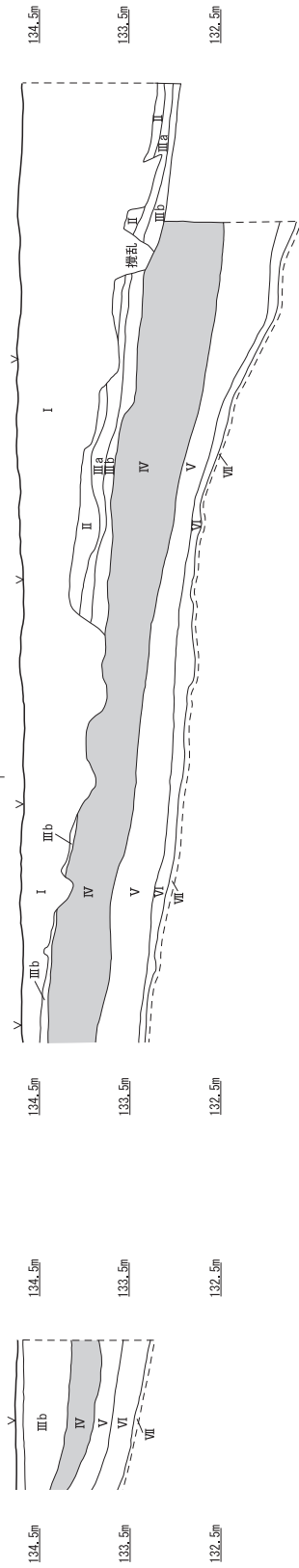


第14図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図(6)



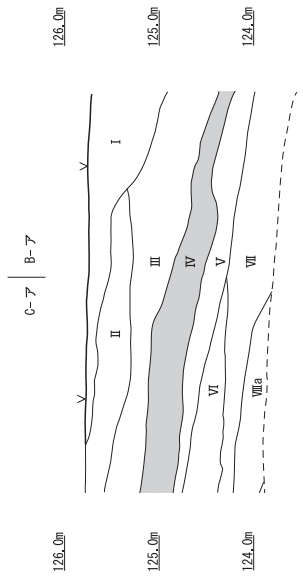
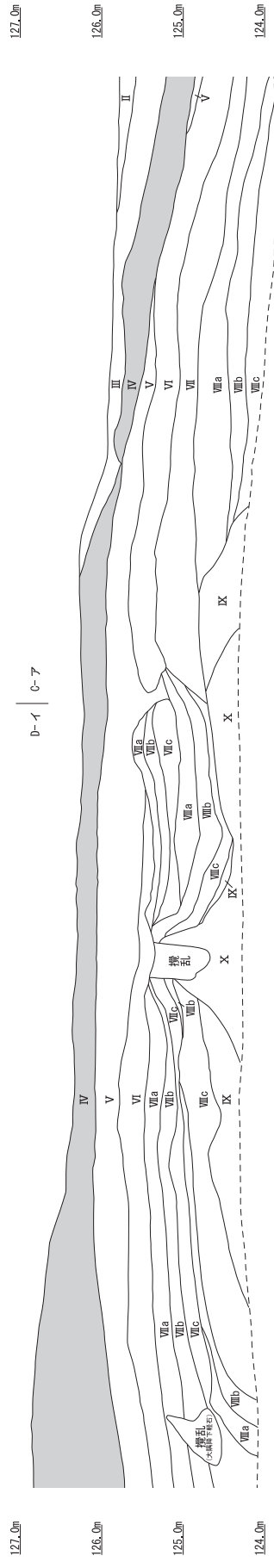
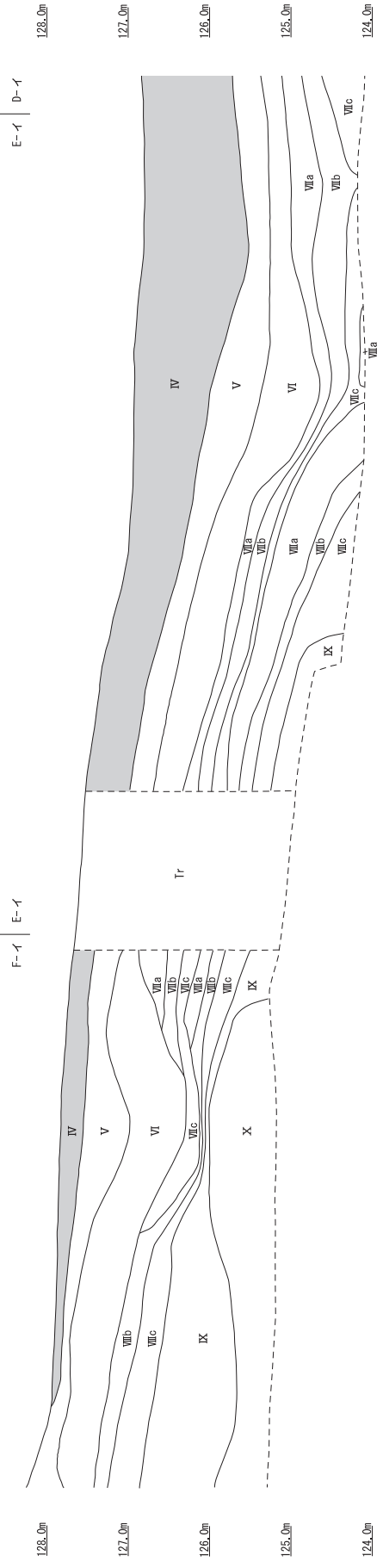
第15図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図(7)

⑭-2



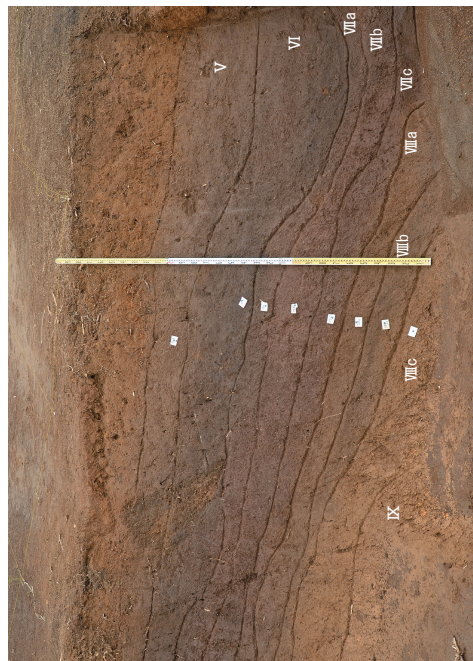
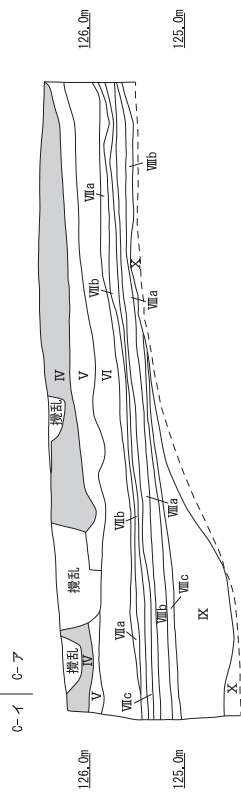
第16図 萩ヶ峰遺跡 土層断面図(8)

①白水B 南北壁

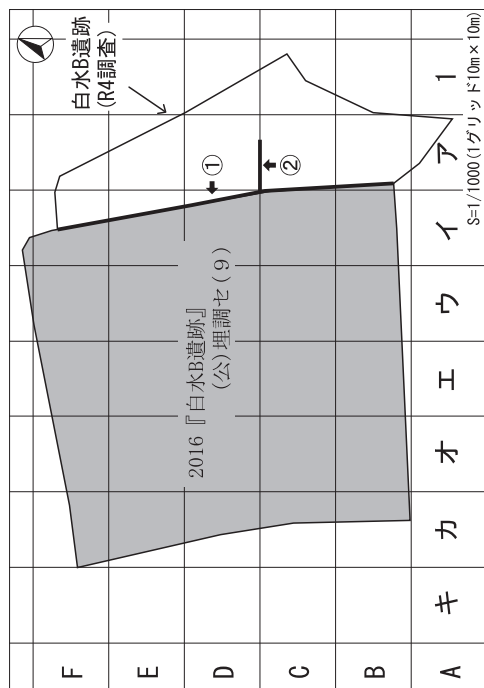


第17図 白水B遺跡 土層断面図(1)

②白水B 北壁



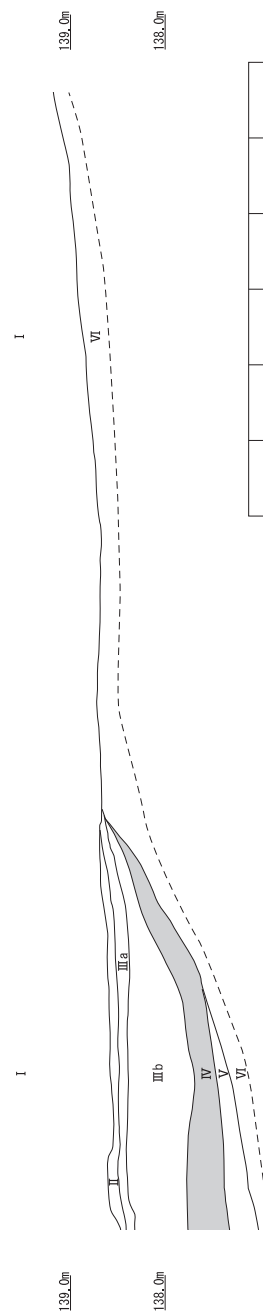
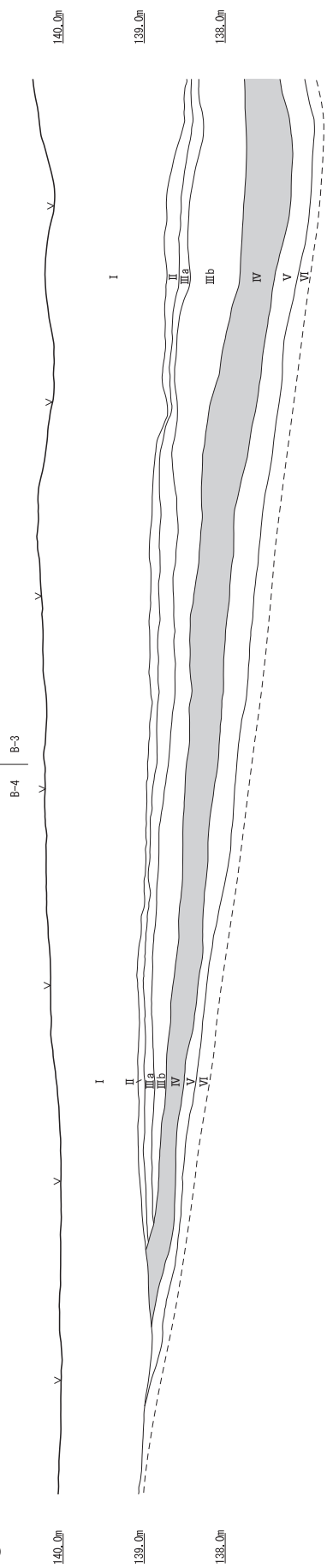
白水B遺跡 調査区西壁土層断面 I～IX層(北から南)



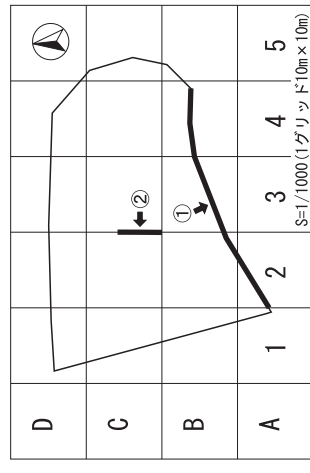
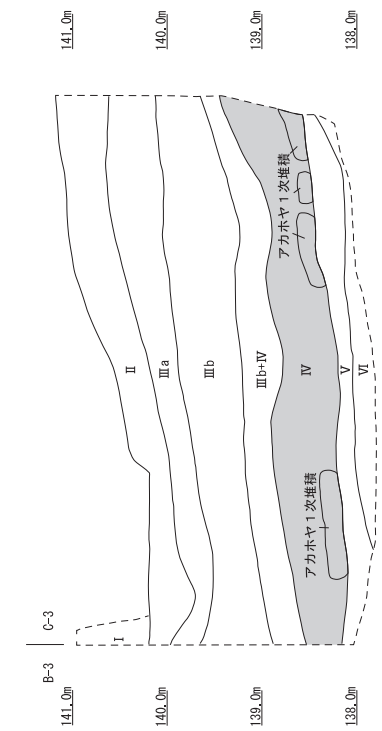
— : 当該土層実測箇所位置

第18図 白水B遺跡 土層断面図(2)

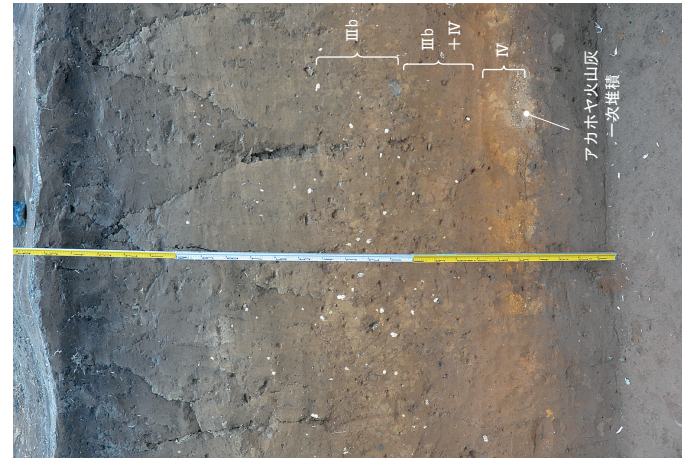
①山ノ上A 南壁



②山ノ上A 南北壁



--- : 当該土層実測箇所位置



山ノ上A遺跡 中央トレンチ I～Ⅳ層
(南東から)

第19図 山ノ上A遺跡 土層断面図

第IV章 萩ヶ峰遺跡の調査

第1節 調査の概要

萩ヶ峰遺跡は、平成5・26・27・28年度および令和4年度に調査を行った。調査区B～F-15～28区までを萩ヶ峰A遺跡、調査区A～F-2～10区、F・G-11・12区までを萩ヶ峰A遺跡拡張区、調査区B～E-11～14区を萩ヶ峰B遺跡と呼称し調査を進め、遺跡名称と範囲の整理を令和5年度に行った。調査年度別の調査区は第I章の第4図に示す。

本遺跡は、台地の縁辺部に位置しており、南側に緩やかに傾斜している。その傾斜地が後生に畑地へ開墾されているため、層位上部が削平されている部分が多く見られた。遺物包含層は、Ⅱ層・Ⅲa層・Ⅲb層・Ⅴ層・Ⅵ層である。

Ⅴ・Ⅵ層は縄文時代早期の遺物包含層である。縄文時代早期の遺構は、集石3基、土坑1基が検出された。縄文時代早期の遺物は押型文土器、打製石斧、磨石、敲石、凹石等が出土した。

Ⅲb層からは縄文時代前期～中期末の遺物包含層であり、深浦式土器が数点出土した。

Ⅱ層・Ⅲa層・Ⅲb層は縄文時代晩期と古墳時代の遺物包含層である。縄文時代晩期の遺構は土器集中1か所が検出され、遺物は黒川式土器、組織痕土器、南西諸島系土器、打製石鏃、打製石斧、磨石、敲石などが出土した。古墳時代の遺構は土器集中1か所、竪穴建物跡4基、土

坑2基、帯状硬化面5条が検出された。古墳時代の遺物は成川式土器（東原式～辻堂原式）、須恵器蓋、磨製石鏃、磨石、石皿、砥石、輪羽口が出土した。凶化には至らなかったが不明鉄製品も出土した。

また、Ⅱ層と表土からは染付や薩摩焼、葉莢などの近世以降の遺物も少数出土した。

以下は時代ごとに調査の成果を記述する。

第2節 縄文時代早期の調査成果

縄文時代早期の遺物包含層はⅤ・Ⅵ層である。層の残存状態は良好であったが、遺構・遺物ともに数は少ない。

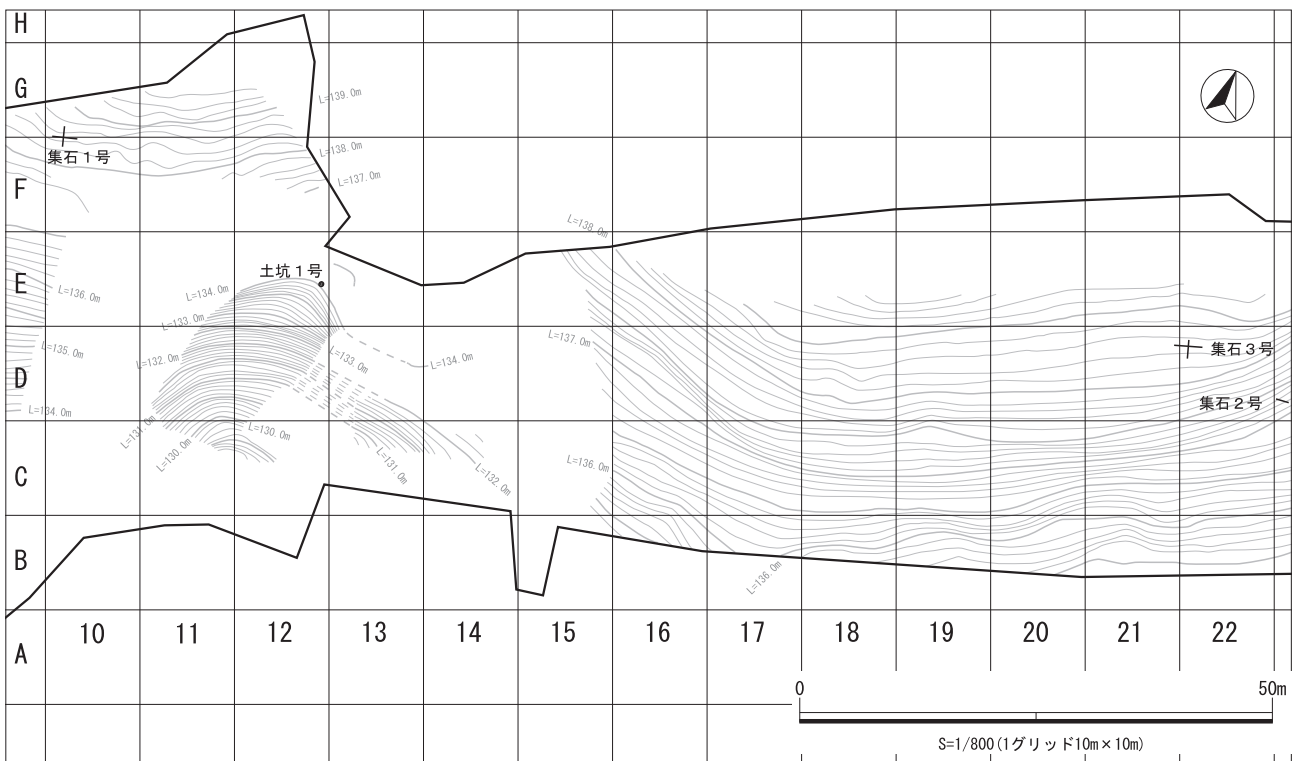
1 遺構

縄文時代早期の遺構は集石3基、土坑1基を検出した。遺構内からの遺物の出土はなかった。

(1) 土坑 (第21図)

土坑1号 (第21図)

E-12区のⅥ層で検出した。平面形は、約50cm×約50cmのほぼ正円形を呈している。深さは検出面から約15cmである。検出されたE-12区は周辺地形から1段下がった場所であり後世の削平を受けている。土坑1号の上部も削平を受けているため、本来の掘り込み面はさらに上部にあった可能性が高い。埋土はⅥ層由来の黒褐色土であり、薩摩火山灰（P14）が微量に混じる。



第20図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期遺構配置図

(2) 集石 (第21・22図)

集石 1号 (第21図)

F・G-10区のV層で検出した。約110cm×約90cmの範囲に54個の礫が広がり、構成礫の内訳は安山岩49個、凝灰岩5個で、直径5～10cm、重さ50～1500gのやや大きめの角が取れた川原石が主であった。中央から北側の礫は被熱により赤みがかかったものが多かった。掘り込みは確認できなかった。

集石 2号 (第22図)

D-23区のVI層で検出した。約100cm×約90cmの範囲に87個の礫が集中する。構成礫の内訳は安山岩86個、砂岩1個であり、角が取れた川原石が主であった直径5～15cm、重さ40～2000gと礫の大きさはまばらであった。被熱により割れた礫が多い。掘り込みを有しており、深さは検出面から約34cmでVII層まで到達していた。埋土はVI層由来の黒褐色土で、炭化物が多く混じっていた。

集石 3号 (第22図)

D-22区のVI層で検出した。約240cm×約180cmの範囲に39個の礫が広がり、構成礫の内訳は安山岩26個、凝灰岩12個、泥岩1個で、直径5～20cmとまばらであり、

不定形のものが多かった。被熱を受けた礫はなく、掘り込みも確認できなかった。

2 遺物

(1) 土器 (第24図 1～4)

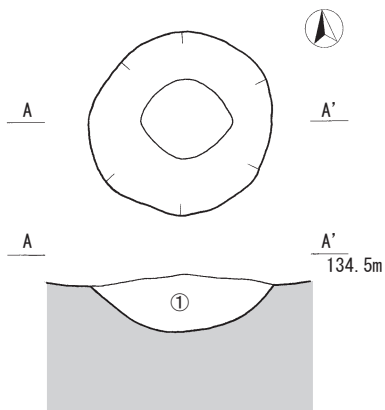
縄文時代早期の土器は、押型文土器が数個体出土した。1の山形押型文は、深鉢の器形を呈し口縁部でやや外反する。縦位に3種類の山形を施文している。口唇部にも施文するが、口縁部内面には施文しない。口径約32cmで、石英、長石や砂等が多く含まれる。底部は出土していないが、平底の押型文土器と考える。

楕円押型文は、小片が数点出土した。2は胴部で膨らみ、口縁部で外反する平底の土器と思われる。胎土は金雲母が入った砂質の土器である。3は底部から胴部にかけて摩耗している。平底を呈すると考える。4は胴部片である。外面に工具による直線的な文様が描かれる。小片のため天地左右は不明である。縄文時代前期の曾畑式土器の可能性もある。

(2) 石器 (第25図 5～11)

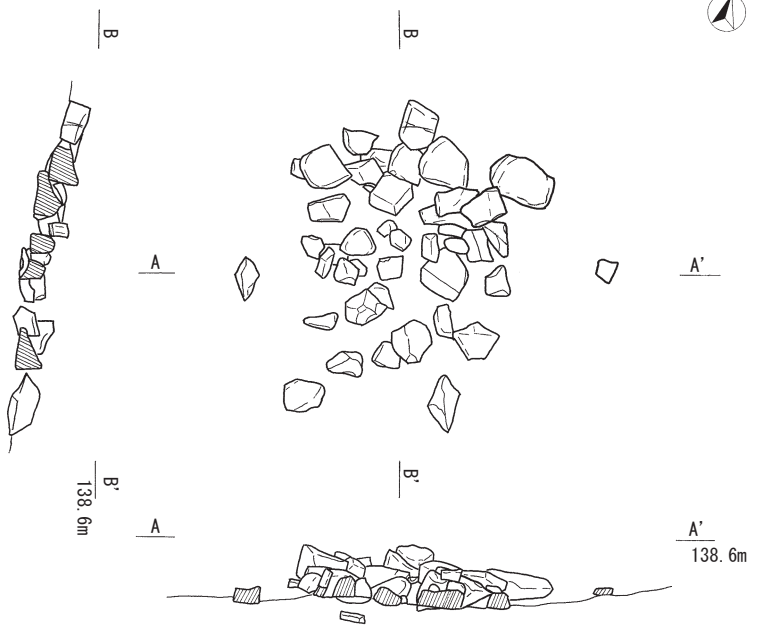
C～E-19～26区のV層で石鏃2点、石核1点、凹石2点、石皿2点が出土した。

SK 1



埋土
①黒褐色土(10YR3/2)に褐色土(7.5YR4/4)を20%含む
粘性ややあり・1～3mmのつぶあり

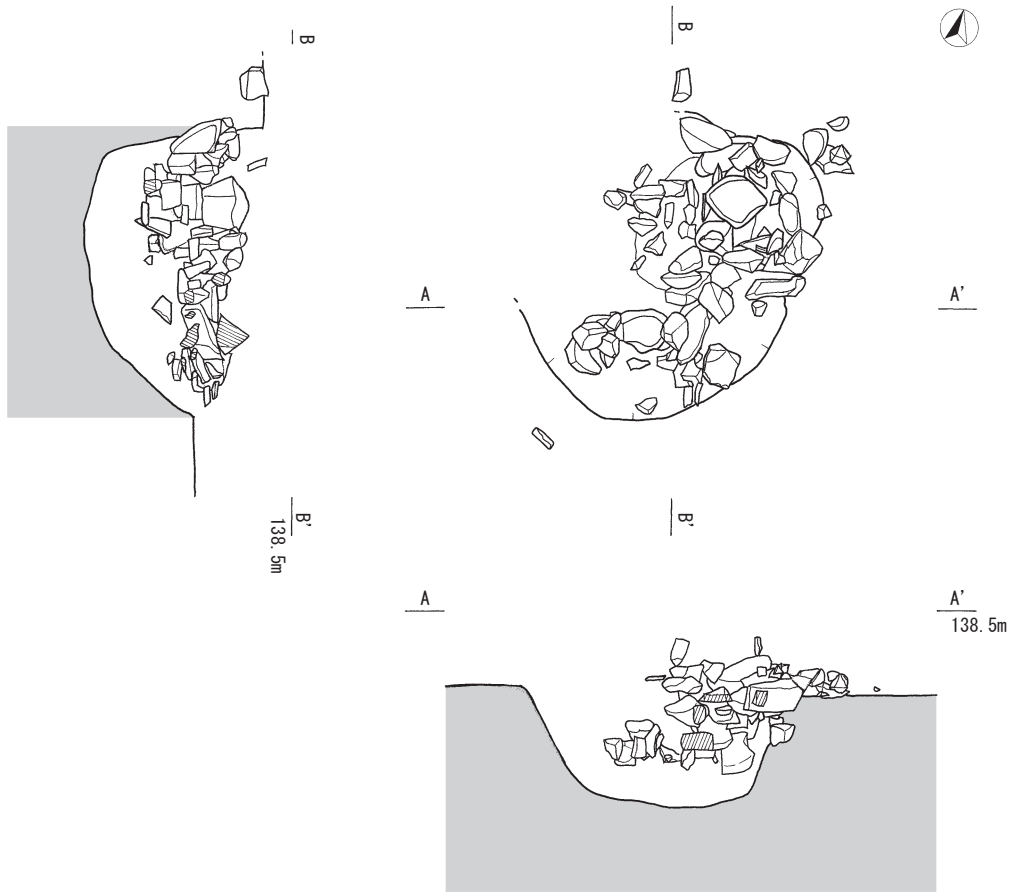
SS 1



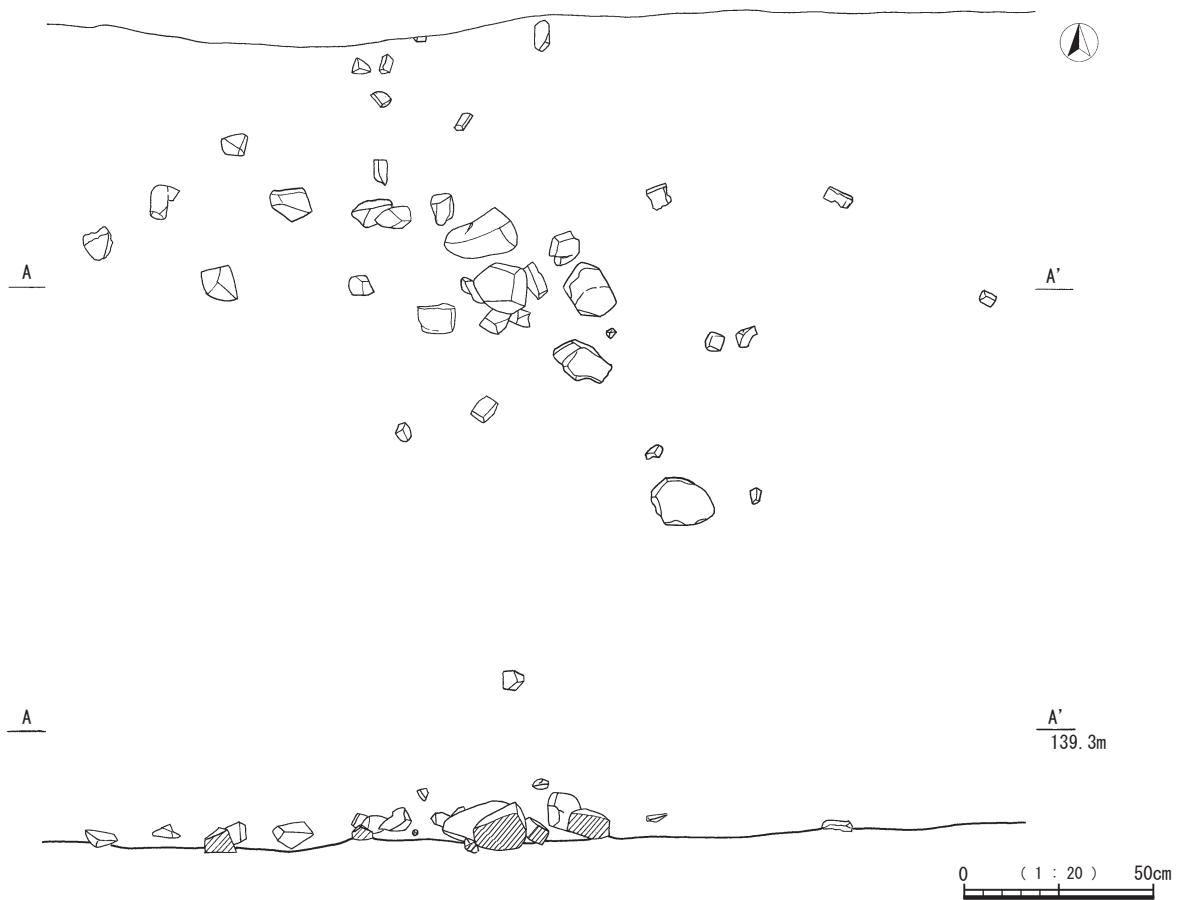
0 (1:20) 50cm

第21図 萩ヶ峰遺跡 土坑1号・集石1号

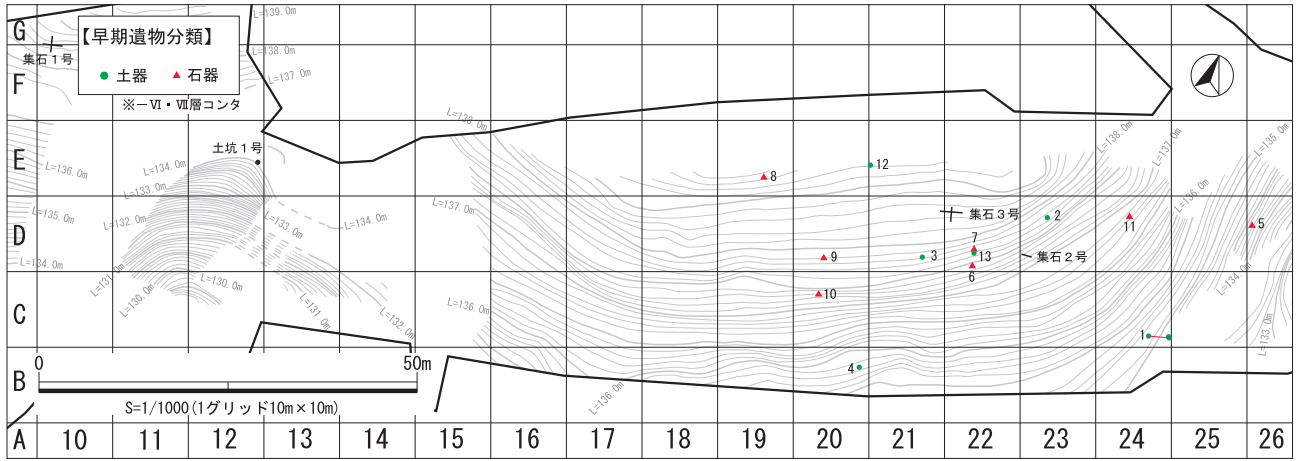
SS 2



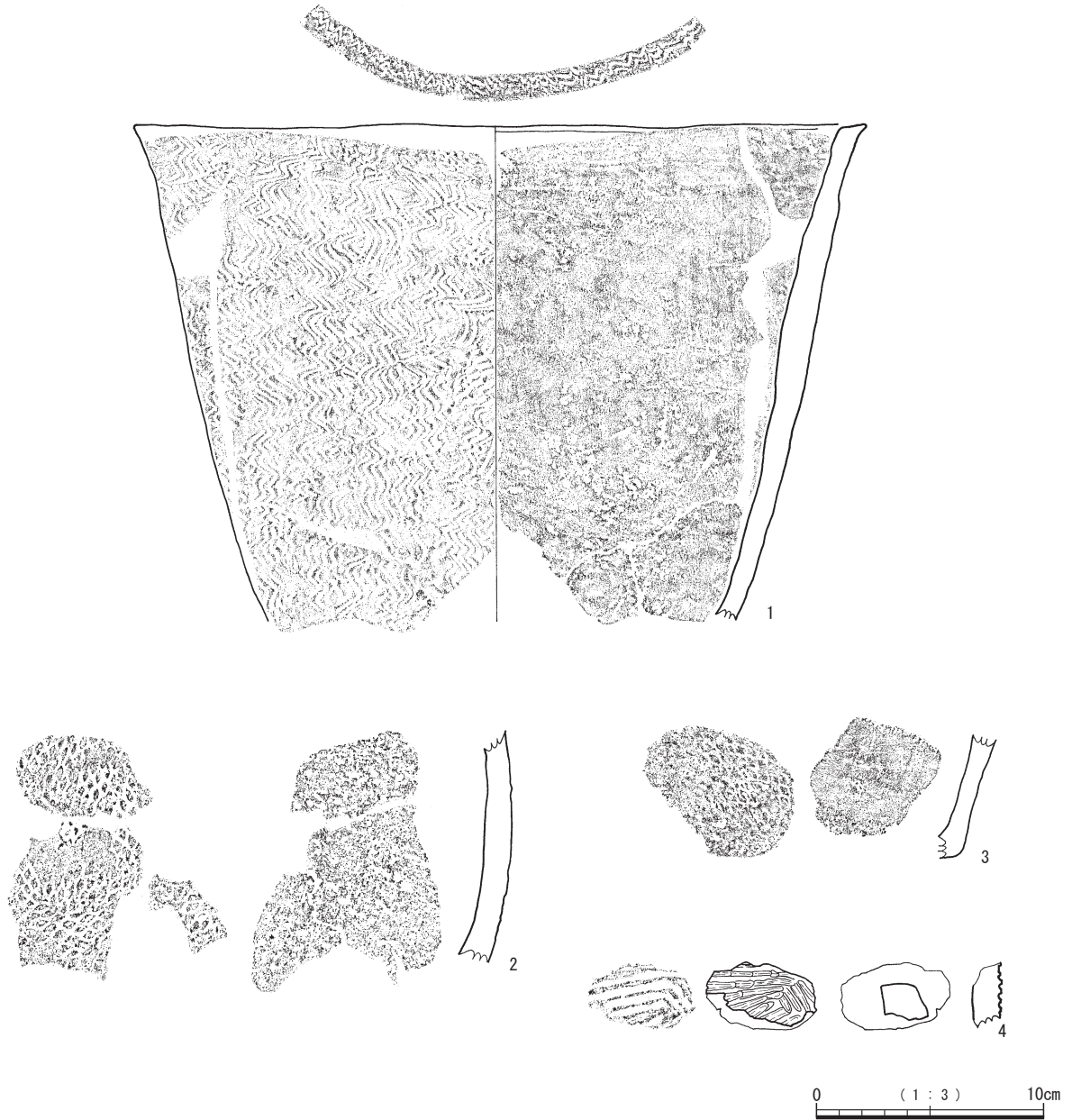
SS 3



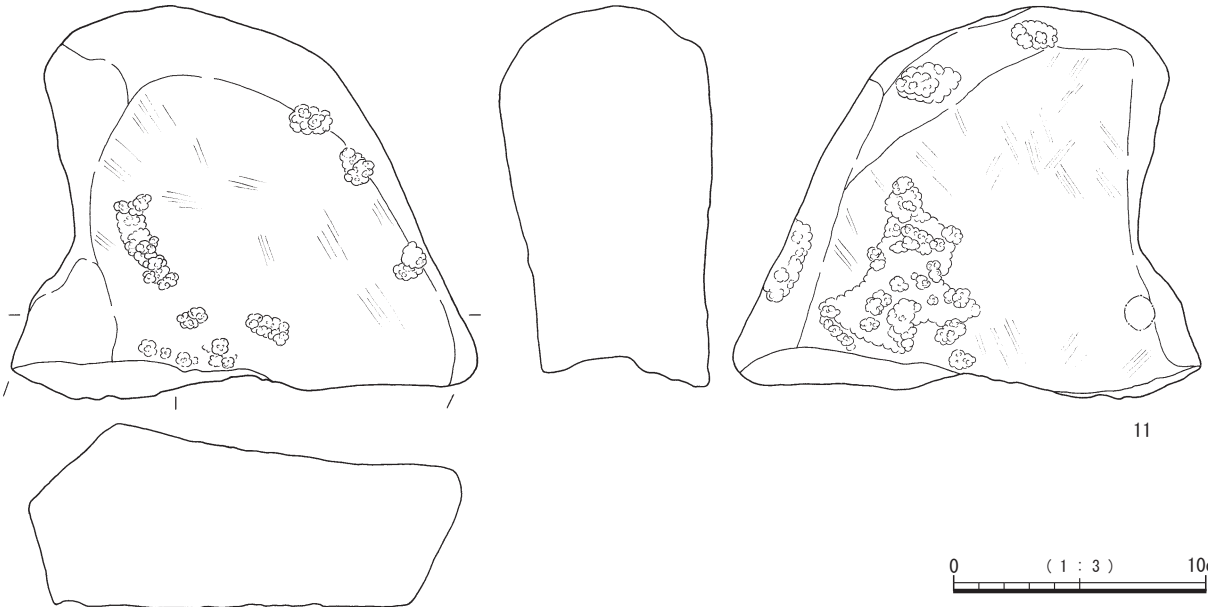
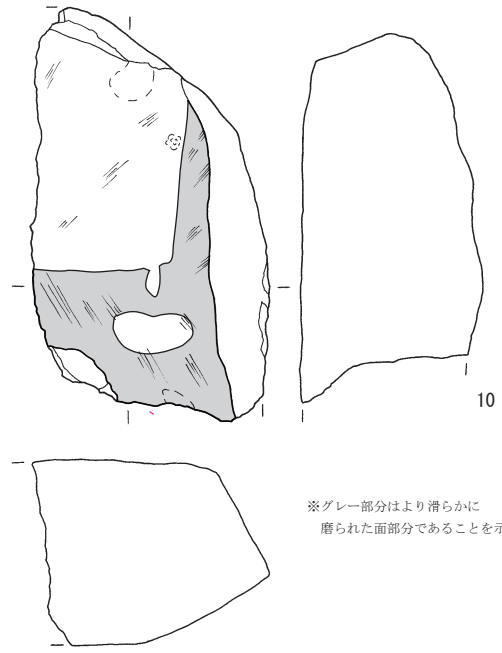
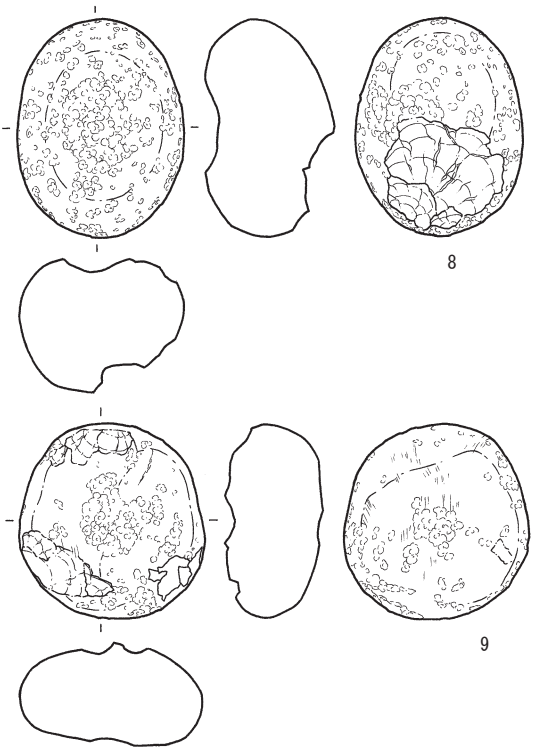
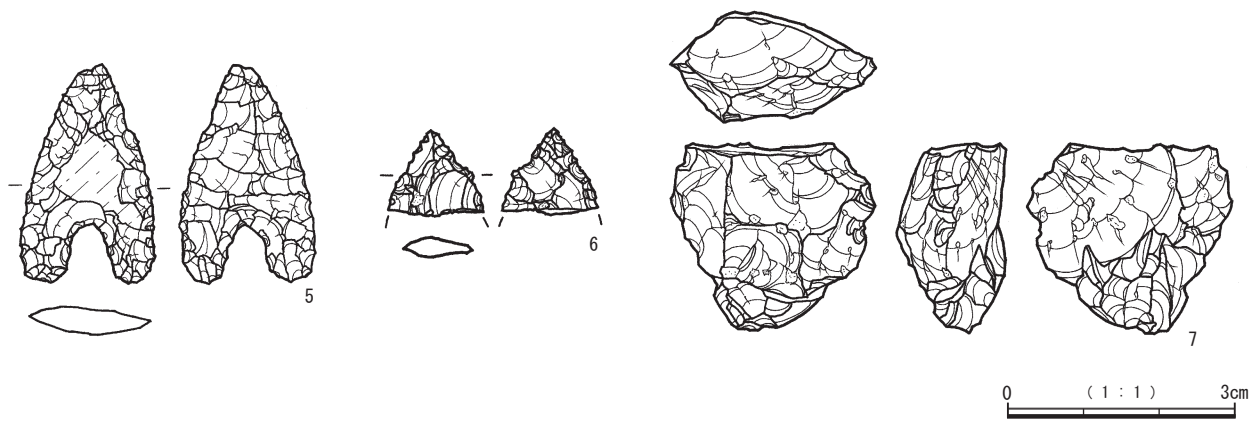
第22図 萩ヶ峰遺跡 集石2号・3号



第23図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期遺物出土分布図



第24図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期出土遺物



第25図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期出土石器



第26図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代前期～中期出土遺物

第4表 萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期・前期～中期土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層	文様・器面調整		色調		胎土				取上番号	備考
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		
24	1	深鉢	山形押型文	C-24	V	山形押型文	ケズリ ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	△	○		3561	他
	2	深鉢	楕円押型文	D-23	VI	楕円押型	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	△	○	金雲母	3608	他
	3	深鉢	楕円押型文	D-21	VI	楕円押型	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	△	○	小礫	902	
	4	深鉢	不明早期	B-20	V	沈線	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○		○	小礫	3905	
26	12	深鉢	深浦式	E-21	IIIb	貝殻連点文 貝殻刺突線文	ナデ	にぶい褐	にぶい橙	○	△	○		8205	年代測定試料
	13	深鉢	深浦式	D-22	IIIb	貝殻連点文	ナデ	橙	にぶい黄					37	

第5表 萩ヶ峰遺跡 縄文時代早期出土石器観察表

※ () は残存量

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	分類	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	石材	石材分類	取上番号	備考
25	5	D-26	V	打製石鏃	—	29.50	18.00	4.00	1.80	頁岩	—	3503	
	6	D-22	V	打製石鏃	—	(10.90)	(12.10)	(2.20)	(0.25)	黒曜石	三船	898	一部欠損
	7	D-22	V	石核	—	24.30	26.80	14.20	7.96	黒曜石	三船	867	
	8	E-19	V	凹石	—	85.60	65.20	52.00	324.53	安山岩	—	8363	
	9	D-20	V	凹石	—	76.30	72.30	40.00	305.94	ホルンフェルス	C	515	
	10	C-20	V	石皿	—	(165.00)	(94.00)	(73.00)	(1500.00)	安山岩	—	4304	一部欠損、正面のみに擦痕
	11	D-24	V	石皿	—	(155.00)	(179.00)	(83.00)	(3300.00)	安山岩	—	3510	一部欠損、正・裏面に擦痕、敲打痕

打製石鏃 (第25図 5・6)

5は、頁岩を素材とし、正面・裏面ともによく加工されている。節理面を残している。二等辺三角形の形状をしている。基部は深い凹基で端部を丸みをもたせて作出している。6は、三船産の黒曜石を素材としている。下部を欠損しており全体の形状は不明である。

石核 (第25図 7)

7は、三船産の黒曜石を素材としている。不純物が多い。上面・正面ともに五角形状を呈する。

凹石 (第25図 8・9)

8・9の2点が出土した。いずれも完形である。8は、安山岩を素材としている。やや楕円形状を呈し正面・裏面ともに中央でよく敲打している。特に正面の敲打が顕著である。裏面下部は敲打時に割れている。9は、ホルンフェルスCを素材としている。円形状を呈し正面・裏面ともに中央でよく敲打している。特に正面の敲打が顕著である。

石皿 (第25図 10・11)

10・11の2点が出土した。いずれも破損品である。ともに安山岩を素材とし扁平な自然礫利用の不定型なものであると推測する。10は、正面のみに擦痕がある。裏面と側面は、自然面であり凹凸が残っている。11は、正面・裏面ともに擦痕があり、少量の敲打痕が見られる。側面は利用していない。

第3節 縄文時代前～中期の調査成果

縄文時代前～中期の遺物包含層はIIIb層である。遺構は検出されず、遺物の出土も少ない。

土器 (第26図 12・13)

12・13は深浦式土器の胴部片である。外面に貝殻連点文が残る。12の内面についた煤を年代測定した結果は、暦年較正 2σ : 3329-3221calBC (31.01%), 3185-3154calBC (5.52%), 3118-3009calBC (53.09%), 2986-2932calBC (5.82%) である。

第4節 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期の基本的な遺物包含層はⅢa・Ⅲb層である。Ⅳ層（アカホヤ火山灰層）以上が削平を受けている箇所が多いが、比較的遺物包含層の残存状態の良かったA～F-5～9区の谷部からまとまって縄文時代晩期の遺物が出土した。（第29～31図）

1 遺構

縄文時代晩期の遺構としては、土器集中1か所を検出した。

土器集中1（第28図 14）

北から南にかけてゆるやかな斜面となるB-20区のⅢb層で検出した。南半分は攪乱により削平を受けているが、約45cm×約45cmの正円形の掘り込みを有していたと考えられる。深さは約22cmであり、埋土はⅢa層由来の暗褐色砂質土の単一層である。14は粗製深鉢の胴部から底部である。内外面ともに条痕による調整を施す。

2 遺物

（1）土器（第32～55図 15～207）

縄文時代晩期の土器はⅢa・Ⅲb層からの出土がほとんどであった。土器は器種で分類し、Ⅰ類が深鉢土器、Ⅱ類がⅠ類とⅢ類の中間のもの、Ⅲ類が中華鍋形土器、Ⅳ類が浅鉢土器、Ⅴ類が南西諸島系土器である。さらに以

下のように細分類した。

Ⅰ類：深鉢土器

- Ⅰa：頸部が「く」の字に屈曲するもの。
- Ⅰb：口縁が内傾するもの。
- Ⅰc：口縁が内湾するもの。
- Ⅰd：口縁が外傾または直口するもの。

Ⅱ類：Ⅰ類とⅢ類の中間のもの。

Ⅲ類：中華鍋形土器

- Ⅲa：底部に組織痕がないもの。
- Ⅲb：底部に組織痕があるもの。

Ⅳ類：浅鉢土器

- Ⅳa：沈線を有する口縁が内湾するもの。
- Ⅳb：沈線を有する口縁が外反するもの。
- Ⅳc：茶家形を呈するもの。
- Ⅳd：その他の口縁
- Ⅳe：器形がマリ状もしくは不明のもの。

Ⅴ類：南西諸島系土器（縄文時代晩期併行土器）

Ⅰ類：深鉢土器（第32～42図 15～95）

基本的に胴部が直線的に立ち上がるものを深鉢土器とした。器面内外面ともにケズリや条痕、ナデ調整を施すものが多い。一部に弱いミガキを施すものも含む。器形によりⅠa～Ⅰd類に細分した。

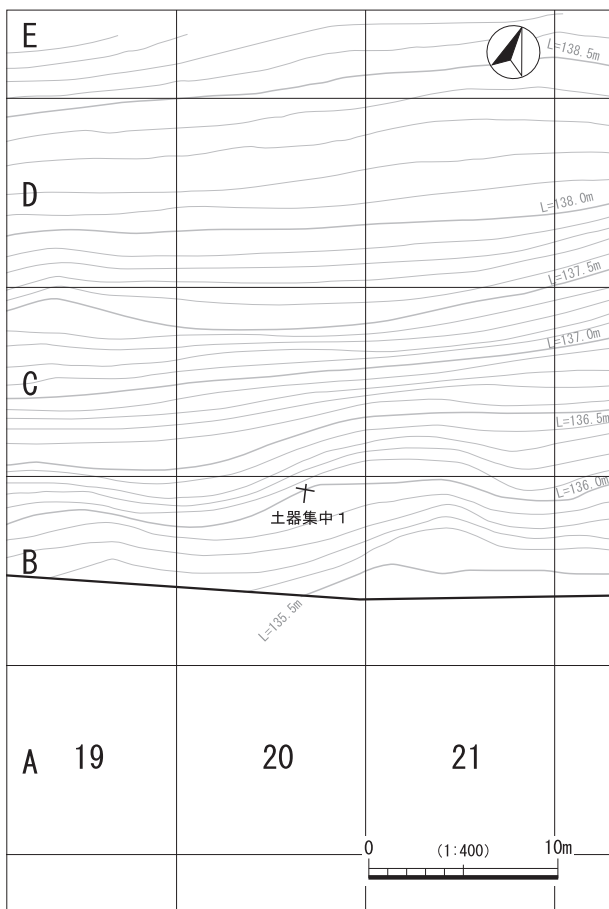
Ⅰa類（15～27）

胴部から頸部にかけてくびれ、頸部から口縁部にかけては外反する「く」の字状の器形を呈する。口唇部を面取りしているものもある。

15は口縁部がゆるやかに外反し、胴部が「く」の字状に屈曲する。口径は38.4cm、胴部径は38.0cmである。口唇部は丸く仕上げ、内外面ともに条痕が残る。16は頸部が直線的で、口縁部がわずかに外反する。口唇部は丸く仕上げ、胴部の稜が明確である。外面は条痕風の工具ナデ、内面はナデを施す。17は口縁部がゆるやかに外反し、口唇部は平らに仕上げ、内外面ともに条痕のちナデを施す。18は口縁部がゆるやかに外反するが、屈曲部の張りは弱い。17と同じく口唇部は平らに仕上げ、屈曲部上部の器壁がやや厚い。外面には条痕が残る。19は口縁部がゆるやかに外反する。口唇部は平らに仕上げ、端部はやや尖る。内外面ともに条痕とナデを施す。20は口縁部が外傾気味に開き胴部に屈曲部をもち、口縁端部はやや肥厚する。

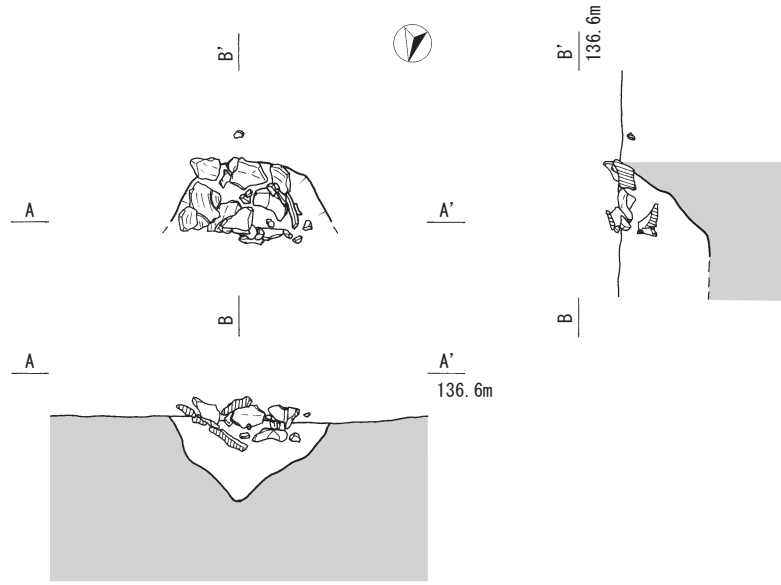
21～24は胴部の屈曲部をもたないが、口縁部が外反するためここにまとめた。21は外反する口縁の口唇部を舌状に仕上げ、内外面ともに条痕のちナデを施す。22は鱗状突起を有し、内外面ともに条痕のちナデを施す。23と24は外反する口縁端部を肥厚させている。口径は40cmを超えると推定される。Ⅲ類の可能性もある。

25～27はⅠa類の胴部屈曲部である。「く」の字に屈



第27図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期遺構配置図

DKS 1



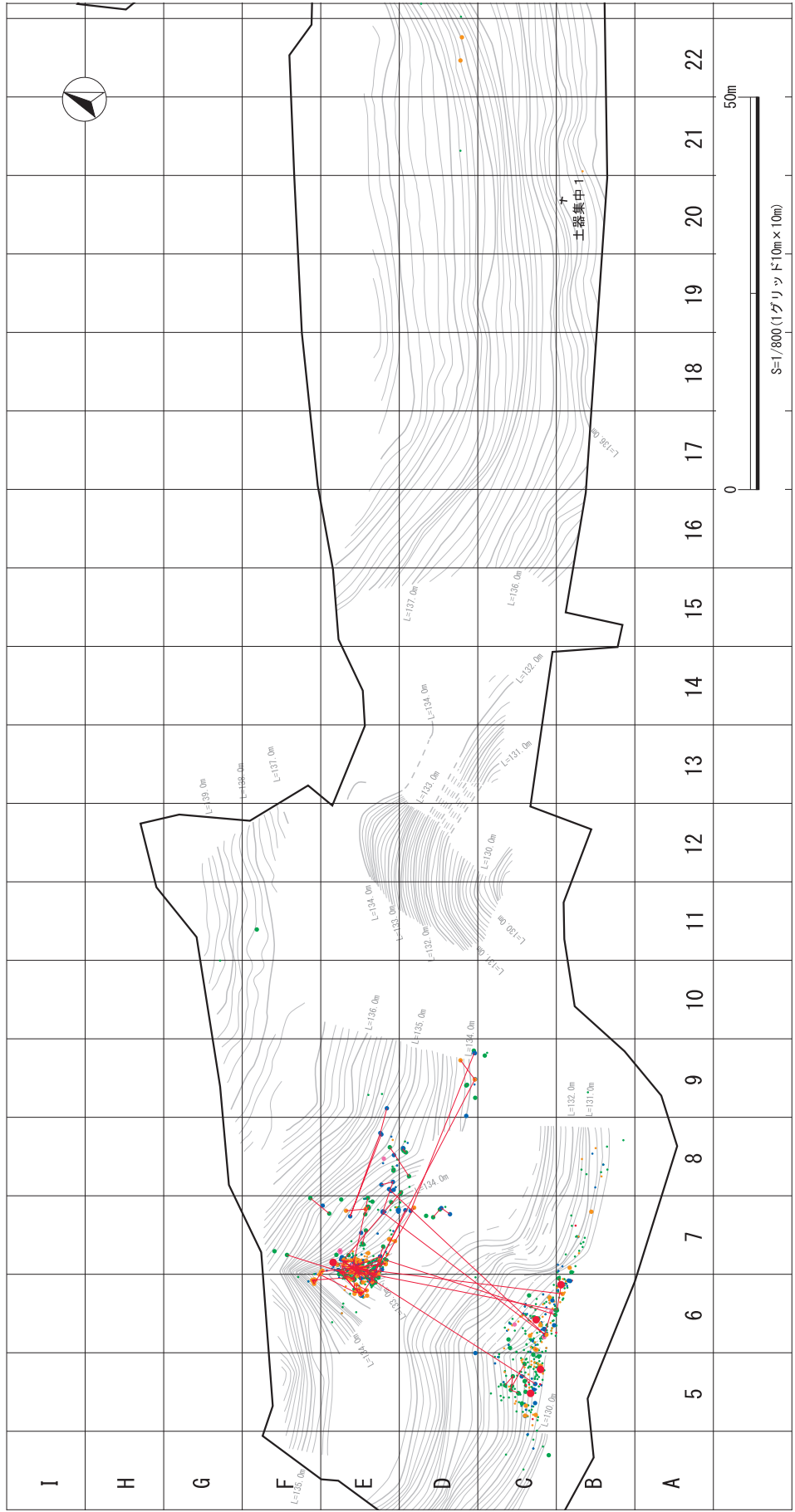
0 (1 : 20) 50cm



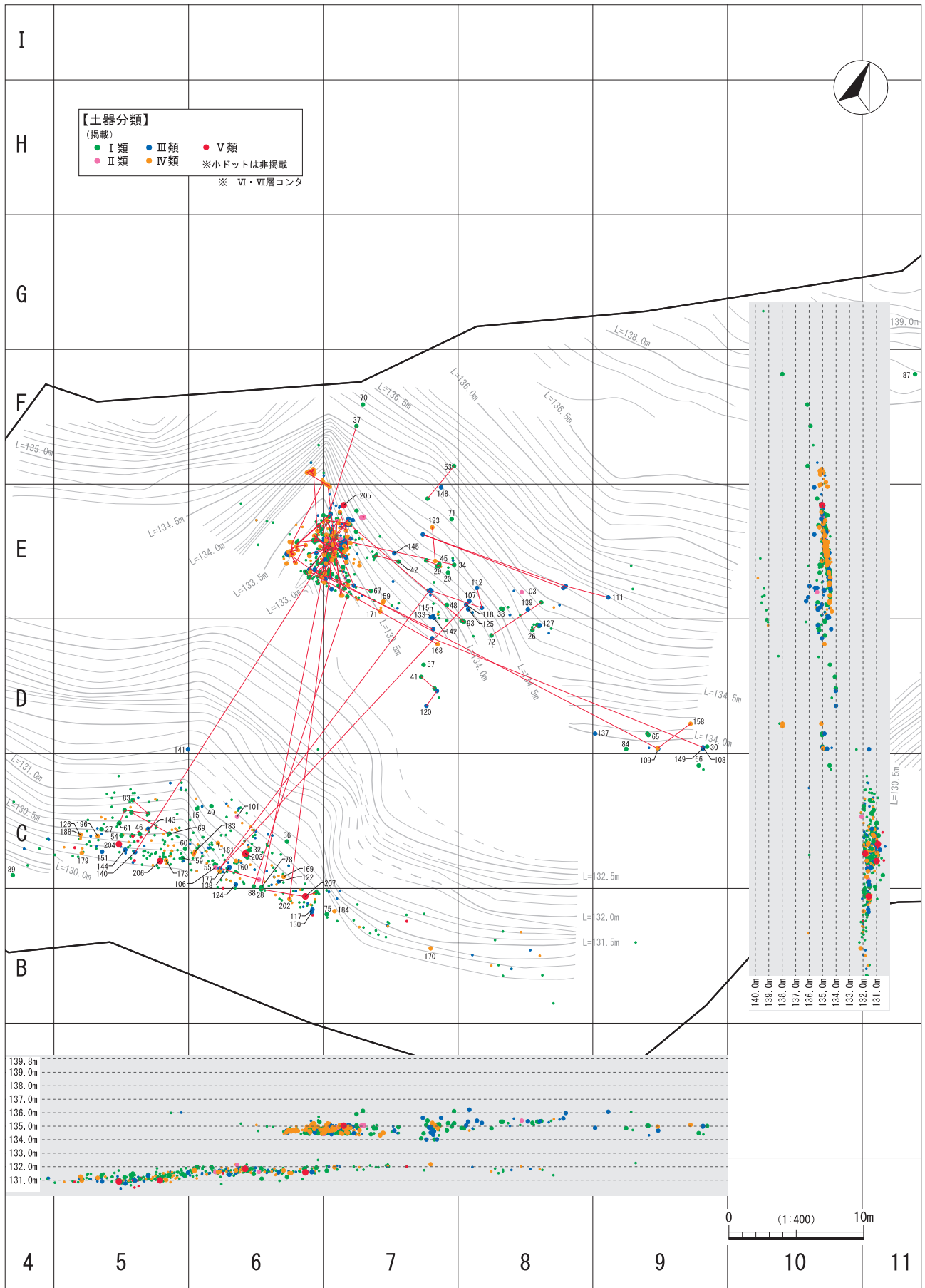
0 (1 : 3) 10cm

第28図 萩ヶ峰遺跡 土器集中1号および出土遺物

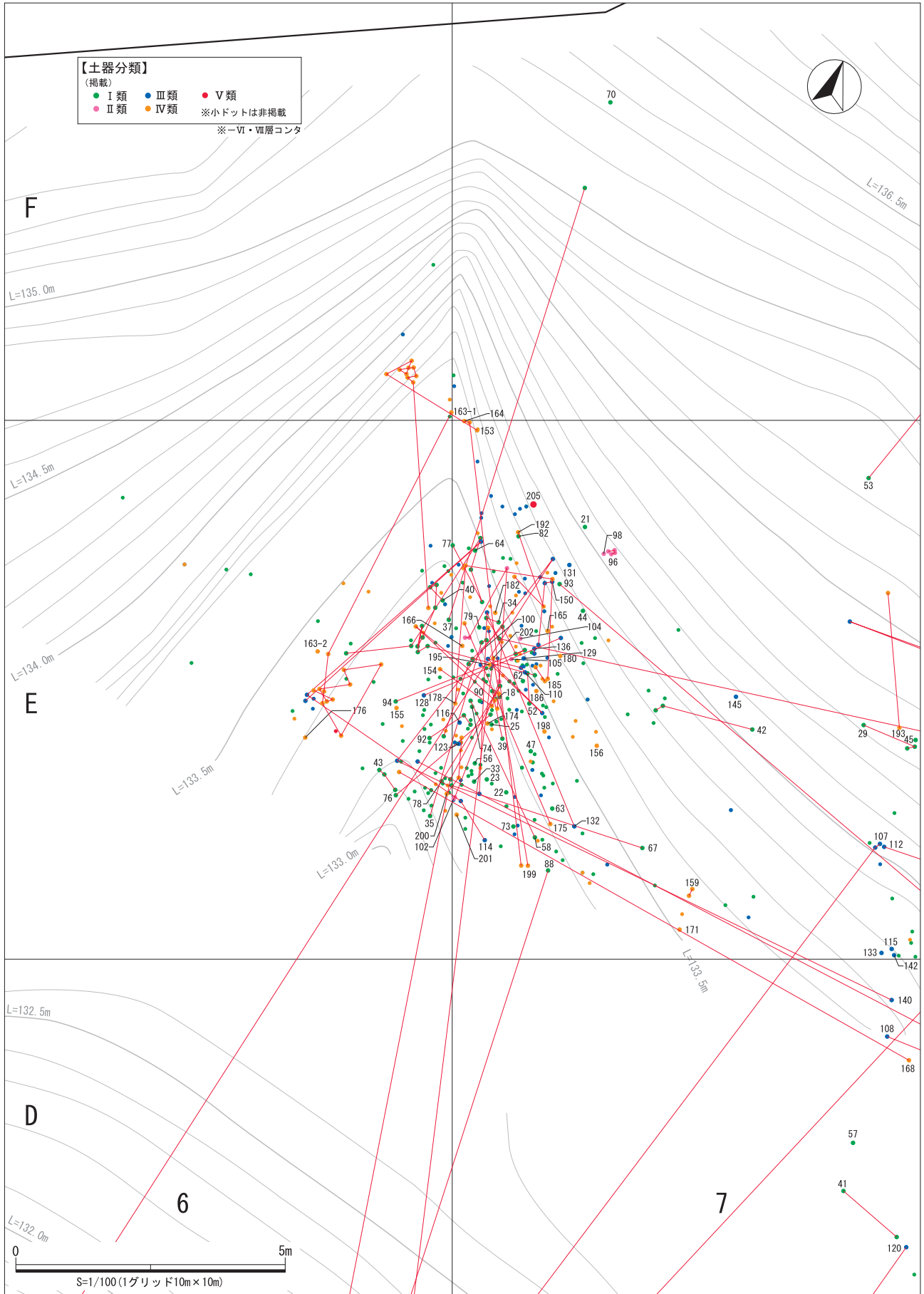
- 【土器分類】
 (編織)
 ● I類 ● II類 ● III類 ● V類
 ● IV類 ● 非編織
 ※小ドットは非編織
 ※-VI・VII層コンタ



第29図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器出土分布図 1



第30図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器出土分布図2



第31図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器出土分布図3

曲する胴部をまとめた。

I b類 (28 ~ 34)

口径が胴部径よりも小さく、底部から胴部までは直線的に開き、胴部から口縁部にかけては内傾する器形を呈する。

28は口径40.4cm、胴部径46.8cmの大型深鉢である。内傾する口縁部には鱗状突起を有し、外面は工具ナデとミガキ、内面は条痕のちナデを施す。29は口縁部が内傾し、口縁端部がやや肥厚する。口径43cmである。外面は条痕の上位にナデや一部ではケズリを加え仕上げ、内面は条痕のちナデを施す。30は口縁部が内傾し、内外面ともに条痕を施す。31は口縁部が内傾する。口唇は平坦に仕上げ、口縁端部を肥厚させる。外面は条痕、内面は工具ナデを施す。32は口縁部が内傾し、口縁端部がやや肥厚する。外面はナデとミガキ、内面は条痕を施す。33と34はI b類の胴部である。33は胴部の屈曲部である。34は胴部が直線的に大きく開くためここに分類した。

I c類 (35 ~ 40)

口径が胴部径よりも小さく、胴部から口縁部まで曲線的に内湾する器形を呈する。

35は口縁部が内湾し、胴部でややふくらむ。口径は20.3cm、胴部径は22.8cmである。外面は条痕のちナデ、内面はナデを施す。36は口縁部が内湾する。外面は工具ナデのちミガキ、内面はミガキを施す。37は口縁部がやや内湾する。口唇部は舌状に仕上げ、外面はケズリのちナデ、内面は条痕を施す。38は口縁部が内湾し、やや肥厚する。内外面ともに雑な工具ナデを施す。39は口縁部が内湾し、胴部でややふくらむ。外面は条痕、内面はナデを施す。35よりも内面がやや平滑である。40はI c類の胴部である。胎土が砂質でザラザラしている。

I d類 (41 ~ 71)

口径が胴部径よりも大きく、胴部から口縁部にかけて直線的に開くまたは直口するように立ち上がる器形を呈する。口唇部を面取りし、口縁端部を肥厚させるものが多い。

41は胴部でほとんど屈曲せず、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部下で突帯様に肥厚する。口径は35.7cmである。外面は条痕、内面は条痕のちナデを施す。42は胴部がやや屈曲し、口縁部は外傾する。口唇部は平坦に仕上げ、外面は条痕、内面は工具ナデとケズリを施す。43はリボン状突起を有した口縁部が、内湾しながら直口するように立ち上がる。口径は24.0cmとやや小型である。内外面ともに条痕のちナデを施す。44はリボン状の突起を有し、口縁内側に2条の沈線を施す。内面上位に弱いミガキを施すが、胎土は粗雑である。45は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにヘラナデを施す。

46 ~ 52は口縁部が肥厚せず外傾するものである。46

~ 49は口唇部を平坦に仕上げ、口唇端部をやや尖らせる。内外面ともに条痕やケズリ様の強いナデを施す。50 ~ 52は口唇部を丸く仕上げる。50は口縁部がやや内湾し、胴部でややふくらむ。外面は条痕、内面は条痕のちナデを施す。51は口縁部の器壁が厚く、胴部にかけて器壁が薄くなる。外面の一部には条痕のち弱いミガキ、内面は条痕とナデを施す。52は口縁部が直口し、胴部はわずかに屈曲する。

53・54は口唇を平坦に仕上げるが外面端部を尖らせ、口縁下部をやや凹ませる。53は内外面ともに条痕のちナデを施す。54は外面はミガキ、内面は丁寧なナデを施す。55 ~ 57は口唇を平坦に仕上げ、口縁端部がやや外反する。55は肥厚した口縁端部をやや外反させる。56は口縁端部を丸く肥厚させ、やや外反する。57は胴部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部はやや外反し、帯状に肥厚する。内外面ともに工具ナデを施す。

58 ~ 64は口唇部を平坦に仕上げ、口縁部が断面四角形状に肥厚する。58は口縁部が内湾し、胴部でややふくらむ。内外面ともに条痕を施す。59は口縁部が直口するように立ち上がる。内外面ともに工具ナデを施す。60は口縁部が直口するように立ち上がる。61は口縁端部を丸みを帯びるように肥厚させる。内外面ともに条痕のちナデを施す。62は口縁端部を丸く肥厚させ、内外面ともに条痕が明瞭に残る。63は口唇部を平坦に仕上げ、口縁下部に内外面ともに沈線を施し、条痕のちナデを施す。

65 ~ 71は口縁部が断面三角形形状に肥厚する。65はナデにより口唇部を平坦にし、口唇外側に幅8mmの肥厚帯をもつ。口径は39.0cmである。66は口縁端部を肥厚させるが幅は一定ではなく作りが粗い。外面は工具ナデのちナデ、内面は条痕のちナデを施す。67は内外面ともに条痕のちナデを施す。68は口縁端部を肥厚させ、稜は明瞭である。内外面ともに条痕を施す。割れ口には、補修粘土痕が残る。69は肥厚部下部をやや凹ませる。内外面ともに条痕のちナデを施す。70は口縁部が外傾し、口唇部はやや尖らせる。胴部は湾曲するとみられ、マリ状を呈する可能性もある。外面は工具ナデ、内面はナデを施す。71は分厚く肥厚させた口縁部が外反する。外面は粗い工具ナデ、内面は丁寧なナデを施す。

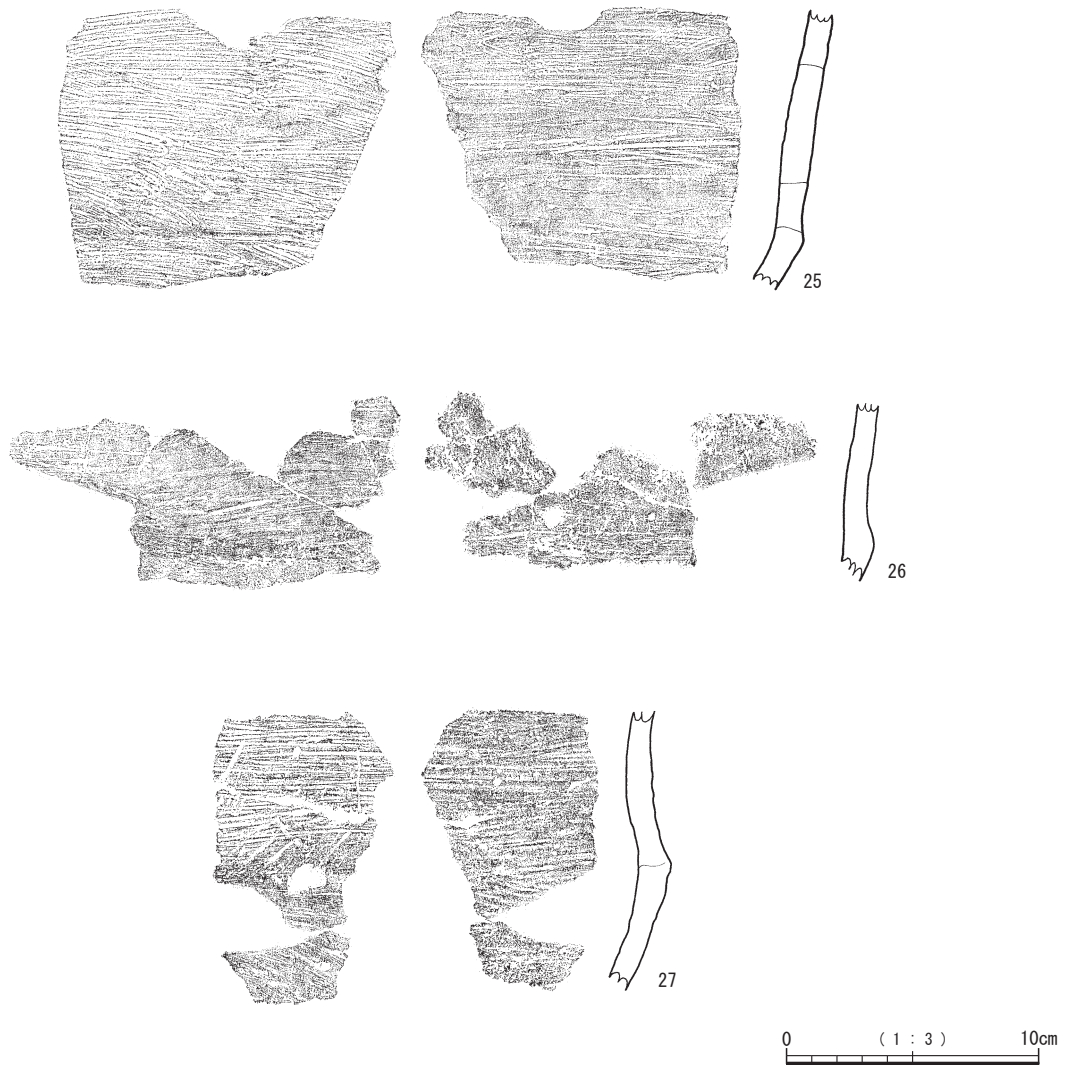
I 類胴部・底部 (72 ~ 95)

72 ~ 83はI 類の胴部である。器形が直線的に立つものをここにまとめた。72 ~ 77は直線的にやや開く器形である。78 ~ 81はやや立ち上がり気味のものである。82は底部付近のもののみられる。内外面ともにミガキを施す。83は直線的に立ち上がったのちにゆるやかに外反する。

84 ~ 94はI 類の底部である。84 ~ 86は平底で張り出しをもたない。87は上げ底で、外面にユビオサエが明確に残る。88は平底で張り出しをもつ。外面にはユビオサ



第32図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Ia類(1)



第33図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I a類(2)

エが明確に残り、やや粗雑な作りである。89は平底で丸く張り出す。90は平底で直線的に張り出す。91～93は平底で張り出しをもつ。94は直線的に開きながら口縁部に至る。外面はケズリと条痕のちナデ、内面は条痕のちナデを施す。95は底部から若干内湾しながら口縁部に至る。底部は張り出し、端部は丸く仕上げる。

II類：I類とIII類の間のもの（第43図 96～106）

器形的に深鉢土器か中華鍋形土器か判別が難しい一群である。胴部から口縁部にかけて直線的に開き、内面にミガキ調整を施し、平滑に仕上げるものをまとめた。

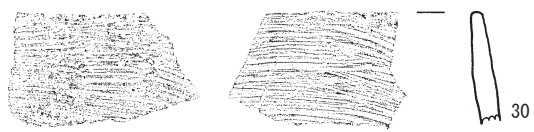
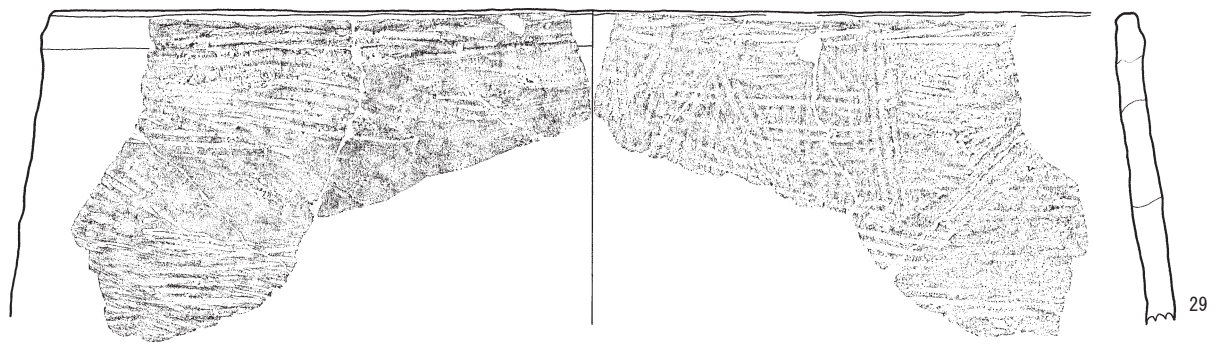
96は鱗状突起を有し、口縁端部がやや外反する。外面は工具ナデ、内面はミガキを施す。97は口縁部を平坦に仕上げ、口縁端部をやや外反させる。外面はヘラナデ、内面はミガキを施す。98は口唇部を平坦に仕上げ、口縁下部をやや凹ませる。口唇端部はやや尖らせる。外面はナデのちミガキ、内面はミガキを施す。99は口縁端部をやや外反させる。外面は工具ナデ、内面はミガキを施

す。100は口縁部がやや肥厚し、口唇部は平坦に仕上げ、内外面に条痕のち弱いミガキを施す。101は口唇部を平坦に仕上げ、口唇端部はやや尖る。外面はナデ、内面はミガキを施す。

102～106はII類の胴部である。深鉢土器や中華鍋形土器に見られない屈曲部をもつものを分類した。102は胴部で「く」の字形に屈曲し、口縁部にかけて内傾する。外面は条痕のちナデ、内面はミガキを施す。103は他と比較して器壁が厚い。外面は条痕、内面はミガキを施す。104と105は湾曲する胴部である。両者とも、外面は条痕、内面はミガキを施す。106は屈曲する胴部であり、口縁部にかけては直線的に開く。外面は条痕のちナデ、内面は弱いミガキを施す。

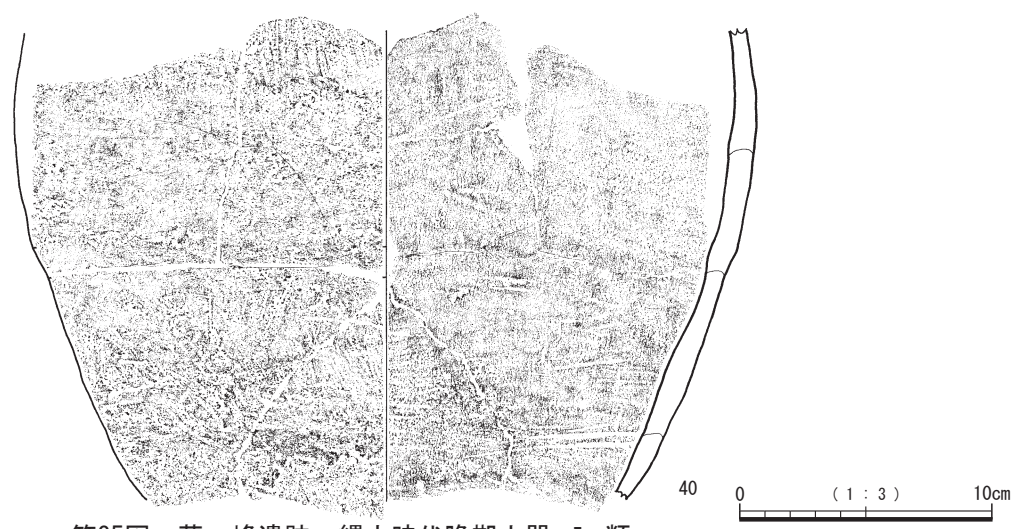
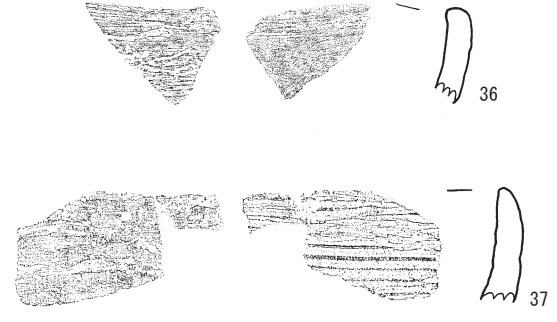
III類：中華鍋形土器（第44～50図 107～152）

内面にミガキを施し、外面には条痕やナデを施している一群を一括して中華鍋形土器とした。

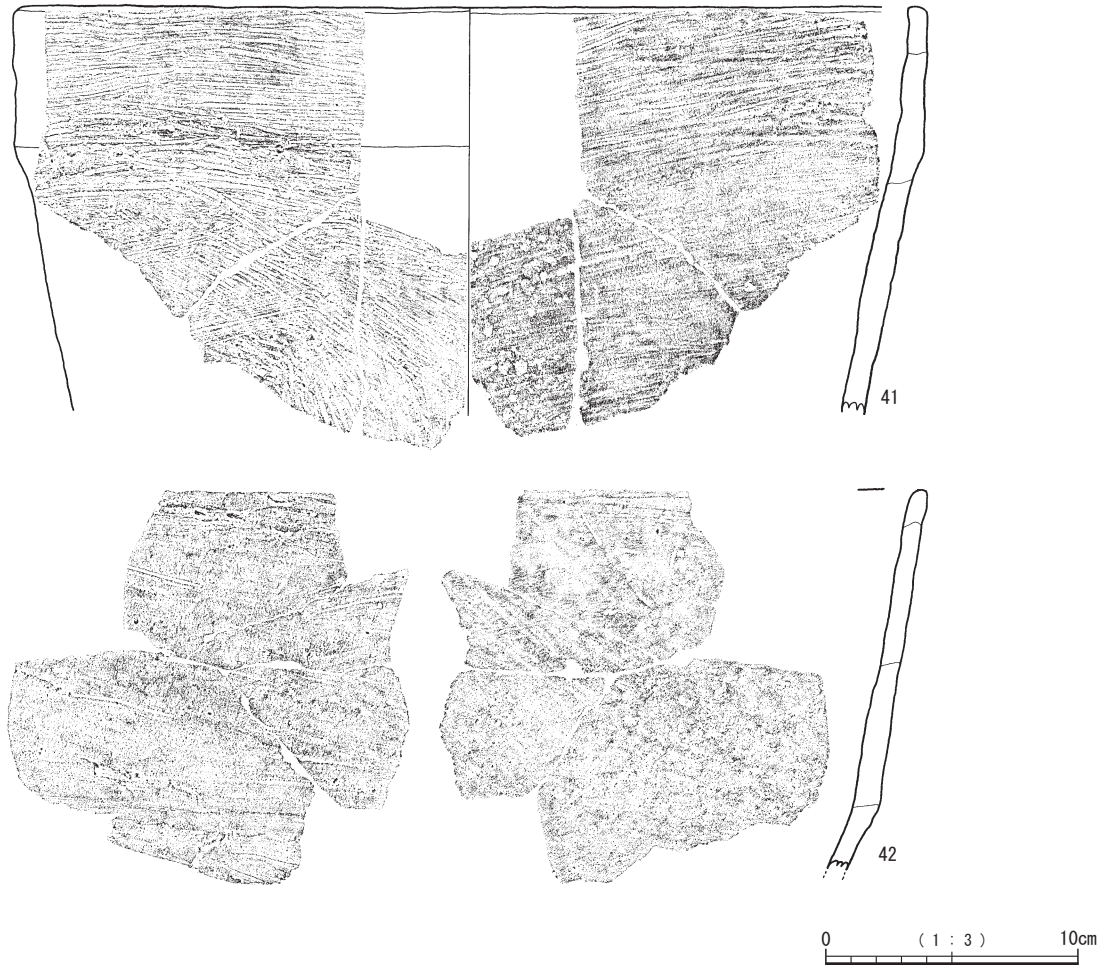


0 (1:3) 10cm

第34図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I b類



第35図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Ic類

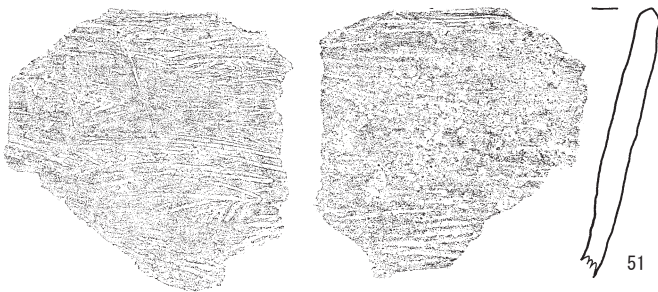
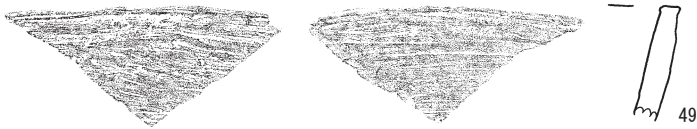
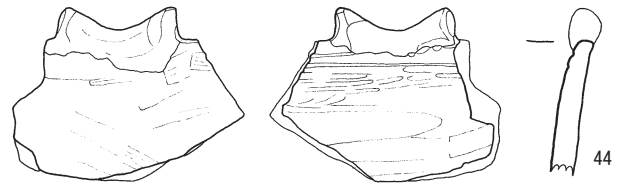
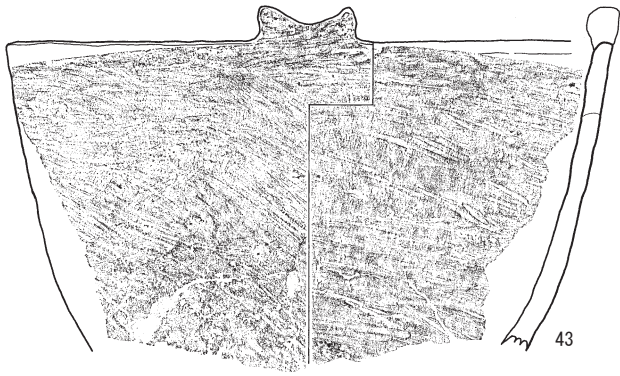


第36図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I d類(1)

Ⅲa類：底部に組織痕をもたないもの(107～140)

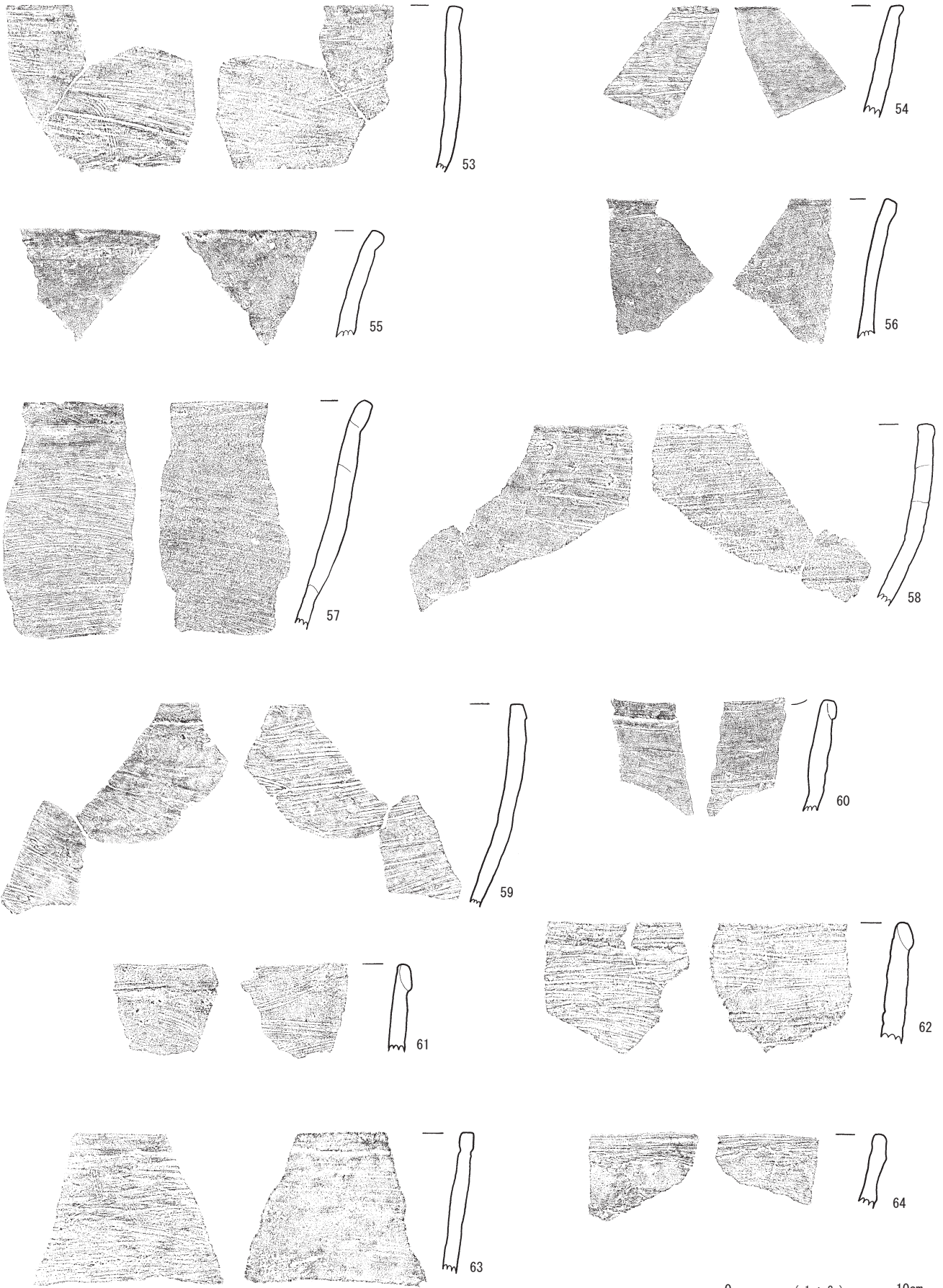
107～122は中華鍋形土器の口縁部から胴部である。口縁部が残存する個体で組織痕が確認できるものはなかった。107～117は口縁部が内湾もしくは直口するように立ち上がるものである。107は鱗状突起を有する口縁部が外傾する。口径は51.0cmである。口縁端部はやや肥厚し、ゆるい稜をもつ。108は鱗状突起を有する口縁部が内湾気味に立ち上がる。口径は50.0cmである。外面はケズリのちナデを施し、内面はミガキで平滑に仕上げる。109は底部から胴部までは大きく開き、口縁部が内湾気味に立ち上がる。口径は48.6cmである。外面は条痕、内面はミガキを施す。110は胴部から口縁部にかけて直口するように立ち上がる。胴部の稜はゆるい。口径は44.6cmである。外面はケズリのちナデ、内面はミガキを施す。111は幅広に肥厚した口縁部が直口するように立ち上がる。口径は46.2cmである。外面は条痕が明瞭に残り、内面上部は工具ナデのち丁寧なナデを、内面下部は丁寧なミガキを施す。112は幅広に肥厚した口縁部が内湾気味に立ち上がる。肥厚部端部の稜は明瞭である。口径は46.6cmで、内外面ともに条痕のち雑なミガキを施す。

113～122に関しては、底部付近が残存しておらず、組織痕が確認できなかったため、ここに分類した。113は幅広に肥厚した口縁部である。口縁上部には稜をもつ。他と比較して作りが粗い。外面は条痕、内面はミガキを施す。114は口縁部が若干内湾しながら立ち上がる。口縁端部はやや肥厚し、内外面にゆるい稜をもつ。外面はヘラナデ、内面はミガキを施す。115は口唇部がやや肥厚し、内湾気味に立ち上がる。外面は条痕、内面は丁寧なミガキを施す。116は胴部で若干屈曲し、口縁部が内湾気味に立ち上がる。外面は条痕、内面上部は条痕、内面下部は弱いミガキを施す。117は丸みを帯びた口縁部が内湾する。外面は条痕のちナデ、内面はミガキを施す。118～122は口縁部が直線的に開くものである。I類やII類と比較して内面に丁寧なミガキを施しているものはここに分類した。118は肥厚した口縁部が外傾し、口径は42.6cmである。外面は工具ナデ、内面はミガキを施す。119と120は口縁が外傾し、口縁端部をやや肥厚させる。120の口径は44.8cmである。両者とも外面は条痕のちナデ、内面は弱いミガキを施す。120の内面について煤を年代測定した結果は、暦年較正が $2\sigma: 1008-$

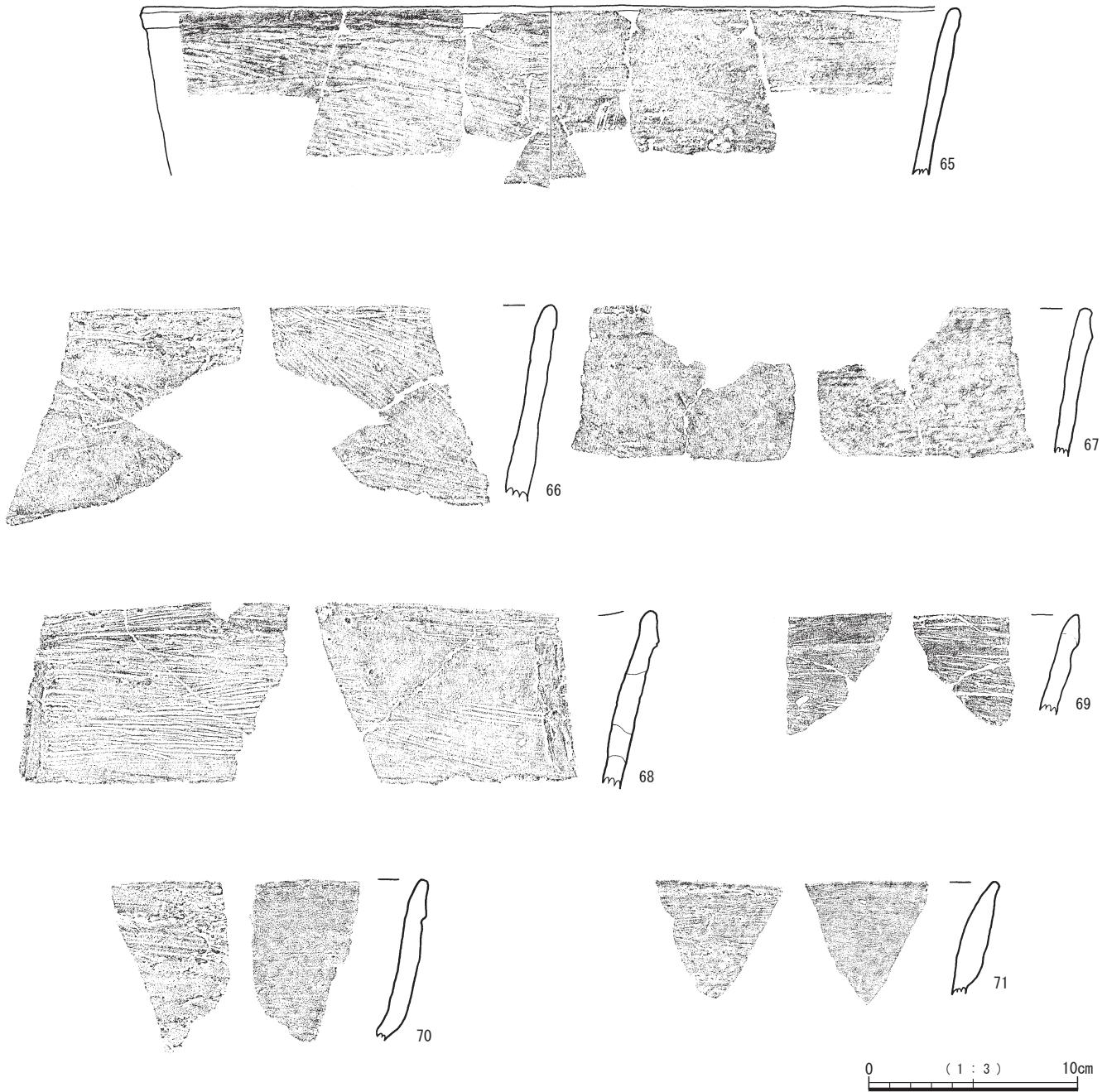


0 (1:3) 10cm

第37図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Id類(2)



第38図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晚期土器 I d類(3)



第39図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Id類(4)

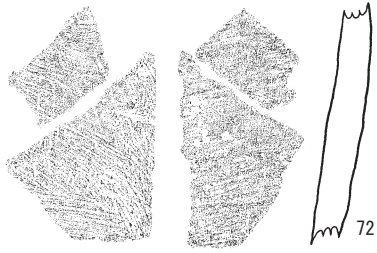
896calBC (89.14%), 874-846calBC (6.31%)である。121は外傾する口縁部である。外面は工具ナデ、内面は丁寧なミガキを施す。122は幅広に肥厚した口縁部が外傾する。口唇部はやや尖らせる。外面は粗い工具ナデ、内面は丁寧なミガキを施す。

123～140はⅢ類の胴部から底部のうち、組織痕が確認できないものである。

Ⅲb類：底部に組織痕をもつもの(141～152)

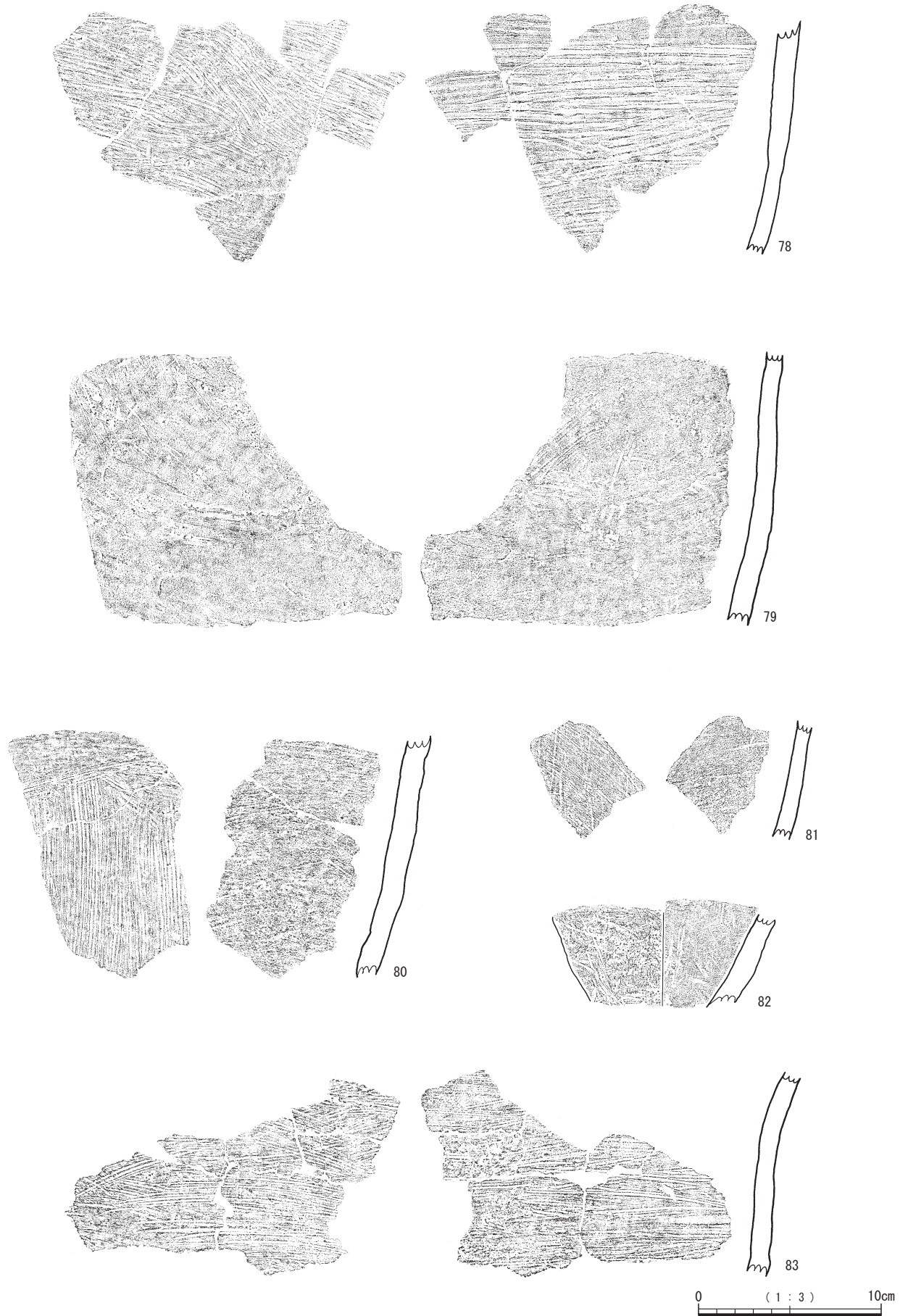
141～152はⅢ類の胴部から底部のうち、組織痕が確認できるものである。

141は胴部に屈曲部をもつ。編布は14～18mm幅の経糸に、1cmあたり8～9本の緯糸がみられる。142の編布は幅5mmの経糸に、ナデ消されているが一部に1cmあたり8～9本の緯糸が確認できる。143の編布は幅15mmの経糸に、1cmあたり8～9本の緯糸がみられる。144の編布は幅14mmの経糸に、1cmあたり10本の緯糸がみられる。145の編布は幅12mmの経糸であり、緯糸はナデ消されており本数等は不明である。146と147の組織痕はほつれた編布である。148の編布は幅10mmの経糸に、1cmあたり7～8本の緯糸がみられる。148の内面について

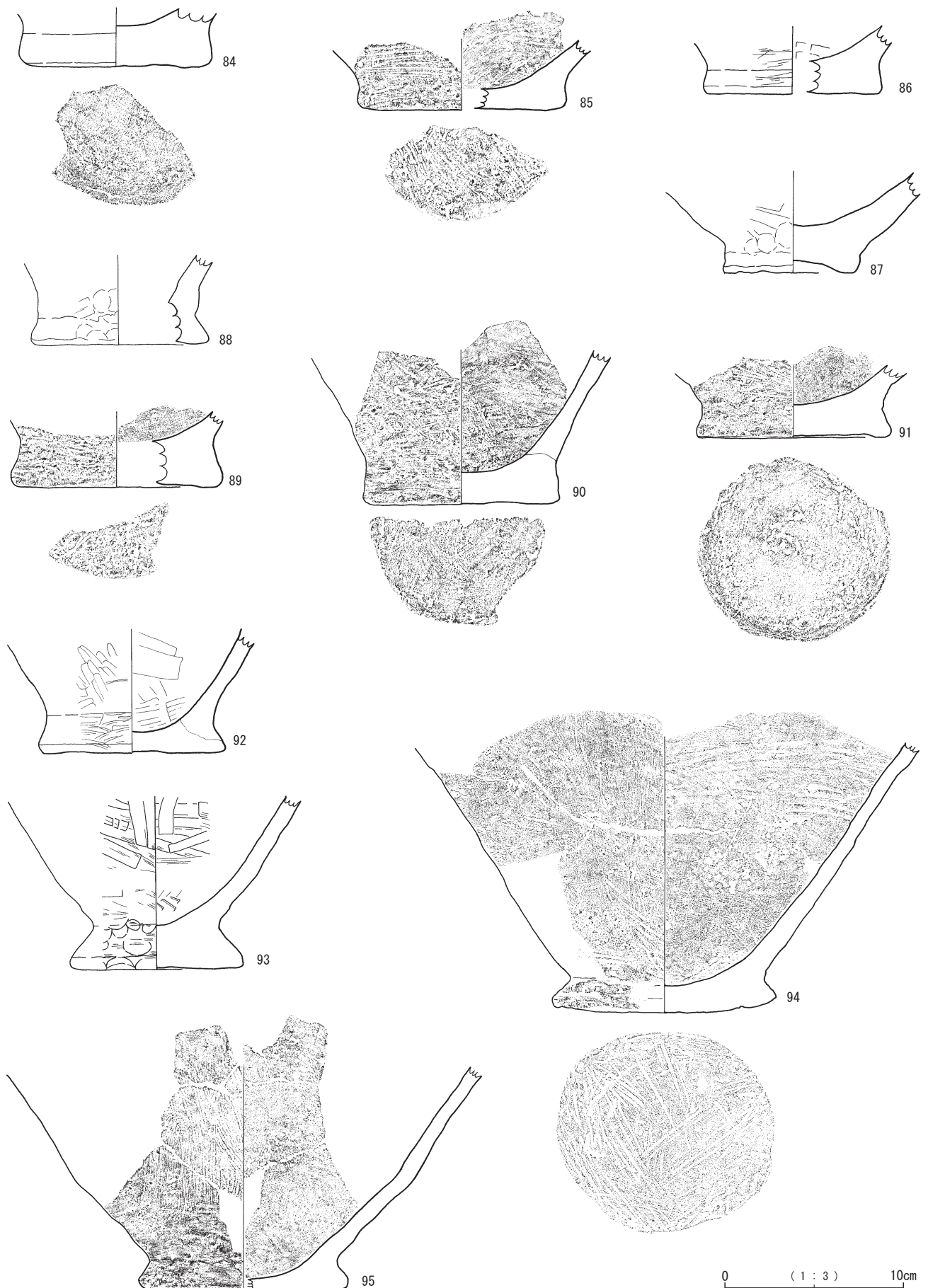


0 (1:3) 10cm

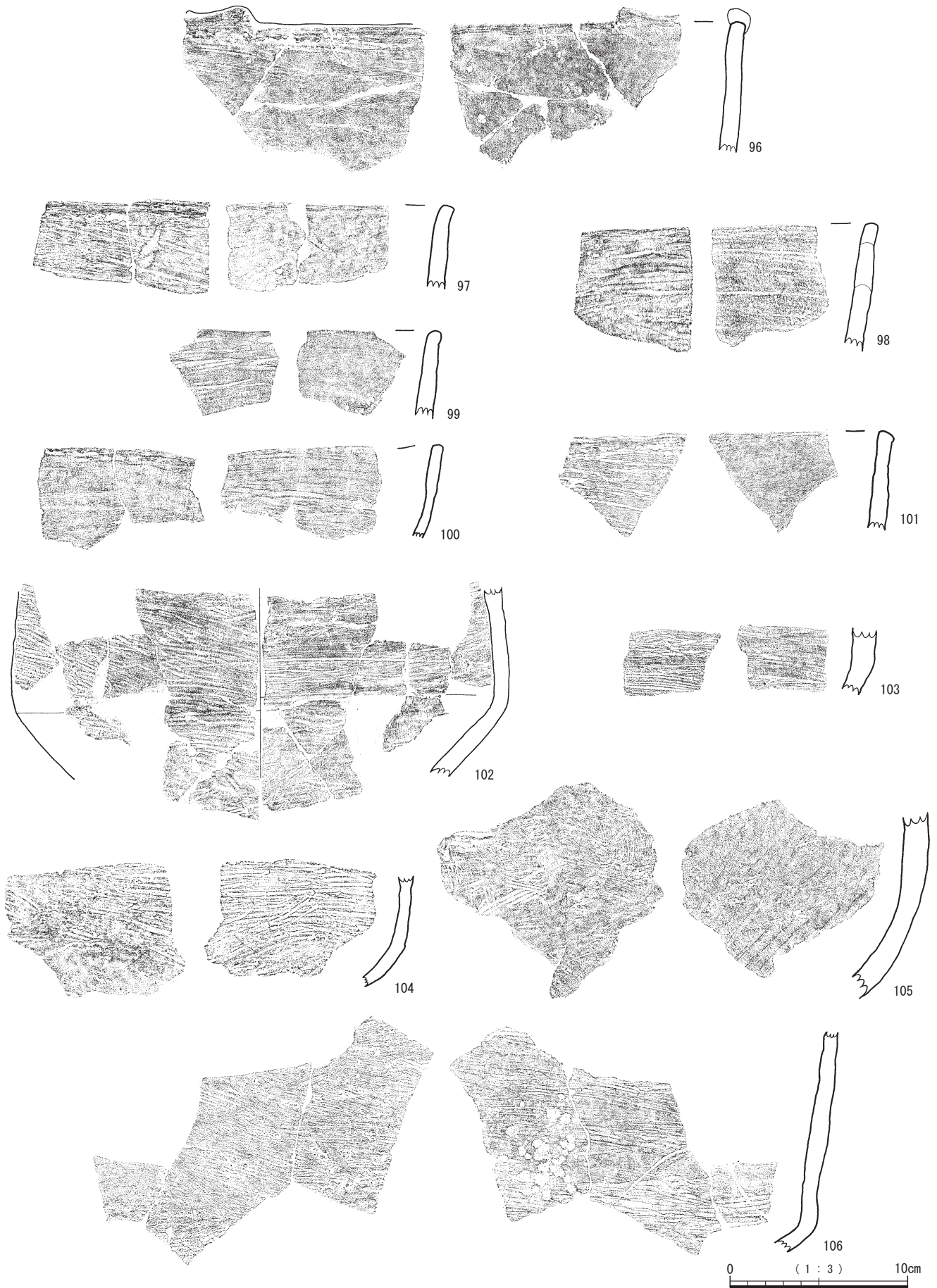
第40図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I類(1)



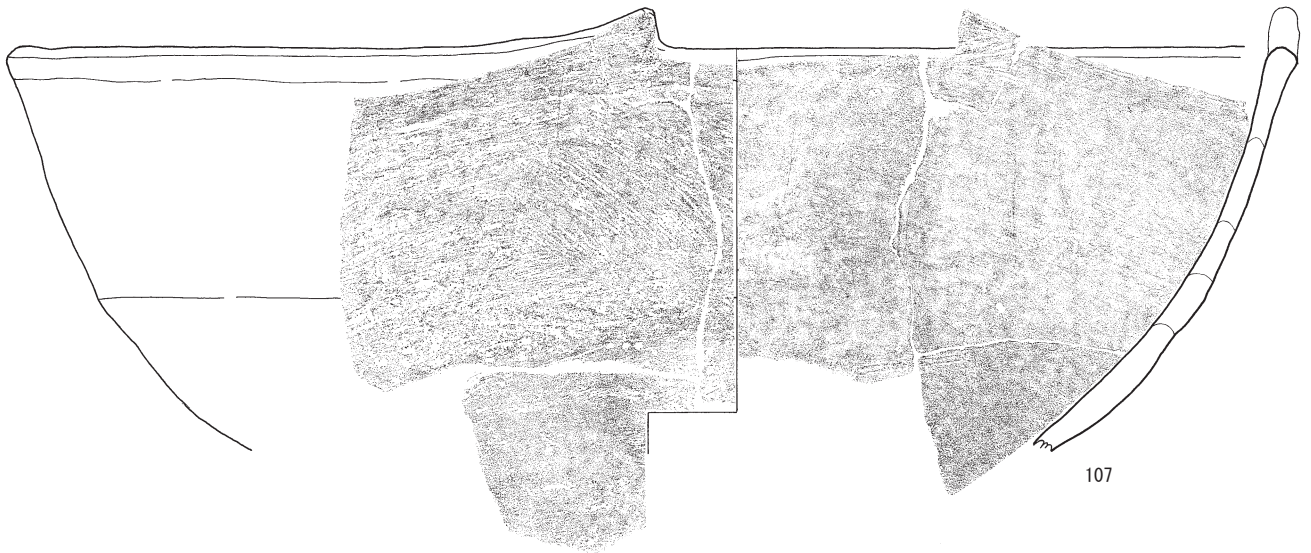
第41図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I類(2)



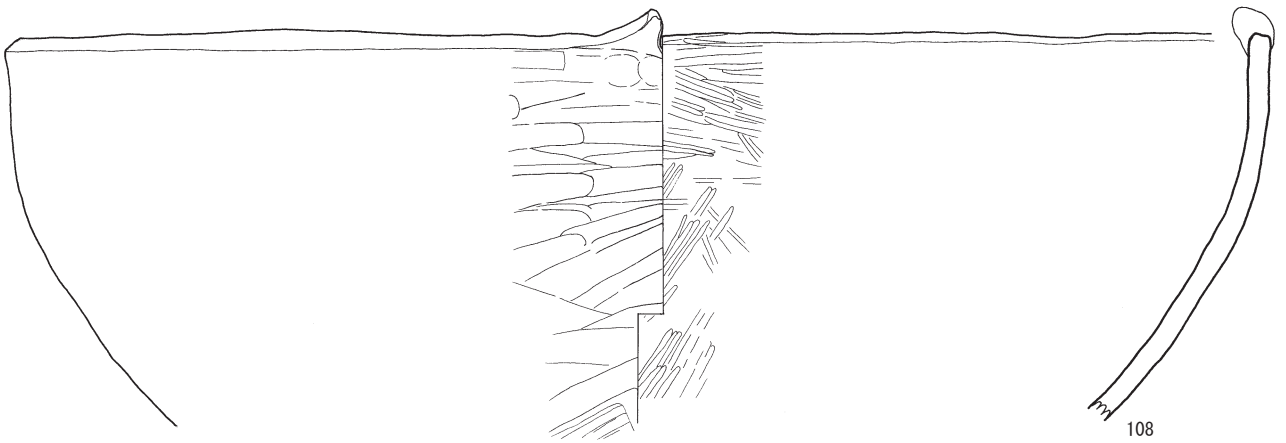
第42図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 I類(3)



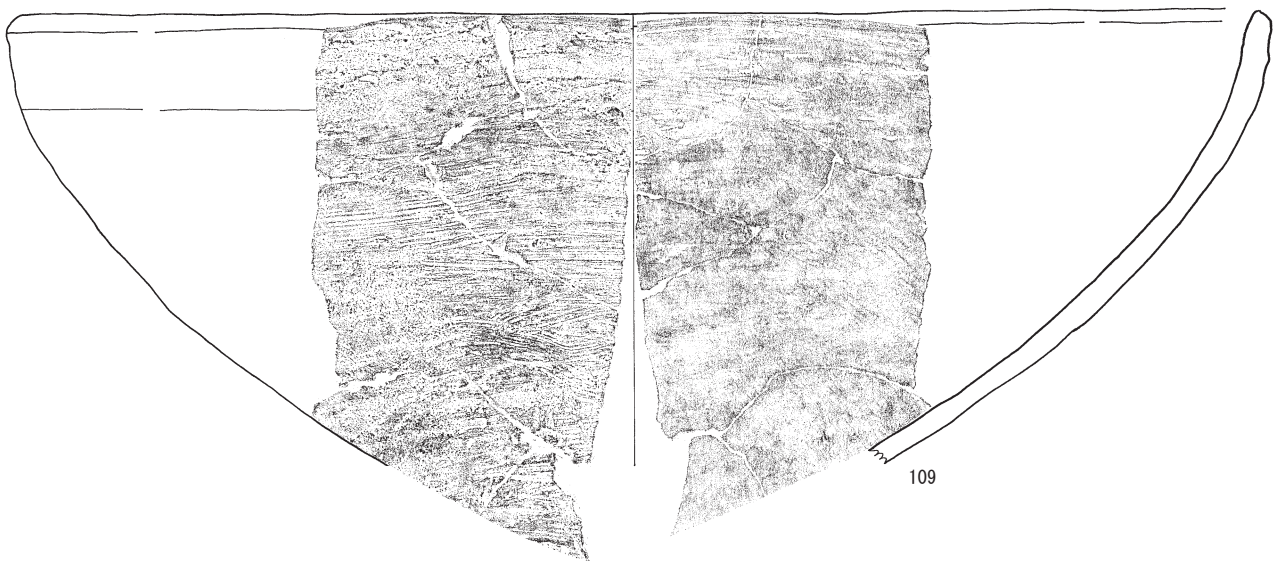
第43図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 II類



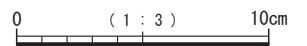
107



108



109



第44図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晚期土器 IIIa類(1)



第45図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類(2)

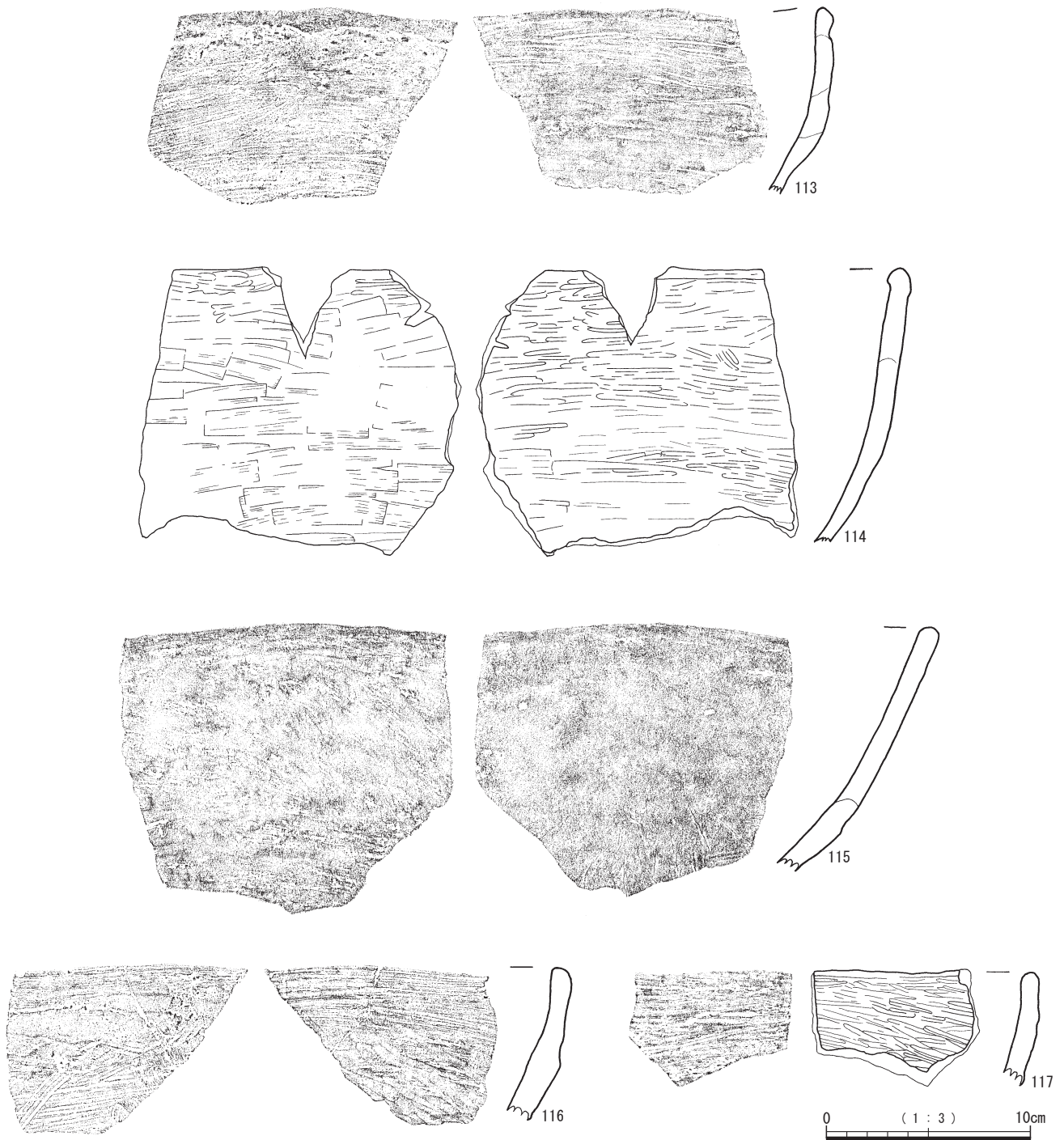
た煤を年代測定した結果は、暦年較正が 2σ : 1044–1034calBC (1.68%), 1016–903calBC (93.77%) である。149の編布は26mmの幅広の経糸に、1cmあたり7～8本の緯糸がみられる。150と151の編布は8～9mmの経糸であり、緯糸はナゲ消されており本数等は不明である。152の編布は幅6mmの経糸に、1cmあたり9～10本の緯糸がみられる。

IV類：浅鉢土器（第51～55図 153～207）

I類～III類に伴うと考えられる浅鉢土器である。内外面ともに丁寧に研磨しているものが多い。

IVa類：沈線を有する口縁が内湾するもの（153～162）

153～162は底部から胴部までは外反し、胴部から口縁部までは内湾する器形を呈する（波状口縁内湾浅鉢）。丸みを帯びた平底の接地面近くには沈線を巡らせる。す

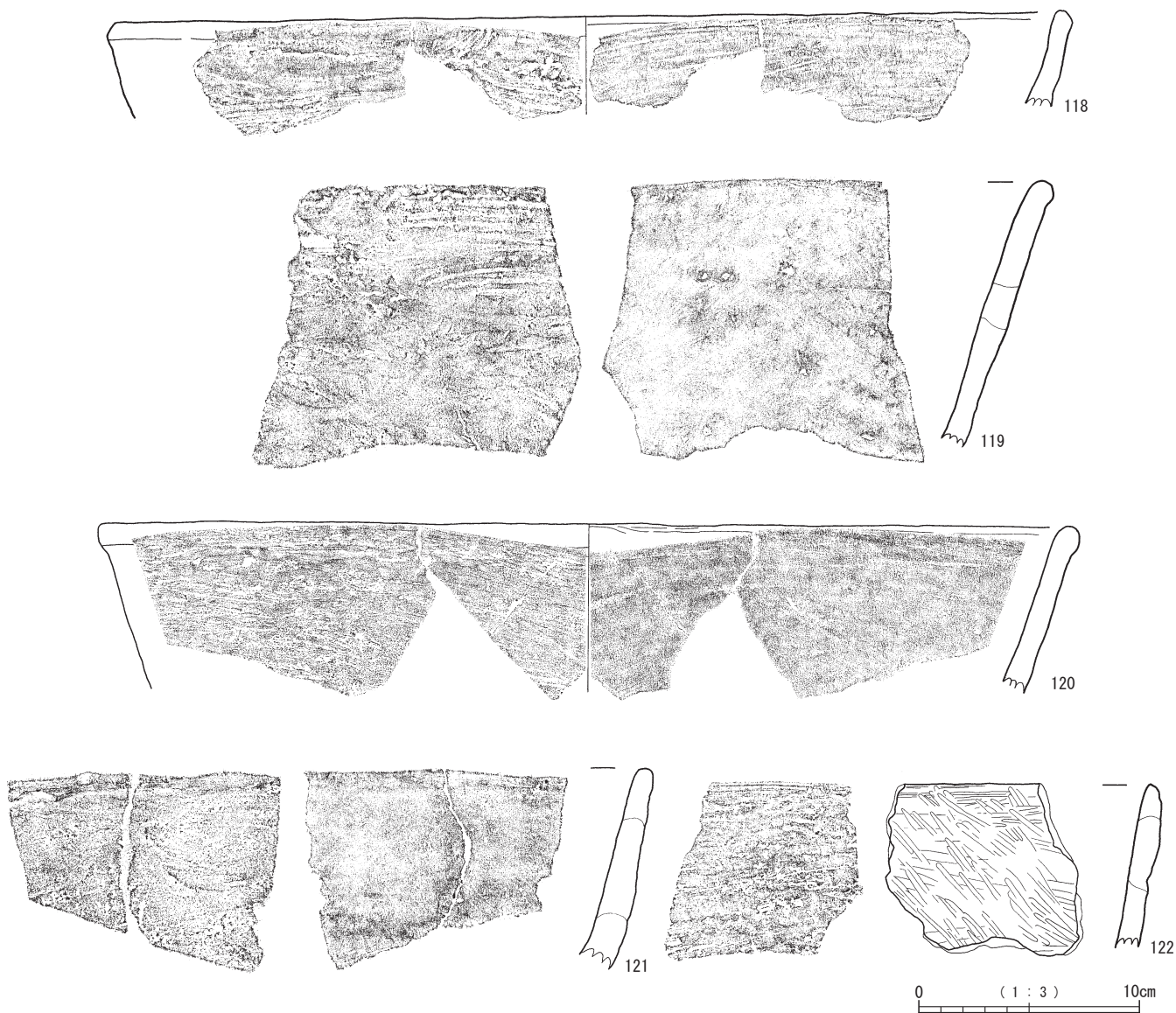


第46図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類(3)

べて内外面ともに丁寧なミガキを施す。

153は底部から胴部までは外傾するように開き、胴部から口縁部までは内湾するように立ち上がる。リボン状突起は1か所に残る。口径は24.0cm、底形は7.8cm、器高は13.7cmである。口縁部に1条、胴部に1条、底部に2条の沈線を巡らせる。口縁部と胴部の沈線にはベンガラが塗られる。154は底部から胴部までは大きく外反し、胴部から口縁部までは強く内湾するように立ち上がる。

口径は28.6cm、底形は9.6cm、器高は11.7cmである。口縁部、胴部、底部に各1条ずつ沈線を巡らせる。155は内湾する波状口縁である。156は胴部で屈曲し、内湾気味に立ち上がる波状口縁である。157は口縁部が内湾気味に立ち上がる波状口縁である。口唇部は平坦に仕上げる。口縁部と胴部の沈線にはベンガラが付着する。158は波状口縁に三叉文が残る。三叉文の部分には補修孔が1つ開けられている。



第47図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類(4)

159・160はIVa類の胴部である。159の胴部はやや外反し、内湾ぎみに立ち上がる屈曲部が残る。屈曲部に沈線を巡らせる。内面のミガキがやや粗雑である。160は沈線が残る胴部である。

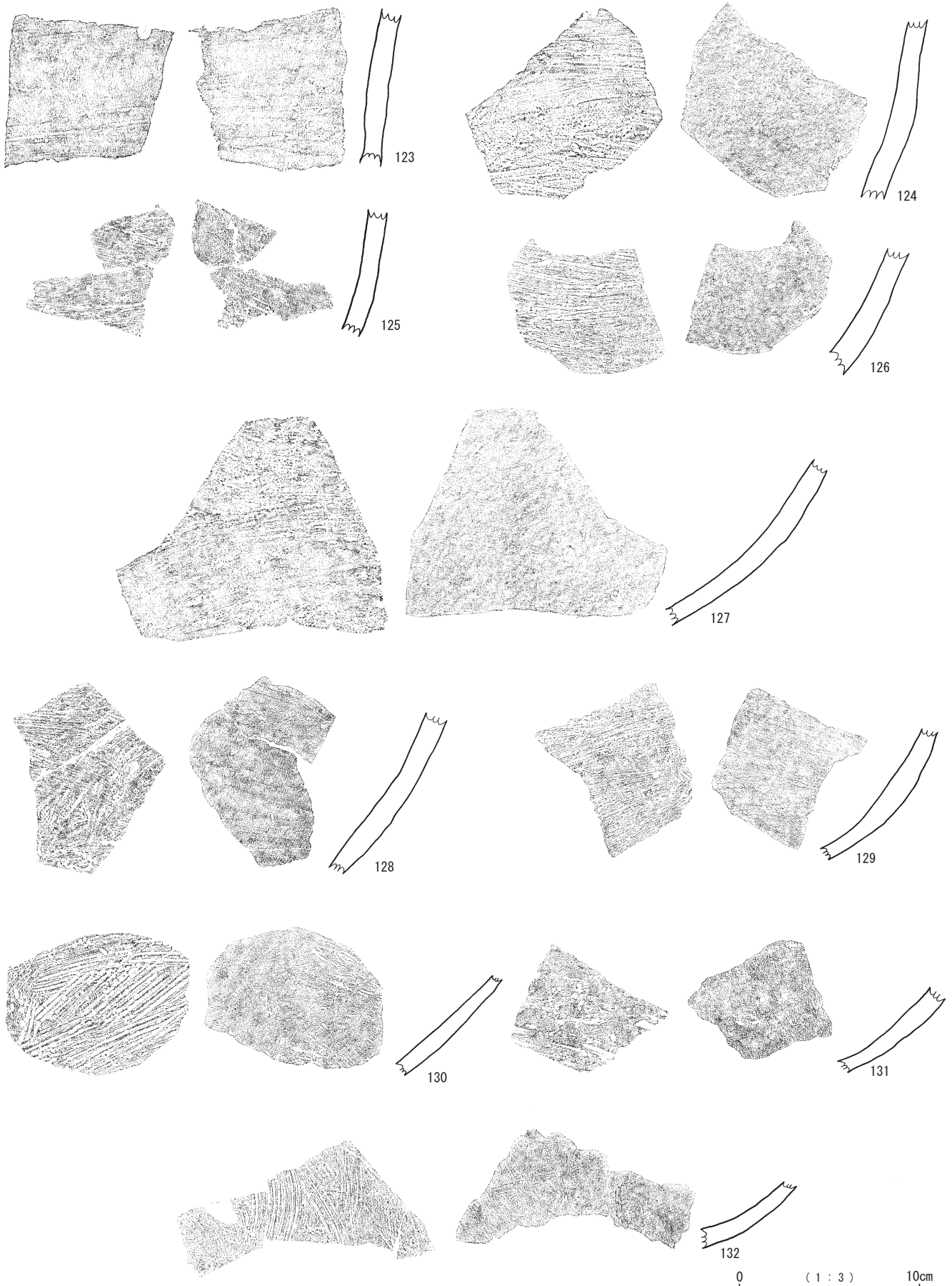
161・162はIVa類の底部である。161は接地面近くに3条の沈線を巡らせる。沈線には赤色顔料が残る。162は接地面近くに2条の沈線を巡らせる。

IVb類：沈線を有する口縁が外反するもの（163～183）

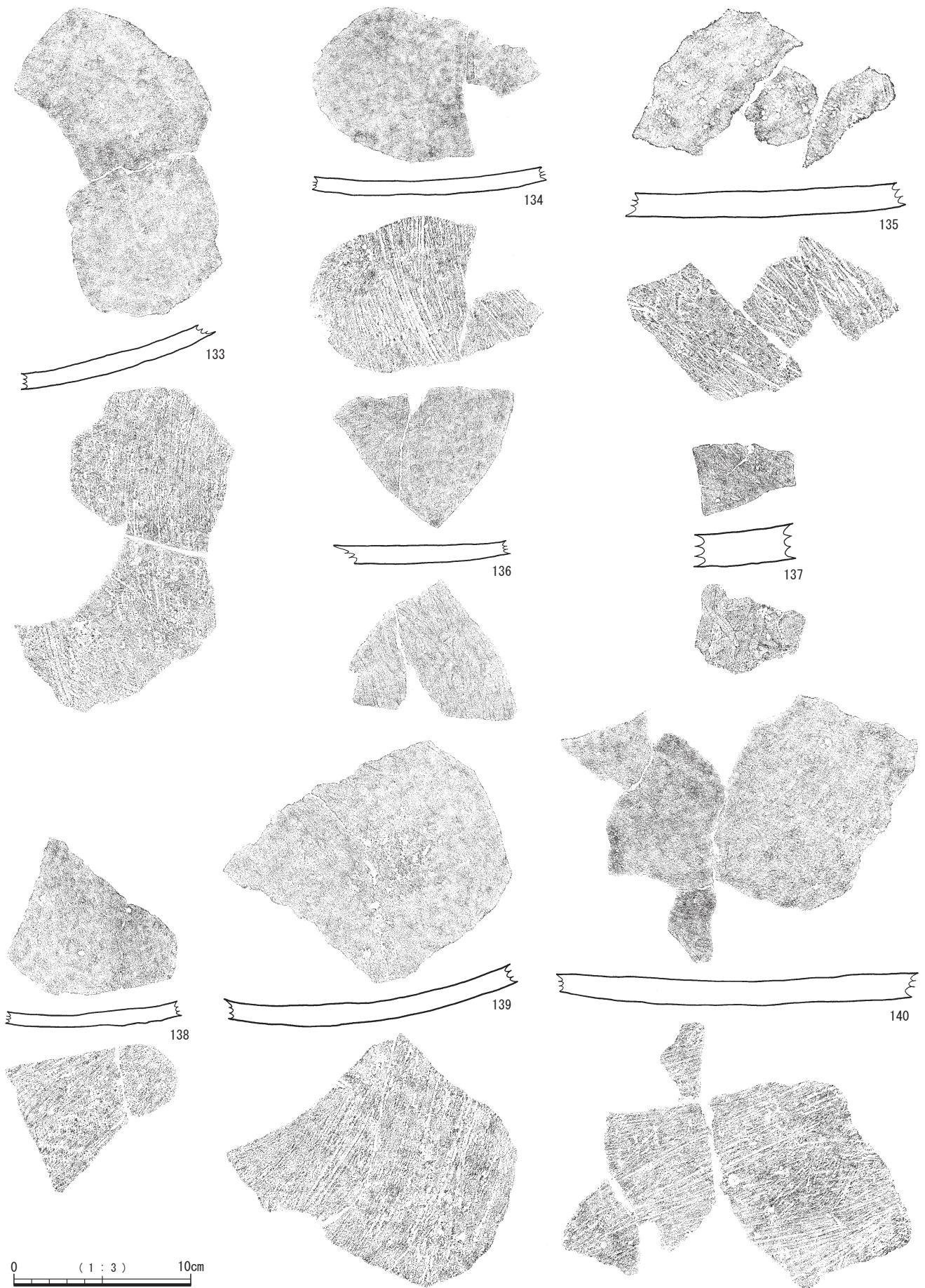
163～174は底部から胴部までは直線的に開き、胴部から口縁までは外反する器形を呈する。すべて内外面ともに丁寧なミガキを施す。

163-1は底部から胴部までは直線的に開き、胴部から口縁部までは外反する。リボン状突起は1か所に残る。口径は27.1cmである。口縁部と胴部に各1条ずつ沈線を

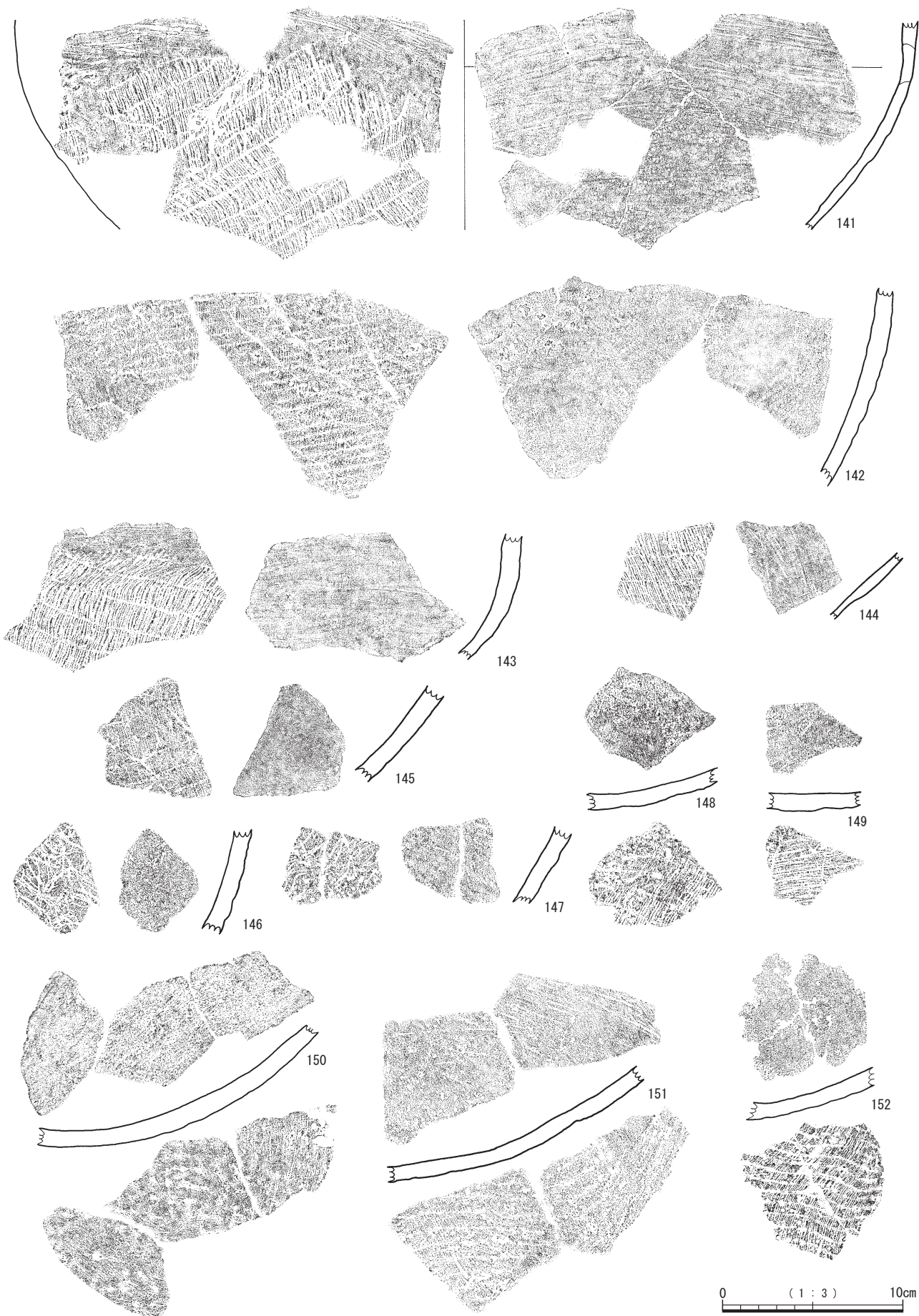
巡らせる。胴部は断面三角形状に肥厚する。163-2は163-1と同一個体と考えられるものであるため、図上復元を行った。164はリボン状突起をもつ口縁部が外傾する。外面には煤が残る。165は直線的に開く口縁部である。鱗状突起を有していたと考えられる。口縁端部には沈線を1条巡らせる。166は外反するように開く口縁部である。167は直線的に開く口縁部である。口縁端部は内外面に1条ずつ沈線を巡らせており、玉縁状を呈する。168は直線的に開く口縁部である。胴部に沈線が1条残る。169は外反気味に開く口縁部である。口縁端部の内面に1条沈線が残る。170～174は外反するように開く口縁部である。170と171は口縁端部の内外面に1条ずつ、胴部に1条沈線を巡らせる。174は口縁端部外面と胴部に1条ずつ沈線を巡らせる。



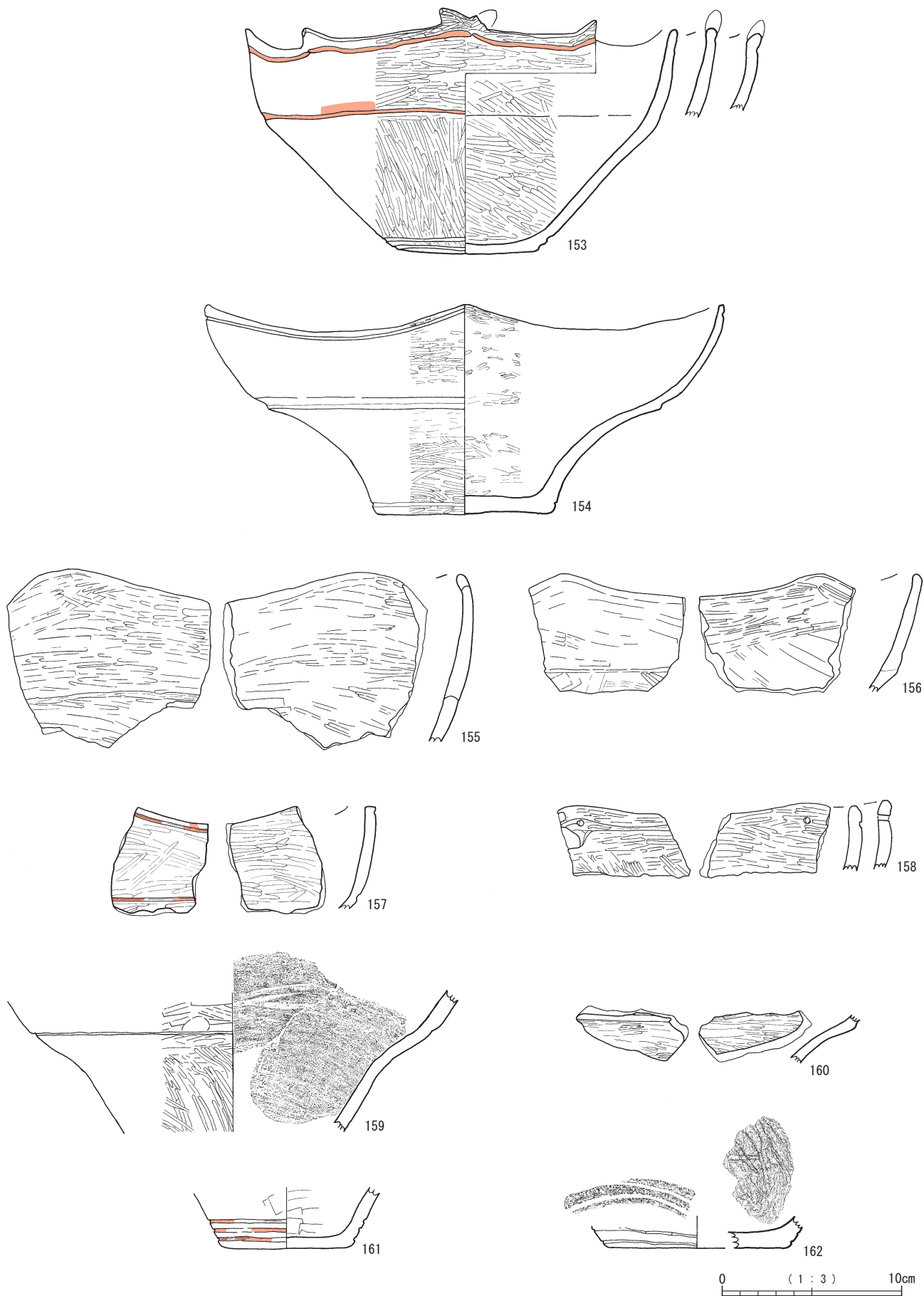
第48図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類(5)



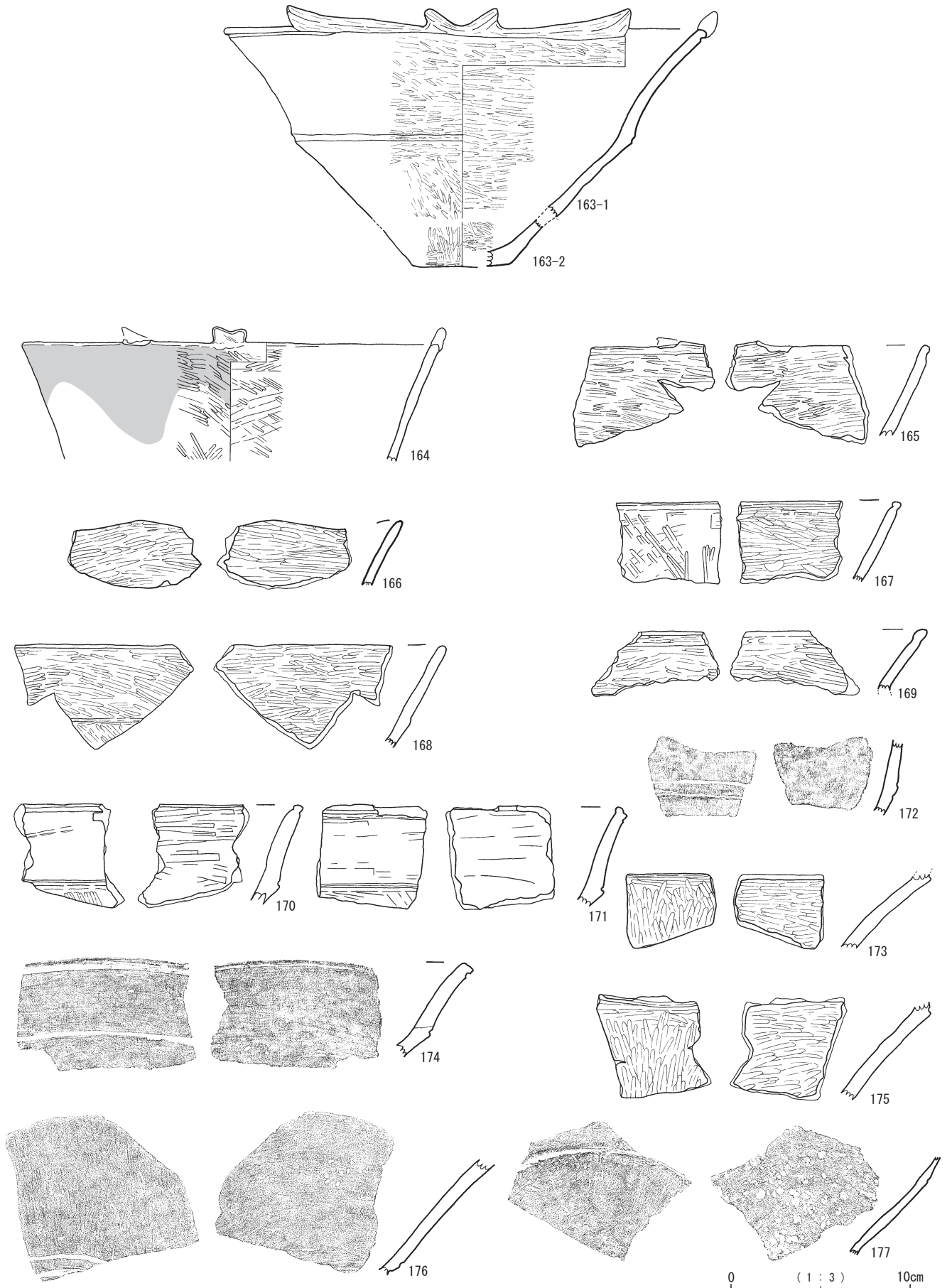
第49図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IIIa類(6)



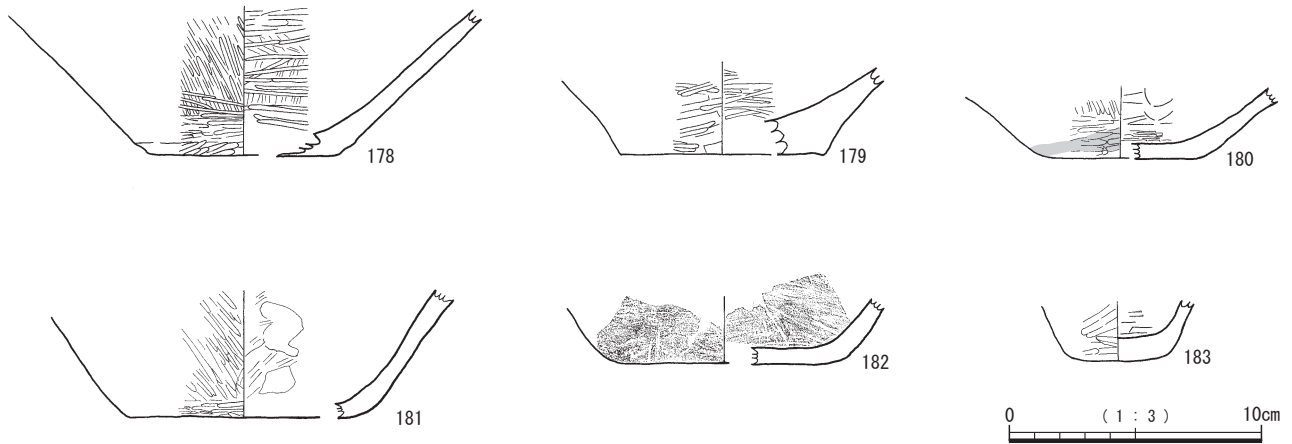
第50図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 Ⅲb類



第51図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVa類



第52図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVb類(1)



第53図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVb類(2)

172～177はIV類の胴部である。

172と176は屈曲部に2条の沈線が残る。173～175・177は屈曲部に1条の沈線が残る。

178～183はIVa類かIVb類の底部である。底部に沈線があるものはIVa類に分類したが、そのほかのものはここにまとめた。178は逆「ハ」の字状に直線的に開く。179は器壁が厚い。180～182は外反気味に開く。180の内面についた煤を年代測定した結果は、暦年較正が 2σ : 1047–1028calBC (5.38%), 1016–911calBC (90.07%)である。183は底径が2.4cmと小型である。

IVc類：茶家形を呈するもの(184～191)

184～191は茶家形あるいは算盤玉形を呈する浅鉢土器の口縁部から胴部である。内外面ともに丁寧なミガキを施すものが多い。

184は胴部で内側に強く屈曲し、頸部で強く外傾し口縁部に至る。口縁端部は肥厚し、鱗状突起を有する。口径は19.6cmである。口縁端部と胴部屈曲部に沈線を1条巡らせる。185は胴部で内側に屈曲し、短い口縁部が外反する。口縁端部内面には沈線を1条巡らせる。186は胴部で内側に屈曲し、短い口縁部が外反する。鱗状突起を有する。口縁端部内外面には沈線を1条ずつ巡らせる。187は短い口縁部が外反する。リボン状突起を有する。口縁端部内面には沈線を1条巡らせる。188は胴部で内側に屈曲し、短い口縁部が外反する。口径は21.6cmである。口縁端部内面には沈線を1条巡らせる。189と190は短い口縁部が外反する。口縁端部内面には沈線を1条巡らせる。189の沈線には赤色顔料が残る。191は短い口縁部が外反する。口縁端部内外面には沈線を1条ずつ巡らせる。

IVd類：無文口縁が内湾するもの(192～197)

192～197はその他の浅鉢土器～鉢形土器の口縁部である。すべて内外面ともに丁寧なミガキを施す。

192と193は無文口縁が胴部でゆるやかに内湾して口縁部に至る。192の口径は20.8cmである。194～196はやや内湾気味に立ち上がる口縁部である。口縁端部をやや肥厚させる。197は孔が2つと未開通の孔が1つ残る。いずれも焼成前の穿孔であるため孔列文土器の可能性もある。

IVe類：器形がマリ状もしくは不明のもの(198～202)

198～201はマリ状を呈すると考えられる浅鉢土器の口縁部である。

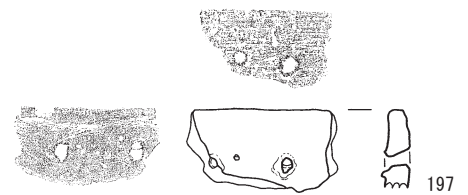
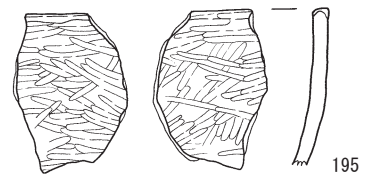
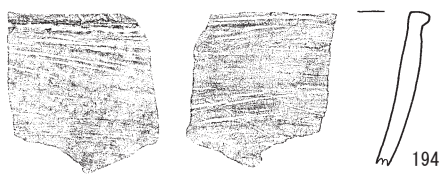
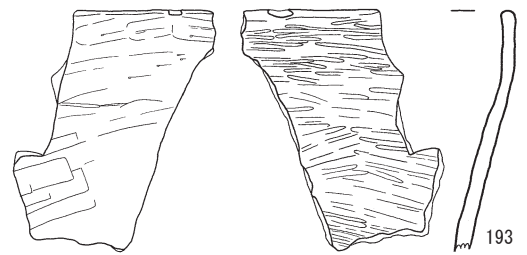
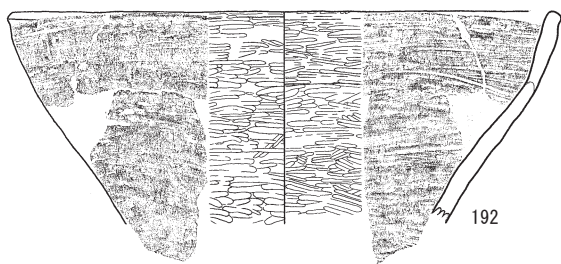
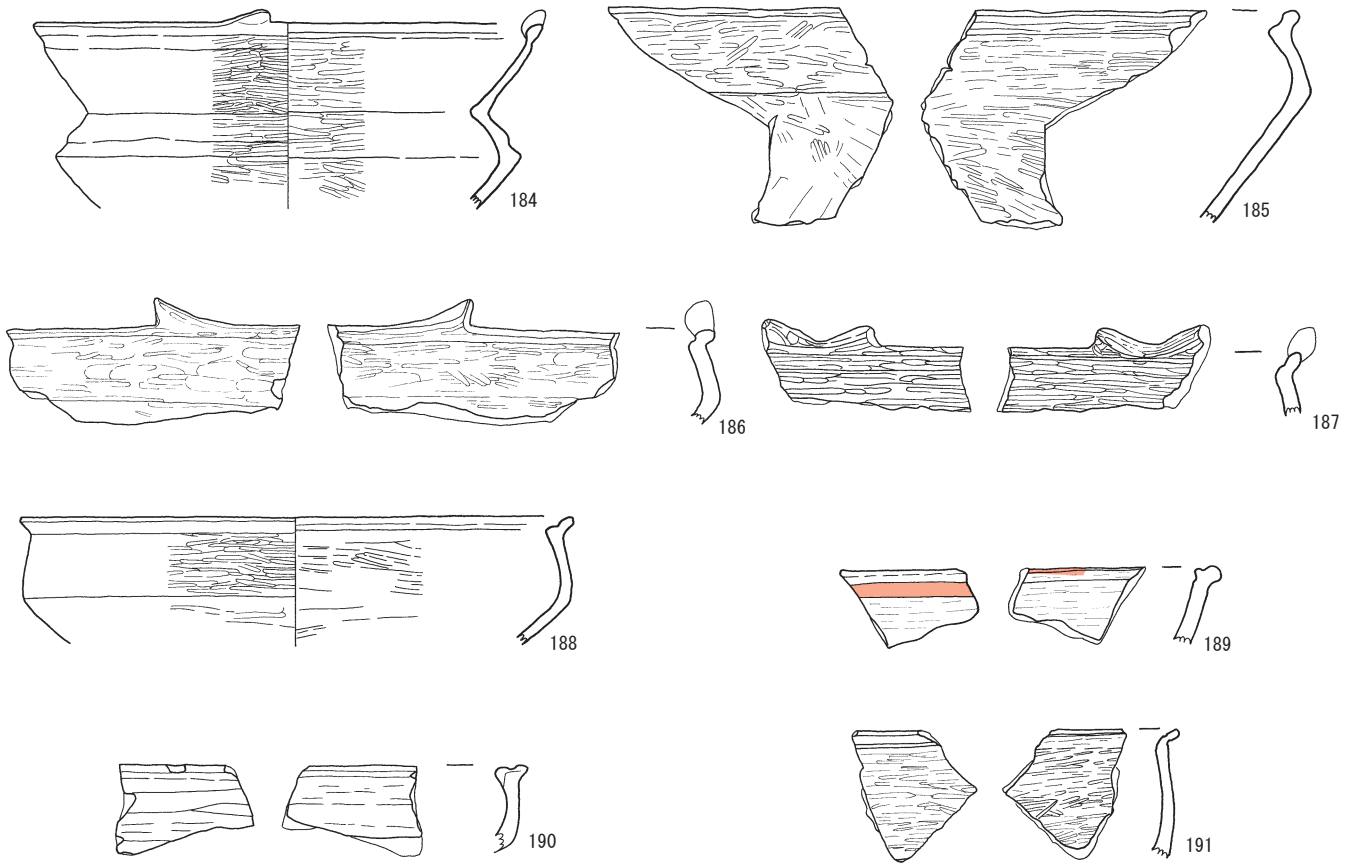
198と199は胴部屈曲がなく内湾ぎみに立ち上がる。198は内外面とも工具ナデを施す。199の口径は24.0cmである。外面はケズリのちナデ、内面は条痕を施す。200～202は内外面ともに丁寧なミガキによって仕上げる。200は底部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至る。口径は15.0cm、器高は6.3cmである。口縁端部外面に1条の沈線を施す。201は200と同じ器形とみられるが湾曲がやや強い。202は胴部で強く内湾する。口径は24.4cmである。屈曲部の稜は明瞭である。

V類：南西諸島系土器(縄文時代晩期併行土器)

(第55図 203～207)

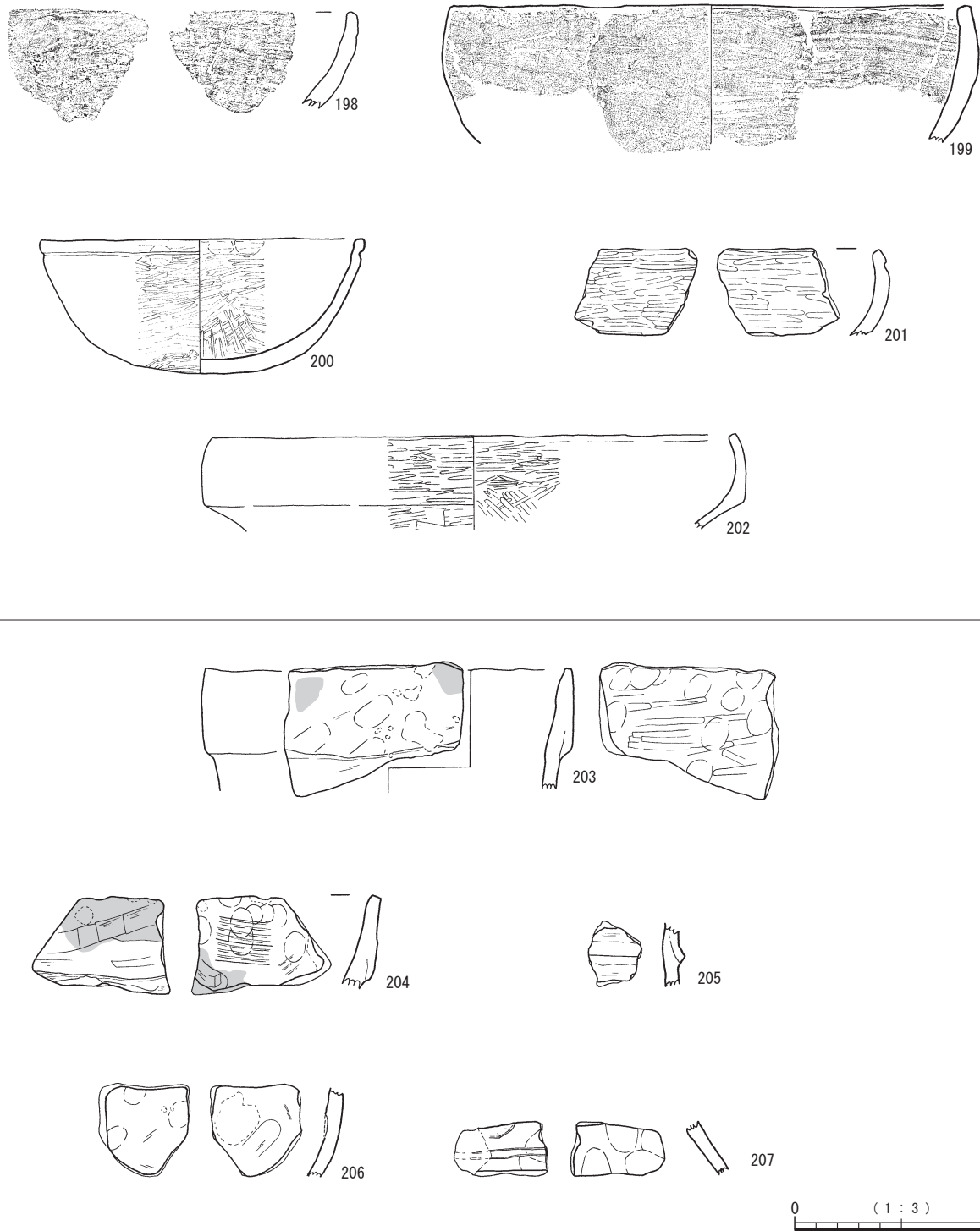
203～207は胎土が泥質であり、火山ガラスを多く含む。I～IV類とは異なる性質を示すため、別立てで分類した。器形及び胎土から南西諸島系土器の仲原式土器と考えられる。仲原式土器については詳細を第VIII章の総括に記述する。

203～206は甕の口縁部である。203は口縁部が肥厚し、肥厚帯下部がゆるやかな稜をもつ。口径は17.0cmである。胎土は泥質で摩擦が激しく、火山ガラスを多く含む。全体的に橙～赤色を呈し、外面はナデ、内面はナデのちミガキ調整を施す。口縁端部はユビオサエを施す。203の外面についた煤を年代測定した結果は、暦年較正



0 (1:3) 10cm

第54図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IVc・IVd類



第55図 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器 IⅤe・Ⅴ類

が 2σ :805-758calBC (92.63%), 679-672calBC (1.56%), 604-597calBC (1.26%) である。204は肥厚した口縁をもち、肥厚帯下部の稜が203よりも明確である。胎土はやや泥質であり、石英を少量含む。外面は工具ナデ、内面はユビオサエを施す。205は肥厚帯下部の稜が明確で、胎土は緻密である。内外面ともにユビオサエを

施す。206は甕または壺の胴部片である。胎土は泥質で火山ガラスを多量に含む。内外面は赤橙色、断面は黒色を呈しており色調は203に近い。207は壺の肩部である。外面には2条の細沈線を施す。内外面ともにユビオサエが明確に残る。

第6表 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器観察表(1)

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層	文様・器面調整		色調		胎土				取上番号	備考
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		
28	14	深鉢	I	土器集中1 (B-20)	Ⅲb	条痕	条痕	明赤褐	にぶい褐	○	○	○	○	1	他
	15	深鉢	I a	C-6	Ⅳ	条痕, ヘラナデ	条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	2176	他
	16	深鉢	I a	E-7	I	条痕風工具ナデ	ナデ	明褐	にぶい黄褐	○	○	○	○	—	
	17	深鉢	I a	D-4・5	I	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	—	
	18	深鉢	I a	E-7	Ⅲa	条痕, ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○	○	5408	
	19	深鉢	I a	—	I	条痕, ナデ	条痕, ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	—	
	20	深鉢	I a	E-7	Ⅲ	工具ナデ	条痕のちナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	△	○	○	1442	他
	21	深鉢	I a	E-7	Ⅲa	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい橙	橙	○	○	○	○	5186	
	22	深鉢	I a	E-7	Ⅲa	条痕のちナデ	条痕のちナデ	黄褐	にぶい黄	○	○	○	○	5585	他
	23	深鉢	I a	E-7	Ⅲa	工具ナデ	ナデ	褐	にぶい橙	○	△	○	○	5472	
	24	深鉢	I a	—	Ⅲ	工具ナデ, 指頭圧痕	工具ナデ, 指頭圧痕	橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	—	
	25	深鉢	I a	E-7	Ⅲa	条痕のちナデ	条痕のちナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	5296	
	26	深鉢	I a	D-8	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	○	5635	他
	27	深鉢	I a	C-5	Ⅲ	ハケ目	ハケ目	にぶい黄	浅黄	○	○	○	○	2201	他
	28	深鉢	I b	B-6	I, Ⅲ	工具ナデ, ミガキ	条痕のちナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	2329	他
	29	深鉢	I b	E-7	Ⅲ	条痕, ナデ, ケズリ	条痕のちナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	1452	他
	30	深鉢	I b	D-9	Ⅲ	条痕	条痕	橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	1164	
	31	深鉢	I b	E-7	I	条痕	工具ナデ	浅黄橙	浅黄	○	○	○	○	—	
	32	深鉢	I b	C-6	Ⅲa	ナデ, ミガキ	条痕	褐	明赤褐	○	△	○	○	3051	他
	33	深鉢	I b	E-7	Ⅲa	条痕のち工具ナデ	ナデ	橙	黒褐	○	△	○	○	5581	
	34	深鉢	I b	E-7	Ⅲa	条痕, ナデ	工具ナデ, ナデ	赤褐	黒褐	○	△	○	○	5089	他
	35	深鉢	I c	E-7	Ⅲa	条痕のちナデ	ナデ	橙	明黄褐	○	○	○	○	5327	他
	36	深鉢	I c	C-6	Ⅲb	工具ナデのちミガキ	ミガキ	黒褐	暗褐	○	△	○	○	3272	
	37	深鉢	I c	E-6	Ⅲa	ケズリのちナデ	条痕	赤褐	赤褐	○	△	○	○	5507	他
38	深鉢	I c	E-8	Ⅲ	工具ナデ, ナデ	条痕, 工具ナデ	明赤褐	黄褐	○	○	○	○	1484	他	
39	深鉢	I c	E-7	Ⅲa	条痕	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	5411	他	
40	深鉢	I c	E-6	Ⅲa	ケズリ	ケズリのちナデ	にぶい赤褐	赤褐	○	○	○	◎	5165	他	
41	深鉢	I d	D-7	Ⅲ	条痕	条痕のちナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○	○	1646	他	
42	深鉢	I d	E-7	I a, Ⅲa	条痕	工具ナデ, ケズリ	にぶい黄褐	褐	○	○	○	○	5082	他	
43	深鉢	I d	E-6	Ⅲa	条痕のちナデ	条痕のちナデ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○	○	5514	他	
44	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	ナデ, ケズリ	ミガキ	暗灰黄	にぶい黄橙	○	○	○	○	5202	他	
45	深鉢	I d	E-9	Ⅲa	ヘラナデ	ヘラナデ	黒褐	黄褐	○	○	○	○	1503	他	
46	深鉢	I d	C-5	Ⅲb	工具ナデのちナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	△	○	○	3186	他	
47	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	条痕のちナデ	条痕, ナデ	黒褐	褐	○	△	○	○	5214		
48	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	条痕, ナデ	条痕, 指頭圧痕	橙	橙	○	△	○	○	5109		
49	深鉢	I d	C-6	Ⅲ	条痕, ナデ	条痕, ナデ	にぶい赤褐	赤褐	○	△	○	○	2309		
50	深鉢	I d	C-7	Ⅲ	条痕	条痕のちナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	—		
51	深鉢	I d	C-7	I	条痕のちミガキ	条痕, ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	○	○	○	—		
52	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	ケズリ	条痕のちナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○	○	5157	他	
53	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい黄橙	明褐	○	○	○	○	1407	他	
54	深鉢	I d	C-5	Ⅲb	ミガキ	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	△	○	○	3196		
55	深鉢	I d	C-6	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	○	△	○	○	2244		
56	深鉢	I d	E-7	Ⅲb	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○	○	5579		
57	深鉢	I d	D-7	Ⅲ	工具ナデ	工具ナデ	灰黄褐	にぶい橙	○	○	○	○	1620		
58	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	条痕	条痕	にぶい黄橙	橙	○	○	◎	○	5152	他	
59	深鉢	I d	C-5	Ⅲ	工具ナデ	工具ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○	○	2236	他	
60	深鉢	I d	C-5	Ⅲb	ナデ	ナデ, ケズリ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	3200		
61	深鉢	I d	C-5	Ⅲb	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○	○	3183		
62	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	条痕	条痕	灰褐	明赤褐	○	○	○	○	5162		
63	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	5467	沈線	
64	深鉢	I d	E-7	Ⅲa	ヘラケズリのちミガキ	条痕のちナデ	黒褐	にぶい赤褐	○	△	○	○	5355		
65	深鉢	I d	D-9	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○	○	1123	他	
66	深鉢	I d	C-9	Ⅲb	工具ナデのちナデ	条痕のちナデ	にぶい褐	橙	○	○	○	○	5714	他	
67	深鉢	I d	E-6	Ⅲa	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	△	○	○	5573	他	
68	深鉢	I d	B・C-5・6	カクラン	条痕	条痕	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	カクラン		
69	深鉢	I d	C-5	Ⅲb	条痕のちナデ	条痕のちナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	△	○	○	3071	他	
70	深鉢	I d	F-7	Ⅲb	工具ナデ	ナデ	黒褐	にぶい褐	○	△	○	○	5125		
71	深鉢	I d	E-7	Ⅲb	工具ナデ	丁寧なナデ	にぶい赤褐	明赤褐	○	△	○	○	5734		
72	深鉢	I	E-8	Ⅲa	条痕, ナデ	ナデ	橙	橙	○	△	○	○	1356	他	
73	深鉢	I	E-7	Ⅲa	条痕のちミガキ	条痕	にぶい赤褐	明褐	○	△	○	○	5588		
74	深鉢	I	E-7	Ⅲa	条痕	条痕	にぶい赤褐	灰黄褐	○	△	○	○	5413		
75	深鉢	I	B-7	Ⅲb	条痕のちナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	△	○	○	3271		
76	深鉢	I	E-6	Ⅲa	ケズリのちナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	△	○	○	5615	他	
77	深鉢	I	E-6・7	Ⅲa	条痕, ナデ	ナデ, ミガキ	黒褐	黒褐	○	○	○	○	5271	他	

第7表 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器観察表(2)

挿図 番号	掲載 番号	器種	分類	出土区	層	文様・器面調整		色調		胎土				取上番号	備考	
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他			
41	78	深鉢	I	C-6	Ⅲa		条痕		にぶい黄褐	にぶい褐	○	△	○	3332	他	
	79	深鉢	I	E-7	Ⅲa	ケズリ, ナデ	ケズリ, ナデ	褐	にぶい褐	○	△	○	5430			
	80	深鉢	I	B-8	I	条痕, ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい橙	○	△	○	—			
	81	深鉢	I	E-9	Ⅲ	工具ナデ	ナデ	にぶい赤褐	黒褐	○	△	○	1504			
	82	深鉢	I	E-7	Ⅲa	ミガキ	ミガキ	黒褐	赤褐	○	△	○	5358			
	83	深鉢	I	C-5	Ⅲb	条痕	条痕	にぶい赤褐	明赤褐	○	△	○	2213	他		
42	84	深鉢	I	D-9	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○	1120			
	85	深鉢	I	D-8	I	条痕のちナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○		○	—			
	86	深鉢	I	—	I	ナデ	ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○	—			
	87	深鉢	I	F-11	Ⅲa	指頭圧痕, ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	◎	1034			
	88	深鉢	I	C-6	Ⅲa	指頭圧痕, ナデ	ナデ	黄橙	褐灰	○	○	○	小礫	3305	他	
	89	深鉢	I	C-4	Ⅲ	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○	2189			
	90	深鉢	I	E-7	Ⅲa	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	△	○	5410			
	91	深鉢	I	—	Ⅲ	工具ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○	小礫	—		
	92	深鉢	I	E-7	Ⅲa	ナデ	ナデ	橙	明黄褐	○			5551	他		
	93	深鉢	I	D-8	Ⅲa	ナデ, 指圧痕	ナデ	にぶい黄橙	灰黄	○	○	○	5111	他		
	94	深鉢	I	E-6	Ⅲa	ケズリ, 条痕のちナデ	条痕のちナデ	明赤褐	橙	○	○		5142	他	煤	
	95	深鉢	I	D-9	Ⅲa	工具ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐	○	○	○	5140	他		
	43	96	深鉢~中華鍋	Ⅱ	E-7	Ⅲa	工具ナデ	ミガキ	褐	にぶい褐	○	△	○	5191	他	鱗状突起
		97	深鉢~中華鍋	Ⅱ	C-6	Ⅲb	ヘラナデ	ミガキ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	△	○	3303	他	
98		深鉢~中華鍋	Ⅱ	E-7	Ⅲa	ナデのちミガキ	ミガキ	橙	橙	○	○	○	5187			
99		深鉢~中華鍋	Ⅱ	—	Ⅲ	工具ナデ	ミガキ	にぶい橙	にぶい褐	○		○	—			
100		深鉢~中華鍋	Ⅱ	E-7	Ⅲa	条痕のちミガキ	条痕のちミガキ	灰黄褐	黒褐	○	△	○	5330	他		
101		深鉢~中華鍋	Ⅱ	C-6	Ⅲ	ナデ	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○		○	2315			
102		深鉢~中華鍋	Ⅱ	E-7	Ⅲa	条痕のちナデ	ミガキ	褐	褐	○	○	○	5337	他		
103		深鉢~中華鍋	Ⅱ	E-8	Ⅱ	条痕	ミガキ	明赤褐	にぶい黄褐	○	△	○	1360			
104		深鉢~中華鍋	Ⅱ	E-7	Ⅲa	条痕	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○	△	○	5423			
105		深鉢~中華鍋	Ⅱ	E-7	Ⅲa	条痕	ミガキ	褐	灰黄褐	○	△	○	5171			
106		深鉢~中華鍋	Ⅱ	C-6	Ⅲ	条痕のちナデ	ミガキ	にぶい赤褐	明赤褐	○	△	○	2242	他		
44	107	中華鍋	Ⅲa	E-8	Ⅲa	工具ナデ	ミガキ	明褐	橙	○	○	○	1468	他	鱗状突起	
	108	中華鍋	Ⅲa	D-9	Ⅲ	ケズリのちナデ	ミガキ	橙	明赤褐	○	○	○	1161	他	鱗状突起	
	109	中華鍋	Ⅲa	E-9	Ⅲa	条痕	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○		○	1388	他		
45	110	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	ケズリのちナデ	ミガキ	にぶい黄褐	褐	○	○	○	5164	他		
	111	中華鍋	Ⅲa	E-7	I~Ⅲ	条痕	工具ナデのち丁寧なナデ 丁寧なミガキ	橙	褐	○	○	○	1229	他		
46	112	中華鍋	Ⅲa	E-8	Ⅲa	条痕のちミガキ	条痕のちミガキ	にぶい黄橙	橙	○	○	○	1470	他		
	113	中華鍋	Ⅲa	D-9・10	Ⅲ	条痕	ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	—			
	114	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	ヘラナデ	ミガキ	褐	にぶい褐	○	○	○	5520	他		
	115	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	条痕	丁寧なミガキ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	△	5100			
	116	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	条痕	条痕, ミガキ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○	○	5554			
	117	中華鍋	Ⅲa	B-6	Ⅲa	条痕のちナデ	ミガキ	オリーブ黒	にぶい黄褐	○	○	○	小礫	3286		
	118	中華鍋	Ⅲa	E-8	Ⅲa	工具ナデ	ミガキ	黒褐	にぶい褐	○	○	○	5110	他		
47	119	中華鍋	Ⅲa	C~E-9・10	I	条痕のちナデ	ミガキ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○	—			
	120	中華鍋	Ⅲa	D-7	Ⅲ	条痕のちナデ	ミガキ	黒褐	にぶい褐	○	○	○	1648	他	年代測定試料No.3, 煤	
	121	中華鍋	Ⅲa	D-6・7	I	工具ナデ	丁寧なミガキ	橙	にぶい黄橙	○	○	○	小礫	—		
	122	中華鍋	Ⅲa	C-6	Ⅲa	工具ナデ	丁寧なミガキ	明赤褐	明褐	○		○	3241			
48	123	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	△	○	5559			
	124	中華鍋	Ⅲa	C-6	Ⅲ	条痕, ナデ	ミガキ	褐灰	にぶい赤褐	○	△	○	2263			
	125	中華鍋	Ⅲa	E-8	Ⅲ	工具ナデ	ミガキ	暗赤褐	黒褐	○	△	○	1395			
	126	中華鍋	Ⅲa	C-5	Ⅲb	条痕, ナデ	ミガキ	にぶい褐	灰黄褐	○	△	○	3095			
	127	中華鍋	Ⅲa	D-8	Ⅲa	条痕, ナデ	ミガキ	橙	黒褐	○	△	○	5638			
	128	中華鍋	Ⅲa	E-6	Ⅲ	条痕, ナデ	ミガキ	橙	にぶい褐	○	○	○	5335	他		
	129	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	条痕	ミガキ	明赤褐	黒褐	○	△	△	5424			
	130	中華鍋	Ⅲa	B-6	Ⅲa	条痕	ミガキ	にぶい褐	褐灰	○	△	○	3287			
	131	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	工具ナデ	ミガキ	にぶい赤褐	黒褐	○	△	○	5365			
	132	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	条痕のち工具ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐	○	△	○	5471	他		
	133	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲ	条痕のちナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐	○	△	○	5633	他		
49	134	中華鍋	Ⅲa	D-9・10	I	条痕, ナデ	ミガキ	にぶい褐	黒	○	△	○	—			
	135	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	ナデ	ミガキ	にぶい橙	明褐	○	△	○	5192	他		
	136	中華鍋	Ⅲa	E-7	Ⅲa	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	黒	○	△	○	5310	他		
	137	中華鍋	Ⅲa	D-9	Ⅲ	ナデ	ミガキ	にぶい橙	黒褐	○	△	○	1112			
	138	中華鍋	Ⅲa	C-6	Ⅲa	ナデ	ミガキ	橙	黒褐	○	△	○	3314	他		
	139	中華鍋	Ⅲa	E-8	Ⅲ	条痕	ミガキ	橙	黒褐	○	△	○	1494			
	140	中華鍋	Ⅲa	D-7	Ⅲb	条痕, ナデ	ミガキ	橙	黒	○	△	○	5727	他		

第8表 萩ヶ峰遺跡 縄文時代晩期土器観察表(3)

挿図番号	掲載番号	器種	分類	出土区	層	文様・器面調整		色調		胎土				取上番号	備考
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	その他		
50	141	中華鍋	IIIb	D-5	IIIb	アングイン	ミガキ	明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		3257	他
	142	中華鍋	IIIb	E-7	IIIa	アングイン	ミガキ	にぶい橙	褐	○	△	○		5101	他
	143	中華鍋	IIIb	C-5	III	アングイン	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	△	○		2379	
	144	中華鍋	IIIb	C-5	IIIa	アングイン	ミガキ, ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	△	○		3328	
	145	中華鍋	IIIb	E-7	IIIa	アングイン	ミガキ	にぶい橙	黒	○	△	○		5233	
	146	中華鍋	IIIb	B・C-5・6	III	アングイン	ナデ	にぶい橙	暗赤褐	○	△	○		—	
	147	中華鍋	IIIb	D-9・10	III	アングイン	ナデ	橙	褐	○	△	○		—	
	148	中華鍋	IIIb	E-7	III	アングイン	ミガキ, ナデ	にぶい橙	黒	○	△	○		1347	年代測定試料№1, 煤
	149	中華鍋	IIIb	D-9	III	アングイン	ナデ	橙	褐	○	△	○		1160	
	150	中華鍋	IIIb	E-7	IIIa	アングイン	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	△	○		5195	他
	151	中華鍋	IIIb	C-5	IIIb	アングイン	ナデ	にぶい赤褐	暗赤褐	◎	△	○		3208	他
	152	中華鍋	IIIb	C~E-9・10	I	アングイン	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	△	○		—	
51	153	浅鉢	IVa	E-6	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	暗褐	黒	△		○		5380	他 リボン状突起, 鱗状突起, 沈線(赤色顔料)
	154	浅鉢	IVa	E-6	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	暗褐	褐	△		△		5334	他 沈線
	155	浅鉢	IVa	E-6	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい黄褐	灰黄褐	○		○		5377	
	156	浅鉢	IVa	E-7	IIIa	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ	にぶい黄	黄褐	○		○		5225	
	157	浅鉢	IVa	E-7	I	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	灰黄褐	褐灰	○	△	○		—	赤色顔料, 沈線
	158	浅鉢	IVa	D-9	III	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	橙	明赤褐	○		○		1127	他 三又文, 補修孔
	159	浅鉢	IVa	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	やや粗雑なミガキ	にぶい黄褐	にぶい褐	○		○		5632	他 沈線
	160	浅鉢	IVa	C-6	III	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい赤褐	褐灰	○	△	○		2282	沈線
	161	浅鉢	IVa	C-6	IIIb	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい黄褐	灰黄褐	○	△	○		3017	他 赤色顔料, 沈線
	162	浅鉢	IVa	C-12	IIIb	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ	にぶい黄橙	灰	○	○	○		399	沈線
52	163-1	浅鉢	IVb	E-6	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	赤褐	オリーブ黒	△		△		5268	他 リボン状突起, 鱗状突起, 沈線
	163-2	浅鉢	IVb	E-6	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	黒褐	黒褐	△		△		5463	
	164	浅鉢	IVb	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ, ナデ	明黄褐	橙	○		○		5599	他 リボン状突起, 鱗状突起
	165	浅鉢	IVb	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	褐	にぶい黄褐	○	△	○		5207	他 沈線, 鱗状突起
	166	浅鉢	IVb	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	明赤褐	黒褐	○		△		5249	
	167	浅鉢	IVb	B-7	I	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ, ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○		—	沈線
	168	浅鉢	IVb	E-6	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	赤褐	明褐	○		○		5475	他 沈線
	169	浅鉢	IVb	C-6	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	橙	にぶい黄褐	○		○		3043	沈線
	170	浅鉢	IVb	B-7	II	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ, ナデ	橙	にぶい黄橙	○		○		1600	沈線
	171	浅鉢	IVb	B	IIIb	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ	黄橙	浅黄	○		○		5693	沈線
	172	浅鉢	IVb	B・C-5・6	IV	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	淡赤橙	灰赤	○	△	○		85	沈線
	173	浅鉢	IVb	C-5	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい赤褐	黒褐	○	△	○		3321	沈線
	174	浅鉢	IVb	E-7	IIIa	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ, ナデ	明赤褐	浅黄	○	○	○		5548	沈線
	175	浅鉢	IVb	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	褐	黒褐	○	△	○		5442	他 沈線
	176	浅鉢	IVb	E-6	IIIa	ミガキ	ミガキ	明赤褐	橙	○	△	△		5465	沈線
	177	浅鉢	IVb	C-6	III	ミガキ	ナデ	橙	明赤褐	○		○		2241	沈線
	53	178	浅鉢	IVb	E-7	IIIa	ミガキ	ミガキ	明赤褐	赤黒	○	△	△		5167
179		浅鉢	IVb	C-5	IIIb	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	にぶい赤褐	暗赤褐	○	○	○		3206	
180		浅鉢	IVb	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	赤褐	黒褐	○	△	○		5255	年代測定試料№2, 煤
181		浅鉢	IVb	—	I	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	褐	明黄褐	○		○		—	
182		浅鉢	IVb	E-7	IIIa	ナデ	ミガキ	明赤褐	黒褐	○	△	△		5245	他
183		浅鉢	IVb	C-6	III	ミガキ	ヘラナデ	明赤褐	赤褐	○	△	△		2156	他
184		浅鉢	IVc	B-7	III	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい褐	にぶい黄橙	◎	△	○	小礫	2138	鱗状突起, 沈線
54	185	浅鉢	IVc	E-7	IIIa	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ	にぶい褐	灰黄褐	○		○		5169	他 沈線
	186	浅鉢	IVc	E-7	IIIa	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ	褐	にぶい黄褐	○		○		5160	鱗状突起, 沈線
	187	浅鉢	IVc	E-7	I	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	明赤褐	黒褐	○		○		—	リボン状突起, 沈線
	188	浅鉢	IVc	C-5	III	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○			2200	沈線
	189	浅鉢	IVc	D-8	カクラン	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ, ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	◎	○	○		カクラン	赤色顔料, 沈線
	190	浅鉢	IVc	D-9・10	I	丁寧なミガキ, 工具ナデ	丁寧なミガキ, 工具ナデ	明褐	にぶい黄褐	○		○		—	沈線
	191	浅鉢	IVc	—	カクラン	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	褐	黒	○		○		—	沈線
	192	浅鉢	IVd	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	褐	にぶい褐	○		○		5182	他
	193	浅鉢	IVd	E-7	III	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ	橙	にぶい黄橙	○		○		1406	他
	194	浅鉢	IVd	E-7	I	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	明褐	橙	○	○	○		—	
	195	浅鉢	IVd	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	暗褐	黒褐	○	△	△		5495	
	196	浅鉢	IVd	C-5	IIIb	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	△		3130	沈線
	197	浅鉢	IVd	C-7	カクラン	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	灰褐	褐	○	○	○		カクラン	穿孔
	55	198	浅鉢	IVe	E-7	IIIb	工具ナデ	工具ナデ	赤褐	赤褐	○	△	○		5594
199		浅鉢	IVe	E-7	IIIa	ケズリのちナデ	条痕	暗褐	明褐	○		○		5324	他
200		浅鉢	IVe	E-7	IIIa	丁寧なミガキ, 指頭圧痕	丁寧なミガキ, 指頭圧痕	赤褐	赤褐	○		○		5557	他 沈線
201		浅鉢	IVe	E-7	IIIa	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい赤褐	灰褐	○	△	○		5518	他 沈線
202		浅鉢	IVe	B-6, E-7	III	丁寧なミガキ, ナデ	丁寧なミガキ, ナデ	明黄褐	にぶい黄橙	○		○		3243	他
203		甕	V	C-6	III	ナデ, 指頭圧痕	ナデのちミガキ, 指頭圧痕	橙	灰黄褐	○	△	○		2288	年代測定試料№7, 煤
204		甕	V	C-5	IIIb	工具ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	橙	橙	△	○	○		3184	煤
205		甕	V	E-7	IIIa	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	にぶい橙	橙	○	○	○		5240	三角突帯
206		甕か壺	V	C-5	IIIa	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	明赤褐	明褐	○	○	○		3325	
207		壺	V	B-6	IIIa	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		3290	沈線

(2) 石器 (第57～68図 208～278)

縄文時代晩期から古墳時代の石器は、主にⅢa・Ⅲb層から出土した。石器の形状から時期を特定することが難しいためまとめて報告する。なお、本遺跡から出土した石器の石材(チャート, 頁岩, ホルンフェルス, 黒曜石, 蛇紋岩, 安山岩, 砂岩, 花崗岩)のうち, 黒曜石とホルンフェルスは以下のように分類した。

黒曜石

三船産・腰岳産のもの。

ホルンフェルス

A: 黄灰色を呈するもの。

B: 暗灰色を呈し乳白色の方向性をもたない筋状の斑が無数に走るもの。

C: 暗青灰色から暗灰色を呈するもので, 砂や小礫を含むもの。自然面の状態からさらに分けられる可能性があるが, 細かい分類は行っていない。

本遺跡から出土した石器の器種と掲載点数は, 打製石鏃10点, 磨製石鏃1点, 二次加工剥片1点, 石匙1点, 石核1点, 石錘2点, 打製石斧27点, 磨製石斧5点, 磨敲石13点, ハンマー2点, 台石2点, 石皿1点, 砥石4点, 礫器1点である。分類については細分類を行えるほど出土量がないため, 分類作業は行っていない。

①石鏃 (第57図 208～218)

主にⅢ層から出土した。可能な限り全点を図化した。出土石器を総じて見て大別を行った。

平面形状は, 二等辺三角形・正三角形・五角形のものがある。基部は, 深い凹基・浅い凹基・平基のものがある。

これらについて, さらに細かく分けその組み合わせから分類が可能であろうが, 出土点数が少ないため特に類分けを行わなかった。個々の文中に特徴を記しておく。

(1) 打製石鏃 (208～217)

平面形が二等辺三角形のものと五角形のもののみみられた。基部は, 凹基, 平基である。凹基は, 深いものと浅いものがある。

208は, 三船産の黒曜石を素材とし, 正面裏面ともによく加工されている。平面形状は二等辺三角形であり, 基部は深い凹基で端部は丸みをもたせて作出もしくは平坦にしている。209は, チャートを素材とし, 正面裏面ともによく加工されている。基部の両方を欠いているが平面形状は二等辺三角形であり, 基部は深い凹基であることが推測できる。210は, 頁岩を素材とし, 正面裏面ともによく加工されている。先端部と基部の右側を欠いているが平面形状は二等辺三角形であり, 基部は深い凹基であることが推測できる。基部の先端は鋭角に作出されている。211は, 腰岳産の黒曜石を素材とし, 正面裏面ともによく加工されている。先端部と基部の左側を欠

いているが平面形状は二等辺三角形であり, 基部はかなり深い凹基であることが推測できる。基部の先端は鋭角に作出されている。212は, 頁岩を素材とし, 正面裏面ともに剥離面が残る。平面形状は二等辺三角形であり基部はやや丸みを帯びた平凹基である。213は, 三船産の黒曜石を素材とし, 正面裏面ともによく加工されている。先端部と基部の右側を欠いているが平面形状は二等辺三角形であり, 基部はやや深い凹基であることが推測できる。基部の先端は丸みを帯びて鋭角に作出されている。断面形状が他のものよりも丸みを帯びている。214は, 頁岩を素材とし, 正面裏面ともに剥離面が残る。先端部と基部の左側を欠いているが平面形状は二等辺三角形であり, 基部はやや深い凹基であることが推測できる。基部の先端は丸みを帯びて鋭角に作出されている。215は, 頁岩を素材とし, 正面裏面ともによく加工されている。平面形状は五角形であり, 基部は浅い凹基であることが推測できる。基部の先端は丸みを帯びて鋭角に作出されている。216は, 頁岩を素材とし, 裏面に剥離面が残る。基部の右側を欠いているが平面形状は五角形であり, 基部は浅い凹基であることが推測できる。217は, 頁岩を素材とし, 正面裏面ともによく加工されている。先端部を欠いているが平面形状は五角形であることが推測でき, 基部は浅い凹基である。

(2) 磨製石鏃 (218)

218は, ホルンフェルスBを素材としている。正面裏面ともによく加工され, 基部もよく擦られている。完形で平面形状は二等辺三角形であり, 基部は浅い凹基である。正面裏面ともに稜をよく残しており, 摩耗による光沢がある。

② 二次加工剥片 (第57図 219)

219は, 三船産の黒曜石を素材とする。正面に自然面を残している。

③ 石匙 (第57図 220)

220は, 腰岳産の黒曜石を素材とする。完形である。裏面体部には, 剥離面を残しその他はよく加工されている。断面形は三角形から略四角形である。つまみの挟りは深くはなく, 長い。

④ 石核 (第57図 221)

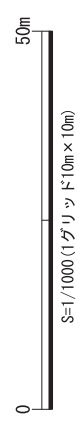
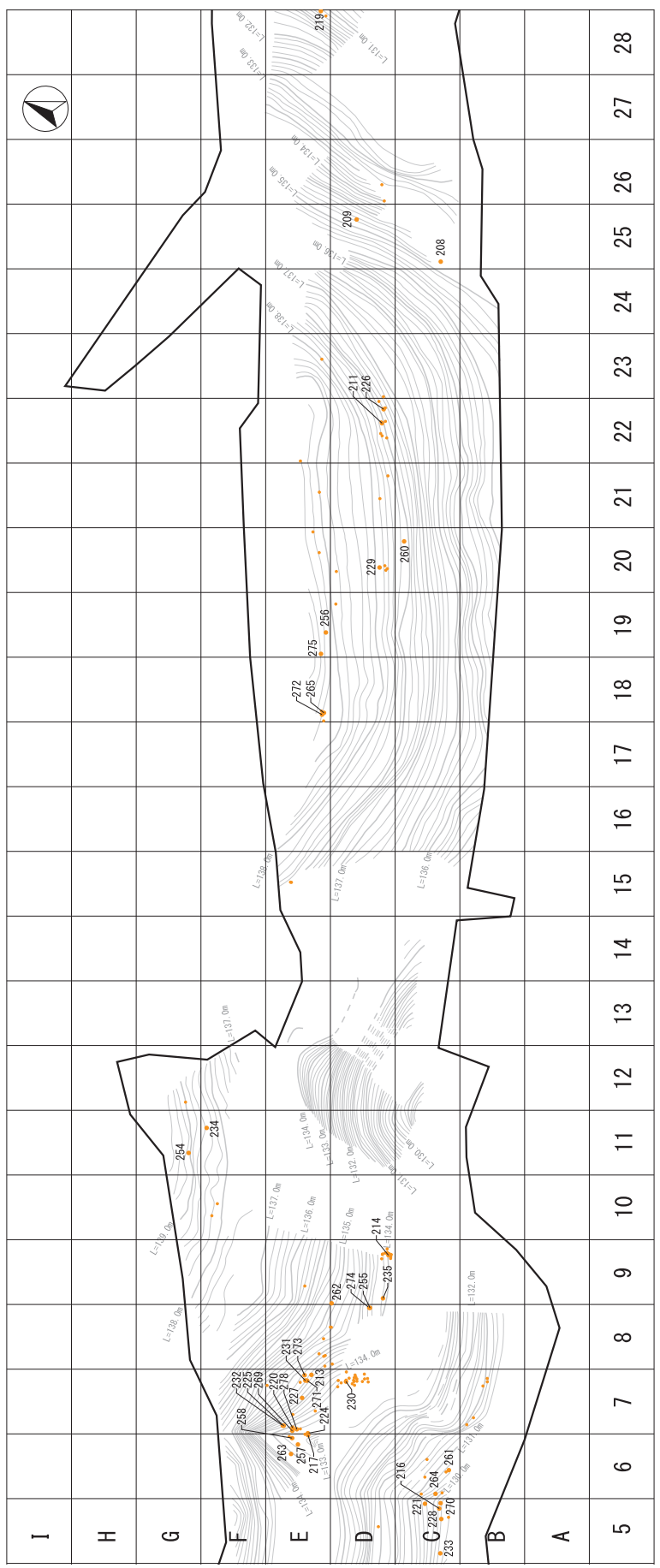
221は, 腰岳産の黒曜石の石核である。全体に自然面を残している。剥離面が2面あり, その1面に大きな不純物がみられる。

⑤ 石錘 (第58図 222, 223)

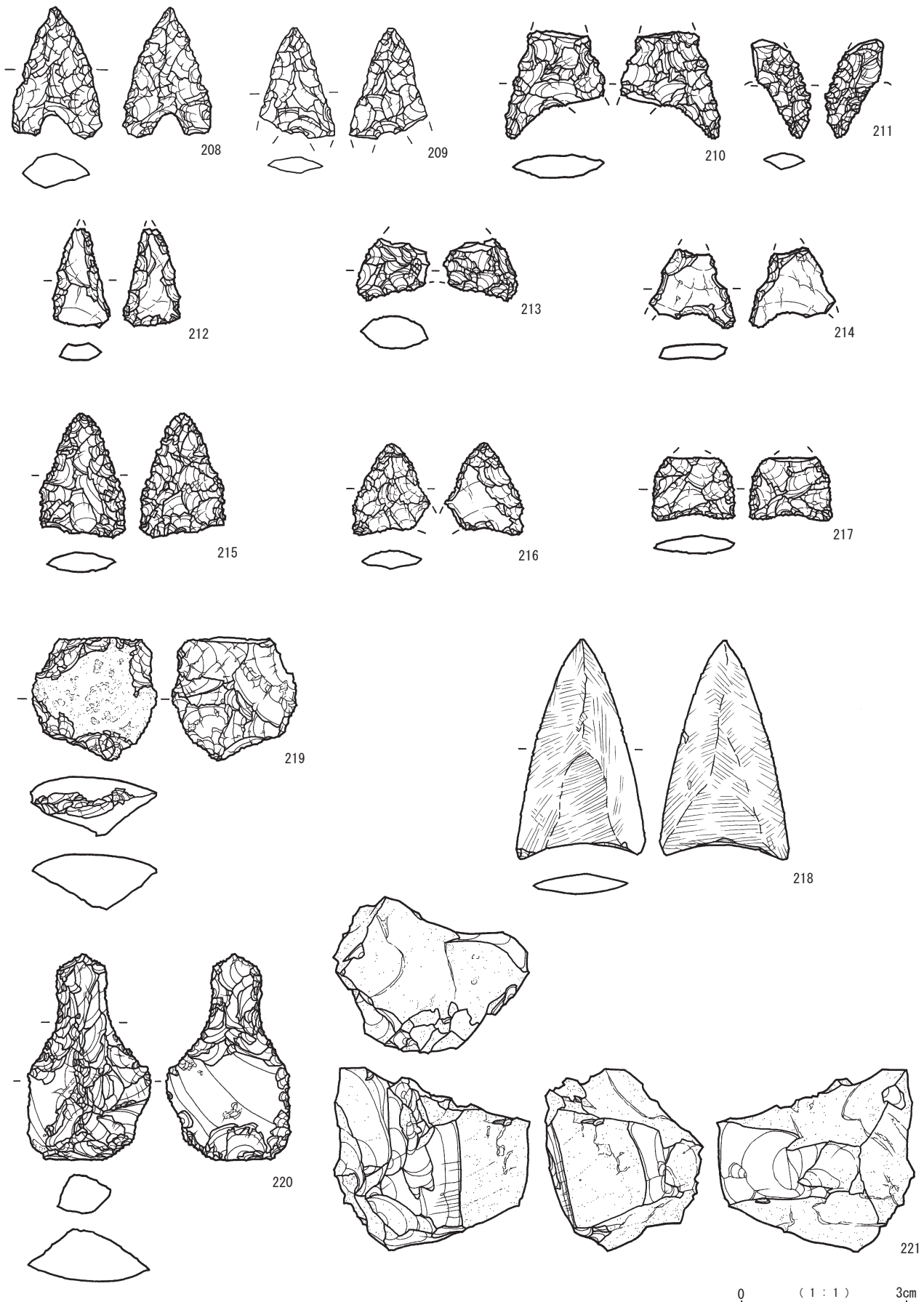
2点出土した。いずれも完形である。

222は, やや多孔質な安山岩を素材としている。扁平

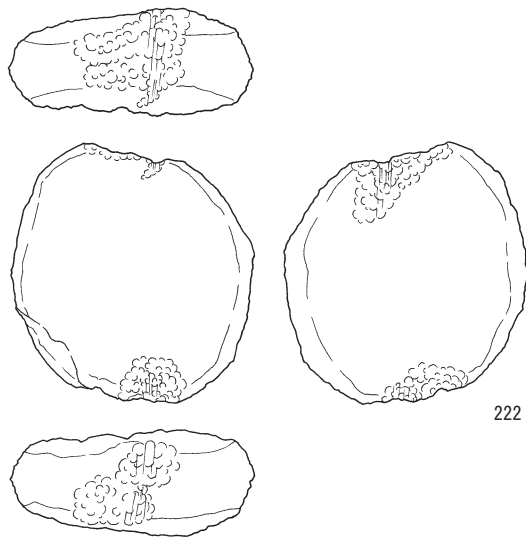
【石器】
 ● II・III層
 ※小ドットは非掲載
 ※-VI・IV層コンタ



第56図 萩ヶ峰遺跡 II・III層石器出土分布図



第57図 萩ヶ峰遺跡 石鏃・二次加工剥片・石匙・石核



222



223

0 (1:2) 5cm

第58図 萩ヶ峰遺跡 石錘

な略円形状の自然礫を利用し、上面・下面中央に敲打による打ち欠きが施されている。打ち欠き以外に加工はみられず、使用痕はない。

223は、節理の目立つホルンフェルスCを素材としている。扁平な棒状を呈する自然礫を利用し、上面・下面中央に擦切りによる抉りが施されているが上面は1条の擦切りで、下面は4条以上の擦切りで施される。下面は抉りの一部が割れているため正確な条数は不明である。また、割れの原因が使用による破損であるかは不明である。その他明瞭な使用痕はない。

⑥ 石斧 (第59～63図 224～255)

破片を含めて、打製石斧27点と磨製石斧5点が出土した。打製石斧は、萩ヶ峰遺跡で最も出土数が多かった石器である。磨製石斧は良質な蛇紋岩製のものとホルンフェルス製のものがあつた。

(1) 打製石斧 (第59～62図 224～250)

形態から基部が3種に、刃部が4種に分けられるものが出土しているが、出土点数が少ないため細分は行っていない。また、分類はI層の表土と攪乱内から出土したものも含めて行った。基部・刃部の分類については以下の通りである。

基部I類 抉りが明瞭で上端が山形～膨らみをもつもの。

基部II類 抉りが明瞭で上端が扁平なもの。

基部III類 抉りの凹みが不明瞭で基部上端に至るもの。

刃部A類 四角形に近いもの。

刃部B類 丸みを帯びた菱形に近いもの。

刃部C類 円形に近いもの。

刃部D類 三角形から不定形なもの。

基部端部・抉り・刃部の属性の組み合わせによる細分類ができる可能性があるが、本報告での出土点数では難しいため、基部形態を基にIII層出土のものとしてI層の表土と攪乱内から出土したものを分けて掲載する。

打製石斧のほとんどに抉りの箇所が剥離で鋭角になった箇所を潰す加工が施されていた。

III層出土

基部I類 (224～226)

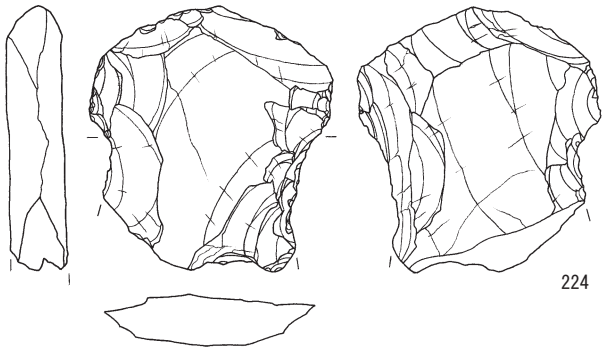
224～226の3点である。

224, 225は、基部のみが残存している。224は、ホルンフェルスBを素材としている。表面の風化は他よりも進んでいない。上端の頂部はやや丸みを帯び摩滅光沢があり、剥離により面を有する成形がなされている。225は、ホルンフェルスBを素材としている。上端の剥離の稜線に摩滅光沢があり、剥離により面を有する成形がなされている。226は、完形である。ホルンフェルスAを素材としている。刃部はA類で全長が9cm程度と短いものである。裏面は素材からの剥離をよく残し、上端は成形の剥離で面を有している。

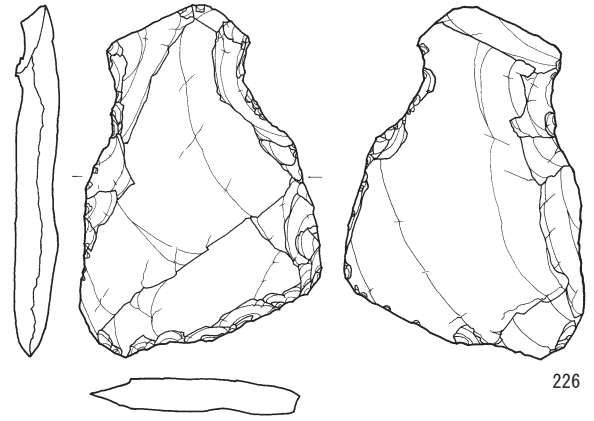
基部II類 (227)

完形の1点のみであった。

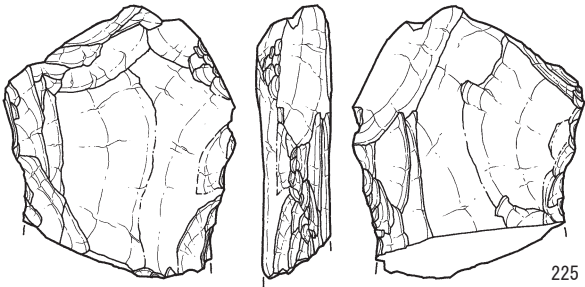
227は、ホルンフェルスBを素材としている。正面には自然面を残し、裏面は剥離面で節理面も残している。刃部はB類で全長が9cm程度と短いものである。上端の剥離の稜線に広く摩滅光沢がある。



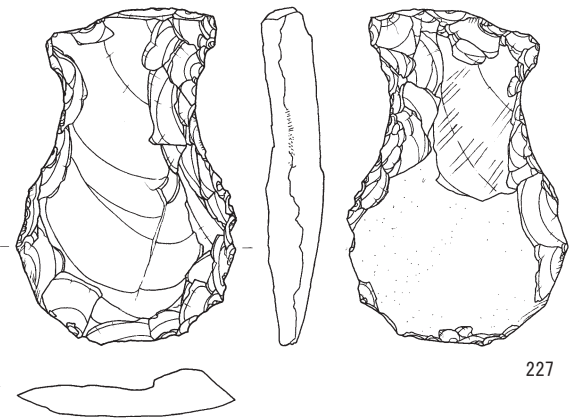
224



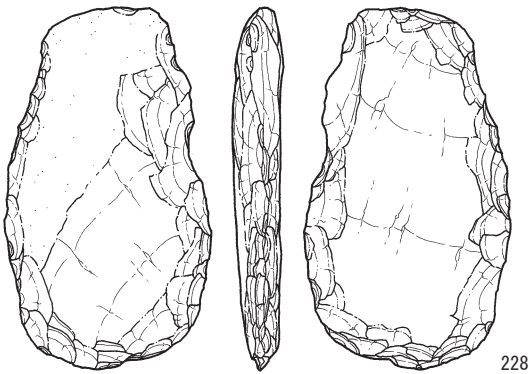
226



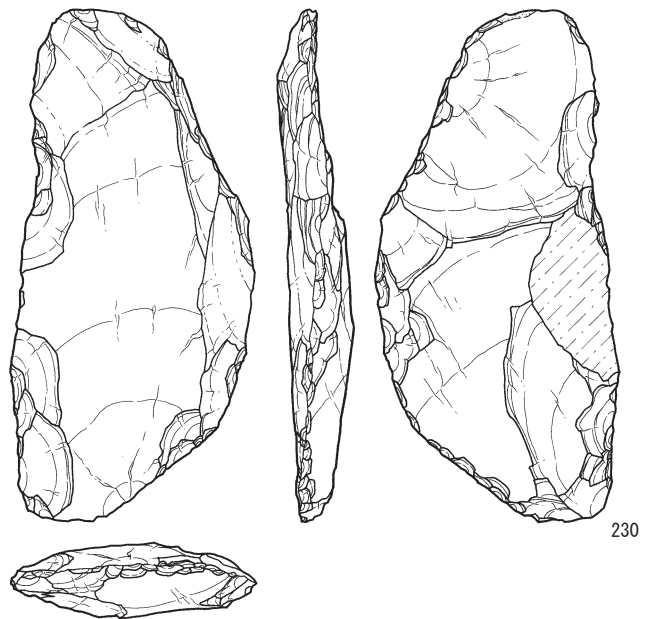
225



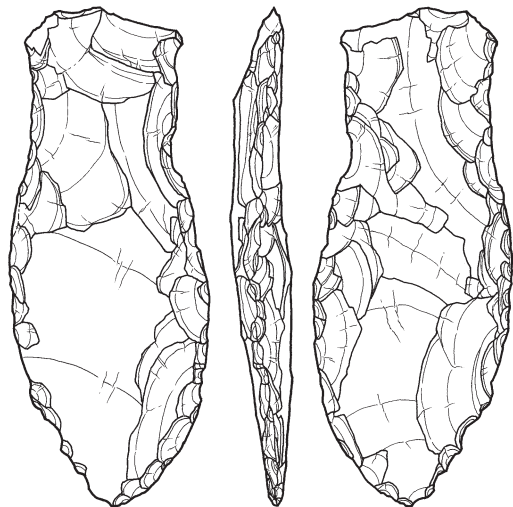
227



228



230

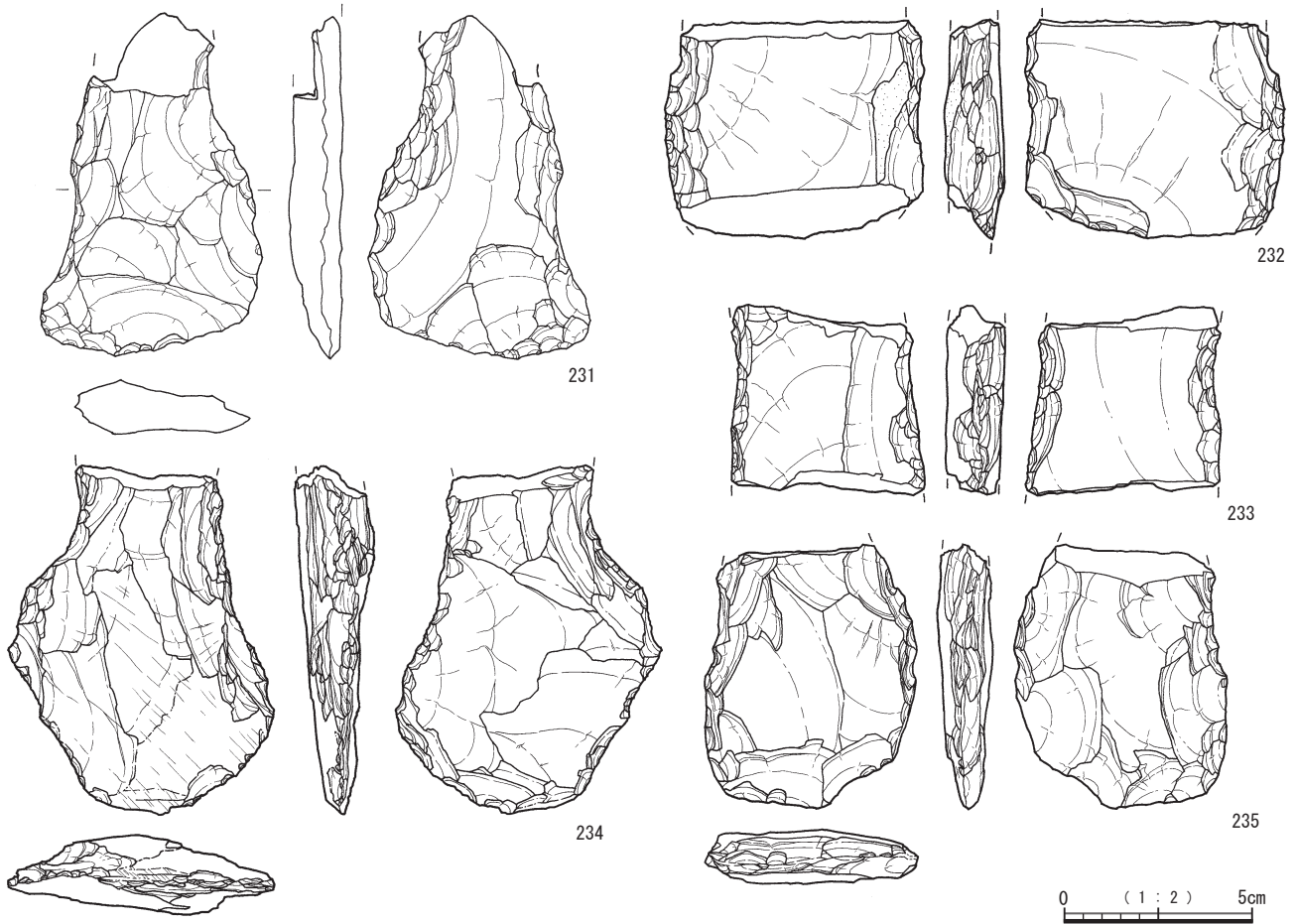


229



0 (1:2) 5cm

第59図 萩ヶ峰遺跡 打製石斧(1)



第60図 萩ヶ峰遺跡 打製石斧(2)

基部Ⅲ類 (228～230)

完形の3点のみであった。228は、ホルンフェルスAを素材としている。正面には自然面を残し、裏面は剥離面である。刃部はA類で全長が9cm程度と短いものである。右側面中位に小さい抉りがある。基部上端部は平坦であるが自然面を残し、成形の剥離は少ない。229は、ホルンフェルスBを素材としている。刃部はB類で基部上端部は平坦である。全長が13cm程度である。230は、ホルンフェルスBを素材としている。正面は剥離面で、裏面には節理面が残る。刃部はD類で刃部右側と体部の稜線に摩滅光沢がある。基部は丸みを帯びており、全長が13cm程度である。

破片 (231～235)

231は、基部または刃部から体部の残存である。基部であれば刃部Ⅲ類またはⅡ類でやや膨らみをもつものであり、刃部であれば刃部D類であると考えられる。一部に摩滅光沢がみられる。ホルンフェルスBを素材とする。232, 233は、体部のみの残存である。ともに側面は平行線状で基部Ⅲ類のものであると推測する。232がホルンフェルスA, 233がホルンフェルスBを素材とする。断面が三角形状であり、正面の稜線には摩滅光沢が残るた

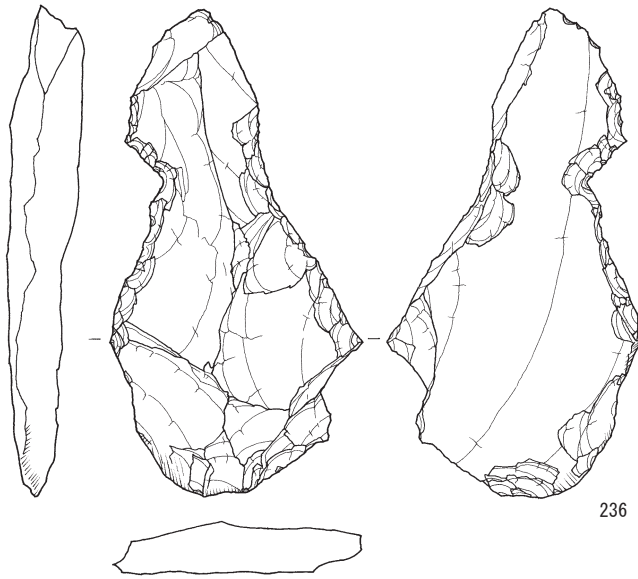
め緊縛の箇所である可能性が高い。234は、刃部から体部の残存である。刃部D類であると考えられる。正面に素材の剥離面を残し、この刃先の一部に摩滅光沢がみられる。頁岩を素材とする。風化は進んでいない。235は、刃部の残存である。ホルンフェルスBを素材としている。刃部と側面に摩滅光沢がみられる。

I層・攪乱層出土

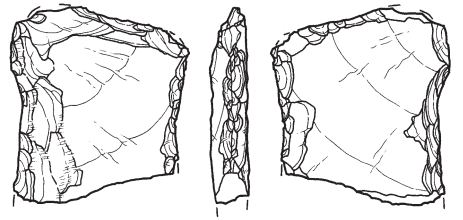
236～250は、I層と攪乱内から出土したものである。

基部のIからⅢ類、刃部のA～D類が出土し、素材はホルンフェルスAとBである。

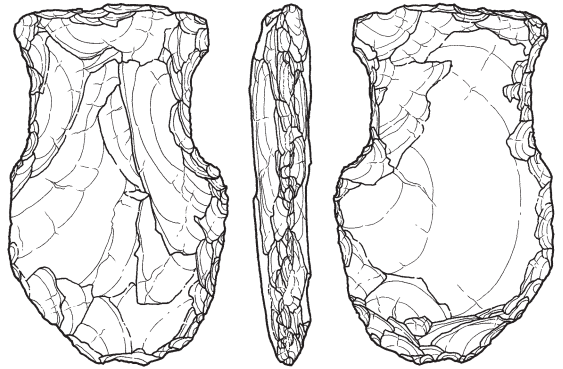
236は、基部I類・刃部A類で基部と刃部の一部を打ち欠いている。全長13cmほどのものと推定する。刃部の刃先と側面に摩滅光沢がみられる。238は、基部Ⅱ類・刃部A類の完形で、全長9cm程度のものである。239は、基部Ⅱ類のもので、摩滅光沢が広くみられる。241は、基部Ⅱ類・刃部A類の完形で、全長13cm程度のものである。刃部の刃先と側面に摩滅光沢がみられる。242は、基部Ⅲ類・刃部C類の基部の一部を欠くもので、全長13～14cm程度のものである。2点が接合したものである。刃部の側面に摩滅光沢がみられる。刃部はB類であったものが破損の修繕で現形になったものである可能性があ



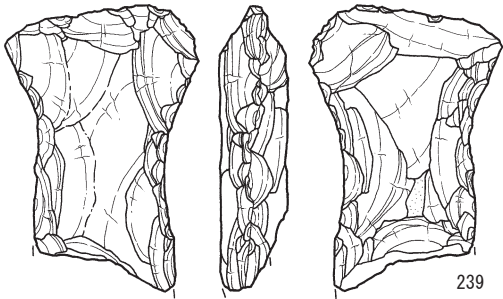
236



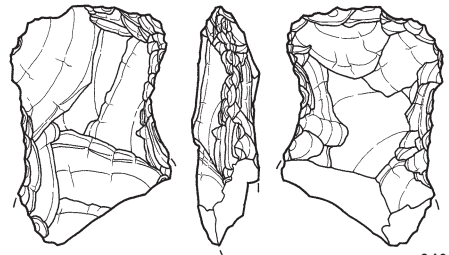
237



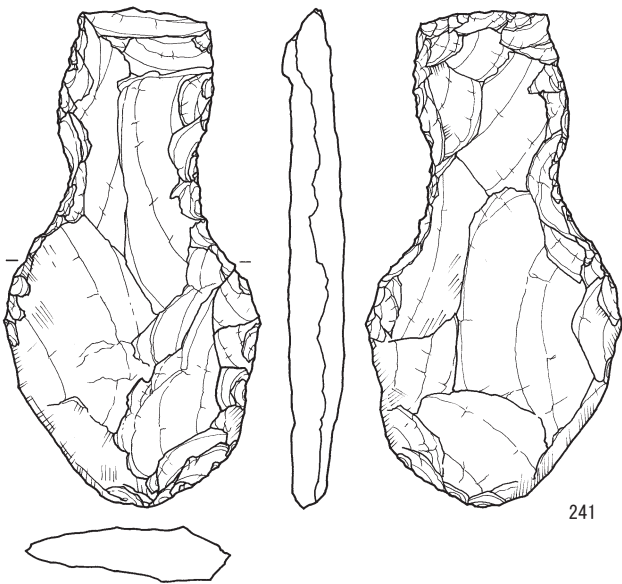
238



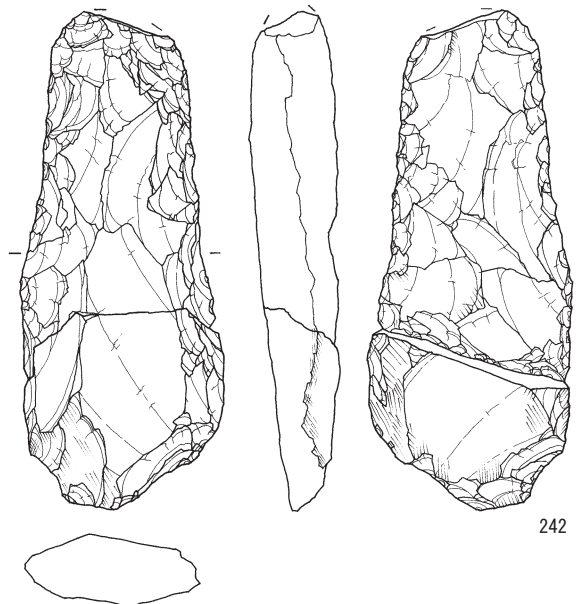
239



240



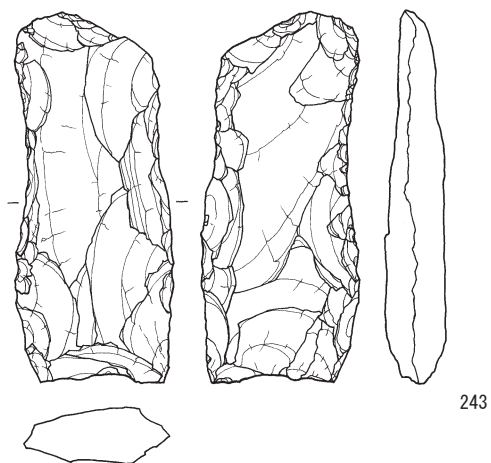
241



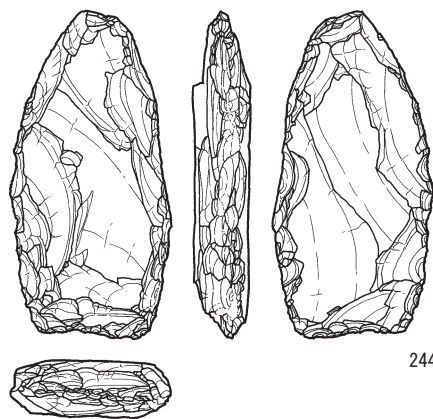
242

0 (1:2) 5cm

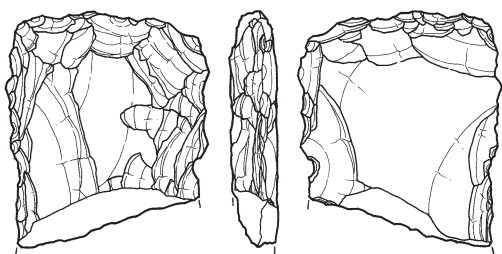
第61図 萩ヶ峰遺跡 打製石斧(3)



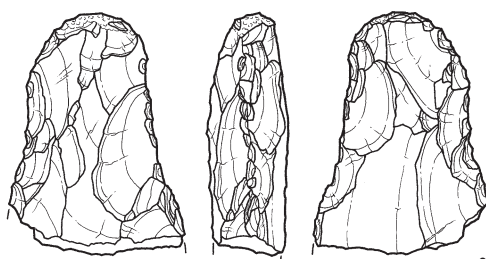
243



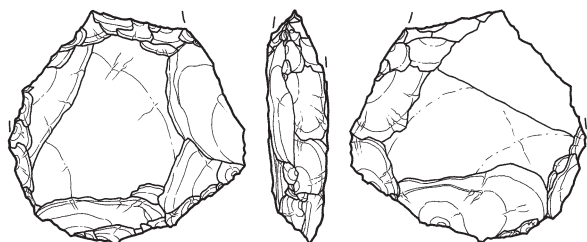
244



245



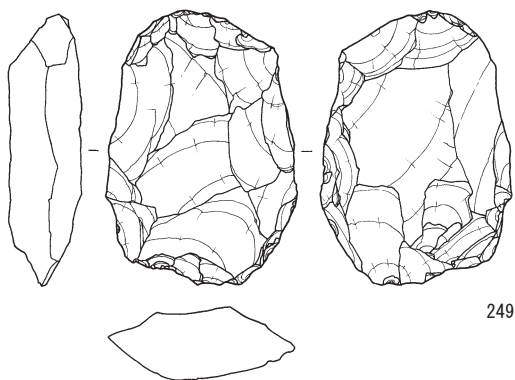
246



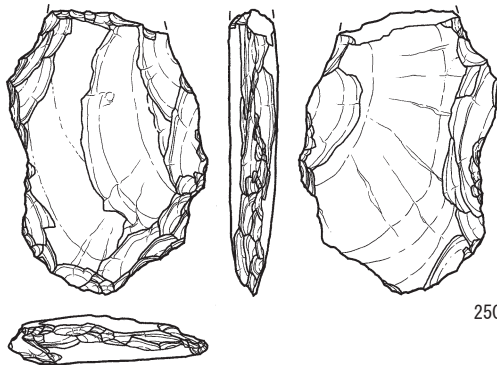
247



248



249



250

0 (1:2) 5cm

第62図 萩ヶ峰遺跡 打製石斧(4)

る。また、割れた箇所で敲打を行い敲打具として転用している。244は、基部Ⅲ類・刃部A類の完全品で、全長8cm程度のものである。

(2) 磨製石斧 (第63図 251～255)

Ⅱ層・Ⅲ層・攪乱層で5点出土した。素材でホルンフェルスAを素材とする251・252と蛇紋岩を素材とする253～255の2種があった。

251は、完形である。表面の風化が進んでいる。全面を剥離成形後に側面以外を丁寧に擦って成形している。側面も剥離によって鋭角に尖った箇所を丸く擦り上げている。側面上位には凹みの弱い抉りが作出され、この箇所と基部上端部に緊縛による使用痕の光沢摩滅が観察できる。刃部は鋭利に研ぎ出される。半分に割れがあるが、使用によるものか二次利用によるものか判断できなかった。252は、破片である。大型の石斧であったと考える。割れた破片の鋭利な箇所に微少な剥離があるため二次利用していると考えられる。

253～255は、同一の蛇紋岩の母岩から作られている。253は、蛤刃磨製石斧の刃部の破片である。刃部は鋭利に研ぎ出され、全面が強い光沢をもつほどよく擦られている。254は、253の体部の破片である。接合はしていない。255は、扁平な磨製石斧の刃部の破片である。全面が強い光沢をもつほどよく擦られている。使用による割れも観察できる。この大きさに割れた後に刃部と割れ面の鋭角な箇所でき強く敲打を行い敲打具として転用している。刃部は敲打で強く潰れている。割れ面は、割れた後に角を潰すように擦り上げたのち、敲打している。

⑦ 磨敲石 (第64・65図 256～268)

平面形は縦にやや長い楕円形状から楕円形状を呈するものが多い。横断面形状は扁平なもの・不定形で厚みのあるもの・円形に近いものがみられた。また、転用品も少ないが認められる。

素材となった石材は、砂岩・安山岩・花崗岩・ホルンフェルスである。

256～260は、横断面形状が扁平なものである。256は、花崗岩を素材としている。正面裏面に擦痕があり、右側面と下面の敲打痕が顕著である。257は、安山岩を素材としている。裏面に擦痕があり、右側面と上下面の敲打痕が顕著である。残存部分が2分の1以下であるため、全体の大きさは不明である。上下面は割れた後にも敲打している。258は、花崗岩を素材としている。正面裏面に擦痕があり、右側面と上下面の敲打痕が顕著である。残存部分が2分の1程度である。割れた後にも敲打している。259は、砂岩を素材としている。正面裏面に擦痕があり、一部で明瞭な稜をもっている。側面と上下面の中央に敲打痕がみられる。260は、花崗岩を素材としている。正面裏面に擦痕があり、右側面と上下面の敲打痕

が顕著である。裏面中央には敲打の跡が残る。残存部分が2分の1程度である。上下面は割れた後も敲打している。

261～263は、横断面形状が不定形で厚みをもつものである。261は、砂岩を素材としている。正面裏面に擦痕があり、敲打痕は少なく、側面と下面は自然面である。残存部分は2分の1程度である。262は、花崗岩を素材としている。裏面に擦痕があり、側面と上下面に敲打痕がみられる。裏面は平坦面となっている。全体に煤とタールの付着がみられ、集石等に利用された痕跡がある。263は、砂岩を素材としている。正面裏面に擦痕があり、右側面と上下面の敲打痕が顕著である。左側面の一部にも敲打痕がみられる。上下面は凹みをもつほど敲打されている。

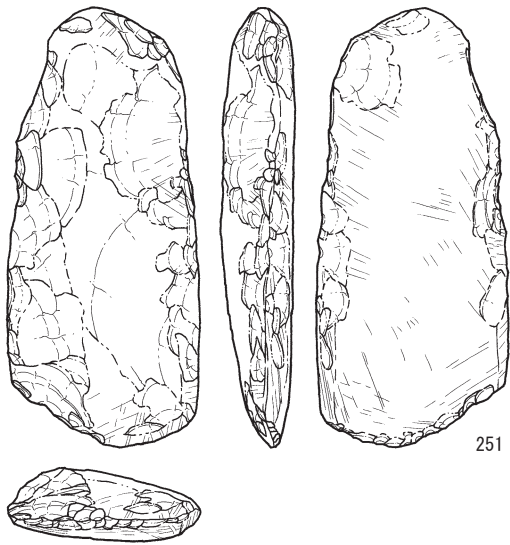
264～266は、横断面形状が円形に近いものである。264は、花崗岩を素材としている。正面裏面に擦痕があり、側面と上下面に敲打痕がみられる。他の花崗岩と比べると赤みを帯びているため、集石等に利用された可能性がある。265は、ホルンフェルスCを素材としている。正面裏面に擦痕があり、全面に敲打痕がみられ正面の自然面が凹む部分と下面の敲打痕が顕著である。266は、花崗岩を素材としている。正面裏面に擦痕があり、右側面と上下面に敲打痕がみられる。左側面は上部にのみ敲打痕がみられる。

267・268は、磨敲石が割れた後に鋭利に割れた箇所を用いて敲打具として転用したもので、意図して割った可能性のあるものである。石斧が割れた後の敲打具としての転用品に近いものである。267は、ホルンフェルスCを素材としている。割れた自然礫を利用した可能性もある。割れ面の角でのみ敲打し剥離を伴っている。割れ面下部の稜をもつところでも敲打を行っている。また、割れ面以外の全面に擦痕がみられる。268は、砂岩を素材とする磨石の敲打具への転用である。正面裏面に擦痕があり、側面と上下面に敲打痕がみられ裏面は平坦面をなしている。割れ面の割れ口全周に敲打痕がみられ、特に鋭角な箇所できよく敲打しており、丸く潰れ剥離もみられる。裏面には打点も観察できる。

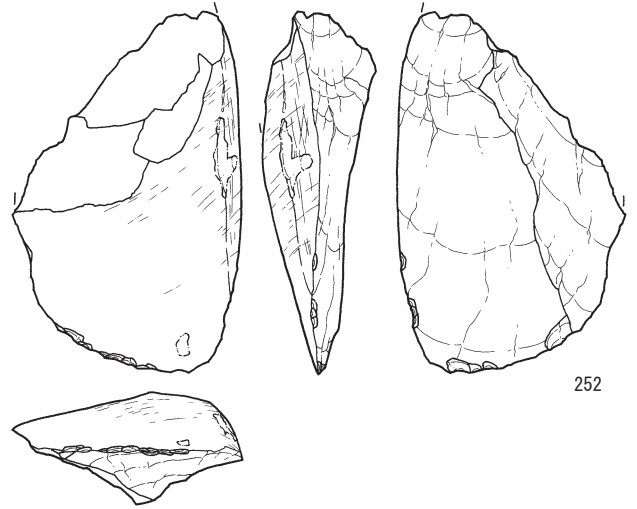
⑧ ハンマー (第65図 269・270)

269・270は、擦痕も観察できるが敲打痕の位置と他の磨敲石との違いからハンマーとした。2点ともに棒状の礫を素材としている。

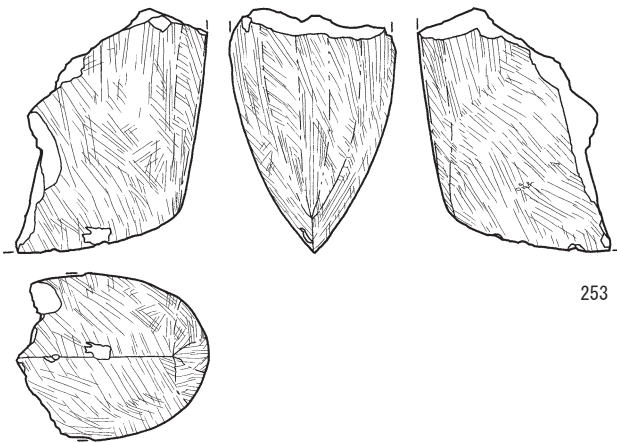
269は、安山岩で横断面形状が円形の棒状礫を利用している。側面には擦痕や敲打痕がみられ、上面と下面は敲打痕が顕著である。上面の敲打痕は大きく三つに分かれる。下面の敲打痕は大きく四つに分かれ、対になる二つは大きく凹んでいる。上下面の頂部でも敲打しているがさほど強くなく、全体の形状から使用前の礫は数



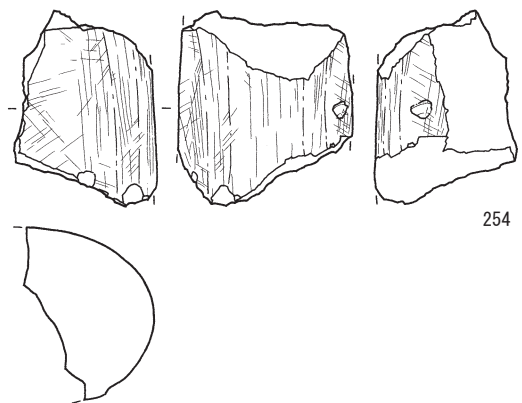
251



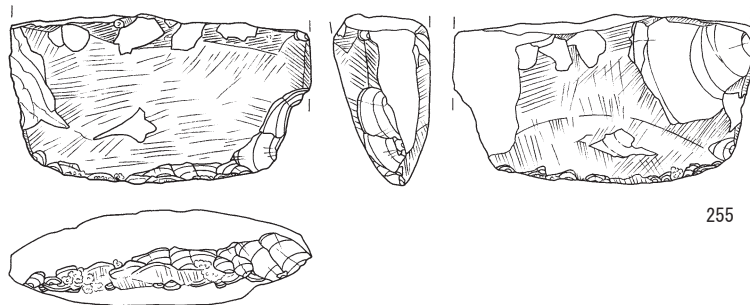
252



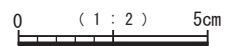
253



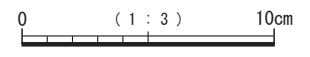
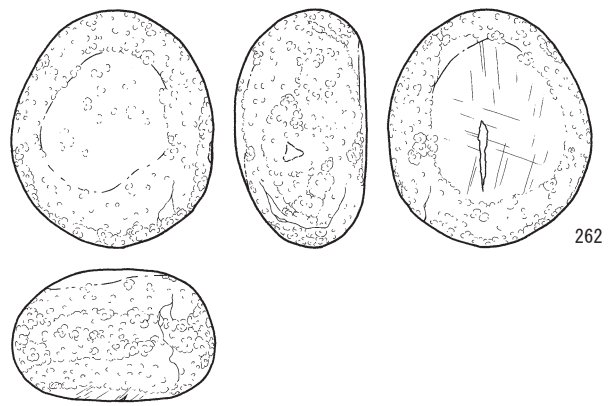
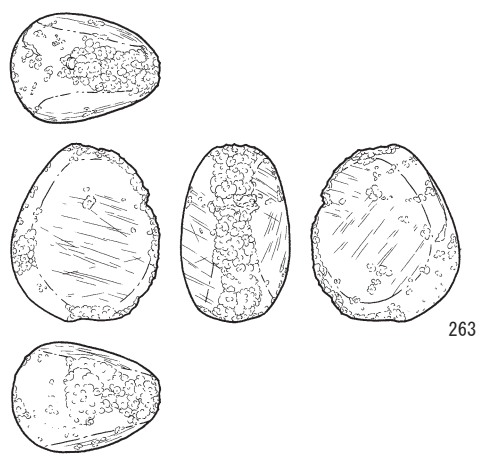
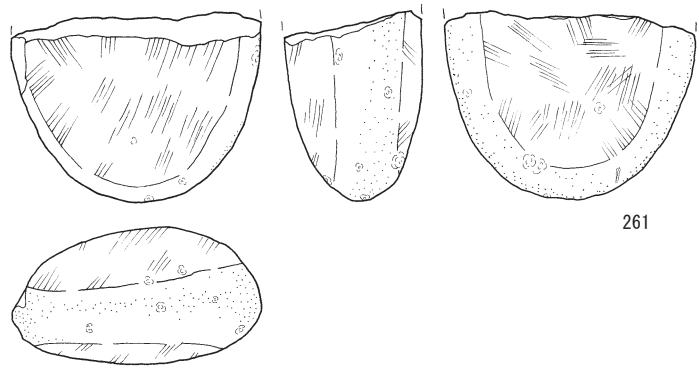
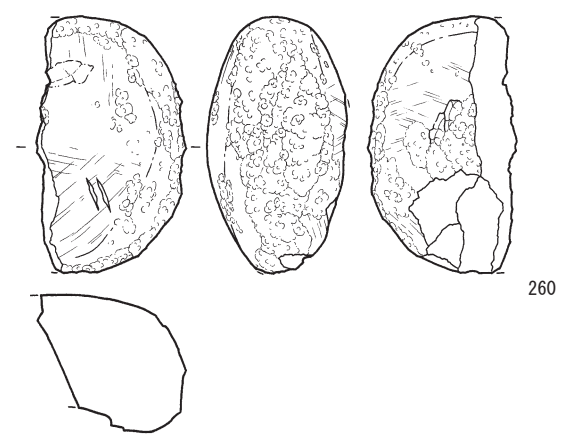
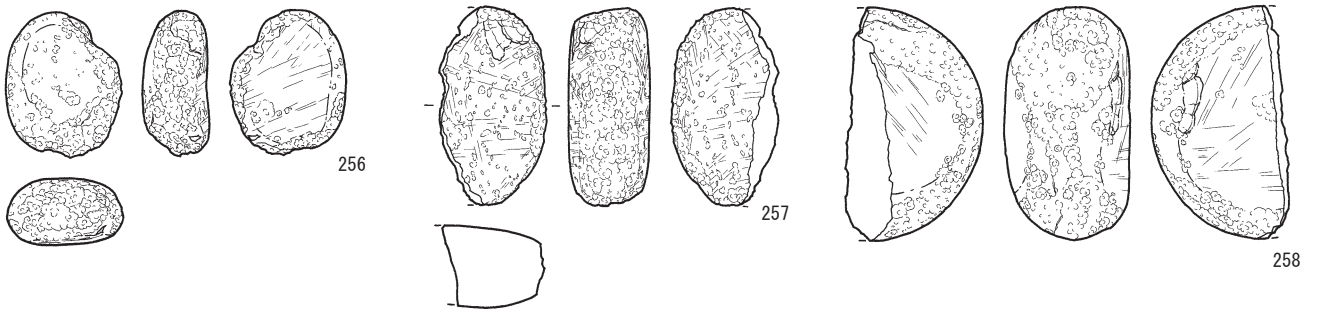
254



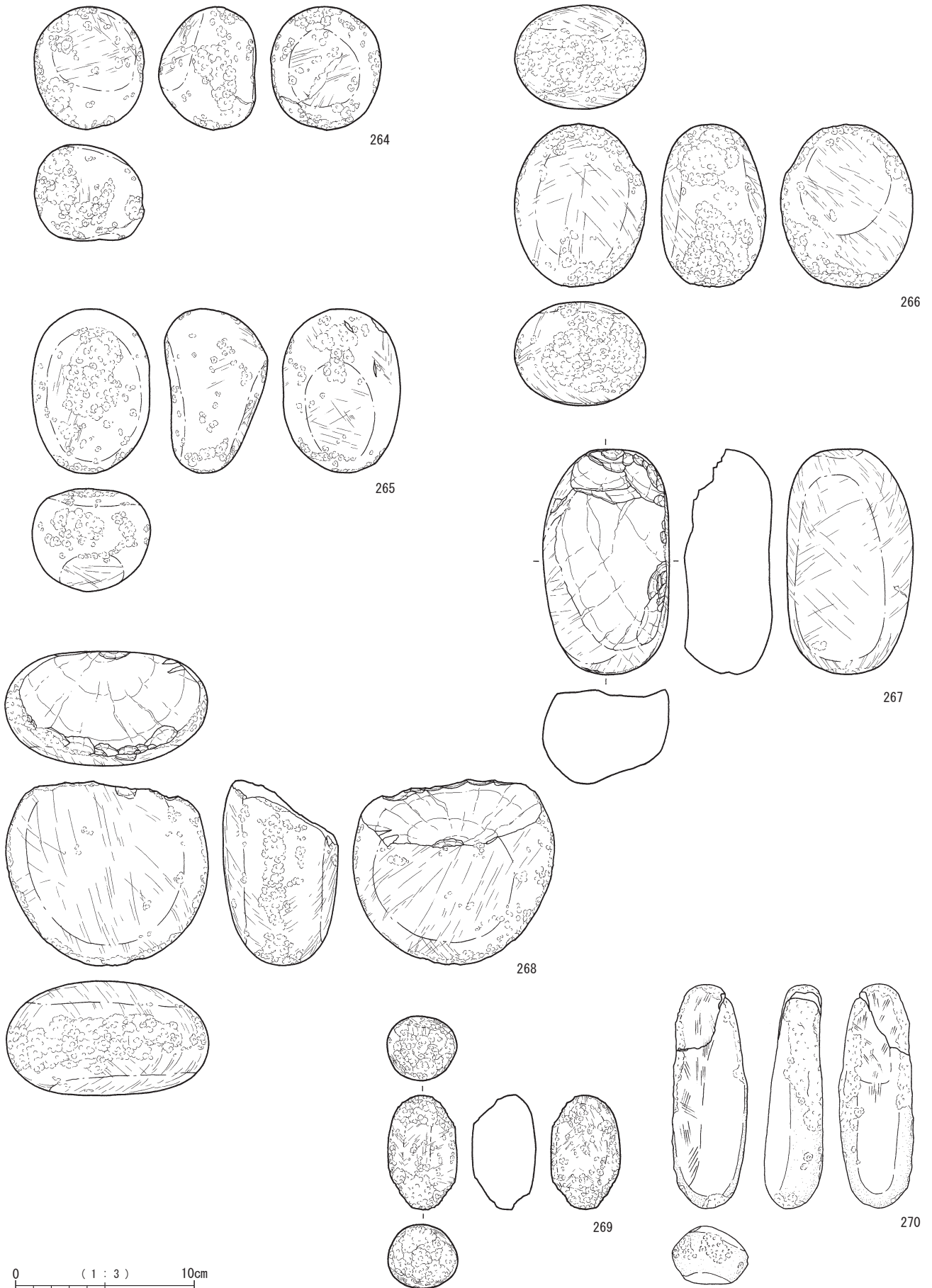
255



第63図 萩ヶ峰遺跡 磨製石斧



第64図 萩ヶ峰遺跡 磨敲石(1)



第65図 萩ヶ峰遺跡 磨敲石・ハンマー (2)

mm～5mm程度大きかったものであると考える。270は、ホルンフェルスCの断面形状が扁平から円形に近い棒状礫を利用している。正面と裏面には擦痕や敲打痕がみられ、上面と下面、側面上部は敲打痕が顕著である。特に左側面に敲打痕が顕著にみられる。2点が接合してあるものであり、使用で破損した後、破棄された可能性のあるものである。下面の敲打は左側のみに敲打痕がみられる。素材となって礫の全長も図示した長さとはほぼ相違ないと考える。

⑨ 台石（第66図 271, 272）

中央が深く凹むものや、成形されたものもなかった。

271は、砂岩を用いている。平面形・断面形は長楕円形のもので、正面中央の左寄りに敲打痕がみられる。正面裏面に擦痕がみられ、右側面は平坦面となっており擦痕がみられる。平坦面が右側面だけであり全体に膨らみをもつことから磨石に含めることも考えられるが、大きさと重量から台石として報告する。

272は、ホルンフェルスCを用いている。平面形・断面形は長方形から略長方形のもので、正面はやや凹む平坦面で中央の右寄りに敲打痕がみられる。正面裏面に顕著に擦痕がみられる。裏面と側面は自然石の凹凸をよく残している。

⑩ 石皿（第67図 273）

273は、ホルンフェルスCを用いている。平面形は丸みを帯びた略台形で断面形は長方形から略長方形のものである。正面は2か所でやや凹む平坦面があり、裏面は平坦面で、正面裏面に顕著に擦痕がみられる。側面は自然石の凹凸をよく残している。

⑪ 砥石（第68図 274～277）

厚みのある断面五角形状のものと断面が扁平なものが出土した。

274は、安山岩を用いている。断面形状が五角形で、うち四面は平坦からやや凹む平滑面があり、よく擦られている。残りの一面はよく擦られているが自然面の凹凸を残している。この面が一番幅が細い面である。両端は、割れており擦痕はみられない。使用後の割れと考える。赤変している箇所があるため集石等に利用された可能性がある。

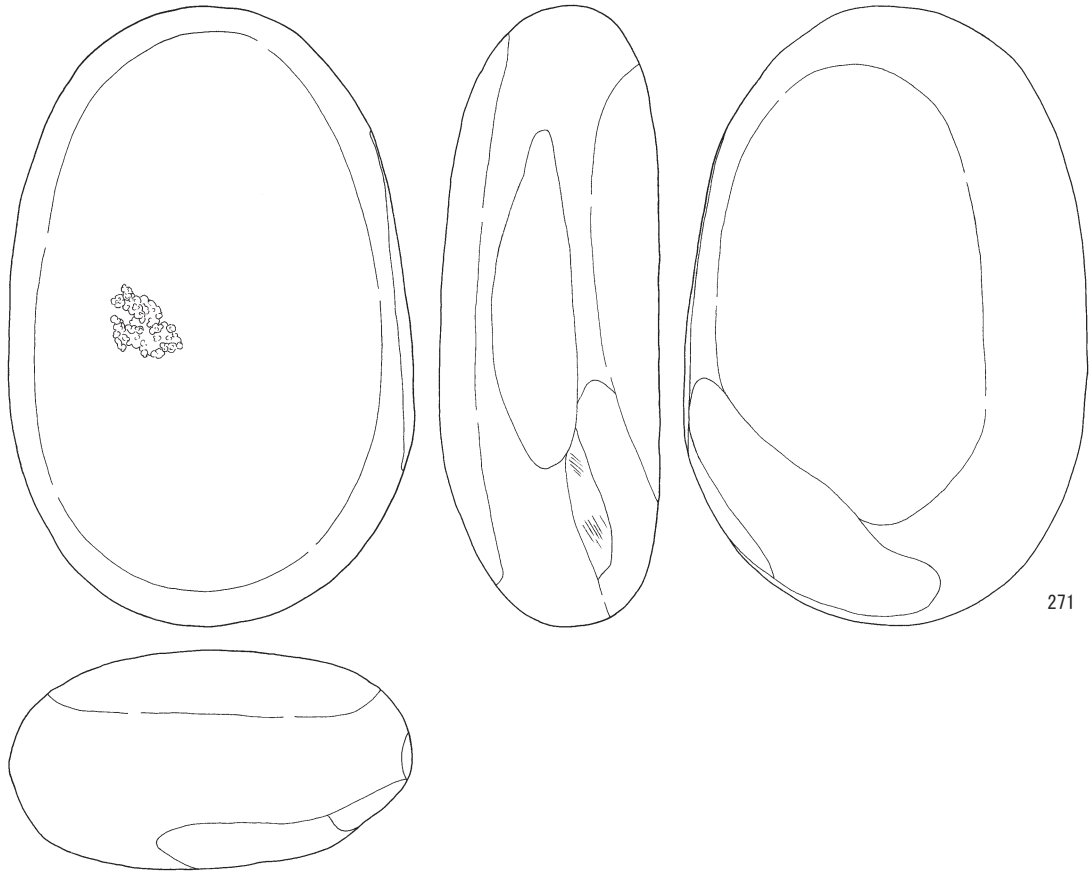
275～277は、頁岩を素材としている。色調が異なるが同じ石材から割りとったものとする。節理面が薄く密に入る石材を使用する。275は、小さく割れた破片と考える。やや光沢をもつほど擦られている。裏面は、節理面で割れた面である。276は、使用後割れたものとする。周囲に擦痕はみられない。正面はよく擦られている。右半分は風化の痕跡が残り、節理がよく分かるが左

半分はやや凹み風化の痕跡はみられない。正面は自然面であったと考える。また、側面の一部には自然面を残す箇所がある。この箇所には擦痕はみられない。裏面は、節理面である。節理の凹凸がごく薄く残っている。凹凸の凸の箇所には正面よりも粗い擦痕がある。277は、下面以外に擦痕がみられる。上面の擦痕は割れ面や角にもみられる。右側面は割れ面を一部平坦になるまで擦っている。また、上端には細かい敲打痕が観察できる。左側面は割れ面を擦り、一部平坦に擦っている。下端には細かい敲打痕が観察できる。このことから、277は割れた砥石の再利用とこの大きさに成形した砥石の両方の可能性があるが、下部が割れた後に敲打具として使用したものとする。

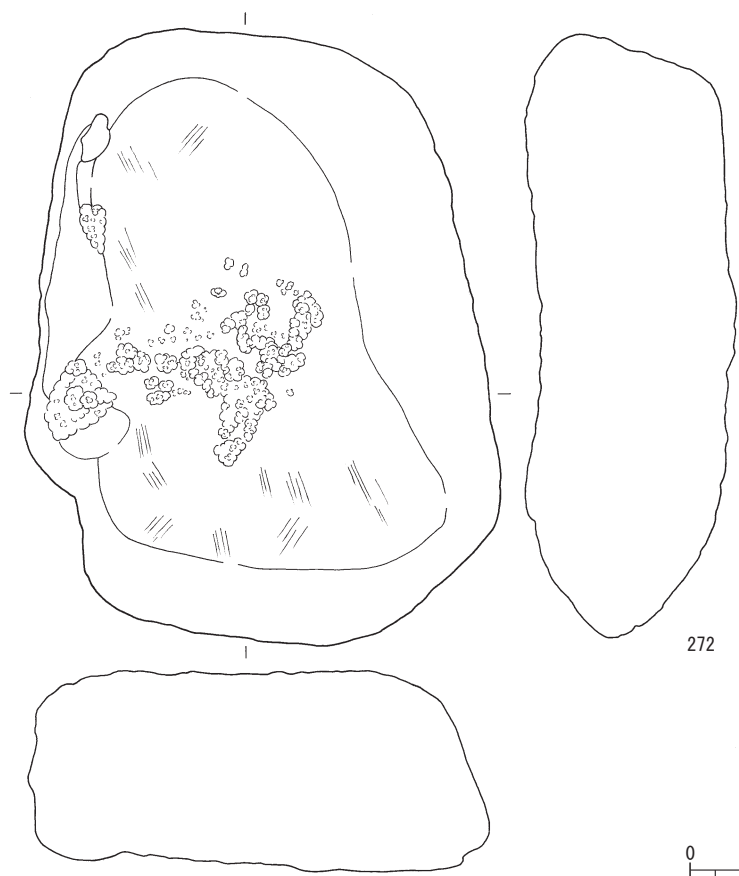
⑫ 礫器（第68図 278）

278は、ホルンフェルスCを素材としている。上面と正面は自然面であり、裏面は剥離面であり上端に打点が残る。側面は成形のための割取りと考える。刃部では敲打を行っており、丸みを帯びて潰れている。

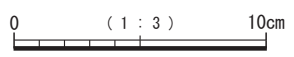
この礫器の特徴から、255・267・268・278は石器の使用の最終形態が、元の石器の使用目的と異なり鋭角に割れた（割った）箇所を利用して敲打具として再利用したものであると考える。また、この他にも器種を問わずこのような利用が考えられるものが数点あった。



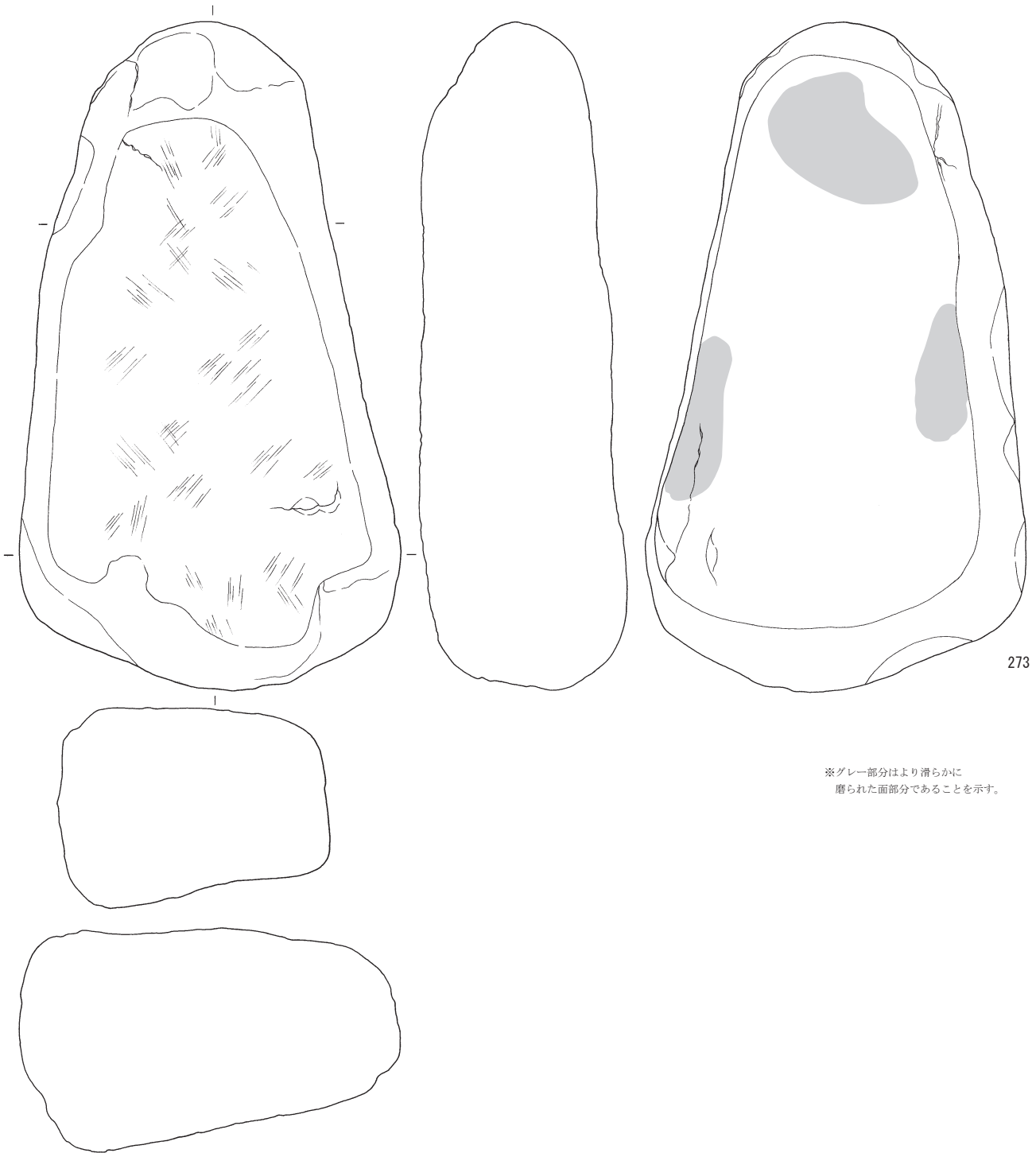
271



272



第66図 萩ヶ峰遺跡 台石



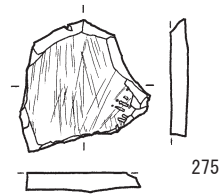
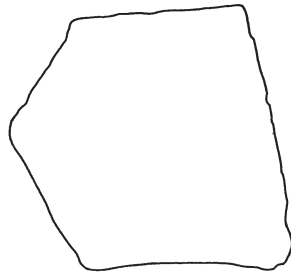
273

※グレー部分はより滑らかに磨られた面部分であることを示す。

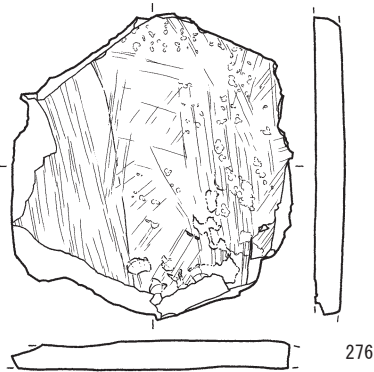
第67図 萩ヶ峰遺跡 石皿



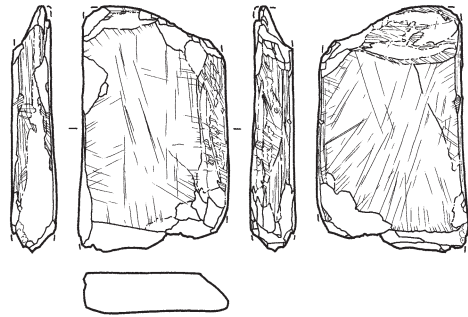
274



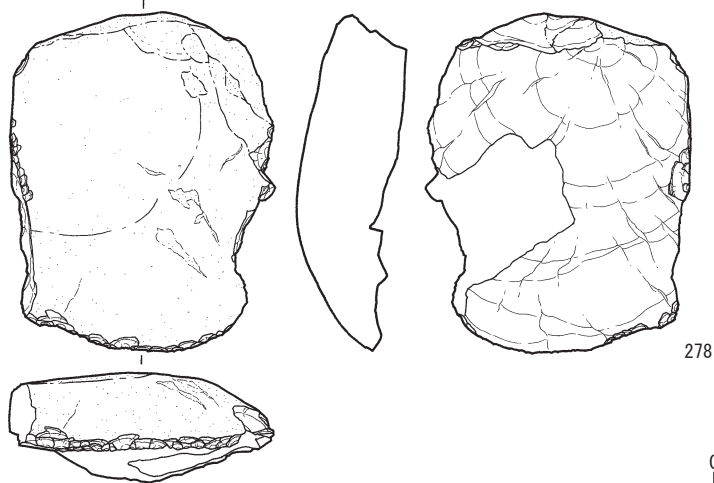
275



276



277



278

0 (1 : 3) 10cm

第68図 萩ヶ峰遺跡 砥石・礫器

第9表 萩ヶ峰遺跡アカホヤ上位出土の石器観察表(1)

※ ()は残存法量

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	分類	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	石材	石材 分類	取上 番号	備考
57	208	C-25	Ⅲb	打製石鏃	—	23.50	16.00	6.50	1.60	黒曜石	三船	3533	
	209	D-25	Ⅲb	打製石鏃	—	(20.50)	(14.00)	(3.00)	(0.60)	チャート	—	3382	一部欠損
	210	11T	Ⅲa	打製石鏃	—	(19.20)	(17.80)	(4.10)	(1.13)	頁岩	—	677	一部欠損
	211	D-22	Ⅲa	打製石鏃	—	(17.40)	(10.40)	(3.00)	(0.36)	黒曜石	腰岳	410	一部欠損
	212	A-1	Ⅲ	打製石鏃	—	(17.60)	(10.00)	(3.30)	(0.48)	頁岩	—	1511	一部欠損
	213	E-7	Ⅲ	打製石鏃	—	(11.00)	(13.00)	(5.80)	(0.71)	黒曜石	三船	1404	一部欠損
	214	D-9	Ⅲ	打製石鏃	—	(14.00)	(15.20)	(3.00)	(0.56)	頁岩	—	1386	一部欠損
	215	D-21~23	I	打製石鏃	—	22.10	15.40	3.80	1.17	頁岩	—	表採	
	216	C-5	Ⅲ	打製石鏃	—	(16.70)	(14.10)	(3.10)	(0.60)	頁岩	—	2165	一部欠損
	217	E-6	Ⅲa	打製石鏃	—	(11.10)	(14.70)	(3.10)	(0.58)	頁岩	—	5564	一部欠損
	218	C-12	Ⅲ	磨製石鏃	—	39.70	23.00	3.30	2.84	ホルンフェルス	B	—	
	219	E-28	Ⅲb	二次加工剥片	—	22.70	22.60	10.30	4.51	黒曜石	三船	10009	
	220	E-7	Ⅲa	石匙	—	37.30	22.00	10.00	6.04	黒曜石	腰岳	5433	
221	C-5	Ⅲb	石核	—	33.00	35.50	28.30	23.49	黒曜石	腰岳	3191		
58	222	—	カクラン	石錘	—	69.00	65.00	28.00	100.45	安山岩	—	—	
	223	—	I	石錘	—	86.20	27.50	12.30	34.86	ホルンフェルス	C	—	
59	224	E-7	Ⅲa	打製石斧	I	(71.00)	(64.00)	(14.00)	(86.20)	ホルンフェルス	B	5575	一部欠損
	225	E-7	Ⅲa	打製石斧	I	(71.50)	(60.60)	(19.20)	(99.97)	ホルンフェルス	B	5361	一部欠損
	226	D-22	Ⅲa	打製石斧	IA	93.50	64.00	10.00	76.20	ホルンフェルス	A	80	
	227	E-7	Ⅲa	打製石斧	ⅡB	89.00	57.50	13.50	79.80	ホルンフェルス	B	5232	
	228	C-5	Ⅲb	打製石斧	ⅢA	95.00	54.10	13.00	83.82	ホルンフェルス	A	3340	
	229	D-20	Ⅲb	打製石斧	ⅢB	131.00	51.80	16.00	105.74	ホルンフェルス	B	511	
	230	D-7	Ⅲ	打製石斧	ⅢD	135.00	64.00	20.00	139.94	ホルンフェルス	B	1614	
60	231	E-7	Ⅲa	打製石斧	ⅢorⅡD	(90.00)	(59.00)	(14.00)	(72.80)	ホルンフェルス	B	5086	一部欠損
	232	E-7	Ⅲa	打製石斧	Ⅲ	(57.50)	(68.30)	(15.50)	(94.06)	ホルンフェルス	A	5243	一部欠損
	233	C-5	Ⅲb	打製石斧	Ⅲ	(50.00)	(51.00)	(15.50)	(57.85)	ホルンフェルス	B	3266	一部欠損
	234	F-11	Ⅲ	打製石斧	D	(92.50)	(70.20)	(20.80)	(105.89)	頁岩	—	1033	一部欠損
	235	D-9	Ⅲ	打製石斧	A	(69.50)	(56.00)	(14.20)	(69.45)	ホルンフェルス	B	1114	一部欠損
61	236	E-7・8	カクラン	打製石斧	IA	129.50	67.00	14.00	127.30	ホルンフェルス	B	カクラン	
	237	C-7	表土	打製石斧	Ⅱ	(51.30)	(46.50)	(10.00)	(31.16)	ホルンフェルス	B	—	一部欠損
	238	B-8	カクラン	打製石斧	ⅡA	94.80	57.50	16.00	95.34	ホルンフェルス	A	カクラン	
	239	B-21	カクラン	打製石斧	Ⅱ	(74.50)	(50.50)	(18.00)	(74.17)	ホルンフェルス	B	カクラン	一部欠損
	240	B-22	—	打製石斧	Ⅱ	(62.50)	(42.00)	(17.00)	(45.41)	ホルンフェルス	B	—	一部欠損
	241	拡張区	カクラン	打製石斧	ⅡA	132.00	67.50	15.00	134.20	ホルンフェルス	B	カクラン	
	242	D-18・19	カクラン	打製石斧	ⅢC	(132.00)	(52.50)	(24.00)	(178.30)	ホルンフェルス	B	カクラン	一部欠損, 2点接合
62	243	E-7	カクラン	打製石斧	ⅡA	97.50	43.00	15.00	86.00	ホルンフェルス	A	カクラン	
	244	B-20	—	打製石斧	ⅢA	86.10	42.00	14.50	68.05	ホルンフェルス	B	—	
	245	17~27	—	打製石斧	Ⅲ	(62.00)	(53.00)	(12.00)	(54.96)	ホルンフェルス	B	—	一部欠損
	246	D・E-9	カクラン	打製石斧	Ⅲ	(63.20)	(46.00)	(21.00)	(67.49)	ホルンフェルス	B	カクラン	一部欠損
	247	B-21	カクラン	打製石斧	A	(61.00)	(61.90)	(15.90)	(60.86)	ホルンフェルス	B	カクラン	一部欠損
	248	拡張区	カクラン	打製石斧	—	(42.50)	(42.30)	(16.80)	(35.74)	ホルンフェルス	B	カクラン	一部欠損
	249	D-8	—	打製石斧	D	72.50	50.50	19.50	90.30	ホルンフェルス	A	5042	
	250	7T	I	打製石斧	D	(74.80)	(52.00)	(12.50)	(59.29)	ホルンフェルス	B	—	一部欠損

第 10 表 萩ヶ峰遺跡アカホヤ上位出土の石器観察表（2）

※（ ）は残存法量

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層	器種	分類	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	石材	石材 分類	取上 番号	備考
63	251	E-21	Ⅱ	磨製石斧	—	115.30	50.30	19.30	145.27	ホルンフェルス	A	—	
	252	拡張	カクラン	磨製石斧	—	(94.70)	(59.80)	(29.20)	(112.33)	ホルンフェルス	A	カクラン	一部欠損
	253	16T	上	磨製石斧	—	(64.00)	(50.30)	(43.20)	(147.32)	蛇紋岩	—	—	一部欠損
	254	G-11	Ⅲ	磨製石斧	—	(50.80)	(37.00)	(45.60)	(100.79)	蛇紋岩	—	2392	一部欠損
	255	D-8	Ⅲb	磨製石斧	—	(45.00)	(79.50)	(25.50)	(129.98)	蛇紋岩	—	5716	一部欠損 転用
64	256	E-19	Ⅲb	磨敲石	—	56.80	44.80	25.60	90.17	花崗岩	—	8166	
	257	E-6	Ⅲa	磨敲石	—	77.30	(42.00)	(31.30)	(151.06)	安山岩	—	5275	一部欠損
	258	E-6	Ⅲa	磨敲石	—	91.10	(53.40)	(49.00)	(320.86)	花崗岩	—	5437	一部欠損
	259	B-15	カクラン	磨敲石	—	83.50	72.00	42.00	384.10	砂岩	—	カクラン	
	260	C-20	Ⅱ	磨敲石	—	100.30	(58.00)	(50.60)	(404.06)	花崗岩	—	480	一部欠損
	261	C-6	Ⅲ	磨敲石	—	(75.00)	(99.00)	(54.00)	(457.90)	砂岩	—	2294	一部欠損
	262	D-9	Ⅲb	磨敲石	—	93.10	79.00	51.30	530.53	花崗岩	—	5731	タール付着
65	263	E-6	Ⅲa	磨敲石	—	69.20	57.70	42.70	223.07	砂岩	—	5131	
	264	C-6	Ⅲb	磨敲石	—	67.80	60.40	52.90	296.36	花崗岩	—	3007	
	265	E-18	Ⅲb	磨敲石	—	91.00	65.00	56.20	481.70	ホルンフェルス	C	7128	
	266	E-8	カクラン	磨敲石	—	90.00	72.60	57.00	518.41	花崗岩	—	カクラン	
	267	D・E-10	I	磨敲石	—	124.80	69.70	52.00	741.46	ホルンフェルス	C	—	転用
	268	C-10	I	磨敲石	—	(102.20)	111.90	62.90	984.90	砂岩	—	—	転用、一部欠損
	269	E-7	Ⅲa	ハンマー	—	63.00	37.90	34.80	118.18	安山岩	—	5329	
66	270	C-5	Ⅲ	ハンマー	—	125.00	42.00	32.50	232.80	ホルンフェルス	C	2229	2点接合
	271	E-7	Ⅲ	台石	—	245.00	158.00	86.00	5200.00	砂岩	—	1450	
67	272	E-18	Ⅲb	台石	—	245.00	188.00	85.00	6200.00	ホルンフェルス	C	7129	
68	273	E-7	Ⅲa	石皿	—	444.00	253.00	156.00	24400.00	ホルンフェルス	C	5369	
68	274	D-8	Ⅲb	砥石	—	(208.00)	(113.40)	(103.80)	(37.00)	安山岩	—	5709	一部欠損
	275	E-19	Ⅲb	砥石	—	(50.90)	(50.30)	(7.00)	(23.39)	頁岩	—	7680	一部欠損
	276	D-20	カクラン	砥石	—	(120.00)	(110.20)	(11.39)	(254.00)	頁岩	—	カクラン	一部欠損
	277	D-21	カクラン	砥石	—	(96.00)	(58.80)	(17.30)	(148.91)	頁岩	—	カクラン	一部欠損
	278	E-7	Ⅲa	礫器	—	133.20	103.20	42.30	652.62	ホルンフェルス	C	5435	転用

第 11 表 遺構番号新旧対応表

時期	新名称	旧名称	調査年度
縄文 早期	土坑 1 号	SK2	R 4
	集石 1 号	SS1	H26
	集石 2 号	SS1	H27
	集石 3 号	SS2	R 4

時期	新名称	旧名称	調査年度
縄文 晩期	土器集中 1	DKS2	H27

時期	新名称	旧名称	調査年度
古墳 時代	大型土坑	SH5	R 4
	土坑 2 号	SK1	H27
	土器集中 2	DKS1	H27
	竪穴建物跡 1 号	SH1	H26・R 4
	竪穴建物跡 2 号	SH2	H27
	竪穴建物跡 3 号	SH4	R 4
	竪穴建物跡 4 号	SH3	R 4
	溝状遺構 1・2・3	带状硬化面	H27
	带状硬化面 1	硬化面 1	R 4
	带状硬化面 2	硬化面 1	H27
	带状硬化面 3	硬化面 2	H27

第5節 古墳時代の調査

古墳時代の遺物包含層はⅡ層～Ⅲb層である。遺物出土量が多く、本遺跡の主体となる時代である。Ⅳ層（アカホヤ火山灰層）以上が削平を受けている箇所が多いが、調査区全体から遺物が出土した。特にD・E-19～21区で遺構・遺物が集中している。

1 遺構

古墳時代の遺構は、遺跡の西側のエリアから竪穴建物跡4基、土坑2基、土器集中1基、溝状遺構3条、帯状硬化面3条を検出した。

なお掘り込みを有する遺構の平面図に示した土器片は、床面から検出されたもののみを対象とし、示した。

(1) 竪穴建物跡（第70～88図）

竪穴建物跡は、遺跡のなかでもっとも標高が高い18区～23区の北側のエリアのやや傾斜の緩いエリアから4基ともに検出された。1号と2号は近接する。平面形は4基ともに四角形に近い不定形である。

竪穴建物跡1号（第70～73図）

D-21・22区Ⅳ層上面で検出した。調査工程の都合からH27年度に南半部、R4年度に北半部の調査を行った。西側に竪穴建物跡2号、北側に大型土坑が隣接する。長軸5.55m、短軸4.02mの略長方形を呈し、北東部にはステップ状の張り出しを有する。検出面から床面までの深さは最深部で約87.5cm、張り出し部では約13cmであった。埋土は4層に分層できた。埋土上位はⅢb層由来の混合土であり橙色パミスを含み、埋土下位は黒褐色土にアカホヤ火山灰がブロック状に入る。床面はほぼフラットに造られ、中央部はやや窪む。柱穴の可能性のあるピットを2基検出した。SP1は径約21cmで深さ約19cm、SP2は径約28cmで深さ約10cmである。2基とも埋土はアカホヤ火山灰混じりの黒褐色土である。

遺物（279～308）

出土した土器の形態の特徴から、近年の研究により古墳時代前期中頃から中期初め頃と考えられている東原式土器のやや新しい段階の土器を伴う遺構であると判断される（1987中村，2021松崎など）。なお、287・296・307は床面から出土した。

279～291は甕である。推定口径25cm～30cmに収まるサイズのものが多い。頸部～胴部に向かってなだらかにすぼまる器形のもが主体で、口縁端部際に横ナデを巡らせる。口縁部外面は、工具による掻き上げの痕を丁寧にナデ消す傾向がみられる。無文のものと、頸部に刻目突帯を貼り付けるものがある。突帯は器面に比較的丁寧に貼り付けられ、刻目には布目が確認できる。

279は外面に煤が薄く付着し、吹きこぼれの痕が確認

できる。口縁端部の角は明瞭で「コ」の字状の形態である。

280は胴部が大きく張り出す器形で、外面には薄く煤が付着する。頸部の稜には外面側から強いユビオサエを連続して施し屈曲させる。

281は外面の稜より上位と内面の稜以下に工具によるケズリを施す。

282～285は刻目突帯を有するものである。282は胴部下半の内面に粗いハケメを残す。283は口縁が大きく外傾し直線的にすぼまる器形である。285は刻目が密に施され、胴部側にはみ出す。284は小型で、突帯の幅がやや狭く、外面にはミガキを施し、赤みの強い色調を呈する。混和材の粒が目立たない精良な胎土であるため祭祀用など本来の甕形土器の用途とは異なる目的で制作・使用された可能性もある。

286は内外面ともに口縁部外面に幅広く横ナデを施す。頸部直下には細い沈線を下から上に等間隔に巡らせる可能性がある。

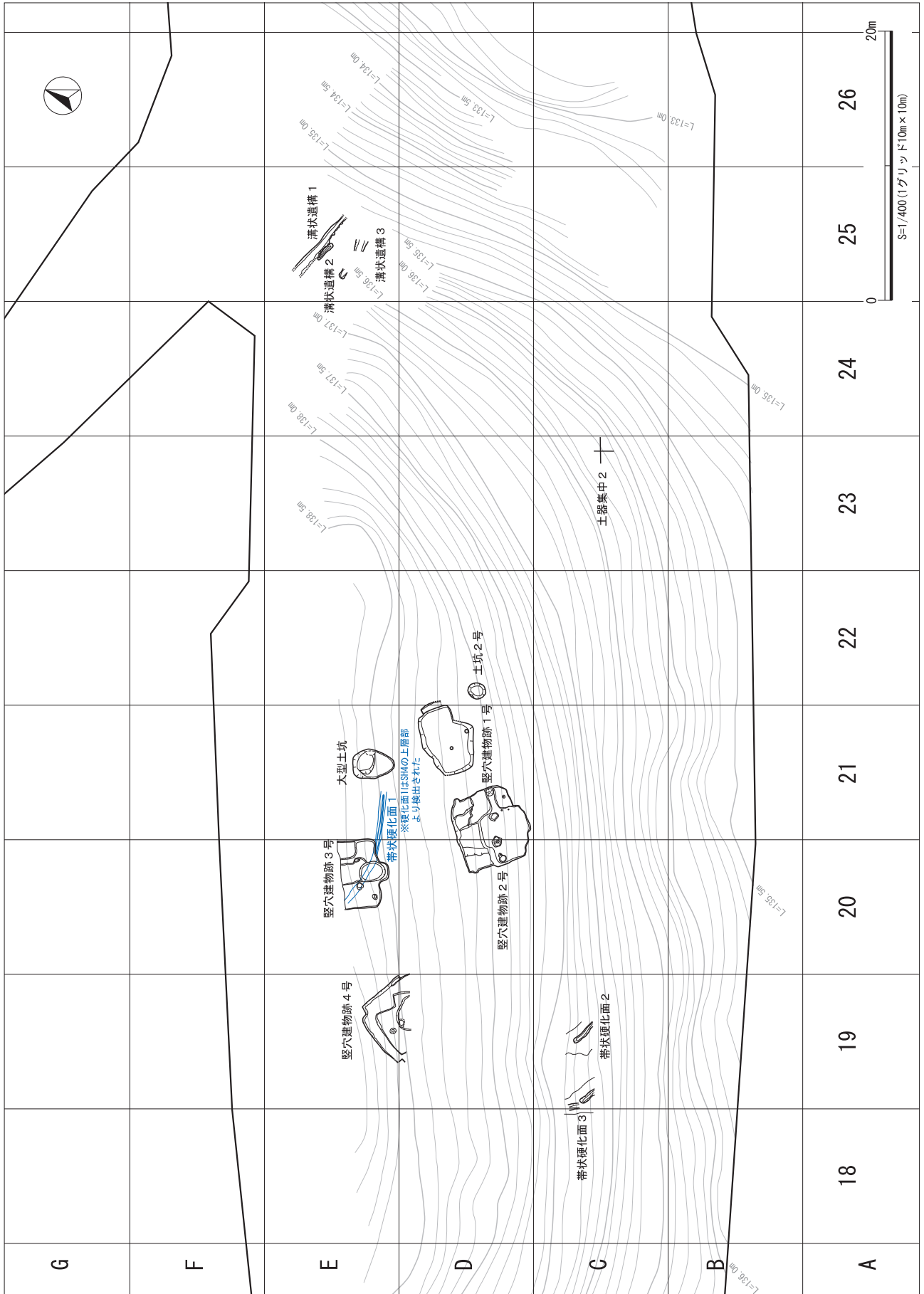
287は一部の破片が床面から出土した。浅めの鉢状の器形で、脚を欠く。口縁部内外面には幅広く横ナデを施し、胴部の器面は丁寧にナデられる。全面的にごく薄く煤が付着する。

288～291は底部や脚の破片である。288は底面が輪状に剥離する。289・290はスカート状に開く低い脚である。288にもこれらのような脚が接合するものと考えられる。291は底部接地面あたりに少量の粘土を継ぎ、指でつまみ出すようにごく低い脚を成形する。

292・293は壺形土器である。292は肩部片で、小型である。外面には横位のミガキを丁寧に施す。内面上位には粘土を継ぎ指頭でなじませた痕跡が残る。293は最大径が27cm程と推定される。最大径よりもわずかに高い位置に突帯を貼り付け、篋状工具で浅く刻む。内外面は、目の整った刷毛によって調整される。外面上位には赤色顔料と煤の付着がみられる。

294・295は高坏である。294は坏部片で、推定口径は約16cmである。器壁の厚みに対して小ぶりの印象である。外面の段は掻き上げのハケメの始点であり、目の整った刷毛を使用する。外面下半部には工具ナデの後でミガキを施す。坏部上面の口縁部際には横位のミガキを施す。295は中空のエンタシス状の脚の柱部である。残存部下端に稜を有し、外側へと角度を大きく変えることから、ラップ状、あるいは椀状に開いて接地すると推測される。外面には丁寧にミガキを施し、細い沈線で「く」の字状、逆「く」の字状のモチーフが明瞭に描かれる。柱部の高さは約5cmで最大径は約4.5cmでかなり短い。坏部の形態は不明だが、小型であることが考えられる。

296は器壁が薄く、内湾気味に立ち上がる口縁部片である。坏あるいは小型の鉢であると考えられる。口縁部



第69図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代遺構配置図

は先細り、指頭圧痕が多く残る粗雑なつくりである。内面は指でナゲられ、工具の痕が残る。

297・298は小型丸底壺である。297は長頸の口縁部で明るい赤色のシャモットが少量混じる大変精良な胎土を使用する。298も長頸で、口縁部に向かって反り返るように開く形態であると推測される。外面には縦方向の、内面には横方向のミガキを丁寧に施す。胎土の混和材・色調は297と共通し、焼成は非常によく硬質である。ともに搬入品の可能性がある。

299はコップ状の形態の鉢である。色調は白っぽく精良な胎土を使用する。

300は内面の調整が粗雑で、丸くおさめた端部がわずかに擦れていることから脚と捉えた。接地面近くの内外面に幅広く横ナゲを施す。内外面ともに所々に煤が少量付着する。天地を返して299のような鉢である可能性もある。

301～303はミニチュアの土器である。301・302は底部に乳頭状の突起をもつ。口縁部を欠くが残存部の状況から三角錐状の形態であると推測される。301は外面にはミガキを、内面には丁寧なナゲ調整を施す。突起も器面に丁寧に貼り付けられる。302は造りが粗い。ともに断面にもわずかな煤の付着が確認できるため破碎後に被熱した可能性が考えられる。303は完形のコップ状の鉢のミニチュアである。外面に工具を押し当てて成形しているために、ごく緩い縦方向の稜が数か所みられる。精良な胎土を使用する。

304～308は石器である。

304は縦長の小礫を使用した磨敲石で、石材はホルンフェルスCである。全面に擦痕が確認され上面と裏面に平坦面を形成するため砥石としての使用も考えられる。上面・下面を敲打に使用しているが、その頻度は低く主たる使用目的ではない。

305は亜円形の礫を使用した台石で、石材は多孔質の安山岩である。表面中央部分が敲打により大きく凹み、その周囲と裏面に擦痕が確認される。

306～308は軽石製品である。用途は不明で、被熱の痕跡はみられない。

306は上面中央を打ち欠いて大きな凹みを作成する。表面・上面はよく磨られ、所々に平坦面をつくる。裏面は面取りされ、断面形を逆三角形に整えた後で下辺を打ち欠いている。正面に長さ約1～2cmの人為的な傷が数か所確認される。307も306に形態に近い。表面・右側縁の裏側には敲打の痕跡がみられる。

308は小型で細長い形状である。全体的によく擦られている。表面・裏面は縦方向の擦痕が明瞭で、裏面と側面に鋭利な工具で施した2条の沈線が明瞭に確認できる。

(2) 竪穴建物跡 2号 (第74～81図)

D-20・21区Ⅲ層で検出した。隅丸形状の竪穴建物跡で南側に張り出しを有する。北東側には、竪穴建物跡1号が隣接する。長軸5.82m、短軸5.44mを測り、深さは64cmで面積は31.66㎡である。北東部には、ステップ状に3つの段を有している。北側中央部にはベッド状の段を有し、南側に向かってやや下る。南側は、張り出し部分があり北側より一段下がる。中央部には並ぶように土坑が4基検出された。

竪穴建物跡2号内土坑1は、不定形で長軸80cm、短軸77cmを測り、深さは37cmである。断面は、2段に掘り込まれている。埋土は不明である。

竪穴建物跡2号内土坑2は、貼床の下で検出した。不定形で長軸74cm、短軸65cmを測り、深さは22cmである。断面は靴底形であった。掘り込みは4枚の埋土で覆われている。

竪穴建物跡2号内土坑3は、楕円形で長軸73cm、短軸60cmを測り、深さは22cmである。確認のため半截されているが、褐色土で単一層であった。

竪穴建物跡2号内土坑4は、円形で長軸56cm、短軸54cmを測り、深さは35cmである。埋土は、にぶい黄褐色土で単一層であった。

また南側には径が約9～11cm、深さ6～7cmの小さなピットが2基、径が約25cmのやや大きめのピットが1基検出されているが、竪穴建物跡2号に伴うものであるかは不明である。

南側ステップ部の本遺構の中央に近い位置に、炭化物を多く含む部分(埋土⑧)が2か所検出されており、炉跡の可能性もある。

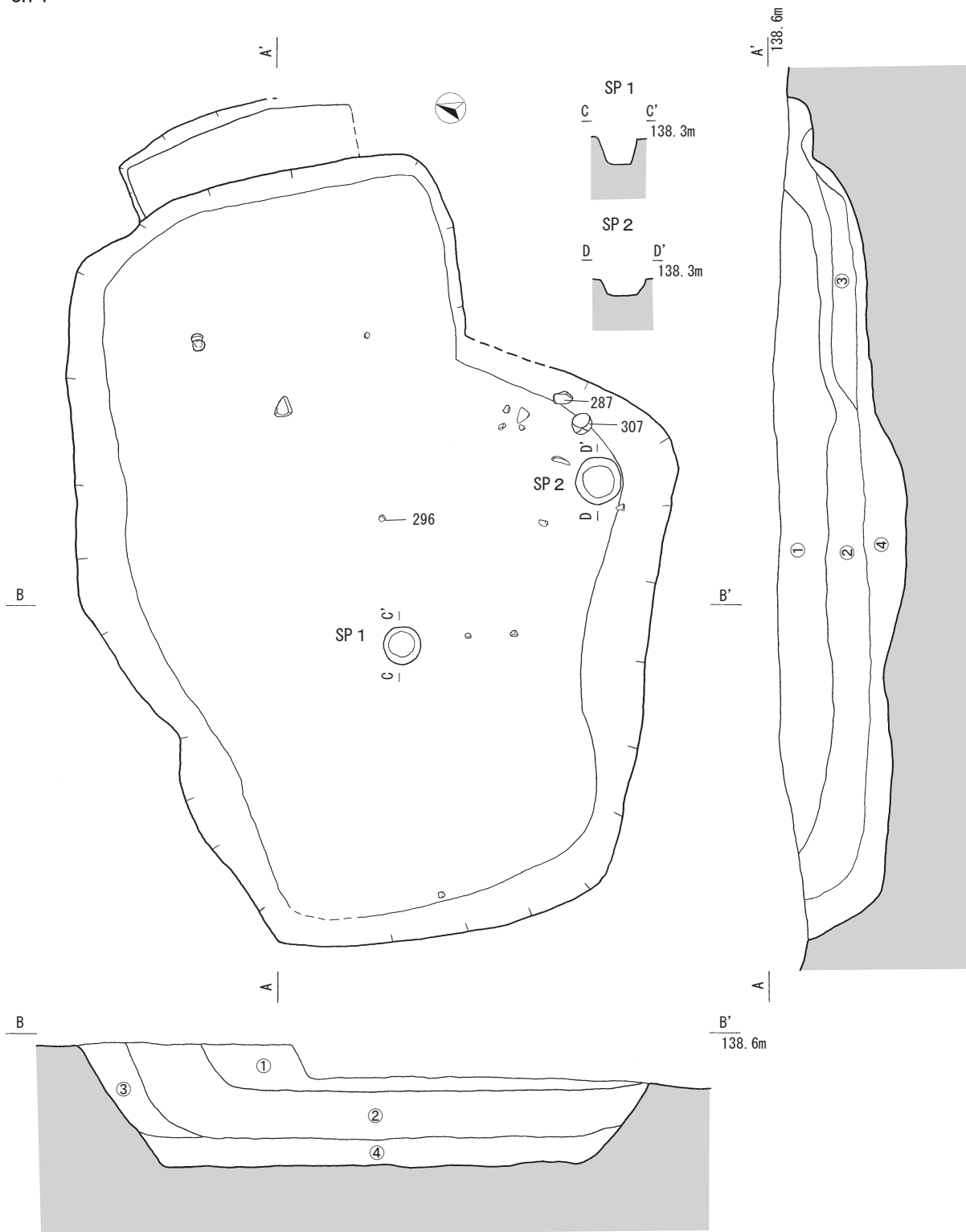
遺物 (309～359)

出土した土器の形態の特徴から、竪穴建物跡1号と同様に東原式土器の時期の遺物を伴う遺構であると判断される。なお、317・319・330・332・334・335・350・354は床面から出土した。また、南東側のステップ状部分の床面近くから鉄器も出土したが、腐食が著しく器種を特定することが難しかったため、図化には至らなかった。

309～324は甕形土器である。推定口径25cm～30cm程のものが多い。竪穴建物跡1号から出土したものと比較すると頸部のくびれがやや大きく、内面の稜はより明瞭である傾向がみられる。また総じて脚が低い。突帯の有無や調整の方法も竪穴建物跡1号に類似するが、ハケメを残すものは少ない。

309～311は完形品である。309・311は大型で310は小型である。309は内外面ともに丁寧なナゲ調整を施す。胴部下半の内面には工具ナゲの後で縦位のミガキを粗く施す。胴部と脚の境目を指で強くナゲ上げて接合させる。接地面より約15cmの高さから上位に煤が付着する。また、底部内面に煤がまだら状に付着している。破片の接

SH 1

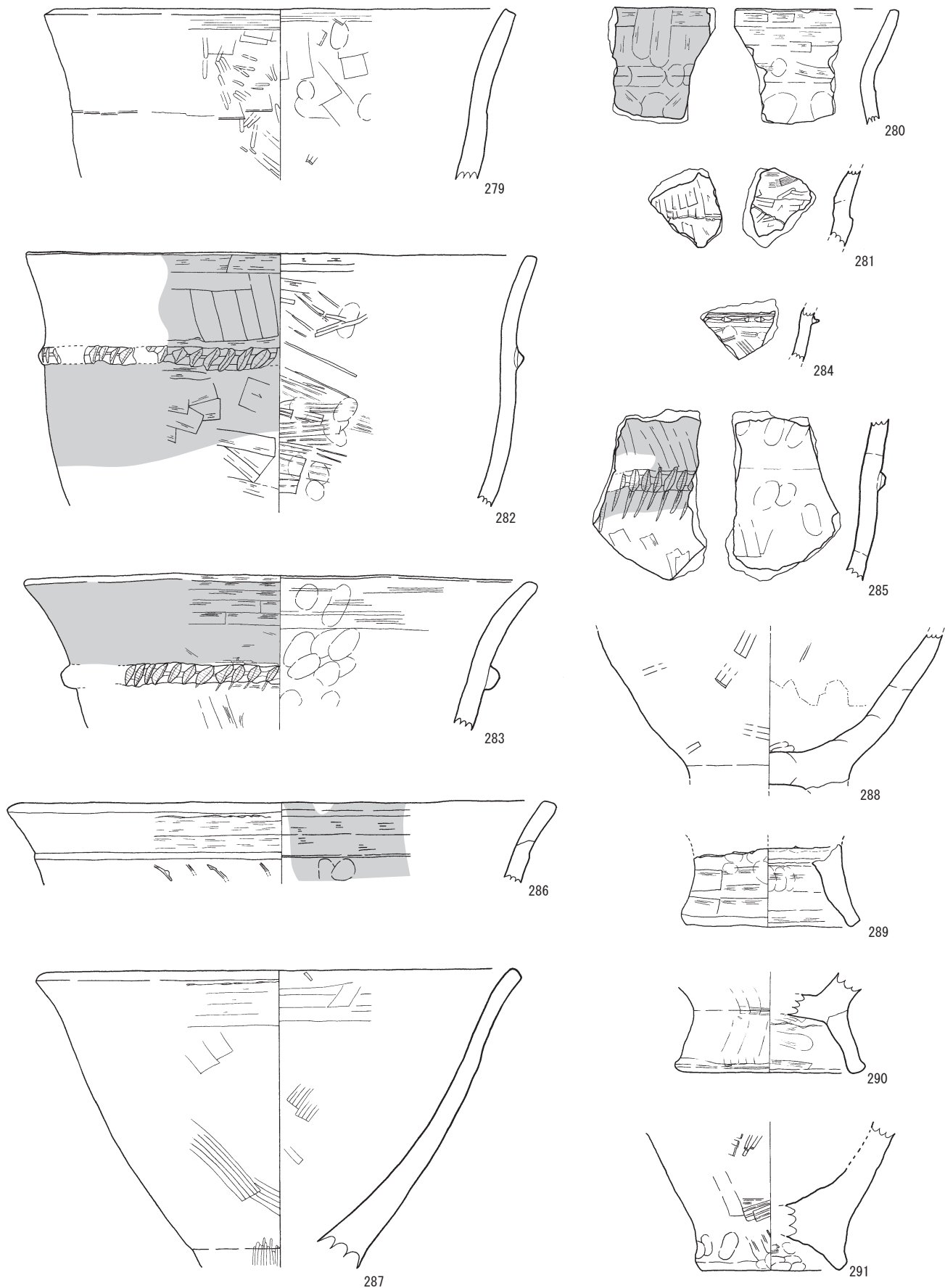


埋土

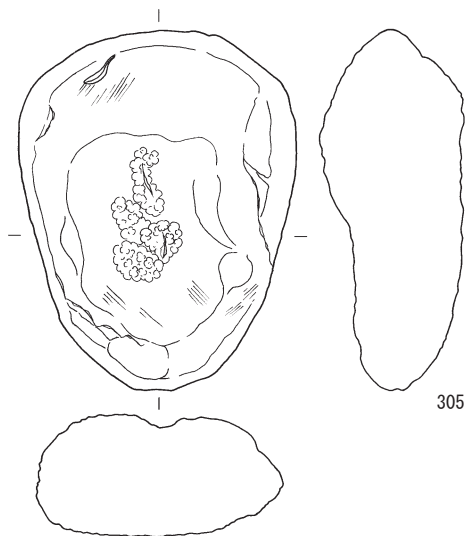
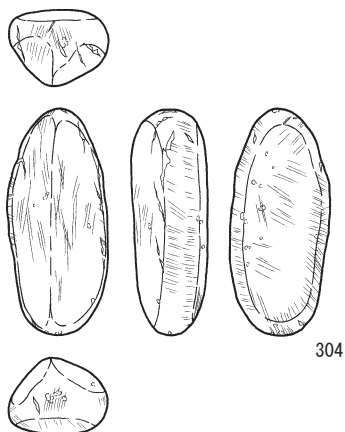
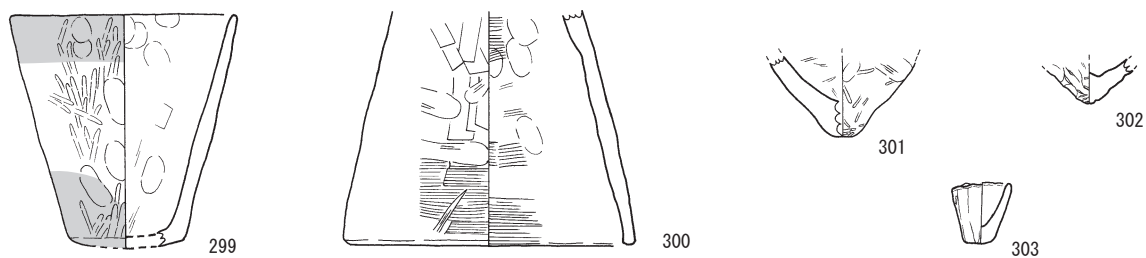
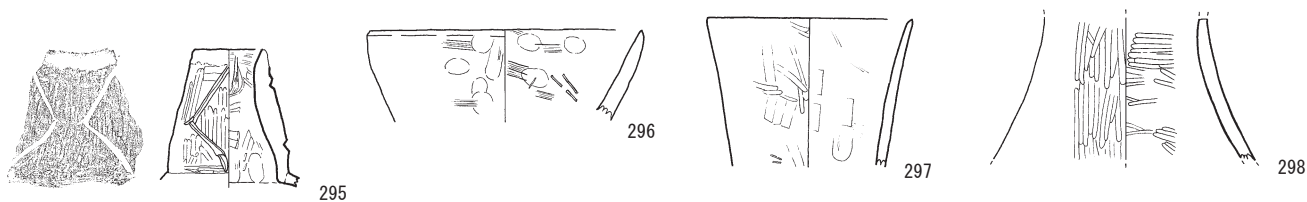
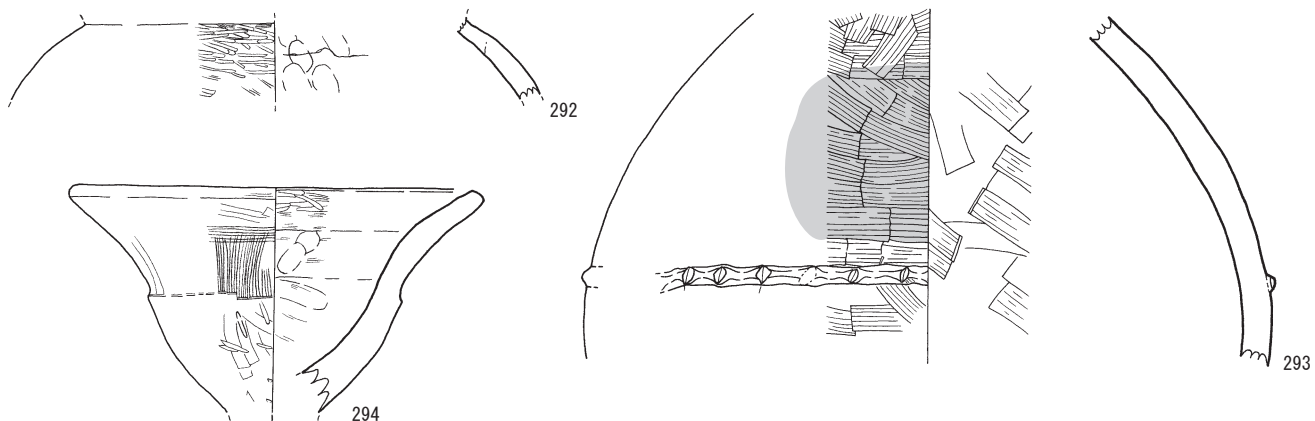
- ①暗褐色土 (10YR3/4) と褐色土 (10YR4/4) の混合土。粘性なし・しまり強い・1~2mmの橙色バミスを多量に含む・炭化物を少量含む・土部にあった現代の硬化面の影響で硬化している可能性あり
- ②暗褐色土 (10YR3/4) と褐色土 (10YR4/4) の混合土・埋土①よりも褐色が強い・粘性なし・しまり強い・2~4mmの橙色バミス・炭化物を多量に含む・3~5cm程の池田軽石を少量含む
- ③暗褐色土 (10YR3/4) ・粘性なし・しまり弱い・1~2mmの橙色バミスを多量に含む・埋土①よりも土色が暗い
- ④明褐色土 (アカホヤ二次堆積) (7.5YR5/6) と明赤褐色土 (アカホヤ一次堆積) (5YR5/8) と黒褐色土 (7.5YR3/2) の混合土・粘性あり・しまり強い

0 (1:40) 1m

第70図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号



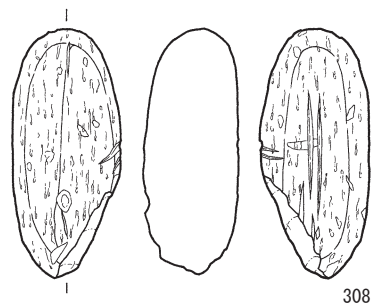
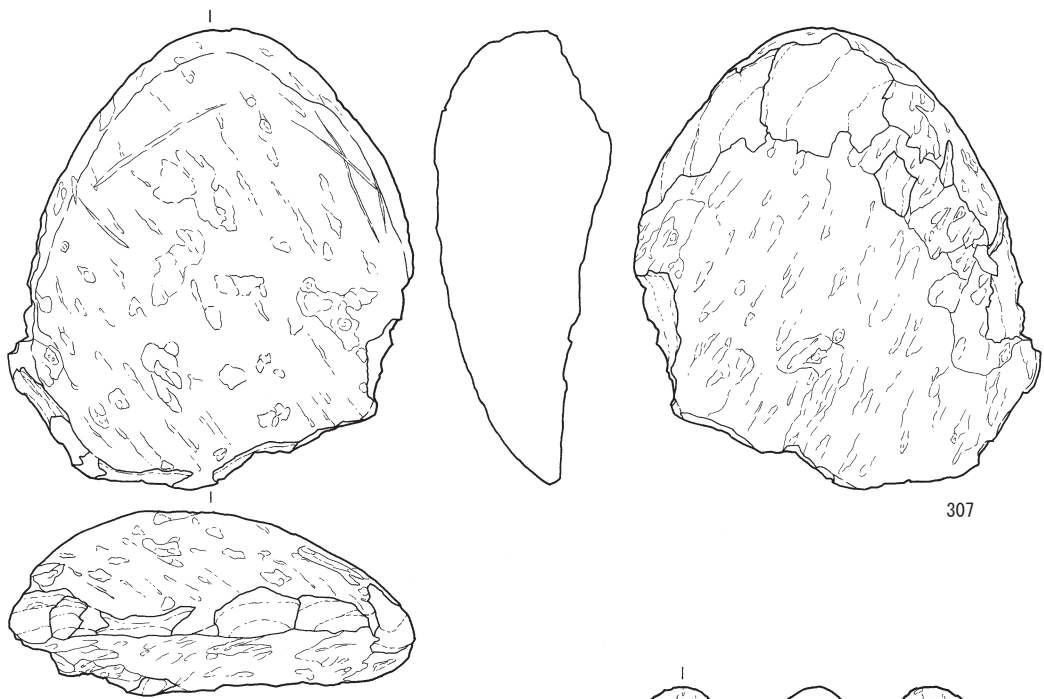
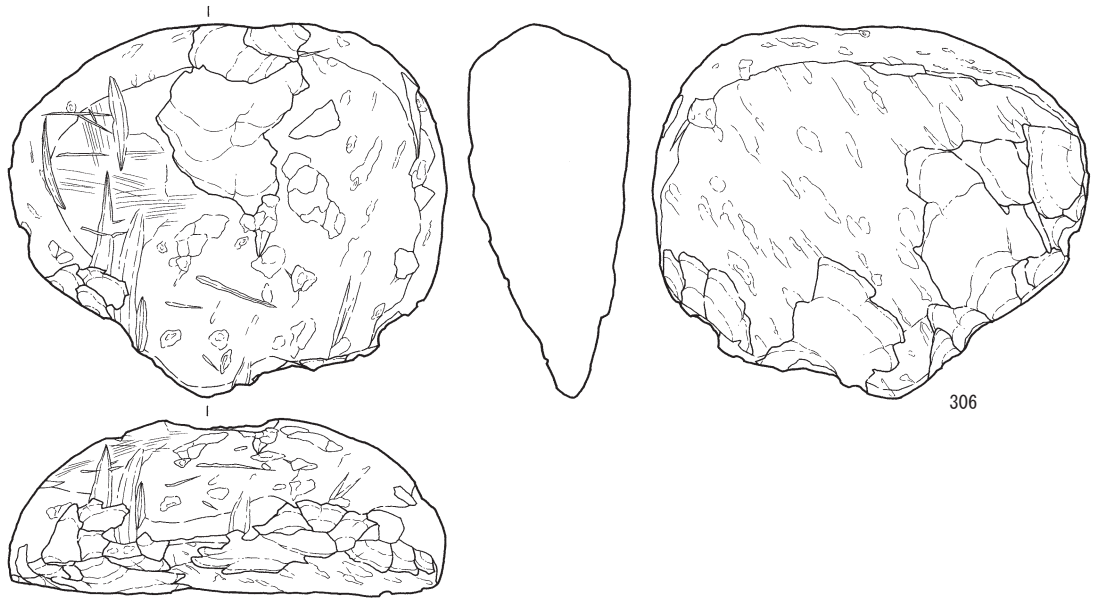
第71図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号出土遺物(1)



0 (1:2) 5cm

0 (1:3) 10cm

第72図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号出土遺物(2)



0 (1:2) 5cm

第73図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡1号出土遺物(3)

合状況から、破碎後に部分的に熱を受けた可能性もある。310は口縁部内外面の端部際に目の整ったハケメを幅広く巡らせる。頸部の稜は工具による掻き上げの始点で、始点は不揃いである。脚は指頭圧痕が多く残るやや雑なつくりである。311は口縁端部の稜が「コ」の字状に角張る。器壁は厚みがあり重い。径約6cmの小さな平底を呈し、わずかに上げ底気味である。突帯は断面三角形で刻目は密に施され、布目はつかない。器面はやや目の粗い工具によってナデられ、下胴部は下から上に長いストロークでより強くナデられる。混和材の粒子が大きくくすんだ褐色の粒が目立つ。

312～315は刻目突帯を巡らせる口縁部片あるいは頸部片である。312・313は突帯の断面形がカマボコ状で、刻目は大きく布目が確認できる。312は突帯を右を上、左を下にして工具でナデ付けて継ぐ。短い口縁部が大きく外反するため、口縁部側に刻目が大きくはみ出す。314は断面三角形の突帯を器面に丁寧に貼り付ける。棒状の工具で刻み、その間隔は広めである。口縁部はやや内湾気味である。胴部外面は細幅の工具によってナデられる。315は刻目の間隔が密で、外面の色調は赤みが強く、薄い煤と赤色顔料が付着する。

316・317は無文の甕の口縁部～胴部片である。頸部稜は工具による掻き上げの始点である。316は長胴気味のプロポーションで、胴部下半にケズリを行う。外面の所々にタタキの痕跡が残る。317は口が広く底部に向かって急な角度ですばまることが推測される。外面の煤は縦に縞のように付着する。

318～324は甕の脚片あるいは底部片である。319・320・322のように脚台をもつものが多いが、321・323・324のように平底に近い形態のものも少数出土した。

319は本遺跡出土土器の中では高めの脚である。

322は内外面と脚の剥離部分に煤が薄く付着し、脚が剥がれた後で熱を受けた可能性がある。

323は底部に粘土を充填して平らに整えた痕跡を観察できる。

324はやや上げ底である。底面には工具痕が中心から外側に向かって放射状に施される。その中心には四角形状に近いなんらかの当て具による浅い凹みが形成される。底部内面近くは摩滅が著しい。

325～331は壺形土器である。

325～327は口縁部片で、口径11～13cm程が推測され、規格が近く、口縁部の外反する位置や角度も近い。口縁端部を丁寧に横ナデして仕上げしており、325・327は端部が角張る。325・326は頸部を境に胴部に向かって大きく角度が変わるため、肩が張る器形であることが推測される。

325は外面に目の整ったハケメを下から上に施す。灰色がかった褐色を呈し角閃石を含む胎土である。形態的

には成川式土器の範疇にあるが、在地の土器ではない可能性もある。327は内外面ともに微量の煤が付着する。

328・329は肩部片である。ともに内面にユビオサエの痕が横位に規則的に付く。328は外面に丁寧なミガキを施す。色調はやや赤みが強い。329は上位に下から上のハケメを施す。色調は明るい黄褐色である。

330はほぼ完形に復元できた倒卵状の胴部である。重心はやや高めで、東原式に該当すると考えられる。外面は工具ナデの後にナデやミガキを施す。内面には粗いハケメを残す。底面にはユビオサエの痕が多く付く。外面には所々に平坦面が確認できるため、成形時にタタキを行っている可能性がある。煤が斜めに付着し、傾けた状態で煮炊きにも使用したことが窺える。

331は底部片である。器壁に厚みがあり、尖底気味の形態であると推測される。外面にはケズリを施す。丸みに沿って浅い凹凸がみられるため、成形時にタタキを行っている可能性がある。

332～336は高坏や台付鉢の坏部である。332は大型で、ほぼ完形に復元できた。椀状の坏部から口縁部が緩く外反しながら開く。外面には工具を連続して掻き上げた弱い稜を形成する。内面には段を有する。坏部底面には底部と接合させるための突起を形成する。335・336も形態は類似する。335は口縁部を欠く。外面には目の整ったハケメが施される。336は坏部内面稜より下に煤がやや厚く付着する。外面稜以下には浅い凹凸がみられ、成形時にタタキを行っている可能性がある。

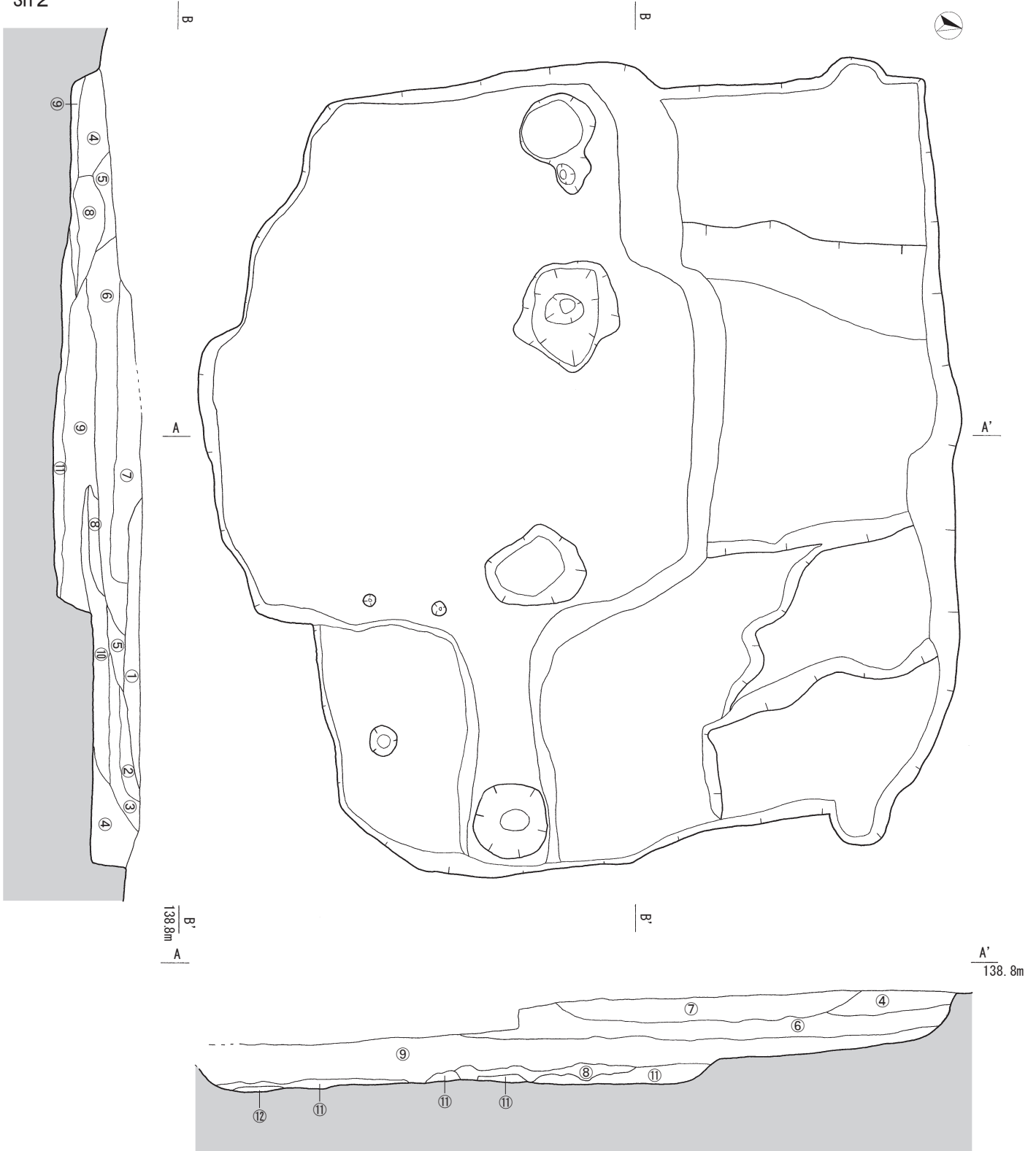
334はやや丸みが強い坏部で、口縁部の外反する角度は332・336と比較して小さい。外面屈曲部より上位に工具による掻き上げを行う。内外面ともに粗いミガキを施す。外面には赤色顔料が塗布される。333は底面から大きく開く器形で、脚との接合面で剥離する。内面にはミガキが施され、赤色顔料が塗布される。333・334は台付鉢の坏部片である可能性もある。

337～340は器壁が薄く端正なつくりの脚で、高坏や台付鉢の脚と判断されるものである。接地面の端部を丸くおさめて丁寧な横ナデを施す。339は外面の色調が黒色を呈する。338は単沈線を巡らせる。337は赤みの強い胎土を使用する。

341～349は小型丸底壺である。長い口縁をもつ傾向がみられ、胴部は偏球形のものが主体で、尖底気味のものもみられる。

341は胴部が球形で、やや短めの口縁がほぼ垂直に立ち上がる。器壁は厚く重量感がある。口縁部外面稜は工具の掻き上げの始点であり、口縁端部の内外面に刷毛による横ナデを巡らせる。口縁部の調整方法は甕に近い。肩部外面には成形時のタタキの名残の緩い稜を有する。外面には煤が濃く、内面には全体的にまばらに付着する。重心が高く堅穴建物跡2号のほかの小型丸底壺とは

SH 2



埋土

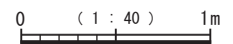
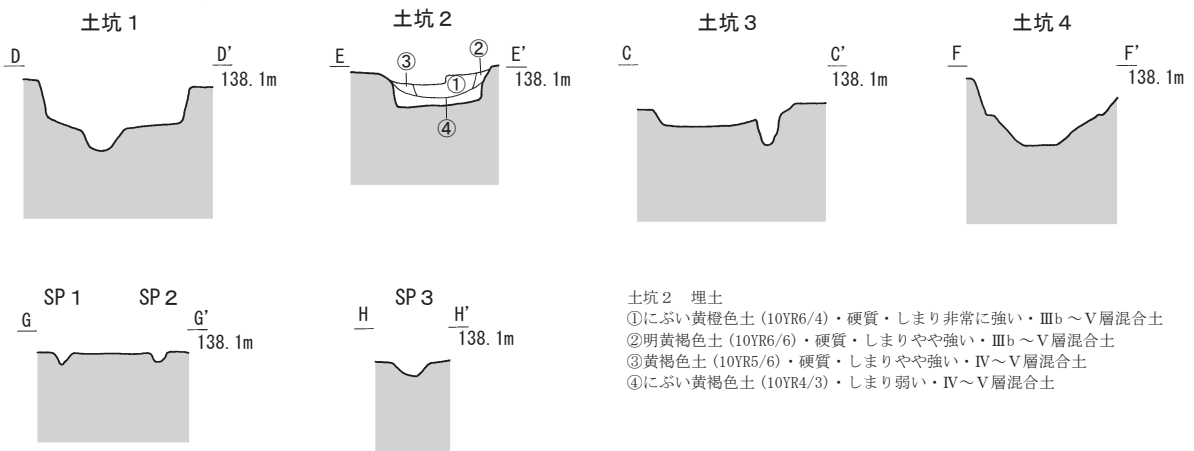
- | | |
|--|-------------------------------|
| ①カクラン土 | ⑦黄褐色土(2.5Y5/4)・硬質・しまり強い |
| ②にぶい黄褐色土(10YR5/4)・硬質・しまり強い(部分的にしまりの弱い土を含む) | ⑧黒褐色土(10YR3/2)・炭化物含む |
| ③黄褐色土(2.5Y5/4)・しまり弱い(部分的にしまりの強い土を含む) | ⑨灰褐色土(7.5YR4/2)・硬質・しまり強い・砂含む |
| ④褐色土(10YR4/4)・しまり弱い(部分的にしまりの強い土を含む) | ⑩にぶい黄褐色土(10YR5/4)・硬質・しまり非常に強い |
| ⑤にぶい黄褐色土(10YR5/4)・硬質・しまり強い | ⑪明黄褐色土・硬質・しまり強い・アカホヤ含む |
| ⑥にぶい黄色土(2.5Y6/4)・硬質・しまり非常に強い | ⑫褐色土(10YR4/4)・硬質・小礫含む |

0 (1:40) 1m

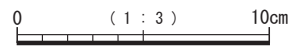
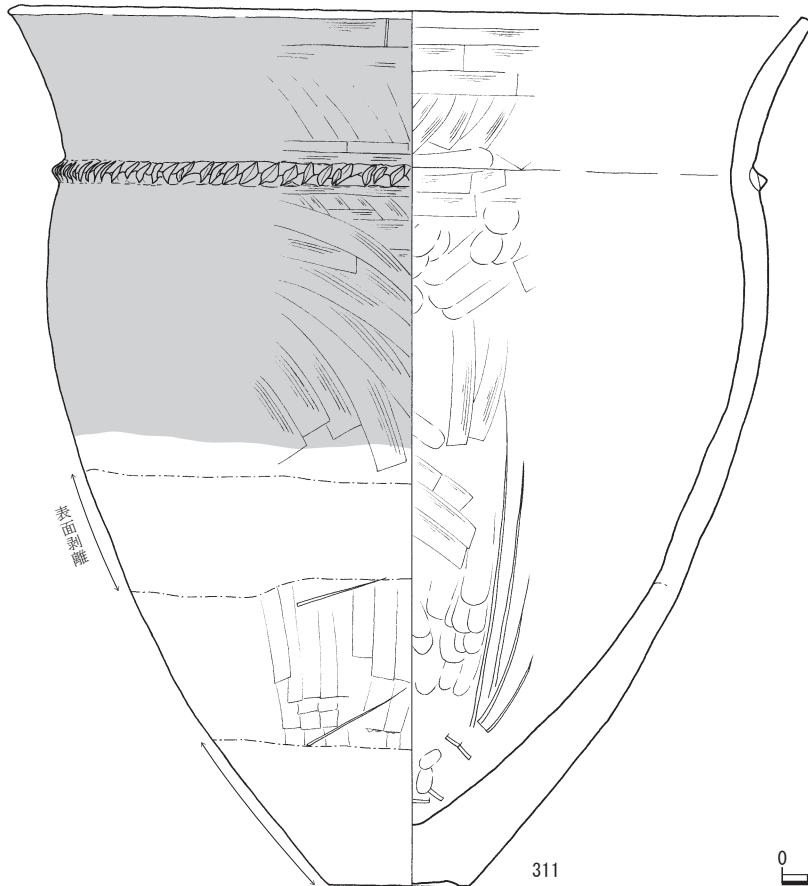
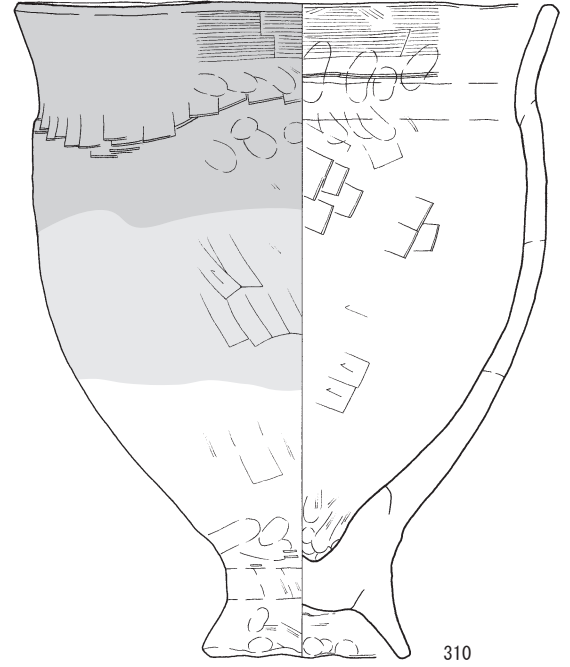
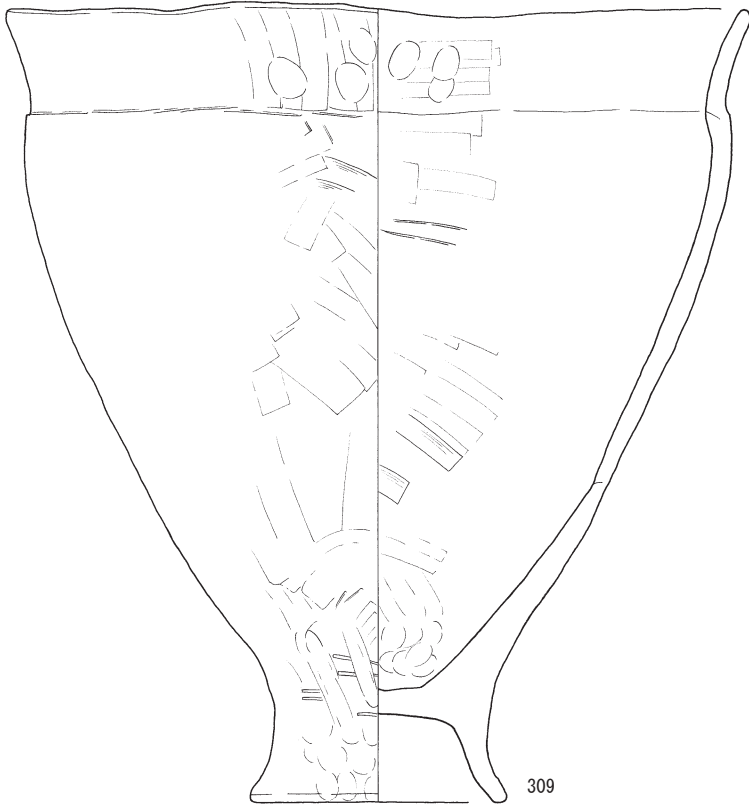
第74図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号完掘状況



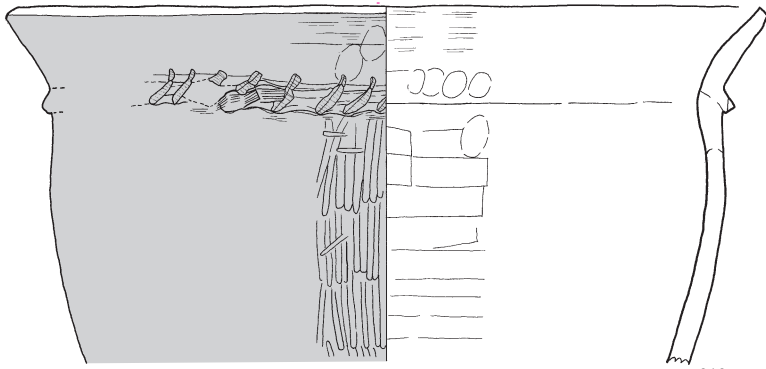
※遺構図平面の灰色部分は、炭化物が集中して検出された箇所を示す。



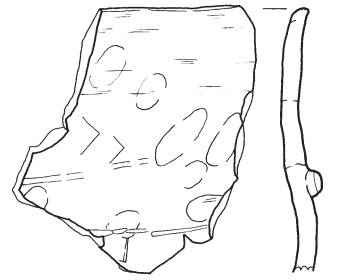
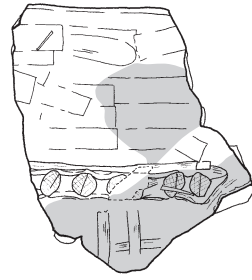
第75図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号遺物出土状況



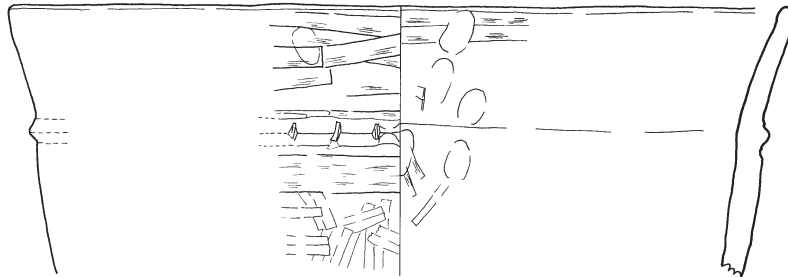
第76図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物(1)



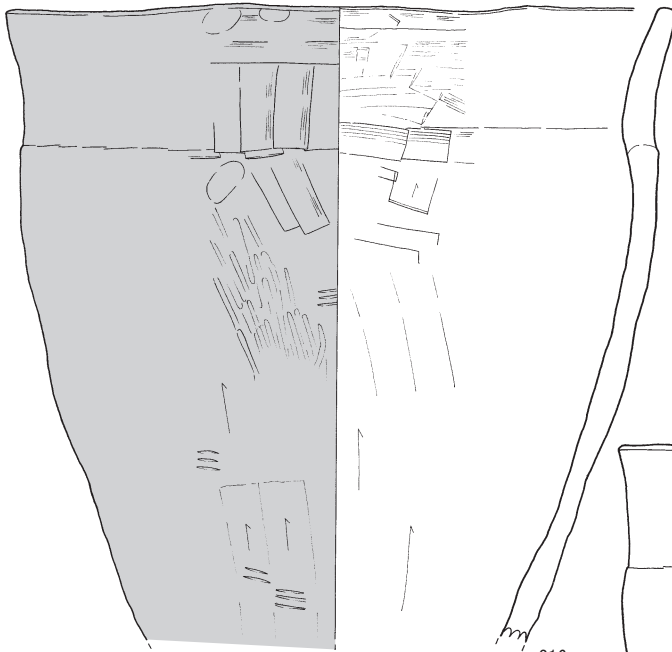
312



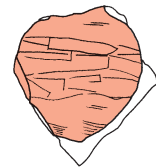
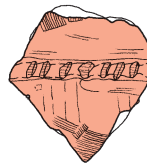
313



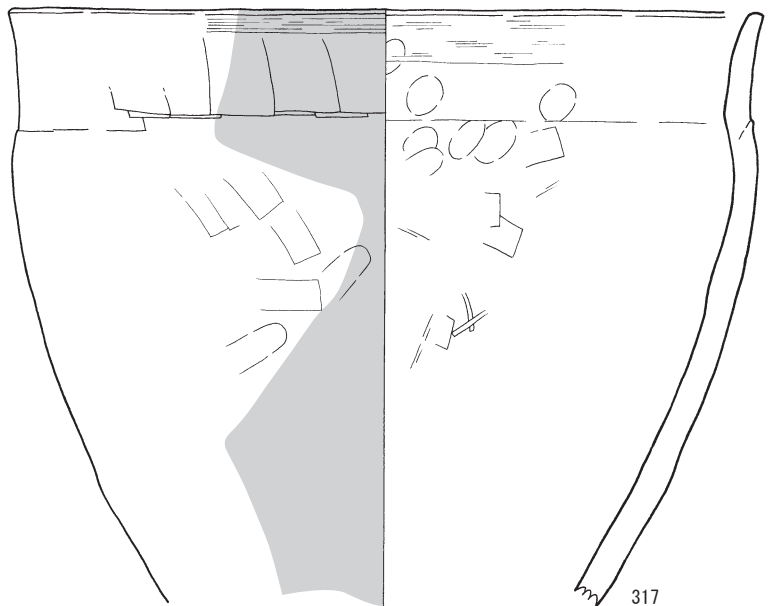
314



316



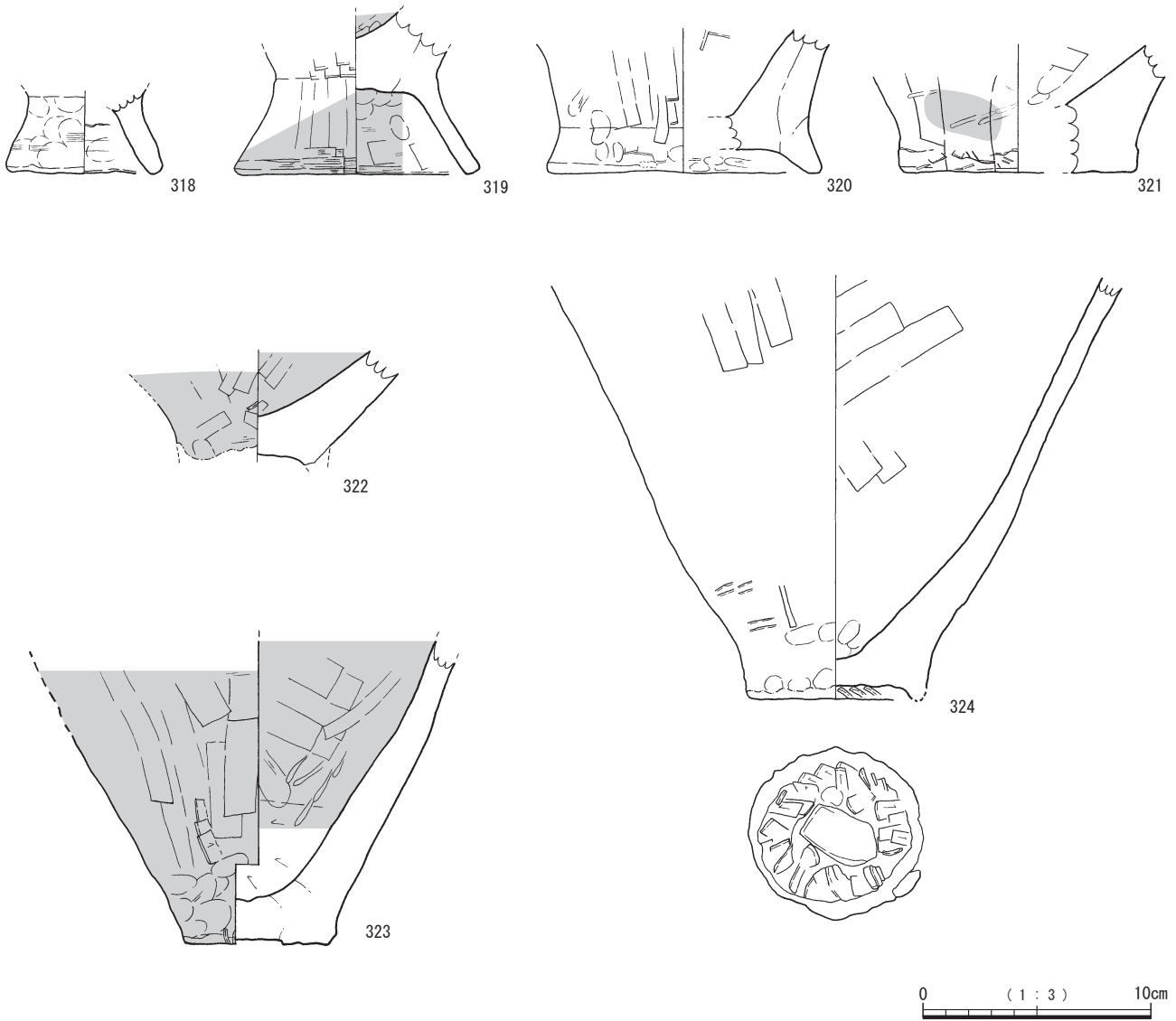
315



317

0 (1:3) 10cm

第77図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物(2)



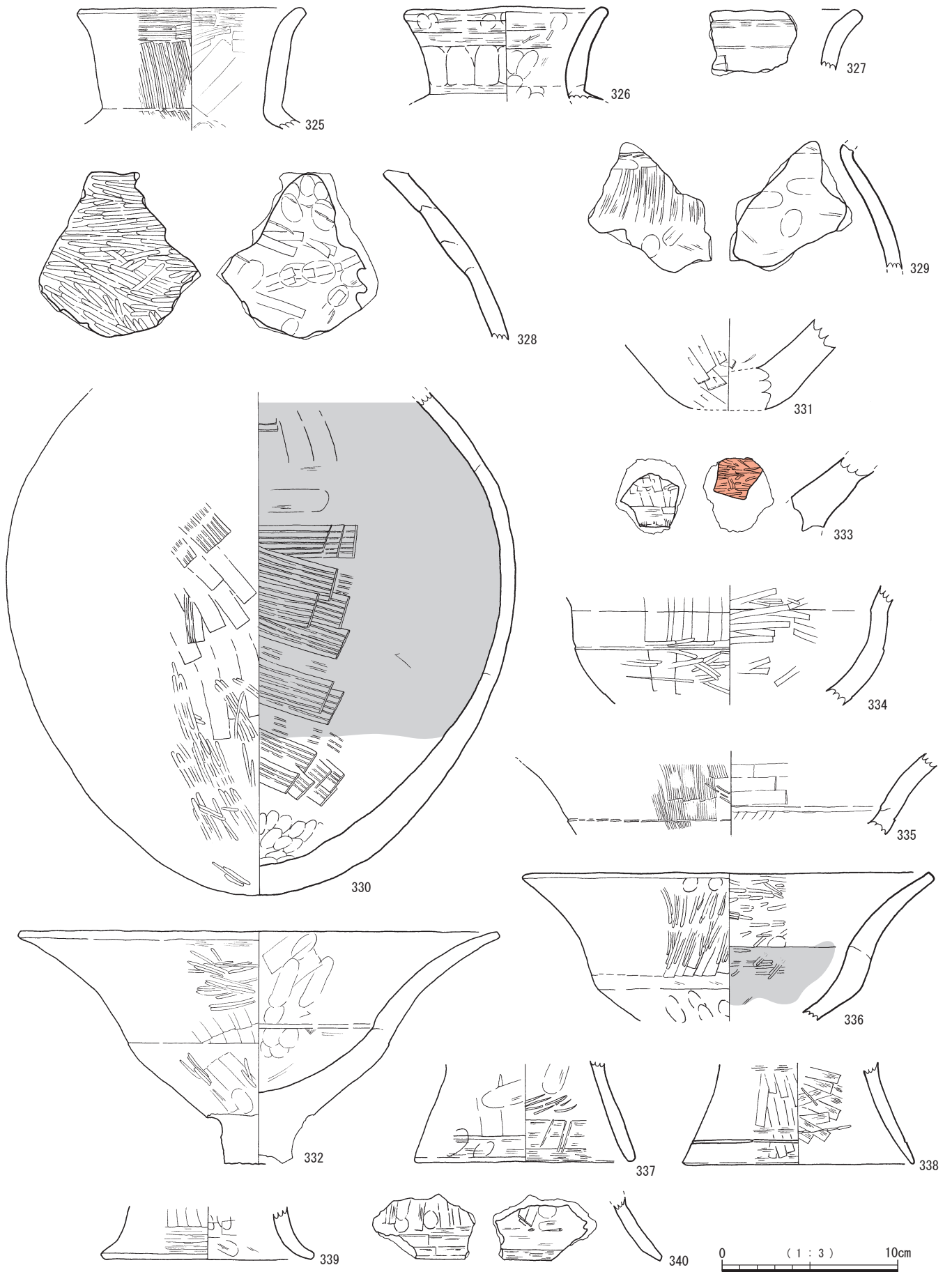
第78図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物(3)



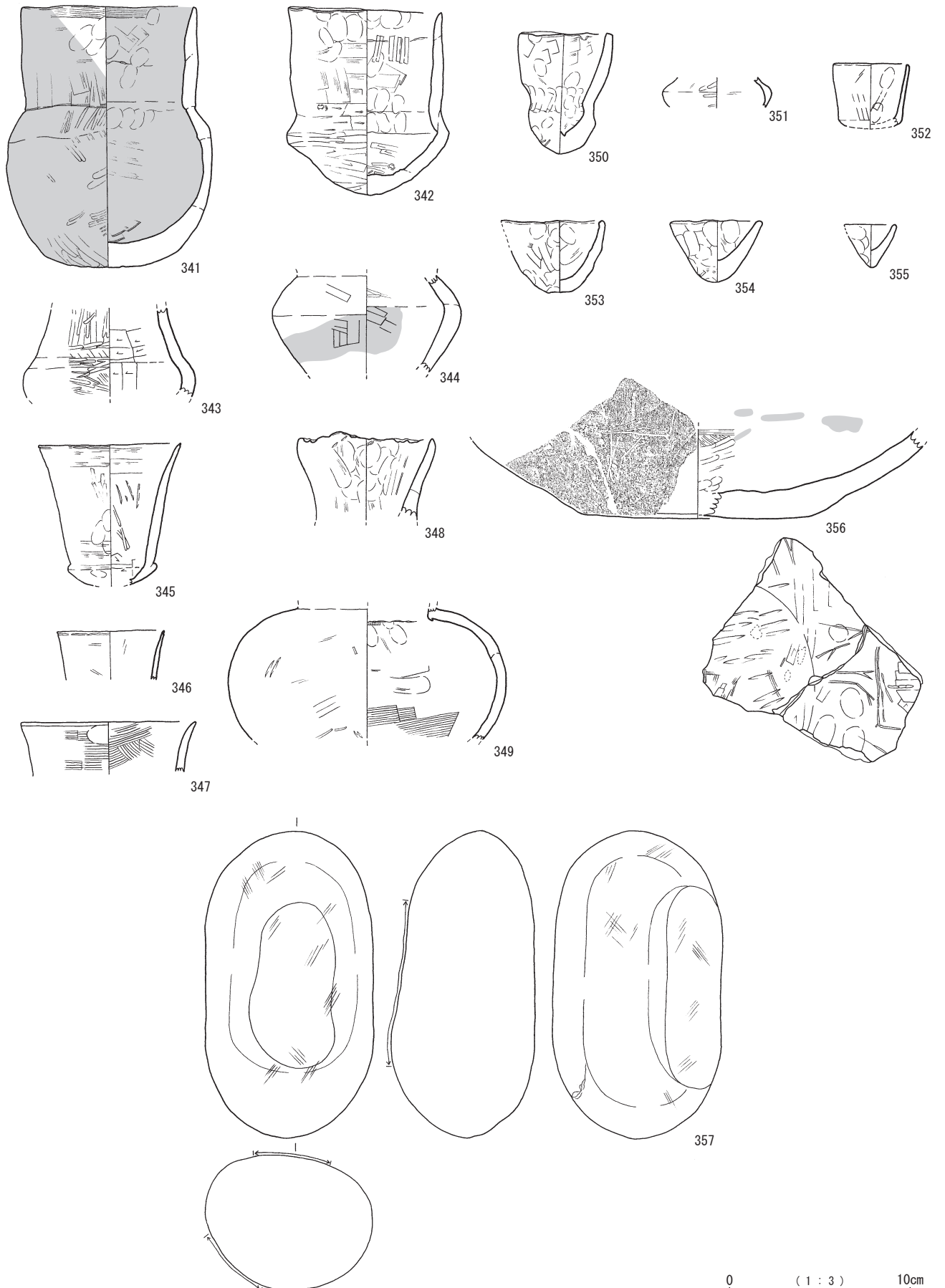
No323底面



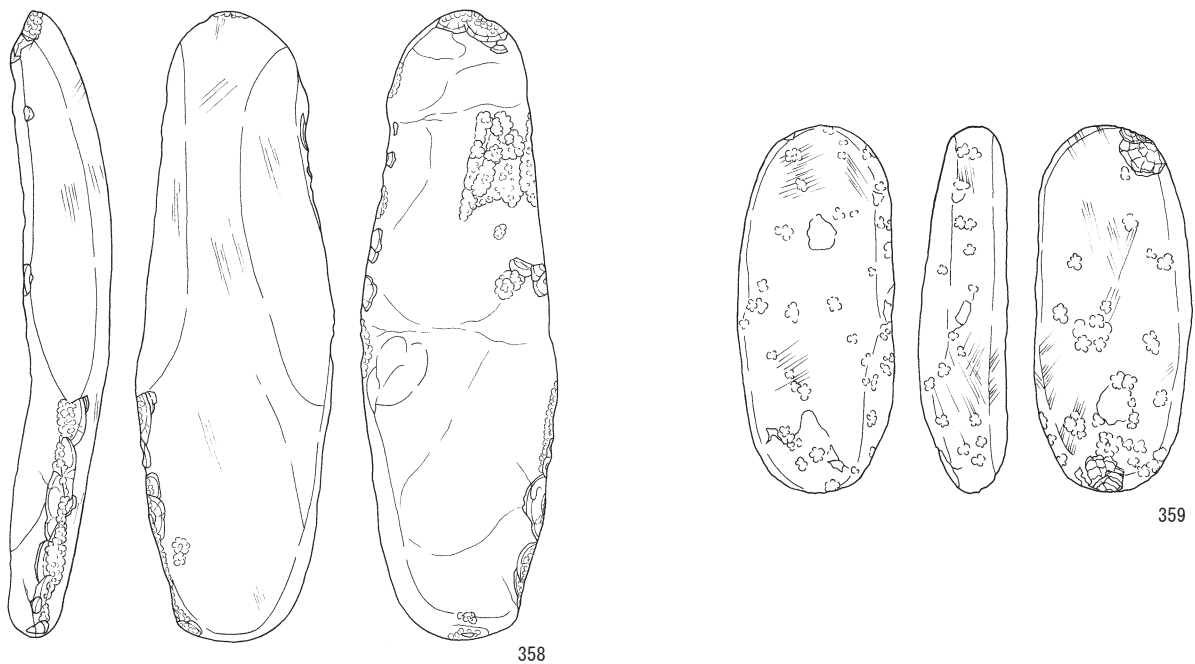
No324底面



第79図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物(4)



第80図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物(5)



第81図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡2号出土遺物(6)

プロポーションが異なる。煮炊き用として使用された可能性が高い。

342は広口で、緩い尖底である。重心が低く、最大径の位置に稜を形成する。長い口縁部が垂直に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。胴部の内外面は細幅の工具によって粗くケズリ、調整される。頸部より上に指頭圧痕が多く残る。

343・344は胴部の形態が偏球形である。343は頸部で緩く絞まり、長い口縁部が口縁端部に向かってなだらかにすぼまる器形であると推測される。外面は丁寧にみがかれ、黒色を呈する。345は小型である。器壁は薄く精良な胎土を使用した精緻なつくりである。口縁端部直下に細い沈線を巡らせる。胎土の色調は灰色がかった明るい黄褐色で、搬入品の可能性がある。

346・347は口縁部片で器壁が非常に薄い。346は小型でわずかに外反しながら開く。色調は明るい橙色で混和材の粒子のこまかな精良な胎土を使用する。摩滅により器面の調整は不明である。347はやや口が広く、外面に目の整ったハケメを丁寧に施す。色調は暗い褐色である。

348は手捏ねで製作される。反りながら開き口縁端部近くで緩く内湾する。口縁端部は先細り、口唇のラインは不揃いである。残存部以下が外側に張り出すことが推測されることから、小型丸底壺の口縁部と判断してここに含めた。

349は胴部が丸く張り出し、均整のとれたプロポーション

である。器壁は薄く厚みは均一である。口縁部との接着面で剥離する。器面は丁寧にナゲで調整され、内面下位に斜位のハケメを施す。成形時にタタキを行っている。色調は明るい褐色で、混和材の粒子は小さく、角閃石などの黒色粒が目立つ。搬入品の可能性がある。外面には被熱の痕跡がみられる。

350～355はミニチュアの土器である。指頭圧痕が多く残る粗いつくりのもの(350・353～355)と器壁が薄く整い精緻なつくりのもの(351・352)とがある。ユピオサエのみでつくられたものは殆ど無く、ヘラ痕や工具ナゲの痕跡がみられ成形時には工具も使用されていることが窺える。

350はシャトル様の形態で、小型丸底壺を模したと考えられる。頸部の稜は強いユピオサエを連続することによって成形する。351・352は胎土の特徴が346と類似する明るい色調のものである。やや推定径に違いはあるが、346と352は同一個体の可能性もある。352はコップのような形態の鉢で、レンズ状の底部となると推測され、口縁部は長くわずかに外傾しながら立ち上がる。353～355は三角錐型の鉢である。大小様々な規格のものが出土しており、口縁部を一部欠いており人為的に破碎した可能性も窺える。353・354には被熱の痕跡が窺える。

357～359は磨敲石類である。

357はホルンフェルスC類製の磨石で緻密で硬質な石材を使用する。楕円形の形態で、断面形は楕円形であ

る。全面的に擦痕が確認され、よく使用され光沢をもつ。

358・359はホルンフェルスC類製で、扁平な縦長の礫をハンマーとして使用したものである。358は左側辺の下辺側を敲打に多用している。359は浅い敲打が所々に確認され、上面、下面には剥離の痕跡がみられる。敲打の対象物が堅固なものであった可能性がある。

(3) 竪穴建物跡3号(第82～85図)

E-20区Ⅲb層で検出した。北半分は調査区控え部分のため調査不可であったが、本来は約5m×5mの隅丸方形を呈していたと考えられる。南部には一部張り出した部分があり、検出当初は花卉型の可能性を考えたが、西部・東部に張り出しのようなものは確認できなかった。南部には長軸約1.9m、短軸約1.4mの土坑状の窪地がある。検出面から床面までの深さは約24cmであり、窪地部分の深さは約44cmである。埋土は3層に分層できた。埋土上位はⅢb層由来の褐色土であり、埋土下位は粘性の強い暗褐色土である。埋土の堆積状況から、本来の掘り込み面はさらに上位にあった可能性が高い。柱穴の可能性のあるピットは3基確認できた。SP1は長軸約40cm、短軸約26cmの楕円形を呈し、深さ約20cmである。SP2は長軸約56cm、短軸約48cmの略円形を呈し、深さ約22cmである。SP3は長軸約38cm、短軸約34cmの円形を呈し、深さ約10cmである。3基とも埋土は粘性の強い暗褐色土の単一層である。

また、床面から出土した炭化材を年代測定した結果、¹⁴C年代が2,775±25yrBP、2δ暦年代範囲が998-891calBC(72.59%)、881-835calBC(22.86%)であり、縄文時代晩期に相当する結果であった。本遺跡からは第4章第1節に報告したように縄文時代晩期の土器も出土しているため、それらに伴う時期の炭化物が混在して検出された可能性がある。竪穴建物跡3号は平面形状や出土遺物の特徴から竪穴建物跡1・2号と同様に東原式土器の時期の遺物を伴う遺構であると判断される。

遺物(360～386)

360・364～368・370・372・376・378・380～382は床面から出土した。

360～369は甕形、あるいは鉢形の土器である。

360～364は甕形土器の口縁部～頸部片である。

360・361は無文で、胴部は丸みを帯びながらすぼまると推測される。360は器壁に厚みがあり、頸部内面の稜は明瞭である。口縁端部を「コ」の字状に角張らせる。361は頸部との境目に縦位の工具ナデの始点を深く連続して巡らせる。

362は口縁端部を外側へわずかに垂下させる。口唇部には平坦面を形成する。口縁端部内外面には刷毛による横ナデを施す。突帯の有無は不明である。

363・364は頸部に突帯を有する。ともに突帯の幅は細

く、刻目は小さい。364の刻目は細い棒状の工具により刻まれる。365は胴部の器壁が内湾気味に立ち上がり、口縁は大きく外反して開く。口縁部内面上位にミガキを施す。外面はやや赤みの強い色調を呈し、台付鉢である可能性もある。石英や輝石の粒子に輝きが強くくすんだ褐色の粒子を多く含み搬入品の可能性も考えられる。

366・367は胴部下半片である。ともに大きく外傾しながら立ち上がる。366は脚との接合面で剥離する。内外面に煤が付着し、内面の煤は帯状に付く。割れて鉢状の形になった後にも蓋として使用した可能性も窺える。367は内面に赤色顔料が付着し、ケズリを行った後で縦位のミガキを粗く施す。穿孔の一部が確認できる。鉢である可能性もある。

368・369は底部片である。368は脚との接合面で剥離する。

胴部器壁の立ち上がる角度は急である。369は推定底径8cmで、接地面の角は明瞭で底付きも良い。内面は丁寧なナデ調整で仕上げられる。大きく開く器形となるため坏や鉢の底部である可能性もある。

370～373、382は壺形土器である。

370は上胴部を復元できた。口縁部は外傾しながら立ち上がる。肩部はあまり張らず、なだらかな倒卵状の形態である。胴部の中央よりやや高い位置が最大径で、その位置に刻目突帯を巡らせる。刻目には布目が確認できる。突帯は右側を下にわずかに垂れさせる様に継ぎ合わせる。肩部には成形時の右上がりのタタキの痕跡がみられる。外面には全体的に煤が付着しており、煮炊きにも使用されたと考えられる。

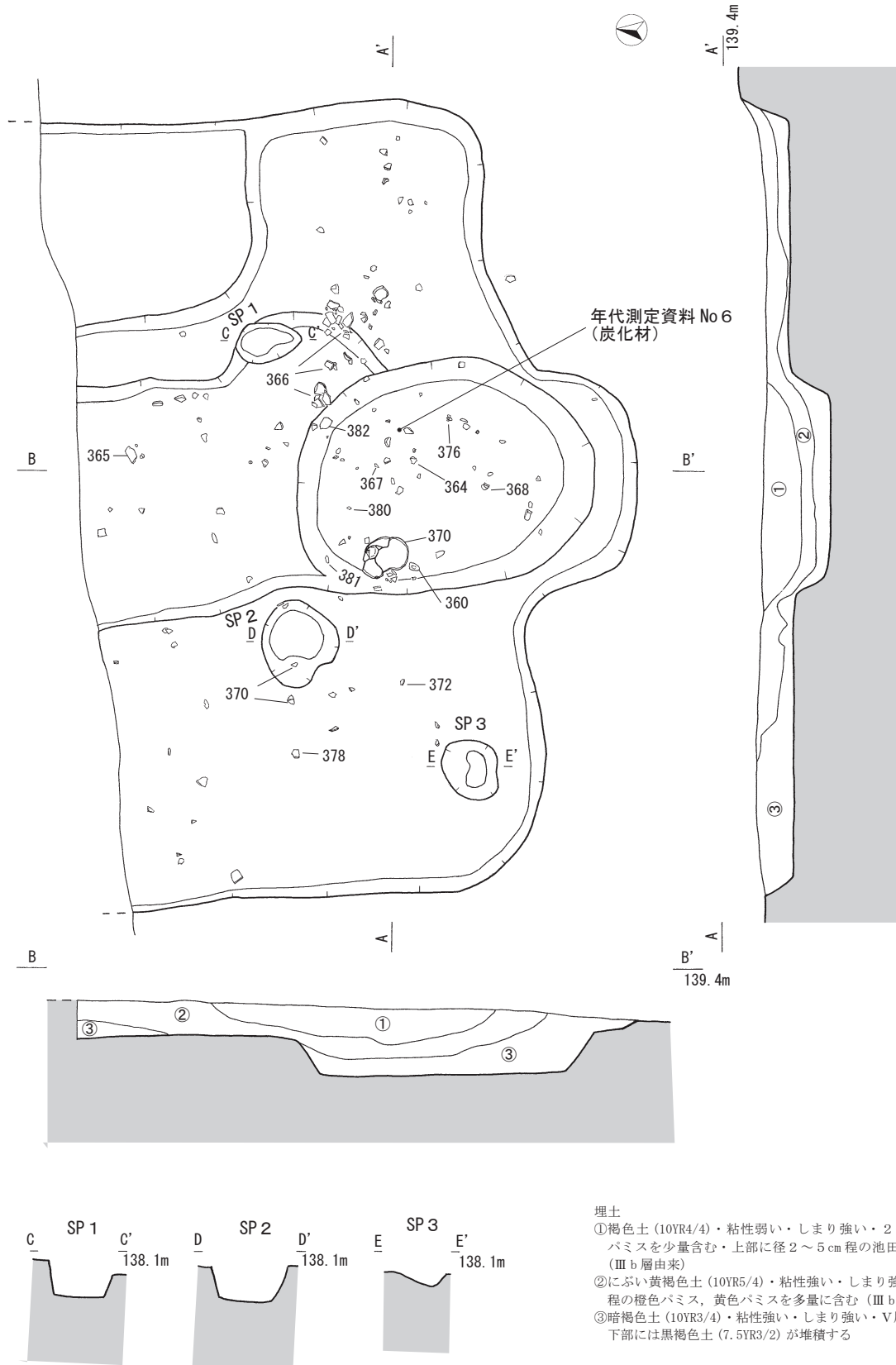
371・372は大型の肩部片である。370と同様に肩部の張り出さない形態であることが推測される。372は最大径よりもかなり上位に太幅の刻目突帯を有し、刻目には布目が確認できる。外面には煤が付着する。

373は短頸の壺の口縁部片である。胴部は丸みの強い形状であることが想定される。内外面に煤が付着する。指頭圧痕が多く残り、粗いつくりである。

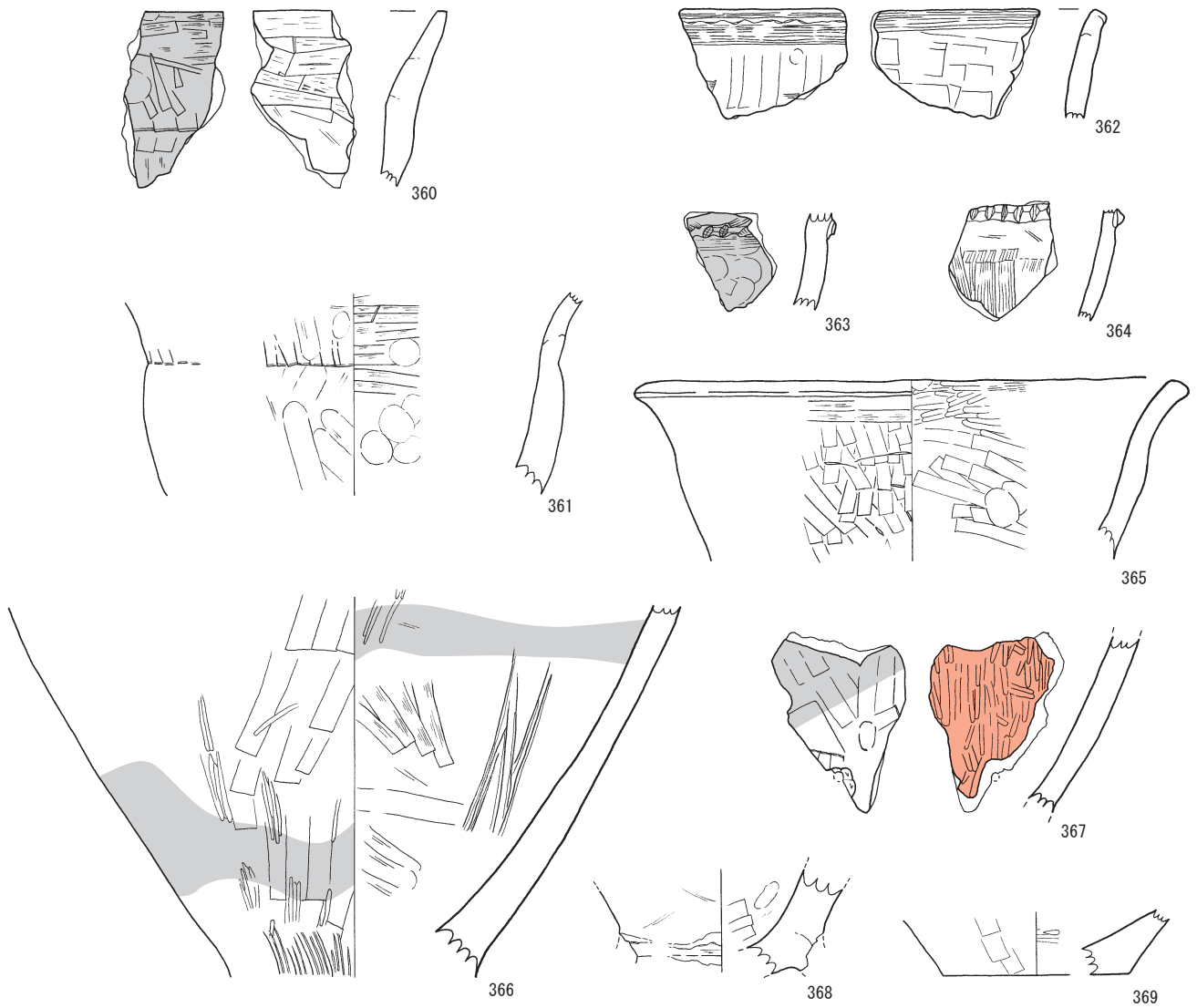
382は底部片で、底面にはわずかに平坦面を形成する。器壁は丸みを帯びながら立ち上がる。底部内面に凹みを形成するが、その位置は底部平坦面とは3cm程ずれる。胎土は混和材の粒子が少なめで、明るい黄褐色を呈する。

374～380は小型の器種である。

374～378は小型丸底壺である。374・375は長頸の口縁部片で、急な角度で立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。口縁端部は先細り、横ナデを巡らせる。規格・形状は類似するが、375は器壁がごく薄く、目の整ったハケメを丁寧に施した精緻なつくりのものである。胎土は極めて精良で、焼成もよく大変軽い。376は同一個体の低い偏球形の胴部片である。375・376は搬入品の可能性が高い。374は外面に縦位のミガキを施す。375と比較



第82図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡 3号



第83図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡3号出土遺物(1)

0 (1:3) 10cm

すると厚みがあり、重量感のある胎土である。377は球形の小型の壺の胴部片である。378は偏球形の胴部片である。外面に被熱の痕跡が窺える。

379・380は鉢である。379の上位は細い直線的な筒状の形態であり、口縁部でわずかに外反する。口縁端部は先細る。底部に向かって丸くすぼまる。380はコップ状の形態のもの底部であると推測される。381は残存部分が少なく正確な径を出すことは難しいが、筒状の形態となることが想定されるため、高坏のエンタシス状の脚の一部であると判断した。低めの脚であると推測される。外面には櫛目状のハケメが縦位に施され、煤が付着する。

383～386は石器である。

383は輝石安山岩製で、三角形の板状の薄片である。下辺は表裏両側から打ち欠き、水平な刃部を形成する。赤色化がみられるため被熱の可能性が窺える。

384・385は自然の礫の形状を利用し、縦長の小礫の先

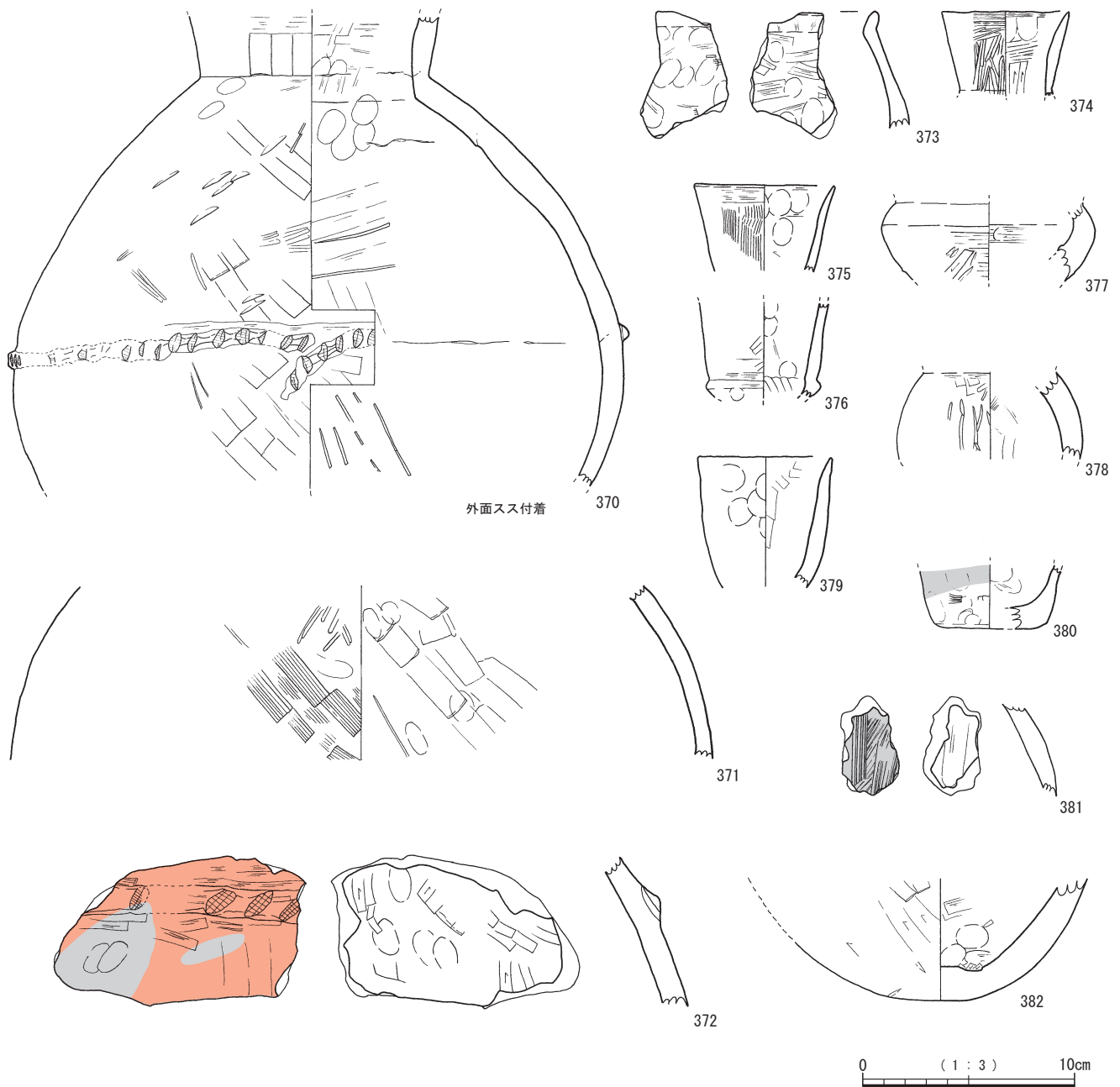
端部分を鑿などの工具様に使用したものである。384はホルンフェルスB製で片手の指でつまんで持つとフィットするサイズである。

385はホルンフェルスC類製で断面が三角形状である。正面・裏面には擦痕がみられ、砥石としても使用したことが窺える。

386は安山岩製の楕円形状の磨敲石である。上面と表裏両面の中央部分に敲打の痕跡がみられる。

(4) 竪穴建物跡4号(第86～88図)

D・E-19区IV層上面で検出した。南半分は後世の削平を受けていたが、本来は約5m×5mの隅丸方形を呈しており、四方に幅約0.5mの張り出しを有していたと考えられる。北から南に緩やかに下る傾斜地に位置しており、床面も北から南に緩やかに傾斜する。3段構造であり、中央部には円形の窪地を有する。埋土は9つの層



第84図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡3号出土遺物(2)

に分層できた。竪穴建物跡1号と同じく埋土上位はⅢb層由来の混合土であり橙色パミスを含み、下部は黒褐色土にアカホヤ火山灰がブロック状に入る。円形窪地には砂質土が層をなして堆積しており、建物使用時期に雨水などの流れ込みがあった可能性が考えられる。柱穴の可能性のあるピットは2基確認できた。SP1は長軸約60cm、短軸約42cmの楕円形を呈し、深さ24cmである。埋土はにぶい黄褐色土と褐色土の2層に分かれる。SP2は長軸約50cm、短軸約40cmの円形を呈し、深さ約12cmである。埋土はにぶい黄褐色土の単一層である。

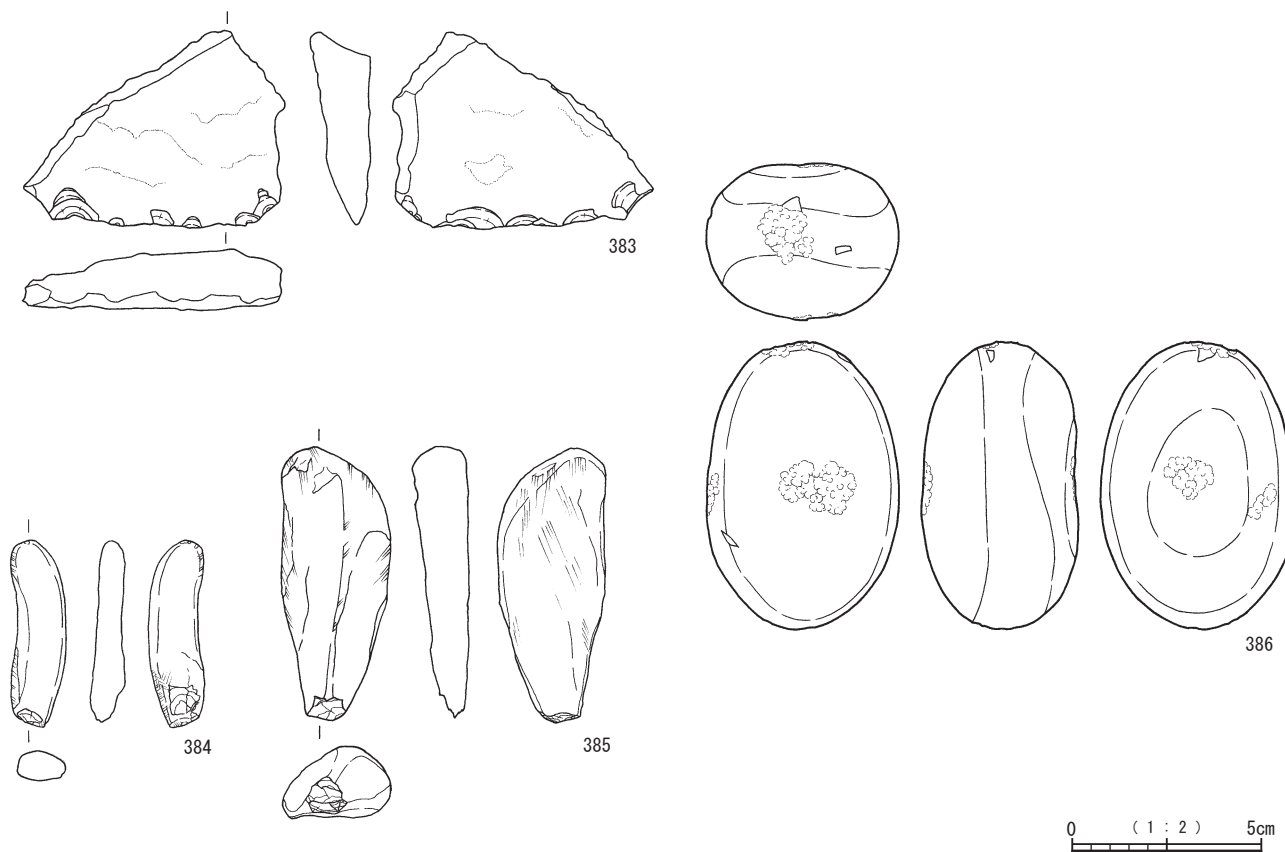
また、床面から出土した炭化材を年代測定した結果、 ^{14}C 年代が $1,780 \pm 20\text{yrBP}$ 、 2σ 暦年代範囲が

276-344calAD(68.10%), 229-362calAD(27.36%)であり、古墳時代前期前半に相当する結果であった。

遺物(387~412)

388・392~397・402・403・408・410は床面から出土した。出土遺物の特徴から竪穴建物跡1~3号と同様に東原式土器の時期の遺物を伴う遺構であると判断される。

387は床面中央部分と考えられる柱穴(SP1)から出土した口径約8cm、底径約3.5cmの小型の鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部がわずかに外反する。器壁は厚く、特に内面に指頭圧痕が多くみられる粗いつくりである。ごく短い脚を指でつまみだして形成する。完形で出土したが口唇部を半周ほど欠いており、割れ口の状



第85図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡3号出土遺物(3)

況から内外面から数回に分けて人為的に打ち欠いたことが窺える。被熱の痕跡は全面的にみられ、断面にもわずかに煤が付着する。出土状況もふまえるとなんらかの祭祀的な行為により製作・使用された可能性もある。

388～393は甕形あるいは鉢形の土器である。

388は口縁部～胴部下半片である。頸部の外反角度は大きく、長胴気味のプロポーションである。口縁端部は明瞭な「コ」の字状に成形される。突帯の稜も明瞭に角張らせた丁寧なつくりである。突帯の刻目は大きく、間隔も広い。布目を有する。破片の下端を打ち欠いて半円状に丸みをつけている可能性がある。

389～391は無文の口縁部や頸部片である。389・391は頸部の外反角度が大きい。胴部は丸みを帯びながらすぼまる。口縁部外面には縦位の、内面には横位のハケメが施される。390は外面にはミガキを、内面にはケズリを施す。

392は西側の2段目の掘り込みの端の床面から検出された。器壁は直線的に開き、口縁端部でやや内湾する鉢状の形態である。脚は本遺跡の古墳時代前期に相当する土器のなかではやや高脚である。器面は工具ナデとミガキにより丁寧に仕上げられる。煤は外面の高さ10～15cmあたりから上位に斜めに付着する。煮炊きに使用されたと考えられる。また、脚の内面や接地面にも確認さ

れるため破碎後に被熱した可能性もある。

393は大きく外傾しながら開き口縁端部際は強く外反する。口唇部は外面側を刷毛によって面取りされる。鉢状の形態になると推測する。外面には屈曲部分より上位に煤が厚く付着する。

394・395は壺形土器である。底部は丸く形成され、底部やその周囲には成形時にタタキを行った痕跡が窺える。394は底部に4cm程の平坦面を形成する。395は重心が高く尖底気味で縦長のプロポーションである。外面には工具ナデ後にミガキを、内面には下から上のケズリを施しその始点のヘラ痕を残す。

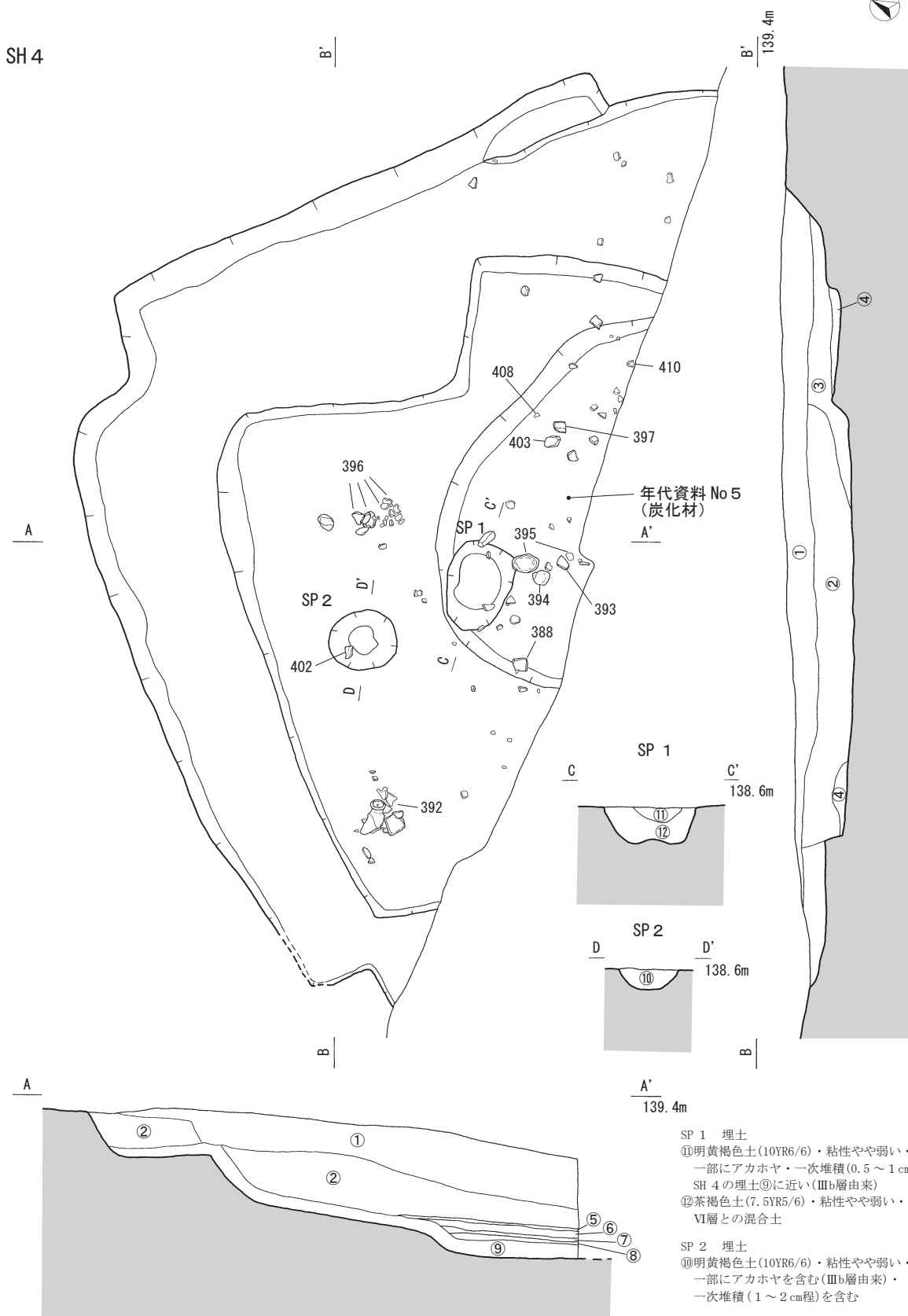
397～403は高坏である。397～400は坏部片で401～403は脚である。

397は推定口径約20cmの椀形の坏部片で、口縁部は内外面に緩い稜を形成し外反する。器壁には厚みがある。外面下位には丸みに沿って、成形時のタタキの痕跡がみられる。

398・399は薄い器壁の坏部片である。398は外反しながら大きく開く。内外面が薄墨様の黒色を呈する。399は直線的に開き、外面には目の整ったハケメを横位に施す。外面には赤色顔料が付着する。

400は器壁に厚みのある大型の坏部片である。外面には放射状のミガキを暗文様に施す。器面は内外面ともに

SH 4

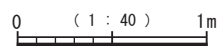


- 埋土
- ①にぶい黄褐色土(10YR5/4)・粘性あり・しまり強い・2～3mmの黄褐色バミスを微量に含む
 - ②褐色土(7.5YR4/3)と明褐色土(7.5YR5/6)との混合土・粘性あり・しまり強い・2～5mmの黄褐色バミスを微量に含む
 - ③黄褐色土(10YR5/6)・粘性なし・しまり強い
 - ④明褐色土(7.5YR5/8)・粘性あり・しまり弱い・2～3mmの黄褐色バミスを多量に含む

- ⑤にぶい橙色土(7.5YR7/3)・砂質・粘性あり・しまり弱い・砂を多量に含む
- ⑥黒色土(7.5YR2/1)・粘性なし・しまり弱い・土器を多く含む
- ⑦にぶい橙色土(7.5YR7/3)・砂質・粘性あり・しまり弱い・砂を多量に含む
- ⑧明褐色土(7.5YR5/6)・上面がかなり硬質化・粘性あり・しまり強い
- ⑨にぶい褐色土(7.5YR5/4)・粘性あり・しまりやや弱い・2～5cmの黄褐色バミス(アカホヤ)を多量に含む

- SP 1 埋土
- ⑪明黄褐色土(10YR6/6)・粘性やや弱い・しまり弱い・一部にアカホヤ・一次堆積(0.5～1cm程)を含む・SH 4の埋土⑨に近い(IIIb層由来)
 - ⑫茶褐色土(7.5YR5/6)・粘性やや弱い・しまり弱い・VI層との混合土
- SP 2 埋土
- ⑩明黄褐色土(10YR6/6)・粘性やや弱い・しまり弱い・一部にアカホヤを含む(IIIb層由来)・一次堆積(1～2cm程)を含む

第86図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡4号



ナデやミガキにより丁寧に仕上げられる。色調は明るい黄褐色を呈し、精良な胎土を使用する。

401・402は中空の脚片で、401は直線的に、402は外反しながら開く。401は丁寧にナデて仕上げられ、外面は赤みの強い色調を呈する。402は大型の坏部を有すると推測される。やや器面の調整が粗い。断面を含む全面に被熱の痕跡が窺える。

403は坏部底面から脚の上位の破片である。器壁に厚みがあり、椀状の坏部底面を有し、台付鉢である可能性もある。坏部と脚の接合面の中心部分に粘土別塊を充填して、坏部底面を成形したことが観察できる。

404～410は小型の器種である。

404・405は器壁が薄い口縁部を含む破片である。つくりが精緻なことから小型丸底壺の範疇と捉えたが、ミニチュアの鉢の可能性も考えられる。404は内湾しながら開く。外面上位に細い沈線を巡らせる。色調は灰色がかかった明るい黄褐色で、断面の芯部は黒色を呈する。胎土は精良で、混和材には薄い白色の雲母をわずかに含み、搬入品の可能性もある。405は外反しながら開く器形で、胴部下位に浅いくびれを有し、尖底であると推測される。外面には工具ナデのヘラ痕が残る。内面は丁寧にナデて仕上げられる。

407・408は小型丸底壺の底部片である。407は丸く成形される。408は尖底のもの、胴部中央あたりで最大径となると推測される。408には被熱の痕跡がみられる。

409・410は平底の鉢である。ともに指頭圧痕を残す粗いつくりで、断面も含めて全面的に煤が付着し、破碎後に熱を受けた可能性も考えられる。

411・412は用途不明の石製品である。

411は扁平な楕円形の軽石製品で、長軸側の上面のごく一部と下面右側を欠損する。表面・裏面は面取られ、広い平坦面を形成し、石鹸様の形態となる。左側面と裏側の平坦面を中心に深い傷状の擦痕が数か所確認される。

412は石英の原石である。遺跡の外から持ち込まれたものと考えられる。敲打痕や擦痕は確認できないが、片手に収まるサイズで、滑らかであり、使用によって全面的に擦れている可能性もある。

(5) 大型土坑 (第89図)

E-21区IV層上面で検出した。平面形は長軸3.1m、短軸2.31mの楕円形を呈し、深さは推定50cmである。周辺には堅穴建物跡1・2・3号があり検出当初は大型土坑も堅穴建物跡の可能性が考えられたが、柱穴が確認できないこと、掘り込みの立ち上がりが明確でないこと、遺物量が少ないことなどから大型土坑とした。埋土は粘性の弱い明黄褐色の単一層である。遺構内から成川式土器片が数点出土したが、すべて小片のため図化に耐えうる

ものはなかった。

(6) 土坑 (第89図)

土坑2号 (第89図)

D-22区III b層で検出した。周囲は削平の影響が大きく、規模は長軸1.27m、短軸1.22mの円形で、深さは推定56cmである。西側には、堅穴建物跡1号が隣接する。埋土はやや粘性のある砂質土で、黄褐色パミス、炭化物が混じる単一層である。少量だが4～12cm大の軽石も含む。遺構内から18点出土し、そのうち残りの良い1点を図化した。

遺物 (413)

遺物は、胎土の特徴から古墳時代に属すると考えられる土器小片がわずかに出土したが、時期の特定ができ図化できたものは1点であった。

413は外反しながら開く口縁部片で、口縁端部の角を明瞭に形成し、外面に目の整った搔き上げのハケメを丁寧に施すことから、東原式の古い段階に該当する可能性が考えられる。

(7) 土器集中 (第90・91図)

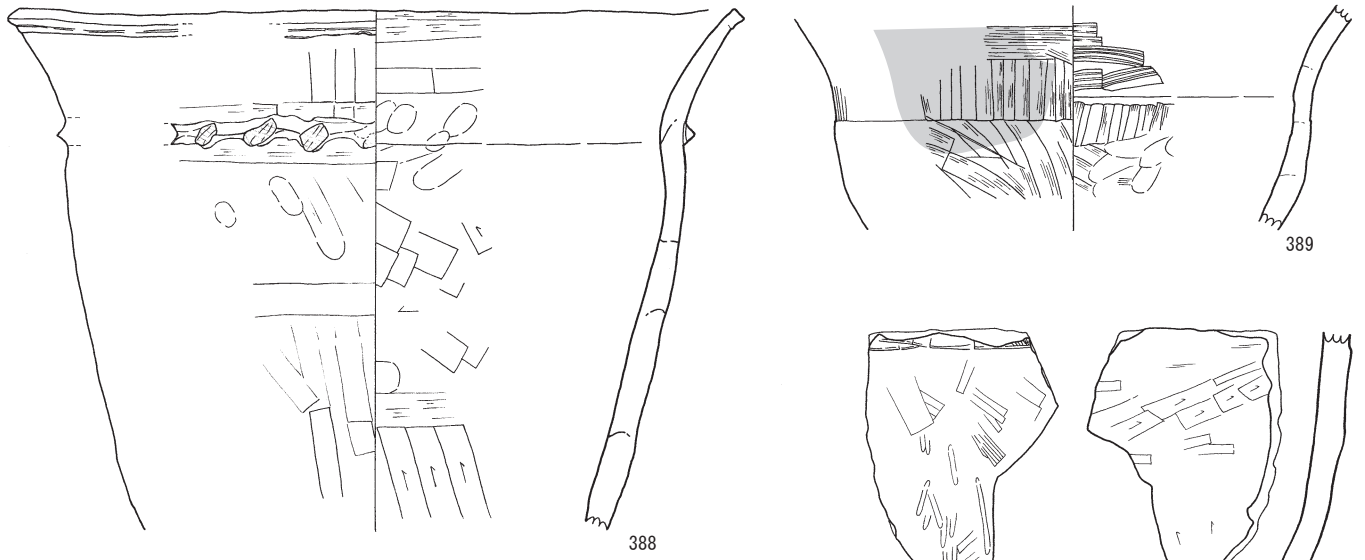
土器集中2号

C-23区III b層で検出した。約1.1m×0.8mの範囲で北側に集中し、他は散在した状態であり、掘り込みは確認されなかった。周囲は硬化面で囲まれている。硬化面はV層で、黒色の土が混じり堅穴建物跡の可能性を考え何度も精査を行ったが、攪乱でかなり削平されており、堅穴建物跡と判断できなかった。

遺物 (414～423)

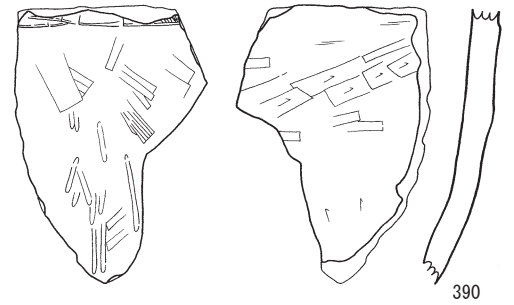
丸底の甕と蓋、板状の砥石が出土している。

414～417は甕形土器の口縁部～胴部にかけての破片である。頸部稜で大きく屈曲し、短い口縁部が大きな角度で外傾しながら立ち上がる。胴部に丸みがあり、頸部内面の稜以下にはケズリを施している。414は胴部下位まで復元できたもので、丸底を呈すると推測される。口縁部の器壁は直線的に立ち上がり、口縁端部には平坦面を形成する。口縁部外面は刷毛による搔き上げを巡らせ、口縁端部には横ナデを施す。内面には横位にハケメを施す。肩部には横位の、胴部下半には縦位のハケメを施す。内面稜のあたりには指頭圧痕を多く残す。肩部外面には成形時に行ったタタキの痕跡がわずかに残る。煤は胴部下位にほぼ水平に付着する。415・416は同様な形態の口縁部片である。底部の形態は不明である。414は口径よりも胴部が張り出すが、415・416の胴部最大径は口径よりも小さい。ともに口縁端部には平坦面を形成し、「コ」の字状の断面形である。ともに口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、器面にハケメを施す。口縁部と肩部のハケメの方向は414と同様である。ただし、口縁



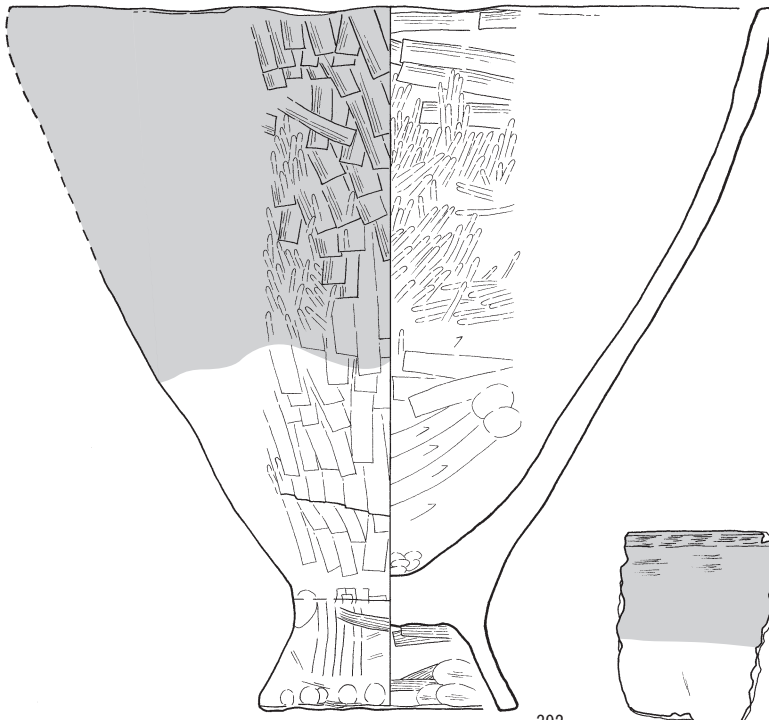
388

389

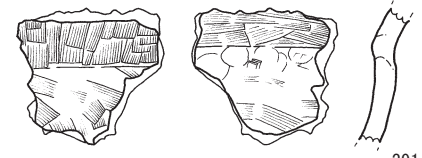


390

391



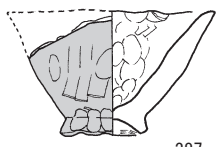
392



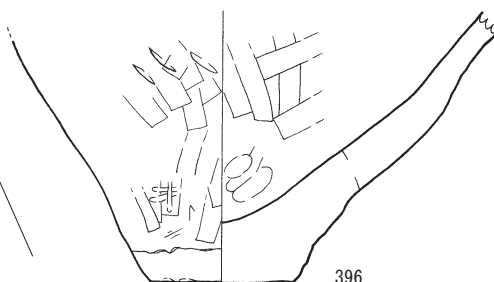
393

394

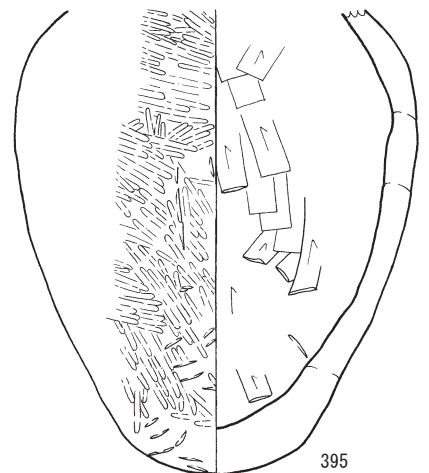
SP 1 出土遺物



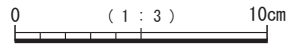
387



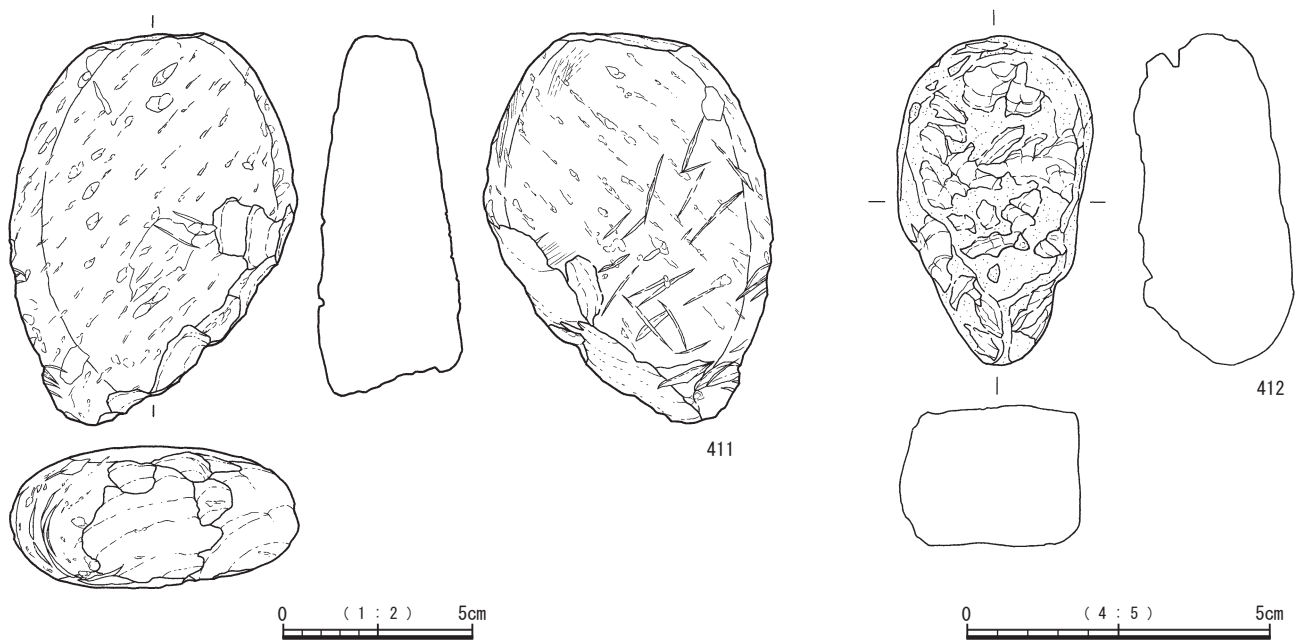
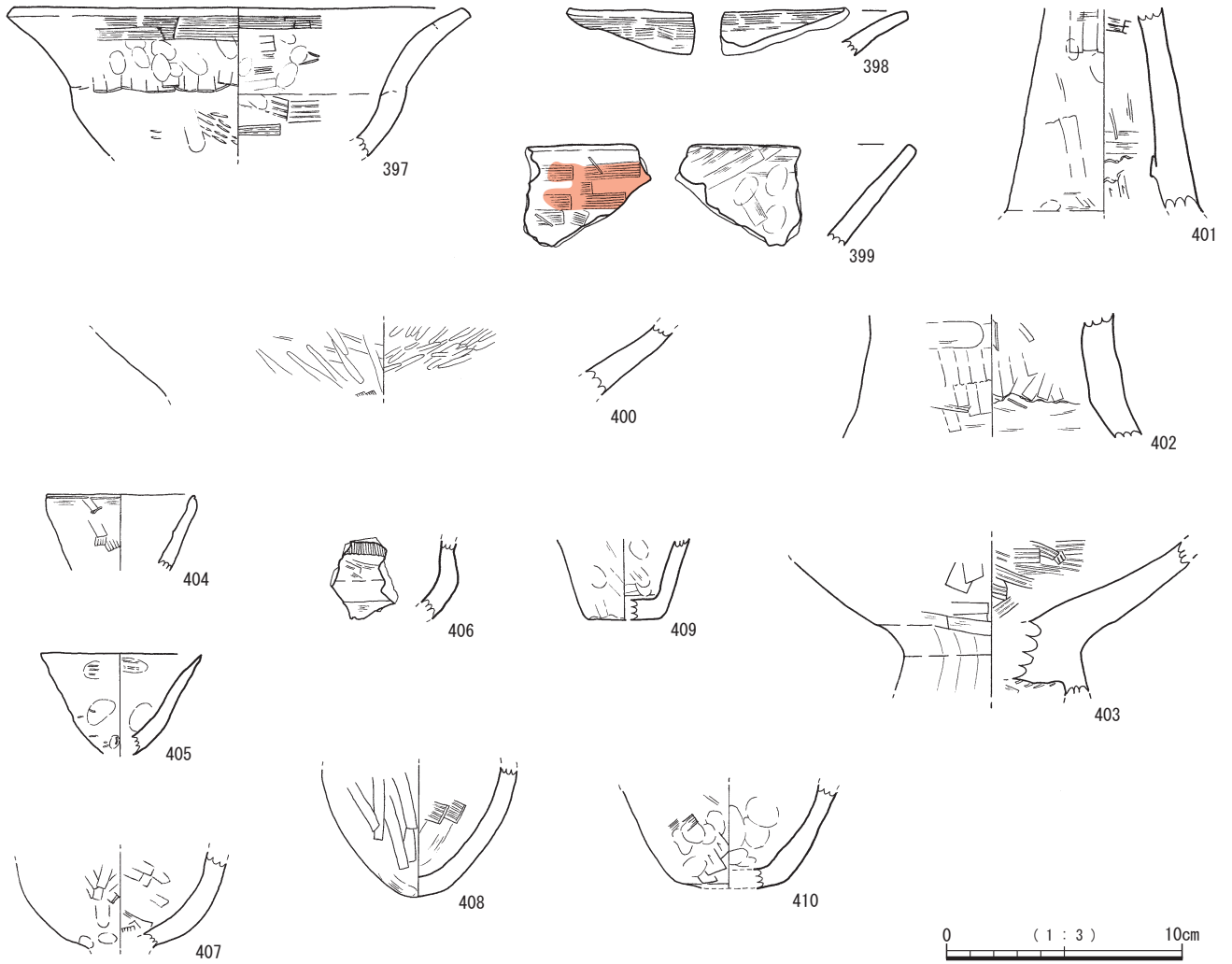
396



395

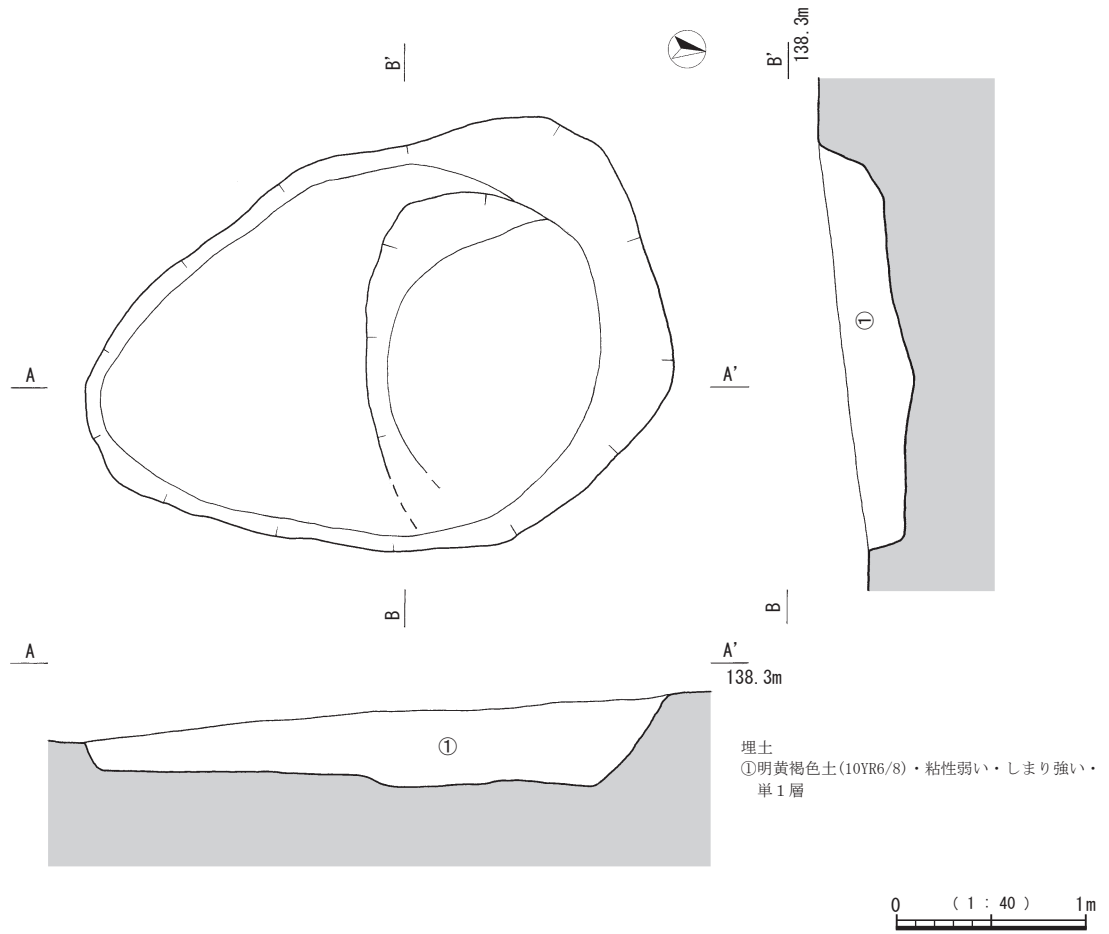


第87図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡4号出土遺物(1)

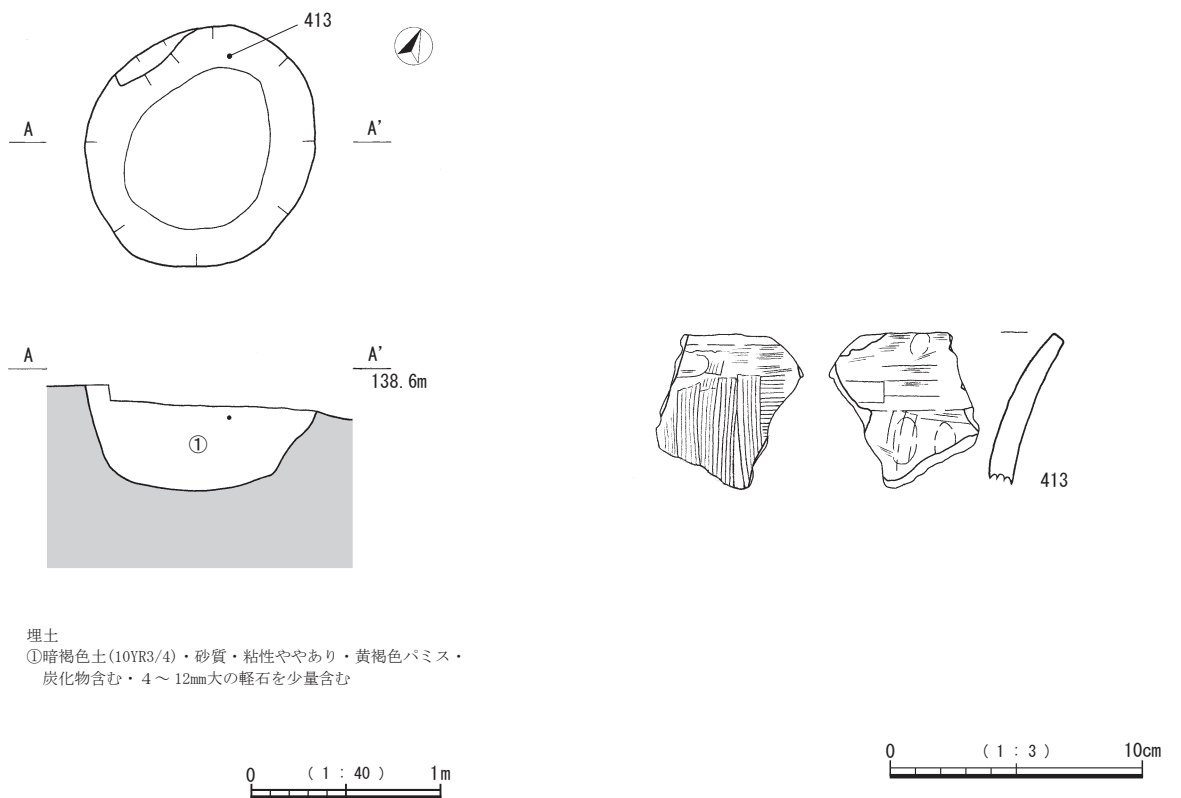


第88図 萩ヶ峰遺跡 竪穴建物跡4号出土遺物(2)

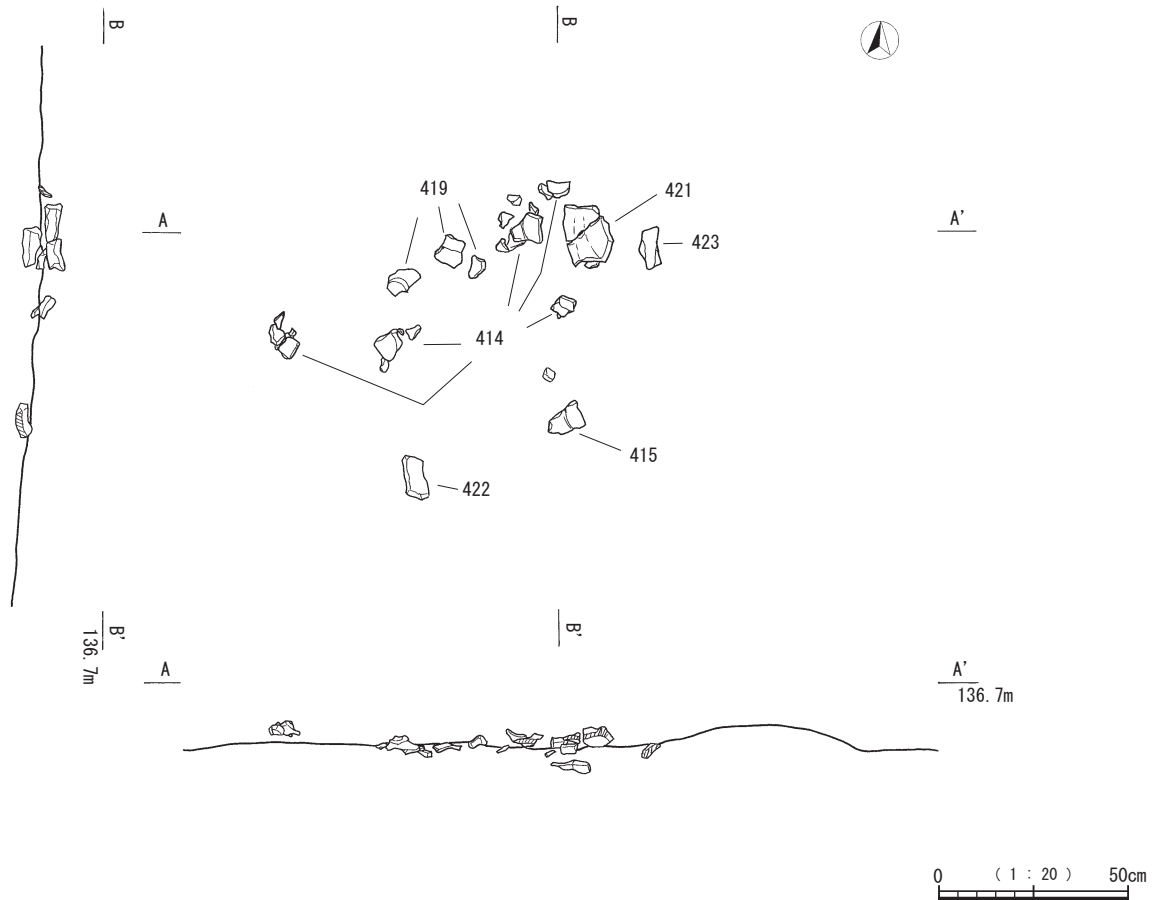
大型土坑



SK 2



第89図 萩ヶ峰遺跡 大型土坑・土坑2号および出土遺物



第90図 萩ヶ峰遺跡 土器集中2号

部のハケメは掻き上げを横ナデの後で行っている。周囲からは417のような脚も出土しているため脚を有する可能性もある。414～416は、器壁は厚く胎土も在地のものであると考えられるが、製作技法に古墳時代前期の古式土師器（布留式系統の土器）の影響を受けた一群であると判断される。

417は緩く外反しながら開いて接地する脚で、やや高脚である。接地面近くに刷毛による横ナデを施す。

418は丸底の底部片で、器壁の厚みや胎土の特徴から414の底部である可能性もある。

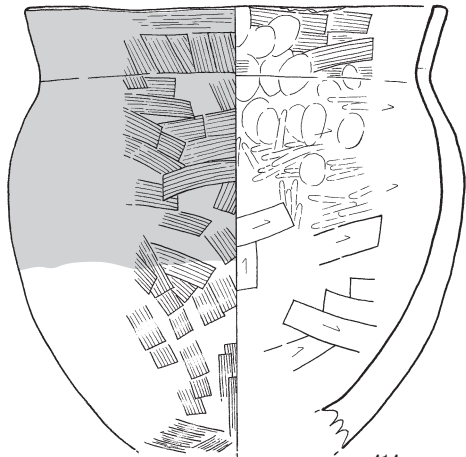
419は台付鉢である。椀状の坏部に緩い段を形成し、口縁部は外反しながら大きく開く。成形時に横位のケズリを施し、内外面はストロークの短い横位のミガキによって丁寧に仕上げられる。外面の稜あたりより上位に煤が濃く水平に付着するため、煮炊きにも使用されたことが考えられる。

420は高坏の脚部片で、柱部から浅い椀状に開いて接地するものである。器壁は薄く、胎土の色調は明るい橙

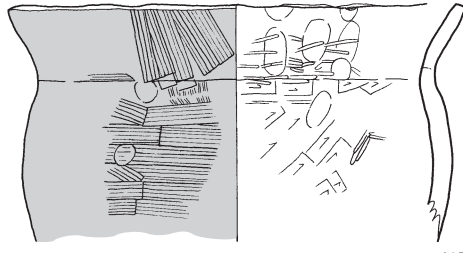
色である。細幅の工具によるミガキが施される。精緻なつくりを窺わせる。

421は内面の口縁端部あたりに帯状に煤が付着することから蓋として使用したものと判断した。深い鉢状の形態であり、外面には粗いハケメを施す。内面には細幅の工具ナデを行っていて内面をより丁寧に仕上げているため、台付鉢の坏部の脚を欠損した後に蓋として転用した可能性もある。煤は外面にもまばらに付着する。赤みの強い胎土を使用する。

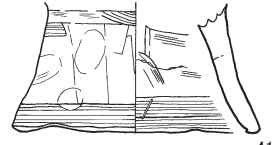
422・423は粒子の細かい硬質な頁岩製の板状の砥石である。表面・裏面ともによく使用され、磨面は滑らかである。筋状の擦痕が全面的に確認できるため、鉄器の使用を窺わせる遺物である。422は上面側と下面側を人為的に割り、左右両面を擦って平坦面をつくり、使いやすい形状に整えていることが推測される。423も縦長の四角形状に人為的に整えた痕跡がみられる。下面側は敲打にも使用されている。形状を活かしてハンマーとして使用したと考えられる。



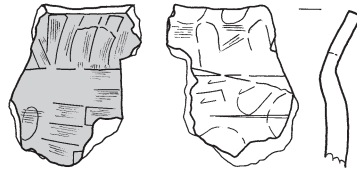
414



415



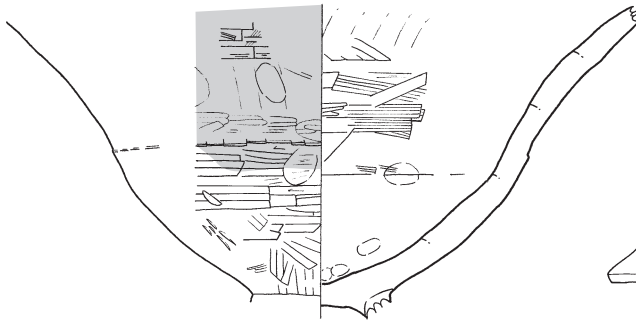
417



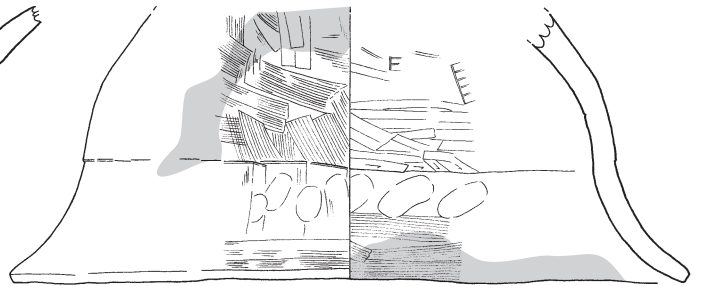
416



418



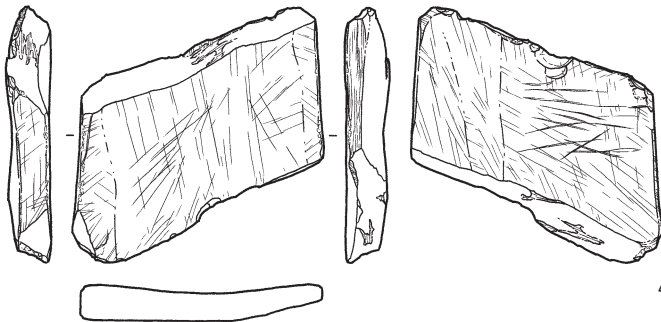
419



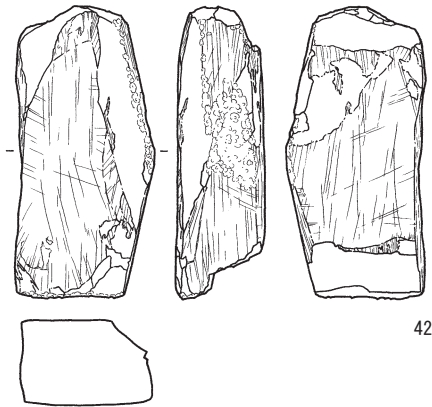
421



420



422



423

0 (1:3) 10cm

第91図 萩ヶ峰遺跡 土器集中2号出土遺物

(8) 溝状遺構 (第92図)

溝状遺構 1号

E-25区Ⅲb層で硬化面を検出した。埋土は、暗褐色土の単一層で、締まりが強くととも硬い。最大幅0.66m、総延長5.28m、最大深16cmである。西側半分は、検出が遅れて立ち上がり部分がなくなっている。南東部分は削平を受けているが、実際には南東に下っている緩やかな傾斜に延びていくと考えられる。硬化面が見られたため、道として利用された可能性も考えられる。埋土からの出土遺物はなかったが、周囲からは攪乱を受けた古墳時代の成川式土器片が多く出土したことから、時期は古墳時代とした。

溝状遺構 2号

E-25区で筋状になる硬化面を検出した。埋土は不明である。溝状遺構 1号とわずかに重なって並列しているが、短い。最大幅0.36m、検出した総延長1.56m、最大深5cmである。

溝状遺構 3号

E-25区で帯状になる硬化面を部分的に検出した。埋土は不明である。溝状遺構の周囲も硬化しており、約1.8m離れた場所では溝状遺構 1・2号が検出されている。最大幅0.88m、検出した総延長3.12m、最大深8cmである。中央部が削平されているが、実際には東西に延びていたと考えられる。北東に傾斜する谷の途中であり、谷へ下りていく道跡と考えられる。

(9) 帯状硬化面 (第93・94図)

帯状硬化面 1

E-20・21区Ⅱ層上面で検出した。埋土は非常に固い褐灰色土であった。硬化面の上部は表土であり、後世の削平を受けていると考えられる。北から南に緩やかに下る傾斜地に位置しており、傾斜に沿うように東西に延びる。最大幅0.5m、検出した総延長8.9m、深さは最大で19cmである。埋土からの出土遺物はなかったが、周囲からは古墳時代の成川式土器片が出土している。下層のⅢb層からは竪穴建物跡 3号を検出しているため、竪穴建物跡 3号の廃絶後に使用された古墳時代の道跡の可能性はある。

帯状硬化面 2

C-19区Ⅲb層で硬化面を検出した。帯状硬化面 3と並列している。埋土は、非常に固い暗褐色硬質土で、周囲は非常に締まりのある鈍い黄褐色の硬質土で囲まれている。周囲よりはるかに固く踏み込んだ痕跡が見られ、北西から南東に下る道跡と考えられる。最大幅40cm、検出した総延長2.2m、深さは最大で9cmである。周囲の埋土と遺構内から少量であるが成川式土器片が出土したことから、時期は古墳時代と考えられる。

帯状硬化面 3

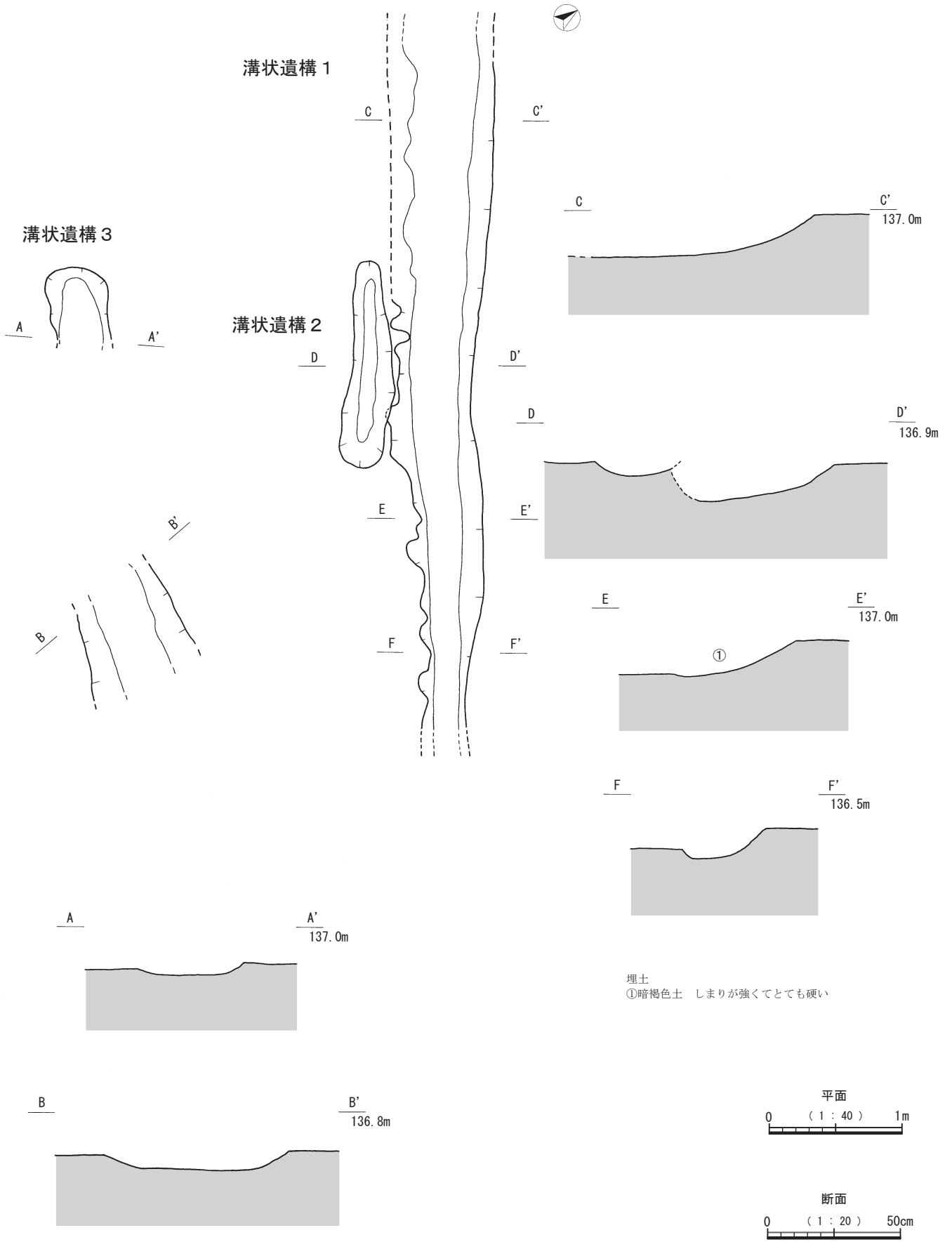
C-18・19区Ⅲb層で2か所の硬化面を検出した。帯状硬化面 2と同様に埋土は、非常に固い暗褐色硬質土で、周囲は非常に締まりのある鈍い黄褐色の硬質土で囲まれている。削平を受けているが、2か所の効果面は北西から南東に下る1条の道跡と考えられる。最大幅44cm、検出した総延長2.22m、最大厚さは11cmである。周囲の埋土と遺構内から少量であるが成川式土器片が出土したことから、時期は古墳時代とした。

遺物 (424・425)

遺物は、胎土の特徴から古墳時代に属すると考えられる土器小片がわずかに出土したが時期の特定ができ、図化できたものは帯状硬化面 1号の埋土から出土した2点であった。東原式土器の新しい段階に該当する可能性が考えられる。

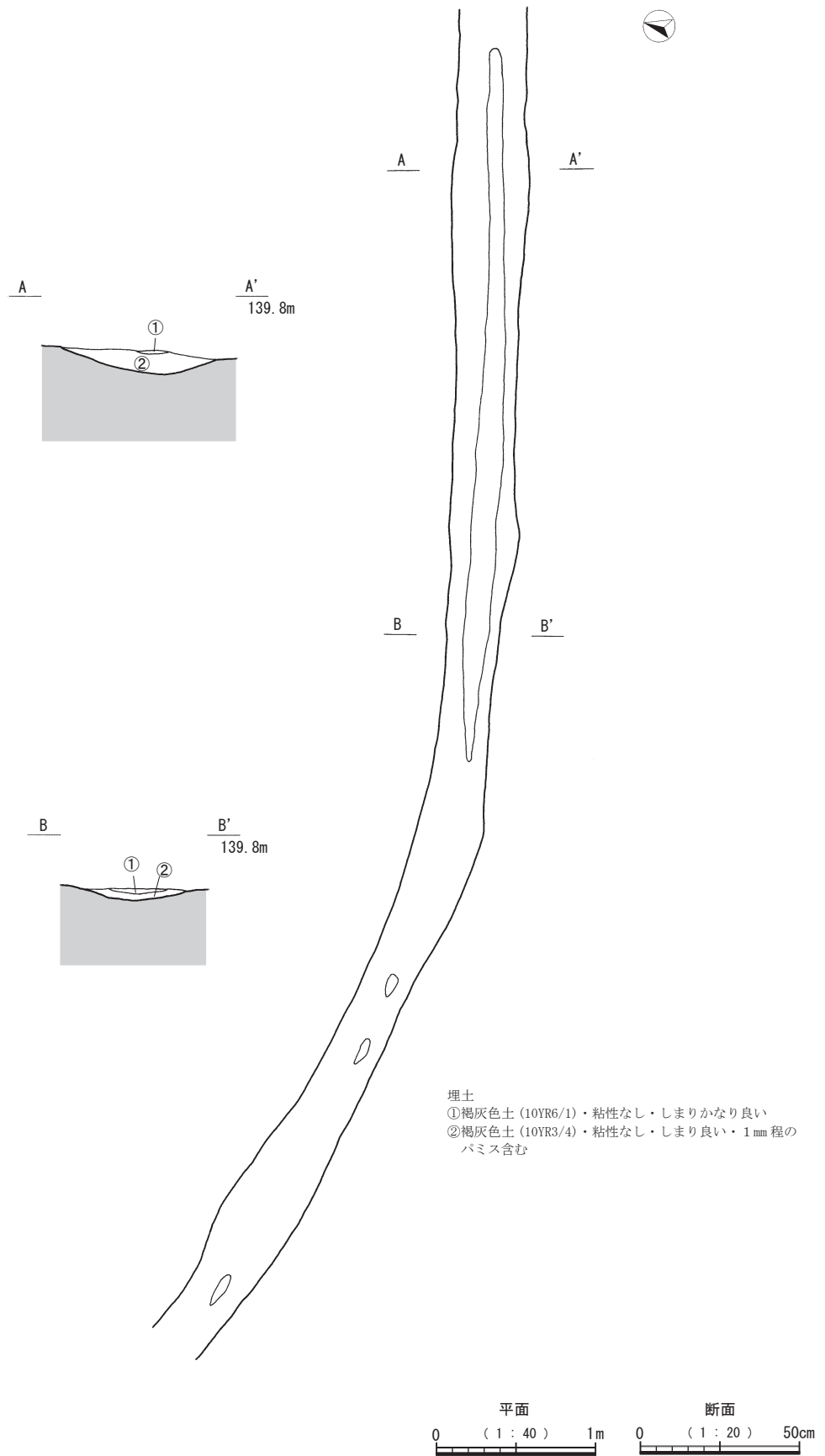
424は外反しながら開く口縁部片で、口縁端部はやや先細り丸みを帯びる。頸部の稜はみられない。突帯は器面に粗く貼り付けられ、刻目を施す。

425は坏の破片で、推定口径約19cmの口が広く浅く扁平な形態であることが推測される。内外面は工具ナデの後で丁寧なミガキを施す。器壁は薄く均一である。



第92図 萩ヶ峰遺跡 溝状遺構 1～3号

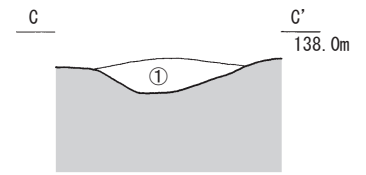
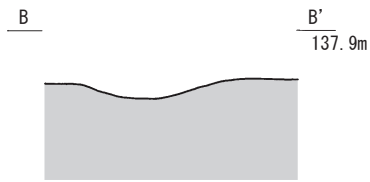
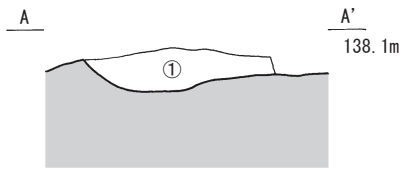
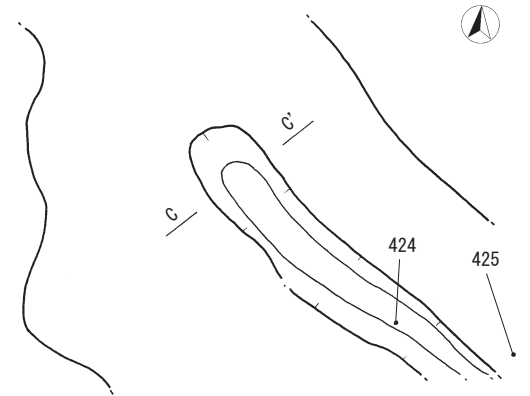
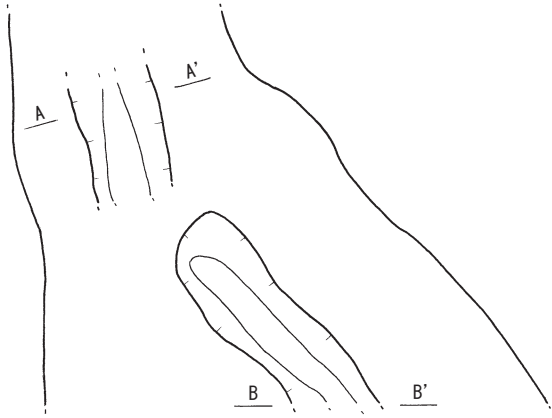
带状硬化面 1



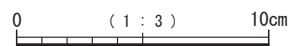
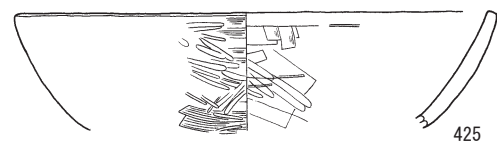
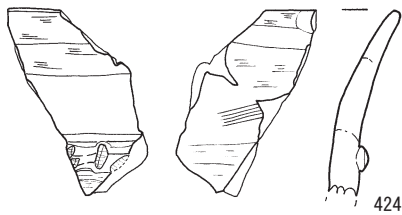
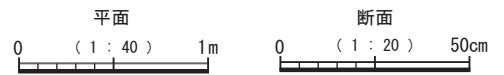
第93図 萩ヶ峰遺跡 带状硬化面 1

带状硬化面 3

带状硬化面 2



埋土
①暗褐色土 (10YR3/3)・硬質・しまり非常に強い



第94図 萩ヶ峰遺跡 带状硬化面 2・3 および出土遺物

2 古墳時代包含層出土遺物（第96～107図）

本遺跡の包含層からは、多数の古墳時代の遺物が出土した。

土器は、竪穴建物跡などの遺構から出土したものと同時期に帰属すると考えられる成川式土器の東原式段階（古墳時代前期～中期初頭）が特に多く出土した。笹貫式古段階・新段階（古墳時代後期）の土器も出土したが散見される程度である。器種は、甕形土器、鉢形土器、壺形土器、坏、高坏、小形丸底壺、そしてそれらを模造したと推測されるミニチュアの土器が確認された。

このほか鈴や匙、指サック形状などの土製品、須恵器、鉄製品もごく少数出土した。鉄製品は腐食が著しく器種や帰属年代の特定が困難であり図化に至らなかった。

古墳時代の土器は、遺跡全体からの出土が確認できたが、特に西側の竪穴建物跡が検出された周囲の19区～26区の北側において集中し分布する。また、B-10～12区にも多数の土器片が検出されるが、このエリアは谷状に下る地形であるため、上方から流れて溜まった状態で検出されたことによると判断される。また、縄文時代晩期の土器が出土したE-6～8区にも一定量が出土した（第95図参照）。

（1）土器

①甕形土器（426～468）

426～457は甕形土器である。426～450は頸部で外反しながら開く器形で東原式段階に属し、453～457は口縁部が直線的に立ち上がる笹貫式古段階あるいは内湾気味に立ち上がる笹貫式新段階に属する。

426～431は無文である。大型のものは口径25cm～30cm程を測る。遺構内から出土した甕にも多くみられた規格である。胴部上位で緩く張り出しながら口縁端部に向かって急な角度ですぼまるものが多い。小型の427と大型の430は長胴気味のプロポーションである。頸部稜の外側は掻き上げの工具ナデの始点である。口縁端部を「コ」の字状に成形するタイプが主である。

426は胴部内外面に丁寧なミガキを施す。煤は外面頸部稜のラインより上位に水平に付着する。427は小型で胴部上位に被熱の痕跡が窺える。大型のものと比べて胎土の色調が明るく混和材の粒子が細やかな胎土を使用する。器面はより丁寧に調整される。ほかの甕形土器とは用途が違う可能性も考えられる。

428は口縁端部に施した横ナデの直下に細幅の工具による沈線を巡らせる。内面稜には指頭圧痕が連続する。

429は口縁端部が外面側にわずかに下垂し、明瞭に角付けられる。頸部外面の稜はほかの甕と同様に工具による掻き上げの始点ではあるがくっきりとした段を形成する。胎土は在地のものに類似するが焼成が非常によく硬質である。

430は口縁端部を丸くおさめ、内外面にはケズリを行った後で工具ナデを施す。口縁部外面はナデにより仕上げられる。

431は器壁の外傾角度が大きくやや浅めの形態であると推測される。

432～441は突帯を有するものである。共通して胴部の張り出しはさほど大きくはない。胴部のすぼまる角度が緩く、長胴気味のプロポーションが推測されるものが多い。大型のものは口径30cm程で、440・441のように小型のものも出土した。口縁端部は「コ」の字状に角張ったものが主流である。432～436は指頭でつまむように形成した、断面形が山形あるいは台形状の突帯を有するもので、突帯には刻目を持たない。437～441は突帯に刻目を施す。

432は突帯を器面にやや粗く貼り付ける。断面形は明瞭な山形だが、その頂部は水平には整わずわずかに上下する。

433は突帯に指頭圧痕を連続して施す絡状突帯を有する。砲弾状に近い形態で、内面にはやや明瞭な稜を形成する。

434は細幅の突帯の上下を篋状の工具を用いて器面にナデ付ける。1か所浅い刻みが確認される。内面稜直下には細幅の工具による強いナデを施し、ストロークは長い。胎土は色調が明るく混和材の粒子が細かい。

435は突帯の稜は明瞭で、器面に丁寧にナデ付けられる。胴部は膨らみをもつと推測される。器壁には厚みがあるため大型である可能性がある。

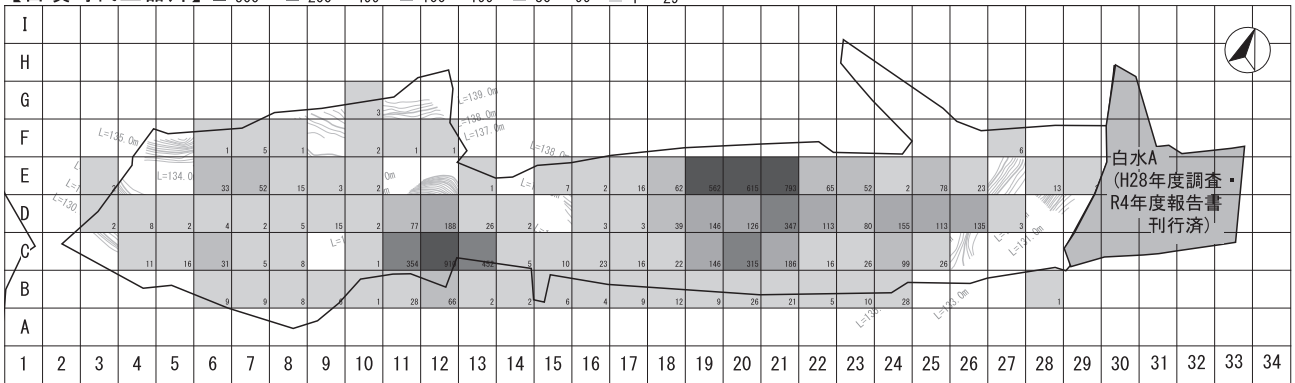
436は突帯の断面形が台形状である。突帯の上部は器面に丁寧に、下部は工具によって粗くナデ付けられる。器壁はかなり厚く壺の可能性もあるが、突帯の上位に掻き上げのハケメを施す調整の特徴や、残存部上位がわずかに反ることから、東原式段階の甕と判断した。頸部でいったん内湾してから口縁端部上位で外反する形態から東原式の新しい段階、あるいは東原式に後続する（1987中村など）辻堂原式段階に該当する可能性もある。

437は口縁部は丸みを帯びる。頸部の稜は緩やかである。幅の細い突帯を器面に丁寧にナデ付ける。突帯は断面が三角形で稜はしっかり角づけられ、浅く小さく、断面形が明瞭な「V」字状の刻目を施す。内外面に粗いハケメを施す。

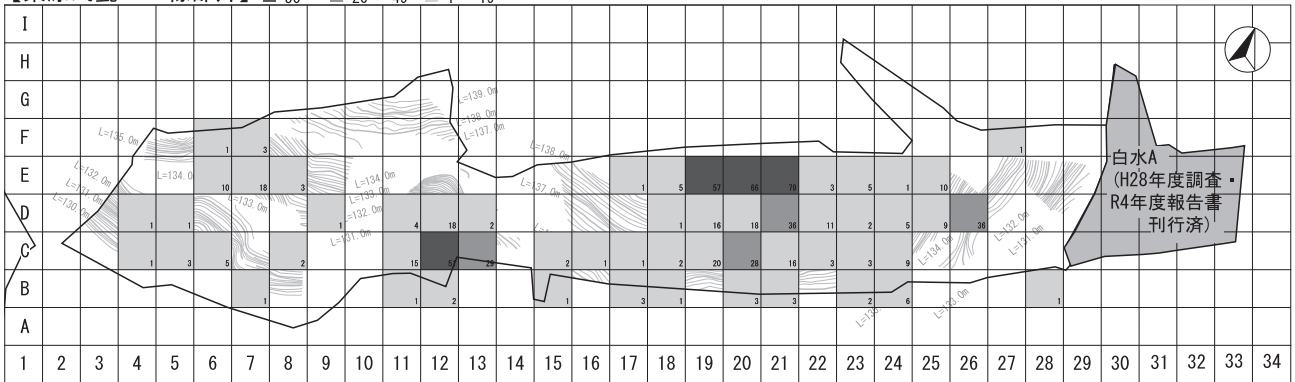
438は口唇部を平坦に面取りし、口縁端部は外面側にわずかに張り出す。胎土はやや黄色っぽい明るい色調を呈し、灰色がかかった褐色の円礫が混じる胎土である。宮崎平野からの搬入品の可能性が考えられる。

439は口縁部を短く且つ大きく外反させる。口縁端部は「コ」の字状に形成される。突帯の上部は丁寧に器面にナデ付けられ、下部はやや粗く貼り付けられる。刻目には布目を有し口縁部側へと大きくはみ出しながら密に

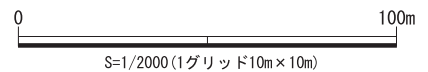
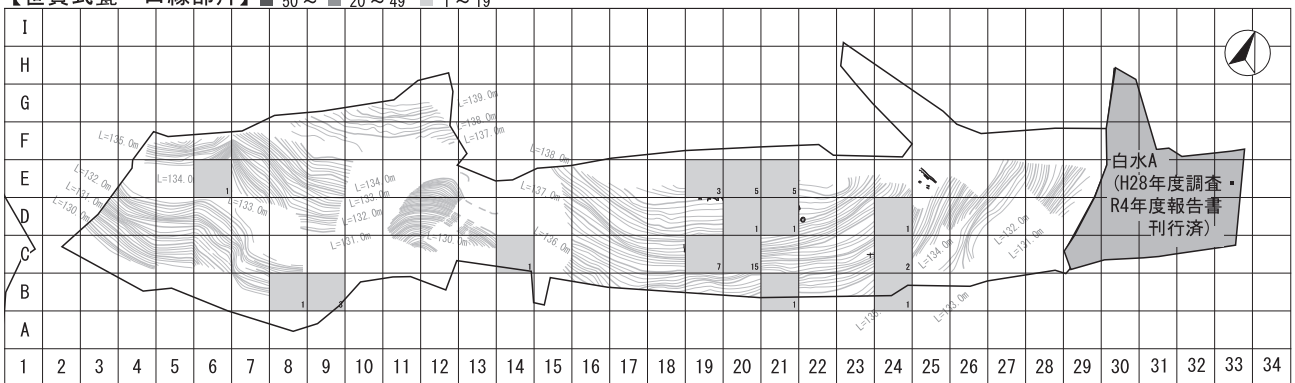
【古墳時代土器片】 ■ 500 ~ ■ 200 ~ 499 ■ 100 ~ 199 ■ 30 ~ 99 ■ 1 ~ 29



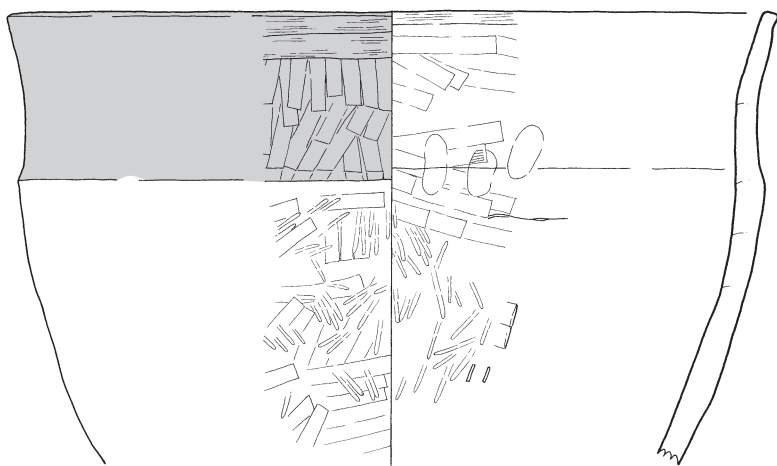
【東原式甕 口縁部片】 ■ 50 ~ ■ 20 ~ 49 ■ 1 ~ 19



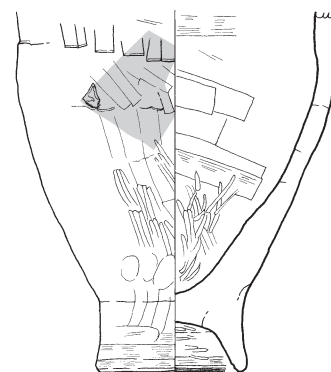
【笹貫式甕 口縁部片】 ■ 50 ~ ■ 20 ~ 49 ■ 1 ~ 19



第95図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代土器分布図



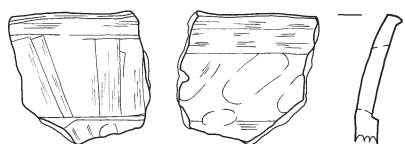
426



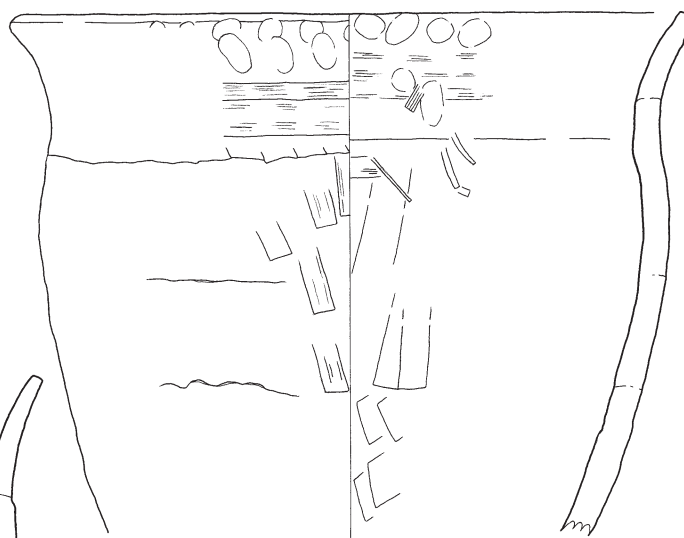
427



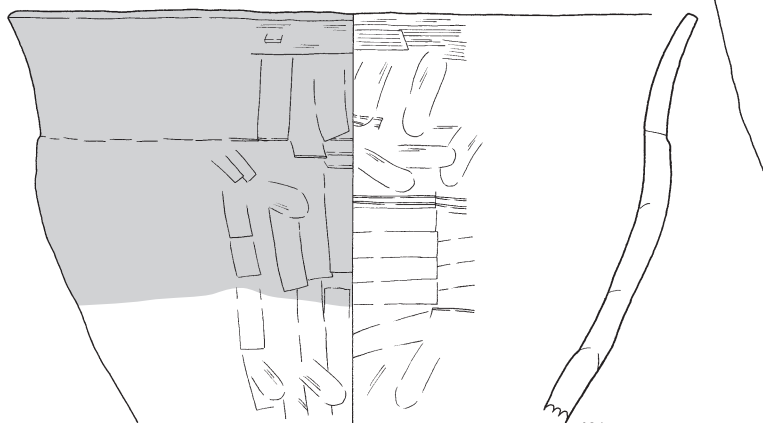
428



429



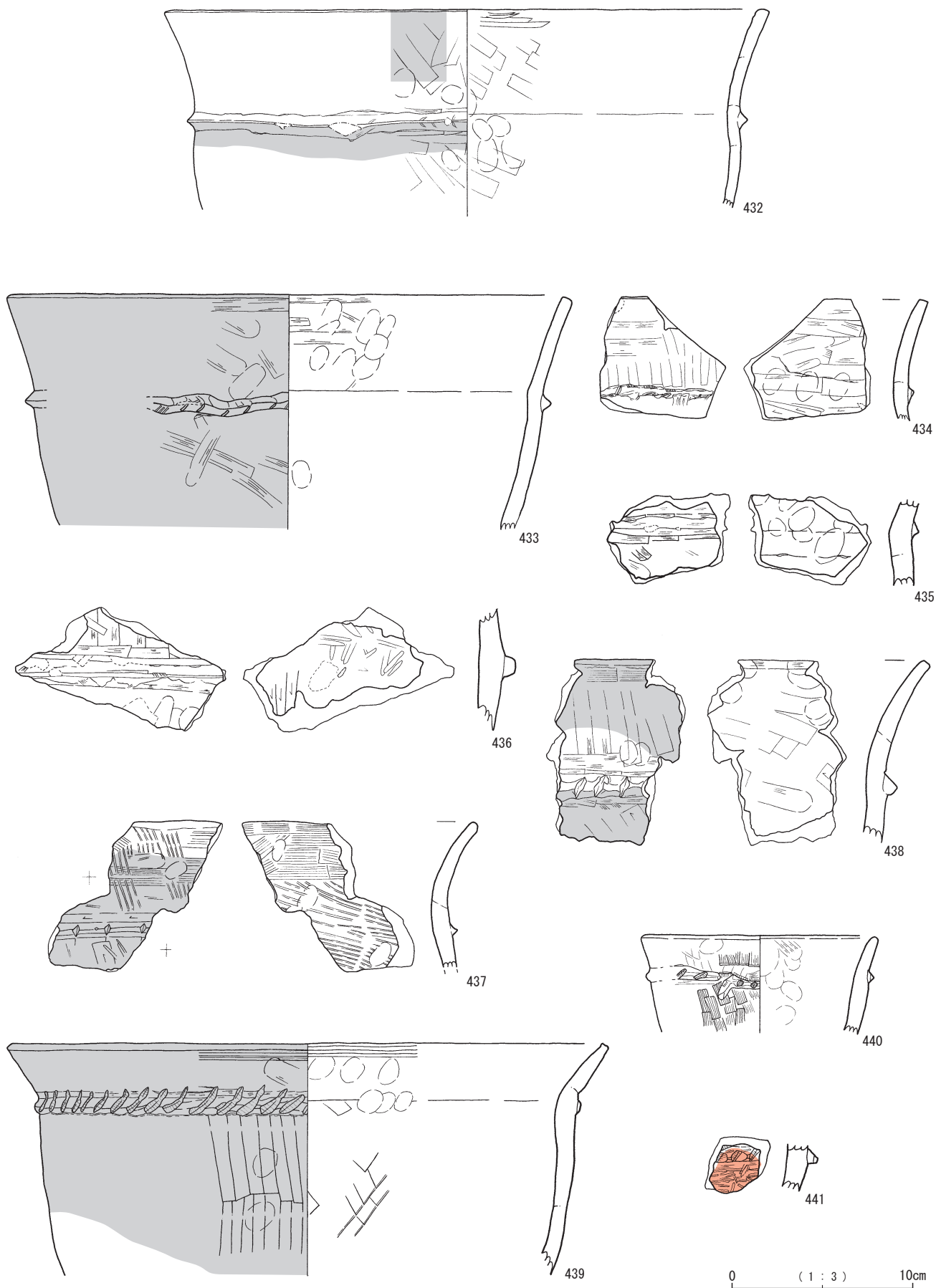
430



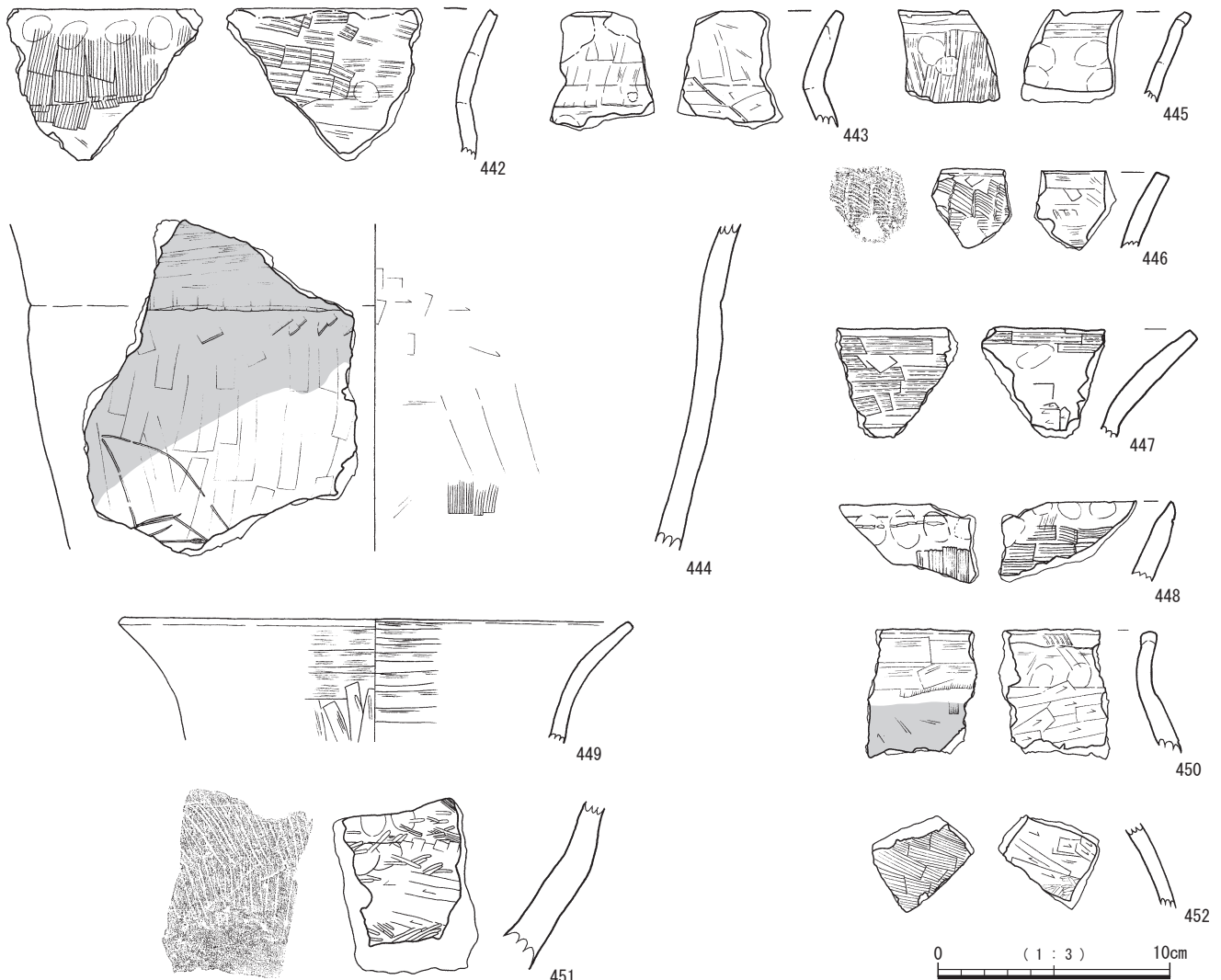
431

0 (1:3) 10cm

第96図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(1)



第97図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(2)



第98図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(3)

刻む。外面は縦位の工具ナデの後で丁寧なナデ調整を施す。胎土には明るい橙色の大粒のシャモットが混じる。

440・441は小型である。440は、細幅の突帯の継目を右を下に交差させるが、始点と終点にはわずかに隙間がある。外面には目の整ったハケメを施す。煤が薄く均一に付着するため煮炊きを使用したことが考えられるが、法量が少ない小型のためほかの甕とは用途が違う可能性も考えられる。441は底部に向かって急な角度ですぼまることが推測される。突帯の断面形は稜のシャープな台形状で丁寧に刻む。内外面ともに丁寧なミガキを施し、外面には赤色顔料が塗布される。祭祀用などとして使用された可能性もある。

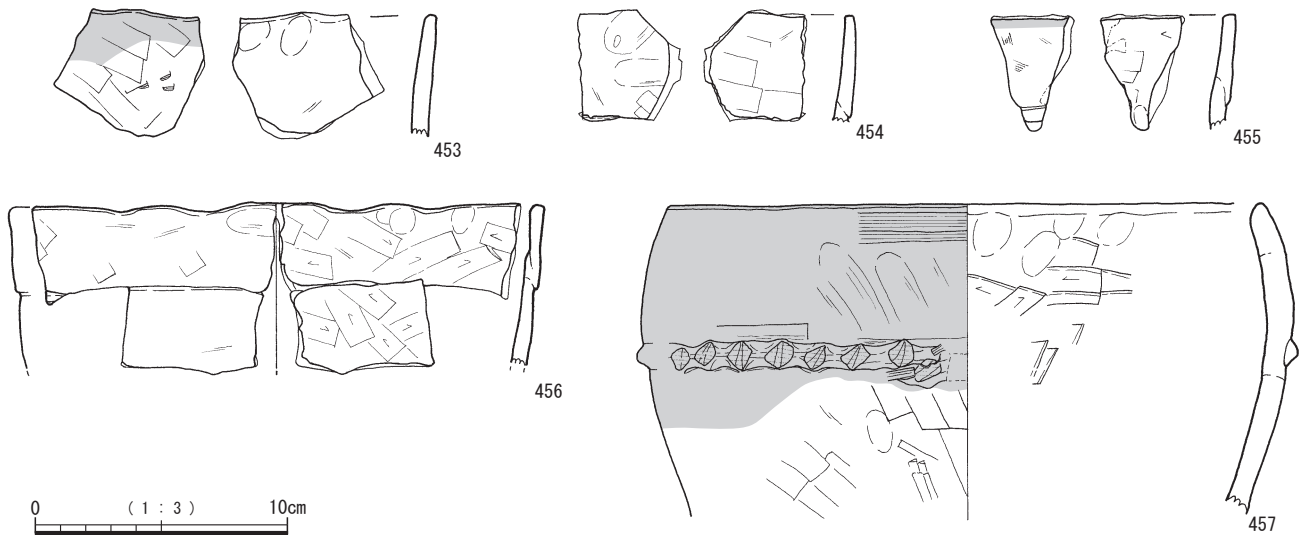
442は器壁はやや薄めで、厚みは均一である。口縁端部は「コ」の字状に角張る。口縁部外面は目の整った工具によって掻き上げて調整する。内面には外面とは別のやや目の粗い工具によって斜位のハケメを施す。口縁部内面稜以下にはケズリの後でナデ調整を施す。胎土には

暗褐色の大粒のシャモットが入る。

443は口縁が短く頸部で「く」の字状に屈曲しながら外反する。稜は内外面ともに緩い。口縁端部は明瞭な「コ」の字状に形成される。胴部は口縁部よりも外側に張り出すことが推定されるため、土器集中2号から出土した414の様に丸底を呈する可能性もある。

444は無文の甕の頸部～胴部下半片である。胴部はあまり張り出さず、長胴気味のプロポーションであると推測される。頸部の稜は工具による掻き上げの始点で、明瞭な段を形成する。頸部稜の直下には斜位のヘラ痕を連続させる。外面の残存部分の下位に細い工具による沈線が施される。全体の形状は不明だが、線刻である可能性も考えられる。

445～449は器壁の厚みや口縁端部の形態、胎土の特徴から甕の口縁部片と判断したものである。445は直線的な器壁が外傾しながら立ち上がり、口縁部端際でわずかに外反する。口縁部外面直下には浅い凹みを巡らせ



第99図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(4)

る。外面には目の整った搔き上げのハケメを施す。胎土の色調は明るい黄褐色である。446は口縁部外面上位に楕状の工具による左上がりの短いハケメを押し引くように施す。胎土は1mm以下の白色粒を多く含み、搬入品の可能性も考えられる。447・449は器壁の外傾する角度がやや大きい。447は口縁部外面と内面の端部際に刷毛による横ナデを丁寧に施す。内面の稜の直下に指頭圧痕がみられる。449は薄手で器壁の厚みが均一である。内外面ともに丁寧な工具ナデを施す端正なつくりである。焼成がよく硬質である。448は口縁部外面直下には細い紐状のものを水平に押しつけた痕跡がみられる。摩滅により縄目は判然としない。内面には横位のハケメを施す。447・448は広口で浅い鉢状の形態である可能性も考えられる。

450は、口縁は短く緩く外反し胴部が大きく張り出す器形であると推測される。内面の屈曲部以下にはケズリを行った後でナデ調整を施す。外面には煤が付着する。

451は脚部との接地面で剥離する。外面は粗い楕目状の工具によって搔き上げるようにナデ調整を施す。外面の色調は赤みが強い。台付鉢である可能性も考えられる。

452は肩部片で、外面には目の整ったハケメを、内面には横位のケズリを施す。外面には煤が付着し、丸底甕の可能性もある。大粒の金色の雲母を含む。器面の調整と特に良好な焼成、胎土の特徴から、製作技法に布留式系統の土師器の影響を受けた搬入品の可能性も考えられる。

453～457はわずかに外傾しながら立ち上がる直口の口縁部片である。器壁は薄く均一な厚みである。口唇部のラインは緩く上下し、胎土の色調は赤みが強く混和材の粒子は細やかである。煤は口縁部上位にごく僅かに付着する。453は単純口縁である。454～456は口縁部外面

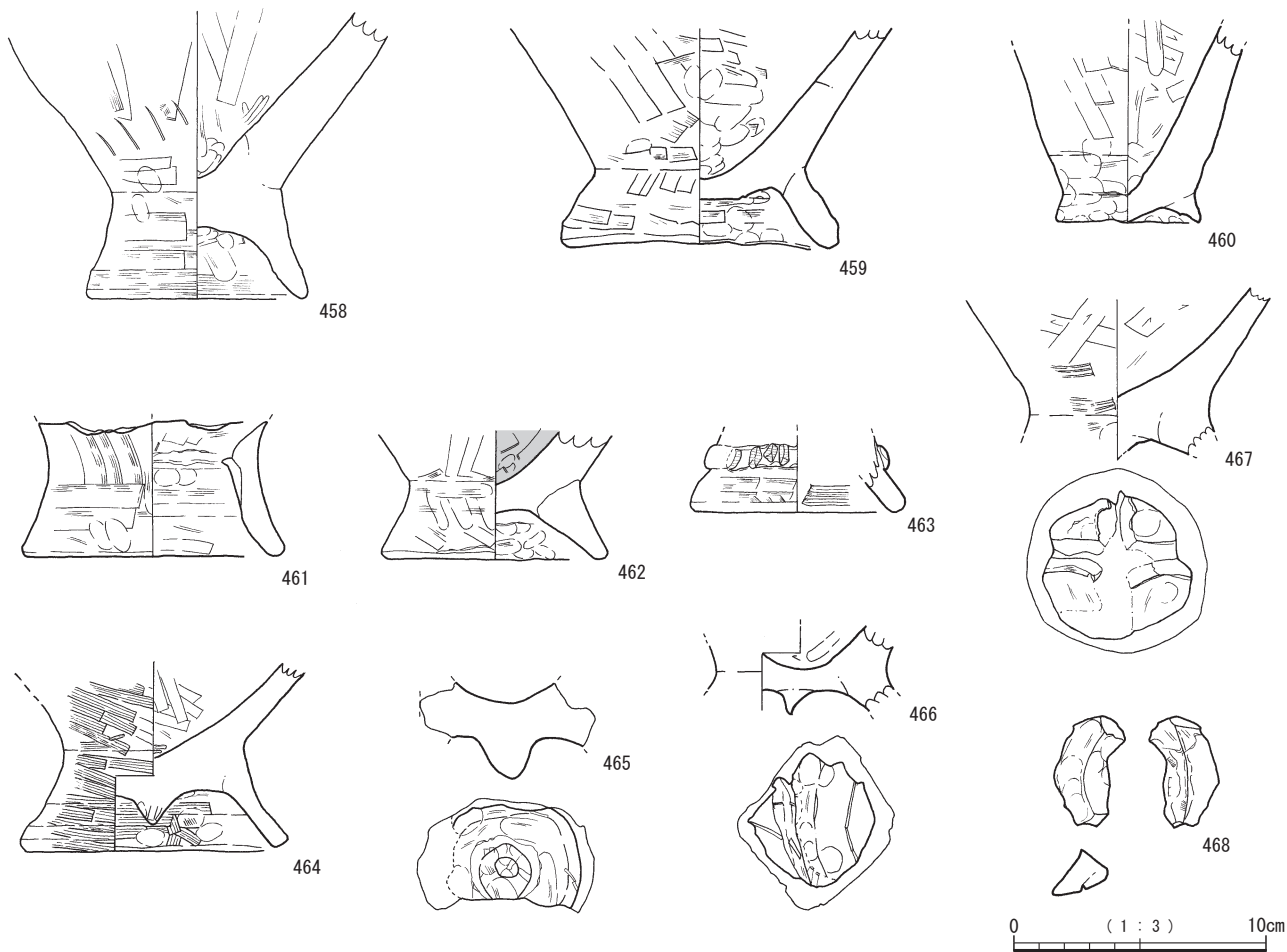
にごく薄い幅広の突帯を巡らせる。第4章第2節で報告した仲原式土器(203～207)に形態が類似するため当初は縄文時代晩期の遺物であると想定していたが、幅広の工具による器面の調整、良好で硬質な焼成具合、胎土に含まれる赤色粒子の特徴などから類似する土器が多く出土した古墳時代に帰属すると判断した。周囲からは古墳時代の竪穴建物跡が多数の成川式土器とともに検出されており、仲原式土器が出土したエリアとは離れる。国道220号の古江バイパス建設事業によって調査された領家西遺跡(鹿屋市)などでも古墳時代後期の笹貫式の時期の土器に伴って類似例の出土が確認されている。

457は口縁部が内湾する笹貫式新段階の形態の甕である。口縁端部は丸みを帯び、端部際に横ナデを施す。口縁部外面は横方向のナデによって調整される。最大径の位置よりわずかに下の位置に刻目突帯を巡らせ、突帯の終点は右側を下にわずかに下垂させて繋ぎ合わせる。刻目は大きく刺突され布目が確認される。外面上位に煤が斜めに付着する。

458～464・467は甕形あるいは鉢形土器の脚である。総じて低めで、460のように指頭で小さくつまみ出すように成形するものもある。461は甕本体と脚部の接合面で剥落したものであり、製作技法が分かる資料である。本遺跡から出土した甕・鉢・高坏といった脚を有する器種は、胴部本体にこのように中空の筒状の脚・柱部を接合させるものが主流である。

463は脚のくびれ部分に刻目突帯を巡らせる。刻目には布目が確認される。接地面は丸みをつけて成形される。外面には丁寧な横位のハケメを施す。小型であることが想定されるため、ほかの甕や鉢とは用途の違う遺物である可能性も考えられる。

464は脚天井部分に三角錐状の突起をもつものであ



第100図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(5)

る。突起の径は約2cmである。外面には丁寧なハケメを施す。465は同様の底面の破片で、剥離面の状況から、突起のある粘土の別塊を底部中央に充填して脚との接合部分を成形したことが観察できる。

466・467は脚天井面に貼り付けによる装飾を施すもので、貼り付けの断面形は三角形である。貼り付けは466は「ノ」の字状に弧を描くように、467は「十」字状に施される。468はこれらのような装飾のためのパーツが剥落したものであると判断した。本体との接着面は丸みを帯びるため高坏の坏部などの上面側を飾った可能性も考えられる。高坏の上面に同様の突帯を有する事例は鹿屋市串良町の立小野堀遺跡や川久保遺跡でも報告される。

②壺形土器(469～483)

469～483は壺形土器である。小片が多く、全体形がわかるものは少なかった。469～472は口縁部片、473～477は上胴部片、478～481は底部片である。

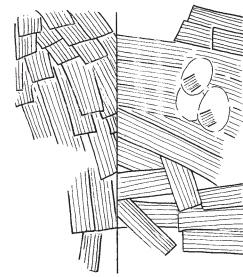
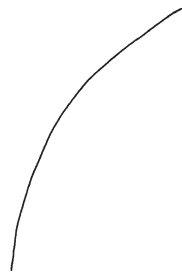
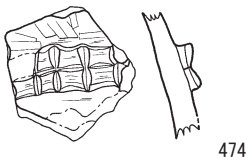
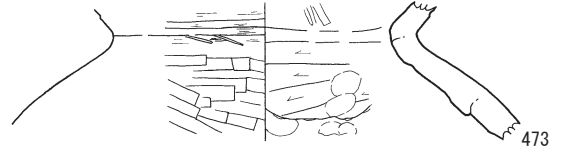
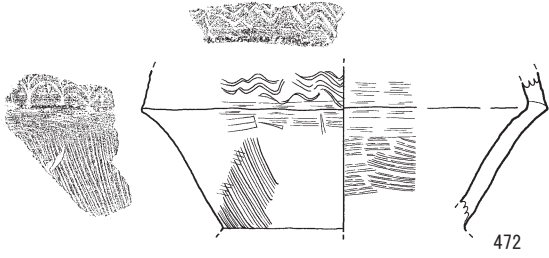
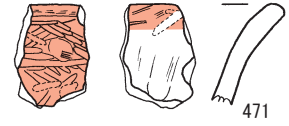
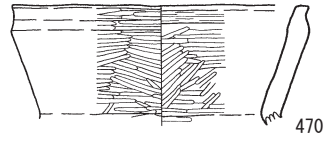
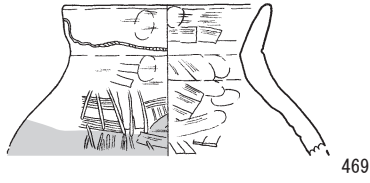
469は頸部で大きくすぼまり、口縁は短く外反する。口縁端部は先細る。残存部の状況から楕円形状の胴部を

もつ可能性が考えられる。頸部の外面には細い紐状の繊維を押し当てた痕跡がみられ、縄目が肉眼で確認できる。外面はハケメの後で丁寧な工具ナデを施す。外面には煤がわずかに付着する。

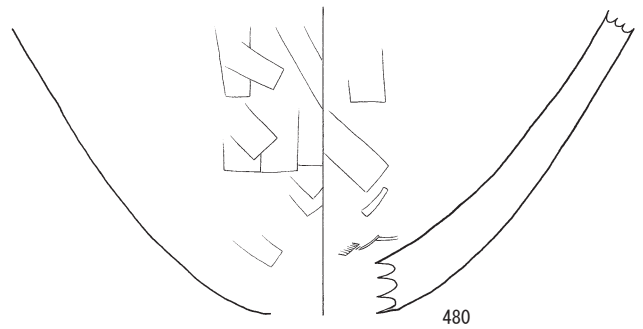
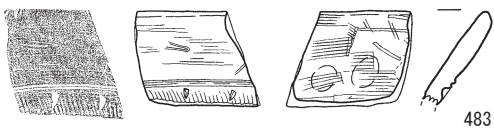
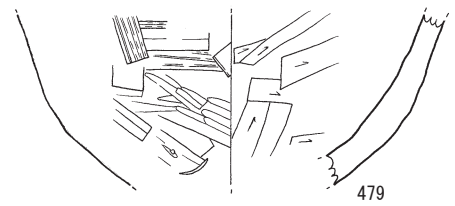
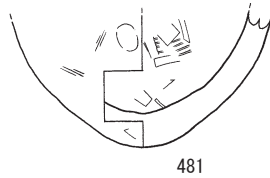
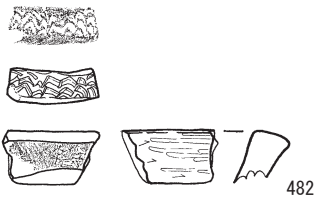
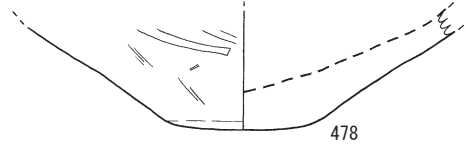
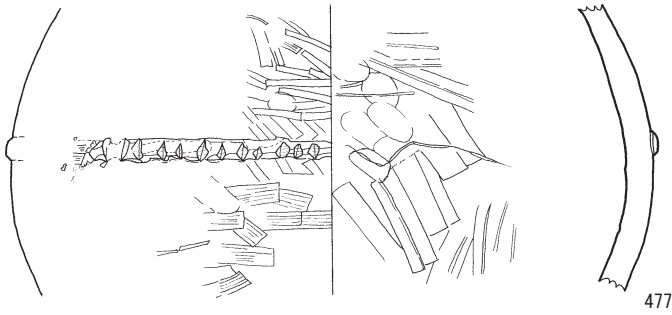
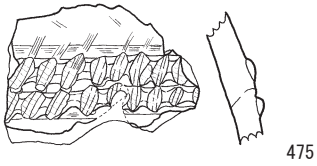
470は器壁は頸部から直線的に開き、口縁上位で逆「く」の字状に小さく屈曲する。屈曲部の稜は緩い。内外面に丁寧なミガキを施しており、光沢をもつ。色調はやや暗めの褐色を呈する。

471は単純口縁で、外面と口縁端部には丁寧なミガキを施す。外面と内面の口縁端部際に赤色顔料を施す。

472は二重口縁壺の口縁部～頸部片で、口縁部はやや外反しながら大きく開く。口縁部上位で逆「く」の字に明瞭に屈曲し、外面の稜はしっかり角付けられる。屈曲部の内面はナデにより滑らかに仕上げられる。外面の屈曲部上位には櫛書きの波状文を巡らせる。波状文は整わずやや粗めに描かれる。内外面に粗いハケメを残し、内面には薄く煤が付着し均一に黒色化する。意図的に黒く仕上げた可能性もある。胎土には金色の雲母の微粒が混じり、搬入品の可能性も考えられる。豊後(大分県)あたりを中心に分布する弥生時代後期の安国寺式土器に形

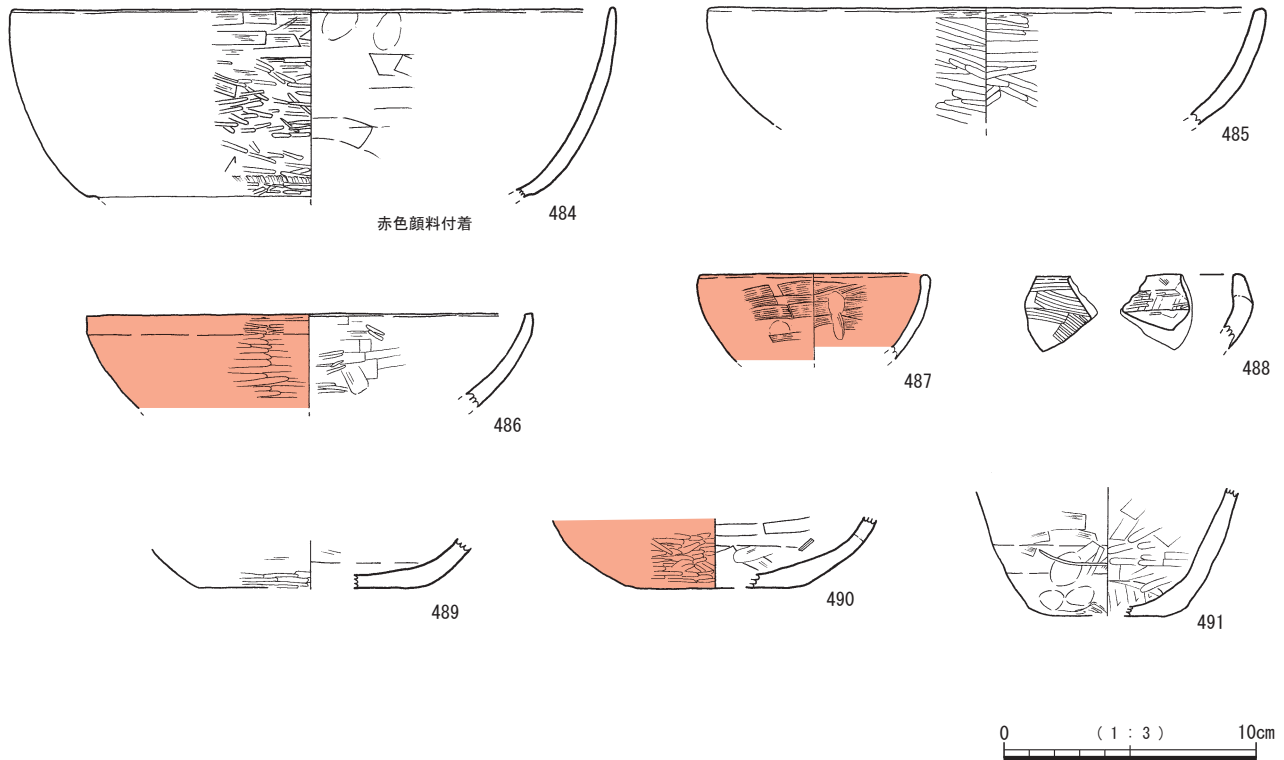


476



0 (1:3) 10cm

第101図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(6)



第102図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(7)

態に近いが、形態や施文法がシャープさに欠ける。大隅地方では東田遺跡（肝付町高山）などでも堅穴式建物跡から東原式の土器とともに出土した事例が報告される。

473は頸部～肩部片で、器壁に厚みがある。内面は頸部稜以下に横位のケズリを施し、粘土の輪積みの痕を残す。白色の雲母片や輝石が目立つ胎土で、色調は明るい褐色である。搬入品の可能性も考えられる。

476は、丸みのある上胴部片で、大粒の金雲母を含む。内外面ともに丁寧なハケメを施す。特に焼成が良く硬質である。製作技法に布留式系統の土師器の影響を受けた、搬入品の可能性もある。

474・475は胴部の最大径よりやや高い位置に二重の突帯を巡らせ、2本同時に刻みを施す。474は突帯を丁寧に貼り付け、棒状の工具で浅く刻む。475は幅広の突帯を粗く貼り付け、上から下へ搔くように粗く刻む。

477は細幅の突帯を粗く貼り付ける。突帯は剥落した痕からは、継ぎ目をわずかに離して貼り付けたものと推測される。外面には微量の煤が付着する。

478はレンズ状の形態の底部片で、大きく開くことから大型の壺であると推測される。接地面近くでわずかにくびれる。479は丸底で、外面には太幅のミガキを、内面にはケズリを施す。480は器壁に厚みがあり、大型の壺の底部片で尖底気味である。478～480の胎土には大粒の赤色粒が混じる。478と480は内面の色調が非常に赤く、断面の状況から化粧土を施していることが窺える

(写真図版29参照)。

482・483は口唇部分や口縁部外面に装飾を施す口縁部片で残存部の状況から壺であると判断したものである。最大径の位置が胴部中央よりもやや高いものを主流とし、肩部はさほど張り出さず、尖底気味であるものが多い。古墳時代前期後半～中期初め頃の遺物であると判断する。

③鉢形土器(484～491)

484～491は坏あるいは小型の鉢である。

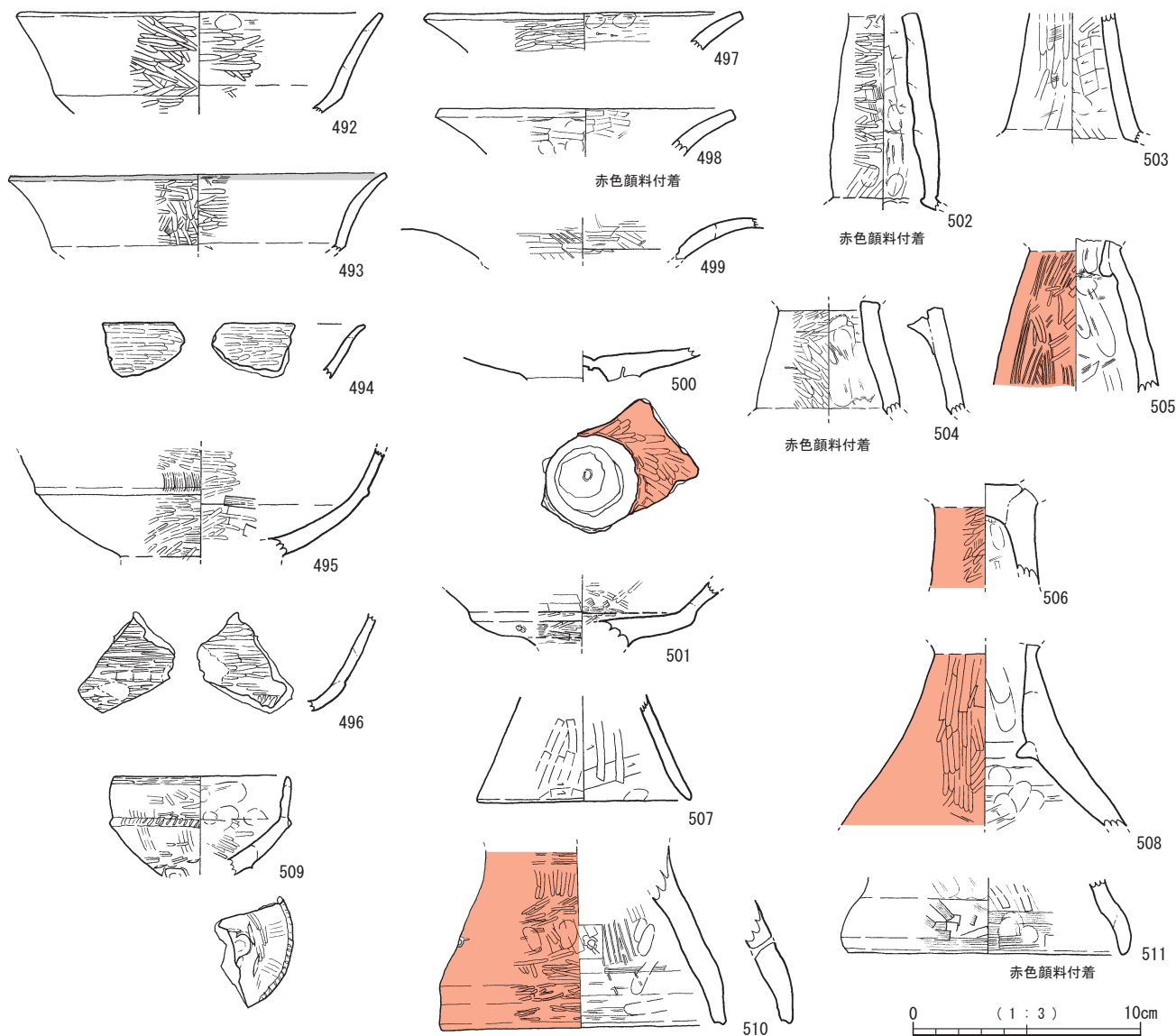
484～486は、外面に丁寧なミガキを施す精緻なつくりである。口唇部分を丁寧にナデてほぼ水平に仕上げる。共通して赤みの強い胎土を使用する。484は胴部下位に水平な緩い稜をもつため接地面近くに段を形成する可能性がある。486は484・485と比較するとやや小ぶりである。口縁端部近くでごく緩く内側に屈曲する。

487は推定口径9cm程の小型の坏の体部片で、器壁が薄い。内外面にハケメを施す。器面の色調は赤みが強い。

488～491は胎土の色調が明るい黄褐色で、小型の器種などに使用されるものに類似する。

488は口縁部が内側に強く屈曲する鉢で、外面の稜は明瞭である。胴部は急な角度ですばまり、浅い鉢状の形態になると推測される。須恵器の坏身に影響を受けた器形であることが考えられる。

489・490は平底の坏の底部片である。底径は推定で



第103図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(8)

489は約9cm, 490は約7cmで, 扁平なプロポーションであると推測される。外面には横位のミガキを施し, 内面は丁寧なナデ調整で仕上げる。特に精良な胎土を使用する。490の外面には赤色顔料が付着する。

491は平底で, やや深めの鉢であると推測される。器壁の厚みは均一ではなく, 輪積みの影響による稜がみられる。接地面近くの外面にはユビオサエの痕を多く残り, つくりがやや粗い。

④高坏 (492 ~ 511)

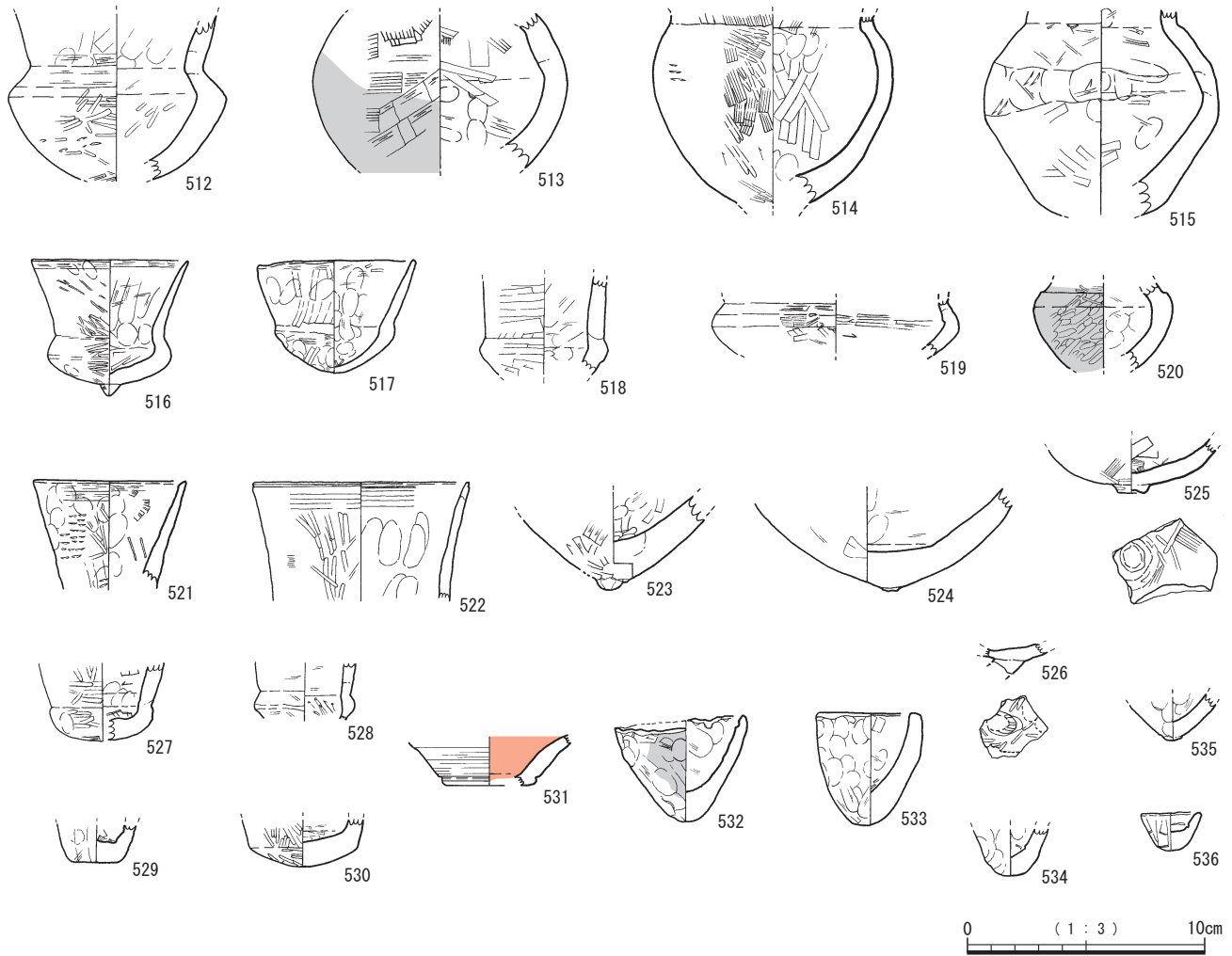
492 ~ 511は高坏である。小片が多く, 全体形がわかるものは少なかった。492 ~ 501は坏部片で, 口径15cm ~ 20cmと推測されるものが多く, 形態は浅い皿状や, やや深めの椀状のものがみられる。502 ~ 511は脚片で, 脚は中空の筒状の柱部のものを主流とし, エンタシス状

あるいはスカート状に開く形態のものがみられる。器面の調整などのつくりは精緻なものと粗いものとがみられ, 小型のものは丁寧に仕上げられる傾向がみられる。また, 赤色顔料が塗布されるものもみられる。

509のように器台の可能性のある小型のものも出土した。

492・493は薄手で丁寧なつくりである。外面下位に明瞭な稜を形成し, 外反しながら開く。493は内面の口縁部際に帯状に煤が付着するため蓋のように伏せた状況での被熱が窺える。調整方法や胎土の特徴から同一個体の可能性もある。

494 ~ 496は非常に赤みの強い橙色の精良な胎土を使用する。494は坏部片で, 外面中位に緩い稜を形成し外反する。495・496は椀状に丸みをもつ坏部片である。3点ともに器面に細幅の工具によって粗いミガキを施す。



第104図 萩ヶ峰遺跡 古墳時代の土器(9)

497・498は口縁端部を「コ」の字状に角張らせる。
498は内外面に薄く赤色顔料を塗布している。

500は坏部の底面の破片で、器壁が大きく開くことから扁平な形態であると推測される。外面には赤色顔料が塗布される。剥離面の状況から柱部側に突起をもち接合させたことが分かる。

501は坏部底面がほぼ水平で、内面に明瞭な稜をもつ。

502・503は接地面近くで大きく屈曲して開き、接地すると推測される。502は高い脚である。外面の色調は赤みが強い。503は内面に横位のケズリを施す。混和材の粒子の細かな精良な胎土を使用する。

504は低い脚である。外面に赤色顔料を厚く塗布される。内面上位には坏部と接合した際の粘土塊がみられる。

505は外面に薄く赤色顔料が塗布される。胎土には石英、角閃石、鮮やかな赤色の粒子を中心とした大粒の混和材が多量に含まれる。搬入品の可能性も考えられる。

506は直線的に立ち上がる中空の柱と坏部との接合部分が観察できる。坏部底面中央に粘土の別塊を充填し接

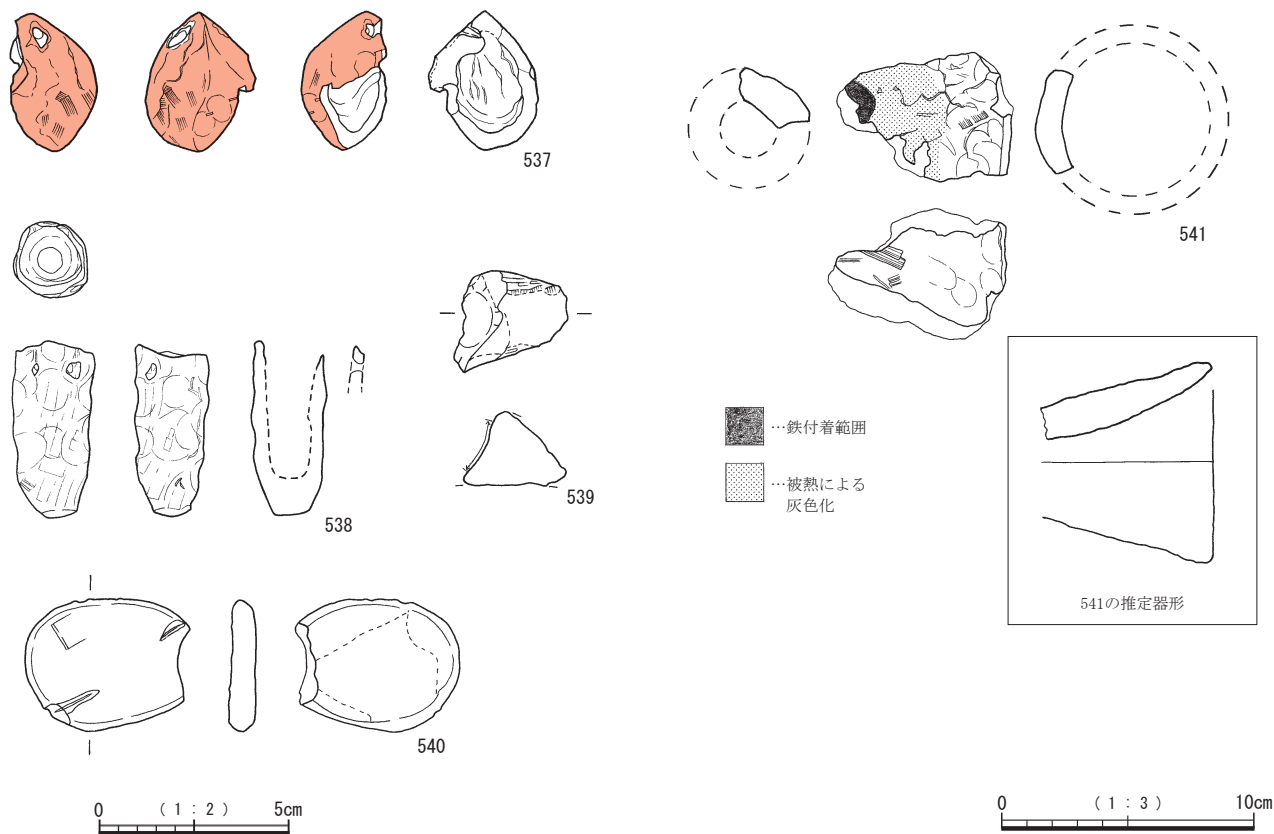
合し、脚天井部分と一体化させる。脚外面と坏部には丁寧なミガキが施され、赤色顔料が塗布される。

507は薄い精緻なつくりである。内面にはケズリの後でナデ調整を施す。

508は大型の脚である。スカート状に大きく開く。坏部との接合部分の状況から、坏部底面に大きな突起を有することが推測される。外面には赤色顔料が塗布される。

510・511は大型で器壁が厚い。脚下位でわずかに外側に張り出し、内湾気味に接地する。ともに接地面の端部は丸みを帯びる。外面には粗いミガキを施し、赤色顔料を塗布する。510は4～5か所に内面側から穿孔を施す。

509は推定口径8cm程の小型の器台である。中位で屈曲し口縁は短くほぼ垂直に立ち上がる。屈曲部分の外面には細い突帯を巡らせ、密に刻目を施す。底面には脚部分剥離した痕跡が確認される。混和材の粒子の細かな胎土を使用する。



第105図 萩ヶ峰遺跡 土製品・甕の羽口

⑤小型丸底壺(甕) (512 ~ 526)

ミニチュア土器 (527 ~ 536)

512 ~ 526は小型丸底壺(甕)で、527 ~ 530は小型丸底壺や鉢などを模したミニチュアの土器である。本遺跡においては遺構内遺物を含めて一定量出土している。

完形で出土したものは少なく、人為的に破砕された痕跡をもつものが多くみられる。

512 ~ 526はやや大ぶりの頸部~胴部片である。512は胴部上位でやや張り出し、底部へ向かい急な角度ですぼまる扁平な形態である。513は胴部中央あたりが最大径となる丸みのある形態である。外面には煤が付着し、煮炊きにも使用されたことが窺える。内面にも少量の煤の付着が確認される。514・515は重心が高い。東原式段階の甕や壺を模倣したミニチュアの可能性もある。514は外面に粗いミガキを施す。515は肩部に平坦面を有するため成形時にタタキを行ったことが推測される。

516・517は小型で、完形に復元できた。胴部は偏球形で長い口縁をもち重心が低い。古墳時代前期の東原式期に該当すると判断される。516は外面にはミガキを施し、底面に小さな突起を貼り付ける。517は工具ナデの後でナデ調整を施す。ともに胎土の混和材の粒子は細かである。518も形態は似るが513・517と比較するとやや胎土が粗い。

519は広口であることが推測される。

520は重心が高く、外面を人為的に黒色化したものと推測される。煤は内面と断面にも微量に付着するため破砕後に熱を受けた可能性もある。古墳時代後期の笹貫式段階に該当すると判断される。

521・522は頸が長い形態のもの口縁部である。521は器壁にやや厚みがあり、先細る形態である。成形時にタタキを行った痕跡がみられる。精良な胎土を使用し、外面には煤が付着する。天地を返して脚の可能性も捨てきれないがここに含める。522は器壁が非常に薄い。外面口縁部際に細い沈線を巡らせる。口縁端部には横ナデを施す。極めて精良な胎土を使用し、色調は非常に明るい黄褐色を呈する。外面には薄く赤色顔料が施される。

523 ~ 526は小型丸底壺の底部の突起である。乳頭状のもの(523・524)、ボタン状のもの(525)柱状のもの(526)などその形態は様々である。524は中心から2cm程ずれた位置に小さな粘土の塊を粗く貼り付ける。

527・528は小型丸底壺のミニチュアである。長頸のタイプを模したものと考えられる。528は精良な胎土を使用する。

529・530は鉢を模したミニチュアである。ともにやや作りが粗い。529は平底で、530はレンズ状の形態の底部である。器壁は急な角度で立ち上がる。

531は内外面に緩く段を形成し、外反しながら大きく皿状に開く形態から高坏を模したミニチュアであると判断した。内面には赤色顔料が塗布され、外面にもわずかに付着する。工具ナデの後で丁寧なナデ調整を施す。精良な胎土を使用し、色調は明るい黄褐色を呈する。

532～536は三角錐状の鉢で、本遺跡においては遺構内からも様々な規格のものが出土している。ユビオサエの痕が多く残る雑なつくりではあるが、成形時には工具を使用した痕跡が残る。536は精緻なつくりの小型丸底壺などと同じような混和材の粒子の細かな胎土を使用するが、ほかには赤みの強い粗い胎土を使用する。535は底面に乳頭状の突起を有する。

⑥土製品 (537～540)、鞆の羽口 (541)

537は土鈴で、538は用途不明の指サック状の形状の土製品である。537・538は平成5年度の調査時に設定し調査したD-3～7区の24トレンチ（位置は第3図を参照。）のⅢ層から2点ともに出土した。当時の調査においては掘り込み等は確認できなかった。

537は桃核状の形状の鈴で半分が残存する。器面の調整には細い幅の工具を使用しナデで仕上げる。先端部分に紐がかりの孔が2か所確認できる。孔は棒状の工具により右から左に突き通して施される。器壁の厚みは5～7mmで、中心部は空洞で、中に小玉が入ると考えられる。精良な胎土を使用し、明るい黄褐色でやや灰色がかった色調を呈する。搬入品の可能性がある。外面は赤色を呈し、蛍光X線分析の結果、鉄をやや多く含みベンガラが塗布されている可能性がある。ただし含有量は多くはなく胎土に含まれる鉄分が焼成により赤色化した可能性もある。

538は粘土を指頭に巻き付けて成形した可能性がある。器面の調整には細幅の工具も使用する。ユビオサエの痕が多く残り、口の近くに外面側からの穿孔が2か所水平に施される。孔の上位には擦痕が確認できるため紐に吊して使用した可能性が考えられる。内面の底にはごくわずかに暗褐色の赤色顔料が付着する。混和材のほとんど入らない精良な胎土を使用するが、色調や混和剤の特徴は在地系の胎土に類似する。

539は棒状のパーツの先端が広がり、丁寧に整えられた小さな凹みを有することから土製の匙の一部であると判断した。混和材の粒子の細かな胎土を使用している。柄に該当する部分は表面の摩滅が著しい。

540は薄手の甕の胴部片の周囲を擦り、楕円状に加工したものである。全面的によく擦られ滑らかである。表面は摩滅が著しく、裏面には縁辺部分に対称に傷がみられる。傷は鋭利なものによってつけられており、新しいものではない。一部を欠損する。

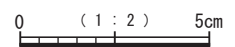
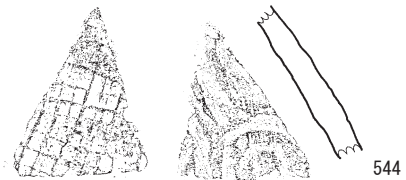
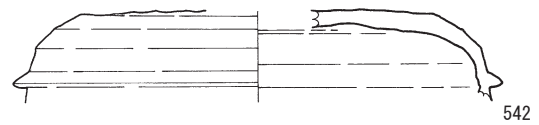
541は鞆の羽口である。先端部分を欠く。器壁に厚み

があり、ユビオサエの痕が多く残る。接地の状況は極めて悪く、高坏の脚の転用品ではなく専用の羽口として製作された可能性がある。送風口側には鉄の付着が認められる。外面の灰色化の状況から先端部分を下にわずかに傾けた状態で炉に挿入して使用したことが窺える。

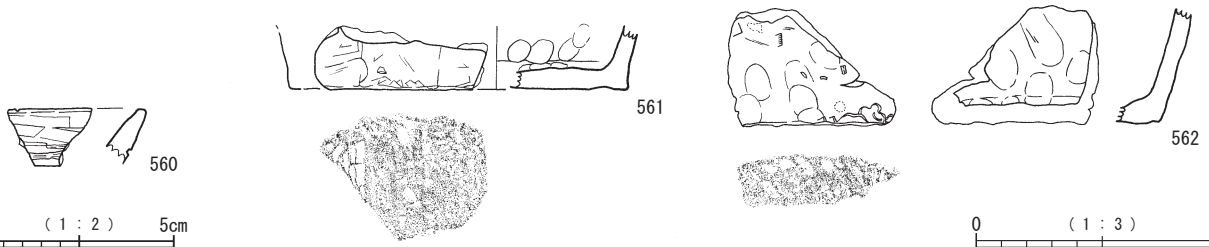
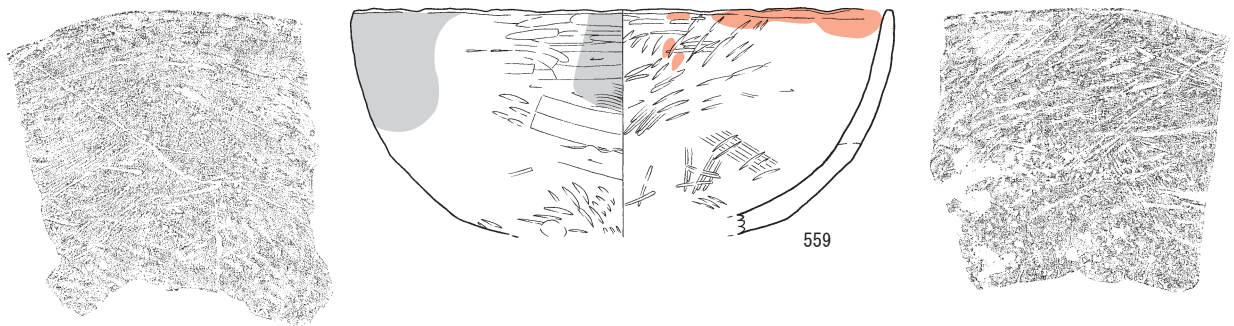
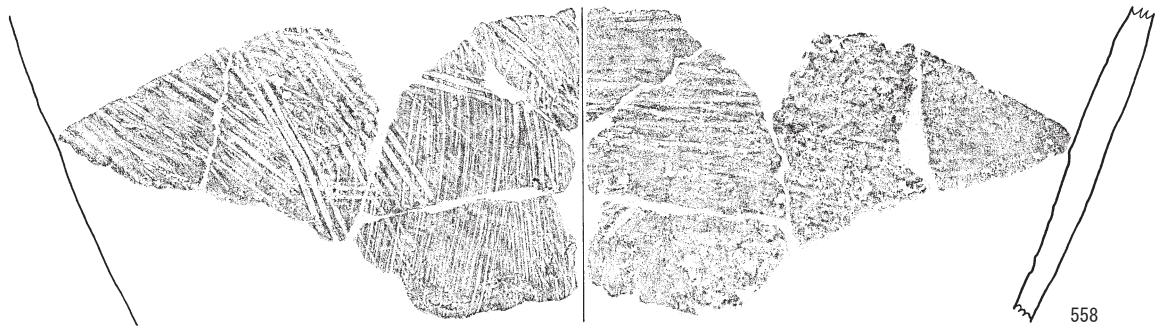
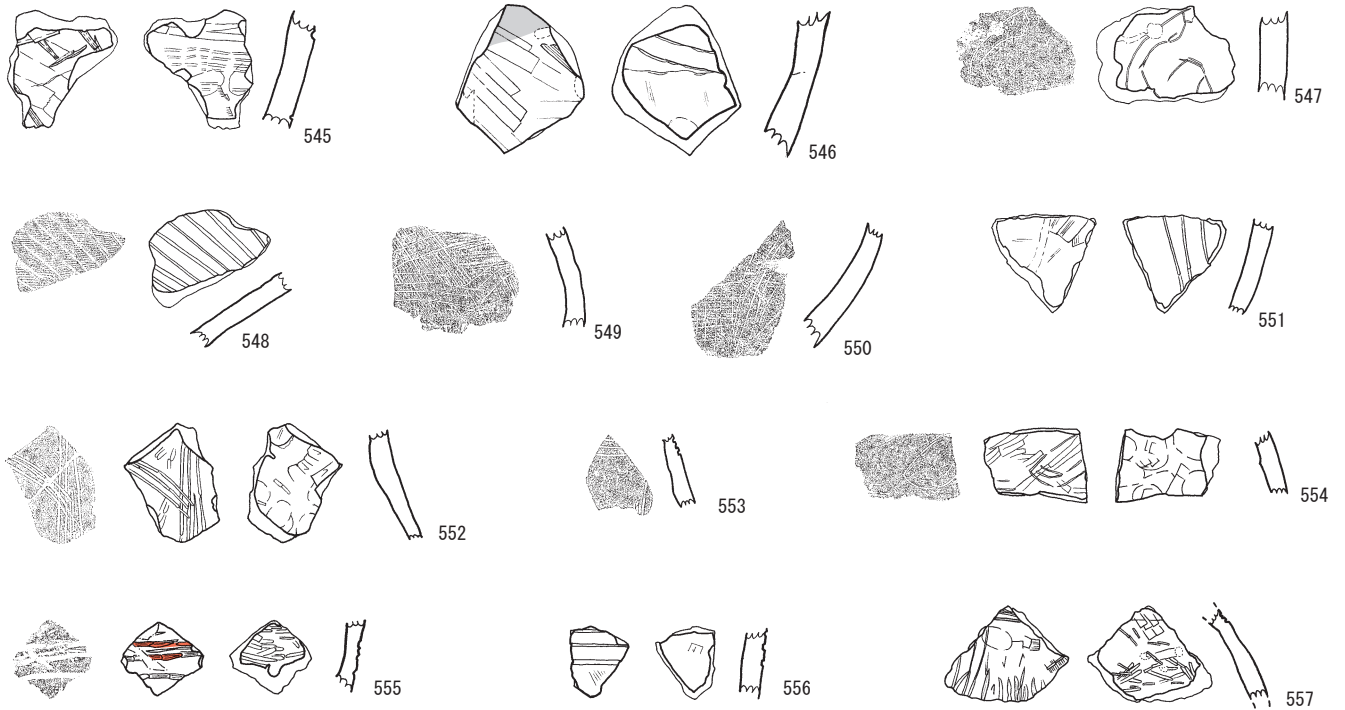
⑦須恵器 (542～544)

542～544は須恵器である。本遺跡で出土したものは掲載した3点のみであった。このうち出土地点が分かるものは、542のみ（D-10区）で、古墳時代の堅穴建物跡を検出したエリアからは離れる。本来は遺跡の北側に所在していたものが地形の影響を受けて移動したものと推測される。

542は身か蓋かで見解が分かれた遺物であるが、蓋として図化した。傘部分の推定径は約13cmである。天井部分はドーム状に丸みを帯びた形態である。器壁は5mm程の厚みである。返しが一部残存し、傘部に対して角度は垂直に近く、先端部分に向かいごくわずかに外反すると推測される。田辺昭三氏の編年（田辺1981）によるⅡ期の前半（5世紀後半）に該当すると推測される。



第106図 萩ヶ峰遺跡 須恵器



0 (1:2) 5cm

0 (1:3) 10cm

第107図 萩ヶ峰遺跡 線刻のある土器片・時期不明の土器

543は蓋の一部である。傘部分の一部が残存する。直線的な形態で、やや厚みのある器形が想定される。542と時期の差は少ないものと考えられる。

544は甕の肩部片であると判断した。外面には格子目状のタタキが、内面には同心円状のタタキが明瞭に残る。詳細な帰属時期は不明である。

⑧時期不明の土器片 (545 ~ 562)

545 ~ 562は時期不明の土器片である。

545 ~ 557・560は線刻を施した可能性のある土器小片である。詳細な時期の特定には至らなかったが、本遺跡においては縄文時代晩期の黒川式干河原段階あるいは古墳時代前期の東原式期の遺物が大半を占めるため、これらも同様の時期に帰属する可能性がある。

545は器面に短沈線を「X」字状に交差させたモチーフを描く。成川式土器の甕の器面に直接施した刻目の一部である可能性もある。546は大きく開く器形で、内面に短い沈線が平行に描かれる。外面には煤が付着する。鉢状の器形である可能性がある。547は人の頭と拳を振り上げたような形を細い沈線によって描くが、小片のため線刻であると断言は難しい。やや丸みのある破片で、壺形土器の可能性もある。548は非常に明るい黄褐色を呈する。大きく開く器形で上面には目の整ったハケメを規則正しく施し、さらに暗文様のミガキを放射状に等間隔に施す。高坏などの坏部片の可能性もある。549は外面に3本から4本単位の細い沈線による文様を描く。丸みの強い破片で、壺の可能性もある。550は大きく開く器形で外面にごく細幅の工具による暗文様のミガキが放射状に粗く施される。551は大きく開く器形で、内面には縦位の3条の平行沈線が描かれる。胎土などの特徴から545 ~ 551は古墳時代に該当する可能性がある。

552・553は外面が黒色を呈し、表面に光沢がある。3 ~ 4本単位の沈線文が描かれる。口縁部に向かってなだらかにすぼまる壺のような形態となることが推測され、同一個体の可能性もある。胎土は赤みの強い褐色で金色の雲母の微粒を含み、搬入品の可能性が高い。554はごく浅い沈線によって輪状のモチーフが描かれる可能性がある。胎土は灰色がかり搬入品の可能性が高い。555は小片のため詳細は不明だが、横位の多重の沈線文がやや太めの工具によって描かれ、沈線間に赤色顔料の付着が確認できる。内外面ともに黒色を呈する。560は器壁はごく薄く口縁端部は先細る。口縁部上位に沈線を巡らせる。内外面と断面は黒色を呈する。556は外面に3条の細い沈線を描く。胎土には小粒の角閃石が目立つ。557は壺状の器形となることが推測される。頸部あたりに多重の細い沈線を巡らせ、胴部上位は櫛目状の粗い刷毛によって掻き上げる様になる。胎土には火山ガラスを多く含む。

552・553・557が出土したC-5・6区の周辺からは南西諸島系の仲原式土器も出土するため関連のある遺物の可能性もある。552 ~ 557は胎土などの特徴から縄文時代晩期に該当する可能性がある。

558は胴部下半片で、縄文時代晩期に該当する可能性があるが器形の立ち上がりの角度や焼成具合に他の時期に帰属する可能性も感じられるためここに含めた。

559は推定口径約22cmで、ボウル状に丸みのある形態である。口唇部分は水平に整わず上下し、つくりが粗く、器面の調整も粗い。底面と口縁部内面に筋状の圧痕が残り、幅や方向性からタタキの痕跡であると考え、また焼成も良好であったため古墳時代の鉢の可能性もあるが、出土地点のC-6区は縄文時代晩期の遺物がまともに出土したエリアでもあり、組織痕土器の可能性もあるためここに含めた。口縁部外面には煤がほぼ水平に付着し、煮炊きに使用されたことが窺えるが縦方向に一部付着のほぼみられない部分が確認されるため、なんらかの器具で固定して加熱していたことが推測される。内面の口縁端部際には赤色顔料が付着する。

561・562は平底の底部片である。接地面の稜は明瞭で、底部側から胴部を面取りするように成形しているため、接地面の稜は直線的である。器壁の厚みはほぼ均一である。ともに底面に網代のような圧痕が薄く残る。内面側には指頭圧痕が多く残る。赤みの強い胎土を使用し、混和材の粒子はやや細かく白色の粒が目立つ。561にのみ角閃石が混じる。出土地点は21区あたりで古墳時代の堅穴建物跡が検出されたエリアに近い。詳細な時期は不明である。



No561底面



No559外面

第12表 萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(1)

挿入番号	掲載番号	出土地点	遺構名・層	器種	型・時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調1	色調2	胎土1					タタキの有無	取上番号	備考	
												石英・長石	雲母・輝石	角閃石	赤褐色粒	礫				その他
71	279	D-21	SH1	甗	東原	25.6	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR7/6 (内)7.5YR7/6	(外)橙 (内)橙	○	○	-	-	○	-	91 他		
	280	D-21	SH1	甗	東原	-	-	-	(外)ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR2/1 (内)2.5YR4/6	(外)黒 (内)赤褐	○	○	-	△	○	-	1041	外面スス附着	
	281	-	SH1	甗	東原	-	-	-	(外)ケズリ, ナデ (内)ケズリ, ナデ	(外)7.5YR4/3 (内)7.5YR5/4	(外)褐 (内)にぶい褐	○	○	-	◎	-	-	一括		
	282	D-21 E-21	SH1	甗	東原	28.0	-	(13.7)	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, ハケメ, ミガキ	(外)5YR4/6 (内)2.5YR4/6	(外)赤褐 (内)赤褐	○	○	-	○	○	-	8103 他		
	283	D-21	SH1	甗	東原	28.0	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR6/6 (内)5YR5/8	(外)橙 (内)明赤褐	○	○	-	○	○	-	3932		
	284	D-21	SH1	甗か鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR5/6 (内)7.5YR6/6	(外)明赤褐 (内)橙	△	△	-	-	-	-	1	外面丹塗り, 胎土精良	
	285	D-21	SH1	甗	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/6 (内)5YR6/6	(外)明黄褐 (内)橙	○	-	-	○	-	-	1072 他		
	286	D-21	SH1	甗か鉢	東原	30.0	-	(4.5)	(外)ハケメ (内)ハケメ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/8	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	-	-	○	○	-	61 他	胴部沈線文有?	
	287	D-21	SH1	鉢	東原	26.4	-	-	(外)ハケメ, 工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ミガキ, ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	-	◎	○	-	84 他	内外面にスス附着	
	288	D-21	SH1	甗	東原	-	-	-	(外)ナデ (内)ミガキ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい褐	○	△	-	-	○	-	41 他	内面摩滅	
	289	D-21	SH1	甗	東原	-	10.0	-	(外)ハケメ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR7/3 (内)10YR6/3	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	-	△	-	-	1066		
	290	-	SH1	甗	東原	-	5.1	(5.5)	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR5/4 (内)5YR5/6	(外)にぶい黄褐 (内)明赤褐	○	-	-	△	○	-	71		
	291	G-21	SH1	甗	東原	-	8.2	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)マメツ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR5/3	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	○	○	-	-	○	-	67		
	72	292	-	SH1	壺	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい褐	○	○	-	△	-	-	軽石	内面丹塗り
		293	D-21	SH1	壺	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR7/6 (内)10YR7/6	(外)明黄褐 (内)明黄褐	○	○	-	-	-	-	66 他	外面丹塗り, 外面スス附着
		294	D-21	SH1	高坏	東原	16.2	-	-	(外)ハケメ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, ミガキ	(外)5YR6/6 (内)5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	-	○	○	-	1024 他	有
295		D-21	SH1	高坏	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR4/6 (内)5YR5/6	(外)赤褐 (内)明赤褐	○	○	-	○	-	-	-	一括	外面沈線文有
296		-	SH1	鉢か坏	東原	10.8	-	-	(外)ハケメ, 指オサエ (内)ハケメ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)5YR5/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい赤褐	○	-	-	-	-	-	有	30	
297		D-21	SH1	小型 丸底壺	東原	8.1	-	-	(外)ミガキ, ナデ (内)ミガキ, ナデ	(外)7.5YR7/4 (内)7.5YR7/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	○	○	○	-	-	-	34	胎土精良
298		11T	SH1	小型 丸底壺	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)10YR7/4 (内)7.5YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい橙	○	○	○	◎	△	-	-	17	搬入品か
299		D-21	SH1	鉢	東原	9.0	4.6	9.2	(外)ミガキ, ナデ (内)ナデ	(外)2.5Y6/3 (内)2.5Y7/4	(外)にぶい黄 (内)浅黄	○	○	-	-	-	-	-	4232 他	胎土精良, 外面スス附着
300		D-21 他	SH1	脚	東原	-	10.0	(14.1)	(外)ハケメ, 工具ナデ, ナデ (内)ハケメ, ナデ	(外)10YR7/6 (内)10YR7/6	(外)明黄褐 (内)明黄褐	◎	○	-	○	-	-	-	1075 他	内外面にスス附着
301		D-21	SH1	鉢	東原	-	-	-	(外)ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	○	-	-	-	○	-	-	一括	内外面, 断面にスス附着
302		D-21	SH1	鉢	東原	-	-	-	(外)指オサエ (内)指オサエ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	-	-	-	-	-	-	一括	胎土精良 スス附着
303		D-21	SH1	ミニチュア 坏	東原	2.2	1.1	2.3	(外)工具ナデ, ナデ (内)ナデ	(外)10YR5/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	△	-	△	-	-	-	-	1087	胎土精良
76		309	-	SH2	甗	東原	30.1	10.2	32.0	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ミガキ, ナデ	(外)5YR5/8 (内)5YR4/8	(外)明赤褐 (内)赤褐	○	-	-	△	○	-	か11 他	完形 スス附着
	310	D-21	SH2	甗	東原	20.5	8.0	24.8	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR4/3 (内)5YR5/8	(外)にぶい赤褐 (内)明赤褐	○	-	-	-	-	-	-	328 他	完形
	311	D-22	SH2	甗	東原	31.8	5.4	34.7	(外)工具ナデ, ナデ, ケズリ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)2.5YR6/4	(外)橙 (内)にぶい黄	○	○	-	○	○	-	-	182 他	完形
77	312	D-20	SH2	甗	東原	30.0	-	(14.1)	(外)ハケメ, ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR3/1 (内)5YR4/6	(外)黒褐 (内)赤褐	○	○	-	○	-	-	-	一括	
	313	7T	SH2	甗	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, ミガキ	(外)5YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	△	△	-	△	-	-	-	618 他	胎土色調明るい
	314	C-20 C-21	SH2	甗	東原	31.0	-	(10.7)	(外)ハケメ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)2.5YR5/4 (内)10YR5/3	(外)明赤褐 (内)にぶい黄褐	○	○	-	◎	-	-	-	151 他	
	315	-	SH2	甗	東原	-	-	-	(外)ハケメ, 工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR4/3 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	○	○	-	△	○	-	-	62	外面丹塗り スス附着
	316	-	SH2	甗	東原	26.4	-	(25.0)	(外)工具ナデ, ミガキ, ケズリ (内)工具ナデ, ケズリ, ナデ	(外)7.5YR3/1 (内)5YR4/6	(外)黒褐 (内)赤褐	○	○	-	-	○	-	有	381 他	スス附着
	317	D-20 他	SH2	甗	東原	29.8	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)2.5YR5/6 (内)5YR5/4	(外)明赤褐 (内)にぶい赤褐	◎	○	-	-	-	-	-	193 他	
78	318	土坑1 D-21	SH2	甗か鉢	東原	-	6.8	-	(外)ハケメ, 指オサエ (内)工具ナデ, 指オサエ	(外)10YR5/3 (内)10YR3/1	(外)にぶい黄褐 (内)黒褐	○	○	-	○	-	-	-	4 他	
	319	-	SH2	甗	東原	-	10.5	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, 指オサエ	(外)2.5Y5/3 (内)2.5Y5/4	(外)黄褐 (内)黄褐	○	○	-	-	○	-	-	342 他	
	320	-	SH2	甗	東原	-	12.0	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)2.5Y3/1	(外)にぶい黄橙 (内)黒褐	○	-	-	-	○	-	-	95	内面, 断面スス附着
	321	-	SH2	甗	東原	-	10.4	(5.6)	(外)工具ナデ, ナデ (内)ナデ	(外)5YR4/4 (内)5YR4/3	(外)にぶい褐 (内)にぶい赤褐	○	-	○	-	◎	-	-	134	
	322	竪穴内 土坑1	SH2	甗	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR3/2	(外)にぶい黄橙 (内)黒褐	○	-	-	-	◎	-	-	2	スス附着, 摩滅著しい
	323	竪穴内 土坑1	SH2	甗	東原	-	6.2	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR5/4	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	○	○	-	-	○	-	有	1	
79	324	-	SH2	甗	東原	(7.4)	-	(18.6)	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR5/6 (内)7.5YR4/4	(外)明褐 (内)褐	◎	○	-	◎	○	-	有	376 他	底面ヘラ痕多い
	325	-	SH2	壺	東原	13.0	-	(6.9)	(外)ハケメ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)5YR5/6	(外)橙 (内)明赤褐	○	○	○	-	-	-	-	18 他	
	326	-	SH2	壺	東原	11.6	-	(5.3)	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)7.5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	◎	-	-	-	-	-	44	内面スス附着
	327	D-21	SH2	壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)10YR6/4	(外)橙 (内)にぶい黄橙	○	○	△	○	○	-	-	4192	スス附着

第13表 萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(2)

挿入番号	掲載番号	出土地点	遺構名・層	器種	型式・時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調1	色調2	胎土1					タタキの有無	取上番号	備考		
												石英・長石	雲母・輝石	角閃石	赤褐色粒	礫				その他	
79	328	-	SH2	壺	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)7.5YR5/3 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	○	○	-	◎	-	-	一括			
	329	-	SH2	壺	東原	-	-	-	(外)ハケメ, ナデ (内)指オサエ	(外)10YR7/4 (内)10YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	△	-	-	◎	-	-	51			
	330	-	SH2	壺	東原	-	2.0	(23.5)	(外)ハケメ, ミガキ, ナデ (内)ハケメ, 指オサエ	(外)5YR5/6 (内)10YR6/4	(外)明赤褐 (内)にぶい黄橙	○	○	-	-	-	-	187 他	外面スス付着		
	331	-	SH2	壺	東原	-	(4.0)	(5.2)	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR5/6 (内)5YR4/6	(外)明褐 (内)赤褐	○	△	-	◎	-	-	有	一括		
	332	竪穴内 土坑1	SH2	高坏	東原	27.0	-	(13.2)	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ (内)ミガキ	(外)5YR4/8 (内)5YR6/6	(外)赤褐 (内)橙	○	○	-	○	○	-	-	344 他	坏部完形	
	333	D-20 D-21	SH2	高坏か 台付鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)ミガキ	(外)5YR4/4 (内)5YR3/6	(外)にぶい赤褐 (内)暗赤褐	○	○	-	◎	○	-	-	有	4267	内外面丹塗り
	334	-	SH2	台付鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ, ミガキ	(外)5YR4/6 (内)10YR6/4	(外)赤褐 (内)にぶい黄橙	○	○	-	○	-	-	-	有	115 他	外面丹塗り
	335	-	SH2	高坏	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR5/6 (内)7.5YR6/4	(外)明褐 (内)にぶい橙	○	△	-	△	○	-	-	-	171	外面丹塗り
	336	D-20 他	SH2	高坏	東原	23.4	-	(8.3)	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ (内)ミガキ, ナデ	(外)5YR6/6 (内)2.5Y6/2	(外)橙 (内)灰黄	○	○	-	△	-	-	-	有	4288 他	内面スス付着
	337	-	SH2	高坏	東原	-	12.4	(5.8)	(外)ハケメ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, ハケメ	(外)5YR5/6 (内)5YR4/6	(外)明赤褐 (内)赤褐	○	○	-	○	-	-	-	-	4319	鉢の可能性有
	338	D-20 D-21	SH2	高坏か 器台	東原	-	13.0	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	-	○	-	-	-	-	137 他	外面沈線巡る
	339	-	SH2	高坏	東原	-	11.6	-	(外)ハケメ, 工具ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)2.5Y1/3 (内)10YR5/3	(外)黒褐 (内)にぶい黄橙	○	◎	△	-	-	-	-	-	109	外面黒色
	340	-	SH2	高坏	東原	-	-	-	(外)ハケメ, 工具ナデ (内)ハケメ, ナデ	(外)5YR5/4 (内)5YR5/6	(外)にぶい赤褐 (内)明赤褐	○	○	-	○	-	-	-	-	146	
	80	341	C-21	SH2	小型 丸底壺	東原	9.6	2.0	14.3	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	△	○	-	-	有	65 他	煮炊き用か、完形
		342	-	SH2	小型 丸底壺	東原	8.5	(胴径) 8.95	10.2	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)5YR6/4 (内)5YR6/6	(外)にぶい橙 (内)橙	○	○	-	-	-	-	有	358 他	完形
343		-	SH2	小型 丸底壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ミガキ (内)ケズリ, ナデ	(外)2.5Y4/2 (内)7.5YR5/4	(外)暗灰黄 (内)にぶい褐	○	○	-	○	-	-	-	-	4373	外面黒色
344		-	SH2	小型 丸底壺	東原	-	-	(5.4)	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)2.5YR4/4 (内)2.5YR3/4	(外)にぶい赤褐 (内)明赤褐	○	-	-	△	-	-	-	-	一括	内外面丹塗り
345		D-21	SH2	小型 丸底壺	東原	7.8	-	(7.8)	(外)ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ミガキ, ナデ	(外)5Y6/2 (内)5Y6/3	(外)灰オリーブ (内)オリーブ黄	△	△	-	-	-	-	-	-	4386	口縁部外面に沈線巡る、 胎土精良、搬入品か
346		-	SH2	小型 丸底壺	東原	6.0	-	(2.7)	(外)ナデ (内)ナデ	(外)7.5YR7/4 (内)7.5YR7/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	△	-	△	△	-	-	-	-	4385	口縁部外面に沈線巡る、 胎土精良、搬入品か
347		-	SH2	小型 丸底壺	東原	9.6	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ	(外)7.5YR7/4 (内)10YR7/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	○	-	○	-	-	-	-	-	24 他	胎土精良
348		-	SH2	小型 丸底壺か鉢	東原	(7.6)	-	-	(外)工具ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, 指オサエ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	△	△	-	△	-	-	-	-	313 他	胎土精良
349		E-20 9T	SH2	小型 丸底壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, ハケメ	(外)10YR8/6 (内)7.5YR7/6	(外)黄橙 (内)橙	△	△	△	△	-	-	-	有	74 他	胎土精良、搬入品か
350		-	SH2	ミニチュア 小型丸底壺	東原	5.0	-	6.6	(外)工具ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	-	◎	-	-	-	有	59 他	
351		D-21	SH2	小型 丸底壺	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)ナデ	(外)10YR7/3 (内)10YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	△	△	-	-	-	-	-	-	4025	胎土精良
352		-	SH2	ミニチュア 鉢	東原	4.2	3.6	(3.5)	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR8/4 (内)7.5YR8/4	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	△	-	△	△	-	-	-	-	3987	胎土精良
353		-	SH2	ミニチュア 坏	東原	(5.5)	-	4.0	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR7/6 (内)5YR7/6	(外)橙 (内)橙	△	-	△	△	-	-	-	-	333	胎土精良
354		-	SH2	ミニチュア 坏	東原	5.1	-	3.4	(外)工具ナデ, 指オサエ (内)ナデ, 指オサエ	(外)10YR5/3 (内)10YR5/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	-	-	○	-	-	-	189	
355	-	SH2	ミニチュア 坏	東原	2.8	-	2.5	(外)工具ナデ, ナデ (内)ナデ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	◎	○	-	◎	-	-	-	-	79		
356	D-20	SH2	鉢	東原	-	20.0	-	(外)ハケメ, ミガキ, ナデ (内)ミガキ, ナデ	(外)2.5YR5/6 (内)7.5YR6/4	(外)明赤褐 (内)にぶい橙	◎	○	-	◎	◎	-	-	-	190	外面に線刻の可能性有	
83	360	E-20	SH3	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)2.5YR3/1 (内)2.5YR4/4	(外)明赤褐 (内)にぶい赤褐	◎	○	-	◎	○	-	-	64		
	361	E-20	SH3	甕	東原	-	-	(8.7)	(外)工具ナデ, ナデ (内)ハケメ, ナデ	(外)7.5YR5/8 (内)7.5YR5/6	(外)明褐 (内)明褐	○	△	-	◎	-	-	-	30		
	362	E-20	SH3	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR3/1 (内)5YR6/6	(外)黒褐 (内)橙	○	○	△	△	-	-	-	7		
	363	D-20	SH3	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい橙	◎	○	-	-	◎	-	-	一括		
	364	E-20	SH3	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR5/6	(外)にぶい黄橙 (内)黄褐	○	○	-	-	○	-	-	-	136	胎土きめ細かい
	365	E-20	SH3	鉢	東原	24.0	-	-	(外)ハケメ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, ミガキ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい橙	◎	○	-	○	◎	-	-	-	176	外面丹塗り
	366	E-20	SH3	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)2.5YR5/4 (内)2.5YR5/4	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい赤褐	◎	○	-	-	◎	-	-	-	78 他	破砕後に蓋として使用か
	367	E-20	SH3	甕か鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ミガキ, ナデ	(外)2.5YR5/6 (内)2.5YR4/6	(外)明赤褐 (内)赤褐	○	○	-	◎	◎	-	-	-	39 他	内面丹塗り
	368	E-20	SH3	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR7/4 (内)10YR4/4	(外)にぶい黄橙 (内)褐	△	-	-	-	◎	-	-	166		
369	E-20	SH3	甕か鉢	東原	-	8.0	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	○	-	○	-	-	-	-	24		
84	370	-	SH3	壺	東原	-	-	(22.2)	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, ケズリ	(外)2.5YR4/4 (内)2.5YR4/6	(外)にぶい赤褐 (内)赤褐	○	○	-	◎	-	-	有	一括		
	371	E-20	SH3	壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR7/4 (内)2.5Y6/3	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄	◎	◎	△	-	-	-	-	123	胎土色調明るい	
	372	D-20	SH3	壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ, ミガキ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	△	○	-	△	◎	-	-	33	外面丹塗り	

第 14 表 萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表 (3)

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構名・層	器種	型式・時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調1	色調2	胎土 1					タタキの有無	取上番号	備考	
												石英・長石	雲母・輝石	角閃石	赤褐色粒	礫				その他
84	373	E-20	SH3	壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)10YR5/3 (内)5YR5/4	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい赤褐	○	○	○	-	-	125	短頸の壺		
	374	E-20	SH3	小型丸底壺	東原	6.0	-	(4.0)	(外)工具ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)7.5YR6/4	(外)橙 (内)にぶい橙	△	△	△	-	-	28			
	375	E-20	SH3	小型丸底壺	東原	6.6	-	-	(外)ハケメ, ナデ (内)ナデ	(外)10YR8/3 (内)10YR8/3	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	△	△	-	-	-	126	胎土精良, 搬入品か 89-2 と同一個体か		
	376	E-20	SH3	小型丸底壺	東原	-	-	-	(外)ナデ (内)ナデ	(外)10YR7/4 (内)10YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	△	△	-	-	-	161	胎土精良, 搬入品か 89-1 と同一個体か		
	377	E-20	SH3	小型丸底壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR7/4 (内)5YR4/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい赤褐	○	○	-	○	○	22			
	378	E-20	SH3	小型丸底壺	東原	-	-	(3.6)	(外)ハケメ (内)工具ナデ, ナデ	(外)2.5YR4/6 (内)2.5YR4/8	(外)赤褐 (内)赤褐	○	○	-	○	○	有	56		
	379	E-21	SH3	鉢	東原	6.4	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR7/6 (内)10YR6/4	(外)橙 (内)にぶい黄橙	○	○	△	△	-	-	45		
	380	E-20	SH3	鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)ナデ	(外)10YR5/4 (内)5YR5/6	(外)にぶい黄褐 (内)明赤褐	○	○	-	-	○	-	131		
	381	E-20	SH3	高坏?	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)ナデ	(外)2.5YR4/6 (内)2.5YR4/8	(外)赤褐 (内)赤褐	○	○	-	○	○	-	49	外面スス付着	
	382	E-19 E-20	SH3	壺	東原	-	2.6	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)10YR7/4 (内)2.5Y7/4	(外)にぶい黄橙 (内)浅黄	◎	◎	-	△	-	有	105 他	胎土色調明るい	
	387	D-19	SH4	ミニチュア鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)5YR6/6 (内)7.5YR7/4	(外)橙 (内)にぶい橙	○	○	-	△	○	-	208	SH4床面ビット (SP1) より出土, 完形, 内外面スス付着	
	388	E-19 E-20	SH4	甕	東原	26.2	-	(20.7)	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR3/3 (内)5YR4/6	(外)暗褐 (内)赤褐	○	○	-	◎	○	-	202 他		
389	D-19 E-19	SH4	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ	(外)5YR6/6 (内)5YR5/4	(外)橙 (内)にぶい赤褐	○	○	-	◎	○	-	17	スス付着		
390	E-19	SH4	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)ケズリ, ミガキ, 工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR3/2 (内)2.5Y4/1	(外)黒褐 (内)黄灰	○	△	-	-	○	-	85			
87	391	E-19	SH4	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ	(外)10YR6/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい褐	○	○	-	△	-	-	2		
	392	E-19	SH4	鉢	東原	(29.9)	10.3	27.9	(外)工具ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ミガキ, ケズリ	(外)7.5YR5/3 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい橙	○	○	-	○	○	-	155 他	完形, 外面スス付着	
	393	E-19	SH4	鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR7/6	(外)にぶい橙 (内)橙	△	-	-	-	◎	-	163	外面スス付着	
	394	E-19	SH4	壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)ナデ, 指オサエ	(外)10YR7/4 (内)7.5YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい橙	○	○	-	△	○	-	有	161	
	395	E-19 E-20	SH4	壺	東原	-	-	-	(外)ミガキ, 工具ナデ (内)ケズリ, 工具ナデ, ミガキ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/6	(外)にぶい橙 (内)橙	○	○	-	○	-	-	有	144 他	
	396	E-19	SH4	壺	東原	-	5.8	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)10YR5/4 (内)10YR6/3	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	○	○	○	△	○	-	-	168 他	
	397	D-19	SH4	高坏	東原	19.5	-	(6.4)	(外)ハケメ, 工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR5/6 (内)10YR6/6	(外)明赤褐 (内)明黄橙	○	○	-	△	○	-	有	129	
	398	E-19	SH4	高坏	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR4/1 (内)7.5YR3/1	(外)褐灰 (内)黒褐	○	△	-	○	-	-	-	一括	内外面黒色
88	399	D-19	SH4	高坏	東原	3.8	-	-	(外)ハケメ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)10YR8/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	○	○	△	-	-	-	41	外面丹塗	
	400	E-19	SH4	高坏	東原	-	-	-	(外)ナデ, ミガキ (内)ナデ, ミガキ	(外)7.5YR7/4 (内)7.5YR7/6	(外)にぶい橙 (内)橙	○	○	○	△	-	-	13	外面に暗文様ミガキを 施す, 胎土精良	
	401	E-19	SH4	高坏	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)5YR5/6	(外)にぶい黄橙 (内)明赤褐	○	○	-	○	△	-	有	14	内面丹塗?
	402	E-19	SH4	高坏	東原	-	-	-	(外)ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR3/3 (内)10YR3/3	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	○	○	-	◎	◎	-	-	173	外面スス付着
	403	D-19	SH4	高坏	東原	-	-	(6.6)	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)ハケメ	(外)10YR6/3 (内)5YR5/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい赤褐	○	△	-	-	◎	-	-	128	
	404	E-19	SH4	小型丸底壺か鉢	東原	6.4	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)2.5Y7/4 (内)2.5Y8/4	(外)浅黄 (内)淡黄	○	-	-	○	-	-	-	25	口縁部外面に沈線巡る 搬入品か
	405	E-19	SH4	小型丸底壺か鉢	東原	6.8	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)ナデ	(外)10YR7/6 (内)10YR6/6	(外)明黄褐 (内)明黄褐	○	-	-	-	-	-	-	一括	石英の粒子大きい
	406	E-19	SH4	小型丸底壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)2.5Y6/4 (内)7.5YR7/4	(外)にぶい黄 (内)にぶい橙	○	△	-	-	-	-	-	24	
	407	E-19	SH4	小型丸底壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)5YR5/6	(外)にぶい褐 (内)明赤褐	○	○	△	◎	-	-	有	18 他	
	408	E-19	SH4	小型丸底壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, ミガキ	(外)10YR6/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい褐	○	○	-	○	-	-	-	47	外面被熱の痕跡有
	409	D-19	SH4	ミニチュア鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)指オサエ, ナデ, 指オサエ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/3	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	△	△	-	-	◎	-	-	94	
	410	E-19	SH4	鉢	東原	-	4.6	(4.4)	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)2.5Y5/4 (内)5YR4/6	(外)黄褐 (内)赤褐	○	○	-	-	◎	-	-	196	内面丹塗
	89	413		SK1	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR4/4 (内)5YR6/4	(外)褐 (内)にぶい橙	○	○	-	-	◎	-	-	土坑 1-1 他
	91	414	土集1	DKS1	布留式模倣甕	東原	16.8	-	-	(外)ハケメ, ナデ (内)ハケメ, 指オサエ, ケズリ	(外)5YR5/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい褐	○	△	-	△	○	-	有	土集 1-4 他
		415	C-24 他	DKS1	布留式模倣甕?	東原	18.0	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ, 指オサエ, ケズリ	(外)7.5YR4/6 (内)5YR5/6	(外)褐 (内)明赤褐	◎	○	△	-	○	-	-	土集 1-2 他
416		C-24 他	DKS1	布留式模倣甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ, ケズリ	(外)7.5YR4/4 (内)7.5YR3/1	(外)褐 (内)黒褐	○	△	-	△	○	-	-	土集 1-25 他	
417		C-24	DKS1	甕	東原	-	9.8	-	(外)ハケメ, ナデ (内)ハケメ, ナデ	(外)7.5YR5/6 (内)5YR4/6	(外)明褐 (内)赤褐	○	-	-	-	○	-	-	カクツ	
418		C-23	DKS1	壺か甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)マメツ	(外)2.5YR6/4 (内)5YR6/6	(外)にぶい黄 (内)橙	○	○	-	△	○	-	-	カクツ	
419	C-24	DKS1	高坏	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)ハケメ, 工具ナデ, ナデ, ミガキ	(外)2.5YR4/4 (内)2.5YR4/6	(外)赤褐 (内)赤褐	△	△	-	△	◎	-	有	土集 1-13 他	外面スス付着	

第15表 萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(4)

挿入 番号	掲載 番号	出土 地点	遺構 名称・層	器種	型式・ 時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調1	色調2	胎土1					タタキの有 無	取上 番号	備考	
												石 灰 長 石	雲 母・ 輝 石	角 閃 石	赤 褐色 色 粒	礫				その他
91	420	C-24	DKS1	高坏	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)5YR5/8 (内)5YR5/8	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	△	-	△	-	有	カクン	鮮やかな橙色を呈する, 胎土精良,搬入品か	
	421	C-24 他	DKS1	蓋	東原	-	26.9	-	(外)ハケメ,ナデ, ミガキ (内)ハケメ,ナデ, ミガキ	(外)5YR5/6 (内)2.5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	△	△	-	-	土集 1-5		
94	424	C-19	硬化面1	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)2.5YR5/8 (内)2.5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	-	-	◎	○	-	3890		
	425	C-19	道あと	坏	東原	19.0	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)7.5YR5/6 (内)7.5YR6/6	(外)明褐 (内)橙	○	△	-	-	△	有	3887	外面丹塗り	
96	426	E-6 他	表土	甕	東原	30.4	-	(17.9)	(外)工具ナデ,ミガキ (内)工具ナデ,ミガキ	(外)7.5YR6/4 (内)10YR5/3	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄褐	○	○	◎	○	-	-	一括		
	427	C-20 他	Ⅲa	甕	東原	-	3.0	(14.3)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)2.5YR5/8 (内)5YR6/6	(外)明赤褐 (内)橙	○	○	-	-	-	-	7333 他		
	428	E-6 E-7	Ⅲa	甕	東原	30.0	-	(13.0)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)2.5YR4/4 (内)7.5YR5/6	(外)にぶい赤褐 (内)明褐	○	○	-	○	○	-	5062		
	429	23T	Ⅲ	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR5/6 (内)7.5YR7/6	(外)明赤褐 (内)橙	○	○	-	◎	○	-	1580		
	430	D-20 D-21	-	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR5/4 (内)5YR6/4	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい橙	○	○	-	△	○	-	-	一括	
97	431	B-7	Ⅲ	甕	東原	27.4	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)7.5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	-	○	○	-	928 他		
	432	E-21	Ⅲa Ⅲb	甕	東原	33.3	-	(11.0)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR6/6 (内)5YR5/4	(外)橙 (内)にぶい赤褐	○	○	-	◎	-	-	7365		
	433	B-18	V	甕	東原	31.0	-	(12.9)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR6/6 (内)5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	-	◎	○	-	3876		
	434	E-7	Ⅲa	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	○	○	○	○	-	5061		
	435	E-21	Ⅲa	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR6/6 (内)5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	-	◎	○	-	7354		
	436	E-7 他	表土	甕か壺	東原 辻堂 原式	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)ケズリ,ナデ	(外)5YR5/4 (内)5YR5/4	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい赤褐	○	○	△	○	○	-	-	一括	
	437	5T	Ⅱ	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)5YR6/6 (内)5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	○	○	○	-	171 他		
	438	11T	Ⅱ	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)10YR8/4 (内)10YR8/4	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	○	○	◎	○	○	-	512 他	茶褐色の小礫が混じる 宮崎平野からの搬入か	
	439	C-20	Ⅳ	甕	東原	33.2	-	(12.8)	(外)ハケメ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)2.5YR5/6 (内)5YR5/8	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	◎	○	-	-	3639		
98	440	C-25 他	表土	甕	東原	13.0	-	(5.4)	(外)ハケメ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	○	△	○	-	一括	小型	
	441	E-21	Ⅲb	甕?	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)ナデ	(外)5YR4/4 (内)5YR5/4	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい赤褐	○	○	-	△	-	-	一括	外面丹塗り	
	442	21T	Ⅲ	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)5YR5/6 (内)7.5YR6/3	(外)明赤褐 (内)にぶい褐	○	○	◎	○	-	1391			
	443	D-12	Ⅱ	布留式 模倣甕?	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/6	(外)にぶい橙 (内)橙	○	○	○	○	○	-	108		
	444	D-17	V	甕	東原	-	-	(14.0)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ, ケズリ	(外)5YR5/8 (内)2.5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	-	○	○	-	2418	胴部に線刻の可能性有	
	445	C-12	Ⅲ	甕?	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)工具ナデ,ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	△	△	-	-	364		
	446	F-7	表土	甕?	東原	-	-	-	(外)ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	○	-	-	-	-	一括	外面に粗い櫛状の 刷毛を押し引く	
	447	D-25 D-26	表土	甕か高坏	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ,ナデ	(外)2.5YR5/6 (内)2.5YR4/6	(外)明赤褐 (内)赤褐	○	○	○	○	○	-	一括		
	448	C-21	Ⅲa	甕?	東原	-	-	-	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)5YR6/6 (内)7.5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	○	△	-	-	4341		
	449	C-20	Ⅳ	甕か高坏	東原	(22.0)	-	(5.3)	(外)ハケメ (内)ハケメ	(外)10YR4/2 (内)10YR3/4	(外)灰黄褐 (内)暗褐	○	○	-	◎	-	-	3638		
	450	D-20 他	Ⅲb	甕?	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ, ケズリ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR7/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	○	△	○	○	-	一括		
99	451	D-23	表土	甕か鉢	東原	-	-	-	(外)ハケメ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ, 指オサエ	(外)5YR5/6 (内)10YR6/4	(外)明赤褐 (内)にぶい黄橙	○	○	△	-	○	-	一括	外面丹塗り 外面に粗い櫛状の 刷毛目を施す	
	452	D-11	Ⅲb	布留式 模倣甕?	古墳 時代 前期	-	-	-	(外)ハケメ (内)ケズリ	(外)7.5YR6/4 (内)5YR6/6	(外)にぶい橙 (内)橙	◎	◎	◎	◎	◎	-	353	布留式模倣甕の可能性有, 搬入品	
	453	C-19?	Ⅲa	甕	笹貫	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR6/6 (内)5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	△	-	○	-	火山ガラス	3752		
	454	C-20	-	甕	笹貫	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい褐	○	○	-	-	-	火山ガラス	一括		
	455	B-19 11T	Ⅲ	甕	笹貫	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ, ケズリ	(外)5YR5/6 (内)5YR4/6	(外)明赤褐 (内)赤褐	◎	○	○	△	-	-	一括		
	456	C-20	表土	甕	笹貫	21.0	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい褐	○	○	△	○	-	火山ガラス	一括		
	457	E-20	Ⅲa Ⅲb	甕	笹貫	23.5	-	(12.2)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)10YR5/4 (内)2.5YR3/6	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄	○	○	△	-	○	-	7440 他		
	458	C-21 D-21	表土	甕	-	-	8.8	(11.3)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR6/6 (内)2.5YR5/6	(外)橙 (内)明赤褐	○	○	△	○	○	-	一括		
	459	-	-	甕	-	-	10.2	(8.7)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ, 指オサエ	(外)2.5YR5/6 (内)2.5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	-	-	○	-	一括		
	460	D-19	Ⅲb	甕か鉢	-	-	5.8	(7.8)	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ, ケズリ	(外)7.5YR6/4 (内)5YR4/6	(外)にぶい橙 (内)赤褐	○	○	-	-	-	-	7677		
	100	461	-	I	甕	-	-	10.5	-	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	-	-	○	-	一括	
462		9T	Ⅱ	甕	-	-	9.0	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ, 指オサエ	(外)7.5YR6/4 (内)5YR5/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい赤褐	○	○	○	△	○	-	245		
463		D-9 D-10	表土	甕か鉢	-	-	8.4	(3.1)	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	○	○	○	△	-	-	一括	脚部外面に刻目突帯を 巡らせる	
464		C-20	-	甕	-	-	10.6	(7.5)	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)7.5YR6/3 (内)7.5YR6/6	(外)にぶい褐 (内)橙	○	○	△	△	-	白雲母	一括	脚天井部に突起有	
465		C-20	表土	甕	-	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)マメツ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/4	(外)明赤褐 (内)にぶい赤褐	○	○	○	○	-	-	一括	底面の中央部分のみ残存, 脚天井部に突起有	

第16表 萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(5)

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構名・層	器種	型式・時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調1	色調2	胎土1					タタキの有無	取上番号	備考	
												石英・長石	雲母・輝石	角閃石	赤褐色粒	礫				その他
100	466	-	表土	甕	-	-	-	-	(外)ナデ (内)ナデ	(外)10YR7/4 (内)10YR6/3	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	△	○	-	一括	底面の中央部分のみ残存、 脚天井部に突帯を「ノ」の字状に施す		
	467	-	表土	甕	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ナデ (内)工具ナデ、ナデ	(外)10YR5/4 (内)7.5YR5/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄	○	○	△	△	-	一括	脚天井部に突帯を十字 状に施す。胎土きめ細かい		
	468	8T	II	-	-	-	-	-	(外)ナデ (内)-	(外)10YR6/4 (内)10YR5/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄褐	○	○	◎	△	-	322	脚天井部あるいは高杯等 の杯部上面への装飾か		
101	469	9T	II	壺	-	8.0	-	(6.0)	(外)工具ナデ、ナデ、 ミガキ (内)ハクメ、ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)7.5YR5/6	(外)橙 (内)明褐	○	○	○	△	-	一括	外面スス付着		
	470	E-20	IIIb	壺	-	11.6	-	(4.7)	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)5YR5/4 (内)5YR4/4	(外)にぶい赤褐 (内)にぶい赤褐	○	△	-	△	○	一括			
	471	B-24	表土	壺	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ、ナデ、 ミガキ	(外)2.5YR4/8 (内)10YR6/3	(外)赤褐 (内)にぶい黄橙	○	△	△	-	-	一括	外面と内面、口縁端部際 に赤色顔料付着		
	472	E-19	-	壺	古墳 前期	-	-	-	-	(外)ハクメ、ナデ (内)ハクメ、ナデ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR3/1	(外)にぶい褐 (内)黒褐	○	○	-	△	-	一括	二重口縁 口縁屈曲部以上に櫛書 きの波状文を巡らせる 内面黒色 搬入品	
	473	E-20	II	壺	-	-	-	(5.5)	(外)工具ナデ、ナデ (内)ケズリ、指オサエ	(外)10YR7/4 (内)10YR6/3	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	◎	◎	◎	◎	◎	-	7196	搬入品	
	474	18T	II	壺	東原	-	-	-	-	(外)ハクメ、工具ナデ、 ナデ (内)工具ナデ、ナデ	(外)10YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい橙	○	◎	◎	○	-	-	1056	
	475	D-19	IIIb	壺	東原	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ナデ (内)ナデ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	○	◎	◎	-	8276	
	476	7T	II	壺	古墳 前期	-	-	(10.3)	-	(外)ハクメ、ナデ (内)ハクメ、ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/3	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	△	-	○	-	一括	金雲母が 混じる	
	477	E-20	IIIb	壺	東原	-	-	-	-	(外)ハクメ、ナデ (内)ハクメ、ナデ	(外)7.5YR4/6 (内)5YR4/4	(外)褐 (内)にぶい赤褐	○	○	-	△	◎	-	8304	
	478	8T	II	壺	-	-	6.0	-	-	(外)ハクメ、工具ナデ、 ミガキ (内)ナデ、ケズリ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR5/3	(外)にぶい橙 (内)にぶい褐	△	△	-	△	○	一括		
	479	D-21	-	壺	-	-	-	(6.9)	-	(外)工具ナデ、ナデ (内)工具ナデ、ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	△	○	○	-	一括	カクシ 一括
	480	D-21	-	壺	-	-	-	(12.2)	-	(外)工具ナデ、ナデ (内)工具ナデ、ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)5YR5/8	(外)にぶい橙 (内)明赤褐	◎	○	-	○	◎	-	一括	内面赤色
481	17T 18T	II	壺	-	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ナデ、 ミガキ (内)工具ナデ、ケズリ、 ナデ	(外)10YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい橙	○	○	-	△	-	有	435	胎土比較的精良	
482	C-24 C-25	表土	壺?	-	-	-	-	-	(外)ナデ (内)ミガキ、ナデ、 ケズリ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	○	-	○	○	-	一括	口唇部に櫛書きの 波状文を施す	
483	E-20	IIIb	壺?	-	-	-	-	-	(外)ハクメ、ナデ (内)ハクメ、ナデ	(外)5YR6/6 (内)5YR5/6	(外)橙 (内)明赤褐	△	△	-	△	-	-	7653	外面に沈線文+棒状工 具による刺突文有 二重口縁部か 高杯の可能性有	
102	484	C-16	-	坏	-	23.8	-	(7.5)	(外)ハクメ、ミガキ、 ナデ (内)工具ナデ、ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)5YR5/6	(外)橙 (内)明赤褐	△	△	-	-	-	-	一括	胎土精良、外面丹塗り	
	485	14T	III	坏	-	22.0	-	(4.6)	(外)ミガキ、ナデ (内)ミガキ、ナデ	(外)5YR5/6 (内)7.5YR5/4	(外)明赤褐 (内)にぶい褐	○	○	△	△	-	-	787	外面赤色	
	486	14T	III	坏	-	17.5	-	(3.8)	(外)ミガキ (内)工具ナデ、ミガキ、 ナデ	(外)2.5YR4/6 (内)5YR5/4	(外)赤褐 (内)にぶい赤褐	○	○	-	△	△	-	一括	外面丹塗り	
	487	E-20	-	坏	-	4.5	-	(3.4)	(外)ハクメ (内)ハクメ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	△	△	-	△	△	-	一括	内外面丹塗り	
	488	D-18 D-19	-	坏	-	-	-	-	(外)ハクメ、ナデ (内)工具ナデ、ミガキ、 ナデ	(外)10YR7/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	-	△	-	-	一括	カクシ 一括	
	489	C-13	II	坏	-	8.7	-	(1.9)	(外)ミガキ (内)ナデ	(外)10YR7/4 (内)10YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	△	△	-	-	-	-	86	胎土精良	
	490	18T	I	坏	-	6.8	-	(2.8)	(外)ミガキ、ナデ (内)工具ナデ、ナデ	(外)10YR7/4 (内)7.5YR7/6	(外)にぶい黄橙 (内)橙	△	△	-	-	-	-	一括	外面丹塗り	
	491	D-20	-	鉢	-	4.3	-	(5.0)	(外)ハクメ、工具ナデ、 指オサエ、ナデ (内)工具ナデ、ミガキ、 ケズリ、ナデ	(外)10YR7/4 (内)10YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	◎	△	◎	△	-	-	一括		
	103	492	14T	II	高杯	-	16.0	-	(4.3)	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)5YR4/6 (内)7.5YR6/6	(外)赤褐 (内)橙	○	△	△	-	-	-	769	
493		D-26	-	高杯	-	16.6	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)5YR5/6 (内)7.5YR6/6	(外)明赤褐 (内)橙	○	○	△	○	-	-	一括	口縁端部にスス付着	
494		11T	II	高杯	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)5YR5/8 (内)5YR6/6	(外)明赤褐 (内)橙	△	△	-	-	-	-	一括	明るい橙色の胎土、 搬入品か	
495		C-20 11T	II	高杯	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ミガキ (内)工具ナデ、ミガキ	(外)5YR5/8 (内)5YR6/6	(外)明赤褐 (内)橙	△	△	-	-	-	-	4222	明るい橙色の胎土、 搬入品か	
496		E-24	表土	高杯	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ミガキ (内)工具ナデ、ミガキ	(外)2.5YR5/6 (内)2.5YR5/8	(外)明赤褐 (内)明赤褐	△	△	-	-	-	-	一括	明るい橙色の胎土、 搬入品か	
497		20T	III	高杯	-	14.0	-	(1.7)	(外)ミガキ (内)ケズリ、工具ナデ、 ナデ	(外)5YR5/6 (内)7.5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明褐	○	○	○	△	-	-	1108		
498		E-8 他	-	高杯	-	13.3	-	(2.7)	(外)工具ナデ、ナデ (内)工具ナデ、ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)5YR7/6	(外)橙 (内)橙	○	△	-	○	○	-	一括	外面丹塗り	
499		D-22 他	表土	高杯	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ナデ (内)工具ナデ、ナデ、 ミガキ	(外)7.5YR7/6 (内)10YR7/4	(外)橙 (内)にぶい黄橙	○	○	○	-	-	-	一括	胎土精良	
500		-	-	高杯	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ、ナデ、 ミガキ	(外)5YR5/6 (内)10YR6/3	(外)明赤褐 (内)にぶい黄橙	◎	○	-	-	○	-	一括	外面丹塗り	
501		E-21	IIIa	高杯	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ナデ (内)ハクメ、ミガキ、 ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	◎	◎	○	○	○	-	-	7394	
502		C-16	-	高杯	東原	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ミガキ (内)ケズリ、ナデ	(外)5YR4/6 (内)2.5Y5/3	(外)赤褐 (内)黄褐	△	○	-	△	△	-	一括	外面丹塗り
503		E-21	IIIb	高杯	東原	-	-	-	-	(外)ハクメ、ミガキ、 ナデ (内)ケズリ、ナデ	(外)7.5YR7/4 (内)7.5YR7/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	○	○	-	-	-	7588	胎土精良
504		B-15	-	高杯	-	-	-	-	-	(外)工具ナデ、ミガキ (内)工具ナデ、ナデ	(外)5YR4/6 (内)10YR3/1	(外)赤褐 (内)黒褐	○	○	-	-	◎	-	一括	外面丹塗り
505	C-21	-	高杯	東原	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)ハクメ、ナデ	(外)5YR5/6 (内)10YR7/6	(外)明赤褐 (内)明黄褐	◎	◎	◎	◎	◎	-	一括	外面丹塗り、搬入品か	

第17表 萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(6)

挿入番号	掲載番号	出土地点	遺構名・層	器種	型式・時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調1	色調2	胎土1					タタキの有無	取上番号	備考		
												石 灰 長 石	雲 母 ・ 輝 石	角 閃 石	赤 褐色 粒	矽				その他	
103	506	C-18	-	高坏	-	-	-	-	(外)ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR4/8 (内)2.5YR5/6	(外)赤褐 (内)明赤褐	○	○	-	◎	○	-	カケン 一括	外面丹塗り		
	507	7T 他	II	高坏	-	-	9.4	(4.7)	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ (内)ケズリ, ミガキ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にふい橙 (内)にふい橙	○	○	-	◎	-	-	一括			
	508	D-18 他	II IIIb	高坏	-	-	-	-	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ, 指オサエ	(外)5YR5/8 (内)5YR6/6	(外)明赤褐 (内)橙	○	○	△	-	○	-	7257	外面丹塗り, 外面スス付着		
	509	-	-	器台?	古墳 前期?	7.6	-	-	(4.3)	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ミガキ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)10YR6/8	(外)にふい橙 (内)にふい黄橙	○	○	△	◎	-	-	一括	胎土精良 屈曲部外面に刻目突帯 を巡らせる	
	510	-	-	高坏	-	-	12.4	(7.9)	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)7.5YR7/4	(外)橙 (内)にふい橙	○	○	-	△	◎	-	一括	穿孔2ヵ所所有 外面丹塗り 内外面微量にスス付着		
511	E-21	-	高坏	-	-	12.0	-	-	(外)ハケメ, ナデ (内)ハケメ, ナデ	(外)2.5YR5/6 (内)2.5YR5/8	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	△	-	△	○	-	7807	外面丹塗り		
104	512	D-21	-	小型 丸底壺	-	-	-	(7.0)	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ミガキ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/3	(外)にふい黄橙 (内)にふい黄橙	○	○	-	△	△	-	カケン 一括			
	513	E-20	IIIb	小型 丸底壺	-	-	-	(6.5)	(外)ハケメ, ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にふい橙 (内)にふい橙	○	△	-	○	○	-	7898	煮炊きにも使用カ スス付着		
	514	C-21	IIIb	小型 丸底壺	東原	-	-	-	-	(外)ハケメ, ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR7/4	(外)にふい黄橙 (内)にふい黄橙	○	○	△	△	△	-	3663		
	515	D-22 他	II III a, b	小型 丸底壺	東原	-	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)5YR5/8	(外)橙 (内)橙	○	○	△	△	△	有	7325 他		
	516	7T	I	小型 丸底壺	東原	6.6	-	5.7	-	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR6/6 (内)10YR6/4	(外)橙 (内)にふい黄橙	○	○	△	△	-	-	一括	底面に突起を有する 混和材の粒子がきめ細 かい	
	517	C-20 他	表土	小型 丸底壺	東原	6.7	-	4.8	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)5YR6/8 (内)5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	○	-	-	-	3640	混和材の粒子が きめ細かい	
	518	1T	I	小型 丸底壺	東原	-	-	-	-	(外)工具ナデ, ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR5/3 (内)7.5YR5/4	(外)にふい褐 (内)にふい褐	○	△	◎	△	-	-	一括		
	519	E-20	-	小型 丸底壺	東原	-	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/8	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	-	-	△	-	一括		
	520	E-21	IIIa	小型 丸底壺	笹貫	-	-	(3.6)	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)2.5YR4/4 (内)7.5YR2/1	(外)にふい赤褐 (内)黒	○	○	-	○	○	-	一括	外面黒色, 胎土粗い	
	521	D-21	-	小型 丸底壺	東原	6.2	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)7.5YR7/6 (内)10YR7/6	(外)橙 (内)明黄褐	-	△	-	△	-	有	カケン 一括	胎土精良, スス付着 搬入品の可能性有	
	522	E-20	IIIb	小型 丸底壺	東原	9.0	-	(5.0)	-	(外・内)工具ナデ, ナデ, ミガキ, ハケメ	(外)10YR8/4 (内)2.5Y7/3	(外)浅黄橙 (内)浅黄	△	△	△	-	-	-	-		口縁部端部に沈澱を 巡らせる, 胎土精良
	523	8T	III	小型 丸底壺	東原	-	-	(4.1)	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR5/6	(外)にふい橙 (内)明褐	○	○	△	△	-	-	317	底面に突起を有する	
	524	7T	I	小型 丸底壺	東原	-	-	(4.4)	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)5YR6/6 (内)5YR5/8	(外)橙 (内)明赤褐	◎	○	△	△	△	-	一括	底面に突起を有する	
	525	-	-	小型 丸底壺	東原	-	1.2	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)10YR5/3 (内)10YR5/2	(外)灰黄褐 (内)にふい黄褐	○	△	△	-	-	-	一括	底面に突起を有する 被熱の痕跡著しい	
	526	17T	-	小型 丸底壺?	東原	-	-	-	-	(外)工具ナデ, ミガキ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR5/4 (内)7.5YR5/4	(外)にふい赤褐 (内)にふい褐	○	○	△	△	-	-	一括	底面に突起を有する	
	527	9T	III	ミニチュア 小型丸底壺	東原	-	-	(3.2)	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)5YR4/6 (内)5YR5/6	(外)赤褐 (内)明赤褐	◎	△	-	◎	○	-	一括		
	528	-	IIIb	ミニチュア 小型丸底壺	東原	-	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)ケズリ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)2.5Y6/4	(外)にふい黄橙 (内)にふい黄	○	○	△	-	-	-	一括	胎土精良	
	529	13T	II III	ミニチュア 鉢	-	-	2.2	(1.6)	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)2.5Y5/4 (内)2.5Y5/4	(外)黄褐 (内)黄褐	○	○	△	-	-	-	一括	胎土精良	
	530	9T	-	ミニチュア 坏	-	-	-	-	-	(外)ミガキ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)2.5Y6/2	(外)にふい橙 (内)灰黄	○	△	-	△	△	-	一括	外面赤色を呈する	
	531	E-25 E-26	表土	ミニチュア 高坏?	-	-	3.6	-	-	(外)ハケメ, ナデ (内)ナデ	(外)10YR8/4 (内)10YR7/3	(外)浅黄橙 (内)にふい黄橙	○	○	△	△	-	-	一括	赤色顔料付着, 胎土精良	
	532	E-21	IIIb	ミニチュア 鉢	東原	5.6	0.6	4.5	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)7.5YR5/6	(外)橙 (内)明褐	○	○	-	△	-	-	8279	スス付着	
	533	D-24 他	-	ミニチュア 鉢	東原	4.3	-	4.7	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR6/6 (内)5YR6/6	(外)橙 (内)橙	○	○	-	△	-	-	一括		
	534	E-21	IIIb	ミニチュア 鉢	東原	-	1.2	(2.0)	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)指オサエ	(外)10YR5/4 (内)5YR4/4	(外)にふい黄褐 (内)にふい赤褐	△	△	-	△	◎	-	一括	内面赤色を呈する	
535	E-21	IIIb	ミニチュア 鉢?	東原	-	0.6	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR5/4	(外)にふい褐 (内)にふい褐	○	△	-	◎	◎	-	一括	底面に突起を有する		
536	-	表土	ミニチュア 鉢	東原	2.5	(0.5)	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/4	(外)にふい橙 (内)にふい橙	○	△	-	△	-	-	一括	胎土精良, 本遺跡出土 ミニチュア坏中最小		
105	537	24T	III	土鈴	-	最大長 5.3	最大幅 (4.1)	-	(外)ハケメ, ナデ, 指オサエ (内)工具ナデ, 指オサエ	(外)2.5YR5/4 (内)10YR6/4	(外)にふい赤褐 (内)にふい黄橙	○	△	-	○	-	-	1603	桃核状の形状で半分が 残存, 外面に赤色顔料付着, 胎 土精良, 搬入品の可能性が高い		
	538	24T	III	指サック状 土製品	-	2.1	1.0	4.7	(外)工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内)ナデ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○	-	-	-	-	1603	外面に2ヵ所の孔を 呈する底面に赤色顔料 が付着する可能性有		
	539	D-25	表土	土製匙?	-	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)ユビオサエ	(外)5YR5/6 (内)5YR6/6	(外)明赤褐 (内)橙	○	◎	-	△	△	-	一括			
	540	D-18 他	IIIb	円盤状 土製品	-	-	-	-	(外)工具ナデ (内)マメツ	(外)2.5YR5/6 (内)10YR6/3	(外)明赤褐 (内)にふい黄橙	○	△	-	△	◎	-	一括	外面丹塗りカ		

第18表 萩ヶ峰遺跡 古墳時代出土土器観察表(7)

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構名・層	器種	型式・時代	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調1	色調2	胎土1					タタキの有無	取上番号	備考		
												石英・長石	雲母・輝石	角閃石	赤褐色粒	礫				その他	
105	541	E-21	IIIb	輪の羽口	-	7.6	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ, 指オサエ (内) 工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外) 5YR6/4 (内) 5YR5/4	(外) にぶい橙 (内) にぶい赤褐	◎	○	△	-	◎	-	7555	鉄付着		
106	542	D-10	III	須恵器蓋	5C後半	-	13.0	-	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 5Y6/2 (内) 5Y6/2	(外) 灰オリーブ (内) 灰オリーブ	△	△	-	-	-	-	5003			
	543	-	-	須恵器蓋	5C後半	-	-	-	(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	(外) 7. 5Y4/1 (内) 7. 5Y4/1	(外) 灰 (内) 灰	△	△	-	-	-	白い円礫 極少量混じる	-	一括		
	544	-	表土	須恵器甕	5C以降	-	-	-	(外) 格子目状タタキ (内) 同心円状タタキ	(外) 7. 5Y5/1 (内) 5Y5/1	(外) 灰 (内) 灰	△	△	-	-	-	-	有	一括		
107	545	-	-	-	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 2. 5YR5/6 (内) 5YR6/6	(外) 明赤褐 (内) 橙	○	○	-	-	○	-	一括	沈線文を有する		
	546	-	-	-	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 5YR3/3 (内) 5YR5/6	(外) 明赤褐 (内) 明赤褐	○	△	-	△	◎	-	一括	内面に2条の沈線を巡らせる, スス付着		
	547	E-19	IIIb	-	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 5YR3/1 (内) 5YR5/4	(外) 黒褐 (内) にぶい赤褐	○	○	-	△	◎	-	8153	外面に線刻の可能性有		
	548	D-26	II	高坏?	-	-	-	-	(外) ナデ (内) ハクメ, ミガキ	(外) 10YR7/3 (内) 10YR7/4	(外) にぶい黄橙 (内) にぶい黄橙	○	◎	○	△	○	-	-	3427	杯部上面に暗文様のミガキを施す	
	549	D-20	-	-	-	-	-	-	(外) ハクメ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 7. 5YR5/4 (内) 7. 5YR6/4	(外) にぶい褐 (内) にぶい橙	○	△	-	-	◎	-	-	一括	外面に多重の細沈線文を施す, 外面スス付着	
	550	1T	表土	-	-	-	-	-	(外) ハクメ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 5YR5/4 (内) 5YR6/4	(外) にぶい赤褐 (内) にぶい橙	○	○	△	△	-	-	-	一括	外面に暗文様のミガキを施す	
	551	D-24他	-	-	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 10YR6/3 (内) 7. 5YR5/6	(外) にぶい黄橙 (内) 明褐	○	○	-	△	△	-	-	-	内面に三条の沈線を巡らせる 外面に太幅の沈線を巡らせる, 外面黒色	
	552	C-5	IIIb	-	-	-	-	-	(外) ミガキ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外) 10YR1/3 (内) 5YR5/4	(外) 黒褐 (内) にぶい赤褐	○	-	-	-	-	-	金雲母の微粒を多く含む	-	3151	外面に多重の細沈線によって文様を描く, 外面黒色
	553	C-5	III	-	-	-	-	-	(外) ミガキ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外) 10YR5/2 (内) 5YR5/4	(外) 灰黄褐 (内) にぶい赤褐	○	-	-	-	-	-	金雲母の微粒を多く含む	-	2237	外面に多重の沈線によって文様を描く, 外面黒色
	554	C-25他	-	-	-	-	-	-	(外) ナデ, ミガキ (内) 工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外) 2. 5Y7/3 (内) 2. 5Y7/1	(外) 浅黄 (内) 灰白	◎	△	-	-	-	-	-	一括	外面に線刻有	
	555	-	-	-	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ, ミガキ (内) 工具ナデ, ナデ, ミガキ	(外) 7. 5YR3/1 (内) 7. 5YR3/1	(外) 黒褐 (内) 黒褐	○	-	-	-	-	-	-	一括	外面に粗い沈線文有 沈線間に赤色顔料付着 外面黒色	
	556	B-21	-	-	-	-	-	-	(外) ナデ (内) ナデ	(外) 7. 5YR5/4 (内) 7. 5YR5/4	(外) にぶい褐 (内) にぶい褐	◎	◎	◎	◎	◎	-	-	一括	外面に沈線を巡らせる?	
	557	C-5	IIIa	-	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外) 5YR5/6 (内) 5YR4/8	(外) 明赤褐 (内) 赤褐	◎	◎	○	○	○	-	火山ガラス含む	-	3326	外面に細沈線を巡らせ, 櫛状の工具による掻き上げを施す
	558	C-6他	IIIa IIIb	深鉢?	-	(50.0)	-	(12.5)	(外) 貝殻条痕 (内) 貝殻条痕, ナデ	(外) 5YR7/4 (内) 7. 5YR7/2	(外) にぶい橙 (内) 明褐灰	○	○	△	△	-	-	-	他	2318	縄文時代晩期の遺物の可能性もある
	559	C-16	IIIa	坏	-	21.3	-	(9.5)	(外) ハクメ, タタキ (内) ミガキ, ナデ, タタキ	(外) 7. 5YR6/6 (内) 10YR7/4	(外) 橙 (内) にぶい黄橙	○	△	△	-	-	-	赤色顔料の粒が大き	有	3304	口縁部外面にスス付着 内面上位にススと赤色顔料付着 縄文時代晩期の土器の可能性もあり
	560	7T	II	-	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ, ミガキ (内) マメツ	(外) 2. 5Y5/3 (内) 10YR6/4	(外) 黄褐 (内) にぶい黄橙	△	○	-	-	○	-	-	-	88	外面に細沈線を巡らせる
	561	C-21	IIIa	-	-	-	-	13.4	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) ナデ, 指オサエ	(外) 5YR6/4 (内) 5YR5/6	(外) にぶい橙 (内) 明赤褐	◎	○	◎	○	○	-	白色粒・火山ガラスを含む	-	4340
562	-	III	-	-	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) ナデ, 指オサエ	(外) 5YR4/6 (内) 5YR4/4	(外) 赤褐 (内) にぶい赤褐	◎	◎	◎	○	○	-	白色粒・火山ガラスを含む	-	863他	底面に網代痕有

第19表 萩ヶ峰遺跡 古墳時代遺構内出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	区	層	器種	分類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	石材分類	取上番号	備考
72	304	SH1	D-21	IIIb	磨敲石	-	59.40	26.30	20.10	45.99	ホルンフェルス	C	SH1-54	
	305		D-21	IIIb	台石	-	143.00	110.00	56.50	1100.00	安山岩	-	SH1-85	
73	306	SH1	-	埋土中	軽石製品	-	98.80	115.00	46.80	160.39	軽石	-	SH1-82	
	307		-	埋土中	軽石製品	-	121.00	106.50	48.00	161.70	軽石	-	SH1-83	
	308		D-21	IIIb	軽石製品	-	65.10	28.40	25.00	11.85	軽石	-	SH1-1053	
80	357	SH2	-	-	磨石	-	170.00	95.00	80.00	1900.00	ホルンフェルス	C	SH2-363	
81	358		11T	-	磨敲石	-	167.00	53.00	27.00	273.70	ホルンフェルス	C	SH2埋土	
	359	-	-	-	敲石	-	97.00	41.00	24.00	140.20	ホルンフェルス	C	SH2-364	
85	383	SH3	E-20	IIIb	剥片	-	52.50	68.50	16.00	54.00	安山岩	-	SH4-32	
	384		E-20	IIIb	その他	-	49.20	14.50	10.00	9.08	ホルンフェルス	B	SH4-90	
	385		E-20	IIIb	敲石	-	72.50	28.50	19.00	45.80	ホルンフェルス	C	SH4-53	
	386		E-20	IIIb	磨敲石	-	75.40	50.50	41.00	221.08	安山岩	-	SH4-65	
88	411	SH4	E-19	-	軽石製品	-	102.90	75.50	37.00	76.14	軽石	-	SH3-169	
	412		E-19	IIIb	原石	-	54.60	32.00	26.00	65.55	石英	-	SH3-84	
91	422	DKS2	C-24	I?	砥石	-	100.00	98.10	17.20	155.66	頁岩	-	DKS1-⑭	
	423		C-24	I?	砥石	-	114.80	54.20	34.70	344.13	頁岩	-	DKS1-①	

第6節 近世以降の調査

近世以降の遺物はⅢ層以上で散見され、表土で採集された遺物が多かった。小片が殆どであった。染付、薩摩焼（苗代川系、龍門司系）、用途不明の手びねりの土製品、葉莢、キセル、古銭等が出土した。薩摩焼は18世紀以降に該当する土瓶や壺、碗、摺鉢などの生活用具が多く、一部は光沢の強い施釉の特徴から明治期に入ってから生産されたことが考えられる。また、葉莢など第2次世界大戦に関連する遺物もみられる。

遺物（第108・109図）

（1）染付（563～566）

563～566は碗である。563・564は口縁部片で外反する器形である。胎土の色調はやや灰色を帯びる。563は口縁部内外面に1条の界線が引かれ内面には日月文あるいは唐草文が描かれる。釉調はやや青みがかり、文様を描く呉須の色調は淡い。564は明瞭な稜を形成して外反する。口縁端部に黒褐色の釉を施す。外面の胴部には界線が引かれ、界線上に唐草文が描かれる。内面は屈曲部より上位に帯状に呉須を施釉し、胴部との境目に界線を引き、その下に文様を描く。呉須の色調は明瞭である。565・566は胴部下半～高台の破片である。釉は青みがかり、呉須の色調は淡い。見込み内面に蛇の目状に釉剥ぎを施す。565は高台の断面形は丸みを帯びた三角形で、内面には2本の圈線を引き、唐草文を描く。566は高台の断面形は矩形で、高台の外面に2条の、腰部に1条の界線が引かれる。563～566は肥前系であると考えられる。

（2）陶磁器（567）

567は碗の胴部下半～高台の破片である。高台は約1.3cmの厚さで内外面から面取りを施し、畳付は山形に成形される。胎土の色調は灰色を呈し、混和材の粒子はごく細やかである。胎土の色調は緑がかかった灰色を呈する。畳付と高台裏は施釉されない。見込みは重ね焼きにより、目跡が残る。腰部には目の粗い刷毛による横ナデを施す。目跡となる窯道具の胎土には混和材が砂状に混じる。染付と同様に肥前系であると考えられる。

（3）薩摩焼（568～580）

568は碗の腰部～高台の破片である。極暗褐色の釉を施す。見込み部分には蛇の目状に釉剥ぎを施す。また高台には施釉しない。胎土は赤みが強く精良で、龍門司系であると考えられる。

569は短頸の壺の口縁部片である。黒褐色の釉を施す。口縁部内面に粗く釉剥ぎを施す。龍門司系と考えられる。

570～573は土瓶である。胎土の特徴から苗代川系であると考えられる。570・571は蓋の破片で、572は胴の口縁部片、573は底部片である。570は小型の蓋である。傘部外面の端部の縁に細い沈線を巡らせる。黒色の釉を施し、内面は施釉しない。571は大型の蓋で褐色の釉を

施す。傘部内面には施釉しない。上面には重ね焼きの際に用いた窯道具の融着の跡が輪状に付く。570は黒色の釉を施す。傘部との接地部分と内面上位に釉剥ぎを施す。573はやや上げ底である。内面にオリブ褐色の釉を施し、底面とその周囲には施釉しない。

574～577は摺鉢の口縁部～胴部片である。口縁部は「L」字状の形態である。口唇部分には釉剥ぎを施す。574は口唇部分がほぼ水平で、内面側に張り出す。内面の掻き目は口縁部近くまで密に規則的に施される。口縁部外面には浅い注ぎ口を形成する。黄白色の釉を施し、外面には粗い刷毛により横ナデを施す。胎土の色調は明るい橙色で、混和材が砂状に入る。575は口唇部分に丸みを帯びる。内面の掻き目はやや下がる位置までにとどまり、間隔もまばらである。576は口縁端部がやや下垂する。内面の掻き目は575と同様の位置までで数条のみが確認できる。577は口唇部が内傾し、内面側に丸く張り出す。内面の掻き目は574に類似する。苗代川系であると考えられる。

578・579は薄手の鉢である。578は胴部が丸みを帯びながらわずかに開き、579はやや内傾しながら直線的に立ち上がる。ともに接地面に外側からの面取りを施す。底面は幅の広い工具により薄く面取られ、中央部分が上げ底である。ともに同様の釉薬と胎土を使用する。胎土の色調は赤みが強い。外面には灰白色の釉を施す。底面と接地面直上の面取り部分は無釉である。龍門司系であると考えられる。

580は胴部片を円盤状に加工したもので、短軸を対角線に打ち搔く。元の器種や用途は不明である。

（4）土製品（581・582）

581は用途不明の手びねりの土製品である。582は陶錘である。最大長4.75cm、最大径3.6cm、孔径1.2cmを測り、重量は58.8グラムである。孔の周囲は平坦に成形される。ともに焼成が非常によく硬質であることからここに含めた。

（5）葉莢（583）、キセル（584）、古銭（585・586）

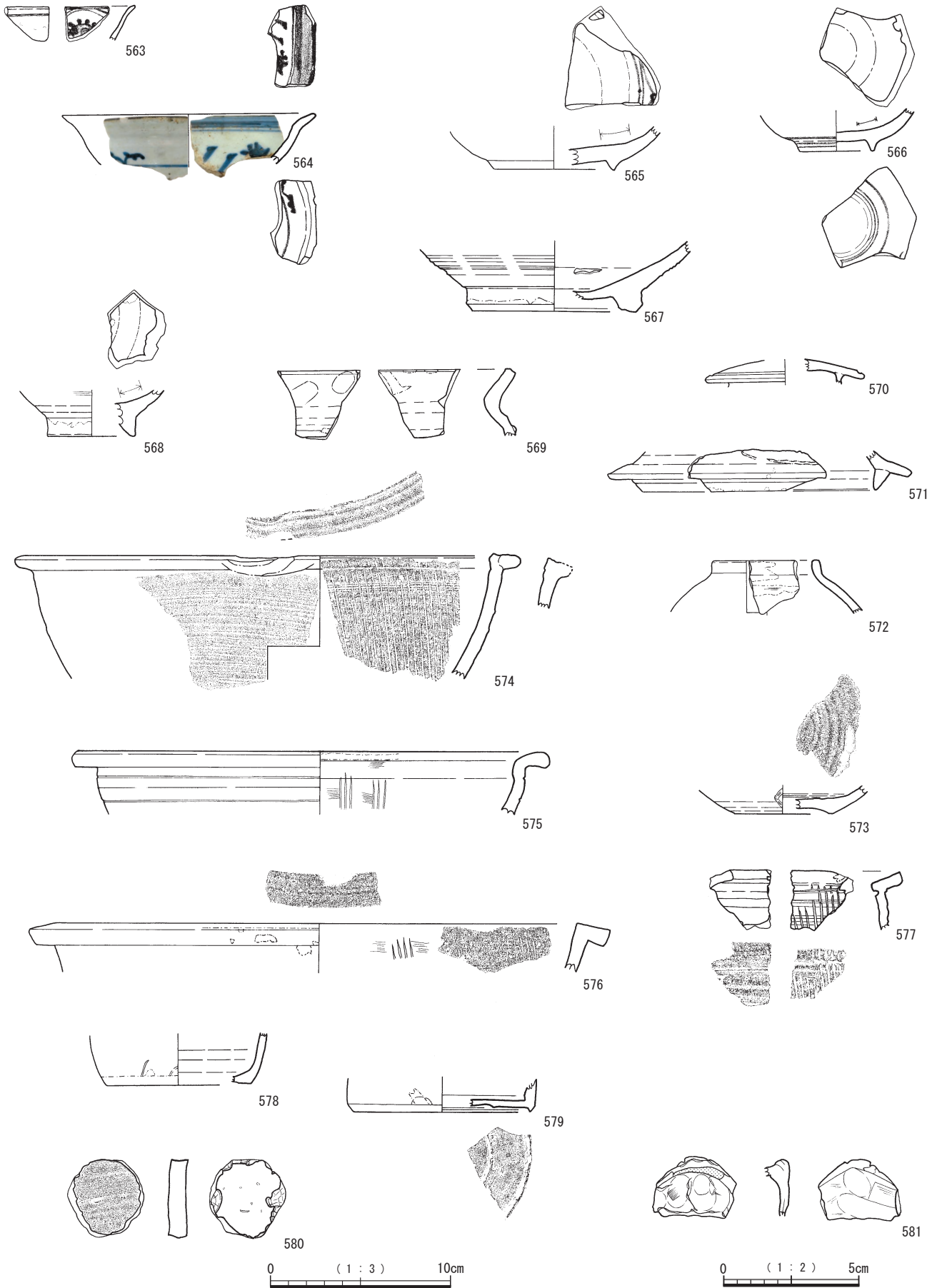
磁器製人形（587）

583は12mm口径の機関銃の葉莢である。ソイルマークが明瞭に確認できる。

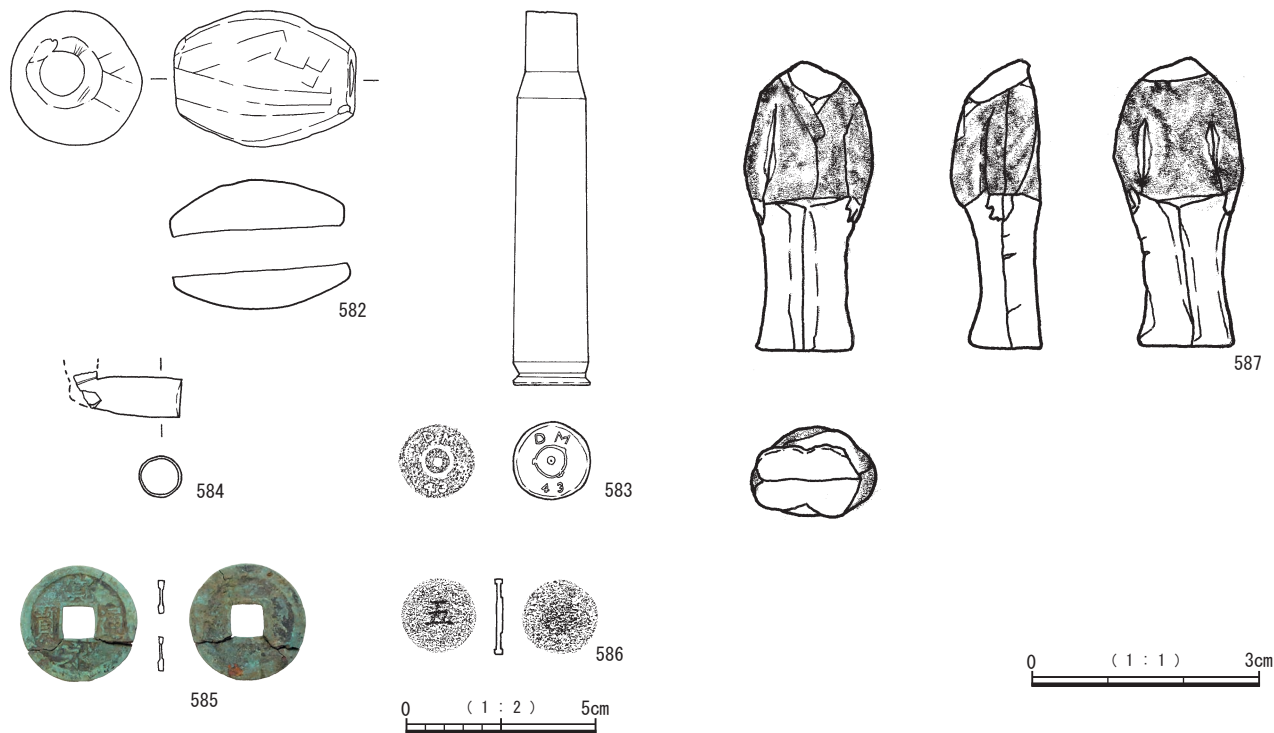
584は真鍮製のキセルの雁首で、柄は欠損する。

585、586は古銭で摩滅が著しい。585は江戸時代の寛永通宝で、586は明治22年から明治30年にかけて鑄造された菊5銭白銅貨である。裏面には菊の文様が描かれるが摩滅により判然としない。

587は磁器製の人形の胴体部分である。紺色の上着と白色の裾広がりのズボンを着用しているため、海軍兵を模したものである可能性がある。



第108図 萩ヶ峰遺跡 近世以降の遺物(1)



第109図 萩ヶ峰遺跡 近世以降の遺物(2)

第20表 萩ヶ峰遺跡 近世以降出土遺物観察表(1)

挿図番号	掲載番号	種類	器種	出土地点	層	口径(cm)	底径(cm)	胎土	釉薬	時代	施釉の状況	取上番号	備考
108	563	染付	碗	-	-	-	-	10Y8/1	灰白 (内外)7.5Y68/1 (内外)明緑灰	18C	内外面, 全体に釉	-	肥前系
	564	染付	碗	C-2	-	-	-	10Y8/1	灰白 (内外)7.5Y68/1 (内外)明緑灰	18C	内外面, 全体に釉	-	肥前系
	565	染付	碗	E-24 E-25	-	-	7.4	7.5Y8/1	灰白 (内外)7.5Y68/1 (内外)明緑灰	18C	見込みに蛇の目状に釉剥ぎを施す	-	肥前系
	566	染付	碗	-	-	4.2	-	5Y8/1	灰白 (内外)7.5Y68/1 (内外)明緑灰	18C	見込みに蛇の目状に釉剥ぎを施す	-	肥前系
	567	陶磁器	碗	-	-	-	(4.5)	5Y6/1	灰 (内外)7.5Y66/2 (内外)灰オリーブ	18C	高台と高台裏は無釉 窯道具が融着する	-	肥前系
	568	薩摩焼	碗	-	-	-	4.9	5YR6/4	にぶい橙 (内外)7.5YR2/3 (内外)極暗褐	19C	疊付は無釉 見込みに蛇の目状に釉剥ぎを施す	-	龍門司系
	569	薩摩焼	壺	B・C-3・4	-	5.0	-	10YR3/3	暗褐 (外)10YR3/1 (内)10YR4/1	19C	口縁部内面に所々に釉剥ぎを施す	カクテ 一括	龍門司系
	570	薩摩焼	土瓶蓋	D-22	-	8.8	-	2.5Y4/1	黄灰 (外)2.5Y2/1 (外)黒	19C	内面無釉 傘部外面縁に沈線を巡らせる	-	苗代川系
	571	薩摩焼	土瓶蓋	C-D-25 ~27	-	13.0	-	5YR4/6	赤褐 (外)7.5YR3/2 (外)黒褐	18C	内面無釉 外面に製品の融着がみられる	-	苗代川系
	572	薩摩焼	土瓶	D-21	IIIa	5.8	-	2.5Y4/1	黄灰 (内外)7.5Y2/2 (内外)オリーブ黒	19C	口縁部内面と胴部内面に釉剥ぎを施す	-	苗代川系
	573	薩摩焼	土瓶	-	-	-	5.4	2.5Y6/1	黄灰 (内)10YR2/3 (内)オリーブ褐	19C	外面無釉	一括	苗代川系
	574	薩摩焼	摺鉢	E-7	-	27.8	-	2.5YR6/6	橙 (外)2.5Y6/3 (内)5YR5/4	19C	口唇部に釉剥ぎを施す 注口部分残存	-	苗代川系
	575	薩摩焼	摺鉢	-	-	25.4	-	2.5YR5/3	にぶい赤褐 (内外)10YR3/2 (内外)黒褐	18C	口唇部に釉剥ぎを施す	-	苗代川系
	576	薩摩焼	摺鉢	F-8	-	32.0	-	10YR5/2	灰黄褐 (内外)2.5Y3/2 (内外)黒褐	19C	口唇部に釉剥ぎを施す	-	苗代川系
	577	薩摩焼	摺鉢	-	-	-	-	10YR3/1	黒褐 (内外)2.5Y3/2 (内外)黒褐	19C	口唇部に釉剥ぎを施す	一括	苗代川系
	578	薩摩焼	鉢	-	-	-	8.0	10R4/4	赤褐 (外)2.5Y8/2 (外)灰白	19C	疊付と底部, 内面は無釉	カクテ 一括	龍門司系
579	薩摩焼	鉢	C-17	-	-	10.5	10R3/2	明赤褐 (外)2.5Y8/2 (外)灰白	19C	疊付と底部, 内面は無釉	カクテ 一括	龍門司系	
580	薩摩焼	メソコ	D・F-24 ~26	IIb	-	-	5YR5/4	にぶい赤褐 (内外)5Y4/2 (内外)灰オリーブ	19C	短軸を対称に打ち搔く	-	苗代川系	
581	土製品	-	-	-	-	-	7.5YR5/4	にぶい褐	-	-	カクテ 一括	混和材: 石英・輝石 胎土精良, 焼成良好, 用途不明	

第21表 萩ヶ峰遺跡 近世以降出土遺物観察表(2)

挿図番号	掲載番号	種類	出土地点	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
109	582	陶錘	C-11	-	4.8	3.6	3.5	3.5	-	
	583	葉莢	-	-	9.9	2.0	2.0	2.0	-	機関銃薬莢(12mm口径) 真鍮製, ソイルマークが確認できる
	584	煙管	1T	-	2.9	1.3	0.1	0.1	-	真鍮製, 雁頸残存
	585	古銭	B-6	-	3.4	3.4	0.2	0.2	-	寛永通宝
	586	古銭	D-21	IIIb	2.0	2.0	0.1	0.4	-	菊5銭白銅貨
	587	人形	16T	-	3.8	1.7	1.2	8.0	-	磁器製, 海軍の軍服を着用か

第V章 白水B遺跡の調査

第1節 調査の概要

白水B遺跡は、平成5・6年度に確認調査、平成6・26年度の本調査に実施している。その調査結果については平成27年度刊行『白水B遺跡』で報告が行われている。

Ⅲ層からは古墳時代の土坑・ピット・古道や甕・壺・高坏、縄文時代晩期の粗製深鉢・精製浅鉢・櫃原文土器などが確認されている。Ⅴ層からは縄文時代早期の集石・土坑と下剥峯式土器が少量確認された。旧石器時代についてはⅦa～Ⅶc層で細石刃文化期の細石刃・細石核・ハンマーストーンなどが確認され、Ⅷa層でナイフ形石器文化期の土坑・礫群と尖頭器・ナイフ形石器・搔器・二次加工剥片などが確認されている。

今回報告するのは令和4年度に実施した本調査の調査結果についてである。令和4年度調査区（A～F-1～ア区）は、平成5・6・26年度調査区（A～F-イ～カ区）の東側に段状になっている部分であった。北部（D～F-1～ア区）のⅠ～Ⅳ層は後世の削平を受けており、残存状態が非常に悪かった。南西部に向かって傾斜する

地形をしているため、A～C-1～ア区ではⅢ層の一部が残存しており、古墳時代の遺構・遺物及び縄文時代晩期の遺物が少量出土した。

白水B遺跡の令和4年度発掘調査範囲は第110図のとおりで、土器小片や石器が散見された。東側に大きく傾斜しながら下る地形である。

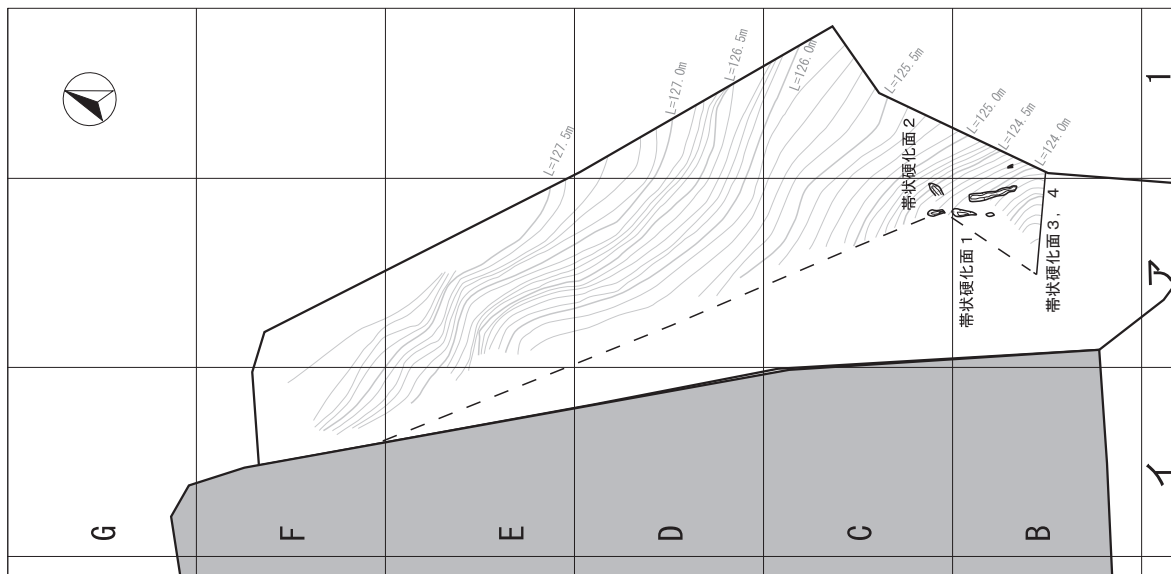
東側は平成26年度に調査されたエリアで、旧石器時代のナイフ形石器や細石器類、縄文時代晩期前葉に位置づけられると考えられる櫃原文をもつ土器が目撃された。さらに古墳時代前期・後期の土器も出土した。また、センダンの炭化木の放射性炭素年代測定の結果は縄文時代晩期の値を得た（校正年代2996-2860ca1BP）。

今回報告する遺物のなかには旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代晩期の組織痕土器など既報告エリアに関連のあるものが出土している。また、白水B遺跡の西側の一段高い位置には萩ヶ峰遺跡が隣接し、特に古墳時代の遺物において器形・調整方法・胎土等の特徴が類似しているものもみられることから、土地の傾斜に沿って流れ込んだものも一部含まれると考えられる。

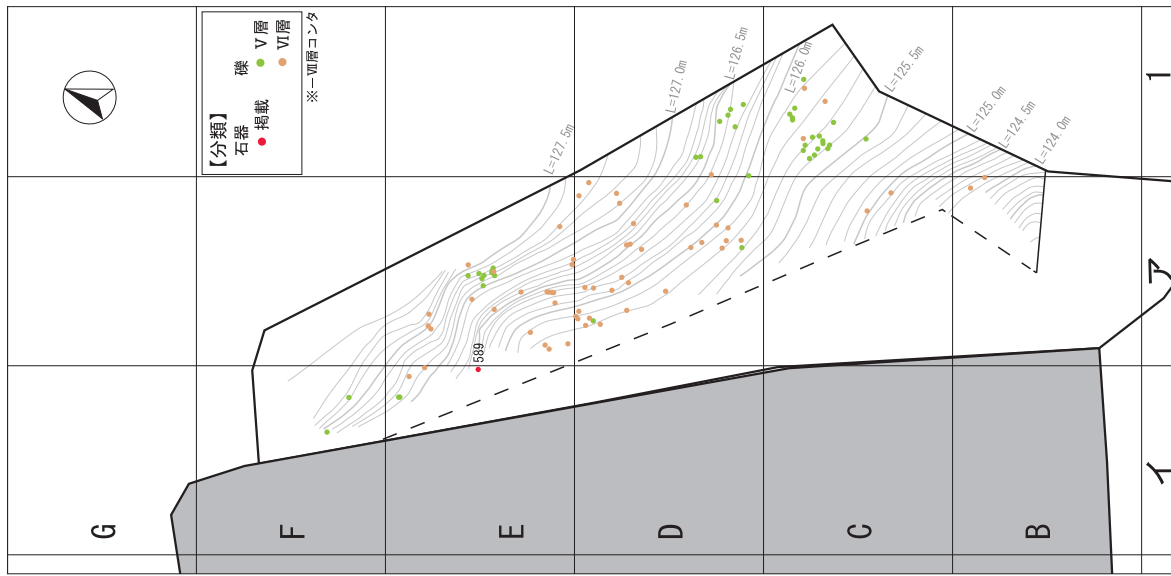


第110図 白水B遺跡 グリッド配置・周辺地形図

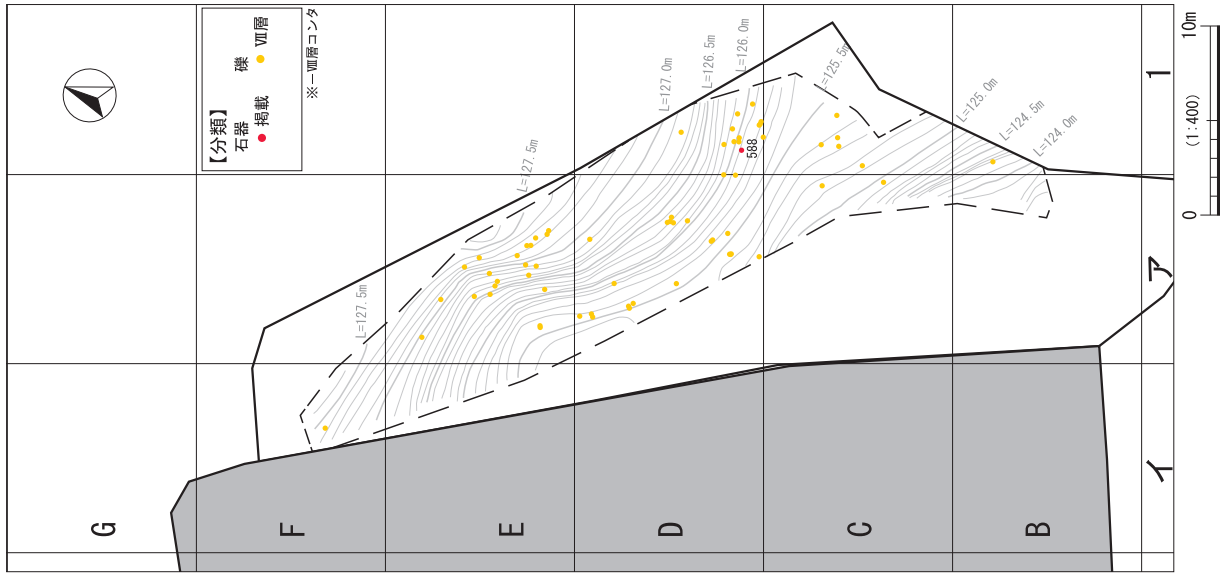
遺構配置図



V・VI層遺物出土分布図



VII・VIII層遺物出土分布図



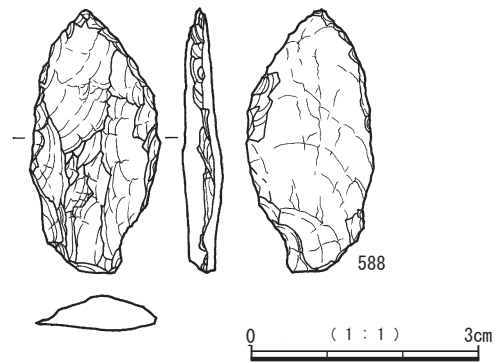
第111図 白水B遺跡 遺構配置図および遺物出土分布図

第2節 旧石器時代の調査成果

D-1区のⅦ層でナイフ形石器が1点出土した。石器製作跡などの遺構は検出しなかった。Ⅶa～Ⅶbからは黒曜石のチップが少量出土したが、図化できるものはなかった。

石器（第112図）

588は、ナイフ形石器である。粘板岩を素材とし、基部の端部以外の全周に側縁加工を施している。腹面は剥離面であり、左側には基部加工の剥離がよく観察できる。目立った使用痕は観察できないが、正面に若干の摩耗がある。



第112図 白水B遺跡 旧石器時代出土石器

第22表 白水B遺跡 旧石器時代出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	分類	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	石材	石材分類	取上番号	備考
112	588	D-1	Ⅶ	ナイフ	—	34.60	17.00	5.50	2.82	粘板岩	—	5025	正面に若干の摩耗がある

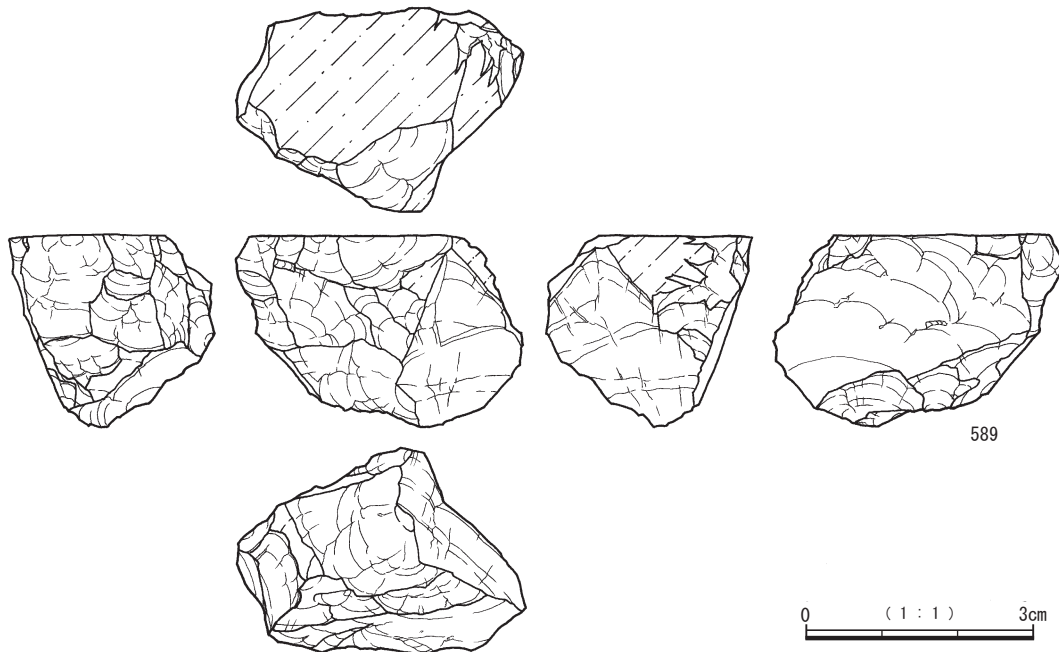
第3節 縄文時代早期の調査

E-イ区のⅥ層で石核が1点出土した。その他の遺構・遺物は検出しなかった。

石器（第113図 589）

589は、水晶製の石核である。上面は節理面であり右側面上方まで伸びている。平坦な面であり角度約45度を

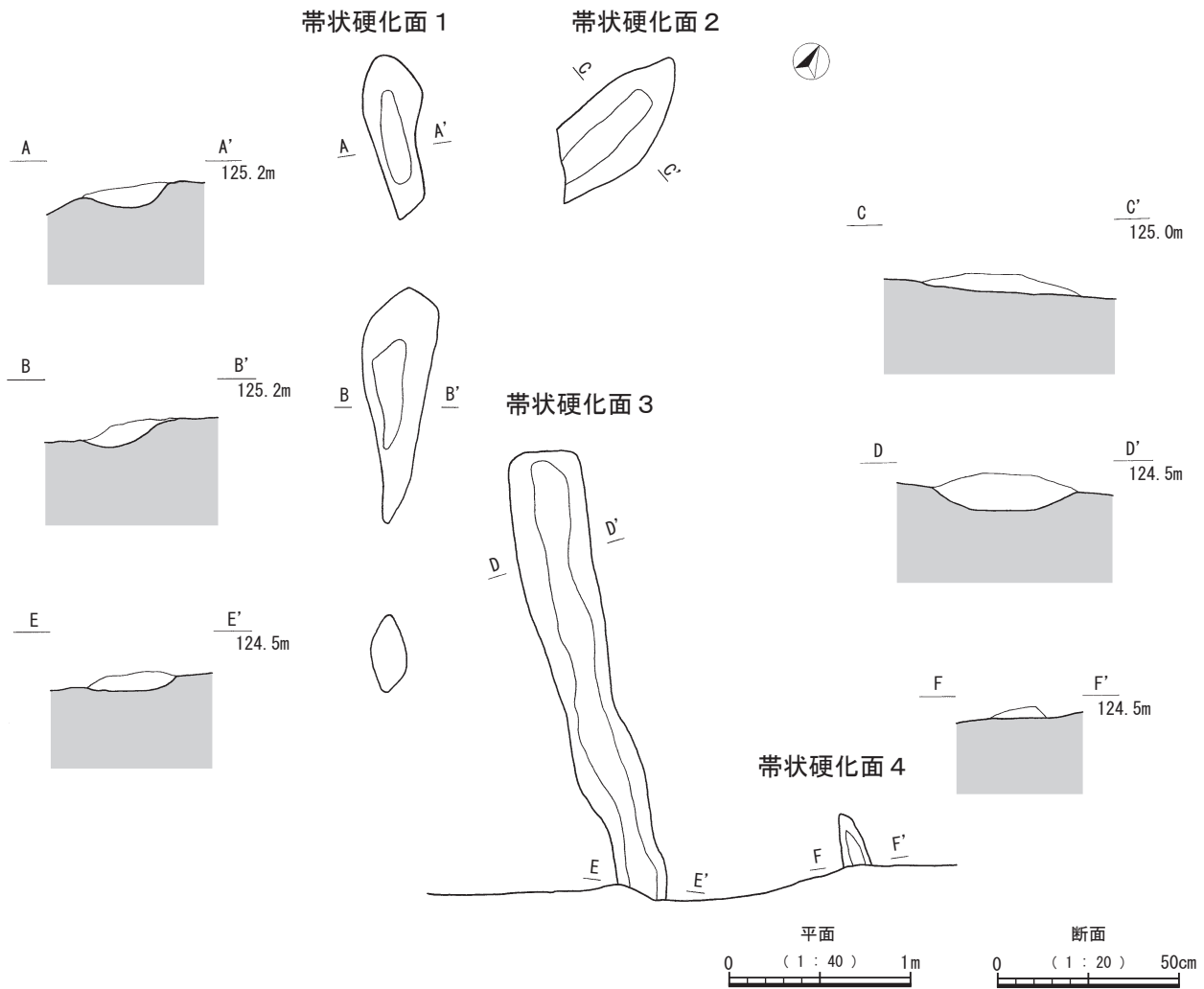
測る。この箇所が結晶の六角形の形状を残す部分であるならば自然面として表現するべきところであるが、その他にも平面的に剥離している箇所や石材内部にも節理が観察できることから節理面とした。また、上面から見た形状は五角形を呈し、その他の面も丸みを帯びた略五角形を呈している。



第113図 白水B遺跡 縄文時代早期出土石器

第23表 白水B遺跡 縄文時代早期出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	分類	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	石材	石材分類	取上番号	備考
113	589	E-イ	Ⅵ	石核	—	25.20	38.20	27.20	26.00	水晶	—	5043	結晶の形状を一部残す可能性



第114図 白水B遺跡 帯状硬化面1～4

第4節 縄文時代晩期の調査

Ⅲb層から縄文時代晩期の組織痕土器が2点出土した。遺構は検出されなかった。

土器 (第115図 590・591)

590・591は底面に目の粗い編目状の組織痕を有する土器小片で、同一個体の可能性が高い。既報告エリアからも類例が報告される(2016『白水B』遺跡, 掲載No. 133～136) 器壁は薄い。内面は黒色で丁寧なミガキを施し光沢がある。小片であったため、上下及び傾きは不明である。

第5節 古墳時代以降の調査

1 遺構 (第114図)

古墳時代の遺構としては、調査区南側B・C-A・1区から帯状硬化面が4条検出した。北から南に下る傾斜部の谷部にまとまっており、後世の削平により残存状態は非常に悪かった。帯状硬化面1・3・4は傾斜に沿う

ように南東から北西方向に延び、帯状硬化面2は斜めに交差するように南から北方向に延びると考えられる。

帯状硬化面1

最大幅は約40cm, 検出した総延長は約350cm, 最大厚は約10cmである。埋土からの出土遺物はなかった。

帯状硬化面2

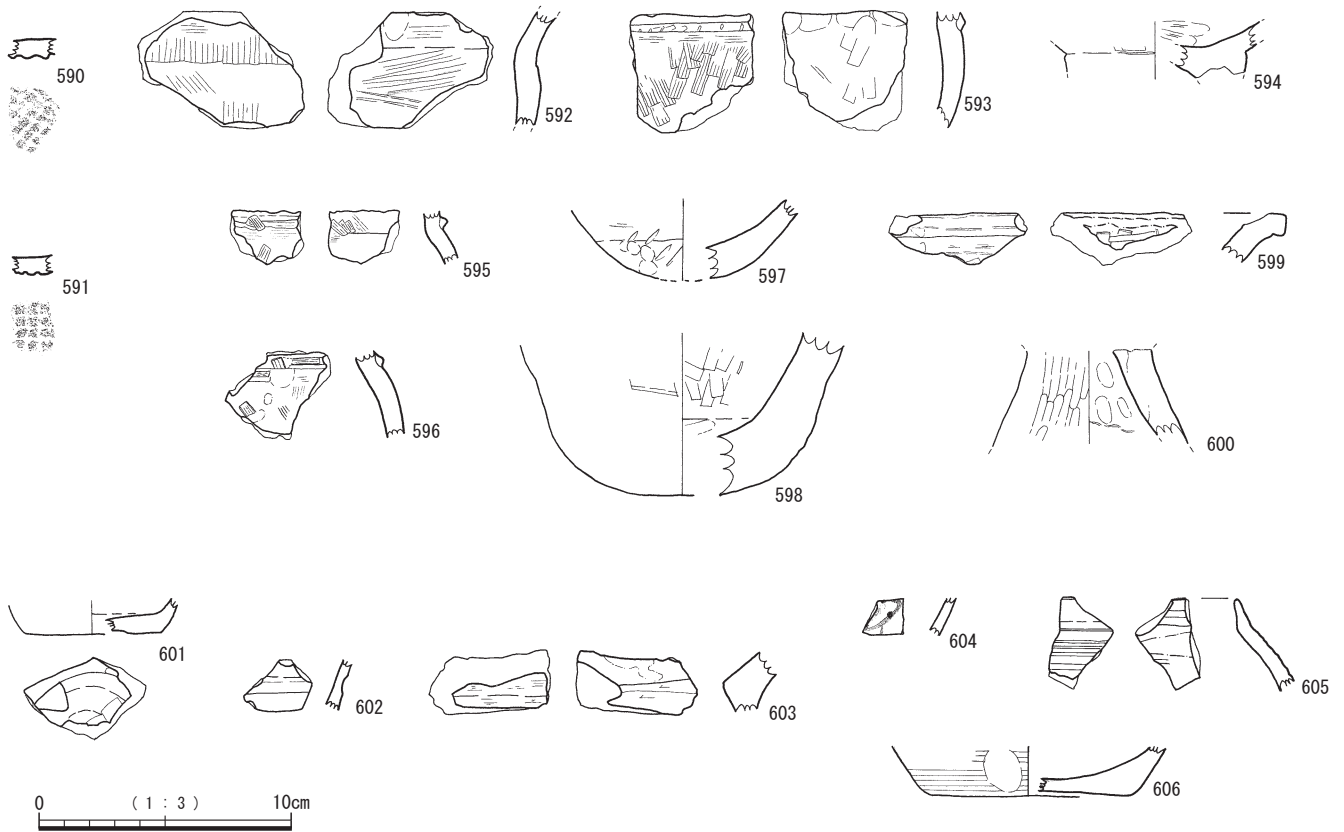
最大幅は約45cm, 検出した総延長は約90cm, 最大厚は約10cmである。埋土からの出土遺物はなかった。

帯状硬化面3

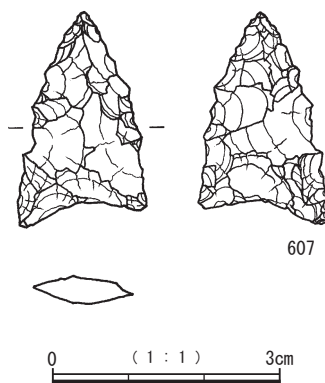
最大幅は約40cm, 検出した総延長は約260cm, 最大厚は約10cmである。埋土からの出土遺物はなかった。南部は調査区外まで延びる。

帯状硬化面4

最大幅は約15cm, 検出した総延長は約30cm, 最大厚は約8cmである。埋土からの出土遺物はなかった。南部は調査区外まで延びる。



第115図 白水B遺跡 出土遺物



第116図 白水B遺跡 時期不明石器

2 遺物

土器（第115図 592～600）

592～600は古墳時代前期頃の東原式の時期の土器であると考えられる。

592・593は甕の頸部片である。口縁部は外反し、胴部がやや張り出す器形であると考えられる。内外面に刷毛目を残す。592は口縁部外面に刷毛目を掻き上げるよう

に連続させ、その始点は深く明瞭な稜を形成する。593は小さな山形の突帯を巡らせ、ヘラ状工具による小さな刺突を施す。594は底面がやや広く、胴部にむかって大きく開くため台付鉢等の底部片と推測する。内外面にはナデ調整を施す。

595・596は小型の壺の頸部～上胴部片と考えられる。頸部に突帯を巡らせ刻目を施す。過年度報告エリアにおいても類例（2016『白水B』遺跡、掲載No. 236など）が報告される。597・598は壺の底部片である。597はやや小ぶりの丸底で外面にタタキを施す。598は厚みがあり、尖底気味の器形と考えられる。599は大きく開く小片で、残存部内面上位にパーツが剥落した痕跡がみられる。複合口縁の壺、あるいは坏部に段を有する高坏の破片であると考えられる。600は直線的に開く中空の脚である。外面にはやや太幅の工具による縦位のミガキを規則的に施す。外面に丹塗りを施す。

601～606は古代～近世の遺物である。

601・602は土師器の坏あるいは碗で、601は底部、602は体部である。胎土や色調が類似するため同一個体の可能性も考えられる。底面はヘラ切りで、体部外面には回転台による成形痕を明瞭に残す。603は土師器の甕の頸部であると考えられる。頸部直下を右から左にケズリ明

瞭な稜を形成する。暗い赤褐色を呈する。帰属時期を限定することは難しいが古代以降の遺物であると判断した。

604はやや丸みを帯びた染付の小片である。胎土の色はわずかに灰色がかり、文様を描く呉須の色調は淡い。器種は不明である。近世の遺物で肥前系と考えられる。605・606は同一個体の薩摩焼の土瓶の口縁部片と底部片である。外面には全面的に櫛目状の工具による横ナデを施す。口縁部内面の稜の直下には帯状に釉剥ぎを施す。釉の色は暗褐色で、光沢は少ない。赤みの強い胎土はきめ細かで、混和材も少量であることから龍門司系と考えられる。

第6節 時期不明 石器（第116図）

時期不明の遺物として、A-A区の表土から石鏃が1点出土した。607は頁岩を素材とし、正面腹面共によく加工されている。二等辺三角形を呈しているが、上部で角度が付き五角形を呈するものに属するかもしれない。基部は凹基でやや深く貫入し、腹面の中央で主要な形状を作出している。左側の裾が長い形状である。また、正面腹面共に稜線に若干の摩耗を観察できる。

第24表 白水B遺跡 出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構名	器種	型式分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調1	色調2	胎土1				タタキの有無	取上番号	備考	
												石英・長石	雲母・輝石	角閃石	赤褐色粒				
115	590	A-A	-	中華鍋形組織痕土器	IIIb	-	-	-	(外)ー (内)ミガキ	(外)10YR4/6 (内)10YR4/1	(外)にぶい黄橙 (内)褐灰	○	◎				-	591と同一個体か	
	591	A-A	-	中華鍋形組織痕土器	IIIb	-	-	-	(外)ー (内)ミガキ	(外)10YR4/6 (内)10YR4/1	(外)にぶい黄橙 (内)褐灰	○	◎				-	590と同一個体か	
	592	-	-	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/4	(外)明赤褐 (内)にぶい赤褐	○	○		◎	○		-	
	593	A-A	-	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ, 工具ナデ	(外)10YR5/4 (内)10YR5/3	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄褐	○	○	△	△	○		-	
	594	-	-	甕か鉢	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外)5YR5/6 (内)5YR6/4	(外)明赤褐 (内)にぶい橙	○	○	○		○		-	
	595	A-A	-	壺	東原	-	-	-	(外)ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)5YR5/6 (内)5YR5/6	(外)明赤褐 (内)明赤褐	○	○		○			-	
	596	A-A	-	壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ, ハケメ (内)ナデ	(外)2.5YR4/6 (内)7.5YR5/4	(外)赤褐 (内)にぶい褐	○	○	○	△			-	
	597	-	-	壺	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR6/6	(外)にぶい橙 (内)橙	◎	○	△	○		有	-	成形時にタタキを行う
	598	A-A	-	壺	東原	-	-	-	(外)マメツ (内)工具ナデ, ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR7/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい橙	○	○			◎		-	
	599	A-A	-	壺か高坏	東原	-	-	-	(外)工具ナデ, ナデ (内)工具ナデ, ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR5/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄褐	◎	○	○	○			-	
	600	-	-	高坏	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ, 指オサエ	(外)5YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	○				○		-	外面丹塗り
	601	-	-	土師器 環か碗	-	-	-	-	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	(外)7.5YR7/6 (内)7.5YR7/6	(外)橙 (内)橙	○	○			○		-	胎土精良, ヘラ切り底
	602	A-A	-	土師器 環か碗	-	-	-	-	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○			○			-	胎土精良
	603	A-A	-	土師器 甕	-	-	-	-	(外)ナデ (内)ナデ, ヘラケズリ	(外)5YR4/6 (内)5YR4/4	(外)赤褐 (内)にぶい赤褐	○	○					-	

第25表 白水B遺跡 近世以降陶磁器観察表

挿図番号	掲載番号	種類	器種	出土地点	口径(cm)	底径(cm)	胎土		釉薬		時代	施釉の状況	取上番号	備考
115	604	染付	染付碗	A-A	-	-	7.5Y8/1	灰白	7.5Y7/1	灰白	19C	内外面, 全面的に釉	-	肥前系
	605	薩摩焼	土瓶	A-A	-	-	5YR5/4	にぶい赤褐	10YR4/2	灰黄褐	19C	胴部内面上位を釉剥ぎ	-	龍門司系
	606	薩摩焼	土瓶	A-A	-	(8.0)	5YR6/6	橙	2.5Y3/2	黒褐	19C	全面	-	龍門司系

第26表 白水B遺跡 その他出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	分類	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	石材	石材分類	取上番号	備考
116	590	A-A	I	石鏃	-	28.50	17.50	4.00	1.41	頁岩	-	-	正面・裏面・稜に摩耗がある

第Ⅵ章 山ノ上A遺跡の調査

第1節 調査の概要

山ノ上A遺跡は調査区中央部が北から南に下る傾斜面に位置しており、標高は約140m前後である。傾斜地北部は、後世の開墾のため削平を受けており、地層上部の堆積状況は非常に悪かった。そのためⅡ層～Ⅲ層の縄文時代晩期から古墳時代遺物包含層については、北部にはほとんど残存しておらず南部の谷部に30cm～50cmほど残存しており、遺物も谷部に流れ込むような状況で出土した。

第2節 縄文時代早期の調査

縄文時代早期の遺物包含層はⅤ層とⅥ層である。遺構は検出されず、石鏃2点と使用痕剥片1点が出土した。

石器 (第118図)

石鏃 (608・609)

608・609は打製石鏃である。

608は、三船産の黒曜石を素材としている。左右ともに欠損しており全体の形状は不明である。凹基で深く貫入している。609は、姫島産の黒曜石を素材とし、正面裏面ともによく加工されている。先端を欠損しているが

五角形の形状をよく残している。基部は平基である。

使用痕剥片 (610)

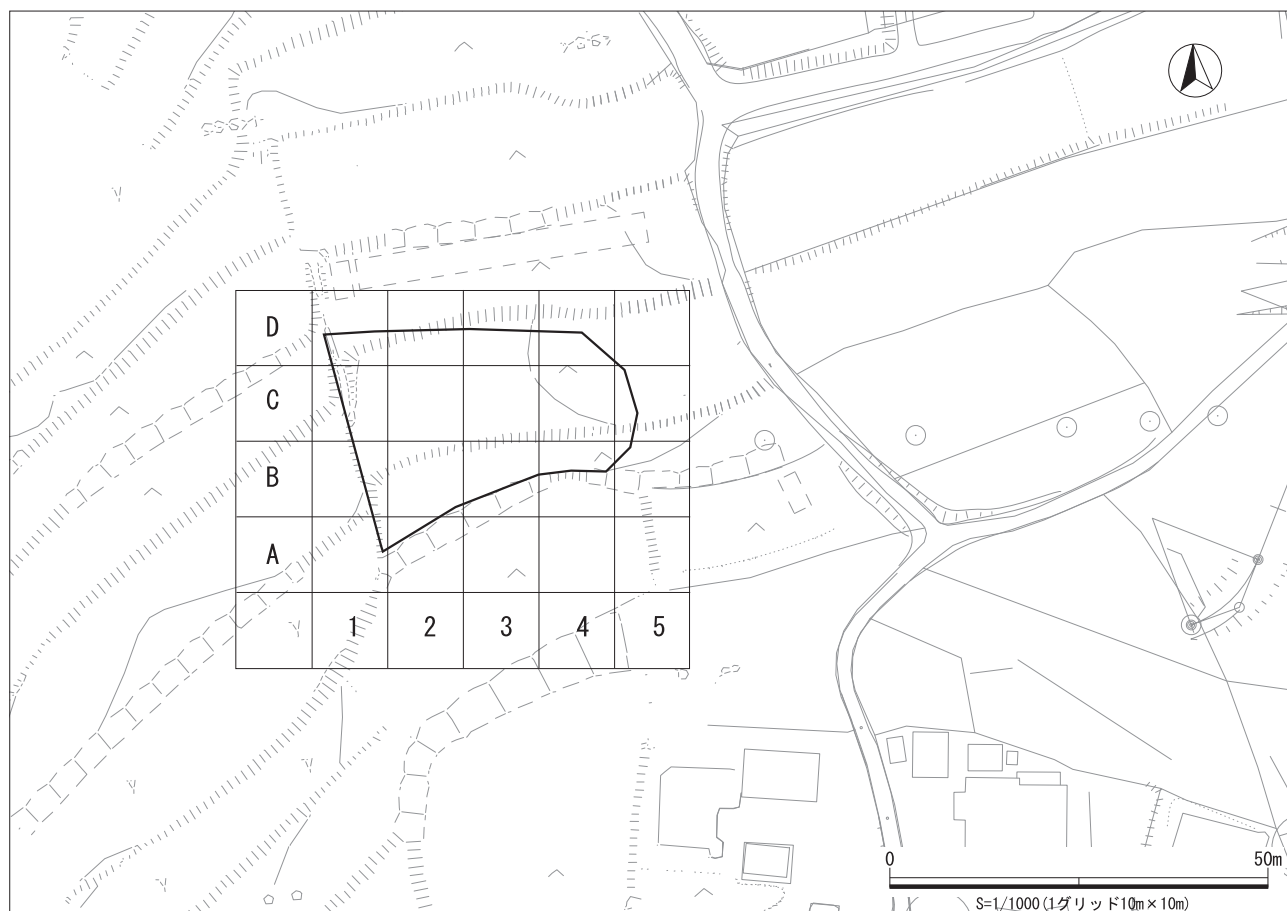
610は、三船産の黒曜石を素材としている。裏面には剥離の痕跡が残る。左側辺上部には抉状の凹みの作目または使用による割れがある。下端に調整のような痕跡があることからスクレイパー類の可能性もある。

第3節 縄文時代晩期～古墳時代の調査

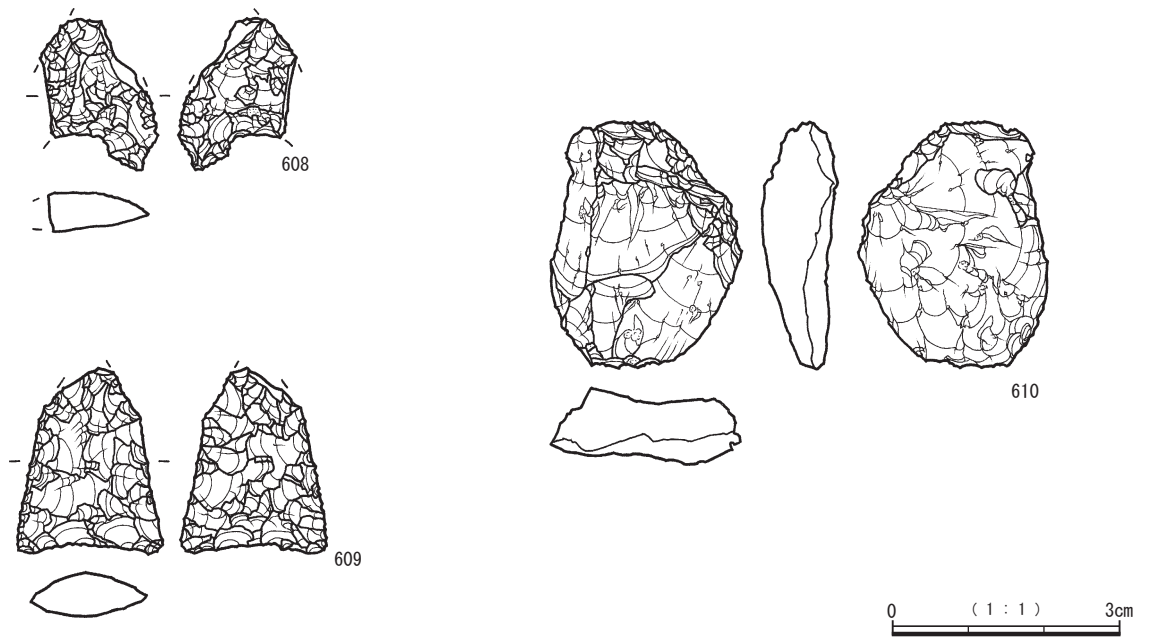
縄文時代晩期～古墳時代の遺物包含層はⅡ層・Ⅲa層・Ⅲb層である。調査区内から遺構は検出されなかった。土器はC-2区の標高がやや高いエリアと、B・C-3区辺りの周りよりもやや低いエリアにまとまって出土した。石器の出土はなかった。遺物の分類については出土量が少ないため本遺跡内での分類は行わず、本報告書内の萩ヶ峰遺跡の分類に従い記載する。

土器 (第121～123図 611～651)

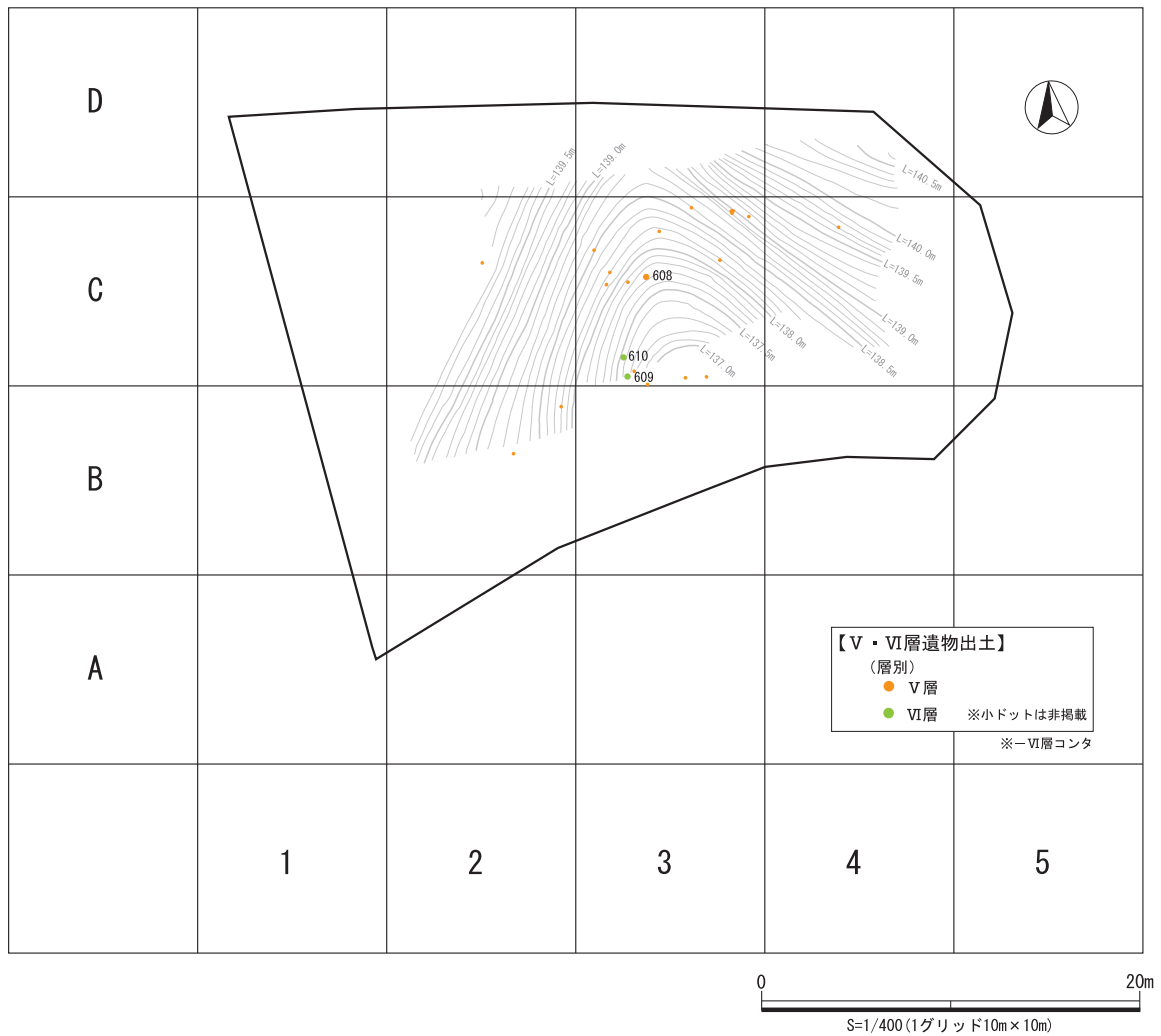
611～619は縄文時代晩期の土器である。611は深鉢土器の内湾する口縁部であり、萩ヶ峰遺跡のⅠc類である。口縁端部をやや肥厚させる。612は中華鍋形土器の口縁部であり、萩ヶ峰遺跡のⅢa類である。口縁端部の内面



第117図 山ノ上A遺跡 グリッド配置・周辺地形図



第118図 山ノ上A遺跡 縄文時代早期出土石器



第119図 山ノ上A遺跡 V・VI層遺物出土分布図

をやや肥厚させる。613はマリ状を呈する土器の口縁部であり、萩ヶ峰遺跡のIVe類に対応する。内外面ともに丁寧なミガキを施す。口縁部外面直下と、頸部との境目辺りに沈線を巡らせる。

614・615は深鉢土器の胴部片である。614と615は直線的に開く器形である。器壁に厚みがあり内外面ともに横位の粗い条痕を施す。616と617は屈曲部を有しており、萩ヶ峰遺跡Ic類に対応すると考えられる。

618は外面は縦位の細幅のミガキによって調整され、内面は下から上の工具ナデを施す。器壁の立ち上がる角度が急で、金色の雲母を多量に含む。胎土の色調もやや緑がかった褐色で、他の胴部片とは特徴が異なることから弥生時代に帰属する可能性も考えられるがここに含めた。

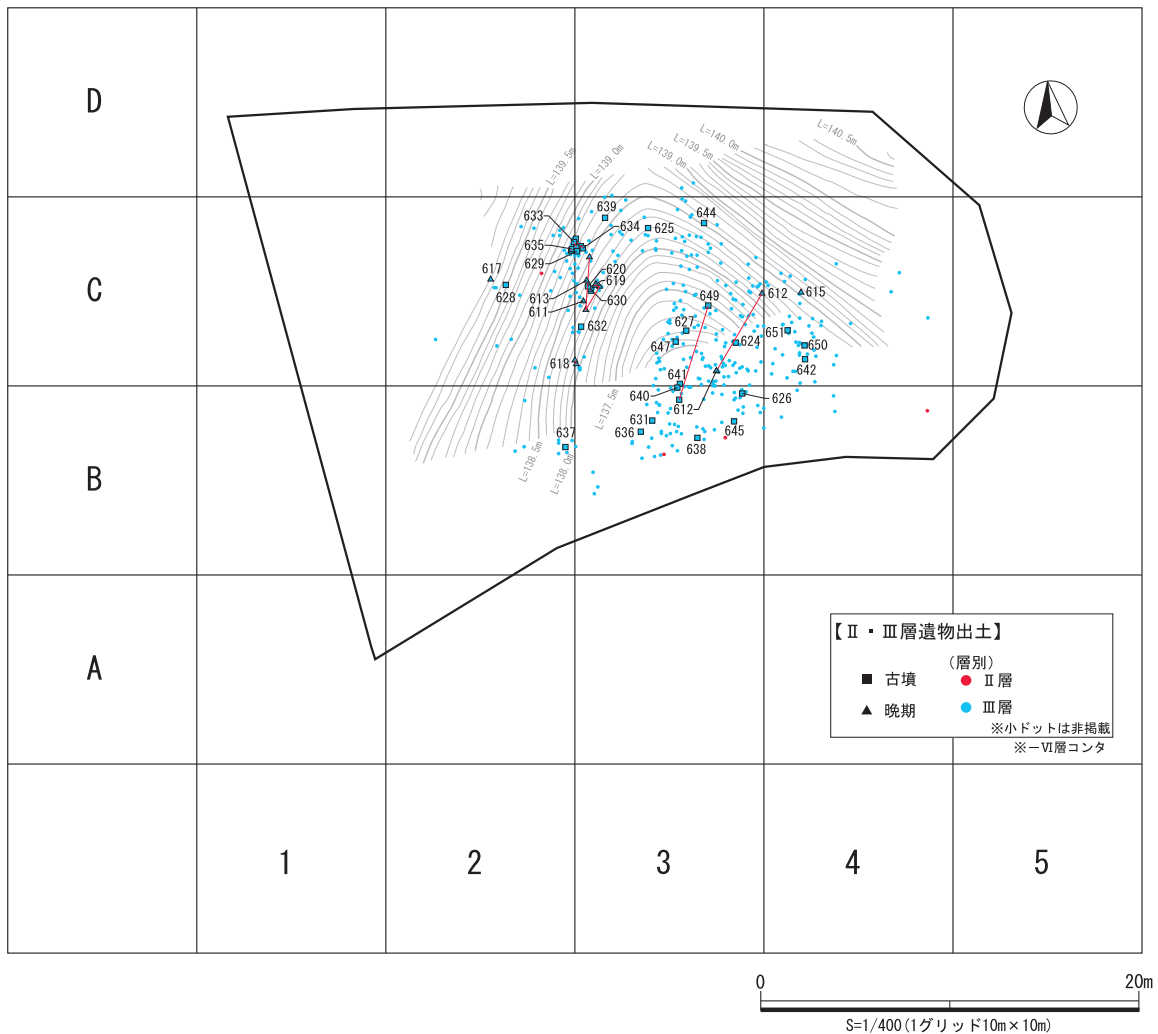
619は中華鍋形土器の底部片である。底面の織物圧痕を粗いミガキによって消す。外面の煤の年代測定の結果は暦年校正 2σ : 308-403calAD (60.56%) で古墳時代中期頃の値であった。煤の付着の状況は良好であり、周辺からは古墳時代前期から中期初め頃に比定される東原式土器も出土しているため、後世に付着した可能性もある。

る。

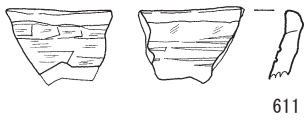
620～651は古墳時代の遺物である。620～630は甕の口縁部片あるいは頸部片で、頸部で外反し、開く器形のもので、古墳時代前期の東原式期の遺物と考えられる。突帯を有するもの(625～627)と無文のもの(620～624, 630)とがみられる。

無文のものは頸部外面から口縁端部にむかって工具で掻き上げるように調整を施し、ハケメを残すものとナデ消すものがみられる。頸部でくびれ、胴部がわずかに張り出すもの(622・624・630)もみられる。突帯をもつものは刻目に布目が確認できる。無文のものに比べて頸部の外反角度が緩やかである。

628・629・632は製作技法に布留式系統の土師器の影響を受けたと考えられる遺物である。628は短く外反する口縁部片で、口縁端部は「コ」の字に角付けられる。頸部の外反角度が大きく、胴部が大きく張り出すと推測されるため、丸底の甕の可能性も考えられる。629は上部がわずかに反る。甕の頸部近くの破片と考えられ、内面にケズリ調整が施されることから製作技法に布留式系統の土師器の影響を受けていることが考えられる。



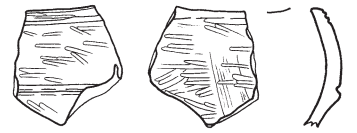
第120図 山ノ上A遺跡 II・III層遺物出土分布図



611



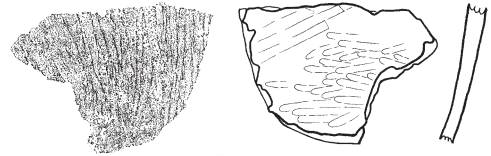
612



613



614



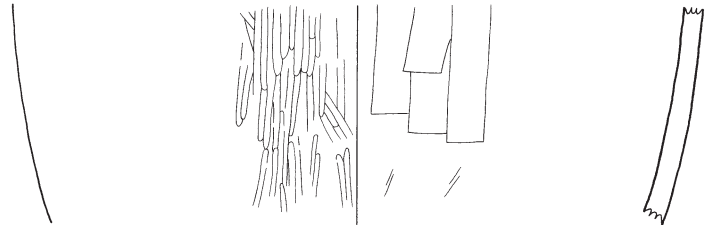
615



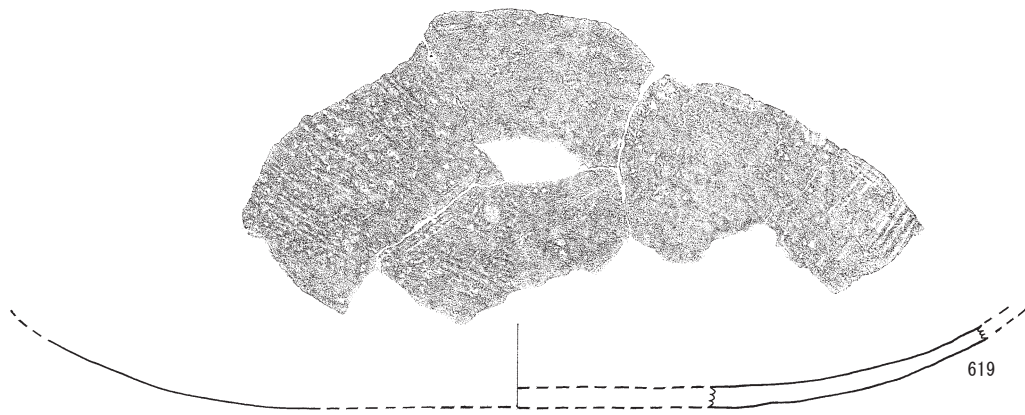
616



617



618

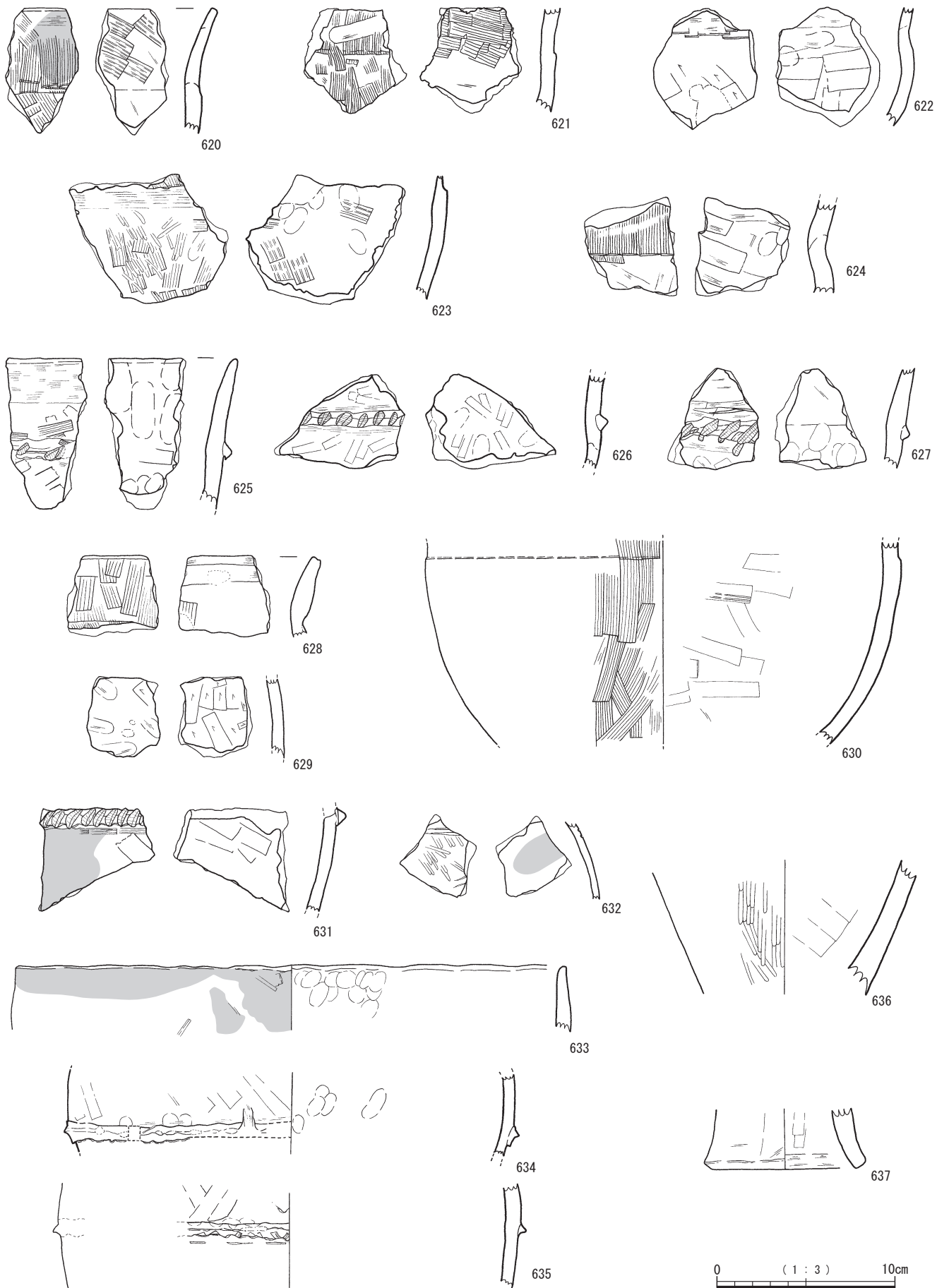


619

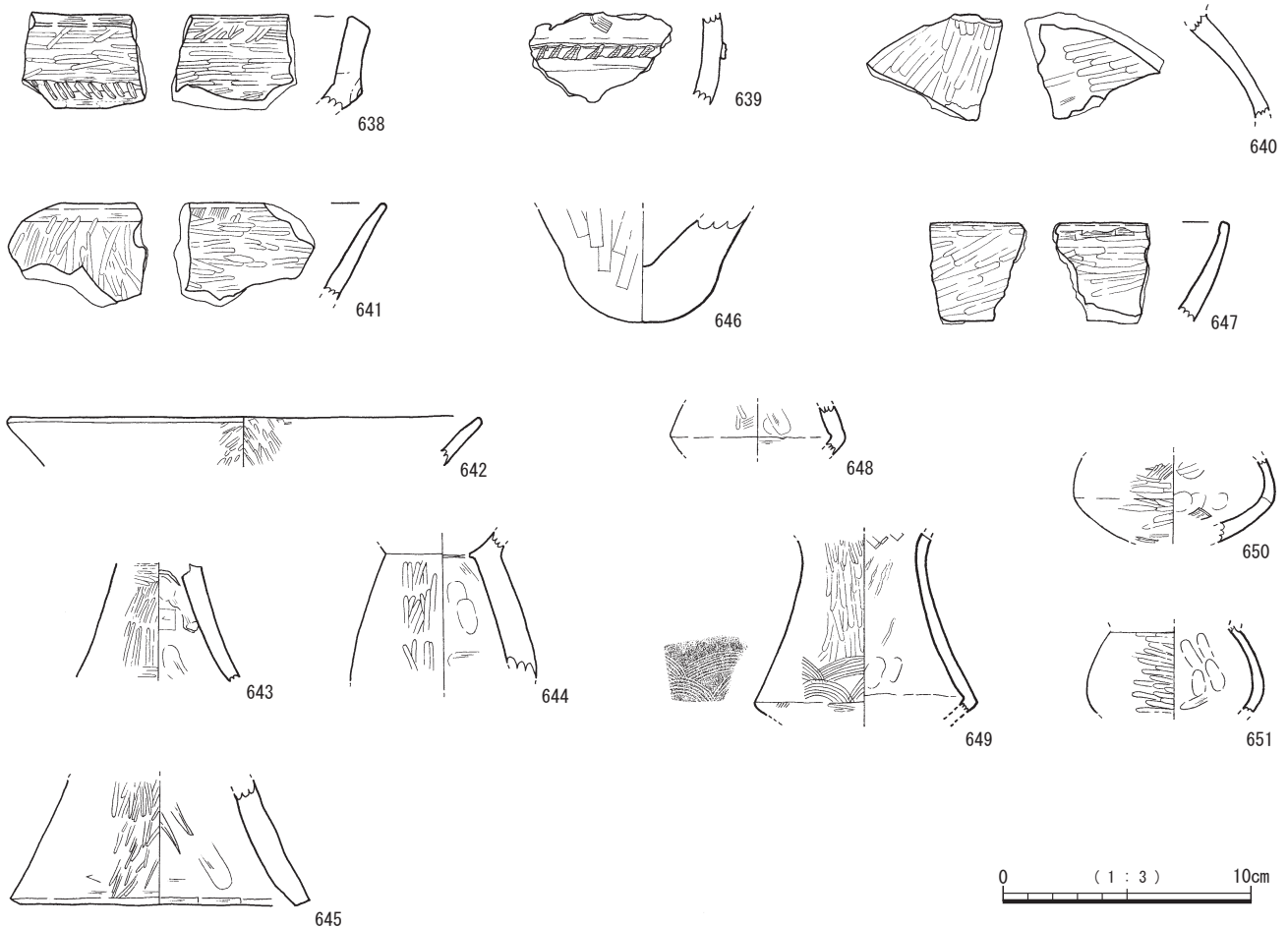


0 (1:3) 10cm

第121図 山ノ上A遺跡 出土遺物(1)



第122図 山ノ上A遺跡 出土遺物(2)



第123図 山ノ上A遺跡 出土遺物(3)

628・629の胎土の特徴は他の東原式期の土器と同様である。632は器壁が4～5mmの丸底の甕の肩部片である。外面には2条の細沈線が確認される。外面は黒色を呈し、ミガキ調整が施される。内面には煤が付着する。焼成がよく非常に硬質で、石英や小礫を中心とした混和材が多く入り、金色の雲母も混じる。搬入品の可能性があり、古墳時代前期～中期頃に該当すると考えられる。

633～635は口縁部が内湾する甕で、古墳時代後期の笹貫式期の時期に帰属すると考えられる。634・635はつくりの粗い断面三角形の突帯を巡らせ、器面に粗く貼り付ける。634は突帯に指頭でナデ上げた刻目を所々に施すと推測される。635は突帯の上下の際を工具で器面にナデ付ける。

636は甕の底部近くの破片で、器壁が立ち上がる角度が急である。胎土に金色の雲母を含む。618とも類似するのだが、胎土や色調、外面のミガキや内面の工具ナデの特徴が今回報告する遺跡群の古墳時代の土器に類似するため古墳時代の遺物と捉えた。

637は甕か鉢の脚である。

638～640は壺の破片である。638は複合口縁で、口縁

端部や稜は比較的角が明瞭だが、ナデで滑らかに仕上げている。稜の直下には刻目を密に施し、内外面にミガキを施した丁寧なつくりである。639は細幅の刻目突帯をもつ壺の胴部片である。刻目には布目が確認される。640は内外面にミガキを施した薄手の丁寧なつくりの肩部片である。外面の色調は特に赤みが強い。東原式に該当すると考えられる。内面が丁寧に調整されることから、天地を返して高坏の坏部の可能性もある。

641～645は高坏である。640に類似した赤みの強い胎土で、内外面に丁寧なミガキを施す丁寧なつくりである。641・642は坏部片で、641は推定口径24cmほどの大型であることが推定され、642は推定口径約18cmほどである。643～645は脚である。643・644は坏部との接着面で剥離しており、中空の脚であることが分かる。643・644は外反しながら開き、ともに外面に丁寧なミガキを施す。645は高脚であることが想定され、器壁に厚みがあり、大きく開いて接地する安定した作りから台付鉢の脚の可能性もある。644は柱部がエンタシス状に丸みを帯びる。641・644は形態の特徴から東原式段階と考えられるがほかの詳細な時期は不明である。

646は尖底の壺の底部である。内外面ともに丁寧なナデ仕上げである。

647は器壁が内湾気味に立ち上がる坏の口縁部片である。古墳時代後期の遺物である可能性が高い。推定口径は18cm程である。内外面ともに丁寧なミガキを施し、外面の色調は赤みが強い。

648～651は小型丸底壺(罎)の胴部片である。648・649は重心が低く、648は最大径あたりに緩い稜を形成す

るそろばん玉状の形態である。649は縦長の器形で、胴部から大きくすぼまり口縁部近くで緩く外反する。最大径の位置に明瞭な稜を形成し、稜の直上に多重の細沈線によって重弧文を描く。火山ガラスを含む精良な胎土で、焼成も特に硬質である。色調はやや青白く搬入品と考える。650・651は偏球形の胴部である。精良な胎土を使用し、精緻なつくりである。小型丸底壺については形態の特徴から東原式に該当すると考えられる。

第27表 山ノ上A遺跡 出土土器観察表(1)

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構名	器種	型式・分類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調1	色調2	胎土1						取上番号	備考		
												石英・長石	雲母・輝石	角閃石	赤褐色粒	礫	その他				
121	611	C-3	-	粗製深鉢	Ic	-	-	-	(外)工具ナデ (内)工具ナデ,ミガキ	(外)7.5YR3/2 (内)10YR5/3	(外)黒褐 (内)にぶい黄褐	○	○					413			
	612	C-3	-	粗製浅鉢	IIIa	-	-	-	(外)ケズリ,ミガキ (内)ミガキ	(外)10YR5/4 (内)7.5YR5/6	(外)にぶい黄褐 (内)明褐	○	○			○		71・他			
	613	C-3	-	精製浅鉢	IVe	-	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)7.5YR5/4 (内)5YR4/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい赤褐	○	◎						377		
	614	C-2	-	粗製深鉢	-	-	-	-	(外)貝殻条痕 (内)貝殻条痕,ナデ	(外)5YR3/1 (内)10YR5/4	(外)黒褐 (内)にぶい黄褐	◎	◎		○	◎			一括	混和材が砂状に入る	
	615	C-4	-	粗製深鉢	-	-	-	-	(外)粗いミガキ (内)粗いミガキ,ナデ	(外)10YR6/3 (内)10YR5/1	(外)にぶい黄橙 (内)褐灰	○	○			◎			56		
	616	C-3	-	粗製深鉢	Ic	-	-	-	(外)貝殻条痕 (内)貝殻条痕	(外)10YR4/2 (内)10YR5/4	(外)灰黄褐 (内)にぶい黄褐	○	○			△				一括	
	617	C-2	-	粗製深鉢	Ic	-	-	-	(外)貝殻条痕,ナデ (内)貝殻条痕,ナデ	(外)7.5YR4/3 (内)10YR5/3	(外)褐 (内)にぶい黄褐	○	○							404	
	618	C-2	-	深鉢?	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ,ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR3/1	(外)にぶい黄橙 (内)黒褐	○	○			△	金雲母 多量		394・ 他		
	619	C-3	-	中華鍋形 組織痕土器	IIIb	-	-	-	(外)工具ナデ (内)ミガキ,ナデ	(外)10YR6/4 (内)ミガキ,ナデ	(外)にぶい黄橙 (内)褐灰	○	○	△					385・ 他	炭素年代測定試料No.004	
122	620	C-3	-	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)7.5YR5/4 (内)10YR5/3	(外)にぶい褐 (内)にぶい黄褐	△	△			◎			379		
	621	D-2	-	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)2.5Y3/1 (内)7.5YR5/4	(外)黒褐 (内)にぶい褐	△	△			◎			一括		
	622	D-2	-	甕	東原	-	-	-	(外)ケズリ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR5/6 (内)10YR6/6	(外)明褐 (内)明黄褐	△	△						一括		
	623	D-2	-	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ,ナデ (内)ハケメ,ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR5/3	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄褐	△	△			◎			一括		
	624	C-3	-	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR5/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい黄橙	△	△			◎			160		
	625	C-3	-	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR5/6 (内)10YR5/3	(外)明褐 (内)にぶい黄褐	○	○		△	◎			194		
	626	B-3	-	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	△		△	◎			249		
	627	C-3	-	甕	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR5/3 (内)10YR6/4	(外)にぶい褐 (内)にぶい黄橙	○	△			◎			268		
	628	C-2	-	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)10YR6/4	(外)橙 (内)にぶい黄橙	○	△	△		◎			401		
	629	C-2	-	甕	東原	-	-	-	(外)ナデ (内)ケズリ,ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)7.5YR5/3	(外)にぶい橙 (内)にぶい褐	◎	◎	△		◎			339		
	630	C-3	-	甕	東原	-	-	-	(外)ハケメ (内)ハケメ,ナデ	(外)7.5YR6/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい橙 (内)にぶい黄橙	○				◎			407・ 他		
	631	B-3	-	甕	-	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR4/4 (内)7.5YR5/4	(外)褐 (内)にぶい褐	△		△	△	◎			52		
	632	C-2	-	布留式模倣 甕か	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)マメツ	(外)7.5YR2/1 (内)10YR7/2	(外)黒 (内)にぶい黄橙	◎	△		△		金雲母 微量		392	外面に平行沈線文有 外面黒色 内面スス附着,搬入品	
	633	C-2 他	-	甕	笹貫	(30.6)	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)ナデ,指オサユ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR5/6	(外)にぶい褐 (内)明褐	△	○		○	○			323・ 他		
	634	C-2 C-3	-	甕	笹貫	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)5YR6/4	(外)橙 (内)にぶい橙	○	○	○	○	○			314・ 他		
	635	C-2	-	甕	笹貫	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)10YR5/4 (内)10YR6/4	(外)にぶい黄褐 (内)にぶい黄橙	○	○	○	○	○			329・ 他		
	636	B-3	-	甕	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)ナデ	(外)7.5YR6/6 (内)7.5YR5/4	(外)橙 (内)にぶい褐	◎	○				金雲母		262		
	637	B-2	-	甕か鉢	-	-	8.0	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)10YR6/4 (内)10YR7/4	(外)にぶい黄橙 (内)にぶい黄橙	○	○	△		◎			355		
	123	638	-	-	壺	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)7.5YR5/4 (内)7.5YR4/4	(外)にぶい褐 (内)褐	○	○		○			一括	二重口縁壺の口縁部	
		639	C-3	-	壺	-	-	-	-	(外)工具ナデ,ナデ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR5/6 (内)10YR7/4	(外)明赤褐 (内)にぶい黄橙	○	○		◎	○			284	
640		B-3	-	壺か高坏	東原	-	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)5YR4/8 (内)7.5YR3/1	(外)赤褐 (内)オリーブ黒	○	○		○			134	外面丹塗り		
641		C-3	-	高坏	東原	(24.0)	-	-	(外)ナデ,ミガキ (内)ナデ,ミガキ	(外)5YR6/6 (内)10YR6/4	(外)橙 (内)にぶい黄橙	△	△		◎				50	外面赤色を呈する	
642		C-4	-	高坏	-	(18.0)	-	-	(外)ミガキ (内)ミガキ	(外)5YR4/6 (内)5YR5/6	(外)赤褐 (内)明赤褐	○	△	△	◎				19	内外面丹塗り	
643		-	-	高坏	-	-	-	-	(外)ミガキ (内)工具ナデ,ナデ	(外)5YR5/6 (内)10YR7/4	(外)明赤褐 (内)にぶい黄橙	○	○	△	△				一括	外面丹塗り	
644		C-3	-	高坏	東原	-	-	-	(外)工具ナデ,ミガキ (内)ナデ	(外)5YR5/6 (内)7.5YR6/4	(外)明赤褐 (内)にぶい橙	○	○		△	◎			39	外面丹塗り	

第 28 表 山ノ上 A 遺跡 出土土器観察表 (2)

挿図番号	掲載番号	出土地点	遺構名	器種	型式・分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調1	色調2	胎土 1					タタキの有無	取上番号	備考
												石英・長石	雲母・輝石	角閃石	赤褐色粒	礫			
123	645	B-3	-	高坏	-	-	(12.0)	-	(外) 工具ナデ, ミガキ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 7.5YR6/4 (内) 5YR6/6	(外) にぶい橙 (内) 橙	○	○	△	△		243	外面丹塗り, 内面スス付着	
	646	C-21	-	壺	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) ナデ	(外) 7.5YR7/4 (内) 7.5YR7/4	(外) にぶい橙 (内) にぶい橙	○	○	△	○		一括		
	647	C-3	-	坏	-	-	-	-	(外) ミガキ (内) ミガキ	(外) 5YR4/6 (内) 10YR6/4	(外) 赤褐 (内) にぶい黄橙	○	○	△			213	外面丹塗り	
	648	-	-	小型丸底壺	東原	-	-	-	(外) ハケメ, ミガキ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 5YR6/6 (内) 5YR6/4	(外) 橙 (内) にぶい黄橙	○					一括		
	649	B-3 C-3	-	小型丸底壺	東原	-	(胴径) 9.0	-	(外) ミガキ (内) 工具ナデ, ナデ, 指オサエ	(外) 2.5Y7/3 (内) 2.5Y7/3	(外) 浅黄 (内) 浅黄			△		火山ガラス	308 他	頸部稜直上, 多重の重弧 文を施す, 胎土精良, 搬入品	
	650	C-4	-	小型丸底壺	東原	-	-	-	(外) ミガキ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 10YR6/4 (内) 5YR6/6	(外) にぶい黄橙 (内) 橙	○	○	△			25	胎土精良	
	651	C-4	-	小型丸底壺	東原	-	-	-	(外) 工具ナデ, ミガキ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 7.5YR6/6 (内) 7.5YR6/6	(外) 橙 (内) 橙	△	△	△			62	胎土精良	

第 29 表 山ノ上 A 遺跡 出土石器観察表

※()は残存分量

挿図番号	掲載番号	出土区	層	器種	分類	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	石材	石材分類	取上番号	備考
118	608	C-3	V	打製石鏃	-	(20.30)	(15.00)	(4.60)	(1.24)	黒曜石	三船	421	一部欠損
	609	C-3	VI	打製石鏃	-	(23.90)	(18.80)	(5.30)	(2.15)	黒曜石	姫島	431	一部欠損
	610	C-3	VI	使用痕剥片	-	32.00	24.90	9.40	6.50	黒曜石	三船	434	

第Ⅶ章 自然科学分析

第1節 概要

萩ヶ峰遺跡ほかの自然科学分析は、①放射性炭素年代測定（報告No. 1, 2）、②炭素・窒素安定同位対比分析（報告No. 1）、③土器胎土分析（報告No. 3, 4）、④赤色顔料分析（蛍光X線分析）（報告No. 4）の4種類で、①～③の分析は外部委託により実施した。委託先は（株）パレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ（株）の2社である。④の分析は県立埋蔵文化財センターにて実施した。③の分析にあたっては、県立埋蔵文化財センター保管資料について分析に係る協議を行い、許可を得て実施した。なお、第Ⅴ章本文中の挿図、図版、表の番号は本章での通し番号とする。

第2節 分析結果の報告

1 放射性炭素年代測定（AMS法）

報告No. 1 （株）パレオ・ラボ（2023年10月報告）

（1）試料と方法

試料は、萩ヶ峰遺跡の包含層から出土した土器から採取された付着炭化物3点（試料No. 1～No. 3：PLD-50136～50138）、堅穴建物跡（以下SH）4から出土した炭化材（試料No. 5：PLD-50140）、SH 3から出土した炭化材（試料No. 6：PLD-50141）と、山ノ上A遺跡の包含層から出土した土器から採取された付着炭化物1点（試料No. 4：PLD-50139）の、計6点である。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

（2）結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内

に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する。68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

（3）考察

放射性炭素年代測定の結果について、 ^{14}C 年代と 2σ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して整理する。

萩ヶ峰遺跡の包含層出土の土器（No. 146）の胴部内面から採取された土器付着炭化物の試料No. 1（PLD-50136）は、 ^{14}C 年代が 2810 ± 25 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が1044-1034 cal BC（1.68%）および1016-903 cal BC（93.77%）であった。

同じく包含層出土の土器（No. 180）の胴部内面から採取された土器付着炭化物の試料No. 2（PLD-50137）は、 ^{14}C 年代が 2825 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が1047-1028 cal BC（5.38%）および1021-911 cal BC（90.07%）であった。

同じく包含層出土の土器（No. 120）の口縁部外面から採取された土器付着炭化物の試料No. 3（PLD-50138）は、 ^{14}C 年代が 2790 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が1008-896 cal BC（89.14%）および874-846 cal BC（6.31%）であった。

山ノ上A遺跡の包含層出土の土器（No. 619）の胴部外面から採取された土器付着炭化物の試料No. 4（PLD-50139）は、 ^{14}C 年代が 1735 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が250-296 cal AD（34.89%）および308-403 cal AD（60.56%）であった。

萩ヶ峰遺跡のSH 4出土の炭化材の試料No. 5（PLD-50140）は、 ^{14}C 年代が 1780 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が229-262 cal AD（27.35%）および276-344 cal AD（68.10%）を示した。藤尾（2013）を参照すると、これは弥生時代後期～古墳時代前期に相当する。

SH 3出土の炭化材の試料No. 6（PLD-50141）は、 ^{14}C 年代が 2775 ± 25 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が998-891 cal BC（72.59%）および881-835 cal BC（22.86%）を示し

た。小林（2017）を参照すると、これは縄文時代晩期中葉に相当する。

土器附着炭化物の場合、土器内面に付着する炭化物は主に煮炊きされた食物に由来し、土器外面に付着する炭化物は、口縁部であれば燃料材の煤や内容物の吹きこぼれ、胴部から底部であれば主に燃料材の煤に由来する可能性が高い。特に、煮炊きした内容物が海産物を主としていた場合には、海洋リザーバー効果によって、測定結果が実際よりも古い年代を示す可能性がある。今回の胴部内面から採取された土器附着炭化物（試料No. 1, No. 2）は、炭素・窒素安定同位体比測定の結果、C₃植物・草食動物に由来する炭化物と推定されたため、測定結果は海洋リザーバー効果の影響を受けていないと考えられる。

また、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の萩ヶ峰遺跡のSH 3およびSH 4から出土した炭化材（試料No. 5, 6）については、最終形成年輪が残っていなかったため、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

2 炭素・窒素安定同位体比分析

（1）試料および方法

試料は、包含層出土の土器の胴部内面から採取された付着炭化物2点（試料No. 1, 2）である。

測定を実施するにあたり、試料に対して、超音波洗浄、アセトン洗浄および酸・アルカリ・酸洗浄（HCl:1.2 mol/L, NaOH:1.0 mol/L）を施し、試料以外の不純物を除去した。炭素含有量および窒素含有量の測定には、EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは、アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。炭素安定同位体比（ $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ ）および窒素安定同位体比（ $\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ ）の測定に

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-50136 萩ヶ峰遺跡 (No. 146)	試料No. 1 出土層位：包含層 遺物No. 23T. III. 1347	種類：土器附着物（胴部・内面） 状態：dry ガス化重量：6.90mg 炭素含有率：57.82%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L）
PLD-50137 萩ヶ峰遺跡 (No. 180)	試料No. 2 出土層位：包含層 遺物No. E-7. IIIa. 5255	種類：土器附着物（胴部・内面） 状態：dry ガス化重量：6.90mg 炭素含有率：56.66%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L）
PLD-50138 萩ヶ峰遺跡 (No. 120)	試料No. 3 出土層位：包含層 遺物No. 23T. III. 1648, 1651/B-8. V. 3169	種類：土器附着物（口縁部・外面） 状態：dry ガス化重量：4.80mg 炭素含有率：59.78%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L）
PLD-50139 山ノ上A遺跡 (No. 619)	試料No. 4 出土層位：包含層 遺物No. C-3. IIIb. 381, 382, 383, 385, 410	種類：土器附着物（胴部・外面） 状態：dry ガス化重量：5.10mg 炭素含有率：55.48%	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L）
PLD-50140 萩ヶ峰遺跡 (SH4出土炭化材)	試料No. 5 遺構：SH4 遺物No. 165	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L）
PLD-50141 萩ヶ峰遺跡 (SH3出土炭化材)	試料No. 6 遺構：SH3 遺物No. 174	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L）

は、質量分析計DELTA V(Thermo Fisher Scientific社製)を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose (ANU)、窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

測定は、次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を、超高純度酸素と共に、EA内の燃焼炉に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。次に、還元カラムで窒素酸化物を還元し、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO₂とN₂を分離し、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は、燃焼炉温度1000℃、還元炉温度680℃、分離カラム温度35℃である。分離したCO₂およびN₂は、そのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

（2）結果

表3に、試料情報と炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を示す。図2には炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係、図3には炭素安定同位体比とC/N比の関係を示した。

図2において、試料No. 1および試料No. 2の土器附着炭化物は、いずれもC₃植物・草食動物の位置にプロットされた。

図3において、試料No. 1および試料No. 2の土器附着炭化物は、いずれもC₃植物・草食動物の位置にプロットされた。

（3）考察

試料No. 1および試料No. 2の土器附着炭化物は、いずれも図2でC₃植物・草食動物の位置、図3でC₃植物・草食動物の位置にプロットされ、C₃植物・草食動物に由来する炭化物と推定される。

引用・参考文献は、報告No. 2にまとめて掲載する。

表 2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-50136 試料No. 1	-25.60 \pm 0.18	2812 \pm 23	2810 \pm 25	999-993 cal BC (5.82%) 989-928 cal BC (62.45%)	1044-1034 cal BC (1.68%) 1016-903 cal BC (93.77%)
PLD-50137 試料No. 2	-25.76 \pm 0.16	2824 \pm 22	2825 \pm 20	1008-968 cal BC (41.39%) 958-931 cal BC (26.88%)	1047-1028 cal BC (5.38%) 1021-911 cal BC (90.07%)
PLD-50138 試料No. 3	-27.06 \pm 0.19	2788 \pm 22	2790 \pm 20	981-948 cal BC (31.74%) 938-904 cal BC (36.53%)	1008-896 cal BC (89.14%) 874-846 cal BC (6.31%)
PLD-50139 試料No. 4	-29.59 \pm 0.18	1734 \pm 22	1735 \pm 20	254-287 cal AD (28.55%) 324-364 cal AD (36.75%) 370-375 cal AD (2.97%)	250-296 cal AD (34.89%) 308-403 cal AD (60.56%)
PLD-50140 試料No. 5	-28.56 \pm 0.19	1779 \pm 22	1780 \pm 20	242-254 cal AD (16.19%) 287-324 cal AD (52.08%)	229-262 cal AD (27.35%) 276-344 cal AD (68.10%)
PLD-50141 試料No. 6	-27.11 \pm 0.16	2774 \pm 23	2775 \pm 25	975-953 cal BC (15.83%) 934-897 cal BC (39.47%) 868-847 cal BC (12.97%)	998-891 cal BC (72.59%) 881-835 cal BC (22.86%)

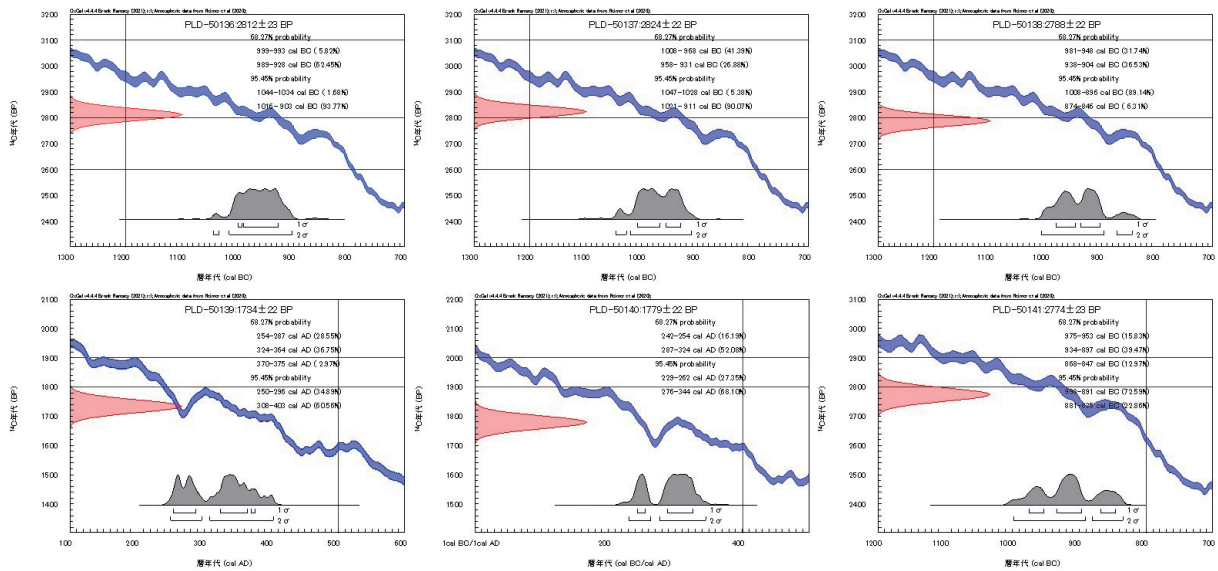


図 1 暦年較正結果

表 3 結果一覧表

試料番号	試料情報	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{air}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比 (モル比)
No. 1 萩ヶ峰遺跡 (No. 146)	種類：土器付着炭化物 採取部位：胴部・内面 遺物No. 23T. III. 1347 年代測定番号：PLD-50136	-24.4	7.08	56.5	5.75	11.5
No. 2 萩ヶ峰遺跡 (No. 180)	種類：土器付着炭化物 採取部位：胴部・内面 遺物No. E-7. IIIa. 5255 年代測定番号：PLD-50137	-24.9	4.89	41.1	4.05	11.8

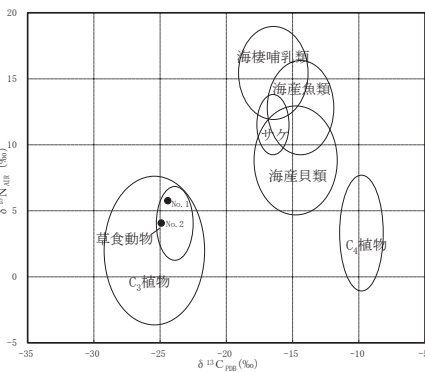


図 2 炭素・窒素安定同位対比 (吉田・西田 (2009)に基づいて作成)

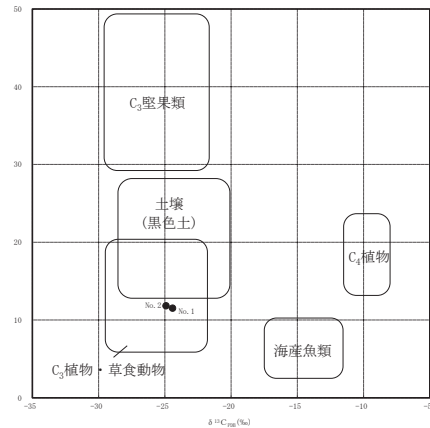


図 3 炭素安定同位対比とC/N比の関係 (吉田・西田 (2009)に基づいて作成)

報告No. 2 (株)パレオ・ラボ(2023年10月報告)

(1) 試料と方法

試料は、萩ヶ峰遺跡の包含層から出土した土器から採取された付着炭化物2点(試料No. 7, 8: PLD-50142, 50143)と、比較試料として石鉢谷B遺跡の包含層から出土した土器から採取された付着炭化物4点(試料No. 9~12: PLD-50144~50147)の、計6点を実施した。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(2) 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(3) 考察

放射性炭素年代測定の結果について、 ^{14}C 年代と 2σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して整理する。

萩ヶ峰遺跡の包含層出土の土器(No. 203)の口縁部外

面から採取された付着炭化物の試料No. 7(PLD-50142)は、 ^{14}C 年代が 2575 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が805-758 cal BC (92.63%)、679-672 cal BC (1.56%)、604-597 cal BC (1.26%)であった。

同じく包含層出土の土器(No. 12)の胴部外面から採取された付着炭化物の試料No. 8(PLD-50143)は、 ^{14}C 年代が 4440 ± 25 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が3329-3221 cal BC (31.01%)、3185-3154 cal BC (5.52%)、3118-3009 cal BC (53.09%)、2986-2932 cal BC (5.82%)であった。

石鉢谷B遺跡の包含層出土の土器(報告書掲載No. 53)の口縁部外面から採取された付着炭化物の試料No. 9(PLD-50144)は、 ^{14}C 年代が 2725 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が912-815 cal BC (95.45%)であった。

同じく包含層出土の土器(報告書掲載No. 69)の口縁部外面から採取された付着炭化物の試料No. 10(PLD-50145)は、 ^{14}C 年代が 2595 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が805-774 cal BC (95.45%)であった。

同じく包含層出土の土器(報告書掲載No. 50)の口縁部外面から採取された付着炭化物の試料No. 11(PLD-50146)は、 ^{14}C 年代が 2715 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が904-811 cal BC (95.45%)であった。

同じく包含層出土の土器(報告書掲載No. 49)の口縁部外面から採取された付着炭化物の試料No. 12(PLD-50147)は、 ^{14}C 年代が 2685 ± 20 ^{14}C BPで、 2σ 暦年代範囲が899-858 cal BC (28.67%)および846-804 cal BC (66.78%)であった。

土器付着炭化物の場合、土器内面に付着する炭化物は主に煮炊きされた食物に由来し、土器外面に付着する炭化物は、口縁部であれば燃料材の煤や内容物の吹きこぼれ、胴部から底部であれば主に燃料材の煤に由来する可能性が高い。特に、煮炊きした内容物が海産物を主としていた場合には、海洋リザーバー効果によって、測定結果が実際よりも古い年代を示す可能性がある点に注意が必要である。今回の試料のうち、胴部外面から採取された土器付着炭化物(試料No. 7, No. 8)は、炭素・窒素安定同位体比測定の結果、 C_3 植物・草食動物に由来する炭化物と推定されたため、測定結果は海洋リザーバー効果の影響を受けていないと考えられる。今回の試料No. 7, 8は、外面の付着炭化物で、燃料材の煤に由来すると考えられる。また、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、6点とも $-25\sim -23\text{‰}$ におさまる値を示した。陸上起源の動植物の場合、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は -25‰ 前後かそれよりも低い値を示す。したがって、今回の試料はいずれも、主に陸産物に由来する炭化物と考えられ、海洋リザーバー効果の影響は考慮しなくてもよいと判断される。

ただし、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は、正確には同位体比質量分析計(IRMS)の測定値で検討する必要がある。今回の試料は、加速器質量分析計(AMS)の測定値であるため、参考に

留めておく必要がある。

引用・参考文献（報告No. 1）
 藤尾慎一郎（2013）弥生文化の新構築. 275p, 吉川弘文館.
 小林謙一（2017）縄紋時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—. 263p, 同成社.
 赤澤 威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元. 田中 琢・佐原 眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」: 132-143, クバプロ.
 坂本 稔（2007）安定同位体比に基づく土器付着物の分析. 国立歴史民俗博物館研究報告, 137, 305-315.
 米田 穰（2008）丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析. 豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」: 261-263, 豊田市教育委員会.
 Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.
 吉田邦夫・宮崎ゆみ子（2007）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究. 平成16-18年度科学研究補助金基礎研究B（課題番号16300290）研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」, 85-95.
 吉田邦夫・西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火焰土器の国 新潟」: 87-

99, 新潟日報事業社.

引用・参考文献（報告No. 1, 2）
 Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
 Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)
 吉田邦夫（2012）古食性分析（縄文人の食卓）. 吉田邦夫編「アルケオメトリア：考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る」:44-55, 東京大学総合博物館.

表4 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-50142 萩ヶ峰遺跡 (No. 203)	試料No. 7 層位: 包含層 遺物No. C-6. III. 2288	種類: 土器付着物 (口縁部・外面) 状態: dry ガス化重量: 2.20mg 炭素含有率: 47.72%	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-50143 萩ヶ峰遺跡 (No. 12)	試料No. 8 層位: 包含層 遺物No. E-21. IIIb. 8205	種類: 土器付着物 (胴部・外面) 状態: dry ガス化重量: 2.10mg 炭素含有率: 54.28%	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-50144 石鉢谷日遺跡 (掲載No. 53)	試料No. 9 層位: 包含層 遺物No. C-3. IIIb. 1026他	種類: 土器付着物 (口縁部・外面) 状態: dry ガス化重量: 5.90mg 炭素含有率: 58.13%	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-50145 石鉢谷日遺跡 (掲載No. 69)	試料No. 10 層位: 包含層 遺物No. B-1. IIIa. 381他	種類: 土器付着物 (口縁部・外面) 状態: dry ガス化重量: 6.70mg 炭素含有率: 56.86%	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-50146 石鉢谷日遺跡 (掲載No. 50)	試料No. 11 層位: 包含層 遺物No. B-3. IIIb. 1730他	種類: 土器付着物 (口縁部・外面) 状態: dry ガス化重量: 6.10mg 炭素含有率: 56.71%	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-50147 萩ヶ峰遺跡 (掲載No. 49)	試料No. 12 層位: 包含層 遺物No. C-4. 3IIIb. 1012他	種類: 土器付着物 (口縁部・外面) 状態: dry ガス化重量: 6.50mg 炭素含有率: 59.22%	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム:1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)

表5 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年時代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-50142 試料No. 7	-23.09 \pm 0.20	2575 \pm 22	2575 \pm 20	793-775 cal BC (68.27%)	805-758 cal BC (92.63%) 679-672 cal BC (1.56%) 604-597 cal BC (1.26%)
PLD-50143 試料No. 8	-25.68 \pm 0.19	4439 \pm 25	4440 \pm 25	3311-3298 cal BC (3.96%) 3284-3274 cal BC (3.59%) 3267-3241 cal BC (11.72%) 3103-3020 cal BC (49.00%)	3329-3221 cal BC (31.01%) 3185-3154 cal BC (5.52%) 3118-3009 cal BC (53.09%) 2986-2932 cal BC (5.82%)
PLD-50144 試料No. 9	-25.59 \pm 0.18	2725 \pm 22	2725 \pm 20	898-866 cal BC (35.91%) 858-831 cal BC (32.36%)	912-815 cal BC (95.45%)
PLD-50145 試料No. 10	-24.60 \pm 0.17	2594 \pm 21	2595 \pm 20	799-786 cal BC (55.03%) 784-780 cal BC (13.24%)	805-774 cal BC (95.45%)
PLD-50146 試料No. 11	-24.92 \pm 0.18	2713 \pm 22	2715 \pm 20	898-867 cal BC (35.93%) 847-819 cal BC (32.34%)	904-811 cal BC (95.45%)
PLD-50147 試料No. 12	-25.45 \pm 0.24	2684 \pm 21	2685 \pm 20	891-882 cal BC (10.48%) 833-807 cal BC (57.79%)	899-858 cal BC (28.67%) 846-804 cal BC (66.78%)

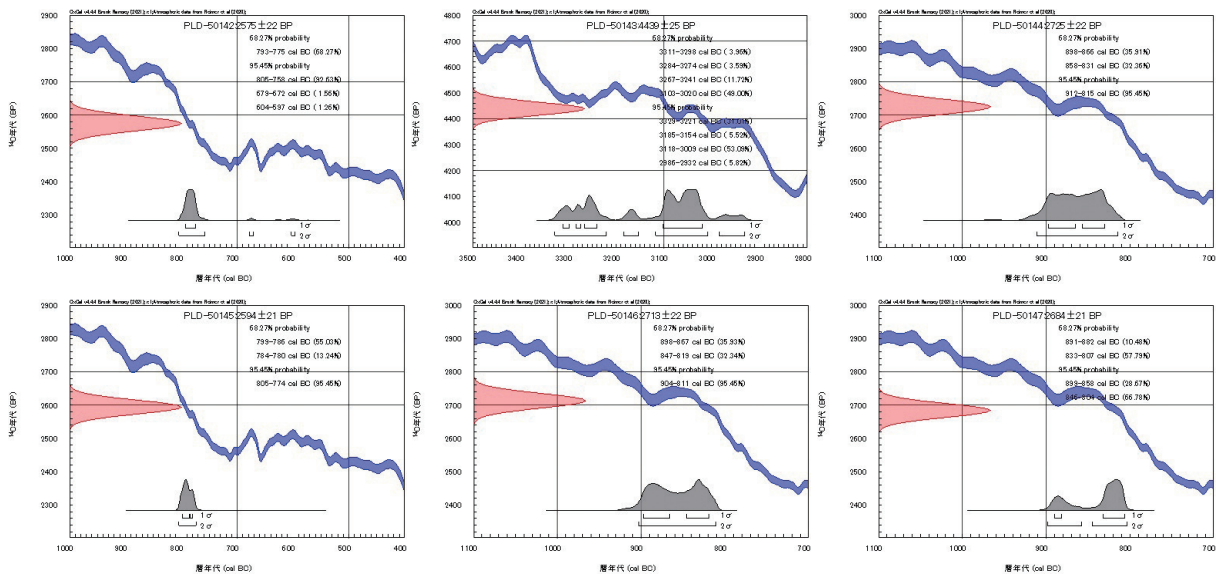


図4 暦年較正結果

3 胎土分析 (胎土薄片顕微鏡観察・胎土蛍光X線分析)

報告No. 3 パリノ・サーヴェイ (株)

(2023年11月報告)

はじめに

大隅半島中西部の鹿屋市白水町に所在する萩ヶ峰遺跡では、縄文時代晩期とされる土器が出土しているが、これらの中には奄美諸島との関連性が指摘されているものもある。本報告では、土器の材質(胎土)の特性を明らかにし、同時に奄美諸島の遺跡から出土した同時期の土器との比較をすることにより、その関連性について検討する。

(1) 試料

試料は、萩ヶ峰遺跡から出土した土器片3点と吐噶喇列島宝島から出土した土器片1点、奄美大島北部の2遺跡から出土した土器片3点および徳之島から出土した土器片1点の合計8点の土器片である。試料には試料No. 001～008までの番号が付されている。試料の詳細を一覧表にして表6に示す。なお、分析資料の図を第125図(P173)に掲載する。

(2) 分析方法

1. 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用いて観察し、胎土に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成等を明らかにした。

なお、薄片観察のデータの呈示は、松田・三輪・別所(1999)が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

2. 蛍光X線分析

蛍光X線分析は、土器胎土分析の分析手法として比較的良好に用いられる方法であるが、薄片観察法に比べて、

結果の評価が砂分の量や高温による鉱物の変化にあまり影響されることがなく、胎土の材質を客観的な数値で示すことができるという特徴がある。以下に、分析手順を述べる。

リガク製波長分散型蛍光X線分析装置(ZSX Primus III+)を用い、ガラスビード法により分析を実施した。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムのFP定量法を使用し、SiO₂、TiO₂、Al₂O₃、Fe₂O₃、MnO、MgO、CaO、Na₂O、K₂O、P₂O₅の主要10元素およびRb、Sr、Y、Zr、Baの微量5元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料(JA-1、JA-2、JA-3、JB-1a、JB-2、JB-3、JCh-1、JF-1、JF-2、JG-1a、JG-2、JG-3、JGb-1、JGb-2、JH-1、JLk-1、J1)装置

(株)リガク製 走査型蛍光X線分析装置 ZSX Primus III+(FP定量法アプリケーション)

1) 試料作製

機械乾燥(110℃)した試料を、振動ミル(平工製作所製TI100;10ml容タングステンカーバイト容器)で粉碎・混合し、ガラスビードを表7の条件で作製した。

2) 測定条件

上記作製したガラスビードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光X線分析装置((株)リガク製 ZSX Primus III+)を用い、表8、9の条件で測定を実施した。

(3) 結果

1. 薄片作製観察

結果を表10、図5～7に示す。今回の試料に認められる特徴的な組成は、火山ガラスを圧倒的に多量に含む組成である。試料No.001、004～007までの5点の組成がそれに該当する。また、試料No.003は、これら5点ほどではないが、やはり火山ガラスの多い組成として捉えられる。火山ガラスは、いずれの試料においてもバブル型が主体を占め、無色透明のものと淡褐色を呈するものとが混在する。火山ガラスが微量あるいはほとんど含まれない試料のうち、試料No.002は斜長石の鉱物片の多いことが特徴であり、試料No.008は多結晶石英と花崗岩類の岩石片が多く、少量のホルンフェルスや緑色岩および粘板岩を伴うことも特徴となる。

砕屑物の粒径組成では、上述した火山ガラスを圧倒的に多く含む5点の試料は、いずれも細粒砂が最も多いが、試料No.003は中粒砂が最も多い。試料No.002も中粒砂が最も多いが、粗粒砂や細粒砂も同程度に多い。試料No.008は粗粒砂が最も多い組成である。

砕屑物・基質・孔隙の割合における砕屑物の割合をみると、試料No.001と002が30%を超える値を示すが、他の試料はいずれも10～15%程度である。

2. 蛍光X線分析

結果を表11に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した(図8)。以下、各散布図における試料の分布状況を述べる。

1) 化学組成中で最も主要な元素(SiO₂、Al₂O₃) (図8-①)

本図は、鉱物や岩石および粘土を構成する化学組成の中で最も主要な元素であるSiO₂とAl₂O₃を選択し、これらを軸とした散布図である。

散布図では、SiO₂が45～55%、Al₂O₃が15～25%の領域に全試料が分布する。試料間の距離が特に近接するものや特に離れたものは認められない。

2) 長石類主要元素(CaO、Na₂O、K₂O) (図8-②)

粘土の母材を考える上で長石類(主にカリ長石、斜長石)の種類構成は重要である。このことから、本図では指標として長石類の主要元素であるCaO、Na₂O、K₂Oの3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合Na₂O+K₂O/(CaO+Na₂O+K₂O)を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合K₂O/(Na₂O+K₂O)を縦軸とする。

散布図では、横軸が0.40～0.70、縦軸が0.40～0.60の領域付近に試料の多くが分布するが、試料No.002のみは縦軸が0.20付近にあり、他の試料からは特徴的に離れた位置にある。

3) 有色鉱物主要元素(TiO₂、Fe₂O₃、MgO) (図8-③)

本図では、輝石類や黒雲母、角閃石などの有色鉱物において、その特性を決める上で重要な元素であるTiO₂、Fe₂O₃、MgOを選択し、Fe₂O₃を分母としたTiO₂、MgOの割合を見る。

散布図では、横軸が0.10～0.15、縦軸が0.08～0.16の領域に全試料が分布するが、その中で試料No.003と008は、他の試料から若干離れて分布する。

4) 微量元素(Rb、Sr、Zr、Ba) (図8-④、⑤)

各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-SrとZr-Baとする。これら4元素は、ほとんどの珪酸塩鉱物中に含まれており、CaやNaなどの元素と挙動を共にすることから、鉱物組成にも連動し、胎土の特性を把握する上で有効な微量元素である。

Rb-Srの散布図では、Rbが40～100ppm、Srが50～600ppmの領域付近に試料の多くが分布するが、試料No.004と008はこの領域から離れた位置に分布する。

Zr-Baの散布図では、Zrが200～350ppm、Baが200～600ppmの領域付近に試料の多くが分布するが、本図でも試料No.004と008はこの領域から離れた位置に分布する。

(4) 考察

薄片観察結果から、ここでは火山ガラスを多く含む胎土をA類とし、試料No. 002をB類、試料No. 008をC類とする。さらにA類の中でも火山ガラスの圧倒的に多い胎土をA1類とし、試料No. 003はA2類とする。そしてA1類については、微量元素組成において試料No. 004に他の試料との有意な差が認められたことから試料No. 004をA1b類とし、他のA1類の試料をA1a類とする。表6には、胎土の分類も一覧にして併記する。

胎土中の碎屑物の鉱物組成や岩石片の礫種組成は、土器の材料となった粘土や砂の採取地の地質学的背景を示唆している。ここではまずA類の土器胎土に含まれる多量の火山ガラスについて検討してみたい。バブル型という形態の火山ガラスが主体をなす堆積物は、一般には巨大なカルデラから噴出した大規模な火砕流を伴う火山噴出物(テフラ)に由来する。特に九州には阿蘇カルデラや始良カルデラ、鬼界カルデラなどの巨大カルデラが分布し、過去にそれぞれ大規模な噴火をして日本列島の広範囲にテフラの堆積層を残している。A類の火山ガラスは、このようなテフラの堆積物に由来すると考えられる。今回の試料は縄文時代晩期とされていることから、A類の火山ガラスの由来するテフラは、縄文時代晩期には比較的人が採取しやすい崖の露頭中に堆積層としてあったことが推定される。A類の試料が出土した萩ヶ峰遺跡の位置するいわゆるシラス台地は、始良カルデラから噴出した大規模火砕流の堆積物であるから、遺跡周辺の堆積物中にはバブル型火山ガラスが多量に含まれている。したがって、試料No. 001の土器は萩ヶ峰遺跡周辺の堆積物を材料として作られたようにも考えられる。しかし、注目すべきは微量ながらも花崗岩類の岩石片を伴っていることである。鹿児島県地質図編集委員会(1990)などの資料を参照する限りにおいては、シラス由来の堆積物中に花崗岩類の岩石片が混在するような地質学的背景は想定し難い。さらに、試料No. 001中の火山ガラスには、褐色を呈する火山ガラスがある程度の量で混在していることも考慮すれば、試料No. 001の火山ガラスは、シラスに由来する可能性は低いと考えられる。

火山ガラスの由来としてシラス以外に考えられるテフラとしては、7300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤテフラ(K-Ah:町田・新井, 1978)がある。K-Ahの降下堆積層は、九州本土の鹿児島県域内の多くの場所で認められており、奄美諸島でも少なくとも奄美大島北部では土層中にテフラ層としてその堆積が認められている(喜子川遺跡調査団, 1988)。また、褐色の火山ガラスが混在することもK-Ahの特性と整合する。以上のことから、A類の胎土に含まれる火山ガラスは、素地土の粘性などを調整するための混和材として加えられたK-Ah層に由

来する可能性が高いと考えられる。

今回の分析の対象地域とされた九州本土の鹿児島県域から奄美諸島までは、K-Ahが堆積層として土層中に認められる分布範囲内にあることから、K-Ah由来の火山ガラスが多く含まれるという特徴のみからA類の土器製作地の具体的な推定をすることは現時点ではできない。今回の試料では、A1類の試料No. 001には花崗岩類が伴われ、A2類の試料No. 003には流紋岩・デイサイトが伴われるなどの違いも認められることから、今後の試料の蓄積により、A類の地域性が浮かんでくることも期待される。さらに、今回の試料においてA1b類に分類された試料No. 004のように、A1a類の試料とは微量元素の割合において大きく異なる結果も得られている。試料No. 004の出土地は吐噶喇列島の宝島であり、その化学組成の特徴はSrとBaの量比が他の試料に比べて非常に高い値を示すことである。これまでの分析事例では、沖永良部島から出土した土器の胎土には、Sr量が以上に多いという傾向が指摘されている(新里・三辻, 2013)。現時点で試料No. 004を沖永良部島産とするわけではないが、これも今後の分析事例の蓄積があれば、地域的な傾向を定めることができるのではないだろうか。

B類の胎土については、その特徴である斜長石の鉱物片は、微量ながらも共伴する岩石片である凝灰岩や流紋岩・デイサイト、安山岩といった火砕岩や火山岩および花崗岩類にも由来すると考えられる。したがって、土器材料の採取地の地質学的背景は、火砕岩や火山岩に加えて花崗岩類も分布するような地域が推定される。上述したように試料No. 002の出土した萩ヶ峰遺跡の地質学的背景はシラス台地であるから、試料No. 002の材料採取地は遺跡周辺ではないと考えられる。化学組成の長石類主要元素の散布図において他の試料から離れた位置にあることもそのことを支持する。B類の具体的な地域の推定も今後の課題である。

C類の胎土については、多種類の岩石片がその地域性を考える指標となる。比較的多く含まれる多結晶石英はおそらく同量程度含まれる花崗岩類に由来すると考えられる。また、変成岩のホルンフェルスは、花崗岩類の貫入によって熱変成した堆積岩類(微量ながら頁岩が認められている)に由来し、緑色岩や粘板岩も分布するという特徴的な地質学的背景が想定される。C類に分類された試料No. 008の出土地は徳之島であるが、木崎編(1985)による地質記載によれば、上述した岩石は全て徳之島に分布することが確認される。このことから、C類の胎土を持つ土器の材料は、徳之島で採取された可能性が高いと考えられる。なお、C類の特殊性は、化学組成においても有色鉱物主要元素および微量元素の各散布図に示されている。

以上、A1a類からC類までの各胎土について、現時点で推定される地域性を述べた。本文中でも繰り返し述べたように、今後も各地の分析事例の蓄積とその解析が必要であると考えられる。

【引用文献】

喜子川遺跡調査団, 1988, 喜子川遺跡-発掘調査報告-。笠利町教育委員会, 45p.
木崎甲子郎編著, 1985, 琉球弧の地質誌。沖縄タイムス社, 278p.
町田 洋・新井房夫, 1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアカホヤ火山灰。第四紀研究, 17,

143-163.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高, 1999, 瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察-岩石学的・堆積学的による-。日本文化財科学会第16回大会発表要旨集, 120-121.

新里貴之・三辻利一, 2013, トマチン遺跡出土土器の蛍光X線分析。新里貴之の編 徳之島トマチン遺跡の研究, 鹿児島大学, 134-139.

R-1, JR-2, JR-3, JSd-1, JSd-2, JSd-3, JS1-1, JS1-2, JSy-1)を用いた。

表6 試料一覧

試料No	遺跡名	型式	器種	遺物番号	報告書掲載番号等	遺跡所在地	胎土*
001	萩ヶ峰	仲原式	甕	2288	203	鹿屋市白水町	A1a
002	萩ヶ峰	黒川式	中華鍋形	3169 他	120	鹿屋市白水町	B
003	萩ヶ峰	黒川式	浅鉢	5689 他	164	鹿屋市白水町	A2
004	浜坂貝塚	仲原式?	壺	—	一般遺物	十島村宝島(吐噺列島南端)	A1b
005	手広	仲原式?	甕	708	一般遺物	龍郷町(奄美大島北東部)	A1a
006	ウフタ	仲原式?	甕	—	一般遺物	龍郷町(奄美大島北東部)	A1a
007	宇宿貝塚	仲原式	甕	18	一般遺物	笠利町(奄美大島北端部)	A1a
008	カメコ	仲原式	甕	—	一般遺物	伊仙町(徳之島南部)	C

*分析結果による(本文参照)

表7 ガラスビード作製条件

溶融装置	リガク製桌上型高周波ビードサンブラ (3091A001)
融剤及び希釈率	融剤 (Li ₂ B ₄ O ₇) 5.000g:試料0.500g
剥離剤	LiI
溶融温度, 時間	1200℃, 600sec

表8 蛍光X線装置条件

ターゲット	Rh	試料スピリン	ON
管電圧(kV)	50	ダイアフラム	30mm φ
管電流(mA)	50	測定雰囲気	真空
試料マスク	30mm φ		

表9 蛍光X線定量測定条件

測定元素	測定スペクトル	1次フィルタ	アッペネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		角度(deg)			計測時間(s)	
							LL	UL	Peak	+BG	-BG	Peak	BG
SiO ₂	Si-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO ₂	Ti-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al ₂ O ₃	Al-Kα	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	-	40	20
Fe ₂ O ₃	Fe-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step)	41.50-42.50 (0.20step)	60	20
CaO	Ca-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na ₂ O	Na-Kα	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K ₂ O	K-Kα	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	280	136.674	-	142.00	40	20
P ₂ O ₅	P-Kα	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	26.598	25.60-25.80 (0.10step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step)	25.60-25.80 (0.10step)	120	40
Y	Y-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.30-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-Kα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-Lα	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

表10 薄片観察結果(1)

試料No	砂粒区分	砂粒の種類構成															合計					
		鉱物片							岩石片							その他						
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	頁岩	凝灰岩	デイサ岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類		ホルンズ	緑色岩	粘板岩	火山ガラス	植物珪酸体
001	細礫																					0
	極粗粒砂																					0
	粗粒砂	1																		2		3
	中粒砂	1		1																	28	30
	細粒砂	2		2	1					1					2						82	90
	極細粒砂	4		1											1						54	60
	粗粒シルト	2			7	1															13	23
	中粒シルト																				1	1
基質																						375
孔隙																						43
備考	褐色粘土鉱物、非晶質物質、炭質物などで埋められる。角閃石、植物珪酸体あり。火山ガラスはバブルウォール型を示す。バブルウォール型火山ガラスは無色透光性を示すものが大部分で、淡褐色を示すものがまれに認められる。斜長石に火山ガラスの付着が認められることがある。孔隙は不定形状〜クラック状を示し、不定形状の孔隙は配向性を示さないが、クラック状を示すものは配向性を示すことがある。																					

表 10 薄片観察結果 (2)

試料 No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計				
		鉱物片									岩石片							その他					
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	頁岩	凝灰岩	デイサイト	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	フェルン		緑色岩	粘板岩	火山ガラス	植物珪酸体
002	砂	細礫																					0
		極粗粒砂			6								1										7
		粗粒砂	5		33	7	1			2			1		2		2						53
		中粒砂	6		36	9							1		2							1	57
		細粒砂	15		23	4	2						3									2	49
		極細粒砂	9		12								1									1	23
		粗粒シルト	4		3																		7
		中粒シルト	2		2																		4
	基質																						381
	孔隙																						12
	備考	褐色粘土鉱物、非晶質物質、炭質物などで埋められる。火山ガラスは、バブルウォール型を示す。斜長石は清澄なものが多い。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。																					
003	砂	細礫																					0
		極粗粒砂																					0
		粗粒砂	3		3	2																4	12
		中粒砂	6		3								2									6	17
		細粒砂	2		4																	5	12
		極細粒砂	1		1																	2	4
		粗粒シルト																					5
		中粒シルト																				1	1
	基質																						387
	孔隙																						9
	備考	褐色粘土鉱物、非晶質物質、炭質物などで埋められる。角閃石、弱酸化した角閃石あり。火山ガラスはバブルウォール～軽石型を示す。無色透光性～淡褐色を示す。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。																					
004	砂	細礫																					0
		極粗粒砂																					0
		粗粒砂			2																	3	5
		中粒砂	3		2																	17	22
		細粒砂	3		2								1									20	26
		極細粒砂	5		2		1															8	16
		粗粒シルト			1																	3	10
		中粒シルト																				1	1
	基質																						661
	孔隙																						48
	備考	褐色粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質、炭質物などで埋められる。斜方輝石、角閃石、弱酸化した角閃石あり。弱酸化した角閃石は土器表層(内側)に認められる。火山ガラスは、バブルウォール型を示す。バブルウォール型火山ガラスは、無色透光性を示すものと淡褐色を示すものが混在する。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。植物片の焼成による脱落痕が認められる。																					
005	砂	細礫																					0
		極粗粒砂																					0
		粗粒砂																				4	4
		中粒砂			2																	50	52
		細粒砂			3																	63	66
		極細粒砂																				22	22
		粗粒シルト																				7	7
		中粒シルト																					0
	基質																						933
	孔隙																						40
	備考	褐色粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質、炭質物などで埋められる。斜方輝石、単斜輝石、珪藻あり。火山ガラスは、バブルウォール型を示す。バブルウォール型火山ガラスは、無色透光性を示すものと淡褐色を示すものが混在する。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。植物片の焼成による脱落痕が認められる。																					
006	砂	細礫																					0
		極粗粒砂																					0
		粗粒砂	2		1			1														4	8
		中粒砂	3		1	2									1							18	25
		細粒砂	4		2								1									38	46
		極細粒砂	1		2	1									1							25	30
		粗粒シルト																				8	8
		中粒シルト																					0
	基質																						735
	孔隙																						43
	備考	珪長質鉱物、非晶質物質、炭質物などで埋められる。珪藻あり。火山ガラスはバブルウォール～軽石型を示す。バブルウォール型火山ガラスは、無色透光性を示すものと淡褐色を示すものが混在する。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。植物片の焼成による脱落痕が認められる。																					
007	砂	細礫																					0
		極粗粒砂																					0
		粗粒砂			1																	10	11
		中粒砂			1																	21	22
		細粒砂	3		2											1						18	24
		極細粒砂	1		1	1																12	15
		粗粒シルト	1																				1
		中粒シルト																					0
	基質																						603
	孔隙																						21
	備考	褐色粘土鉱物、雲母鉱物、非晶質物質、炭質物などで埋められる。角閃石、単斜輝石、凝灰岩、流紋岩・デイサイトあり。火山ガラスはバブルウォール～軽石型を示す。バブルウォール型火山ガラスは、無色透光性を示すものと淡褐色を示すものが混在する。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。																					
008	砂	細礫																					0
		極粗粒砂														1						1	2
		粗粒砂	3				1								10	9	2	2	3				30
		中粒砂	2	1										1	6	5		1	2				18
		細粒砂	5		1										3	3							12
		極細粒砂	4						1	3						1							9
		粗粒シルト	4		1																		5
		中粒シルト	2																				2
	基質																						455
	孔隙																						1
	備考	珪長質鉱物、褐色粘土鉱物、雲母鉱物、炭質物などで埋められる。角閃石あり。孔隙は不定形状～楕円形状を示し、配向性を示さない。																					

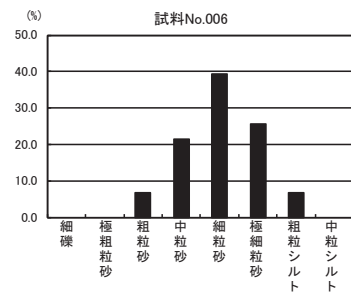
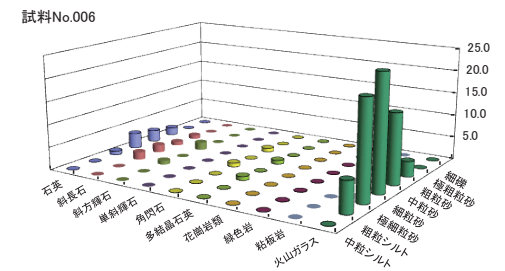
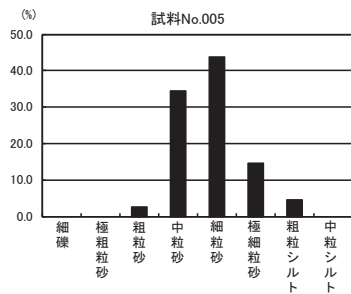
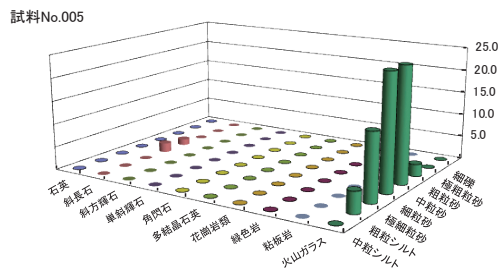
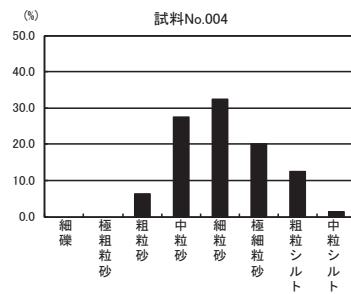
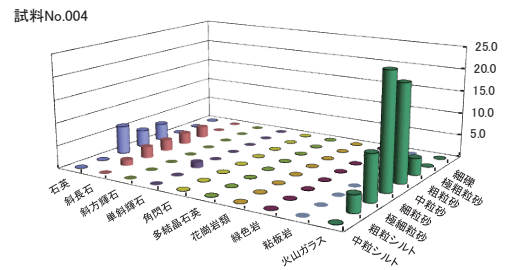
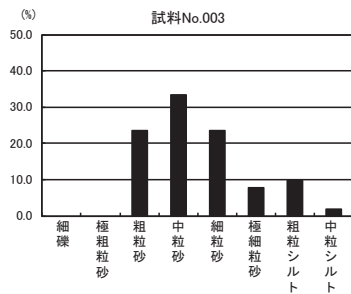
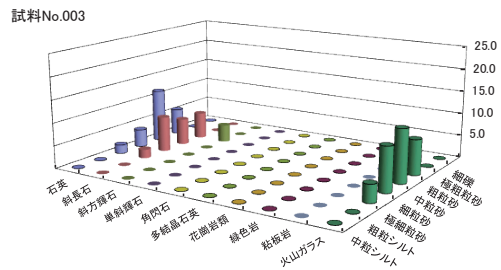
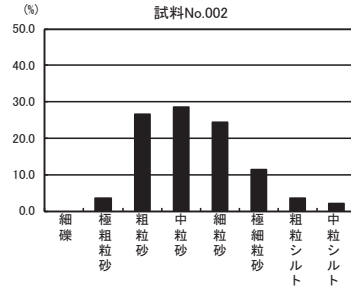
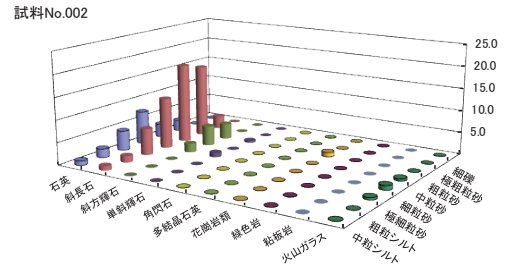
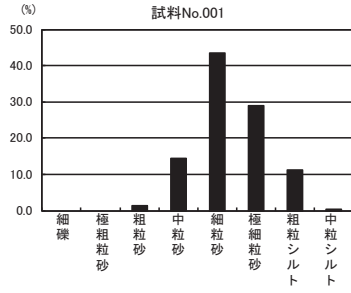
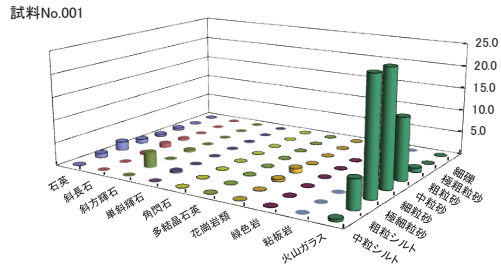
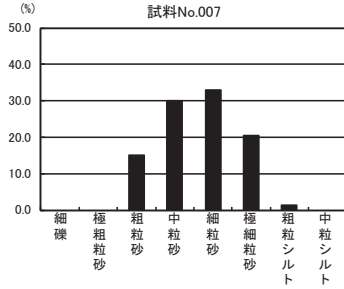
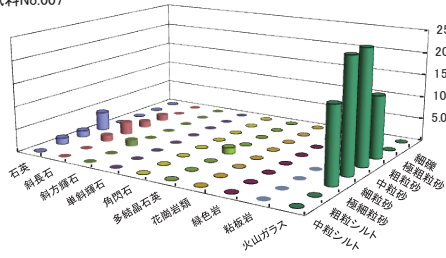


図5 胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成(1)

試料No.007



試料No.008

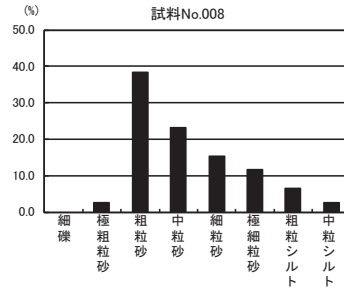
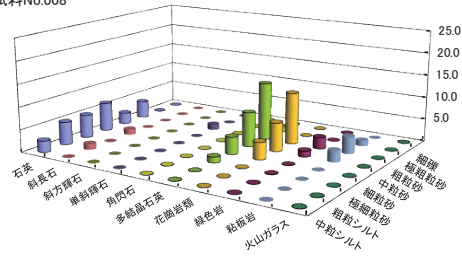


図6 胎土中の碎屑物の鉱物・岩石出現頻度と粒径組成(2)

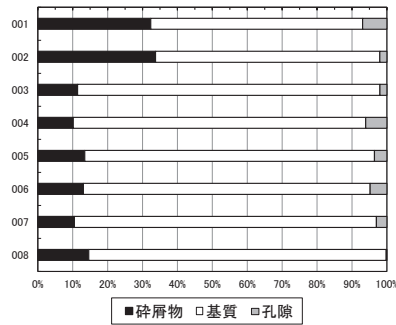
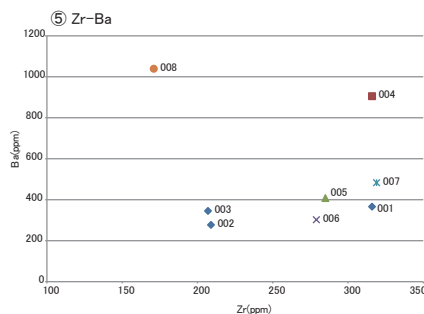
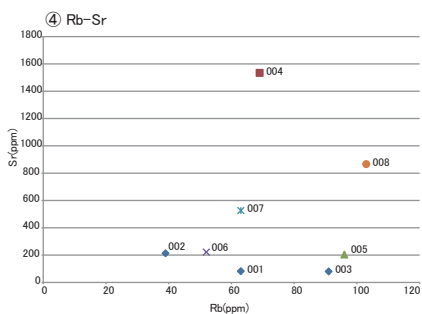
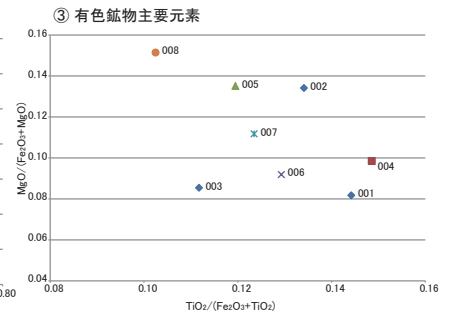
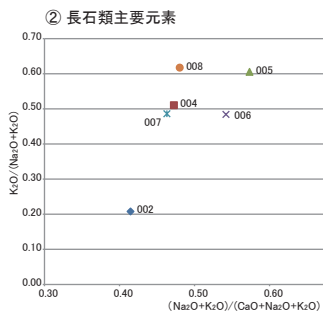
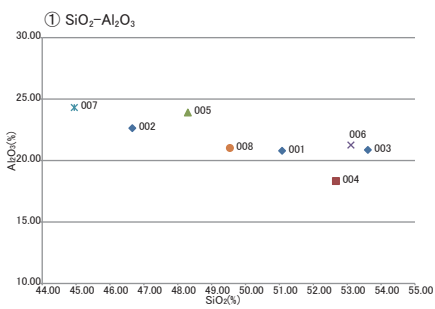


図7 碎屑物・基質・孔隙の割合



- ◆ 萩ヶ峰
- 浜坂貝塚
- ▲ 手広
- × ウフタ
- × 宇宿貝塚
- カメコ

図8 胎土化学組成散布図

表 11 蛍光 X 線分析結果 (化学組成)

試料No.・遺跡名	主要元素										微量元素					Total (%)	
	SiO ₂ (%)	TiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)	P ₂ O ₅ (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)		
001	萩ヶ峰	51.08	1.06	20.79	6.29	0.20	0.56	1.02	1.41	1.19	0.21	63	82	43	316	366	83.90
002	萩ヶ峰	46.66	1.25	22.63	8.07	0.17	1.25	3.67	2.06	0.54	0.05	39	213	48	209	277	86.43
003	萩ヶ峰	53.61	0.97	20.86	7.71	0.12	0.72	0.92	0.99	1.06	0.07	91	80	39	207	345	87.11
004	浜坂貝塚	52.67	1.15	18.33	6.59	0.30	0.72	2.69	1.18	1.23	3.34	69	1534	50	316	905	88.49
005	手広	48.30	1.06	23.91	7.81	0.09	1.22	1.98	1.05	1.61	0.57	96	204	33	285	408	87.70
006	ウフタ	53.11	1.13	21.26	7.61	0.15	0.77	2.13	1.30	1.22	1.17	52	222	46	279	302	89.94
007	宇宿貝塚	44.95	1.12	24.31	7.95	0.13	1.00	2.48	1.10	1.04	2.54	63	526	54	319	483	86.76
008	カメコ	49.54	0.87	21.02	7.62	0.10	1.36	2.63	0.93	1.50	4.27	103	866	47	171	1039	90.06

4 赤色顔料分析

報告No. 4 鹿児島県立埋蔵文化財センター

萩ヶ峰遺跡から出土遺物に付着した赤色物質について、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による成分分析を行った。

(1) 資料について

表面に塗布または付着している赤色粒子 土器20点
土製品 2点
うち 鈴 1点
指サック状土製品 1点

(2) 分析結果について

エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (堀場製作所製 XGT-1000, X 線管球ターゲット: ロジウム, X 線照射径100 μm) を使用し, X 線管電圧: 15/50kV, 電流: 自動設定で分析を行った。以下, 試料ごとの分析結果を第 11 表に示す。

(3) 考察

蛍光 X 線分析の結果, 24 点すべての赤色部分から鉄 (Fe) の成分が高く検出されたため, 鉄を主成分とする広義のベンガラ (赤色顔料) である可能性が高い。土器表面にみられる赤色顔料は, 肉眼で付着が確認でき, 器面との色調の違いが明瞭である。塗布されたものと考えられる。

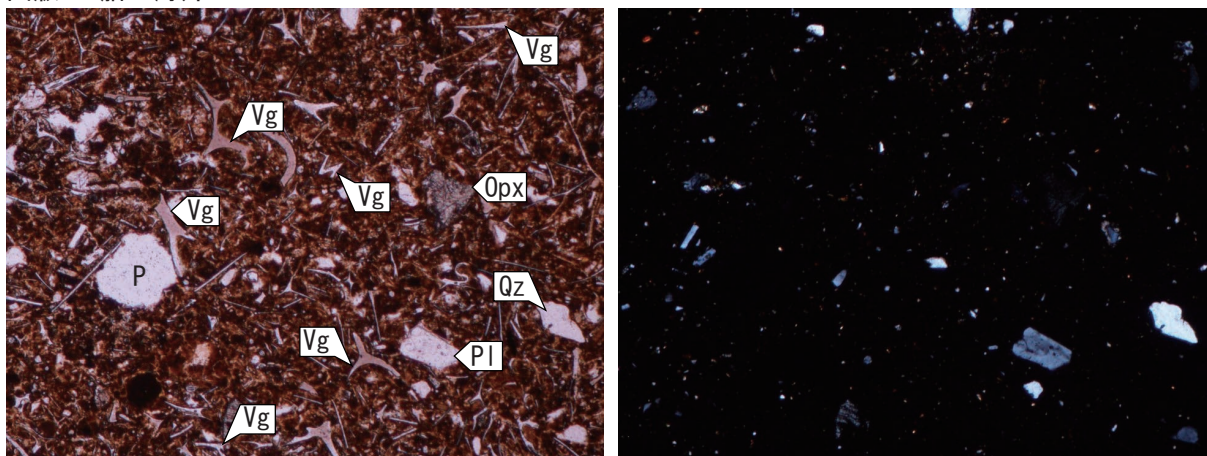
鈴 (No. 537) は, 赤色顔料付着部分と, 付着が肉眼では確認できない部分の鉄の含有量の差が少なく, 今回の分析からは付着あるいは塗布したものか, 胎土に含まれる鉄分が元来多いものかの判断は難しい。

指サック状土製品 (No. 538) は, 内面最下部のあたりに, やや赤色の部分が観察できるが, 今回用いた装置による分析は不可能であった。外面は鉄の含有量が高かったが, 赤色顔料の付着は肉眼では確認できなかった。

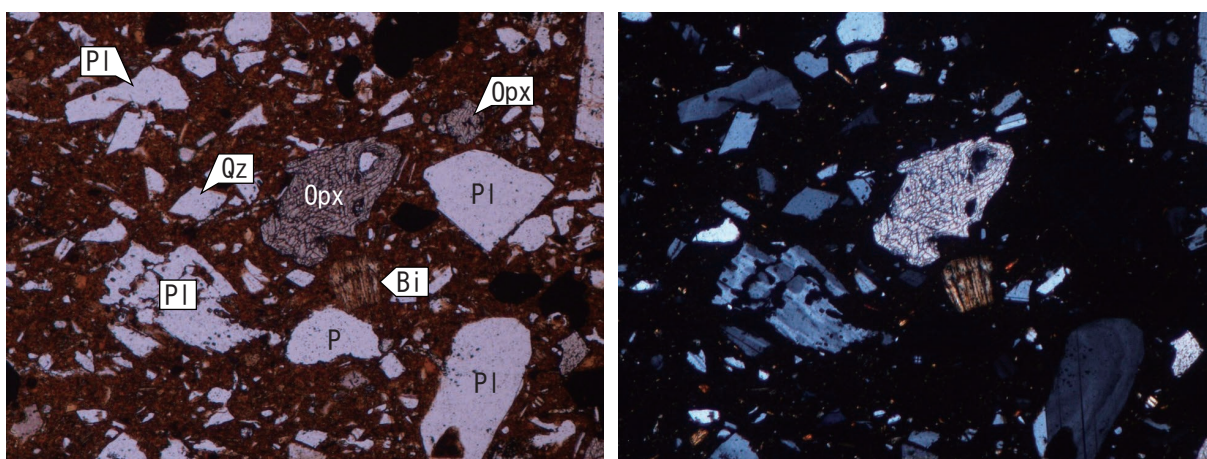
表 12 赤色顔料蛍光 X 線分析結果一覧

挿入番号	掲載番号	種類	時期	型式/類別等	器種	含有成分														
						Al (アルミニウム)	Si (ケイ素)	S (硫黄)	K (カリウム)	Ca (カルシウム)	Ti (チタン)	V (バナジウム)	Mn (マンガン)	Fe (鉄)	Cu (銅)	Br (臭素)	Rb (ルビジウム)	Sr (ストロンチウム)	Zr (ジルコニウム)	
103	498	土器	古墳時代	東原式	高坏 坏部	17.92 (25.13)	62.61 (133.01)	—	3.81 (17.98)	1.44 (8.23)	2.18 (49.31)	—	—	11.87 (637.08)	—	0.07 (6.07)	—	—	0.11 (13.96)	
	505	土器	古墳時代	東原式	高坏 脚	20.11 (17.24)	51.38 (68.14)	0.41 (1.53)	8.08 (26.68)	1.41 (5.24)	3.48 (50.92)	—	—	15.03 (497.02)	—	—	—	0.10 (6.51)	—	
	506	土器	古墳時代	東原式	高坏 脚	20.50 (29.26)	52.07 (118.09)	0.14 (0.94)	2.24 (13.41)	1.29 (9.57)	2.07 (61.60)	—	—	21.50 (1375.17)	—	—	—	0.12 (12.55)	0.07 (8.80)	
	510	土器	古墳時代	東原式	高坏 脚	—	47.22 (25.92)	—	3.84 (5.48)	1.93 (3.30)	2.89 (19.86)	—	3.75 (39.26)	40.00 (480.79)	—	—	—	—	0.37 (6.35)	
	500	土器	古墳時代	東原式	高坏 坏部	24.07 (30.40)	44.42 (87.57)	—	2.91 (16.85)	1.08 (7.67)	2.34 (67.04)	—	0.52 (25.76)	24.60 (1453.52)	—	—	0.06 (5.00)	—	—	
54	189	土器	縄文時代 晩期	千河原 段階	浅鉢	16.26 (8.22)	56.63 (47.53)	0.92 (2.04)	2.48 (4.98)	1.99 (4.90)	3.07 (29.71)	0.05 (0.61)	0.63 (10.82)	17.78 (375.24)	0.0 (1.10)	—	—	0.14 (5.49)	—	
105	537	土製品	古墳時代	—	—	土鈴 (外面)	16.46 (17.69)	62.31 (105.82)	0.45 (1.90)	2.80 (10.58)	2.06 (9.54)	1.92 (34.95)	—	0.08 (2.85)	13.74 (583.95)	0.05 (2.56)	—	—	—	0.11 (10.88)
						土鈴 (断面)	18.11 (24.79)	62.64 (128.40)	0.49 (2.47)	2.60 (11.75)	3.72 (20.54)	1.71 (35.88)	—	0.24 (9.71)	10.33 (528.15)	0.04 (2.61)	—	—	—	—
	538	土製品	古墳時代	—	—	指サック状土製品 (外面 1)	22.35 (35.28)	43.16 (110.40)	0.36 (2.98)	4.15 (31.04)	2.84 (7.52)	2.57 (93.79)	0.05 (2.24)	0.24 (14.85)	26.18 (1938.08)	0.05 (3.16)	—	0.06 (6.68)	—	—
						指サック状土製品 (外面 2)	19.83 (43.25)	40.15 (151.17)	0.39 (4.88)	2.88 (32.55)	3.58 (49.00)	3.03 (159.56)	—	0.50 (43.84)	29.32 (3038.39)	—	—	0.06 (9.20)	0.09 (13.10)	0.17 (29.43)

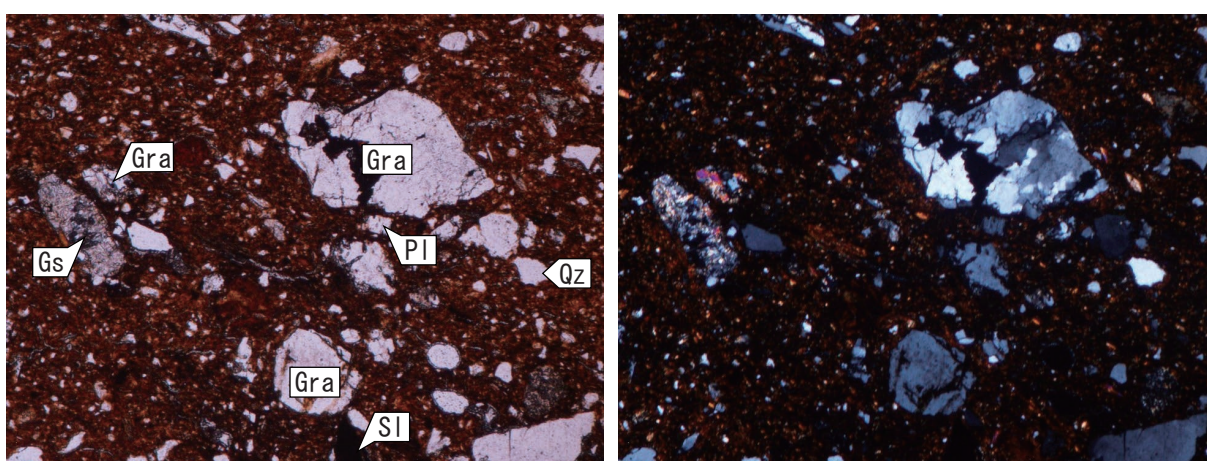
図版1 胎土薄片



1. 試料No. 001 (萩ヶ峰遺跡 仲原式 甕 遺物番号2288 実測番号203)



2. 試料No. 002 (萩ヶ峰遺跡 黒川式 中華鍋形 遺物番号3169他 実測番号120)



3. 試料No. 008 (カメコ遺跡 仲原式 甕 一般遺物)

Qz: 石英. Pl: 斜長石. Opx: 直方輝石. Bi: 黒雲母. Gra: 花崗岩. Sl: 粘板岩.
Gs: 緑色岩. Vg: 火山ガラス. P: 孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

第四章 総括

第1節 萩ヶ峰遺跡

萩ヶ峰遺跡の遺構・土器については各時代個別に記載し、石器については帰属時期が明確に分けることができない部分があるため、第1節(2)にまとめて記載した。

1 縄文時代早期・前期～中期

集石を3基検出したが、礫数は39～87個と少なく掘り込みを確認できたのも集石2号のみであった。構成礫は角の取れた川原石で、遺跡南西を流れる高須川のものを利用していると考えられる。土器は早期の押型文土器と前期末～中期初頭の深浦式土器が出土した。

2 縄文時代晩期

(1) 土器

① 縄文時代晩期土器の型式について (第124図)

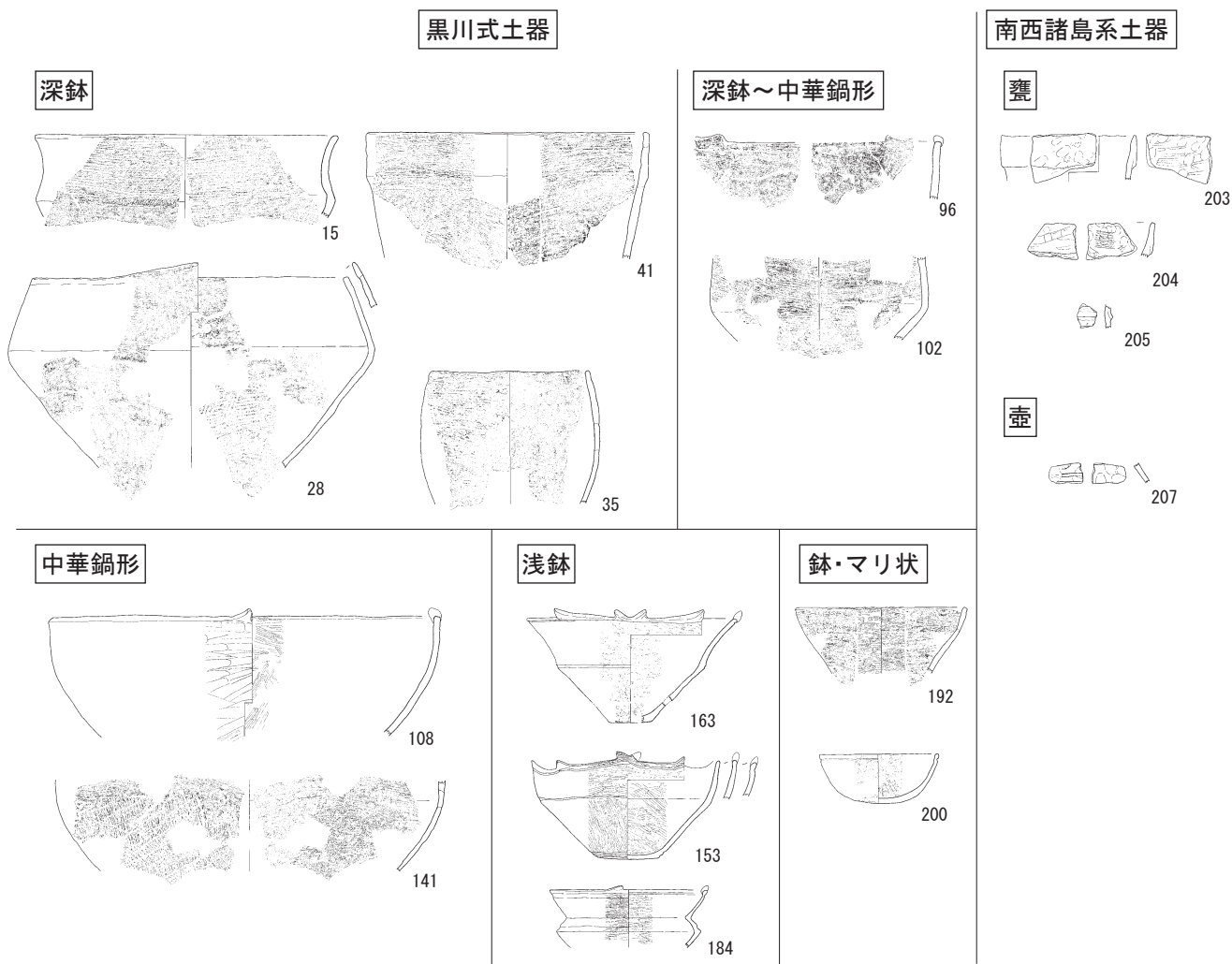
縄文晩期の土器は調査区A～F-5～9区からまとめて出土しており、谷部に流れ込んでいる様子が確認できた。遺物が出土した標高としては131～132mと134～

136mに集中する。萩ヶ峰遺跡の縄文時代晩期土器の出土は9割以上がこの谷に集中しており、谷の北側の台地に生活拠点があったと推測される。

萩ヶ峰遺跡出土の深鉢土器(I類土器)は、胴部が「く」の字に屈曲するIa類や口縁が内傾・内湾するIb・Ic類は少量であり、口縁が外傾または外湾するId類がほとんどであった。そして口唇部をナデることにより口縁部を肥厚させるものが多い。

II類土器は器形としては深鉢土器であるが、内面に丁寧なミガキ調整を施し平滑に仕上げるものである。出土数は少ないが、深鉢形土器と中華鍋形土器の使用の違いや変遷をたどる上でII類土器の存在は重要であると考えられる。

中華鍋形土器(III類土器)は組織痕が残らないもの(IIIa類)がほとんどであり、組織痕が残るもの(IIIb類)の組織痕原体はすべて網布であった。IIIb類の中には組織痕を途中までナデ消しているものもあり、IIIa類にも本



第124図 萩ヶ峰遺跡出土の縄文時代晩期土器群 (S=1/9)

来は組織痕が残っていたと考えられる。

浅鉢土器（IV類土器）は、底部接地面付近に沈線を巡らせ底部から胴部までは外反し、胴部から口縁部までは内湾する器形のもの（IVa類）と底部から胴部までは直線的に開き、胴部から口縁部までは外反する器形のもの（IVb類）が出土している。底部の接地面付近に沈線を巡らせる浅鉢は周辺の石鉢谷B遺跡からも出土しているが、石鉢谷B遺跡出土のものは頸部が「く」の字状にくびれており全体的に屈曲が強い。

縄文時代晩期の黒川式土器については、堂込秀人により深鉢と浅鉢のセット関係から、古・中・新の3様式に細分されている。堂込は、口縁部や胴部に屈曲をもたずそのまま立ち上がる深鉢（F類）とそれに突帯をもつFⅡ類、肩が「く」の字状になり口縁部が内傾する深鉢（E類）に突帯をもつEⅡ類があらわれるものを新様式とした。EⅡ・FⅡ類は刻目突帯文土器に継続することを指摘した（堂込1997）。東和幸は、無刻目突帯文をもつ深鉢土器や丸平底の底部に沈線が巡る浅鉢土器といった黒川式土器の最終段階の土器を、南九州の地域性を強調するために干河原段階とした。また干河原段階から数型式を経て刻目突帯文へ至るとしている（東2002・2009）。

萩ヶ峰遺跡の深鉢土器は、口縁部を明確に肥厚させるものは少ないが、口縁部をナデにより断面三角形に尖らせるようなものが多い。浅鉢土器にはIVa類の様な底部の接地面付近に沈線を巡らせる土器がある。これらの特徴から萩ヶ峰遺跡の黒川式土器は、堂込の黒川式土器新様式、東の干河原段階に該当すると考えられる。また、萩ヶ峰遺跡や石鉢谷B遺跡からは刻目突帯文土器の出土は確認できておらず、今回出土した口縁部を肥厚させない一群は、東が指摘している干河原段階から刻目突帯文土器をつなぐ資料となる可能性がある。

②V類土器：南西諸島系土器について

器形と胎土について

前述の黒川式土器新様式（干河原段階）とともに南西諸島系土器（V類）が、谷部下部にあたる調査区B・C-5～7区から出土した。

V類土器の甕は幅広に肥厚した口縁部をもち、外面はナデ、内面はミガキによる調整を行い、指頭圧痕が明瞭に残る。壺は外面に2条の沈線を施す。V類土器の胎土は総じて火山ガラスを多く含み、泥質である。

今回、V類土器の製作地の検討のため、比較資料として同遺跡出土の黒川式土器と吐噶喇列島・奄美群島の遺跡出土資料を薄片顕微鏡観察および蛍光X線分析を行った。実測図は第125図に示す。分析試料を概観すると、内面にミガキを施すという点と指頭圧痕が明瞭に残ることが共通点としてあげられる。器形としては、試料NO.008（伊仙町カメコ遺跡出土）のものが口縁部を幅

広に肥厚させており、試料No.001（萩ヶ峰遺跡出土）のものに近い。胎土分析の結果としては第七章に示すとおり、萩ヶ峰遺跡出土のV類土器は、奄美市龍郷町手広遺跡、ウフタ遺跡、奄美市笠利町宇宿貝塚の資料と近い胎土であることが分かった。

以上、土器の器形及び胎土分析の結果から、V類土器は南西諸島系土器の仲原式土器であり、奄美大島北部の土を使用して作成された可能性が高いことが分かった。仲原式土器は沖縄県うるま市与那城伊計（伊計島）に所在する仲原遺跡を標式遺跡とする土器であり、沖縄諸島をはじめ奄美群島および鹿児島本土でも出土例がある。

鹿児島本土での類例について

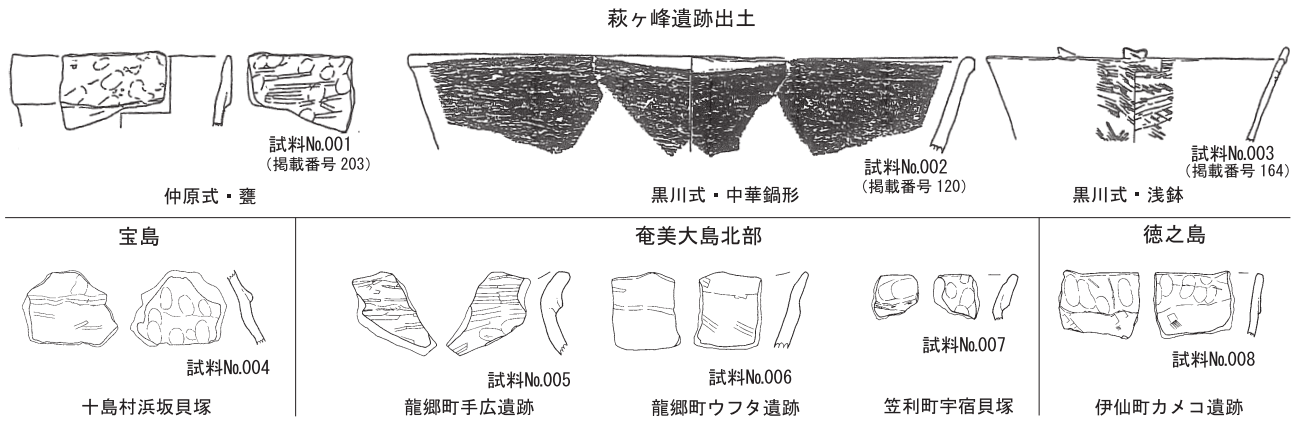
鹿児島県本土で縄文時代晩期から弥生時代初頭の南西諸島系の土器が出土している遺跡は第30表の5遺跡であり、各出土遺物は第126図に示した。第126図の1は高橋貝塚出土の仲原式土器と考えられる器形の土器であり、九州考古学第18号の中で縄文式系統の甕形丸底土器として報告されている（河口1963）。資料を実見したところ非常に焼きが良く、硬質な胎土である印象を受けた。内外面ともに横方向のミガキが顕著である。第126図の2は南摺ヶ浜遺跡出土の宇宿上層式土器の甕である。混和材には雲母が多く見られ、白色粒はほとんど見られないと報告されている（指宿市1993）。第126図の3は中町馬場遺跡出土の宇宿上層式土器である。第126図の4・5は下堀遺跡出土の壺である。4は喜念I式～仲原式に類似、5は沖縄本島の弥生時代前期の壺形土器に類似すると報告される（金峰町2005）。第126図の6は上水流遺跡出土の壺である。外面に細沈線を施しており喜念I式から仲原式に該当するとみられる。鹿屋市串良町小牧遺跡から面縄前庭式の可能性がある土器が出土しているが、小片であり胎土等も不明瞭であったため今回は取り扱わない。

鹿児島本土の南西諸島系土器出土遺跡は、薩摩半島に偏っており、今回の萩ヶ峰遺跡の仲原式土器は明確な南西諸島系土器としては大隅半島初の事例となる。萩ヶ峰遺跡が所在する鹿屋市と奄美大島北部間は直線距離で約350km、沖縄本島とは約600kmある（第127図）。今後出土資料や胎土分析試料が増えることで、さらに各島の様相や本土と南西諸島との流通経路等が解明されることが期待される。

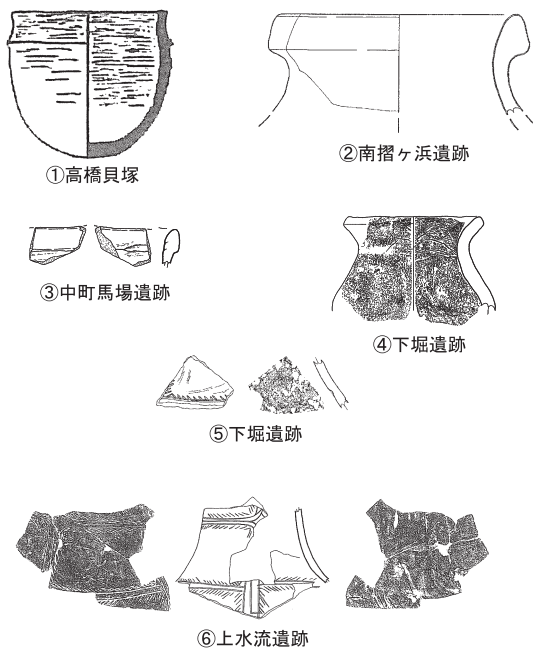
本土土器との併行関係について

仲原式土器と本土土器との併行関係については、前項で紹介した鹿児島本土の南西諸島系土器出土遺跡5遺跡での出土状況から、仲原式土器は南九州地域の黒川式から刻目突帯文土器期に併行し、その下限は弥生時代前期初頭まで下る可能性があると考えられている（新里1999・2008、玉榮2014）。

V類土器出土地点の周辺からは縄文時代晩期の黒川式



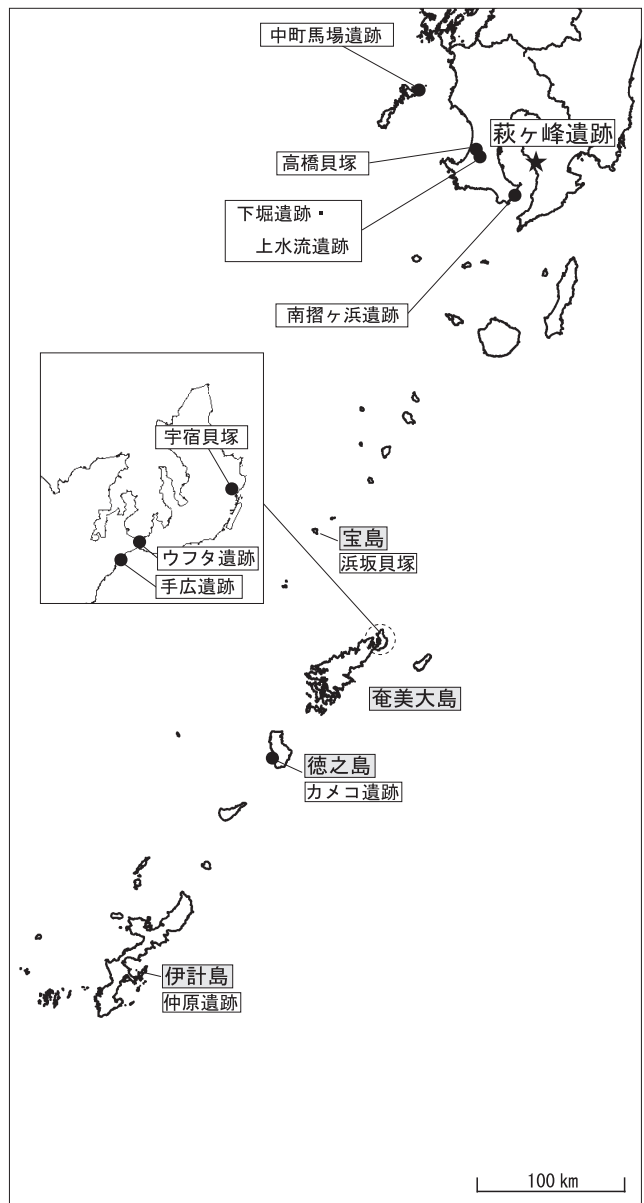
第125図 胎土分析試料実測図 (S=1/6)



第126図 鹿児島県本土出土南西諸島系土器 (S=1/6)

第30表 鹿児島県本土南西諸島系土器出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	第126図 遺物番号
南摺ヶ浜遺跡	指宿市十二町摺ヶ浜南	2
中町馬場遺跡	薩摩川内市里村里	3
下堀遺跡	南さつま市金峰町尾下	4・5
高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	1
上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬上水流・森山	6



第127図 南西諸島系土器出土分布図

土器新様式（干河原段階）と思われる深鉢や中華鍋形土器、浅鉢が出土している。前述したように萩ヶ峰遺跡から刻目突帯文土器は出土していないが、隣接する白水B遺跡から刻目突帯文土器が1点出土し、西日本の縄文時代晩期から晩期前葉に盛行した櫃原文土器が出土している。萩ヶ峰遺跡の仲原式土器は、谷に流れ込むような形で出土しており、厳密な土器の併行関係を述べることはできないが、大隅地域において縄文時代晩期終末期の土器とともに南西諸島系土器が出土したことは、南西諸島と本土の交流を解明する上で重要である。

また、南西諸島系土器の甕（203）の内面についた煤の年代を測定した結果、暦年較正が 2σ :805-758calBC (92.63%), 679-672calBC (1.56%), 604-597calBC (1.26%)である。一方萩ヶ峰遺跡・石鉢谷B遺跡の黒川式土器新様式（干河原段階）の付着炭化物の年代測定結果は、較正年代が紀元前8～11世紀の値が出ており、長期間使用された黒川式土器の最終段階において南西諸島系土器が同時期に利用された可能性が考えられる。

（2）石器

石器は、本報告の3つの遺跡で出土点数が少ないながらも器種・石材ともに様々なものがみられた。

起因事業の国道220号古江バイパス建設に伴う発掘調査成果を加えて考察を行いたい。

ア 石材

旧石器時代から縄文時代では、遺跡から遠く離れた県外産の腰岳産・針尾産・姫島産の黒曜石があり、また県内産の石材についても砂岩・安山岩・ホルンフェルスC以外は遺跡周辺では産出ししないものである。水晶については産地不明であるが、鹿屋市域での産出も知られ、中野西遺跡では旧石器時代から水晶が利用されている。

このことから、各時代を通して居住期間は長くなく集落規模も大きくないものの、広域な交流の中にある一集団の居住が想定できる。

石錘・磨敲石・ハンマー・石皿・台石には、砂岩・安山岩とホルンフェルスCが使用されている。

ホルンフェルスの利用は、萩ヶ峰遺跡で分別したA・Bが石斧・磨製石鏃、Cがその他の礫を利用した石器と明確に分かれた。

大隅地域での石材利用について当センター刊行の『見帰遺跡』第VI章でも記されている。志布志市、大崎町、鹿屋市串良町、鹿屋市錦江湾側で地域差があるようであり、古江バイパス関連の遺跡の出土遺物もそれを裏付ける結果である。

イ 旧石器時代

山ノ上B遺跡で礫群と少量の石器が出土している。

ウ 縄文時代早期

石鉢谷A遺跡・山ノ上B遺跡で集石等の遺構とともに

多くの遺物が出土している。

エ 縄文時代前期～後期

縄文時代前期～後期は遺構・遺物の出土は少ない。

オ 縄文時代晩期から古墳時代

磨製石鏃

縄文時代晩期から弥生時代と考えられるものが萩ヶ峰遺跡で1点、白水B遺跡で3点、石鉢谷B遺跡で1点出土している。白水B遺跡の掲載No.150（調査センター2016『白水B遺跡』にて報告）は剥離面を残し正面・裏面のみを擦って仕上げたものであるがそれ以外は全面に擦痕が観察できる同種のものである。

石錘

萩ヶ峰遺跡で両端に鋭利な工具で擦り、抉りを作成しているものが1点みられた。周辺での出土例がなく希少なものである。

磨敲石・ハンマー

自然礫をそのまま利用しているものが多く成形されたものは少ない。また、割れた後の再利用や敲打具への転用が見られる。手のひらに収まるサイズのものとは大きく重量のあるものがある。磨敲石は集石遺構の構成礫に転用されているものもある。

台石・石皿

扁平な自然礫利用の不定形なものばかりで成形されたものはない。集石遺構の構成礫に転用されているものもある。

磨製石斧

蛇紋岩製のものが萩ヶ峰遺跡で3点・石鉢谷B遺跡で1点出土している。両遺跡では形状が異なり、石材の質は萩ヶ峰遺跡の方がよい。また、萩ヶ峰遺跡出土のうち1点は敲打具として転用されている。

打製石斧

厚みがあり短冊形のものとは扁平で抉りをもつもの2種がある。扁平の出土量が多い。

厚みがあり短冊形ものは、全面に加工が施されるものと自然礫の一部を加工したものに分けられる。

扁平で抉りをもつものについて、萩ヶ峰遺跡では、基部と刃部での分類を試みた。その他の遺跡でも同様の傾向が見られる。

打製石斧刃部・肩部でA類としたものは、少なくとも刃先から肩部にかけてが「横倒した」コの字状の形態のもの、「斜位に」コの字状を呈するものとその亜種的なもの3種には細分できる。「斜位に」この字状を呈するのは片側の肩部の張り出しが大きいことが特徴である。

完形品の長さについて着目したい。萩ヶ峰遺跡では8～9cm程度のものと、13～14cm程度のもの2種に完全に分かれた。その他の遺跡では10cm～14cmの間で偏りがなく、8～9cmのものがない。この2点が萩ヶ峰遺跡とその他の遺跡とで明確に違いが見られる。

砥石

萩ヶ峰遺跡で六角柱状の安山岩製の砥石と扁平な頁岩製の砥石が竪穴建物内と包含層から出土している。扁平な砥石は大型と小型の種がある。小型に属する275と277は側辺にも成形が施され、大きさと形状から携帯可能な砥石である。その他の遺跡では、砥石の出土は少ない。

軽石製品

萩ヶ峰遺跡では軽石製品は遺構内のみで出土した。その他の遺跡では軽石製品の出土は少ない。

石冠

石鉢谷B遺跡で1点出土している。本報告の3つの遺跡では出土していない。

転用

転用が多く見られた。様々な機種が敲打具として転用され、割れた箇所で鋭利な所を利用することが共通している。用途は不明であるが特定の目的で転用したことが想起でき、また、その目的を専用とする石器がないことが特筆できる。

3 古墳時代

萩ヶ峰遺跡の古墳時代の包含層はⅢ層で、後世の耕作などによる攪乱や起伏と傾斜の大きな地形的条件からも包含層の残存状況が悪いことは第Ⅲ章に報告したとおりである。そのような条件下ではあったが、遺跡のなかでも標高が高く、起伏の緩い平坦な地形である遺跡北側のD・E-19～20区において竪穴建物跡4基を検出した。4基ともに平面形状は不定形である。竪穴建物跡からは多数の土器片と、小形のハンマー、軽石製品、台石などの石器がみつかった。竪穴建物跡2号からは腐食により器種の特定は難しかったが、鉄器も出土した。

これらの竪穴建物跡の西側には帯状硬化面が2条、東側には溝が2条、平行に検出されている。本遺跡の北側には、台地状の平坦地が広がっており現在は畑として使用されている。畑の周囲には古墳時代の土器片が多く散布している。この平坦地にも集落が広がることが推測され、今回の調査では集落の南端を捉えることができたと考えられる。帯状硬化面や溝は掘り込みが判然としなかったため、集落へ続く道として自然に凹みや硬化面を形成したものである可能性も考えられる。溝については、その東側からは土器が殆ど出土しなかったことから、集落を区画する溝である可能性もある。

ほかに注目される遺構は、C-23区で検出された土器集中2号である。在地の胎土で製作された丸底の甕や蓋、鉄器の研磨を窺わせるような硬質の頁岩製の砥石がまとめて検出された。検出地点は遺跡の南側で土地の傾斜が大きい。竪穴建物跡や煮炊きの場であった可能性も考え、調査時に周辺を精査したが掘り込みや炭化物は確認できなかった。丸底甕は外面肩部に横位のハケメを

施し、内面は稜近くまでにケズリを施した後で丁寧にナデて仕上げている。布留式系統の土器の製作技法の影響を受けた遺物であることが考えられる。しかし、丸底の甕はごく少量で、周囲から出土した土器の特徴から、4世紀頃までには丸底甕の伝播があったことは分かるが、積極的に受容することはなく、在地系の脚台付の甕を使用し続けたことが推測される。今回の調査で、遺構から出土した土器は東原式段階に限られる。

包含層からは、5世紀代と考えられる須恵器の蓋や、土鈴、指サック状土製品も出土したが、調査区西側の竪穴建物跡からは小谷を挟んで離れた位置からの検出のため、遺構とは帰属時期に差がある可能性がある。また、笹貫式段階の甕が出土したが少数であった。

(1) 竪穴建物跡から出土した土器の特徴について

成川式土器については、中村氏(1987, 2002など)によって提唱された中津野式→東原式→辻堂原式→笹貫式という編年が使用されてきた。近年は、古墳時代の集落遺構や墓域の発掘調査の増加によって、庄内式・布留式系統の土器や須恵器、宮崎や熊本など他地域の土器との共伴関係を示す事例も増加した。そのため型式毎の詳細な帰属時期や、地域差による細分の可能性についての研究が進歩している。塚崎古墳群などの一括資料を基にした編年案(2019橋本)や中村氏の研究を基に新しい資料を多く加え器種毎の詳細な形態分類によって中津野式・東原式・笹貫式を細分類した編年案(2021松崎)がある。また成川式土器と他の地域の土器との併行関係については、北部九州は久住氏の2013年の研究、宮崎地方は河野氏の2019年の研究などに詳しい。

これらをふまえて、器形の推測ができる資料を多く得た甕と小形丸底壺(埴)に着目し、ここでは松崎氏による編年案を基準に本遺跡の竪穴建物跡の帰属時期を考察する。

甕形土器について

竪穴建物跡2, 3, 4号から出土したものは口縁端部を「コ」の字状に角張らせて丁寧に仕上げたものが多く出土し、頸部の稜も明瞭とまではいえないが大きな角度で開く傾向がみられた。また胴部がやや張り出す傾向がみられることも共通する。松崎氏による甕の口縁部形態のg・h・iを有する甕7～9類に該当し、東原式土器の古段階の東原Ⅰ式に分類できると考える。

竪穴建物跡1号から出土したものは、ほかの3基から出土したものと比較すると頸部の屈曲角度が明らかに緩く、胴部は膨らみを持たず底部にむかってすぼまる。上記の口縁部形態のi, jを有する甕9・10類に該当し、東原式土器の新段階の東原Ⅱ式に分類できると考える。

小形丸底壺について

竪穴建物跡2・3号からは松崎氏の分類による埴S系

統（器高に対して胴部が浅いタイプ）のうちS 1・S 2類が出土しており、東原Ⅰ式に分類できると考える。

竪穴建物跡1号からは埴S系統のうち口縁部が内傾するタイプのS 4類が出土し、東原Ⅱ式に分類できると考える。

以上、出土した土器の特徴から竪穴建物跡2～4号は東原Ⅰ式を伴う遺構で、竪穴建物跡1号は東原Ⅱ式を伴う後出の遺構であると考えられる。竪穴建物跡1・2号は近接して検出された状況からも時期差があることが窺える。竪穴建物跡3号から検出された炭化材は放射性炭素年代測定によって3世紀後半～4世紀前半の値を得た。床面から出土した土器との年代観に違和感がない結果である。このことから本遺跡の東原式土器を伴う集落は概ね古墳時代前期後半～中期初め頃の年代に帰属すると考えられる。

また、竪穴建物跡2・3号の床面から出土した遺物は丹塗りの壺、高坏、小形丸底壺、鉢といった日常使いとは離れた特殊な器種が多く含まれ（332, 350, 354, 372, 376, 378, 380など）、廃屋儀礼に使用された可能性も考えられる。

（2）竪穴建物跡2・3号の形態と近隣の類似例（領家西遺跡7号および鷺ヶ迫遺跡3号）について（第128図）

萩ヶ峰遺跡の竪穴建物跡2・3号の形態は、平面形が方形に近く、南側の中央部分がわずかに張り出す。また、柱穴の可能性のある中央部分の2か所の土坑や、床面がステップ状に段を形成することも共通する。うち竪穴建物跡3号は張り出し部分に円形の土坑を有する。

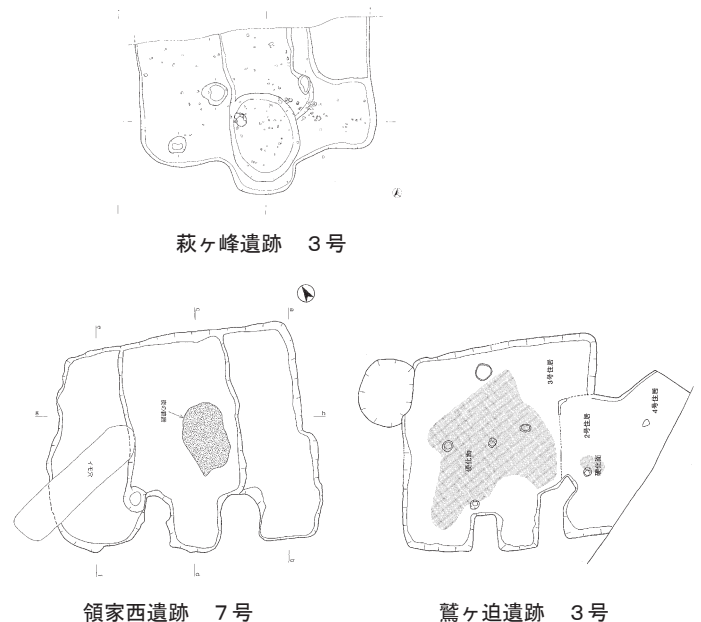
領家西遺跡7号と鷺ヶ迫遺跡3号は、ともに南側に小さな間仕切りを有する、「E」の字のような形態である。平面形は領家西遺跡7号はやや隅が丸く壁に凹凸が目立つが方形に近く、鷺ヶ迫遺跡3号はより方形に近い形状である。出土した土器は、領家西遺跡7号は東原式の範疇にあると推測され、鷺ヶ迫遺跡3号は東原Ⅱ式～辻堂原式の特徴をもつ。これらの遺構から検出された炭化材の年代測定値を第31表に示した。領家西遺跡7号は3世紀代の、鷺ヶ迫遺跡3号は4～5世紀初め頃の結果を得ている。本遺跡の竪穴建物跡2・3号とほぼ同時期と推測される4号は3世紀～4世紀頃の結果を得ており、このような竪穴建物跡の形態は、古墳時代前～中期のものであると考えられ、高須川流域の遺跡において類例がやや多い。

（3）国道220号バイパスの弥生時代中期～古墳時代後期の集落について

第129図と第31表に国道220号古江および鹿屋バイパス建設事業、肝属平野で発見された弥生時代中期～古墳時代の主要な集落遺跡についてまとめた。

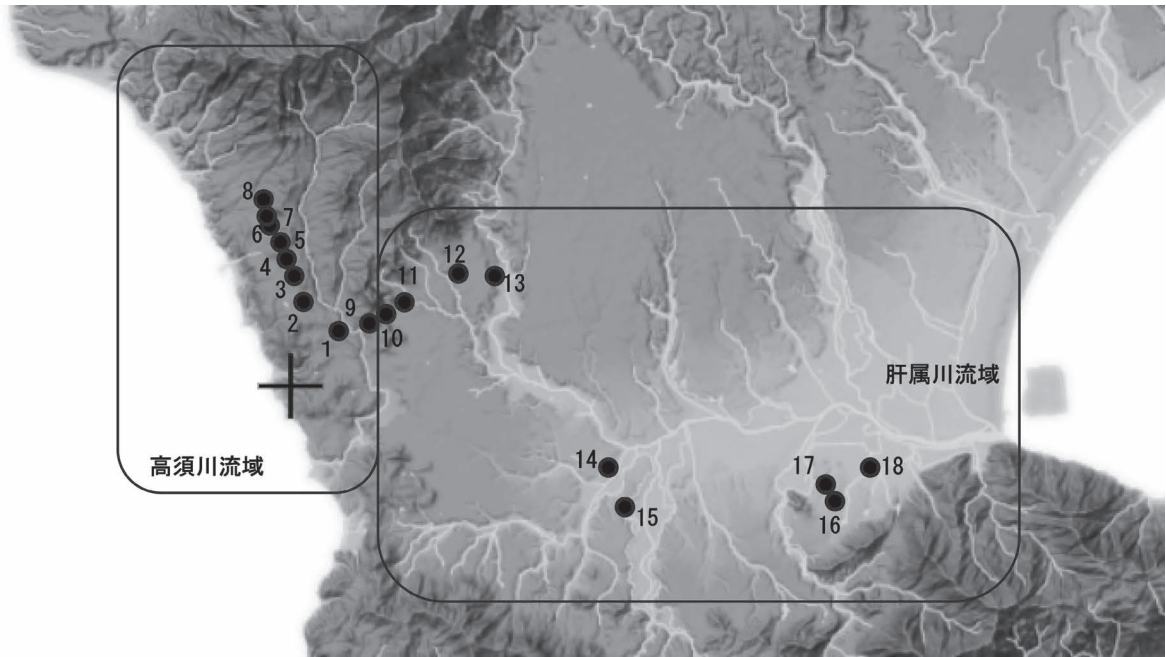
国道220号バイパスの飯盛ヶ丘遺跡と前畑遺跡の間に郷之原トンネルがある。このトンネル付近を境に東側は王子遺跡に代表されるような弥生時代中期の山ノ口式土器を伴う集落のみが、そして東側には古墳時代の集落のみが存在することが分かれる。これら弥生時代中期の集落は肝属川を遡上した位置に存在し、花卉形の竪穴建物跡や掘立柱建物跡を主体とする。一方、古墳時代の集落は220号古江バイパス沿線の高須川流域に存在し、古墳時代前期は花卉形、不定形、隅丸方形など竪穴建物跡の平面形状がバラエティーに富む。古墳時代後期になると方形のものを主体とするようである。このような傾向は名主原遺跡・東田遺跡など肝属平野の遺跡にも共通する。

今回の調査では、東九州自動車道建設事業に伴い調査が行われた春日堀遺跡、荒園遺跡、小牧遺跡、川久保遺跡などで出土している古墳時代前期の宮崎地方の土器はごく僅かしか出土しなかった。河川が当時の人々の交流に大きな役割を持つならば、志布志湾に流入する川伝いと錦江湾に流入する川伝いの生活様式や土器などの道具類には若干の差異があった可能性も窺える。萩ヶ峰遺跡の調査は、大隅半島の古墳時代前期の集落遺跡の一例として重要な成果となった。



第128図 萩ヶ峰遺跡3号、領家西遺跡7号、鷺ヶ迫遺跡3号 竪穴建物跡平面図

※地図中のNoは第31表に対応する。



第129図 萩ヶ峰遺跡周辺の弥生時代中期～古墳時代の集落遺跡分布図

第31表 萩ヶ峰遺跡周辺の弥生時代中期～古墳時代の集落遺跡一覧表

遺跡名 ※()中は 第129図中の No	竪穴建物跡 掲載No	長軸×短軸 (m) ※斜体は 推定値	平面形状						竪穴内土坑 の有無 および位置	出土土器					化学分析による 年代	備考	
			花弁形 間仕切り 5枚以上	円形 間仕切り 4枚	不定形 南側に 張り出し有	方形 張り出し 無	方形 南側に 張り出し有	隅丸方形 床面の角が 明瞭		弥生中・後期 山ノ口式 ～高付式	弥生時代終末期～古墳時代後期	中津野式	東原式	辻堂原式			笹貫式
萩ヶ峰遺跡 (1)	1号	5.55×4.02															
	2号	5.82×5.44															
	3号	5.0×5.0															
	4号	5.0×5.0															
鎮守山遺跡 (2)	10号	3.5×3.2															
	11号	不明															
	13号	4.1×2.5															
	16号	3.2×3.2															
	17号	5.0×5.0	不明														
福荷山遺跡 (3)	1～4号	—															
	5号	4.0×4.0															
天神平溝下遺跡 (4)	1号	3.5×3.2															
	2号	3.6×2.5															
領家西遺跡 (5)	3号	4.2×3.3															
	7号	4.1×3.7															
	10号	4.1×3.5															
	18号	3.6×3.0															
	44号	7.2×6.8															
	46号	7.0×5.9															
	54号	4.1×4.1															
北原中遺跡 (6)	1号	2.1×1.8															
	2号	2.7×2.4															
	3号	4.7×1															
	7号	4.0×1															
鷺ヶ追遺跡 (7)	3号	4.5×4.3															
	5号	4.3×1															
松山田西遺跡 (8)	1基のみ検出	4.6×3.9															
飯盛ヶ丘遺跡 (9)	2号	3.0×3.1															
	7号	3.0×3.0															
前畑遺跡 (10)	1号	3.6×3.3															
	2号	4.6×3.75															
	3号	3.8×4.6															
中野山野遺跡 (11)	1号	6.9×7.2															
中ノ原遺跡 (12)	1号	5.0×4.5															
	3号	6.3×6.0															
王子遺跡 (13)	14号	6.7×6.7															
	22号	3.1×2.7															
	24号	2.3×1.9															
名主原遺跡 (14)	6号	5.3×5.5															
	18号	—															
	41～44	—															
中尾遺跡 (15)	2005.4号	3.8×3.7															
	2005.13号	4.8×4.8															
	2006.1号	3.5×3.0															
	2006.3号	3.0×2.4															
永野原遺跡 (16)	4号	5.7×2.8															
	6号	4.3×3.6															
後田山下遺跡 (17)	1号	4.2×3.8															
	2号	2.8×3.1															
東田遺跡 (18)	3号	4.0×3.9															
	5号	4.2×4.1															
	15号	—															
	34号	—															

第2節 白水B遺跡

令和4年度調査において、検出した遺構は、古墳時代の帯状硬化面が4条のみであった。傾斜地に沿うように延びる3条に1条が交差する状態が確認できた。

遺物は、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期の石核、縄文時代晩期の中華鍋形土器、古墳時代の東原式土器、古代の土師器、近世の染付・薩摩焼が出土した。遺物の多くが小片で摩滅を受けたものが多いことと、南西方向に下る傾斜地に位置することを考慮すると、遺物は旧調査区のある南西方向に流れ込んでいったことが推測される。

平成26年度調査では、センダンの埋没樹が検出され、較正年代は前10世紀前後と報告された。当該時期の木材

出土は、九州地方では初の事例であり、酸素同位体年輪年代法により、これまで困難だった地域・樹種の樹木の年輪年代が判定できるようになった（坂本2021）。

第3節 山ノ上A遺跡

令和4年度の調査では、縄文時代早期の石鏃や使用痕剥片、縄文時代晩期の精製の浅鉢や中華鍋形土器、古墳時代の東原式土器、甕貫式土器の破片が出土した。胎土の特徴から搬入品である可能性の高い重弧文をもつ精緻なつくりの小形丸底壺片も出土した。なお遺構は検出されず、遺物は本来あった位置から土地の傾斜に伴って流れ着いたものであると推測される。

【引用参考文献】

安座間充2014「貝塚時代後1期・沖縄諸島の土器動態」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房

石田智子2018「弥生・古墳時代移行期における薩摩・大隅の集落と墳墓の動態」『集落と古墳動態Ⅰ』第21回九州前方後円墳研究会要旨集

上原静・当真嗣一1984「仲原式土器の提唱について」『紀要』第1号沖縄県教育委員会文化課

河口貞徳1963「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』18九州考古学会

河野裕次2019「宮崎平野南部における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相―編年の細別と外来系土器の影響について―」『宮崎考古』第29号宮崎考古学会

久住猛雄2013「九州における古式土師器の地域間交流によせて～布留式中相平行期と小型丸底壺を中心に～」『古墳時代の地域間交流Ⅰ』第16回九州前方後円墳研究会熊本大会

坂本稔2021「日本産樹木年輪の炭素14年代測定への取り組み」『樹木・木材と年代研究』国立歴史民俗博物館研究叢書8

新里貴之1999「南西諸島における弥生併行期の土器」『人類学研究』11

新里貴之2008「琉球縄文土器（後期）」『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会

新里貴之・伊藤慎二・宮城弘樹・新里亮人2014「琉球先史・原史文化の考古学的画期」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房

玉榮飛道2014「沖縄諸島の肥厚口縁土器、無文尖底系土器」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房

檀佳克2013「古式土師器からみた地域間交流―南筑後地域・中九州地域―」『古墳時代前期の地域間交流Ⅰ』第16回九州前方後円墳研究会熊本大会

堂込秀人1993「奄美諸島の縄文時代晩期から弥生時代相当期の土器編年」『考古論集（潮見浩先生退官記念論文集）』潮見浩先生退官記念論文集刊行会

堂込秀人1997「南九州縄文晩期土器の再検討―入狭式と黒川式の細分―」『鹿児島考古』第31号鹿児島考古学会

中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古6号』鹿児島大学考古学研究室

中村直子他2015『成川式土器ってなんだ？』鹿児島大学総合研究博物館

中村直子2002「薩摩・大隅」『第5回九州前方後円墳研究会』発表要旨資料

橋本達也2019「大隅・薩摩地域における古墳時代中期の集落と古墳」『第22回九州前方後円墳研究会 宮崎大会発表資料集』

東和幸1993「鹿児島県弥生時代前期土器研究の現状」『鹿児島

考古』第27号鹿児島県考古学会

東和幸2009「干河原段階の土器」『南の縄文地域研究文化論考 新東晃一代表還暦記念論集』上巻 南九州縄文研究会

松崎大嗣2017「薩摩・大隅の古式土師器と在地土器」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会

松崎大嗣2021「成川式土器の分類と編年」『地域政策科学研究』第18回号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究所

森田太樹2014「奄美諸島における前5期の土器について」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』六一書房

鹿児島県埋蔵文化財センター

1985『王子遺跡』発掘調査報告書(34)

1990『前畑遺跡』発掘調査報告書(52)

1990『中ノ原遺跡Ⅱ・中原山野遺跡ほか』発掘調査報告書(52)

1993『飯盛ヶ岡遺跡』発掘調査報告書(3)

1993『東田遺跡』発掘調査報告書(6)

1996『東田遺跡』発掘調査報告書(16)

2005『中尾遺跡』発掘調査報告書(87)

2006『中尾遺跡・四方高迫遺跡』発掘調査報告書(99)

2007『中原山野遺跡』発掘調査報告書(114)

2007『上水流遺跡Ⅰ』発掘調査報告書(113)

2014『カメコ遺跡』発掘調査報告書(182)

2019『吐噺・奄美の遺跡』発掘調査報告書(200)

(公)鹿児島県埋蔵文化財調査センター

2019『見帰遺跡』発掘調査報告書(23)

2020『春日堀遺跡Ⅰ』発掘調査報告書(32)

2022『荒園遺跡』発掘調査報告書(43)

2022『小牧遺跡Ⅲ』発掘調査報告書(46)

2023『川久保遺跡5 A地点』発掘調査報告書(53)

鹿児島県鹿屋市教育委員会

2008『名主原遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(84)

鹿児島県高山町教育委員会

1996『後田山下遺跡』高山町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

2000『永野原遺跡』高山町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

鹿児島県指宿市教育委員会

1993『南摺ヶ浜遺跡Ⅱ』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

金峰町教育委員会

2005『下堀遺跡』金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(20)

薩摩郡里村教育委員会

2004『中町馬場遺跡Ⅱ』里村埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

鹿児島県笠利町教育委員会

1979『宇宿貝塚』笠利町文化財報告書

鹿児島県大島郡龍郷町教育委員会

1986『手広遺跡』龍郷町文化財調査報告書

2002『ウフタⅢ遺跡』龍郷町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

補遺（白水A遺跡）

萩ヶ峰遺跡の整理作業において、令和3年度に既に報告書を刊行した白水A遺跡の、平成5年度確認調査時の遺物が混在していたことが判明した。

そのため、補遺としてここに掲載する。なお、平成5年度の調査では遺構は検出されていない。

平成5年度の調査用グリッドが東から西への20mグリッドとして設定していたため、令和3年3月に報告した白水A遺跡に合わせ、西から東への10mグリッドに修正して掲載している。（詳細については2022『山ノ上B・白水A遺跡』埋文セ（41）を参照）

遺物（第131図、652～664）

Ⅲ層から古墳時代と縄文時代晩期の土器が出土した。遺物の大半は成川式土器であり、無文の胴部や小片、チップ片以外の13点を図化し掲載した。

（1）縄文時代の土器

晩期土器と思われる土器片が1点出土した。小片のため図化しなかったが、内外面ともに丁寧なミガキ調整で仕上げられている。

（2）古墳時代の土器（652～664）

成川式土器の小片が119点出土した。その内13点を図化し掲載した。

652～661は、甕形土器の破片である。

652～656は口縁部片である。652は大きく外反し、頸部外面は工具による掻き上げの始点を稜とする。内外面を丁寧に横ナデし、口縁部は平坦に仕上げている。653も652と同様の形態で、工具による掻き上げが施され、口縁端部は面取りにより平坦に仕上げられている。654は工具による掻き上げの後で、横位のナデ調整が確認できる。口唇部はナデで平坦に仕上げられる。655はやや厚手の口縁部で、頸部外面は工具による掻き上げの始点を稜とする。口唇部は丁寧にナデで舌状に仕上げられる。656は工具による掻き上げの始点を稜とする。口唇部は丁寧にナデで舌状に仕上げられる。器壁が薄い

657～661は、頸部に刻目突帯を有する胴部片である。657は、突帯の幅は約1cmで、刻目を施す。外面は掻き上げを施した後、横位ないし斜位にナデ調整をおこなっている。658は、推定胴径が突帯直下で約22cmである。突帯の幅は約1.5cmで、刻む間隔も広い。内外面に工具によるナデ調整が施される。胴部下部には、火が上方へ抜けた後の煤がうっすらと付着している。659は、突帯の幅は約1cmで、布目がはっきりと確認できる刻目を施す。外面は、工具による掻き上げ、内面はナデ調整を施す。突帯下部には煤が付着する。660は、突帯の幅は約1cmで、刻目を施す。内外面ともに工具による横位のナ

デを施す。661は、突帯の幅は約1cmで刻目を施す。内面は丁寧なナデ調整が施され、外面は工具による横位のナデ調整が施される。

662は小型丸底壺（罎）の口縁部である。胴部が大きく張り出すと考えられる。短い口縁部がやや外傾しながら立ち上がる。内外面はミガキを施した後、丁寧にナデで仕上げる。器壁は約4mmと薄く、精良な胎土を使用している。

663、664は甕か鉢の脚部の破片である。

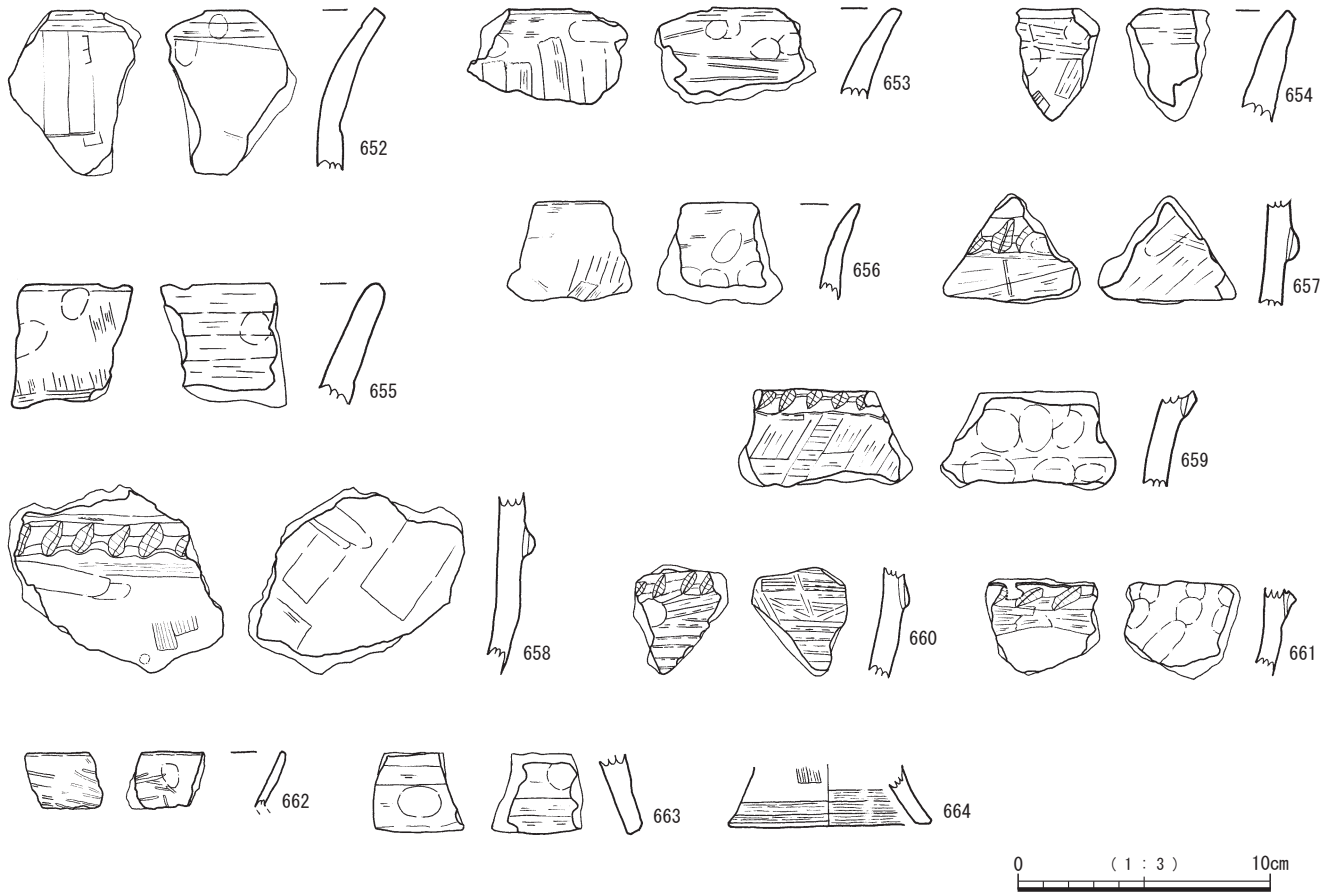
663は脚部がやや外反しながら接地する。器壁は8mm程で精緻なつくりである。内外面ともに工具ナデ後丁寧にナデで仕上げる。接地面には煤が付着する。664は径は8cm程で外反しながら接地する。器壁は6mm程で内外面ともに工具ナデ後ナデで仕上げる。

652、659などのように頸部で外反するものは、古墳時代前期の東原式土器の範疇の可能性がある。

既報告エリアからは、古墳時代後期の笹貫式土器も出土するため、今回報告した胴部小片の中にも含まれる可能性がある。



第130図 白水A遺跡 周辺地形図



第131図 白水A遺跡 出土遺物

第32表 白水A遺跡 出土土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土 地点	遺構 名	器種	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調1	色調2	胎土 1					タタキの 有無	取上 番号	備考
												石 英・ 長石	雲 母・ 輝石	角 閃石	赤 褐色 色粒	礫			
125	652	B-6	-	甕	東原	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 2.5YR4/4 (内) 2.5YR5/6	(外) にぶい赤褐 (内) 明赤褐	◎	○	◎	◎	940			
	653	B-5	-	甕	東原	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) ケズリ, ナデ	(外) 7.5YR5/4 (内) 7.5YR5/6	(外) にぶい赤褐 (内) 明褐	◎	○	◎	◎	925			
	654	B-6	-	甕	東原	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ミガキ	(外) 5YR5/4 (内) 7.5YR6/4	(外) にぶい赤褐 (内) にぶい橙	○	○	◎	◎	991			
	655	B-6	-	甕	東原	-	-	-	(外) ハケメ, ナデ (内) ハケメ, ナデ	(外) 5YR5/6 (内) 7.5YR6/6	(外) 明赤褐 (内) 橙	◎	○	△	◎	987			
	656	B-6	-	甕	東原	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 5YR5/6 (内) 5YR4/6	(外) 明赤褐 (内) 赤褐	◎	○	△	◎	974			
	657	B-6	-	甕	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 5YR4/6 (内) 7.5YR5/4	(外) 赤褐 (内) にぶい褐	○	○	◎	◎	976			
	658	B-6	-	甕	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 7.5YR5/4 (内) 7.5YR6/4	(外) にぶい褐 (内) にぶい橙	◎	○	△	◎	1012	スス付着		
	659	B-6	-	甕	東原	-	-	-	(外) ハケメ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 2.5YR4/3 (内) 5YR4/6	(外) にぶい赤褐 (内) 赤褐	◎	○	◎	◎	995	スス付着		
	660	B-6	-	甕	-	-	-	-	(外) ハケメ (内) ハケメ	(外) 5YR4/8 (内) 5YR5/4	(外) 赤褐 (内) にぶい赤褐	◎	○	◎	◎	914			
	661	B-6	-	甕	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 5YR5/4 (内) 7.5YR7/4	(外) にぶい赤褐 (内) にぶい橙	◎	○	△	◎	967			
	662	B-7	-	小型丸底壺	-	-	-	-	(外) ナデ, ミガキ (内) ナデ, ミガキ	(外) 7.5YR7/6 (内) 7.5YR7/6	(外) 橙 (内) 橙	○	△	△	△	948	胎土精良		
	663	B-6	-	甕か鉢	-	-	-	-	(外) 工具ナデ, ナデ (内) 工具ナデ, ナデ	(外) 7.5YR4/3 (内) 7.5YR4/2	(外) 褐 (内) 灰褐	○	○	○	◎	1024	スス付着		
	664	B-6	-	甕か鉢	-	-	8.0	(2.4)	(外) ハケメ, ナデ (内) ハケメ, ナデ	(外) 5YR4/4 (内) 5YR4/6	(外) にぶい赤褐 (内) 赤褐	○	○	○	○	972			



①IV層上面検出状況 (D～G-4～12区) ②土層断面 (B・C-11～14区)

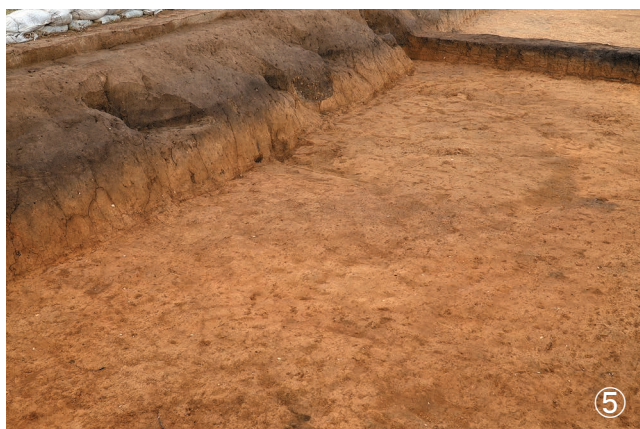


①集石 1号検出状況 ②集石 2号検出状況 ③集石 3号検出状況 ④土坑 1号検出状況
⑤土坑 1号埋土堆積状況 ⑥土坑 1号完掘状況 ⑦土器集中 1号検出状況 ⑧土器集中 1号半截状況



① 竪穴建物跡 1 号検出状況 (H27 調査) ② 竪穴建物跡 1 号検出状況 (R4 調査)
③ 竪穴建物跡 1 号埋土堆積状況 (R4 調査) ④ 竪穴建物跡 1 号完掘状況 (H27 調査)
⑤ 竪穴建物跡 1 号完掘状況 (R4 調査)

図版4
萩ヶ峰遺跡



① 竪穴建物跡 2号検出状況 ② 竪穴建物跡 2号埋土堆積状況 ③ 竪穴建物跡 2号土坑内遺物出土状況
 ④ 竪穴建物跡 2号完掘状況 ⑤ 竪穴建物跡 3号検出状況 ⑥ 竪穴建物跡 3号埋土堆積状況
 ⑦ 竪穴建物跡 3号遺物出土状況 ⑧ 竪穴建物跡 3号完掘状況



① 竪穴建物跡 4 号検出状況 ② 竪穴建物跡 4 号埋土堆積状況 ③ 竪穴建物跡 4 号遺物出土状況
④ 竪穴建物跡 4 号完掘状況 ⑤ 竪穴建物跡 1・3・4 号・大型土坑完掘状況

図版 6
萩ヶ峰遺跡



①带状硬化面 1 検出状況 ②带状硬化面 1 断面状況 ③带状硬化面 2 検出状況
④带状硬化面 2 断面状況 ⑤溝状遺構検出状況 ⑥溝状遺構埋土堆積状況 ⑦溝状遺構完掘状況



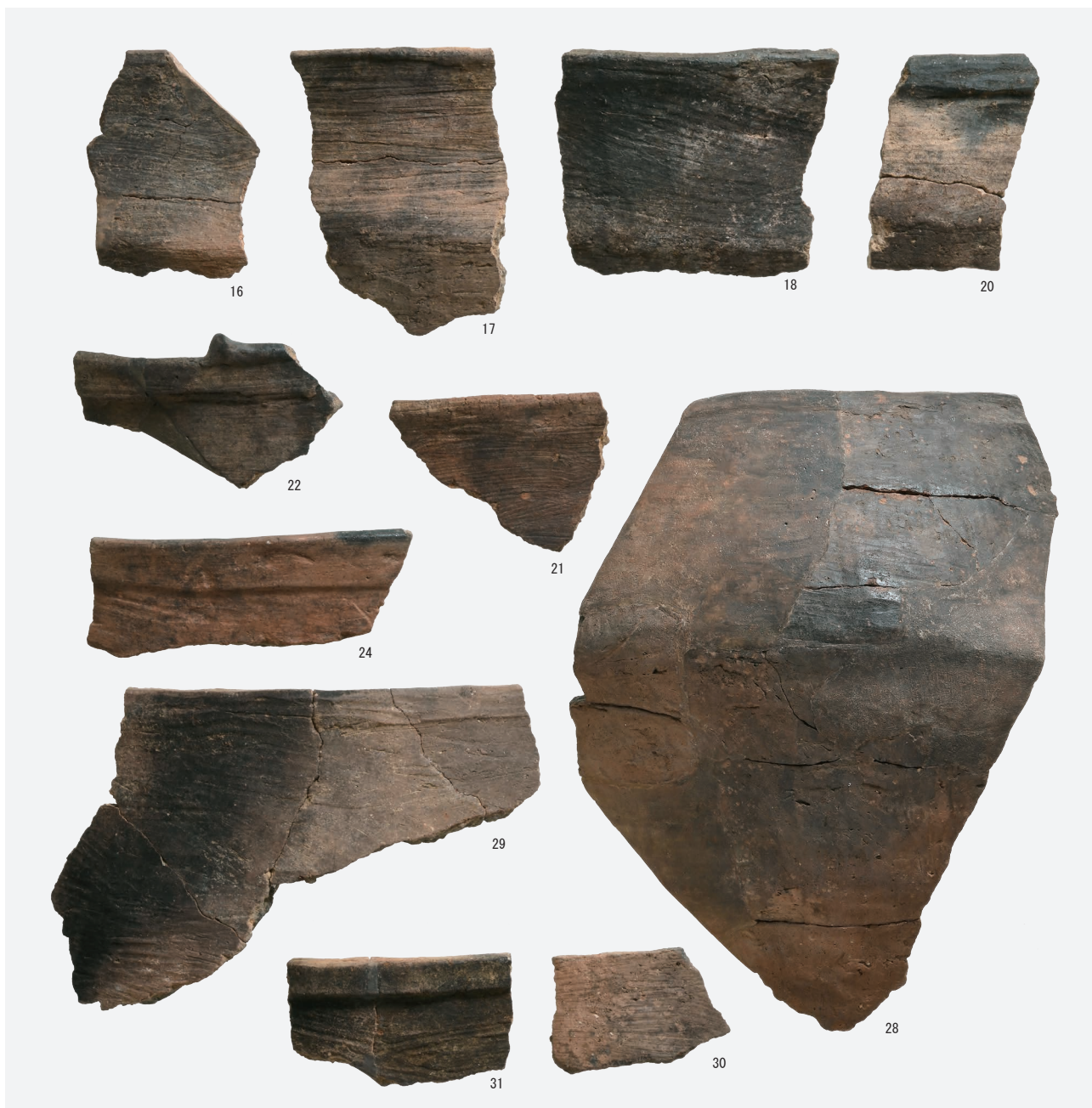
縄文時代早期・前期～中期 包含層出土遺物



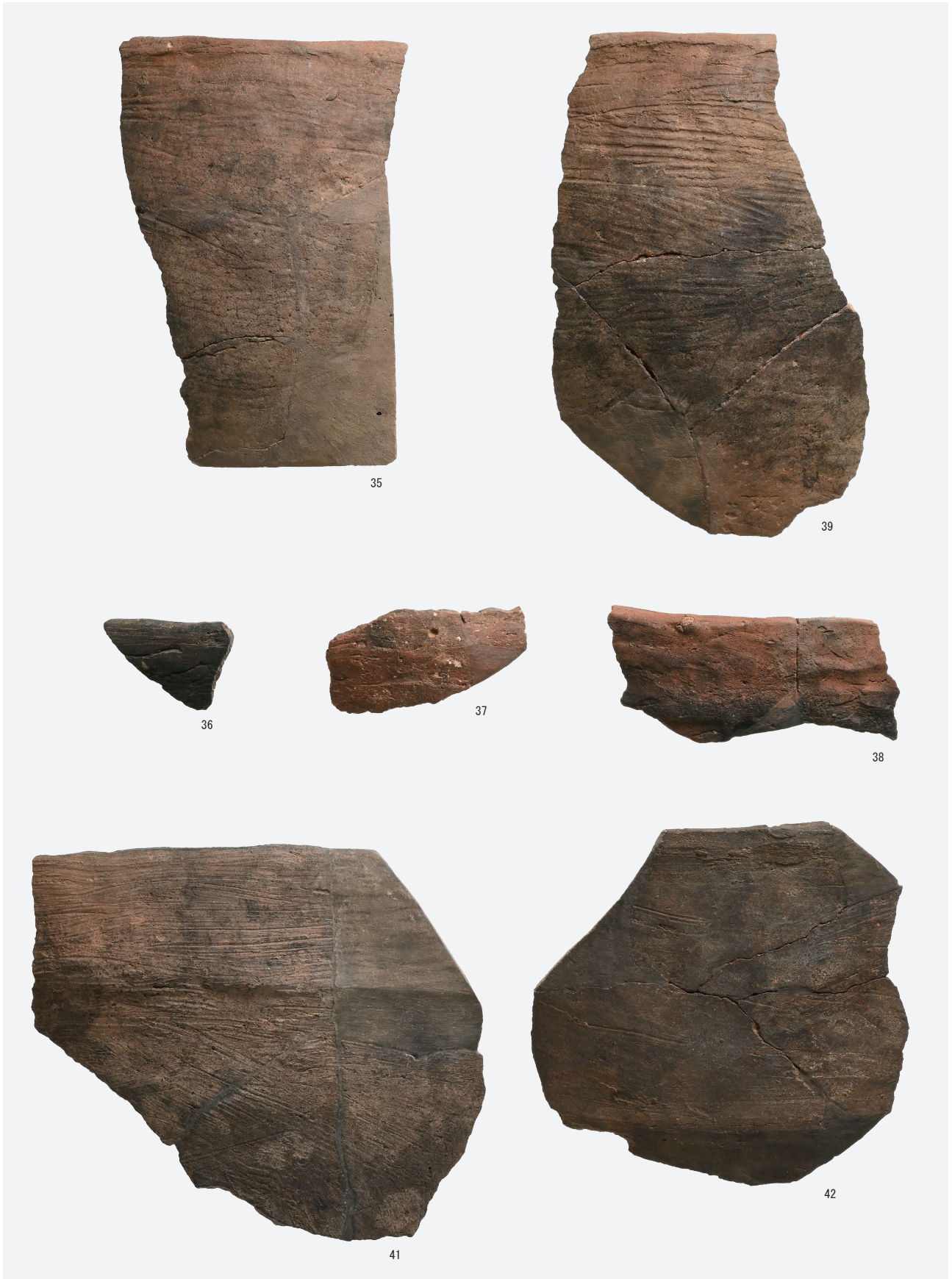
14



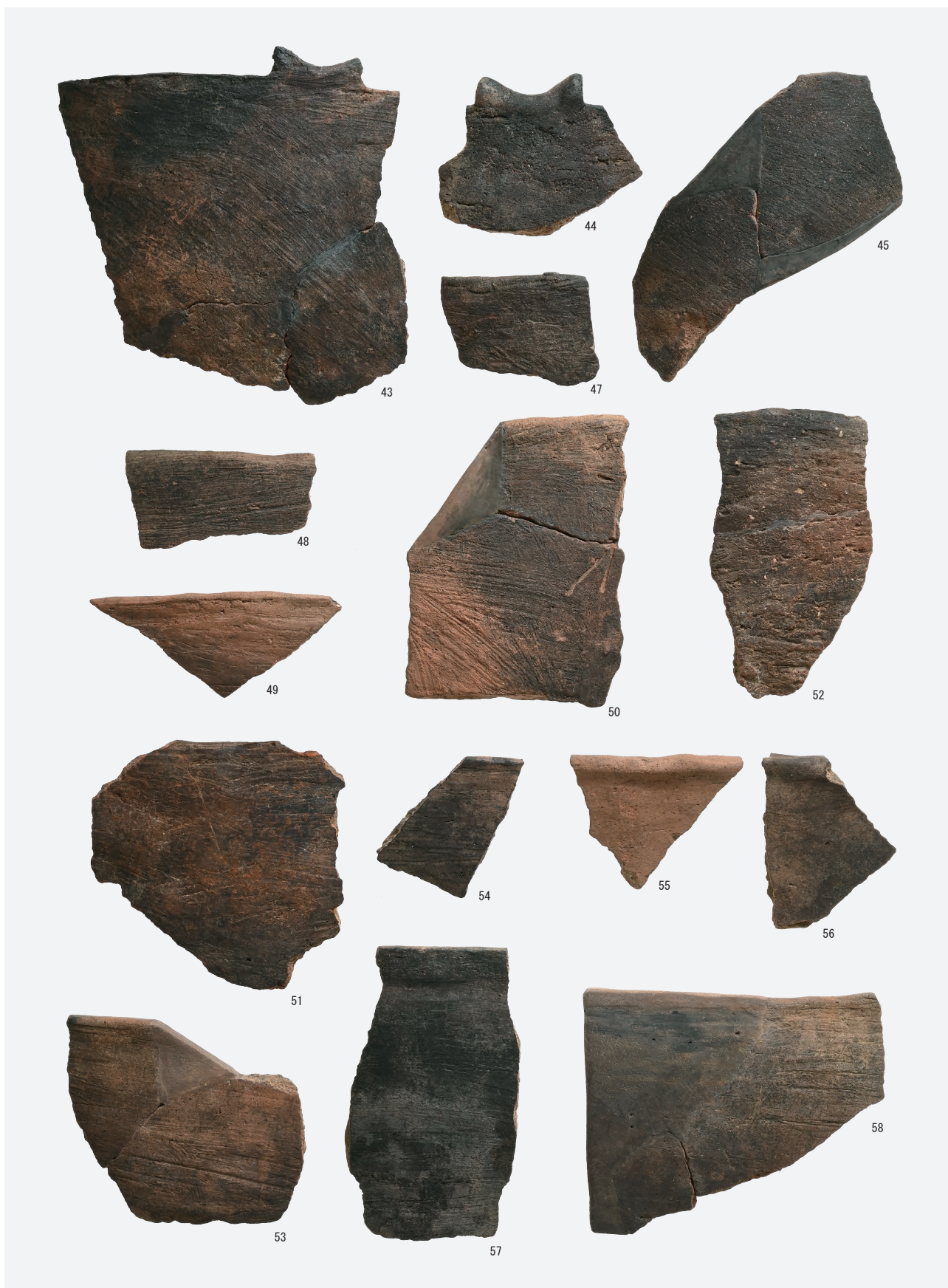
15



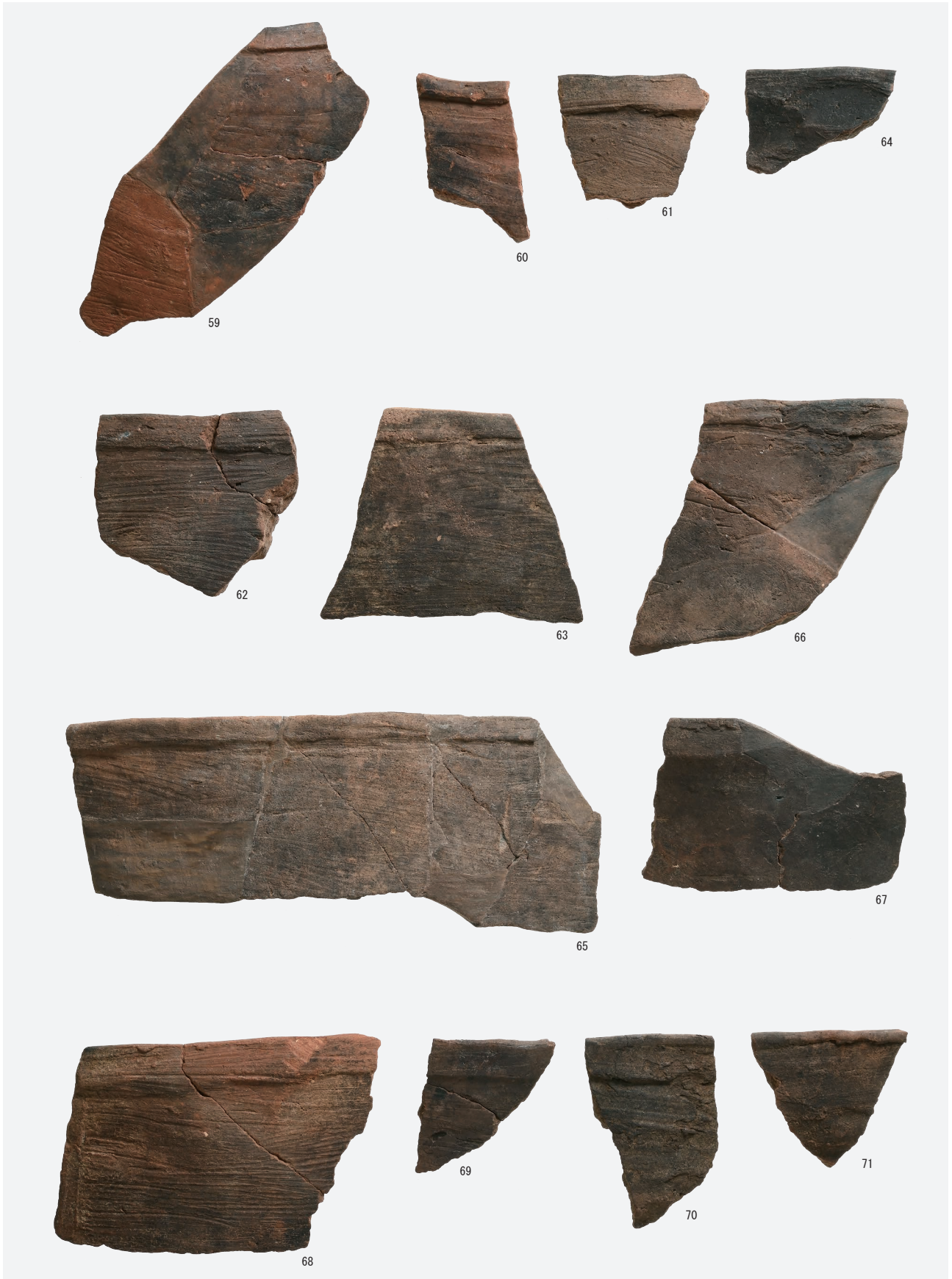
縄文時代晩期 遺構・包含層出土遺物（1）



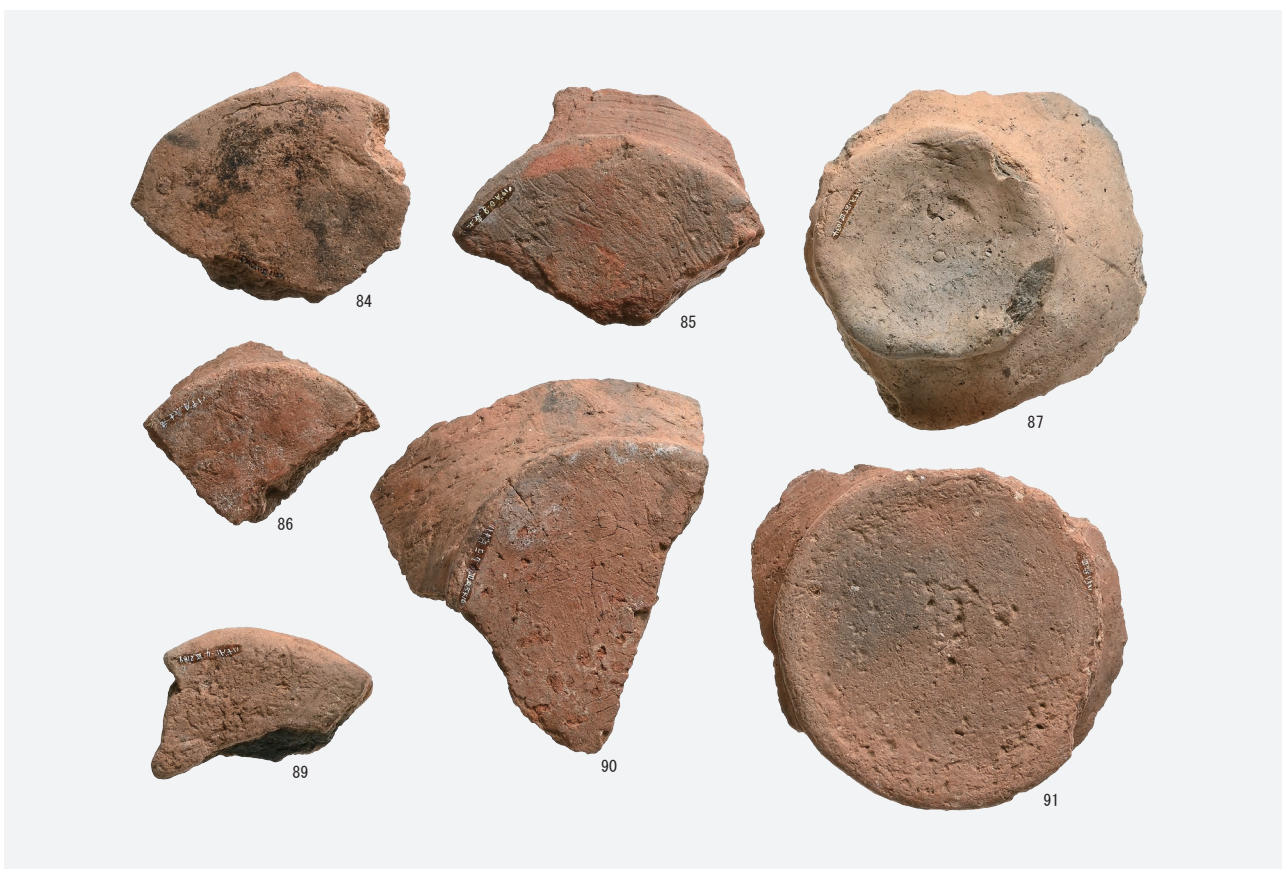
縄文時代晩期 包含層出土遺物（2）



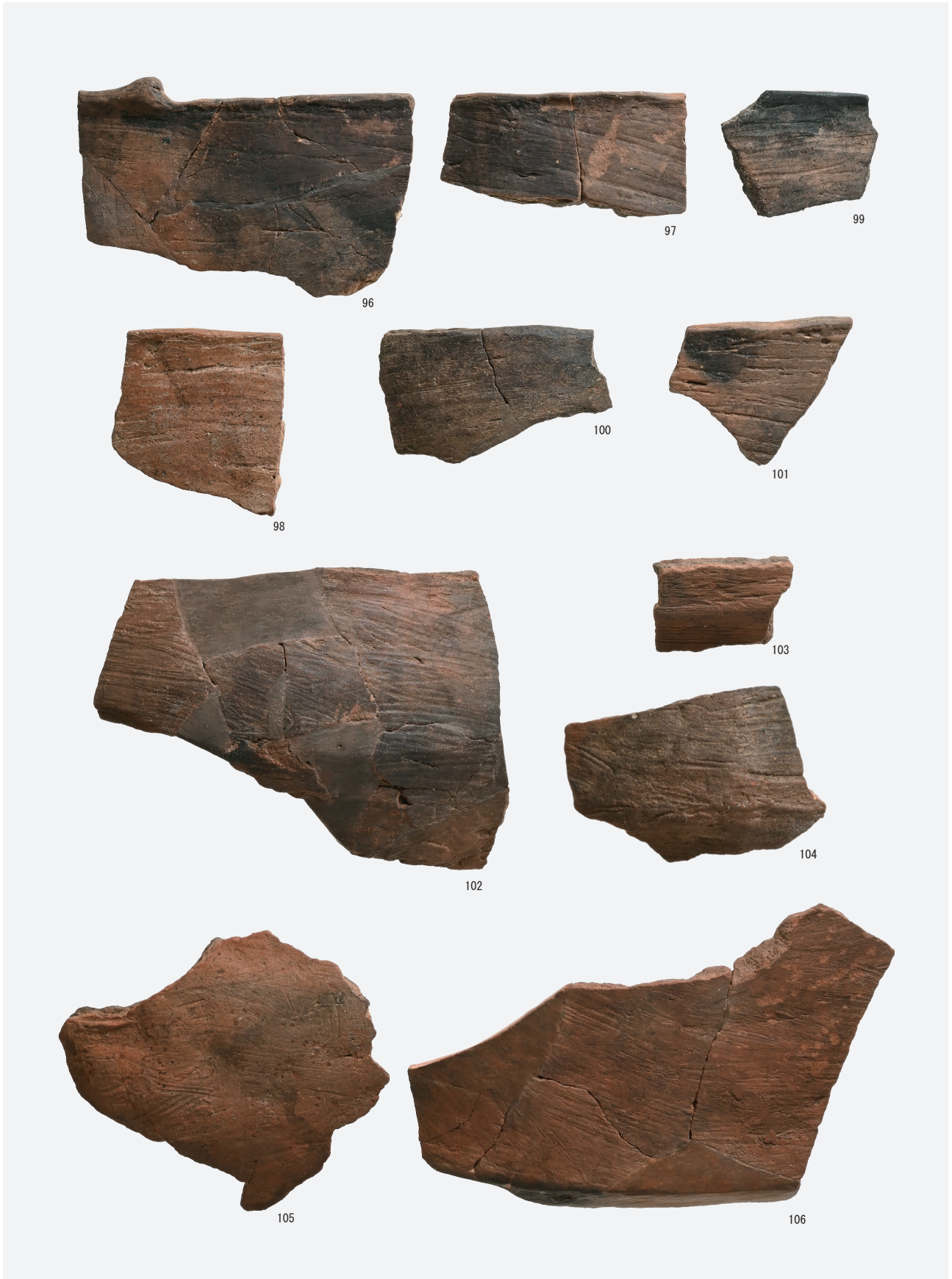
縄文時代晩期 包含層出土遺物（3）



縄文時代晩期 包含層出土遺物（4）



縄文時代晩期 包含層出土遺物（5）



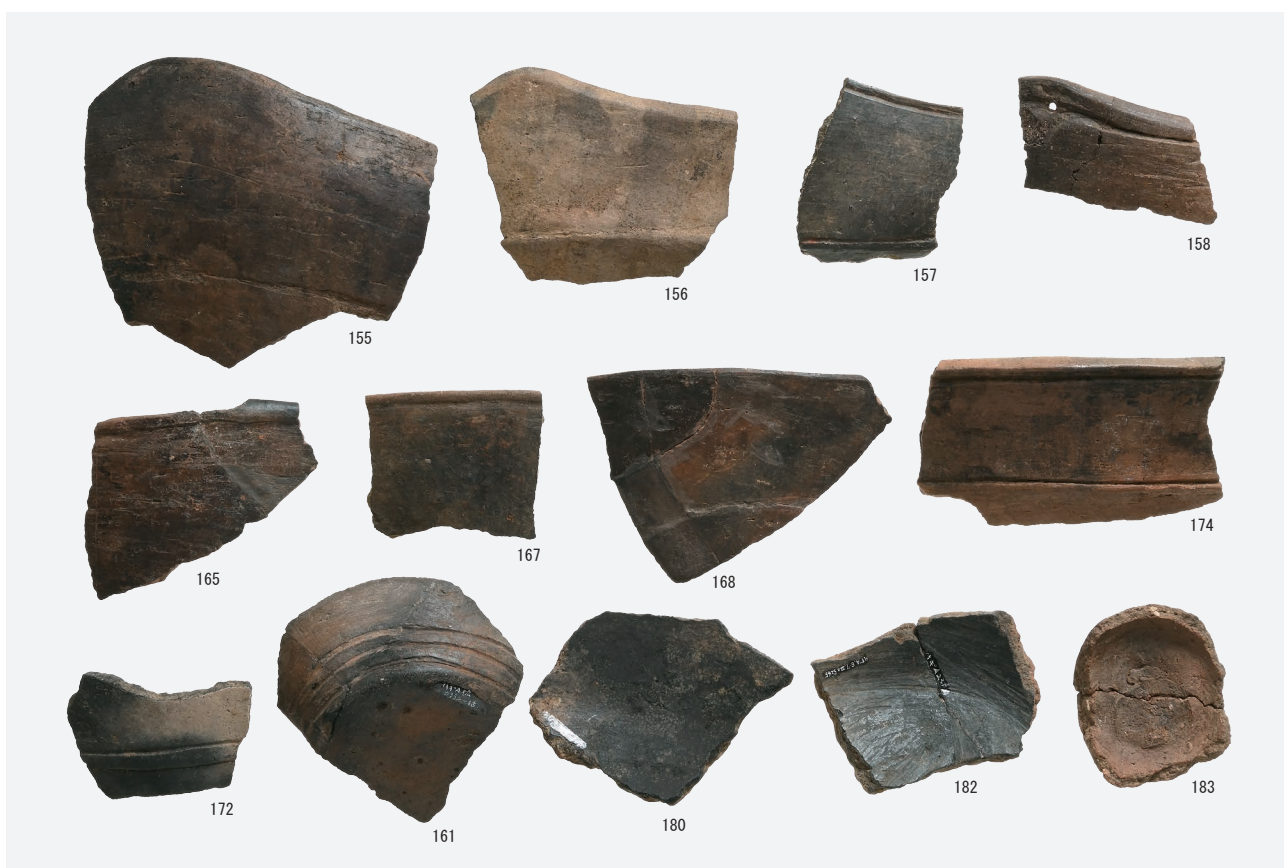
縄文時代晩期 包含層出土遺物（6）



縄文時代晩期 包含層出土遺物（7）



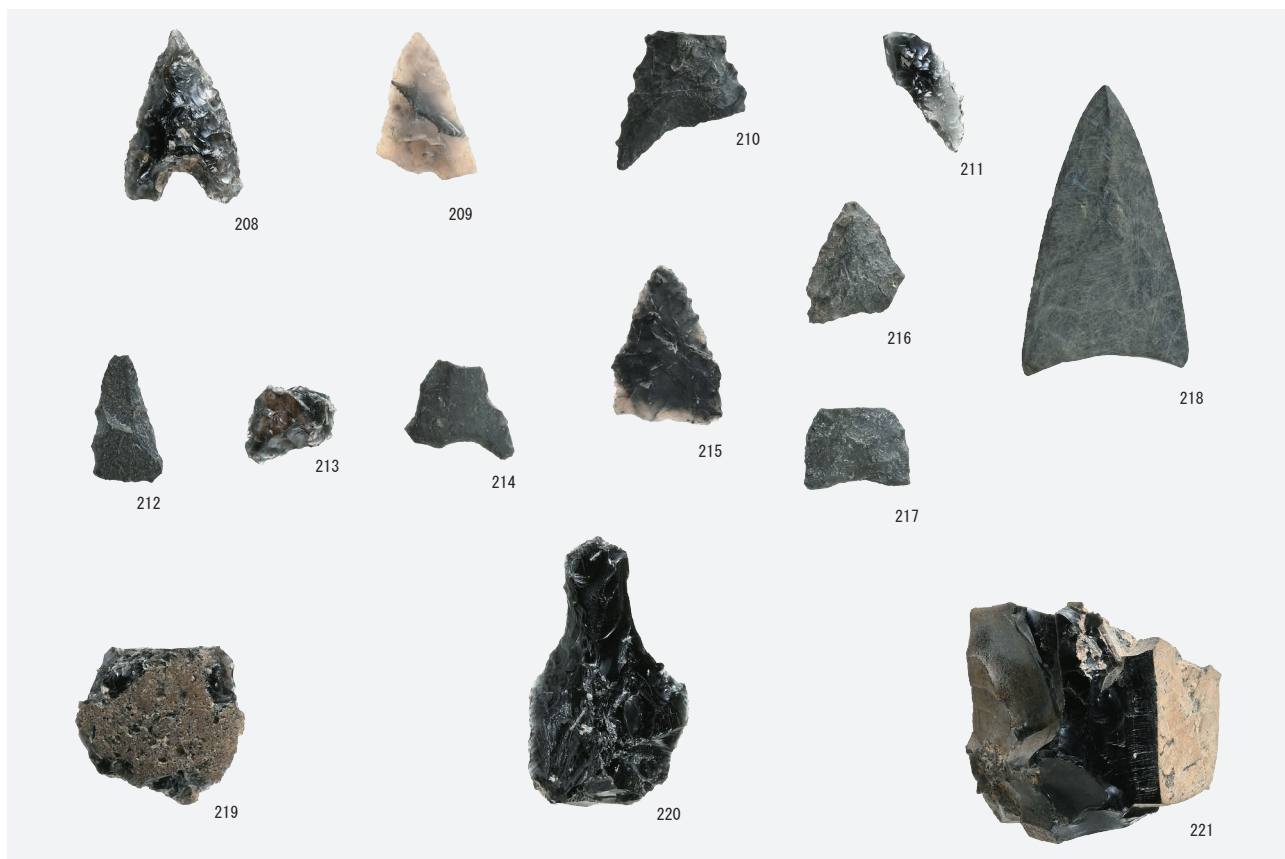
縄文時代晩期 包含層出土遺物（8）



縄文時代晩期 包含層出土遺物（9）



縄文時代晩期 包含層出土遺物 (10)



アカホヤ上位出土の石器（1）



アカホヤ上位出土の石器（2）



アカホヤ上位出土の石器（3）



アカホヤ上位出土の石器（4）



竪穴建物跡 1号出土遺物



竪穴建物跡2号出土遺物(1)



310



341



342



348
353 354 355 350 351 352



325



345



349



332



332 拡大

竪穴建物跡 2号出土遺物 (2)



竪穴建物跡2号出土遺物（3）



370



366



362

364

365

372

375

374

373

376

379

378

381

382



384

385

386

383



396

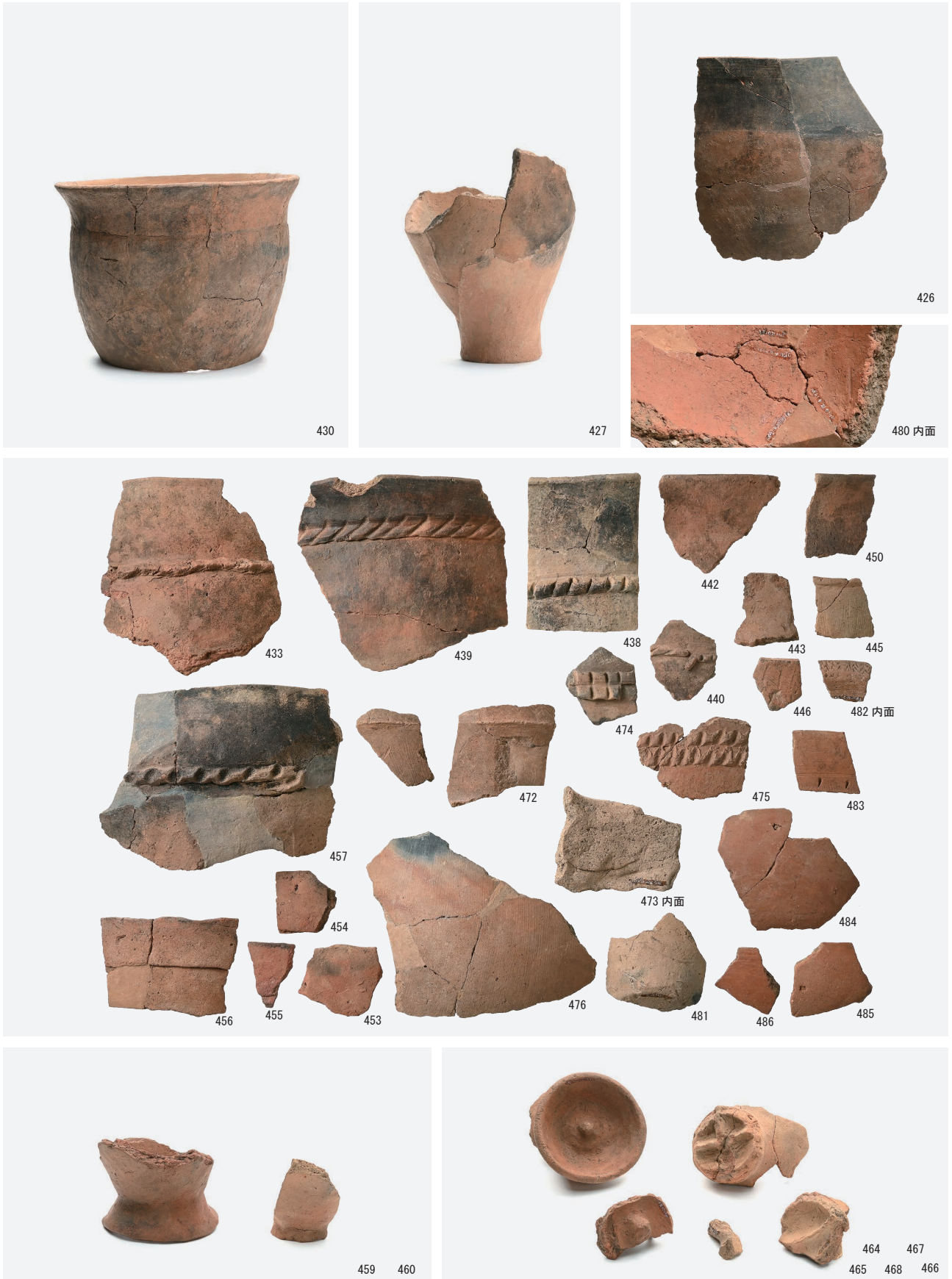
竖穴建物跡3・4号出土遺物



竪穴建物跡 4号出土遺物



土器集中2号出土遺物



古墳時代 包含層出土遺物 (1)



古墳時代 包含層出土遺物 (2)



古墳時代 包含層出土遺物(3)・時期不明の遺物・近世以降の遺物



①遺跡全景（Ⅷ層上面） ②土層断面（B～F-I区）
③带状硬化面3・4検出状況 ④带状硬化面3・4断面



出土遺物

図版34
山ノ上A遺跡



①IV層上面遺物出土状況 ②IV層上面検出状況



出土遺物



出土遺物

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（56）
一般国道 220 号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（V）

萩ヶ峰遺跡
白水 B 遺跡
山ノ上 A 遺跡

発行年月 2024 年 3 月
編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
印刷 株式会社 国分新生社印刷
〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久 620-1
TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979